

可憐なる博徒 レイリ

tres

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

11120XX年

遊戯王OCGは既存のカードゲームの枠組を越え、かつての『麻雀』や『トランプ』等と肩を並べる程に認知され、今や知らない人など居ない大衆の娯楽と化していた。

遊戯王OCGでカイジのようなギャンブルものを書いてみたい、と思ったところから始まりました。ギャンブル半分日常半分な感じですよ。

遊戯王OCGプレイヤー向けです。色々試行錯誤しながら書いてますが、読んでいただければ幸いです。

遊戯王OCG以外は完全オリジナルです。

「遊戯王カードリスト・評価・オリカ」というサイトでも投稿しているSSです。こちらでも宜しく願います。

書き溜めた分は高頻度で更新します。それ以後は不定期です。

# 目次

## 本編

1話	#1	「鈴瀬 麗梨」	1
1話	#2	「暗い海へと」	5
1話	#3	「ハウスルール」	9
1話	#4	「選ぶ難しさ」	13
1話	#5	「未知の1回戦」	16
1話	#6	「反撃の2回戦」	20
1話	#7	「仕掛けの正体」	25
1話	#8	「運命の3回戦」	29
1話	#9	「決着の時」	36
1話	#10	「遅めの夜ご飯」	41
2話	#1	「一夜が明けて」	47
2話	#2	「2度目の暗い海」	52
2話	#3	「癖のあるリスト」	56
2話	#4	「優勢から劣勢」	61
2話	#5	「負け分のレート」	67
2話	#6	「3回戦・前」	71
2話	#7	「3回戦・後」	76
2話	#8	「狙い通りに」	82
2話	#9	「締結というには緩いかも」	88
3話	#1	「再び夜が明けて」	93
3話	#2	「突入します」	98
3話	#3	「割と強気」	103
3話	#4	「勢いよく」	107

3話	#5 「見張りが2人の意味」	111
3話	#6 「果たさせないために」	115
3話	#7 「北林vs麗梨 その1」	119
3話	#8 「北林vs麗梨 その2」	123
3話	#9 「その手捌きで」	127
3話	#10 「望む物の価値」	132
3話	#11 「本当の度胸試し」	137
3話	#12 「何もしないを選んで」	143
3話	#13 「運の良さはお互い様」	147
3話	#14 「勝負の行方」	152
3話	#15 「同じ話の帰り道」	156
3話	#16 「違う思いの帰り道」	160
3話	#17 「友達とこれからも」	165
4話	#1 「回り道」	169
4話	#2 「兄との違い」	174
4話	#3 「抑止力」	181
4話	#4 「感覚を忘れずに」	188
4話	#5 「世間って案外狭い」	194
4話	#6 「桜と藍子・1」	199
4話	#7 「桜と藍子・2」	204
4話	#8 「桜と藍子・3」	210
4話	#9 「代役と相方」	215
4話	#10 「都市へと赴いて」	220
4話	#11 「散策します・1」	226
4話	#12 「散策します・2」	231

4話	#13	「散策します・3」	237
4話	#14	「意味を持たせる意味もある」	242
#S-1		「キャラ設定とか色々」	247
5話	#1	「鵜蘆会館」	251
5話	#2	「複雑に変則」	256
5話	#3	「1回戦 1」	262
5話	#4	「1回戦 2」	270
5話	#5	「2回戦 1」	278
5話	#6	「2回戦 2」	286
5話	#7	「提案」	293
5話	#8	「サイン」	298
5話	#9	「阻止」	305
5話	#10	「ラストドロ」	311
5話	#11	「ラストターン」	318
5話	#12	「読み」	324
5話	#13	「信じる心です」	330
6話	#1	「翌日」	336
6話	#2	「勘違い」	340
6話	#3	「雰囲気」	345
6話	#4	「挑戦」	351
6話	#5	「琥珀 vs 麗梨・1」	356
6話	#6	「琥珀 vs 麗梨・2」	361
6話	#7	「琥珀 vs 麗梨・3」	366
6話	#8	「交流」	372
6話	#9	「メタ」	377

8話	#12 「解放感」	508
8話	#11 「全て使って」	503
8話	#10 「続行」	497
8話	#9 「2回戦 2」	493
8話	#8 「2回戦 1」	488
8話	#7 「1回戦 2」	482
8話	#6 「1回戦 1」	476
8話	#5 「お披露目」	470
8話	#4 「元プロ」	465
8話	#3 「喫茶メイドルチエ」	460
8話	#2 「一撃」	455
8話	#1 「先週ぶり」	450
7話	#10 「解くために解くような」	444
7話	#9 「そのままその夜」	439
7話	#8 「世間ってやっぱり狭い」	434
7話	#7 「遭遇と再会」	430
7話	#6 「週の始まり」	424
7話	#5 「終わって呼んで」	419
7話	#4 「迷って現れて」	414
7話	#3 「休んで頼まれて」	409
7話	#2 「勝って帰って」	403
7話	#1 「少し戻って」	397
6話	#12 「一夜」(R-15)	391
6話	#11 「2人の夜」	387
6話	#10 「それぞれの夜」	382

8話	#13	「審判の意図」	512
8話	#14	「次は忘れずに」	517
#S-2		「始まりの少し前」	522
9話	#1	「同じ日に」	526
9話	#2	「食事に映画にカード」	531
9話	#3	「翌日に」	536
9話	#4	「知りたい朝に」	541
9話	#5	「そのまま答えに」	546
9話	#6	「昼食のお誘い」	551
9話	#7	「デュエルにゲームに」	556
9話	#8	「パズルに追いついて」	561
9話	#9	「プール開き」	566
9話	#10	「椎名の意図」	572
9話	#11	「答えは言わずとも」	577
9話	#12	「昼から放課後」	582
9話	#13	「楽しむ心」	587
9話	#14	「あの時の言葉」	593
9話	#15	「教師と卒業生」	598
9話	#16	「まだ外は明るくて」	603
10話	#1	「リベンジ」	608
10話	#2	「勝負開始」	615
10話	#3	「接戦」	622
10話	#4	「適用」	629
10話	#5	「続いて」	635
10話	#6	「考えて」	641

10話	#7 「届かなくて」	647
10話	#8 「勝者」	653
10話	#9 「あるトッププロ」	660
10話	#10 「もうひとつの姿」	665
#S-3	「追加エピソード1・2」	670
11話	#1 「似ている人」	674
11話	#2 「訪れた人」	680
11話	#3 「庇った人」	685
11話	#4 「痛む人」	690
11話	#5 「耐える人」	695
11話	#6 「応える人」	699
11話	#7 「従う人」	704
11話	#8 「楽しむ2人」	709
11話	#9 「闘う2人」	714
11話	#10 「闘った2人」	719
11話	#11 「鏡越しの2人」	724
11話	#12 「縛る人」	728
11話	#13 「近付く人」	733
11話	#14 「無愛想な人」	737
11話	#15 「頼れる人」	741
11話	#16 「動く人」	746
11話	#17 「続く2人」	752

## 本編

### 1話 #1 「鈴瀬 麗梨」

11120XX年

遊戯王OCGは既存のカードゲームの枠組を越え、かつての『麻雀』や『トランプ』等と肩を並べる程に認知され、今や知らない人など居ない大衆の娯楽と化していた。

様々なルールが存在し、定期的に大規模な大会が開かれ、プロデュエリストも多数存在する。

トッププロが一堂に集う大会での優勝者には莫大な賞金と栄誉あるキング（クイーン）オブデュエリストの称号が与えられた。

しかし、実力だけでなく運によっても大きく左右されるこのゲームは輝かしきとは裏腹に賭博の手段、対象としても一定の地位と信頼を築き上げてしまった。

かつての『それら』と同じように…

〈デュエルハウス「フリード」〉

「クソッ！サレンダー！もう一回や小娘！」

中年男がテーブルに拳を振り落とす。

ガタン！と重い音が響き、そのはずみで何枚かのカードが床に落ちる。

賑やかだった店内が静まり返り、周囲から視線が集まった。

「だめ。これで終わりってさっき言った」

対面の少女は表情を変えずに返す。

中々肝が据わっているようだ。

「ああ!？」

中年男は大声で威嚇する。

すかさず店員と思われる人物が歩み寄った。

「お客様、他のお客様のご迷惑になります。あまり耳障りだと出入り禁止の処置を取らざるを得なくなります」

店員は中年男をにらみつける。

「…チツ！ほらよー」

威圧に屈した中年男は金を投げ、カードを回収し店を出て行った。

「レイリちゃん大丈夫だった？」

店員と思われる人物の声色が優しいトーンに変わる。

少女の名はレイリというようだ。

「うん。ちよつとびっくりしたけど」

少女はテーブルのカードを手元を集める。

「ずつと勝つてたよね？いくら稼いだの？」

「1週間は暮らせるくらい、かな」

「そっか。良かった」

「うん」

少女は荷物をまとめ立ち上がる。

「またおいでよ。みんなレイリちゃんとデュエルしたがってるからさ」

「…うん」

少女は少し時間を置いて店を後にした。

【デュエルハウス】。表向きは人々が集まりデュエルを行う施設だが、かつての雀荘のようにお金をやりとりしてるハウスもそれなりに存在している。

もちろんデュエルでの賭博は現行法では認められてないが、賭けを行うハウスの数が多すぎるため、余程のことが無い限り警察は黙認しているのが実情だ。

先程のとあるハウスでの、とあるやりとり。良くある光景だ。ただ1つを除いては…

鈴瀬麗梨（スズノセ レイリ）。15歳。高校1年生

「じゃあ、この問題を…鈴瀬」

「6P3で120通り」

「正解。というわけでこの確率はくくく」

桐標高校という地元の高校に通っている彼女。

「れーりちゃん、その卵焼きちよーだい！」

「いいよ」

整った顔立ちと、真っ直ぐ長く伸びた黒髪が印象的。

「れーりちゃん、一緒に帰ろ！」

「うん」

その外見と掴み所の無い言動からしばしばミステリアスやクールビューティーなどと称される。

「また明日ね！ばいばい！」

「ばいばい」

そんな彼女の日常が今日も終わる。

いや違う。終わったのは日中だけだ。

ーーー午後7時。日は沈み、辺りは暗くなる。

（今日はどこに行こうかな。フリードにはしばらく行けそうにないし…）

考えごとをしながら彼女は身づくろいを始める。

長い髪を短く見せるようにくくり、帽子をかぶり度の入ってない眼鏡をかける。

顔には薄く化粧が施されており、その姿は学校に通う彼女とはまるで別人のよう。

（せっかくだし新しいハウスでも探してみようかな）

ーーー午後8時。

気付けば1時間近く歩いていた。普段徒歩では来ないような隣町を歩く。

（どうしよう、見つからない。無駄足は、やだな…）

歩きつ放しだった彼女に疲れが見え始める。

(仕方ないけど、駅までに無かったら帰ろう)

駅に向かって歩き出して数分、路地裏を覗くと控えめな看板が目に入る。

(あ、デュエルハウス「黒蠍」…こんなところに一軒あった)

ふう、と一息つく。

(たぶん、大丈夫だよ)

息を整え路地裏へと歩を進めた。

〈デュエルハウス「黒蠍」〉

「あーつちくしょう！また負けた！」

「悪いな、ごちそうさん」

悔しがる男が対面の若者に金を差し出す。

この男だが今日は全くと言っていいほど良いところが無く、給料の約半分を若者に巻き上げられる始末であった。

「今日はもうやめだ！ついてねえ」

悔しがる男は荷物をまとめ店を出て行った。

「ああ？」

店の扉の近くを歩いていた少女と目が合う。

「ここはガキの来るところじゃねーぞ。帰れ」

男は少女に吐き捨てるように言うそのまま表通りへと向かって行った。

「…」

(うん…わたしもその通りだと思う。でも、わたしは…)

(…)

少女は意を決し扉を開けた。

## 1話 #2 「暗い海へと」

「いらっしや…ん?」

店員は入店した少女を見ると怪訝そうな顔で近付く。

「道に迷ったんだね?」

「はい」

「わかっていると思うけどここは子供が来ちゃいけない。少し休んだらすぐに出て行きなさい」

「わかりました」

「じゃあ仕事に戻るから」

(まず1つ目は大丈夫…)

この流れは半ば形骸化した警察への対策のようなもの。本当に追い返そうとしているわけでないことをお互いに理解している。

「お?そこの娘!」

入店した少女、いや彼女に声をかけたのは先程の若者。

この若者の一声で店内の視線が彼女に集中する。

「…わたしのこと?」

「お前以外に誰がいるんだよハハ。こっち来いよ」

若者は笑いながら手招きする。

店内は彼女以外は全て成人の男性、店員を除くと客は10人程度しかいないようだ。

「さっきまでやってた奴が帰ってき、相手がいねえんだよね。相手してくれや」

「…」

彼女は躊躇いながらも若者の対面の席に座る。

「おお、やっぱいいねえ!」

「?」

「こういう店に来るのは汚ねえおっさんばつかでさ、お前みたいなかわいい子が来るとテンション上がるわあ!」

若者はにやにやししながら興奮している。

「そうですか」

対照的に彼女は変わらず落ち着いていた。

「なあ名前なんていうの？彼氏とかいんの？〇〇はもう済ませた？」

「答える必要はありません。ルールとレート、どうしますか？」

不躰な質問攻めをあしらひ、本題に向かおうとする。

「おーおー冷静だねえ。でもいつまで冷静でいられるかなあ？」

若者は含みのある言い方をする。

「そうだなあ、ルールはこのハウスルールでやる。ちよつと変わってるけどまあまあおもしろえぜ？」

「レートはそうだな、3回戦で5000の5000、マッチ20000でどうだ？」

「…えっ!？」

彼女は驚き目を見開いた。

「レート」。端的に言うのと賭けデュエルでの金額の大きさだ。順番に「デュエル終了時のライフ差」、「デュエルの勝敗数」、「マッチの勝敗」のレートを表している。

ライフは100ポイント差につき1000円の場合は「1」、勝敗数は1勝につき1000円の場合は「1」、マッチも同じく1000円の場合は「1」

マッチについては、いわゆる勝者へのボーナスのようなものなので換算しない場合もある。

今回の場合だと500、5000、20000なので「ライフ差100につき5万円」、「1勝につき50万円」、「マッチ勝利で200万円」となる。

要するに一般のデュエルハウスでは到底考えられない逸脱したレートなのだ。彼女がフリードで戦った時の100倍以上のレートである。

「そんなレート受けられません」

(そもそもわたしがそんなにお金を持つてるようには見えないはず…)

「いや、お前に拒否権はないぜ？」

「…どうして？」

賭けデュエルはお互いが了承して成立する。片方が拒否しているなら成立しないのは至極当然である。

「おい、その娘」

と、そこに一連の様子を遠くから見ているであろうスーツ姿の男が現れ、彼女に近付き胸ポケットから何かを取り出す。

成立しないなら成立させればいい。あらゆる手段を講じて。

(?…これって、警察手帳…!?)

表情には出さないが彼女の鼓動が早くなる。

「勝負を受けるなら不問にしてやってもいいが」

スーツの男と若者は不適な笑みを浮かべている。

(う…まずい、もしかしてわたしのこと知ってる…?)

本来ならば高レートでの勝負を持ちかけた者を止め、未成年である彼女を保護なり補導なりするのが警察官の仕事である。

しかし若者は何も慌てる素振り無く、むしろ笑みを浮かべている。警察手帳を差し出した者もだ。つまり2人はグルである可能性が高い。そのことは彼女もわかっている。

そして彼女にとってまずいのはそれだけでは無い。彼女は賭けデュエルによって得たお金で生活しているのだ。

補導されるような事態になればこれまでの足跡を辿られ、最悪デュエルハウスに二度と出入りできなくなるかもしれない。彼女はそうなることを避けるため、これまでガサ入れされない低レートの店を利用してきた。

「ほう、逃げたり喚いたりしないのか？それともまだ状況が飲み込めていないか？」

「…あなたがその男とグルってことはわかってる。わたしのこと、どこまで知ってるの？」

「いや、お前のことは知らんな。ただ夜になると、この界隈のデュエルハウスにそれはそれはかわいい娘が現れるって噂は聞くがな」

(そんな噂は聞いたことない…わたしが知らなかっただけ？でもこの人はわたしのことを知ってる)

「へえそんな噂初めて聞いたぜ。じゃあこいつがその噂の子か？」  
若者も初耳だったようだ。

「さあな。それよりどうするんだ？俺と署まで来るか？」  
彼女に選択を迫る。

「…わたしに拒否権は無いんだよね」  
2人は変わらず不適な笑みを浮かべている。

「ルール、説明して」  
彼女は腹をくくった。

# 1話 #3 「ハウスルール」

「おい、ルールブック渡してやれ」

若者は年配の店員を呼び寄せた。

「初めましてお嬢さん。店主の青葉（アオバ）と申します。こちらがハウスルールでございます。ご質問があれば遠慮ならさずにお聞きください」

彼女にルールブックが渡される。ルールブックといっても数ページの薄い冊子のようなものだ。

「…どうも」

彼女はそつげなく礼を言う。

（この人もグル…？）

彼女の警戒心はかなり強まっていた。そんな心境を見透かしたかのように青葉が口を開く。

「ご心配なさらずとも私は中立でございます。信用できませんかな？」

二人はお互いの目を見つめ合う。第三者からは同じように見えるが、その質は違うものである。

青葉の視線は彼女を試しているような目であるのに対し、彼女の視線はその人物が信用できるかどうかを見定める目だ。

（…いや、この人は違う。なんとなくだけどそこの2人とは別のおいがある）

彼女は自分の目と直感を信じることにした。

「いえ…良ければ審判をお願いできますか？」

「かしこまりました。僭越ながら今回の勝負の審判兼進行役を務めさせていただきますでしょう」

彼女はチラッと若者の顔を覗くがその表情に特に変化は無い。

そのまま冊子を開き視線を落とした。

（どういうルールなんだろう）

そのまま約数分間目を通した。見落としの無いように何度も見返す。

(…なるほど、「スピード」の亜種)

スピードとはデッキ10枚、モンスターゾーン魔法罫ゾーン3ヶ所まで、初期手札3枚に手札上限4枚で行われる高速デュエル。

かつてのデュエルターミナルのそれと同じ種類だ。ただし「スタンダード」と呼ばれる一般的な大会公式ルールではないため、店によってそれぞれ細かな違いはある。

例えば今行われようとしてるデュエル。先行ドロワーあり、初期ライフ2000。ここまではいい。問題なのは使うカード。

「青葉さん、質問いいですか?」

「はい、何でしょうか?」

「使用カードについては店員からの説明がありますってどういうことですか?」

「それはですな…」

青葉はポケットから5枚のカードを取り出し、裏側のままテーブルに並べる。

カードはそれぞれ違う色のスリーブに入っており、左から青・黄・緑・赤・黒色の順だ。

「使用カードにつきましては、こちらで選ばせて頂いた20枚のカードの中からお互い15枚選んで頂きます」

「選んで頂いた15枚からメインデッキとなる10枚を選んで頂き、残りの5枚のカードはサイドデッキとして次戦以降メインデッキのカードと入れ替えることが可能です」

「こちらに並べました5枚のカードは、いわばその最初の20枚を決めるクジのようなものでございます。ご理解されましたかな?」

青葉は彼女に確認を問う。

「最初の15枚選ぶ時に選ばれなかった5枚は公開されますか?」

「いいえ。最後まで非公開情報でございます。私が責任を持って情報をお守り致します」

「わかりました。…他に質問はありません」

「では、お選び頂けますか?」

「…わたしが選んでいいの?」

彼女は若者にたずねる。青葉の説明通りならば、これから行うデュエルを大きく左右する選択肢だ。

「おう選べ選べ」

しかし、尋ねられた本人は余裕綽々といった感じである。

(最初の運試し…)

彼女は赤いスリーブに入ったカードを選択した。

「そのままめくって下さいますかな」

クルツとカードが表になる。

「ほう、『ヂエミナイ・エルフ』ですな」

最初期に出た通常モンスターカードだ。フォーマットも最初期のものとなっている。

「ならば、『レトロ』ですな。」

青葉はそう言うのと店の奥の引き出しからカードの束を取り出す。

「お二方、スリーブは赤と黒がごさいますがどちらになさいますか?」  
引き出しの前で青葉が問いかける。

「黒で頼むわ」

「わたしは、赤で」

「かしこまりました」

青葉は若者に黒スリーブに収納されたカードの束を、同じく彼女に赤スリーブの束を渡した。

「さて、お二方には同じ20枚のカードをお渡ししています。こちらが【レトロ】のカードセット表でございませう。各自ご確認を」  
渡された紙にはこう書かれてある。

ハウス黒蠍ルール      カードセット「レトロ」

1 チエミナイ・エルフ

2 首領・ザルグ

3 疾風の暗黒騎士ガイア

4 ビッグ・シールド・ガードナー

5 俊足のギラザウルス

6 スピア・ドラゴン

- 7 ならず者傭兵部隊
  - 8 人造人間―サイコ・シヨツカー
  - 9 ペンギン・ソルジャー
  - 10 スケルエンジェル
  - 11 サイクロン
  - 12 月の書
  - 13 地割れ
  - 14 強制転移
  - 15 死者蘇生
  - 16 硫酸のたまった落とし穴
  - 17 神の宣告
  - 18 魔法の筒
  - 19 聖なるバリア ―ミラーフォース―
  - 20 激流葬
- カードセットと中身が異なっていた場合、従業員に申しつけ下さい。
- またリストと異なるカードセットでデュエルをした場合、反則負けとなりますのでご注意ください。

# 1話 #4 「選ぶ難しや」

「こっちは揃ってるぜ。問題ない」

「ごちらも大丈夫です」

(確かにレトロかも)

お互いカードの確認を終える。

「では、15枚お選び下さいませ。制限時間は5分でございます」

青葉は机のデジタルタイマーをセットした。

(この中から15枚、何を選ぶ…?)

(相手も同じカードリストの中から15枚選ぶわけだから、相手の選ぶカードも想定しなきゃいけない)

(そしてそれに対応できるようにこっちも選ばないといけない)

(いやそれは正しいのかな…? 対応って言ったって、たった20枚しかないし…どう選んでも10枚は同じカードを使うわけだから、相手を考慮せずに選んだ方がいいのかも)

〜1分経過〜

(どうしよう…5分しかないのに決まらない)

(この生活を始めてから、こういう状況に置かれることを全く想定しなかったわけじゃないけど…)

(…怖い。負けたらどうなるんだろう)

彼女の手は震え出し、目は虚ろになっていた。

「…負けた後のことを考えるのは全てが終わってからにしないさ」

彼女の横に立っていた青葉が静かに口を開く。

彼女の姿に見かねたのか。ただの気まぐれか。

どのような意図があったかにしろ、その声は確かに彼女の元に届いた。

(青葉さん…?)

彼女は青葉の顔を見るが微動だにせず立ったままだ。

(…そうね、まだ始まってもない。こんなところで負けられないよね)

(絶対、勝たないと)

彼女の目に再び生気が宿った。

く残り7秒く

制限時間ギリギリのところ、彼女は無事15枚のカードを選び取る。

「5分経過致しました。お選びにならなかった5枚のカードを回収致します」

(間に合った。危なかった…)

ひとまずの危機的状况を脱した彼女は

(…ありがとうございます)

心の中でお礼を述べた。

「おいおい、デュエルする前に勝負が決まるなんてのは勘弁してくれよう」

「…そうなってた方が良かったって思うよ、きっと」

「おーおー言うねえ。それでこそやりがいがあるってもんだ」

若者はずつと余裕といった感じだ。

「では次に、メインデッキとなる10枚をお選び下さい。制限時間は5分です」

再びタイマーがセットされる。

(5分だけど、方向性はもう決まってるから焦らず…)

く5分経過く

「5分経過致しました。サイドデッキとなった5枚のカードをお預かり致します」

「それではメインデッキを交換してシャッフルを」  
「待ってください」

彼女が流れに割り込む。

「何ですか?」

「シャッフルは青葉さんをお願いします。10枚しかないデツキなので、信用できる方に混ぜて欲しいです」

彼女はそつとデツキを青葉の元に置く。

「ケツ、俺が信用できねえのか。まあ好きにしろ」

若者は悪態をつきながらデツキを青葉の元に置いた。

「では私がシャッフルさせて頂きましょう」

お互いのデツキをシャッフルする。淀みない慣れた手付きだ。

「シャッフルが完了致しました。デツキを然るべき位置にセットを」

「先攻、後攻を決めます。お二方、私がコイントスを行いますので表か裏どちらかの宣言を」

「表だ」

「わたしは裏で」

コインが弾かれ宙に舞う。

「コイントスの結果は…裏ですな。赤スリーブの方、先攻か後攻の選択を」

(スリーブの色で区別するんだ…)

「先攻で」

(このルールだと、たぶん先攻の方が有利なはず…)

「お二方、デツキの上から裏側のまま3枚場に。最初の手札となります」

「準備が整いました。赤スリーブの方先攻で1回戦、デュエルスタート！」

ついにデュエルが始まった。彼女にとっては今後の人生を左右しかねない重大なデュエルだ。

# 1話 #5 「未知の1回戦」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(さあ、手札は…)

彼女手札【ならず者傭兵部隊】【死者蘇生】【地割れ】【激流葬】

(モンスターは《ならず者傭兵部隊》だけ…セットする？いや、【激流葬】あるしいいかな)

「カードをセット」

(念のため【死者蘇生】もセット。今は使えないし、【サイクロン】のおとりになってくれるならそれで)

「もう1枚セット。ターンエンド」

彼女手札2枚【ならず者傭兵部隊】【地割れ】

魔法罨セット2枚【激流葬】【死者蘇生】

若者手札3枚、場0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(悪くねえな。セットされた2枚は…)

若者は数秒彼女のフィールドを見る。

(ククク…なるほどね)

「【サイクロン】発動、デッキ側のカードを破壊だ」

「はい」彼女のセットカード【激流葬】破壊

(う…激流葬の方当てられた)

「【スピア・ドラゴン】召喚」

「どうぞ」

(まづいかも…攻撃してくるよね)

「バトル、【スピア・ドラゴン】で攻撃」

「…通します」彼女のLP2000—1900||100

「効果でスピア・ドラゴンは守備表示になる。カードをセットしターンエンドだ」

彼女手札2枚【ならず者傭兵部隊】【地割れ】

魔法罨セット1枚【死者蘇生】

若者手札1枚

表側守備【スピア・ドラゴン】

魔法罨セット1枚

(う…もうLP100しかないの…?でも、まだ諦めない…)

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【ペンギン・ソルジャー】

(ペンギン・ソルジャー、っとセットする前に)

【地割れ】発動

「おう」若者の表側守備【スピア・ドラゴン】破壊

「モンスターセット」

(死者蘇生は…いや、ここはこれでエンド)

「ターンエンド」

「おっとエンドフェイズにトラップ発動。【硫酸のたまった落とし穴】」

「な…!？」彼女のセットカード【ペンギン・ソルジャー】破壊

(そのカードが入ってるなんて…)

「想像してたのと違ったか？」

若者はニヤつきながら言う。彼女にとって硫酸のたまった落とし穴は想定外だったようだ。

(……………)

彼女は自分のデッキを見つめる。

彼女手札1枚【ならず者傭兵部隊】

魔法罨セット1枚【死者蘇生】

若者手札1枚、場0枚

「デッキを見つめても残念ながら次のドローはやって来ねえぜ。ドロー、スタンバイ、メイン」

メインフェイズに入った後、彼女は下を向く。その表情は前髪に隠れて誰にも見えない。

「スケルエンジェル」召喚。バトル、攻撃」

「…はい」彼女のLP100—900—800

彼女はうつむいたまま答えた。

「デュエル終了でございます。LP2000対—800で黒スリーブの方の勝利で1回戦決着でございます」

「まずは軽く1勝だな」

「…」

デュエルが終了しても依然彼女はうつむいたままだ。

「ではお二方、サイドデッキをお返しします。2回戦は5分後に行います。各自デッキ編成を済まし、5分経過までに着席を」

タイマーがセットされる。

「…あの、トイレってどこにありますか？」

その直後、ゆつくりと顔を上げた彼女が青葉を見てたずねる。

「あちらの右奥にございます」

「ありがとうございます。少しひとりにさせてください」

「おうおう行つて来い。ここで漏らされても困るからなハハハ」

若者の声を見無視し、彼女は自分の荷物とデッキを持ってトイレに向かった。

(……………)

彼女は考えていた。用を足すためにトイレに行ったのではない。

(…あと2回勝たないといけない)

(たとえば次勝ったとしても次負けてしまえばそれで終わり…)

(それに…いや、わずかでも望みがあるなら諦めない)

(デュエリストとして、最後まで)

次負ければ終わりという状況の中、彼女は何とか心を起こすとデッキの編成を始めた。

「一方的だったな」

スーツの男が口を開く。この男は若者の横でずっとデュエルを見ていた。

「引きも良かったからな。まあ多少引きが悪くても問題無く勝ったさ。それより…」

若者はスーツの男を視線を向ける。

「あん?」

「ほら、わかるだろ?落とすってんならその前に、な?」

「…無茶はするなよ」

「へへ、わかってるって!安心しろ」

(ま、最悪肩代わりだな)

若者はデツキの編成を始めた。

く5分経過く

彼女も若者も準備ができている。過程は1回戦の時と同じだ。

「準備が整いました。赤スリーブの方先攻で2回戦、デュエルスター  
ト!」

# 1話 #6 「反撃の2回戦」

「ドロー」

(お願い…)

彼女は目を瞑り祈るようにドローした。

(祈ったって無駄さ)

「…スタンバイ、メイン」

「カードをセット」

「[スピア・ドラゴン] 召喚。ターンエンド」

彼女手札2枚

攻撃表示 [スピア・ドラゴン]

魔法罨セット1枚

若者手札3枚、場0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

若者手札 [スケルエンジェル] [激流葬] [強制転移] [聖なるバリア

—ミラーフォース—

(さあ伏せカードは、っと)

若者は1回戦の時と同じように数秒間、彼女のフィールドを見た。

(…ふん)

「カードセット。もう一枚セット」

「モンスターセット。ターンエンドだ」

彼女手札2枚

攻撃表示 [スピア・ドラゴン]

魔法罨セット1枚

若者手札1枚 [強制転移]

裏側守備 [スケルエンジェル]

魔法罨セット2枚 [激流葬] [聖なるバリア —ミラーフォース—]

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(来た…！)

「カードをセット」

(…伏せカードが気になるけど、貫通効果もあるし攻める。いざとなれば伏せてる神の宣告で)

「バトル、【スピア・ドラゴン】で裏側守備のモンスターに攻撃します」

「ほう、来るか。じゃあ罠カード発動だ」セットカード【聖なるバリア

—ミラーフオース—】発動

(う…！神の宣告で無効…違う、ここじゃない)

「何もありません」彼女の攻撃表示【スピア・ドラゴン】破壊

(もうひとつ伏せカードが残ってる。あれが激流葬だしたら…)

「…メイン2、カードをセット」

「【疾風の暗黒騎士ガイア】を召喚。…ターンエンド」

彼女手札0枚

攻撃表示【疾風の暗黒騎士ガイア】

魔法罠セット3枚

若者手札1枚【強制転移】

裏側守備【スケルエンジェル】

魔法罠セット1枚【激流葬】

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【サイクロン】

(クク、そう来たか。3枚も伏せて警戒させようってことだろうが…)

(全部お見通しき！ガイアを召喚するために伏せたカードが【死者蘇生】だってこともな)

「いやあ3枚も伏せられてつと迂闊に動けねえな」

「…」

若者は彼女の顔を見るが無反応だ。

(フン、平装おおうと頑張っちゃってかわいいねえ。さあその顔、いつ崩れるかな?)

「反転召喚、【スケルエンジェル】」

「…どうぞ」

(まだ。ここも神の宣告は使わない)

「そんじゃあそれにチェーンして【激流葬】発動」

(やっぱり読み通り激流葬、今…！)

「それは止めます。チェーンして【神の宣告】発動」彼女のLP200  
0—10000=10000

「おう」若者の【激流葬】無効

(お？つーことは勝ち確定きたぜ！へへ)

「おっと、【スケルエンジェル】の効果で1ドローな」ドローカード【神の宣告】

(んじゃそろそろ種明かし行くか)

「ククク、手札から【サイクロン】発動。俺から見て右の伏せカード、死者蘇生を破壊」

「え…!?」彼女のセットカード【死者蘇生】破壊

彼女の手が止まり若者の顔に視線が移る。

「何でわかるんだ、って顔をしてるな。ハハハ、俺はセットされたカードが全部わかるんだ」

「うそ…！」

「嘘じゃねえぜ、お前が伏せてる残りのそのカードは【サイクロン】だろ？」

若者は彼女の伏せカードを指差す。

「どうして…？」

「俺はここで何度もこんなデュエルをしてるからな。自然と覚えちゃったんだ。スリーブの傷や汚れをな！」

「…！」

「スリーブ代を節約してるのか知らんが、この店あまりスリーブ交換をしてねえんだよな」

「実際レトロで使われるその赤スリーブ、昨日も見たばっかだし」

「そんな…それじゃこのデッキのカード全部…！」

「ああもちろん！あと俺が今使ってるこのデッキもな！」

若者はスリーブの傷で全てのカードが判別できていた。つまり彼女の全ての戦術、戦略が若者に筒抜けだったのだ。

それだけではない。若者は自分が次に何のカードを引くのかも把握していたということだ。

「何故このタイミングで言ったかわかるか？」

「…勝ちを、確信したから」

彼女は力無く答える。

「その通り。ついでにもうひとつ質問」

「…？」

「さつき戦ってた奴には種明かししてねえんだ。何故だかわかるか？」

「…わかりません」

「フフ、汚ねえおっさん共よりな、お前みてえなかわいい子の絶望する顔が見たかったからさ！やっぱたまんねえなあ！」

「っ……！」

彼女は耐えるような表情で若者をにらむ。自分をさらけ出した若者に対し、彼女は必死に自分を抑えていた。

(まあさつきの低レートだったし、さつきと終わらせたかったってのもあるがな。さて、仕上げだ)

【強制転移】発動！】コントロール入れ替え【スケルエンジェル】⇄

【疾風の暗黒騎士ガイア】

「その伏せカードのサイクロン。使ってればまだ可能性は残ってたのにな」

若者はニヤニヤしながら場を進める。

「残念、もう終わりだ。【疾風の暗黒騎士ガイア】で【スケルエンジェル】に攻撃！」

(…遅かれ早かれこうなっていた。その日が今日だっただけのことだ)

スーツの男は彼女を哀れんだ。

「畏発動！」

「!?」

彼女の不意を付くような声に若者とスーツの男が驚く。

(ほう…)

審判の青葉も顔には出さないが感心しているようだ。彼女が発動した罫カード、それは…

「【魔法の筒】だと!?」若者のLP2000—2300—300

「デュエル終了でございます。LP1000対—300で赤スリーブ  
の方の勝利で2回戦決着でございます」

「ではお二方、サイドデッキをお返しします。3回戦は5分後に行います。各自デッキ編成を済まし、5分経過までに着席を」

青葉はタイマーをセットした。

## 1話 #7 「仕掛けの正体」

「何故だ、サイクロンじゃねえのか…!？」

若者はうろたえる。自分のカードを手元にまとめながら思ってたカードじゃなかった理由を探り始めた。

(見間違えたか? いやそれは無い、あの傷と汚れ具合は間違い無くサイクロンだったはずだ!)

若者は思考を巡らせ、ひとつの答えに辿り着く。

「…変えたな?」

若者が小声で彼女をにらむ。

「何のこと?」

彼女も若者に気圧されることなく答える。

「とぼけるな!俺がスリーブの傷でカードを判別できると気付いてたんだろ!？」

「2回戦が始まる前、お前はトイレに行った」

「俺は気分転換にでも行ったのかと思ったが、あれは実はスリーブの中のカードを入れ換えるために行ったんだ。換えたカードはサイクロンと魔法の筒だ!違うか!？」

彼女は黙って聞いている。

「少なくともお前は1回戦が終わるまでに気付いてたんだ。へっ、見透かされるとわかりつつ、表情ひとつ変えずにデュエルできるとは大したもんだよ」

『俺に気付いてないと思わせるためにピンポイントでサイクロンと魔法の筒だけを入れ換えた』こともすげえよ、そこは褒めてやる」

「道理で発動しなかったはずだ。発動しないサイクロンに違和感を持たなかった俺も俺だがな」

若者は体をほぐす。どうやらまだ余裕があるといった感じだ。

(そうか、ギリギリまで相手にバレないようにサイクロンと魔法の筒だけを入れ換えたってことか)

(その気になりや他のカードも換えられたものを。：いや、だからこそ効果がある。バレちまえばそこで終わりだしな)

(このデュエル中に魔法の筒を引くかわからない。それこそ先にサイクロンを引いちまえば致命的、もう負けられない一戦だというのにこんな薄い賭けに出てきやがった)

(スリーブの傷に気付いたのもそうだが、確証が無いままそれを信じ、カードの入れ換えを思い付き、そして実行してくるとはな)

(なるほど、伊達にこれで生活してるわけじゃねえか)

スーツの男は彼女の評価を改めた。やはり彼女のことを知っているようだ。

「あーあ、まったくただのガキだと思って優しくしてやったのによ、こういうことされるとは思わなかったわ」

若者は冷めた顔をしている。

「マジキレそう。その場で金払えなかったら、覚悟しとけよ?」

「脅すのはやめてください。怖いです」

彼女は視線をそらす。若者にとっては予想外の反応のようだ。

「チツ…」

若者は舌打ちをし、次戦へのデッキ編成を始めた。

「あの、ちょっといいですか」

直後彼女は青葉に話しかけた。若者も彼女の方を見る。

「さっきこの人が『スリーブの傷や汚れを覚えててセットされたカードが全部わかる』って言いましたよね?」

「言いましたな」

『俺が今使ってるデッキも』わかるとも言いました。それって次に引くカードがわかるってことですよね?」

「そう解釈できますな」

「カードゲームでそれは公平性を欠いてませんか? 本来その情報は非公開であるはず」

「…」

青葉は彼女の言葉を待つ。

「お互いが選んだ15枚全てのカードを新しいスリーブに入れ換えて下さい。スリーブ代はわたしが負担します」

「はあ!?何言ってるんでめえ!」

若者は反発する。だが己の口が災いとなりそれは聞き入れられないだろう。

「承知致しました。スリーブの入れ換えは私がさせて頂きましょう。色はそのままですな?」

青葉はタイマーを一旦ストップさせお互いのデッキを手元に手繰り寄せる。

「おい何勝手にー」

「理は赤スリーブの方にあると判断致しました。何か文句がお有りですかな?」

「ぐ…わかったよ」

青葉の気迫に押され若者は渋々了承した。

（良かった、この方が審判で。シャッフルもお願いしてて本当に良かった）

（まあ、これは想定内っちゃ想定内さ。次のドロローがわからなくても経験の差で俺の優位に変わりはない。それより）

（このガキ、マジ気に食わねえな。あの顔も演技だったってことかよ!舐めやがって）

若者は一段と険しい表情となった。

「スリーブの入れ換えが完了致しました。お返し致します」

青葉はカードを返すとストップさせたタイマーを再度動かした。

「ありがとうございます」

彼女は軽く頭を下げる。

「そして、先程からこちらのデュエルをご覧になってるお客様方。只今より天井カメラからの映像をカウンターのモニターに出力致しますので、こちらのデュエルの様子はモニターをご覧くださいませ」

(そういえばギャラリーが…夢中で気付かなかった)

モニターに中継画面が映されると、デュエルを見ていた者たちは各自、モニターの見える適当な席へと座った。

(へっ、久々にモニター中継か。青葉も大掛かりなことしやがるぜ)  
彼女も若者も準備ができています。

(ぜってえ勝つ！)

(…負けない)

「準備が整いました。黒スリーブの方先攻で3回戦、デュエルスター  
ト！」

# 1話 #8 「運命の3回戦」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

若者手札【スピア・ドラゴン】【地割れ】【神の宣告】【疾風の暗黒騎士ガイア】

(ふん、悪くねえな)

彼女手札【地割れ】【神の宣告】【激流葬】  
(モンスターが無い…ドローで引けるかな)

「カードセット」

「【スピア・ドラゴン】召喚。ターンエンド」

若者手札2枚

攻撃表示【スピア・ドラゴン】

魔法罨セット1枚【神の宣告】

彼女手札3枚、場0枚

「ドロー…」

ドローしたカードを見た彼女の手が止まる。

(う…そんな、モンスターじゃない…)

「おい、どうした？手が止まってるぞ」

(…だめ。まだ勝負はわからない)

「スタンバイ、メイン」

(伏せカードが1枚…)

【【地割れ】発動】

「おう」若者の攻撃表示【スピア・ドラゴン】破壊

「カードをセット、もう1枚セット」

「…ターンエンド」

「ハハ、何だあ？モンスターいねえのか？」

彼女はじつと若者を見つめている。

「けっ、あんな小細工するから運が落ちるのさ」

(こりゃ思いがけないチャンスだぜ)

若者手札2枚

魔法罨セット1枚【神の宣告】

彼女手札1枚

魔法罨セット2枚【神の宣告】【激流葬】

「ドロ、スタンバイ、メイン」ドロカード【激流葬】

(伏せカードは2枚か。：ちっ、スリーブに傷一つありやしねえぜ)

(まあ、ここはガイア召喚するしかねえな)

「カードセット、もう1枚セット」

「疾風の暗黒騎士ガイア」召喚」

(：ガイアは破壊しないとまずいかな)

「召喚時に【激流葬】発動します」

(破壊されてたまるか！)

「【神の宣告】発動。【激流葬】は無効だ」若者のLP2000—1000  
0—1000

(1000ぐらいどうってことねえぜ)

(だめ、絶対に止める)

「通しません。さらにチェーンして【神の宣告】発動します」彼女のLP  
2000—1000—1000

「くそっ、てめえも伏せてやがったか」若者の攻撃表示【疾風の暗黒騎士ガイア】破壊

「ちっ、ターンエンドだ」

若者手札0枚

魔法罨セット2枚【激流葬】【地割れ】

彼女手札1枚、場0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(…大丈夫、迷わずに)

「カードをセット」

「ターンエンド」

若者手札0枚

魔法罨セット2枚【激流葬】【地割れ】

彼女手札1枚

魔法罨セット1枚

(引いたカードをそのまま伏せたか。激流葬、神の宣告は既に発動してるっつーことは魔法の筒かミラフオか。めんどくせえな)

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【首領・ザルグ】

(モンスターを引いたが危険を冒してまで今攻める必要はねえな。ここは様子見だ)

(伏せカードを警戒させるためにもな)

「ターンエンド」

若者手札1枚

魔法罨セット2枚【激流葬】【地割れ】

彼女手札1枚

魔法罨セット1枚

(何もしてこなかった…モンスター引かなかった？もしくは伏せカードに自信があるってこと…?)

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【ヂエミナイ・エルフ】  
(激流葬の可能性もあるけれど…もうひとつの伏せが魔法の筒かミラフオならたぶん同じこと)

「【ヂエミナイ・エルフ】 召喚」

(ぐっ、モンスター引きやがったか！激流葬を発動しないとやばい！)

若者の手がセットカードの方へと一瞬手が伸びるが、すぐさま手を引く。

(いや待て落ち着け、前のターン俺が様子見をしたことであいつは魔法の筒かミラーフォースがセットされてると思ひ込んでるはずだ！ここは賭けだ！)

若者だけでなく彼女も同様に動かない。

「…おう、別に何もねえよ」

若者が動いても彼女は動かないままだ。

(何もせず固まつてる、ってことはあいつ魔法の筒が伏せられると読んではいるのか?)

(あの伏せカードのどつちかが魔法の筒のはず。攻撃したら負ける…！)

「…ターンエンド」

若者手札1枚

魔法罨セット2枚【激流葬】【地割れ】

彼女手札1枚

攻撃表示【ヂェミナイ・エルフ】

魔法罨セット1枚

(よし思った通りだ！あいつはどつちかが魔法の筒だと思ってやがる。賭けに勝った！)

(ここでサイクロンを引けば勝ち…！)

「ドロー！」ドローカード【聖なるバリア —ミラーフォース—】

(ちっ、ミラーフォか。まあいい)

「スタンバイ、メイン」

【地割れ】発動だ」

(その伏せカードは地割れ…!?う…読みが外れた)

「はい」彼女の攻撃表示【ヂェミナイ・エルフ】破壊

「カードセット」

「ターンエンド」

(今度はブラフじゃないぜ?)

若者手札1枚

魔法罨セット2枚【激流葬】【聖なるバリア —ミラーフォース—】

彼女手札1枚

魔法罨セット1枚

(あの残ってる手札は何だろう。罨なら伏せるしモンスターなら召喚するはず…じゃあ魔法カードってことになるけど…)

(!…待って、前のわたしのターンをよく思い出して。あの時確か…)

思考の途中、彼女は唐突に閃いた。

(わたしがデエミナイ・エルフを召喚した時、一瞬彼の手が反射的に動いたように見えた)

(あれは…伏せカード発動しようとしたけど思いとどまったような、そんな動き)

(あのタイミングで発動できるカードといえば…)

(激流葬、もしくは月の書…!)

(でも月の書は無い。バトルフェイズでも発動できる月の書なら、あんな反射的な手の動き方はしないはず…!)

(ということとは激流葬…って)

ここで彼女はあの時点でセットされていたもう1枚のカードを思い出す。

(じゃああの2枚って、激流葬と地割れ…!わたしがデエミナイ・エルフで攻撃したら勝ってた…!?)

(でもそれなら何故激流葬を発動しなかったの…!?)

(!…そっか、魔法の筒!そのカードの存在を少しでもわたしに匂わせるため…!)

(彼は賭けたんだ…わたしが攻撃しないことに)

(つまり彼のあの手札は魔法じゃなくてモンスター…!だって魔法な

ら伏せるはず…)

(2枚より3枚セットした方が、次のターンわたしが攻撃する可能性は減るのだから)

彼女は思考の未確信した。そしてその確信を元に次なる思考を巡らせる。

(モンスターだとすると…召喚しなかった理由も見えてくる)

(わたしと同じだ。魔法の筒を警戒してる)

(それなら召喚しても攻撃さえしなければ問題無さそうって思えるけど、できないよね)

(だって自分の場に激流葬が伏せられているのだから…攻撃できないなら、結果は同じ)

(だから今、彼が欲しいのはわたしの魔法の筒を破壊できるサイクロン…！)

(引かれた瞬間、わたしの負けが決まっちゃう…！)

(だからお願い来て…！もう時間が無いの！)

「ドロー」

(！…)

「おいおい、ドローまでどれだけ時間かけてんだよ。何考えてんのか知らんけど引いてから考えろよ」

若者は苛立ちを込めた声をぶつける。

「あ…ごめんなさい。続けます」

思考に夢中になっていた彼女もここは素直に謝罪した。

「スタンバイ、メイン」

(…もう1枚の伏せカード、今度はたぶん本物の罠)

「カードをセット」

「【疾風の暗黒騎士ガイア】 召喚します」

「【激流葬】 発動だ」

「はい」彼女の攻撃表示【疾風の暗黒騎士ガイア】破壊

(…大丈夫、信じよう)

「…ターンエンド」

若者手札1枚

魔法罨セット1枚【聖なるバリア —ミラーフォース—】

彼女手札0枚

魔法罨セット2枚

(ターンエンドしてきやがったか。ってことはここで引ければ)

「ドロー！」ドローカード【サイクロン】

(来たか！)

若者はドローしたカード見てニヤリと笑った。

# 1話 #9 「決着の時」

(あの笑みは…もしかして引いたの…?)

「スタンバイ、メイン」

「残念だったな、お前もここまでだ」

「…」

彼女は黙ったまま下を向いた。

「【サイクロン】発動。デッキ側のカードを破壊する」

「…それにチェーンして破壊対象のこのカード【サイクロン】発動。そちらの伏せカードを破壊します」若者のセットカード【聖なるバリア

—ミラーフオース— 破壊

「へっ、意味のねえあがきだな」

(ちっ、サイクロンだったのかよ。ビビって損したぜ)

(まあでも同じことさ)

(お前が前のターンでガイアを召喚する前に伏せたカード、俺はちゃんと覚えてるぜ?)

(あれは最初のターンから手札にあったカード。ずっと使う機会の無かったカードだ)

(ほぼ確実に【強制転移】。そうじゃなければ【死者蘇生】だ。まあ死者蘇生を手札に溜めておくっていうのは意味ねえし考えにくいがな)  
(やっぱり中身はただのガキだったか。全然経験が足りてねえ、自分のことだけで手一杯だ。まああのレートじゃ周りが見えなくなるのもしゃあねえか)

(ま、それも狙ってたんだけどな！高レートに助けられたぜ)

「【首領・ザルグ】召喚」

「なあ、今どんな気持ちだ？」

「…」

彼女は下を向いたまま答えない。

周囲の客たちもそんな彼女の姿を見て哀れんでいる。

「そうか、答えたくなえか。ならそのまま聞け」

「お前、なかなか手強かったぜ？ここまでもつれたこと自体久々だっ

たかもな」

「見た目で多少油断しちゃったって言うのもあるが、そもそもこんな時間にこんな所に来る奴の見た目じゃねえなお前は」

「…お前がどんな奴かは知らんが、少なくとも今ここで負けたらどうなるかってことを感覚で理解してるはずだ。言うまでも無く見た目相応の振る舞いが無意味ってこともな」

「安心しろ、負け分たっぷり可愛がってやる。話は終わりだ」

「【首領・ザルグ】で攻撃！」

「…攻撃宣言しましたね。もう取り消せませんよ？」

「あ？」

彼女は震える手でセットカードをめくり始める。

「へっ、そいつは強制転移だろ。何思わせぶりに手を震わせてんだよ」

「…なぜ強制転移だと思ったんですか？」

「ん？そりやお前——」

「このカードは最初のターンからわたしの手札にあったカード。伏せたのは数ターン後、理由はガイアを召喚するため。それまでに使う機会の無かった魔法カードといえば強制転移だけしか考えられないからですか？」

「ああ！よくわかってるじゃないか」

「…あなたがそうしたように、わたしも賭けてました。『あなたがそう思ってくれるかどうか』に」

「あ？おい、どういう——」

「罨発動！」

「!？」

彼女は首を上げると、力強く若者の顔を見ながらカードをめくった。

「そんな…馬鹿な!？」

「おお…！」

若者だけでなくスーツの男も驚きの声を出した。

【魔法の筒】だ…と…!?」若者のLP1000—1400—400  
彼女は再び下を向き

「わたしの、勝ちです…!」

震える声で勝利宣言をした。その目元からは控えめに雫が垂れている。

「デュエル終了でございます。LP1000対—400で赤スリーブ  
の方の勝利で3回戦決着でございます」

その瞬間周囲から歓声があがる。「すごい」「よくやった」など彼女を称える声も飛び交う。

「同時にマッチ戦も決着でございます。2勝1敗でマッチ勝者は…赤  
スリーブの方でございます!」

「何故だ…!」

若者はまだ状況が飲み込めてないという感じだ。

「何故魔法の筒なんだ!?!最初から手札にあったはずだろ!何故ずっと  
伏せなかったんだ…!?!」

「そうしないと、あなたが見誤らなかつた」

「…くそっ!このレートで何故そんな真似ができるんだ…!お前は—  
体なんなんだ!?!」

「…どこにでもいる、ただのデュエリストです」

若者は悔しさを噛み締めうなだれた。

「それでは清算致します。レートは5000の5000、マッチ200  
00ですな」

青葉はライフ計算をしていた電卓に手早く数字を入力していく。  
実に慣れた手付きだ。

「計算が終わりました」

(はい…)

「1回戦、黒スリーブの方+190万」

「2回戦、赤スリーブの方+115万」

「3回戦、赤スリーブの方+120万」

「そしてマツチ勝者である赤スリーブの方に+200万」

「しめて245万、赤スリーブの方の勝ちですな。赤スリーブの方、おめでとうございます。これにて勝負は終了でございます。不肖、私青葉が審判兼進行役を務めさせていただきました」

青葉は一礼するとカウンターに戻って行った。

「あの、勝敗は決しました。245万、払っていただけますか？」

「…今持ってねえよ。1週間後までには必ず払うから連絡先教えろ」

携帯電話を取り出そうとする若者を彼女は冷めた目で見続ける。

「な、何だよ」

「ハハ、気持ちわかるぜ。その場で金払えなかつたら、覚悟しとけと脅した奴が負けた途端これだからな」

スーツの男が笑いながら若者の肩を叩く。

「ちよつと待ってな」

スーツの男は背広の内ポケットに手をつ込み、取り出した物を彼女の前に放り投げた。

「！」

彼女の前に放り投げられたのは札束だった。

「250万、つと正確には245万だったな」

スーツの男は札束から5枚抜き取る。

「俺が代わりに払ってやる。こいつには後から俺が請求しとく」

「え!?!でも…」

「いいから受け取っとけ。こんな奴に連絡先なんて教えたくないだろ」

「…確かに」

彼女の言葉が別の方向から若者に突き刺さる。デュエルの結果に

比べれば微々たるものだが。

「渡す代わりと言っちゃなんだが、今から付き合ってくれるか？色々話したいことがある」

彼女は警戒心を強めつつ考える。普通に考えれば怪しい。大金を持ち歩いていることも、ためらいなく肩代わりすることも。警察官であることも。強いてあげればその服装も。

「…いいですよ。どこですか？」

しかし彼女は、それらの怪しい要素はむしろ信用できるのではないかと考える。まるで信用される気が全く無いような、堂々としてここまで怪しい振る舞いはできないはずだと。

「駅前のファミレスでどうだ？」

「…構いません」

「そう警戒するな。単純にお前と話がしたいだけだ。じゃあまたな青葉さん」

スーツの男は背を向けずそのまま店を後にした。

「あ、ちよ…！」

彼女も慌てて札束と荷物を持ち店の出入り口に向かう。

「あの、青葉さん。本当にありがとうございます。今日のことは忘れません」

彼女の勝利は自身の力だけではない。青葉という審判がいなければこの勝利は無かったであろう。

「私は何もしておりません。貴女が自らの力で掴み取った勝利でございましょう。良ければまたお越し下さい、可憐なお嬢さん」

「…はいー」

彼女はしっかりとした声で返事をすると店を後にした。

# 1話 #10 「遅めの夜ご飯」

〈駅前ファミレス〉

「好きな頼めよ。腹減ってるだろ」

「えっと、じゃあハンバーグセットで」

ここに来るまでの道中、二人に会話は無かった。彼女は一定の間隔を保ちながらずっと後ろをついて行っただけ。

「おう、俺はコーヒーにするか」

「あの、本当におごってもらっていいんですか？」

注文を終え、彼女が少々申し訳無さそうに口を開く。

「ああ。いいデュエルを見せてもらった礼だ、遠慮すんな」

「それにお前はまだガキだろ。保護者が金を出さんでどうする」

スーツの男は冗談めいた口調で話す。

「…ありがとうございます。でも保護者には見えないです」

「ハハ、そうだな。どっちかって言えば一夜を共にするあの関係だな」

「そう見られないように『パパ』と呼びましょうか？」

「おい余計そう見られるだろうが」

(分かってて言ってるのか？こいつは…よくわからん)

「お待ちせしました。コーヒーとハンバーグセットです。ごゆっくりどうぞ」

「おう、ありがとう」

「…いただきます」

注文した品が運ばれ、彼女は遅めの晩ご飯を食べ始めた。

「突然だが、俺の名は黒川（クロカワ）だ」

「わたしは鈴瀬です」

「鈴瀬か。聞いてた通り普段と随分印象が異なるな」

「やっぱり知ってたんですね」

「まあ、あるツテでな。あと敬語は使わなくていいぞ。堅苦しいのは好みじゃないんでな。でも俺のことは『さん』付けで呼んでくれよ」  
「パパさん」

「それはやめろ」

「それより、色々訊きたいことがある。食べながらでいいから答えてくれ」

「スリーブの傷で判別してるってことに気が付いたのはいつだ？」

「初戦、硫酸のたまった落とし穴を使われた後、ふとデッキを見たらスリーブに結構大きな傷があったの」

「傷があるってことは使い回されてきたってことだから、もしかしたらって思っただの。彼がもしこのデュエルを何度も経験してたとしたら…」

「実際に見分けられるかじっと見てたら、遠くから素人目でもわかるくらいには傷の存在感はあった。その時に初めて『疑惑』が生まれたの」

「彼はわたしがじっと見たその行為を次のドロウにかけてると誤解したようだけど」

「傷の存在だけで疑惑を抱いたのか？」

「傷を見たあとに、(前のターンそういえばためらいなくサイクロンで激流葬を当ててきたよね) って思って、それも疑惑を強くした要因になったかな」

「疑惑が確信に変わったのは？」

「2戦目の時もずっと疑惑のままだった。彼が自ら種明かしをした時に初めて確信に変わったくらいだから。ただそれが無くても結果はたぶん一緒だったと思う」

「既に決まった後だからな。しかしまあ、あのレートでよくそれに気付いただけでなく、それを利用し勝利を収めたもんだ」

「時間も無かったし、あの仕掛けしか思いつかなかった」

「サイクロンと魔法の筒の入れ換えのことだな？何故そのカードを入

れ換えたんだ?」

「2000LPのデュエルで魔法の筒は反則的に強いカード。できればこれで不意を突きたいと思って入れ換えたの」

「サイクロンを選んだ理由はあるのか?」

「それは単純に、『サイクロンとわかっているカードをサイクロンで破壊するような人はまずいない』から」

「なるほどな。神の宣告だけに気をつけなければいってことか」

黒川は苦笑いをする。

「3戦目の魔法の筒も狙って発動したのか?」

「3戦目はお互い対等になったから、本当に策無しで挑んだ」

「でも初手4枚にモンスターが無いという不運に見舞われた。呆然と最初のドロウで引いた魔法の筒を見たの。そしたら思いついた」

「彼とわたしが2戦目の時ガイアを召喚する際に伏せたカードが何だったかを思い出してみたら、いけるって思えた」

「わたしの中ではライフが0になる前にガイアを引ければ勝ちって思ってた。だけど、そんな単純な勝負じゃなかった」

「フィールドに何も無く、手札がサイクロンと魔法の筒の時は…一瞬だけ迷った」

「よくサイクロンだけセットしたな。攻撃されたらそれで終わりの場面でその戦略にすぎる必要はあったのか?」

「攻撃されないって確信は無かったけど、わたしにはそれしか見えなかった。今思えばかなり危険な綱渡りだったかな」

「綱を渡ったからこそ次のターンにチャンスが訪れたんだと思うぜ。結果論だがチェミナイ・エルフで攻撃してればお前は勝ってた」

「…それも今思えば彼のフィールドにあったあのカードは、彼がガイア召喚のために伏せたカードだったよね。確かにチェミナイ・エルフの召喚に激流葬を使って来なかったって考えてたら…あの時点ではそこまで頭が回らなかった」

「過ぎたことだ。勝ったなら問題あるまい」

「それも含め見ごたえのあるデュエルだった。久々に面食らったぜ」  
「ありがとう…あの」

「どうした?」

「もし、負けてたらどうなったの?」

「お前が金を払ってたんじゃねえのか」

「えっと、そういうことじゃなくて…」

「…無ければ作ればいい。1日か半年か、もしくは数十年かけてな。金意外で払うって選択肢も無いわけじゃない。それだけだ」

黒川は冷たく言い放つ。その容赦ない冷たさに彼女の背筋が凍る。どうなっていたのかは考えるだけ無駄だ。

「…どうして彼の代わりに払ってくれたの?」

「そうだな、あの高レート勝負にお前を引きずり込んだ対価みたいなもんだ。あいつのことが心配か?」

「…ちよつとは」

「あいつは黒蠍意外のハウスでも荒稼ぎしてるからな。250万くらいどうってことねえだろうよ」

「彼とはどういう関係なの?」

「詳しくは言えないが、仕事仲間みたいなもんだと思ってくれていい」

「…警察官?」

「そう見えるか?」

「…見えない。あなたもだけど」

「ハハ、そりやいい目してんな」

「ま、俺のことは詮索しない方がいいと言っておこうか。ところで、その金は何に使うつもりだ?」

「わからない。こんな大金持ったことないから…」

「そうか。ならそれを元手にもっと稼いでみる気は無いか?」

「?」

「来週の金曜、丁度1週間後の夜にな、黒蠍に近頃調子のいい某新興企業の社長がいらつしやる。いわゆる成金だ」

「で、その社長がその日の対戦相手を探しててな…お前さえ良ければ話つけとくが、どうだ?」

「…レートは?」

「今日と同じ…いや、少し上かもしれん。200万程度じゃ心許無い

かもな」

「…」

「返事は今すぐにとは言わん。当日の昼までに連絡寄越してくれればいい。その時に改めて詳細を話す」

黒川は電話番号が書かれた紙を彼女に渡す。

「…わかった」

「付き合わせて悪かったな、そろそろ出るか？」

「あつ、待って」

「ん？どうした？」

「えつとね…」

「何だ？何かあるのか？」

「…パフエも頼んでいい？」

「あん？お、おう」

黒川の肩の力が抜ける。

(遠慮せず頼め、って言ったんだがな)

「…うまそうに食うな。甘いもの好きなのか？」

「うん、大好き」

彼女の口元は少しばかり緩くなっている。

「好きなのは結構なことだが、食いすぎると太るぞ」

「む…太ったら黒川さんのせい」

「そんなときやいいダイエット紹介してやるよ」

しばらくこの調子で軽い会話が続く。

その後、食事を終えた二人は店を出た。

〈駅の改札〉

「それじゃあな。帰り道気をつけろよ」

「うん。おごつてくれて、ありがとう」

「ちっぽけな金だ。礼には及ばん」

彼女は改札をくぐり、電車に乗った。時計の針は11時ちょうどを指していた。

(全く、変わった娘だなあいつは)

(さて、俺も一仕事して帰るか)

帰り道、ふと。パパと呼ばれた場面を思い出す。

(…俺に娘がいたら、ああいう風には育てないだろうな)  
だがそんな娘も悪くないと思う黒川であった。

【第1話 終】

## 2話 #1 「一夜が明けて」

111 午前9時

彼女は目を覚ます。

かぼんに入ったままの札束が昨日の出来事を思い出させる。  
あその後、シャワーを浴びてすぐ眠ってしまったようだ。

(学校…あ、今日は土曜日か)

座ったままうーん、と体を伸ばす。

(昨日のはやっぱり夢じゃないよね)

どうやらまだ実感が薄いようだ。

(…朝ごはん食べよ)

111 午前10時

彼女にメールが着信する。

f r o m 瑞希

「今日そつちにお邪魔していいー?」

t o 麗梨

「いこよ」

f r o m 瑞希

「お昼くらいに行くねー!」

t o 麗梨

「うん」

友人の瑞希が来るらしい。

中根瑞希 (ナカネ ミズキ)。彼女の同級生。

昨日彼女と一緒に帰った子だ。

独特な雰囲気を持つ彼女を慕っている。

111 午後1時

彼女は来客を招き入れるためドアを開ける。

「やつほー! れーりちゃん」

「今日も元気ね、入って」

「お邪魔しまーす！」

「れーりちゃんさつきまで何してたの？」

「お昼ごはん食べてた」

テーブルには食べかけのオムライスがある。彼女が作ったものだ。

「おおーオムライス！おいしそー！」

「食べる？あとちよつとしかないけど」

「いいの!？」

「いいよ」

彼女は瑞希に食べかけのオムライスをあげた。

「いただきますーす！」

「おいしー！さすがれーりちゃん！」

瑞希はおいしそうに頬張っている。

「ありがとう」

(あ、スプーン…まあ、いいかな)

「ごちそーさまでした。あ、お皿洗っておくね！」

「うん」

皿を洗い終えた瑞希が戻ってくる。

「ねー、れーりちゃんデュエルしよ！新しくデッキ作ってきたんだ」

「それは楽しみね」

彼女はかばんからカードとデッキを取り出す。なお、札束は瑞希が来る前に棚へと仕舞ってある。

じゃんけんの結果、先攻は瑞希。

「私のターン！」

「ヘカテリス捨ててヴァルハラサーチ。ヴァルハラ発動して効果でアテナ特殊召喚！」

「フレイヤ召喚。アテナ効果で600ダメージ！カードを1枚セットしてエンド」

「ドロー」

(あ、たぶん勝った)

「サイクロン発動」

「あー奈落がー!」

「サイバードラゴンを特殊召喚。エヴォリューションバースト発動。アテナを破壊。パワーボンド発動、手札と場のサイバードラゴン2体を融合。サイバーツイン召喚」

「ひー!」

(来るなら来なさい!オネストでー!)

「異次元の女戦士召喚」

「負けました」

彼女の後攻1ターンキルが決まる。

「相変わらずれーりちゃんの引きすごいね」

「今のは偶然」

「その『偶然』が多すぎる気がするんだけど…うー、もう1回同じデッキで勝負!」

その後お互いにデッキを変えたりして何度か彼女に挑むも、ほとんど返りうちにあう。

「あー勝てない!れーりちゃん強すぎ!」

「そんなことないよ」

「そんなことある!何でそんなに強いのか?もしかして、ひそかに鍛えてるとか?」

「鍛えてはいないかな」

(あれは、鍛えてるとは言わないよね)

彼女はデュエルで生計を立てている。大会での実績は無いが、その点では間違い無くプロだ。

おそらく自身も気付かないうちに鍛えられていたのであろう。幾度もプレッシャーのかかる場面を乗り越えてきた彼女は既に瑞希の

それを凌駕していた。

「うーん不思議だ」

瑞希も決して弱くはない。同年代の中ではそれなりの強さだ。

「れーりちゃんってまったく手加減しないよね？」

「そうかな」

負けることの恐ろしさをよく知っている彼女には手を抜くという考えが無い。無意識に勝ちに行く癖が染み付いている。

「うん、私はそんなれーりちゃんが好き！」

それは瑞希好みの癖のようだ。

「照れる」

「照れてるようには見えないよ!？」

「それは残念」

「何が!?何が残念なの!？」

「…ふっ」

瑞希の突っ込みに彼女は思わず笑い声が少し漏れる。

「あ!今笑った!」

「笑ってない。笑ってるようには見えない」

「れーりちゃん照れてる!かわいい!」

「かわいくない」

彼女は口角を上げるだけの微妙な作り笑顔はたまにするものの、はつきりとした笑顔や笑うことなどは滅多に無い。

なので彼女の心境は照れてるというよりは困惑していると表現した方が近い。どうして笑えたのだろうかという困惑。

(…昨日が冷たかったから、今日のあたたかさがとても効いてるのかな)

彼女なりに分析する。

(……………)

「…どうしたの?何か考え事?」

何も言わず一点をじっと見つめてる彼女に対して瑞希が心配そうに訊く。

「ね、瑞希はデュエル、好き？」

「好きだよ！特にれーりちゃんとするデュエルは大好き！」  
「そっか」

彼女は幾分穏やかな表情で返す。

「れーりちゃんは好きじゃないの？」

瑞希は悲しそうに問う。

「…わかんない。気まぐれの隣人だもの」

「日替わりの人参？」

「…」

（あ、すべったっばい…）

「好き嫌いの前に、ずっと隣にいる気がするから」

物憂げな彼女を見て、瑞希なりに言葉を紡ぐ。

「じゃあ家族だ！隣人じゃなくて家族だよきつと！」

「家族…」

「うん！だから好きとか嫌いとかじゃなくてえーつと…」

「…そっか、そうね」

言葉に詰まる瑞希をよそに、彼女は紡がれた言葉に納得する。

「そ、そう！…そうなの！」

（言いたいこときつと伝わったよね、うん！）

「というわけでデュエルしょ！」

「うん」

彼女は何かスッキリしたような面持ちだ。

（間をとって隣にいる家族ってことにしておこう）

## 2話 #2 「2度目の暗い海」

――午後6時

「れーりちゃん今日はありがとう！すごく楽しかった！」

「わたしも楽しかった」

「またデュエルしようね！」

「うん、帰り道気をつけてね」

「うん！また学校でね、ばいばい！」

「ばいばい」

瑞希は帰っていった。彼女は昨日と今日で、改めてデュエルというものの本質を見直したことだろう。

それは今後のデュエルにおいて大きな糧になるはずだ。

――そして1週間後の金曜日

(当日の昼までだったよね)

屋上の扉を開ける。人は誰も居ない。

彼女は携帯電話を取り出し番号を入力する。

「…俺だ」

「もしもし、黒川さん？鈴瀬です」

「おお、どうした？」

「対戦相手の件、まだ空いてますか？」

「空いてるぞ、受けるのか？」

彼女はこの1週間考えていた。

あのような怖い思いはしたくない。そんなリスクは冒さなくても生きていける。あんな誘いには乗らない。

何度もその結論に至った。しかし期日が近づくに連れ、ある疑問が浮かび上がってくる。ひよっとしてチャンスを逸そうとしているのではないかと。

彼女は短く未熟ながらも、これまでの経験の中でチャンスの掴み方、ピンチの脱し方というものを心得てきた。

その辺りの匂いには非常に敏感である。そもそもこの世界では匂いに鈍感な者は淘汰される宿命にある。

お金を得るために、生きていくために何が必要か。基本的かつ重要なことを詳らかに知る彼女が、自らの経験から導き出した答えは

「はい」

「そうか、よく決断したな」

「ずっと考えてた」

「だろうな。…黒蠍に午後7時半、右奥のテーブルだ。話す時は俺の名前を出せ」

「わかった」

「じゃあな、健闘を祈る」

通話が終了する。

(…さあ、戦おう。デュエリストとしても)

黒川はタバコを吹かしている。どこかのビルの屋上のような。

(期日ギリギリに来たか。やはり博徒に違えねえ)

黒川は自分の目が正しかったことに微かな喜びと安堵を覚える。

(あの野郎には一度痛い目を見てもらわんと。お前が普段見下してる若い娘に取られるなら本望だろう)

(…さあ、成金野郎から金ぶん取って来い、鈴瀬！)

――午後7時半

(1週間ぶりね)

彼女は黒蠍の入り口前に着いていた。格好も1週間前とほとんど同じだ。

(…)

彼女は意を決し扉を開けた。

〈デュエルハウス「黒蠍」〉

「いらっしや…!?!」

店員は入店した彼女をまじまじと見る。前回と同じ店員だ。

「はあ、また来たのか」

(危ない目にあっただばかりだろうに…)

「道に迷いました。休ませてください」

「…好きにきなさい」

彼女の固い眼差しに覚悟の度合いを察したのか、店員はその場から離れた。

店内は前回と同じような客層で同じような雰囲気漂っている。人数は前回より少し多い。

直後、噂話が聞こえてきた。

「おい見ろ、あの娘がいるぞ」

「ほう、あれが例の…」

「まさかまた来るとはなあ…」

前回居合わせた客のようだ。

彼女は迷わず右奥のテーブルへと向かう。

そこには既に先客がいるようだ。

「あの」

「あん？誰や？」

ガラの悪そうな男は彼女の方へと振り向く。

「えっと…」

(そういえば名前聞いてない…この人で合ってるのかな…？テーブルは間違い無いと思うけど)

「おう、よう見るとえらいかわいい顔しとんな」

(あ、確か黒川さんの名前出せばいいんだっけ)

「黒川さんから話は聞いてますか？」

「ほお!?黒川が言うとなんはお前か!まあ、座れや」

(この人であつた)

そう言われ彼女は対面の席に座る。

「ワイは村田(ムラタ)いうもんや。こう見えても社長やっとなねん」  
「わたしは鈴瀬といいます」

「にしても若いなあ。ほんまにええんかいな」  
「？」

「黒川もええ仕事するやんけ。こら楽しみやわ」  
(話が読めない…)

「：ルールとレートはどうします？」

「あ？ルールはこのハウスルールでええんとちやう？」

「レートはそうやな…」

村田は彼女を舐め回すように観察して口を開く。

「6、75、300でどうや？若いから特別やで」

(あれ？思ったより安い、というより普通よりちよつと高いくらいの  
レートだ…)

「ほぼノーリスクで金を得るチャンスやで？ええやろ」

「：ノーリスク？」

「ハハハツ、なんや黒川のおっさん、やっぱりこの嬢ちゃんに何も話してないんかハハハ」

村田は笑っている。

「どういうことですか？」

「いや失敬失敬。つまりこういうことや」

「お前は金を出さんでええ代わりに負けた金額分あるものを差し出せってことや」

「あるもの？」

「お前の身に着けてるもの、の一番内側といえはわかるやろ？」  
「…!？」

彼女は一瞬考え、村田の言ったことを理解する。

## 2話 #3 「癖のあるリスト」

「…そういうことでしたら受けられません。他を当たってください」  
彼女は席を立とうとする。しかし直後の一言で動けなくなる。

「ほお？逃げるんか。黒川に連絡して逮捕してもらうしかないなあ、  
現役高校生の鈴瀬ちゃんよ？」

「…」

「黒川から色々聞いたで？こんな風にデュエルハウスをあちこち回って生計立てとるってこともな。ま、それでも逃げるっちゅうんなら止めへんけど」

（黒川さん、どういうこと…？何故教えたの…？）

彼女の中で様々な疑問が思い浮かぶ。

「あの男を信用したらあかんで。大方ワイが対戦相手を探しとるみたいなこと言われてそれで来たんやろ？」

「う…」

「凶星みたいやな。まあそういうことや。なーに、勝てばそれで仕舞いや」

「…確かにそうですね。でも例え負けたとしても、身に着けてるものは渡せません。お金で支払います」

「はあ!?それじゃあこんなレートでやる意味無いやろが!」

村田の大声に彼女は思わずびくっと体を震わせる。

「あのなあ、このレートはな、いわばワイがお前に付けた値段や!順番に足、胸、○○や!ナハハ!」  
「っ…」

彼女は嫌悪感と若干の恐怖を覚える。

「そう引くなや。むしろ誇れや。滅多にこんな高値付けへんで?それだけお前に価値があるっちゅうこっちゃ!な、当然やるやろ?やらんと損やで?」

村田はまくし立てるように同意を求める。

「…受けられません。お金だけでやりとりしないのなら」  
「そうかそうか、無理か。ならしやあない、金でええわ」

(あ、話が通った…?)

「そうですか、ではー」

「ただし100倍な」

「え?100倍…?」

「せや。つまり600、7500、30000や」

「!?!」

彼女がホッと胸をなで下ろしたのも束の間、高額レートが提示される。

「あんなんで勝ったって小遣いにもなりやせんわ。せやから100倍アップや。どや、受けるか?」

(こんなガキが大金持つてるわけあらへん。お前はワイが付けた値段でやるしかないんやで)

「…受けます」

「せやろな。じゃあワイの出したレート……は?受ける?」

「はい」

「金も無いくせに何言うてんねん。言っとくけど後日払うとかは無しー」

彼女はテーブルに100万円分の札束を置く。

「わかってます。見ての通りお金ならあります」

(なんやこいつ、金持つとんかいな)

「かばんにも、まだ入ってます」

(と、言っても計250万だけ)

「…ほんまに受けるんやな?」

村田の目つきが厳しくなる。

「…はい」

「おもしろいやんけ。ワイに向かってきたこと後悔させたるわ」

「おい!誰か審判やってくれや」

「では私が務めさせていただきます」

村田の声に反応しカウンターの方から男が出てくる。

「青葉さん…!」

表情には出さないが彼女はちよつぴり嬉しそうだ。

「ふむ、奇遇ですな」

「なんやお前ら知り合いか?」

「お嬢さんのデュエルに一度審判として立ち会っただけでございませう。ジャッジは公平に執り行いますのでご安心を」

「ほーん、まあええわ。ルールはこのハウスルール、レートは600、7500、30000や」

「かしこまりました。ではー」

「おうちよつと待て」

準備に入ろうとする青葉を制止する。

「何でしょう?」

「このハウスルール、悪ないけど最初に選ばんかった5枚が使えなくなるっちゆうのは気に食わん」

「せやからワイの提案するルールでやらんか?」

村田はルールの提案を申し込む。そのルールとはこうだ。

カードリストの20枚からまず10枚を選び、それを第1戦でのデッキとする。

第1戦終了後、第1戦で使用したデッキのカード5枚と、最初に選ばなかった10枚のカードから5枚を選び、入れ換える。

入れ換えが完了したそれを第2戦のデッキとする。なお、この時デッキから抜いたカードは破棄され使用できなくなる。

第2戦終了後も同じ要領で5枚を入れ換える。つまり20枚全てのカードを必ず1度は使うというルールだ。

「どうされますかな?」

青葉は彼女に確認を問う。

「いいですよ、そのルールで」

「決まりやな、もう後には引けんで」

「ではまずカードリストを決めるクジですな。どちらの方が1枚お選びください」

青葉はポケットから5枚のカードを取り出し、裏側のままテーブル

に並べる。

今回は左から白・紫・緑・黄・黒色の順だ。

「選ばしたるわ、引けや」

「じゃあ…」

彼女は紫のスリーブに入ったカードを選択した。

そのままカードをめくる。

「[マシユマロン]ですな。しばしお待ちを」

店の奥の引き出しから青葉が問いかける。

「お二方、スリーブは赤と黒がごじいますがどちらになさいますか？」

「赤でお願いします」

「じゃあワイは黒で」

「かしこまりました」

青葉は村田に黒スリーブのカードの束を、彼女に赤スリーブの束を渡した。

(スリーブに傷は無いよね…念のため)

彼女は一応の確認をする。スリーブは多少なり使用されてきた形跡はあるものの、前回ほどの目立った傷は無かった。

「さて、お二方には同じ20枚のカードをお渡ししています。こちらがカードセット表でございます。各自ご確認を」

- |                |   |      |   |      |
|----------------|---|------|---|------|
| 1 マシユマロン       | 攻 | 300  | 守 | 500  |
| 2 イグザリオン・ユニバース | 攻 | 1800 | 守 | 1900 |
| 3 異次元の女戦士      | 攻 | 1500 | 守 | 1600 |
| 4 人喰い虫         | 攻 | 450  | 守 | 600  |
| 5 サイバー・ドラゴン    | 攻 | 2100 | 守 | 1600 |
| 6 魔導戦士 ブレイカー   | 攻 | 1600 | 守 | 1000 |
| 7 マイン・ゴーレム     | 攻 | 1000 | 守 | 1900 |
| 8 有翼賢者ファルコス    | 攻 | 1700 | 守 | 1200 |
| 9 髑髏顔 天道虫      | 攻 | 500  | 守 | 1500 |
| 10 アマゾネスの剣士    | 攻 | 1500 | 守 | 1600 |
| 11 魔導師の力       |   |      |   |      |

- 12 手札抹殺
- 13 太陽の書
- 14 ビッグバン・シュート
- 15 エネミーコントロール
- 16 鎖付きブーメラン
- 17 砂塵の大竜巻
- 18 リビングデッドの呼び声
- 19 奈落の落とし穴
- 20 万能地雷グレイモヤ

「おう、揃ってるで」

「こちらも大丈夫です」

お互いカードの確認を終える。

(こらまた癖のあるカードばっかやな。効果覚えてないカードもあるで)

(どう選ぼうかな…)

## 2話 #4 「優勢から劣勢」

「では、1戦目のデッキとなる10枚お選び下さいませ。制限時間は5分でございます」

青葉は机のデジタルタイマーをセットした。

(一見マシユマロンが強そうだけど、それを警戒して中々攻撃をしてこない可能性もありそう)

(それに貫通効果を持つカードが2つある。下手をすればサンドバツグ…)

(…何にしてもブレイカーはいるよね)

「5分経過致しました。お選びにならなかった10枚のカードをお預かり致します」

「それでは公平を期すために私がシャッフルをさせて頂きましょう」

彼女は青葉の気遣いに安堵する。

(ほお…この爺さん、相当の手練れか?)

村田は青葉のシャッフルを見て感心している。

「シャッフルが完了致しました。デッキを然るべき位置にセットを」

「先攻、後攻を決めます。お二方、私がコイントスを行いますので表か裏どちらかの宣言を」

「裏や」

「わたしは表で」

コインが弾かれ宙に舞う。

「コイントスの結果は…表ですな。赤スリーブの方、先攻か後攻の選択を」

「先攻で」

「お二方、デッキの上から裏側のまま3枚場に。最初の手札となりませ」

「準備が整いました。赤スリーブの方先攻で1回戦、デュエルスター

ト！」

デュエルが始まった。彼女にとっては再び人生を左右しかねない重大なデュエルだ。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「モンスターをセット」

「もう1枚セット。ターンエンド」

（まずはこれで…）

彼女手札2枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

村田手札3枚、場0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（ちよつと面倒やな）

「【異次元の女戦士】 召喚」

「どうぞ」

「異次元の女戦士で攻撃や」

「はい」【マイン・ゴーレム】裏側守備↓表側守備。村田のLP200

0-4000=1600

「異次元の女戦士の効果発動するで」

「はい」【異次元の女戦士】と【マイン・ゴーレム】除外

「カードセット。ターンエンドや」

彼女手札2枚

モンスター0枚

魔法罨セット1枚

村田手札2枚

モンスター0枚

魔法罨セット1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（伏せカードが1枚…）

「アマゾネスの剣士」 召喚」

「おう」

「【ビッグバン・シュート】を発動して装備します」

「おう」 【アマゾネスの剣士】 ATK1500↓1900

（攻撃、通れば勝ちだけど…）

「バトル、【アマゾネスの剣士】で攻撃します」

「おう」 村田のLP1600—1900—300

「…えっ」

（通った、つてことは勝ったの…？）

「デュエル終了でございます。LP2000対—1000で赤スリーブの方の勝利で1回戦決着でございます」

呆気なく、あっさりと彼女は1回戦の勝利を手にした。

「ではお二方、デッキから破棄するカードを5枚お選び下さい。制限時間は5分です」

（まだ実感は無い…でも勝ったのは事実。あと1勝）

（何を選ぶ？ 守備重視？…いや、大金がかかっている。できることなら連勝で決めたい）

（でも、慌てることもないかな。とにかく連敗だけは絶対に避けなきゃだめだから…）

（ここは、こうかな…）

（さっきのは引きがあかんかった）

（まあ、でも想定内や）

（ワイに勝てるなんて思うたら大間違いやで！）

「5分経過致しました。破棄した5枚のカードを回収致します」

「続いて1戦目開始時にお選びにならなかった10枚のカードをお返

し致します。そちらより5枚お選び下さいませ。制限時間は5分で  
す」

(もう選ぶカードは決まっとる)

(見とけ、ワイの恐ろしさ教えたるわ！)

「5分経過致しました。お選びにならなかった5枚のカードをお預か  
り致します」

お互い準備はできている。過程は1回戦の時と同じだ。

「準備が整いました。黒スリーブの方先攻で2回戦、デュエルスター  
トー！」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「モンスターセット、カードセット、ターンエンド」

村田手札2枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

彼女手札3枚、場0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札【魔導師の力】【人喰い虫】【マシユマロン】【アマゾネスの  
剣士】

「モンスターセット、カードセット…」

(まさか、ね…)

「ターンエンド」

村田手札2枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

彼女手札2枚【人喰い虫】【アマゾネスの剣士】

モンスターセット1枚【マシユマロン】  
魔法罨セット1枚【魔導師の力】

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（ほお、そっちか）

「ターンエンドや」

村田手札3枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

彼女手札2枚【人喰い虫】【アマゾネスの剣士】

モンスターセット1枚【マシユマロン】

魔法罨セット1枚【魔導師の力】

（何もせずにエンド…？）

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【万能地雷グレイモヤ】

（今は守備を固めよう）

「モンスターセット、カードセット」

「ターンエンド」

村田手札3枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

彼女手札1枚【アマゾネスの剣士】

モンスターセット2枚【マシユマロン】【人喰い虫】

魔法罨セット2枚【魔導師の力】【万能地雷グレイモヤ】

（守備固めでも無駄や）

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（よっしや来た！）

「反転召喚、【イグザリオン・ユニバース】」

「はい」

「【魔導戦士 ブレイカー】 召喚」

「はい」

(ブレイカー、まずいかも…)

「ブレイカーの効果発動や。ワイから見て右のカード破壊」

(う…グレイモヤ当てられた)

「はい…」【万能地雷グレイモヤ】破壊

「【太陽の書】発動。ワイから見て右のカード表にせえや」

(！…こっちは確か)

「…」【マシユマロン】裏側表示↓表側攻撃表示

彼女は口を閉じフィールドを見続ける。

「ハハツ、遠慮無く行くでえ」

「カードセット、ブレイカーに【ビッグバン・シュート】装備、さらに

ブレイカーに【魔導師の力】装備！」「魔導戦士 ブレイカー」ATK

1600↓3500

(攻撃力3500…!?)

「【イグザリオン・ユニバース】で【マシユマロン】に攻撃」彼女のL

P2000—1500=500

「【魔導戦士 ブレイカー】で【マシユマロン】に攻撃や！」彼女のL

P500—3200=2700

「…っ！」

「デュエル終了でございます。LP2000対—2700で黒スリー

ブの方の勝利で2回戦決着でございます」

「ではお二方、デッキから破棄するカードを5枚お選び下さい。制限

時間は5分です」

## 2話 #5 「負け分のレート」

「…すみません、トイレお借りします」

おもむろに彼女は立ち上がり、デッキと荷物を持ってトイレに向かった。

(やられた…道理で1戦目はあっさり過ぎると思った)

2回戦に負けたことで彼女は村田の思惑に気付いた。村田はわざと負けたのだ。ただ、わざと負けたというのは彼女の推察であり、初手が良ければ勝とうとしていたと言った方が正確である。

(攻撃的なデッキで削りにきた…1戦目勝ったわたしが守備に重点を置いたデッキを組むと踏んで)

(2戦目が始まる前に彼の思惑に気付くべきだった…そう来るかもしれないってことは頭によぎったのに)

(そのせいで3戦目は…)

2戦目村田が勝利したことにより3戦目までもつれることになる。それは彼女にとって不利な戦いになることを意味していた。

1戦目、村田は敗戦を見越してカードを1枚しか晒していなかった。ルール変更によって不足する情報が彼女を悩ませる。

(どう来るんだろう…さつきと同じようなデッキ?…それとも崩して別の戦法で来る?)

「う…」

(手が、震えて…)

絶対に負けられない戦いを前にして、不利な状況であることを自覚した彼女に恐怖が体を走る。

その恐怖は前回よりも強い。レートが高いということもあるが、それ以上に前回に比べて意識的にはつきりしているからである。

前回はまだ未知の部分が多く、状況に対して臆気であった。しかし今回は1度経験しているという点から前回よりも正常に近い。

そしてそれは視野が広がっていることをも意味する。

(……………)

頭の中で2戦目を思い出す。彼女は違和感を覚えていた。1戦目にあつさり勝ったという件ではなく、別件。前回と良く似た違和感。(まだ、わからないけど…ひよっとすると)

彼女はデツキを見返す。

(あと、残ってるカードは…)

(…また、綱渡りかな。できることなら、渡りたくないけれど…)

(勝つためには…賭けるしかないよね)

彼女は意を決し、戦場へと戻った。

「あ」

「おう、一週間ぶりだな」

彼女がトイレから戻ってくると黒川が村田の隣に立っていた。

(黒川さん…)

彼女は黒川に対し不信感を抱いていた。もとより、初めから信用などしていないが。

「このデュエルで勝敗が決まるんだってな、見届けさせてもらうぜ。青葉さん、中継頼んでもいいか？」

黒川は青葉にモニター中継を注文すると。近くの席に座った。

「かしこまりました。先程からこちらのデュエルをご覧になつてるお客様方。只今より天井カメラからの映像をカウンターのモニターに出力致しますので、こちらのデュエルの様子はモニターをご覧くださいませ」

周囲の客もモニターの方に視線を向ける。

「ほお、中継できるんかこの店は」

村田は感心している。というのも大体のデュエルハウスは監視カメラはあつても、このようにデュエル中継はやっていない。主に経済的な理由で。

(あと2分…)

タイマーを見て席についた彼女はデツキから破棄するカードを淀みなく選ぶ。

「なあ、お前」

選り終えた彼女に村田が話しかける。

「なんですか?」

「そのカバン、250万しか入ってないんやってな」

「…!」

「黒川が教えてくれたわ。いやあ、ようこのレートで挑んできたなあ」

(黒川さん、どうして…)

彼女は黒川の方を見るが反応は無い。

この情報は彼女にとって何ひとつ有益をもたらさない。それどころか、彼女の底が暴かれたことで彼女にとって負けられない勝負であることが露呈してしまった。

これまでの経緯から彼女は黒川が村田に肩入れしているように思えた。

(…ひとりなのは、慣れてる)

「足らん分はどう払うつもりや? あん?」

村田は高圧的な態度で問う。

「……………」

彼女は黙ったままだ。

「そうやな。1日分2万で買ったるわ。端数は負けといたる、どないや?」

「…2万?」

「言わなわからんか? その1日着たやつを差し出せっちゅーことや。100万やったら50日分や」

「それは…!」

「拒否権は無いで。手持ちが足りんかったらそれに代わる対価を差し出すんがルールやろ」

「…そう、ですね」

村田の言う通り、この世界は足りなかったでは済まされない。支払うべきものを支払って勝負というものは完了する。

「…わかりました。受けます」

「よっしゃー！やる気湧いてきたでー！」

提案が成立すると同時に5分が経過する。

「5分経過致しました。破棄した5枚のカードを回収致します」

「続いてお選びにならなかつた残りの5枚のカードをお返し致します」

カードを混ぜ、シャッフルが済み、デッキが返され

(…絶対に、負けない)

「準備が整いました。赤スリーブの方先攻で3回戦、デュエルスタート」

運命の3回戦が始まった。

## 2話 #6 「3回戦・前」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「…」

彼女は手札のカードを重ねるようにして持つ。

(…あ？まさか気付きやがったか？)

しかしすぐに手札のカードを広げた。

(何や気付いて無いんか、びびるやんけ)

(ちっ、端っこのカード見逃してもうた。まあええわ)

(お前の手札が丸わかりのワイに勝てるわけあらへんからな)

【異次元の女戦士】 召喚

(ほお、攻撃表示で召喚してきたか)

「カードをセット、ターンエンド」

彼女手札2枚

モンスター1枚 【異次元の女戦士】 攻撃表示

魔法罨セット1枚

村田手札3枚、場0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(さて、まずは軽く削ろか)

【魔導戦士 ブレイカー】 召喚

「はい」

「ブレイカーの効果発動。その伏せカード破壊や」

「はい」彼女のセットカード【リビングデッドの呼び声】破壊

(攻撃してくる…?)

「【エネミーコントロール】発動や！ブレイカーをリリースして異次元の女戦士もらうで」

「…」【異次元の女戦士】彼女場↓村田場

「異次元の女戦士で攻撃や！」

「…はい」彼女のLP2000—1500=500

「カードセットしてエンドや」【異次元の女戦士】村田場↓彼女場

彼女手札2枚

モンスター1枚 【異次元の女戦士】攻撃表示

魔法罨0枚

村田手札1枚

モンスター0枚

魔法罨セット1枚

(…痛い、1500は痛い…でも)

(まだ始まったばかり…!)

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【エネミーコントロール】

(伏せカードが怖い…ここは)

「【異次元の女戦士】を守備表示にします」【異次元の女戦士】攻撃表示  
↓守備表示

「カードをセット、ターンエンド」

彼女手札2枚

モンスター1枚 【異次元の女戦士】守備表示

魔法罨セット1枚 【エネミーコントロール】

村田手札1枚

モンスター0枚

魔法罨セット1枚

(攻撃も召喚もしてこんか。あの端のカードが気になるが)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(わずかに茶色のふちが見えるからモンスターなんかはわかる)

(…まあそれよりも見えてるサイバー・ドラゴンを召喚させんようにせんとな。こっちも今は攻められん)

「モンスターセット、ターンエンド」

(さあ来るなら来いや)

彼女手札2枚

モンスター1枚 【異次元の女戦士】守備表示

魔法罨セット1枚 【エネミーコントローラー】

村田手札1枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【魔導戦士 ブレイカー】

(ブレイカー、伏せカードを破壊できるけれど…)

(問題は裏側守備のモンスター…マシユマロンなら攻撃した瞬間負ける)

(…うん?)

彼女はふと最初の相手ターンを思い出す。

(彼はエネミーコントローラーまで使ってダメージを与えてきた)

(単なる先制パンチと考えることもできるけど、それって結構リスクキーだよね。モンスターは元の場に戻るのだから)

(別の理由があるとするなら…足止め?)

(LPが1000以下なら裏側守備のモンスターに攻撃するのは…ためらうよね)

(ということとは…)

彼女はひとしきり考えて決断を下す。

「【魔導戦士 ブレイカー】召喚」

「おう」

(通った、つてことはグレイモヤかな?)

「ブレイカーの効果発動。伏せカード破壊します」

「ああ」【万能地雷グレイモヤ】破壊

「【異次元の女戦士】を攻撃表示にします」【異次元の女戦士】守備表示  
↓攻撃表示

(…怖がっちゃだめ、進もう)

「バトル、ブレイカーで攻撃します」

村田の裏側守備モンスターが表になる。

(う…マイン・ゴーレム) 【マイン・ゴーレム】裏側守備↓守備表示  
彼女のLP500—300≡200

(だけど手はある…!)

「[エネミーコントローラー]発動、マイン・ゴーレムを攻撃表示にします」 【マイン・ゴーレム】守備表示↓攻撃表示

「異次元の女戦士でマイン・ゴーレムに攻撃します」村田のLP200  
0—500≡1500

「異次元の女戦士の効果発動します」 【異次元の女戦士】 【マイン・ゴーレム】除外

「ターンエンド」

彼女手札2枚

モンスター1枚 【魔導戦士 ブレイカー】攻撃表示

魔法罫0枚

村田手札1枚

モンスター0枚

魔法罫0枚

「ほお、まあまあやるような。おもしろいやん」

(ブレイカー引かれたんはダルいな)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(まあ何とかなるやろ)

「モンスターセット、カードセット、ターンエンド」

彼女手札2枚

モンスター1枚 【魔導戦士 ブレイカー】攻撃表示

魔法罫0枚

村田手札0枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

(また裏側守備…)

「ドロロー、スタンバイ、メイン」ドロローカード【イグザリオン・ユニバース】

(イグザリオン・ユニバース…攻めたいけれどLP200じゃ厳しい)  
(デツキはこれであと3枚、まだ引いてないのは…)

彼女はデツキを見つめる。

(…そっか、そうだとこのなら…)

「ブレイカーを守備表示にします」【魔導戦士 ブレイカー】攻撃表示  
↓守備表示

「モンスターセット、ターンエンド」

(それに、賭ける…！)

## 2話 #7 「3回戦・後」

彼女手札2枚

モンスター2枚 【魔導戦士 ブレイカー】守備表示 【イグザリオ  
ン・ユニバース】裏側守備

魔法罨0枚

村田手札0枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット1枚

（あの裏側守備はイグザリオン・ユニバースか…あの端のモンスターはほんまなんやねん。あいつの左手全然動かんやんけ）

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（イグザリオンは後々厄介になりそうやが、ここは動かん方がええな）

「カードセット、ターンエンドや」

彼女手札2枚

モンスター2枚 【魔導戦士 ブレイカー】攻撃表示 【イグザリオ  
ン・ユニバース】裏側守備

魔法罨0枚

村田手札0枚

モンスターセット1枚

魔法罨セット2枚

（…大丈夫、きつといける、落ち着いて…）

「ドロー」

（お？ 【手札抹殺】かいな）

「…スタンバイ、メイン」

「カードをセット」

（せやせや、使えんやろそれは。デッキあと2枚しか無いねんから）

彼女の額から一滴の汗が垂れ、頬を伝う

(…どうか、わたしの読みが当たっていますように)

彼女は左手に重なっている状態の手札をゆっくりと広げていく

(お!? ついに召喚するんか?)

そしてそのカードの正体が彼に露わになった。

(あん? 【髑髏顔 天道虫】? なんやそんなカード気にしとったんかワイは)

「モンスターをセット」

(あと1ターン…)

「ブレイカーを攻撃表示にします」【魔導戦士 ブレイカー】守備表示  
↓攻撃表示

「バトル、ブレイカーで裏側守備モンスターに攻撃します」

「おう」【人喰い虫】破壊

「じゃあ効果で真ん中のモンスター破壊するわ」

「…はい」【イグザリオン・ユニバース】破壊

「ターンエンド」

彼女手札1枚

モンスター2枚 【魔導戦士 ブレイカー】攻撃表示 【髑髏顔 天

道虫】裏側守備

魔法罨セット1枚

村田手札0枚

モンスター0枚

魔法罨セット2枚

(おし、ここであいつを引いたら勝ちや)

「ドロー」

(よっしゃー! きたで!)

「スタンバイ、メイン」

「【アマゾネスの剣士】召喚や」

「ほんで【鎖付きブーメラン】発動や! アマゾネスの剣士に装備するで  
! 【アマゾネスの剣士】 ATK1500 ↓ 2000

(!…)

村田はニヤニヤと笑っている

「なあ、お前アホやなあ。ワイが提案したレートで受けとけば金も失わずに済んだのになあ」

「…」

彼女は下を向き黙って聞いている。

「ワイはな、エスパイヤねん。お前のカード全部わかんねん」

「そんなはずはありません…のぞいてたんですか？」

「ハハ、さあどうやらな」

「…イカサマ」

「そりや人聞き悪いなあ。例えイカサマやとしても気付かないほうが悪いねんで」

「…そう、ですね」

「ものわかりええ子は好きやで。んじや終わらせるわな」

「アマゾネスの剣士でブレイカーに攻撃や!」

彼女は震える手でセットカードをめくり始める。

「ハハハ、それ手札抹殺やろ」

「…やっぱり『見てなかった』んですね」

「ああ?」

「罨発動!」

「!…はあ!?!」

「【鎖付きブーメラン】やて!?!」

「装備する効果のみ発動してブレイカーに装備します」【魔導戦士 ブ

レイカー】 ATK1600↓2100

【アマゾネスの剣士】破壊。効果発動。彼女のLP200—1000

100

(何でや…!?!確かに手札抹殺やったはず!)

「ターンエンドですか?」

「手札抹殺はどこいったんや!?!」

「…ターンエンドですか？」

わめく村田とは対照的に彼女は冷静な態度でもう1度問う。

「黒スリーブの方。ターンエンドでよろしいでしょうか？」

審判としてデュエルを進行するため、青葉も村田に問う。

もう村田には打つ手が無い。

「…くそっ…エンドや！」

彼女手札1枚

モンスター2枚 【魔導戦士 ブレイカー】攻撃表示 【髑髏顔 天

道虫】裏側守備

魔法罨1枚 【鎖付きブーメラン】

村田手札0枚

モンスター0枚

魔法罨セット1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード【魔導師の力】

「【魔導師の力】発動。ブレイカーに装備します」「【魔導戦士 ブレイカー】ATK2100↓3100

「【髑髏顔 天道虫】反転召喚」

「バトル、天道虫で攻撃します」村田のLP1500→500||1000

0  
「ブレイカーで攻撃します」村田のLP1000→3100||2100

一瞬の静寂に場が包まれた後

「わたしの、勝ちです…！」

彼女は震える声で勝利宣言をした。目元から溢れる滴を指で拭う。

「デュエル終了でございます。LP100対→2100で赤スリーブ  
の方の勝利で3回戦決着でございます」

周囲から歓声があがる。前回よりも居合わせた人が多い分、歓声も大きい。

「同時にマッチ戦も決着でございます。2勝1敗でマッチ勝者は…赤スリーブの方でございます！」

「くそ！何でや！お前何をしたんや!?!」

「……………」

彼女は無反応だ。

「無視かワレ!?!」

村田はテーブルを思いっきりバンツと叩く

その音に彼女はびくっとし、村田の顔を見る。

「…何かをしたとしても、同じことです」

「ああ!?!」

「…気付かない方が悪いんでしょう?」

「ぐ…てめえ!」

「まあまあ社長、ここは抑えて」

黒川が村田を宥めにかかる。

「黒川！話が違うやんけ!」

「いえ、話した通りですよ。ただこの結果は私にとっても想定外でしたが」

「くそつ、今日は最悪や!」

「社長、気持ちはお察ししますがどうか気を取り直してください。特別に近々また女の子紹介しますんで」

「…ほんまか？次は頼むで!?!」

「任せといてください」

黒川の一言で村田の怒りが治まった。

「それでは清算致します。レートは6000の7500、マッチ30000ですな」

青葉は慣れた手付きで入力していく。

「1回戦、赤スリーブの方+201万」

「2回戦、黒スリーブの方＋357万」

「3回戦、赤スリーブの方＋207万」

「そしてマッチ勝者である赤スリーブの方に＋300万」

「しめて351万、赤スリーブの方の勝ちですな。赤スリーブの方、おめでとうございます。これにて勝負は終了でございます。不肖、私青葉が審判兼進行役を務めさせていただきますました」

青葉は一礼するとカウンターに戻っていった。

## 2話 #8 「狙い通りに」

「黒川、悪いんやけど立て替えとってもらえんか？近いうちに振り込んどくからさ」

「構いませんよ。ではこちらにご記入を」

黒川はビジネスバッグから封筒を取り出し、その中にある借用書を村田の前に置く。

次にスーツの内ポケットから札束を取り出し彼女の前に置く。

（…また、札束…）

そしてさらに財布から1万円取り出し彼女の前に置く。

「ほら受け取れ、351万だ」

「…いいの？」

「いいも何も、お前は勝ったんだ。受け取れ」

彼女はまだいまいち実感が湧いていない様子だ。

半ば固まってる彼女をよそに、記入し終わった村田が席を立つ。

「社長、どこへ行かれるんです？」

「会社に戻るわ。やり残したことがあってな」

黒川の問いに村田は淡々と答える。

「おい、鈴瀬」

村田は店の扉に手をかけ出ようとする寸前、彼女に背を向けたまま名を呼ぶ。

「何ででしょうか？」

「ワイを負かせたこと忘れんからな。…またデュエルしてくれや」

村田はそう言い残し去って行った。

村田が去った後、彼女の周りに観戦していた客がぞろぞろと歩み寄る。

「すごいねえ。本当すごい」

「おじさん君に惚れたよ」

「この子前もすごかったで」

「せがれの嫁になってもらえんか？」

「おめえのせがれにはもつたいねえ」

客同士が彼女の周りで盛り上がる。

「あ、ありがとうございます…」

「はいはい、デュエルは終わりましたよ。離れて下さい」

店員が客に対し、彼女から離れるように促す。

「えー固いこと言うなよー」

「駄目です。ここはそういう店じゃありません」

「君も片づけて帰りなさい。そのスーツの人と一緒に」

店員は黒川に目を向ける。

「だとき、どうする？」

黒川は彼女に問う。

「…はい、帰ります。そのスーツの人と一緒に」

黒川は思わずフツと苦笑いを浮かべた。

「でも少し時間ください」

彼女は荷物をまとめ席を立つと青葉のいるカウンターへと向かった。

「あの、青葉さん。審判ありがとうございます。それと…」

「何ですか？」

「これ、前に支払い忘れてたスリーブ代です」

彼女は青葉に一万円札を差し出す。

「ふむ、そんなこともありましたな」

しかし青葉は受け取ろうとしない。

「あの…」

「財布にお仕舞いなさい、お嬢さん。既に貴女から代金は頂いております」

「えっ…？ どういうこと？」

彼女は記憶を掘り返すが、それらしきことをした覚えは無い。

「簡単なことだ、青葉さんも一人の客としてデュエルを見てたつてことき。特等席でな」

「…」

彼女は数秒考え黒川の言葉を理解する。

(青葉さん…)

口に出すのは違うような気がしたので

(ありがとうございます)

心の中でお礼を述べた。

「じゃあ青葉さん、また来るぜ」

「ふむ、お気を付けて」

黒川は店を出る。

彼女も黒川と一緒に店を出ようとするが、入口付近で立ち止まって振り返る。

(青葉さん、いつかきちんとお礼します)

そして青葉に向かって一礼をしてから店を出た。

先週と同じく彼女は黒川の後ろをついて行くように歩く。

「前と同じ所でいいか?」

「あ、うん…」

彼女は考え事をしながら気の抜けたような返事をする。もちろん考え事とは黒川のことだ。彼女には色々問いたいことがあった。

「話は店に着いてから聞こう。俺もお前に話したいことがあるんな」

黒川も彼女に話があるようだ。

〈駅前ファミレス〉

「お待ちせしました。コーヒーとミートソーススパゲティセットです。ごゆっくりどうぞ」

「おう、ありがとう」

「…いただきます」

注文した品が運ばれ彼女は食事にありついた。

「…ねえ、いつもそんな大金持ち歩いてるの？」

彼女が思い出したように質問する。

「いつもってわけじゃねえ。必要な分だけ持ち歩いてるだけだ」

(必要な分…)

彼女はこの言葉を聞いて自らの考えを黒川に話し始めた。

「…黒川さんの思惑通り、物事が進んだってことですか？」

「ほう、何故そう思うんだ？」

「彼に提示されたレートは低かった。黒川さんもそういうレートを彼が提示するのを知ってたはず。しかし黒川さんは少し上かもと言った」

「わたしが札束を見せると彼の態度が変わって100倍なら受けてもいいと言った。そうなることも黒川さんは知っていた」

「彼にわたしの情報を与えて、彼の道楽の相手としてわたしを向かわせた」

「でもわたしの所持金とか一部の情報は彼に与えなかった。彼がレートを上げるように、わたしが勝負を受けるように」

「黒川さんはこのような結果になることを望んでいた。…どう？」

「悪くない推理だな。だがお前が勝つことを望んでた証拠が無いぞ？」

黒川は彼女を試すように問う。

「それは2戦目終了時、黒川さんは彼にわたしの所持金を教えたよね」  
「あの時わたしは、わたしを動揺させ彼を優位にさせるために教えたのかと思った」

「でもそれは違った。教えた理由は彼を油断させるため。証拠にはなっていないかもしれないけど…」

「まあな。それじゃ憶測の域を出ない」

「だがお前が言った通りだ。俺はお前が勝つことを望んでいた」

「あの社長は最近天狗になってたからな。ちよつとばかりお灸をすえる必要があった」

黒川曰く、村田は黒川に若い女を紹介して欲しいと頼まれ、都合がつく女がいればその地域の特定のデュエルハウスへと村田を向かわせた。

村田はその対戦相手の女に対しレートを設け、着用していた衣服を要求し、相手が拒否すれば地位や金銭をちらつかせつつ、黒川の名を出しては勝負の席につかせた。

言うまでもないが黒川は村田や勝負のことを教え、相手となる女の同意を得て村田に紹介している。

「実は一度、社長との高レート勝負をした女がいてな」

2カ月前、今日と同じような流れで勝負をした女がいた。黒川はその時に多額の現金を見せれば村田は高レートの勝負を受けることを知る。

結果は村田の200万勝ち。黒川もこの件についてはあまり語らず

「まあ、今も無事に生きているとだけ言っておく」

そう言い口を閉じた。

「わたしに彼のことや勝負のことを教えなかったのはどうして？」

「その方が自然な形で高レート勝負になると思ったからさ。それにお前が知らなかったことで少しではあるが気が緩んだはずだ」

「…なるほど」

「社長は容姿端麗な若い女としかデュエルをしないからな」

黒川は呆れたように言う。

「俺の知る限りじゃ勝てるのはお前しかいなかった」

勝負できる条件を満たしてる人はそれなりに居るが、その中で村田に勝てる見込みがある人はかなり少ない。何故なら…

「…小型カメラ？」

「ああ。デュエルを見る限り気付いていたようだが」

村田はあらかじめ設置した小型カメラを通して彼女の手札を覗いていた。出力先はテーブルの下の彼女からは見えない死角。

村田はこのイカサマを使ったデュエルでは1度も負けたことが無

かった。故に少なからず慢心もあった。結果的にはそれも初の敗北に繋がったと言える。

「…何らかの方法で覗かれてると思ってた。迷い無く攻撃してくるっていうことは、たぶんそういうことなんじゃないかって」

「俺は3戦目しか見てないからわからんが、前と同じような流れで気付いたってことか」

「うん」

黒川はコーヒーを啜り一息つく。

## 2話 #9 「締結というには緩いかも」

「しかし、よくあんなことしたな。思っても普通は出来ねえよ」  
「わたしもそう思う…どうしてできたんだろう」

彼女はトイレの中で3戦目の戦略を考えていた、手札を覗かれてるという前提で。

3戦目、彼女は『手札の左端のカードを左端から2枚目のカードでほとんど覆い隠すような形』を維持し続けた。後々これが効いてくると信じながら。

「端のカードは私も見なかったからわからなかった。わかるのはモンスターってことだけ」

「間違っても彼に見られるわけにはいかなかった」

左端のカードがモンスター、さらに左端のカードを隠すカードがサイバー・ドラゴンというのも彼女にとっては良かった。

前者はカードの種類が多く、後者はモンスターゾーンを若干ではあるが操作できるためだ。

実質2枚分のディスプレイアドバンテージを背負いながらも彼女はターンを凌いでいった。

そして、彼女の戦略が功を奏する。

残りデッキ3枚で迎えた彼女のターン、彼女は行動に出た。

「お前がした『イカサマ』、中継見てた奴は大体気付いてたな。社長が何の反応も示さないことに首を傾げてた奴もいたぜ」

黒川は笑みを浮かべる。村田が何の反応も示さないのは当然だ。

村田は気付いてなかった。彼女が気付かせなかった。

このターン、彼女はカードをセットした直後、『デッキ』と『魔法罫ゾーンにセットしたそのカード』を入れ替えた。

それと同時に、手札の端のカードをゆっくり広げて見せながら。

彼女は左手で村田の視線を釘付けにさせてる間、右手で勝利への布石を打った。

「フィールドを見られてたら終わりだった。気付かれなくて本当に良かった…」

彼女は思い出しながら安堵の表情を見せる。

「入れ替えはずっと狙ってたのか？」

「狙ってたわけじゃなかった。ただ条件が揃えばしようかな、って」

「条件？」

「ターン開始時に、デッキの残りが2枚か3枚、その内の1枚が鎖付きブーメラン、そしてそれ以外のカードが魔法カード、この3つが揃った場合。あと、相手の状況も」

「ああ、そりや厳しいな」

しかし運が彼女に味方したのか、その厳しい条件は満たされ、彼女は実行に移した。

(ん？待てよ？)

黒川がふとあることに気付く。

「あの時デッキは3枚だったはずだ。入れ替えたのなら伏せた所のカードが2枚にならねえか？」

「うん、だから『ドロースする時2枚』引いた」

「…ほう、涼しい顔して大胆なことしやがる。それでそのまま重ねた2枚を伏せて入れ替えたってことか」

黒川は一瞬驚いた後感心しながら答える。

「2枚目が鎖付きブーメランじゃなくて良かったな」  
「うん」

「だがデッキの一番下が鎖付きブーメランとは限らねえんじゃないやねえか？」

「2枚ドロースする時、1枚目もほんの少しずらして見た」

「へっ、ちゃっかりしてんな」

2枚目が手札抹殺というのは彼女にとっては幸運だった。次に引くカードは言うまでもないだろう。

終わってみれば綱渡り、薄い確率の綱を渡りきったの勝ち。虚を突けたのも偶然に近い。

(先週といい今日といい危な過ぎる。少しでも運が悪けりやあつさり

負けてた、そうなりや不意打ちも糞もねえ)

(頭脳と精神力は確かに並外れている。高校生の娘つてところも考慮すればこれ以上の素材は無いってくらいだ)

(だが裏世界の老獪な猛者共とやり合うにはまだまだ足りねえ。まあ、15歳のガキに奴等と同じレベルを求めるのは酷か)

(経験を積みめばいずれ実力差も埋まるだろうが、それよりまだ発展途上なこの才能の塊、簡単に潰すわけにはいかねえ。が、放って置くのももったいねえ)

「なあ鈴瀬、俺と組まねえか?」

黒川は彼女に提案する。

「組むと言っても大したことはしねえ。俺は今回のようにお前に斡旋する。お前はそこに行つてデュエルするだけでいい」

「…」

彼女は黙って聞いている。

「しばらくは負けても比較的問題無い相手を紹介するつもりさ。もちろん詳細も話す。時間が無かったり気に入らなければその段階で拒否してくれればいい」

「深く考えず割のいいバイトだと思つてくれ。金が増えるか減るかはお前次第だな」

「…」

彼女は考える。

(黒川さんの言葉がどこまで本当かわからないけど…)

しかし既に答えは出ているのだ。今日の昼に、屋上で彼女が取った行動がそれである。

「…はい、選択権がわたしにあるというのなら」

「そうか、まあこっちでも厳選はするが無理だったら遠慮なく言つてくれ」

「うん…」

かくして、ここに1つのペアが誕生した。  
繋がり薄い、これも1つのタッグの形であろう。

「あの、黒川さん」

「ん？どうした？質問があれば何でも言ってくれ」

（警戒してるのか？まあ過程がこれだから無理もねえが…）

「…プリンも食べたい」

「あ？…ああ、遠慮せず頼めよ」

張り詰めた空気が心なしか緩む。警戒しているのではなく、食後のデザートのことを考えていたようだ。

黒川はプリンを美味しそうに頬張る彼女を見つめる。

（こうして見ると普通の高校生のガキだな。…こいつも年相応にお洒落だの恋愛だの興味あるんだろうか）

黒川はほんの少しの罪悪感と後ろめたさのようなものを覚える。

「…？」

彼女は自分を見つめる黒川の視線に疑問を抱く。

「ああ、何でもねえ。気にせず食ってくれ」

（まあ、俺が考えることじゃねえわな）

その後、食事を終えた二人は店を出た。

〈駅の改札〉

「組むと言った矢先にあれだが、しばらく相手は見つからんと思う。勝負勘が鈍らない程度にはデュエルしといてくれ」

「わかった。おごってくれて、ありがとう」

「礼には及ばねえ。気を付けて帰れよ」

彼女は改札をくぐり、電車に乗った。

（可憐なる博徒よ）

(どこまで行けるか見届けさせてもらおうぜ)  
黒川は夜の街へと消えて行った。  
異彩を放つ1つのカードを手にして。

【第2話 終】

### 3話 #1 「再び夜が明けて」

1111午前9時

彼女は目を覚ます。

かばんに入ったままの札束が昨日の出来事を思い出させる。  
あその後、シャワーを浴びてすぐ眠ってしまったようだ。

(学校…あ、今日は土曜日か)

座ったままうーん、と体を伸ばす。

(…デジャヴ)

先週と同じ流れになっている。だとするとこの次は

(…朝ごはん食べよ)

1111午前10時

食事を終えた彼女はベッドに腰掛け、ぼーっと天井を見上げる。  
特に今日の予定は無い。

(…なんか、落ち着かない)

お金が入ったかばんに目を移す。

中にはおよそ600万、高校生が持つには大き過ぎる金額だ。

(どうしようかな、銀行に預けるわけにもいかないし…)

彼女は少し考え

(気にしないことにしよう)

考えないようにした。

(この列の3つのマスに4、5、8が入るから…)

(同じ行のこのマスの候補から7が消えて…)

(…解けた)

特に今日の予定も無い彼女は、趣味であるパズルを解いていた。

彼女曰く、パズルが解けた瞬間のそれはデュエルに勝利した瞬間の  
それと良く似ているらしい。

(難易度7、自己ベスト更新)

――午前11時

彼女にメールが着信する。

from綾芽

「あの、今日13時から図書館で一緒に勉強しませんか？」

to麗梨

「いいよ」

from綾芽

「良かったです。入口で待ってます」

to麗梨

「うん」

友人の綾芽と図書館で一緒に勉強する約束をした。

小松綾芽（コマツ アヤメ）。彼女の同級生。

クラス委員長を務めているいわゆる真面目な優等生タイプの子。  
並外れた頭脳を持つ彼女を尊敬している。

――午後1時

「綾芽」

彼女は図書館の入口近くに居る綾芽に声をかけた。

「あつ、こんにちは麗梨さん」

「こんにちは」

「今日は宜しくお願いします」

「かしまらないで。入ろ」

「はいー」

〈〈市立図書館〉〉

「うーん…」

勉強中の綾芽が唸る。

「どうしたの」

「サイコロを4回振って一度も1の目が出ない確率ってどう求めるの

？」

「1以外の目が4回連続で出ると考えて」  
本を読みながら彼女が答える。

「あ、そっか！ありがとうございます」

「どういたしまして」

「ところで麗梨さん、何読んでるの？」

ふと一息ついた綾芽が彼女に問う。

「デュエルの本」

「デュエルって、麗梨さんもデュエルするんだ」

「うん」

「近いうちに私とデュエルしませんか？」

「いいよ」

(麗梨さん、どんなデュエルをするんだろう)

「ありがとうございます。楽しみが増えました」

綾芽は上機嫌で勉強を再開した。

――午後6時

「今日は勉強に付き合ってくれてありがとうございます」

図書館の入口そばで綾芽はお礼を述べた。

「こちらこそ。わたしも色々学べた」

「じゃあまた学校で…あ」

去ろうとした綾芽が思い出したように立ち止まる。

「私デツキ持ち歩くようにするので、いつでもお願いします！」

「うん、わかった。ばいばい」

綾芽と別れ彼女は帰路についた。

〈デュエルハウス「黒蠍」〉

「珍しいですな」

青葉がグラスを拭きながらカウンターの長テーブル越しの客に呟く。

「ここ黒蠍は土曜の夜のみバーとしても営業している。

「俺だつて酒を飲むことくらいはあるさ」

カウンターに座ってる客、黒川は酒を飲みながら答える。

「お嬢さんのことですか？」

「やっぱりお見通しつてわけか」

黒川は敵わないといった表情で苦笑いを浮かべる。

「あいつは大物になるさ。いずれは…到達しちまうだろうな。問題はそれまでどうするかだ」

「ほう」

黒川は考え込みながら話を続ける。

「頭脳と精神力はもちろん、あの容姿にあの性格ときた。カリスマ性というか神秘性というか、人を惹きつける魅力が凄まじい」

「故に寄つてたかつてくる。そしてそいつらはいつをデュエリストではなく金や女として見る。実力が認められるまでは色物扱いは避けられんだろう」

「狭いこの世界だ、あいつの噂はすぐに広まる。そうなると手段を選ばずあいつを手に入れようと奴が必ず出てくる」

「拉致監禁の類い、いやそれ以上の脅威からあいつを守り切れるかどうか…無事高校を卒業させてやれるかどうか」

酒の影響か黒川の声は弱気だ。

「貴方も魅せられた一人のようですな」

「…そうかもな」

「最初からそうするおつもりだったのでしょうか？」

「はは、青葉さんにはかなわねえなあ…」

「偶然ここに来て、偶然居合わせて、偶然高レートの勝負になって勝つた。流石に無えよな」

黒川は酒を流し込む。

「引きずり込んだ責任は取る。面倒も見るさ。出来る限りのことはし

「やる」

「何故そこまで肩入れするのです？」

「∴知っちゃまったから、だろうな」

### 3話 #2 「突入します」

――月曜日、午前8時

支度を済ませ、彼女は玄関へと向かう。

(あ、デツキ)

靴を履く寸前、綾芽に言われたことを思い出す。

(わたしも、持ち歩き)

デツキを制服のふところに入れ玄関へと向かおうとする。

(……)

が、一旦立ち止まる。

彼女は異様な存在感を放つかばんを無視できなかった。

かばんの中から札束を1束取り出し、通学用のかばんにそっと忍ばせる。

(何してんだろ、わたし。土曜はあまり気にならなかったのに……)

苦労と努力の末に手に入れたものではなく、たった2回の勝負で手にした高校生には不相応な大金。

目の前にあるはずなのに、自分のお金だというのに、どこか遠い。

土曜日の時はその遠さが薄かったただけなのかもしれない。

(…行こう。残りはお留守番)

流石に全部持つていく気にはならなかったようだ。

――昼休み

「綾芽、放課後空いてる?」

彼女は綾芽に声をかける。

「はい、空いています。もしかして…!?!」

「うん、デュエルしよ」

「はい!」

綾芽は元気良く返事をした。

――午後4時、放課後

「すみません、委員会の仕事なのに手伝って頂いて…」

「気にしないで。二人の方が早く片付くでしょ」  
彼女と綾芽は資料を持って廊下を歩いていった。

(麗梨さんは優しく気が付いてすごいなあ…)  
あとは資料を準備室に持っていけば委員会の仕事は終わりだ。

(あれ?何だろう)

準備室のある廊下に出ると、2人の男子生徒が準備室前に立っていた。

「あの、すみません。そちらの部屋に資料を片付けに来たのですが…」  
綾芽は男子生徒に話しかける。

「あ?後にしろ」

男子生徒はそっけ無く返すと何事も無かったかのように、準備室前をふさぐように立ち続ける。

(…)

「委員会の仕事なので、どいてもらえませんか?」

困る綾芽を傍目に彼女が男子生徒に寄る。

「だから後にしろっつってんだろ!」

「お前3年にそんな口きいて良いと思ってんのか?」

2人の男子生徒が彼女をにらみつける。

彼女も表情を変えず目を見る。

「れ、麗梨さん、また後で来ようよ…」

綾芽は怯えながら小声で伝える。

(入れない理由が気になるけど、今は…引こう)

「…わかりました、また後で来ます。行く」

彼女と綾芽は男子生徒を横目に廊下を歩いた。

(…!)

準備室を通り過ぎる瞬間、扉のガラス越しにある人物の顔が映る。

一瞬だけだったが、彼女はそれを見逃さなかった。

(瑞希…!?)

しかし足を緩めることなくそのまま通り過ぎる。

「…麗梨さん？」

廊下を進み曲がった直後、彼女は立ち止まる。

「綾芽、中見た？」

「中ですか？」

「準備室」

「いえ、見てません」

「…瑞希がいた」

「瑞希、つて中根さん？」

「うん。…泣きそうな顔をしてた。嫌な予感がする」

「えっと…」

綾芽は少し戸惑っている。

「綾芽。協力して欲しい」

綾芽は廊下を曲がってすぐの場所に待機しながら先ほどの会話を思い出す。

『職員室で鍵貰ってくる。わたしが合図したらあの2人の気を引いて。その間に反対方向から走って開ける』

『ちよ、ちよと待って下さい。そんなの危険です…！もし入れたとしてもどうなるか、一応先生呼んだ方が…』

『先生を呼んだら有耶無耶になっちゃう可能性がある。危険なのは承知の上。…お願い』

彼女の真剣な顔を見て綾芽も覚悟を決めた。

『…わかりました。麗梨さん、協力します』

『ありがとう。大丈夫、危なくなっても綾芽はわたしが守る』

彼女はそう言っつて職員室へと走って行った。

(そろそろ合図が来るかな、メールで伝えるとは聞いたけど…)

(…麗梨さん以外のお願いなら、私断ってたのかな)

綾芽は『わたしが守る』という言葉を思い出す。

(守るなんて言われたの初めてだったな…)

彼女の言葉を思い返したその直後、合図が送られてくる。

(来た…！)

f r o m 麗梨

「いつでもいいよ」

携帯電話をポケットに入れ、資料を両手に乗せる。

(…怖いけど、麗梨さんのために！)

綾芽は意を決し準備室へと歩き出した。

「おい、あの2人また来たぞ」

「あ？おいおい後でとか言いながら全然時間経ってねえじゃねえか」

準備室の前で男子生徒は自分たちの方へと向かってくる綾芽を見る。

綾芽の足取りはどこか不安定だ。まさに今にも転びそうな。

「あっ」

綾芽の両手に乗っている資料の一部が手からこぼれ落ちる。

それと同時に綾芽は派手に前のめりに転んだ。

「いったーい!!」

資料が宙に舞い、綾芽のかけてた眼鏡が前へと飛ばされる

「ぶっ、だっせー」

男子生徒の1人が派手に転ぶ様を見て笑う。

「め、眼鏡どこー!」

綾芽は眼鏡を掴もうとするが、その手は何度も情けなく空中を踊る。

「…前だよーもうちよつと前の右。違うーまだ前!」

もう1人の男子生徒が呆れながらも誘導する。

しかし手は変わらず何度も空振り、眼鏡が全く掴めそうにない。

「あーもう!」

誘導していた男子生徒が見かねて眼鏡を拾いに行く。

「ハハハ、どんだけ目が悪いんだよ」

もう1人の男子生徒がその光景を見て笑いながら男子生徒の方へと近寄った。

(麗梨さん、今です！)

その瞬間、廊下の反対側から彼女が準備室目がけて疾走する。

「！……なっ！……てめえ！」

男子生徒は彼女に気付くも時既に遅し。彼女は迅速に扉の鍵穴に鍵を挿入すると同時に開錠し、準備室へ突入した。

### 3話 #3 「割と強気」

扉を開けた彼女へと一斉に視線が向けられる。

「何だお前？」

「おいおい見張りは何してんだ？」

彼女は部屋を見渡す。

(男子生徒が5人。先生はいない、そして…)

「れ、れーりちゃん：!？」

「瑞希…」

瑞希は目元に涙を溜めていた。

「こいつ誰だ？1年か？」

「あ、俺知ってる。1年の鈴瀬だろ？1年にすげーかわいい子がいるって話題になってたあれ」

「あーそんなこともあったな」

「…」

彼女は答えない。

数秒後、2人の男子生徒が慌てて入室する。

「す、すまん！不意を突かれた」

「おいコラー！どういうつもりだ！」

男子生徒は入室するなり彼女に詰め寄る。

「やめろ」

準備室の奥にいる1人の男子生徒が落ち着いた声で詰め寄った男子生徒を止める。

「赤石（アカイシ）、でもよ…！」

「いいからそいつから離れろ」

「…ちっ！」

男子生徒は彼女から離れた。

「麗梨さん！」

遅れて綾芽も慌てて入室する。

「何だ？仲間もいたのか」

「この女に気を取られてたんだよこいつ」

「お前もだろー!」

「騒ぐな、静かにしろ」

赤石と呼ばれた男子生徒が静止を促した。

「ここに来るってことは相応の理由があるってことだ」

赤石は彼女の目を見て言う。

「…この子、瑞希はわたしの大切な友達。瑞希に何したの?」

「見ての通りデュエルしてただけだ。それ以外は何もしてねえよ」

「デュエル?」

「ああ」

赤石は彼女にここまでの経緯を話した。

彼女のクラスではいじめが起きていた。主犯格は杉野（スギノ）という男子生徒。

クラスメイトの大半はいじめの矛先が自分に向くことを恐れ見て見ぬふりをしていた。

しかし反抗する者もいた。瑞希は数少ないその内の1人だ。

瑞希は杉野に対していじめをやめるように何度も注意した。

杉野は瑞希を鬱陶しく感じていたが、女子生徒であるということから手を出さず無視していた。昨日までは

――放課後

「おい、中根」

杉野が瑞希を呼ぶ。

「何?」

「お前よくここまで俺に楯突いてくるよな。飽きねえのか?」

「あなたがくっついたらないいじめをやめないからでしょ!」

「…やめてやってもいいぜ」

「えっ?」

思わぬ発言に瑞希はきよんとする。

「やめてやってもいいが条件がある。今から準備室に行け」  
「…どういうこと？意味わかんない。何か企んでるの？」

「行けばわかる。まあ、別に行かなくてもいいぜ？その方が俺もいつも通りにやれるし」

杉野は余裕を見せる。

（あからさまに怪しい。けど、いじめをやめるというのなら…!）

「…わかったわ。行けばいいんでしょ。ちゃんと約束守ってよね!」  
「ああ」

瑞希は準備室へと向かう。

（へッ、あいつには一度痛い目を見てもらわんとな）

杉野は瑞希の後姿を見ながらにやりとした表情を浮かべた。

「よう、お前が中根か？」

椅子に座った男子生徒が入室した瑞希に話しかける。

（この人たち、上級生？）

「…そうだけど？」

「おっと、お前1年だろ？3年の俺らには敬語使って欲しいよなあ？」

準備室には男子生徒が7人。全て3年生だ。

「杉野から話は聞いてるぜ？俺は北林（キタバヤシ）っていうんだ。まあ座れや」

瑞希は無言で椅子に座る。話しかけた男子生徒、北林とは机を挟んで丁度対面の位置だ。

「まさか本当に来るとは、正義感の強い子だねえ。俺そういう子大好き」

（何これ…よくわかんないけど、こういう言い方する人、私は嫌い!）

「そういうのはいいですから早く本題に入って下さい。時間の無駄です」

瑞希は毅然とした態度で返す。

「なあ、今の状況わかってる？男7人に女1人だよ？あんまり機嫌損ねない方がいいよ?」

北林が呆れたような表情で問う。

「言つとくが何もしねえつて思つてるなら…それは大間違いだからな？」

別の男子生徒の1人が瑞希の顔に近付き威圧する。

(お、脅しには屈しないんだから！)

瑞希は表情を変えまいと堪える。

「…まあいい、本題に入る」

「俺との勝負に勝ったら杉野にはこれから先大人しくするように言つてやるよ」

「だがもし負けたら…今日1日俺らに従つてもらおうか」

北林から条件が提示される。

「従う？」

「言葉通りさ。どんな命令でも従つてもらおう」

男子生徒たちはニヤニヤと笑みを浮かべている。

### 3話 #4 「勢いよく」

(！……そ、それって！)

「い、嫌よ！ふざけないで下さい！そんな勝負受けられるわけないじゃないですか！」

「ほーん、やっぱり自分の身がかわいいのか」

「な……」

「所詮お前の正義感はその程度のものだったってことか。まあそんなもんだよなハハハ」

北林は瑞希を煽っていく。

瑞希もこれが挑発の一種だと理解しているが…

「…違う。そんなことない！」

抑えられない。自らの正義感と負けず嫌いな性格が逃走を許さなかった。

「いいわ！その勝負受けてやるわよ！」

男子生徒たちはしめしめと笑みを浮かべている。

ただ1人、赤石を除いて。

「よく言った、じゃあ」

「待って！」

瑞希は北林の話を遮る。

「私が勝ったらちゃんと約束は守るんでしょうね？」

「ああもちろんだ。お前こそ守るんだろうな？」

「あ、当たり前でしょ！」

瑞希は半ば怒り気味に答える。

「安心しろ。どういう結果になろうが約束は果たす。だから勝負に集中しろ」

赤石が瑞希を顔を捉えてゆつくりと口を開く。静かだが力強いその言葉で場が引き締まった。

その空気を察した瑞希は約束を反故にされるという心配が消えると同時に、この場にいる人間の中で赤石が一番上だと悟った。

「…それで、勝負って何するんですか？」

「デュエルさ」

北林はカードの束を机の上に出す。

(デュエル…！)

「できるんだろ？お前がデュエルしてるとこ何度か見たって杉野が言ってたぜ」

「まあ、ルールは知ってます」

「そうか。ただ今からやるのはちよつとルールが変則だな」

北林はそう言うと、机に出したカードの束を横へと流しながら広げる。

「使用するカードはモンスター10枚、罠10枚の計20枚。これをお互い10枚ずつに分けて、それをデッキにしてデュエルをする。5分やるからしつかり確認して覚えな」

北林は携帯電話を取り出しタイマーを起動した。

瑞希はカードを手元に手繰り寄せて確認する。

くカード一覧く

《雷仙人》

《デス・ウオンバット》

《逆ギレパンダ》

《ゴブリン突撃部隊》

《機動砦のギア・ゴーレム》

《人喰い虫》

《ステルスバード》

《チェミナイ・エルフ》

《ランス・リンドブルム》

《ランス・リンドブルム》

《聖なるバリア —ミラーフォース—》

《仕込みマシンガン》

《停戦協定》

《邪神の大災害》

《ドレインシールド》

《魔法の筒》

《ギフトカード》

《万能地雷グレイモヤ》

《炸裂装甲》

《炸裂装甲》

(5分か：覚えられるかな)

(魔法カードが無いのが気になる。何か理由があつたりする?)

瑞希が疑問を抱き始めた時、北林が口を開く。

「まあ基本的にはスピードデュエルと同じだ。が、いくつか追加ルールがある」

「追加ルール?」

北林は瑞希に追加ルールを説明した。まとめると、以下の通りだ。

初期LPはスタンダードデュエルと同じく8000。

攻撃宣言する度に500LPを支払う。

罠カードを発動する度に500LPを支払う。

罠カードは相手の攻撃宣言時のみ発動できる。

この支払うLPというのは当然コストであり、500LP以下の状況ではどちらも行えなくなる。

フリーチェーンの罠も同じように相手の攻撃宣言時のみ発動可能だ。

「俺らはこのルールのデュエルを『度胸試し』と呼んでいる」

「度胸試し、ね」

「…ってどうかこのタイミングでルール説明しないで下さい!せっかく覚えてるんだから!」

瑞希は不平をぶつける。

「そんならいすぐ覚えれるだろうが。ほらあと30秒」

「うそ!?!」

「本当」

瑞希は慌てて何度もカードを見返す。

そして、

ピピピピッと5分経過のアラームが鳴り響いた。

「ほれ、カードを寄越せ」

(うー微妙に覚えきれてない…)

北林は瑞希からカードの束を受け取ると、モンスターと罠を分け別々の束にする。

「まずお互いのデッキ構成がモンスター5枚、罠5枚のデッキになるように分ける」

「俺はモンスターをシャッフルするからお前は罠をシャッフルしろ。シャッフルが終わったら裏のまま5枚ずつ振り分けてまたシャッフルだ。それがデッキになる」

瑞希は北林に言われた手順をこなし、モンスターと罠が混ざった束、すなわちデッキを1つ選ぶ。

「先攻後攻を決める」

じゃんけんの結果、先攻は北林。

「じゃあ始めるか」

(さあ、お楽しみ時間だ)

(ぜったい勝つ！)

瑞希にとって負けられないデュエルが始まった。

### 3話 #5 「見張りが2人の意味」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「《ゴブリン突撃部隊》召喚」

「カードセット、もう1枚セット、エンド」

北林手札1枚 LP8000

モンスター 1枚 《ゴブリン突撃部隊》表攻

魔法罫 セット2枚

瑞希手札3枚 LP8000

モンスター 0枚

魔法罫 0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

瑞希の手札《ステルスバード》《デス・ウオンバット》《仕込みマシンガン》《停戦協定》

（うー守れる罫が無い…とりあえず伏せよう）

「カードセット、もう1枚セット」

（次のターン、ゴブリン突撃部隊に破壊されるならデス・ウオンバットを伏せた方がいいかな？ステルスバードは何か勿体ない気も）

（いや、ちがう。攻撃力のあるデス・ウオンバットは温存した方がいいかも。ここは）

「モンスターセット」

（伏せカードを警戒して攻撃してこなければ儲けものだしね）

「エンドです」

北林手札1枚 LP8000

モンスター 1枚 《ゴブリン突撃部隊》表攻

魔法罫 セット2枚

瑞希手札1枚 《デス・ウオンバット》LP8000

モンスター セット1枚 《ステルスバード》裏守

魔法罫 セット2枚 《仕込みマシンガン》《停戦協定》

「ドロー、スタンバイ、メイン」

メインフェイズに入ると北林は瑞希の後ろにある入口のガラスに視線を向けた。

見張りの1人がそれを受けて瑞希の手札をガラス越しに覗き込む。

『こいつが今セットしたモンスターはステルスバードだ』

そしてその情報を北林に送る。

(ステルスバードか)

つまり、第三者を通したイカサマを北林は実行したのだ。

合図を受け取った北林は強張った顔の瑞希を見て余裕の表情を見せる。

(楽勝だな)

「《ランス・リンドブルム》召喚」

(攻撃力高いのが2体…！)

「《ランス・リンドブルム》で攻撃」

攻撃宣言 北林LP8000—5000∥7500

「罫発動します」

罫発動 瑞希LP8000—5000∥7500

罫発動《停戦協定》

《ステルスバード》裏守↓表守

北林LP7500—1500∥6000

《ステルスバード》戦闘破壊

《ランス・リンドブルム》効果

瑞希LP7500—1000∥7400

「《ゴブリン突撃部隊》で攻撃」

攻撃宣言 北林LP6000—5000∥5500

「罫発動します」

罫発動 瑞希LP7400—5000∥6900

罫発動《仕込みマシンガン》

北林LP5500—1000〓4500

《ゴブリン突撃部隊》直接攻撃

瑞希LP6900—2300〓4600

《ゴブリン突撃部隊》効果 表攻↓表守

「カードセット、エンド」

北林手札0枚 LP4500

モンスター 2枚 《ゴブリン突撃部隊》表守 《ランス・リン

ドブルム》表攻

魔法罨 セット3枚

瑞希手札1枚 《デス・ウォンバット》 LP4600

モンスター 0枚

魔法罨 0枚

(うーまずいよう…何かいいの来て！)

「ドロー！」ドローカード《チェミナイ・エルフ》

「スタンバイ、メイン」

(伏せカードが3枚…通らないかもしれないけど、今はこれしかできないの！)

「《チェミナイ・エルフ》召喚。攻撃します」

攻撃宣言 瑞希LP4600—500〓4100

「罨発動」

罨発動 北林LP4500—500〓4000

罨発動《聖なるバリア —ミラーフォース—》

《チェミナイ・エルフ》破壊

「くうっ…」

「3伏せで通るわけねえだろ。もう使うカード忘れちまったんじゃねえのかあ？」

(うーこれしかできないのわかってて言ってきてる…！)

瑞希は悔しさを覚えながらも堪える。

「…エンドです」

北林手札0枚 LP4000  
モンスター 2枚 《ゴブリン突撃部隊》表守 《ランス・リン  
ドブルム》表攻  
魔法罫 セット2枚  
瑞希手札1枚 《デス・ウォンバット》 LP4100  
モンスター 0枚  
魔法罫 0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(モンスター引かないで！)

瑞希は祈りながら身構える。

「モンスターセット。《ランス・リンドブルム》で攻撃」

攻撃宣言 北林LP4000ー500〓3500

《ランス・リンドブルム》直接攻撃

瑞希LP4100ー1800〓2300

「エンド」

北林手札0枚 LP3500  
モンスター 3枚 セット1枚 《ゴブリン突撃部隊》表守  
《ランス・リンドブルム》表攻  
魔法罫 セット2枚  
瑞希手札1枚 《デス・ウォンバット》 LP2300  
モンスター 0枚  
魔法罫 0枚

### 3話 #6 「果たさせないために」

(何とか、挽回しないトー)

最悪は避けたが、状況は依然厳しいままだ。

「ドロー」ドローカード 《炸裂装甲》

「スタンバイ、メイン」

「《デス・ウォンバット》召喚。《ゴブリン突撃部隊》に攻撃します」

攻撃宣言 瑞希LP2300ー500＝1800

「罨発動」

罨発動 北林LP3500ー500＝3000

罨発動 《ドレインシールド》

北林LP3000+1600＝4600

「…カードセット。エンドです」

北林手札0枚 LP4600

モンスター 3枚 セット1枚 《ゴブリン突撃部隊》表守

《ランス・リンドブルム》表攻

魔法罨 セット1枚

瑞希手札0枚 LP1800

モンスター 1枚 《デス・ウォンバット》

魔法罨 セット1枚 《炸裂装甲》

「ドロー、スタンバイ、メイン」

北林は見張りへと視線を移す。

(炸裂装甲か。ちよつと遅かったな)

「人喰い虫、反転召喚。《デス・ウォンバット》を破壊」

《人喰い虫》効果

《デス・ウォンバット》破壊

《人喰い虫》裏守↓表攻

「そんな…うそ」

「本当」

瑞希は負けを確信し、うなだれる。

「《ゴブリン突撃部隊》を攻撃表示」

《ゴブリン突撃部隊》表守↓表攻

「《ゴブリン突撃部隊》で攻撃」

攻撃宣言 北林LP4600-5000 4100

「…畏発動しないのか？」

動かない瑞希を見て北林はにやけながら問う。

「ま、ついてなかったな」

《ゴブリン突撃部隊》直接攻撃

瑞希LP1800-2300 0

北林はカードを回収する。

「さあ、約束は守ってもらおうか」

北林含めた男子生徒たちは負けたショックで目元に涙を溜めた瑞希を下衆な笑みを浮かべながら見つめる。

(私…こんな奴らに、負けるなんて…)

しかしただ一人、赤石は表情を変えずガラス越しの見張りがいなくなっていることに気付く。

(…案外ついてるかもな)

赤石はこれで終わりそうにないことを予感した。

なお、その予感は数秒後の中することになる。

――

「瑞希、よく戦ったね」

彼女は瑞希を抱きしめる。

「れーりちゃん…ぐすつ、ひつく」

彼女のねぎらいに瑞希は涙が溢れ出した。

男子生徒たちはその光景を冷めた目で見る。

「なあ、邪魔するなら出て行ってくれねえか？今からその子との約束

を果たす予定なんだからさ。それとも混ざるかあ?」

「おお!それいいねえ」

「俺、あのメガネっ娘結構好み」

(ひっ、この人たち怖い…)

綾芽は邪な視線を向けられゾクツと恐怖感を覚える。

「瑞希、綾芽。あとはわたしにまかせて」

彼女は抱きしめる手を離し、興奮する男子生徒たちへと目を向ける。

「わたしと勝負しませんか?」

「ああ?」

「わたしが勝ったらさっきの勝負は無効にしてください」

「おいおい、勝手に入ってきて何言ってるんだ?俺たちに何の得も無えじゃねえか」

北林は呆れながら返事をする。

「わたしが負けたら瑞希の変わりにわたしが約束を果たします」

「れ、れーりちゃん!」

瑞希は驚いて彼女の顔を見て、

「…は!本気か!」

「マジ!?鈴瀬とかマジ!」

「やべえ、マジやべえぞー!」

男子生徒たちは一様に興奮状態になる。

「受けてくれますか?」

彼女はそんな周囲の反応を気にせず申し入れた。

「んーそれじゃ受けれんなあ?」

が、拒否される。

「おい北林!何だよ!」

疑問に思う男子生徒をよそに北林はにやけながら、

「変わりじゃなくてお前も約束を果たすというなら受けてやる」  
受諾の条件を提示した。

「…わかりました。その条件で受けてくれますか？」  
「それなら受けてやろう！」

北林は彼女の申し込みを快諾した。

北林は瑞希の時と同じようにルール説明をする。もちろん使うカードも同じだ。

その間、瑞希はどこか落ち着かない様子で彼女に話しかけようとしたが、彼女に「大丈夫、安心して」と言われ不安ながらも彼女に託すことにした。

綾芽も緊張した面持ちで彼女と同じようにルールを覚えようとしていた。

デッキもあるべきところにセットされ、あとは先攻後攻を決めるだけの段階だ。

瑞希と綾芽はどこか不安げな顔で彼女の斜め後ろに立っている。

「中根よりは物覚えは良さそうだな」

「わかりやすい説明をしていたので」

（気に食わねえな。こいつも中根と同じで自信だけはあるってかあ？）

じゃんけんの結果、今回も先攻は北林。

（まあ、数分も経たねえうちに思い知るだろうよ。勝負に挑んだことが間違いだったってな！）

瑞希の負けを取り返すデュエルが始まった。

### 3話 #7 「北林VS麗梨 その1」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(残念だがお前に勝ち目は無い。何せお前のカードが丸わかりだからな)

既に室外に出た見張りの1人が彼女の手札を覗きこんでいる。

「《ランス・リンドブルム》召喚」

「カードセット、もう1枚セット。エンド」

北林手札1枚 LP8000

モンスター 1枚 《ランス・リンドブルム》表攻

魔法罫 セット2枚

彼女手札3枚 LP8000

モンスター 0枚

魔法罫 0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「カードをセット」

(さあ、何を伏せたのかなあ?)

北林は見張りへと視線を移す。

『伏せたカードは魔法の筒。手札の3枚は機動砦のギア・ゴーレム、人喰い虫、ランス・リンドブルムだ』

(なるほどねえ)

北林は合図を受け取りほくそ笑む。

「モンスターをセット」

『伏せたモンスターは機動砦のギア・ゴーレムだ』

(ただ、そいつは厄介だな。ゴ布林突撃部隊引くまで粘るか)

(ゴ布林突撃部隊はこっちにあることはわかってるしな)

デッキを作る過程で、モンスターの束をシャッフルしたのは北林、罫の束をシャッフルしたのは彼女だった。

北林は振り分ける際、モンスターの一部をこっそりと覗き見し、ど

こちらのデッキにその覗き見したモンスターがあるかを把握していた。とは言っても2、3枚だが

「ターンエンド」

北林手札1枚 LP8000

モンスター 1枚 《ランス・リンドブルム》表攻

魔法罨 セット2枚

彼女手札2枚 LP8000

モンスター セット1枚

魔法罨 セット1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(ちっ、ギフトカードか)

「《雷仙人》召喚」

(伏せたってしやあねえな)

「エンド」

北林手札1枚 LP8000

モンスター 2枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻

魔法罨 セット2枚

彼女手札2枚 LP8000

モンスター セット1枚

魔法罨 セット1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(これなら、あのカードは発動されないかな)

「《デス・ウオンバット》召喚。《雷仙人》に攻撃します」

攻撃宣言 彼女LP8000ー5000≡7500

「罨発動」

罨発動 北林LP8000ー5000≡7500

罨発動《炸裂装甲》

《デス・ウォンバット》破壊

「ターンエンド」

北林手札1枚 LP7500

モンスター 2枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻

魔法罨 セット1枚

彼女手札2枚 LP7500

モンスター セット1枚

魔法罨 セット1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(グレイモヤか。まあ悪くねえ)

「カードセット、エンド」

北林手札1枚 LP7500

モンスター 2枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻

魔法罨 セット2枚

彼女手札2枚 LP7500

モンスター セット1枚

魔法罨 セット1枚

(相手が攻撃して来ない今、攻められる前に何とかしないと……！)  
瑞希は祈るように彼女の引いたカードを見る。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(うっ、停戦協定……！攻撃を止められるカードが欲しいのに！)

(いいの、引いた)

瑞希の思いとは対照的に彼女は欲しかったカードを引いたという  
感じだ。

「ターンエンド」

(えっ！伏せないの!?!っていうかモンスターも出さないの!?!手札に人喰い虫があるのに、どうして:!:?)

表情には出さないが、瑞希は彼女の意図がわからず困惑する。

(確かに魔法の筒伏せてるし、次のターン内じゃギア・ゴーレムは破壊されないけど:!:だとしても麗梨さんの意図がわからない)

綾芽も考えを張り巡らすが無明確な答えは得られなかった。

北林手札1枚 LP7500

モンスター 2枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻

魔法罫 セット2枚

彼女手札3枚 LP7500

モンスター セット1枚

魔法罫 セット1枚

### 3話 #8 「北林VS麗梨 その2」

(へっ、ギア・ゴーレムだけで充分っか)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(その余裕が命取りにならなきゃいいが、な！)

「《ゴブリン突撃部隊》 召喚！」

(！……うそ!?引かれた……！)

(まだ、2ターンは大丈夫なはず……！)

瑞希と綾芽に焦りが見え始める。

「《ゴブリン突撃部隊》で攻撃」

攻撃宣言 北林LP7500→5000≡7000

「罨発動します」

罨発動 彼女LP7500→5000≡7000

罨発動《魔法の筒》

北林LP7000→2300≡4700

《ゴブリン突撃部隊》効果 表攻↓表守

(まあ、このダメージは仕方ねえ)

「エンド」

北林手札1枚 LP4700

モンスター 3枚 《ランス・リンドブルム》表攻

《雷仙人》表

攻 《ゴブリン突撃部隊》表守

魔法罨 セット2枚

彼女手札3枚 LP7000

モンスター セット1枚

魔法罨 セット0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(邪神の大災害……！また攻撃を止められないカード……)

瑞希の焦りの気持ちがさらに強くなる。

(……)

彼女はじつと引いたカード見つめ

「カードをセット」

カードを伏せた。

(まだ、大丈夫)

(邪神の大災害を伏せるってことは…2ターン後、相手の攻撃時に発動して罠の一掃を狙ってる？でもそれじゃあ守りきれない、せめてモンスターを減らさないと…！)

綾芽はやはり彼女の考えが理解出来ずにいる。

『伏せたのは邪神の大災害だ』

(罠を破壊するつもりかあ？そんなんじゃ守りきれんぞお?)

見張りから合図を受け取った北林も綾芽と同じようなことを考える。

「《ランス・リンドブルム》召喚。攻撃します」

攻撃宣言 彼女LP7000→5000∥6500

「罠発動」

罠発動 北林LP4700→5000∥4200

罠発動《万能地雷グレイモヤ》

《ランス・リンドブルム》破壊

(うー通らないよね…)

もしかしたら通るかもという瑞希の希望はあっさりと碎かれる。

(へっ、通るわけねえだろ)

「ターンエンド」

北林手札1枚 LP4200

モンスター 3枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻 《ゴブリン突撃部隊》表守

魔法罠 セット1枚

彼女手札2枚 LP6500

モンスター セット1枚

魔法罠 セット1枚

「ドロロー、スタンバイ、メイン」  
（ドレインシールドか。邪神の大災害が飛んでくるところを考慮すれば、伏せる意味は無えな）  
「エンド」

北林手札2枚 LP4200

モンスター 3枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻 《ゴブリン突撃部隊》表守

魔法罫 セット1枚

彼女手札2枚 LP6500

モンスター セット1枚

魔法罫 セット1枚

（このターンで何とかしないと…！何かいいの来て！）

瑞希は祈るように彼女の引いたカードを見る。

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

（ステルスバード…相手の場にはランス・リンドブルムがいるし、その場しのぎにしかない。ここは人喰い虫1択…）

綾芽は彼女の次の手を予測する。が

「モンスターをセット」

（えっ!?そのまま伏せた!?麗梨さん何故…!?!）

（れーりちゃん…!?何で人喰い虫じゃなくてステルスバードなの!?!）

予測とは違う手に瑞希と綾芽は彼女に強い疑問と不安を抱く。

『伏せたモンスターはステルスバードだ』

（ステルスバードだと?人喰い虫だと思っただが、ひよっとしてプレイングミスかあ?）

北林は思わずにやける。

（馬鹿め、さては内心ビクビクしまくりだな?その澄ました顔は見た目だけか）

そして北林の待ち望んだコールが発せられた。

「ターンエンド」

北林手札2枚 LP4200

モンスター 3枚 《ランス・リンドブルム》表攻

《雷仙人》表

攻 《ゴブリン突撃部隊》表守

魔法罫 セット1枚

彼女手札2枚 LP6500

モンスター セット2枚

魔法罫 セット1枚

(よっしゃ!勝った!)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

### 3話 #9 「その手捌きで」

「《ゴブリン突撃部隊》を攻撃表示にするぜ」

《ゴブリン突撃部隊》 表守↓表攻

「《ゴブリン突撃部隊》でそっちのモンスターを攻撃！」

攻撃宣言 北林LP4200ー500〓3700

「罨発動します」

罨発動 彼女LP6500ー500〓6000

(けっ、邪神の大災害なんか痛くも痒くもねえぜ)

北林が自分の伏せた罨カードを墓地へ送ろうとした瞬間

「…はあ!？」

北林の手が止まり、驚きの声を上げる。

(停戦協定!?!邪神の大災害じゃねえだ?!?)

「効果で裏側守備のモンスターは表になります」

彼女は淡々と進め、セットされた2体のモンスターを表にした。

「…はあああ!？」

「何だこれ!？」

「マジかよ!？」

北林だけでなく、他の男子生徒も驚きの声を上げた。北林は目の前の光景をまだ信じられないというような感じで見つめる。

罨発動 《停戦協定》

《人喰い虫》 裏守↓表守 《機動砦のギア・ゴーレム》 裏守↓表守

北林LP3700ー2500〓1200

《人喰い虫》 戦闘破壊

《ゴブリン突撃部隊》 効果 表攻↓表守

「ど、どうなってるの…!？」

瑞希は小声で綾芽にきく。

「私もわからない…!？」

綾芽も目の前の光景にただ困惑している。

「どういふことか説明すると、『彼女の使うカードを見ていた』人たちが」

《邪神の大災害》と想像していたカードが《停戦協定》で

《機動砦のギア・ゴーレム》と想像していたカードが《人喰い虫》で

《ステルスバード》と想像していたカードが《機動砦のギア・ゴーレム》だったということだ。

（くそっ！どうなつてやがる！）

《停戦協定》ではモンスターの数は増減しないので巻き戻しは発生せず、《ゴブリン突撃部隊》の攻撃は続行。

北林が《機動砦のギア・ゴーレム》だと思つて攻撃対象に選んだ《人喰い虫》はそのまゝ戦闘破壊

結局彼女の場に残つたもう1体のモンスターは《ステルスバード》ではなく《機動砦のギア・ゴーレム》だ。

（あいつら、しくじつたか…？）

北林は見張りを睨み付けるが、見張りの位置からフィールドは彼女の影になつているため見えない。

「何かあいつこつち睨んでねえか？」

見張りの男子生徒がもう1人の見張りに問う。

「気のせいだろ」

もちろん見張りには中の様子が伝わっていないので、気のせいだということとで処理される。

「まだ、あなたのバトルフェイズです」

気を逸らしている北林を彼女はデュエルへと戻す。

確かにまだ北林のバトルフェイズだが、もう出来ることは無い。

（まだ決まつたわけじゃねえ…！）

「カードセット」

（ドレインシールドで回復出来れば、まだ望みはある！）

「エンド」

北林手札1枚 LP1200

モンスター 3枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻 《ゴブリン突撃部隊》表守

魔法罫 セット2枚

彼女手札2枚 LP6000

モンスター 1枚 《機動砦のギア・ゴーレム》表守

魔法罫 0枚

彼女はドロローする寸前、ふふつと微笑んだ。

「何笑ってんだよ」

北林があからさまに不機嫌な顔で言う。

「なんでもないです」

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

（やったミラーフォース！勝てる、勝てるよこのデュエル！）

瑞希の顔が途端に明るくなる。

「カードをセット、モンスターをセット」

北林はカードをセットする彼女の一連の動作を注視する。すり替えをしていないかどうか確かめるためだ。

（特に変わった動きは無えな。これまでと同じだ…まさかとは思うが）

北林は見張りを再び睨む。

『伏せたカードは聖なるバリア——ミラーフォース—だ。モンスターの方は見えなかったが、おそらく人喰い虫だ』

見張りはこれまで通り北林に合図を送る。

今回彼女はモンスターをセットする時、見張りからは見えない角度からセットした。

（ミラーフォースだど？くそ、笑った理由はそれか…！っーか人喰い虫はもう墓地に行ったわ！）

(…待てよ、本当にミラーフォースなのか?)

北林は疑心暗鬼に陥っていた。彼女に怪しげな動きが見当たらなかった以上、見張りを疑わざるを得ない。

しかし見張りは間違いなくこちら側の人間であることを北林自身が理解している。北林には何故このような現象が起こったのか全く理解できなかった。

ただ、どちらにしてもセットされたカードが《聖なるバリアーミラーフォース》ならば北林は攻撃したところで負ける。

何故なら、次が北林のラストドロードだからだ。

「ターンエンド」

北林手札1枚 LP1200

モンスター 3枚 《ランス・リンドブルム》表攻 《雷仙人》表

攻 《ゴブリン突撃部隊》表守

魔法罫 セット2枚

彼女手札1枚 LP6000

モンスター 2枚 セット1枚 《機動砦のギア・ゴーレム》表

守

魔法罫 1枚

さらに言うと北林は予想外の出来事に気を取られてまだ気付いていない。

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

(くそーあと6000もあるのかよ、どうすれば削り切れるんだ?)

北林は考えを張り巡らすものの、辿り着く答えはたったひとつだけ。

そこでようやく気が付いたのだ。

前のターン時、既に負けが確定していたことに。

彼女がドロロー前、微笑んだ理由に。

しかしサレンダーはプライドが許さない。

「ちくしょう！《ランス・リンドブルム》でそのモンスターに攻撃！」  
攻撃宣言 北林LP1200ー500〓700

「罨発動します」

罨発動 彼女LP6000ー500〓5500

罨発動《聖なるバリアーミラーフォースー》

《ランス・リンドブルム》《雷仙人》破壊

「《チェミナイ・エルフ》召喚」

そして勝敗を決するコールが発せられる。

「…エンドだ！」

北林手札1枚 LP700

モンスター 2枚 《チェミナイ・エルフ》表攻 《ゴブリン突

撃部隊》表守

魔法罨 セット2枚

彼女手札1枚 LP5500

モンスター 2枚 セット1枚 《機動砦のギア・ゴーレム》表

守

魔法罨 0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「《ステルスバード》反転召喚します」

《ステルスバード》効果

北林LP700ー1000〓0

「か…勝った！やったー！」

瑞希は声を上げて喜んだ。綾芽もホッと胸を撫で下ろす。

### 3話 #10 「望む物の価値」

「くっそー、まさか負けるとはなあ」

「約束がパーかよ」

「ああ、もったいねー」

男子生徒たちは落胆の声を上げる。

それと同時に北林は見張りに入って来るよう手招きした。

「おお、終わったのか?」

見張りだった男子生徒はのんきに北林に話かける。

「てめえ…まさかとは思うが」

北林は男子生徒に詰め寄る。

「な、何だよ!?!」

「北林、見苦しい真似はやめろ」

心当たりのない北林の言動に戸惑う男子生徒に、デュエル中から静観を貫いてきた赤石が口を開き北林を睨む。

赤石の睨みに気圧されたか、北林は男子生徒から離れた。

「お前の考えてることは大方予想がつく。誰も裏切っちゃいねえよ」

「…」

「目に入ってきた情報を疑わなかったお前の負けだ」

「あ?」

(情報を疑わなかったと…?どういう意味だ?)

北林は赤石の言葉の意味を考える。

「瑞希、綾芽。行く」

その間に彼女は立ち上がり準備室の出入り口に向かおうとする。

「待てよ」

赤石が彼女を呼び止める。

「こいつはお前との勝負を受けた。まだ半分残ってるだろ?」

「…」

彼女は赤石から放たれるであろう次の言葉を待つ。

「次は俺との勝負、受けな」

「まあ無理にとは言わねえ。嫌なら断ればいい」

赤石からの勝負の誘い。それに対する彼女の彼女の答えは既に決まっていた。

ここに入った時から彼女は赤石と対峙するような、そんな予感を感じていたからだ。

「いいですよ」

おおっ、という歓声が男子生徒たちから上がる。

「赤石のデュエルが見れる！」

「久しぶりを見るぜ」

「楽しみだ」

そんな男子生徒たちとは対照的に困惑しているのは彼女側の2人。瑞希も綾芽もどうして受けるの？受けて大丈夫？と不安げな表情を浮かべる。

「おいお前、本当に受けるんだな？」

赤石ではなく、北林が彼女に再確認する。

「わたしも瑞希を泣かせた人たちに、何もせず帰るつもりはありませんでしたから」

(…おい、さつき帰ろうとしてなかったか?)

見張りだった男子生徒が思わず心の中でツツコミを入れる。

実は先程の彼女の行動は本当に帰ろうとしていたわけではない。赤石や男子生徒たちがどういう行動をとるか試したのである。

9割方予想はついていたが、もしもの時に備えて彼女は瑞希と綾芽を連れてこの場から逃げられるような態勢は取っていた。

「そうか、そいつは楽しみだ。ほら、それならさつきと席に座れよ」

北林に促され彼女は再び席についた。

赤石も席について数秒後、

「まずは何を賭けるかだな。望みは何だ？」

赤石が彼女に問う。

「いじめを、やめさせて下さい」

「えっ…?」

彼女の回答に瑞希は思わず声が出る。

「具体的に頼む」

「もしあなたたちがいじめをしてる人を見かけたら、その人にやめるように言っただけです。今後しないようにも」

(れーりちゃん、もしかして私のために…?)

「…俺は構わないが、それで無くなるようなもんじゃないと思うぞ」

「わたしも無くするのは不可能だと思ってます。人間関係ってとても複雑だから…」

彼女は遠い目をする。

「今より良くなれば、それでいいの」

「そうか」

「あなたは何を望みますか?」

「そうだな…」

「赤石、勝ったらさっきの勝負無効にするようにしてくれ!」

北林は赤石の言葉を中断するように口を挟む。

「ああそうしてくれ!」

「頼むわ赤石!」

同じように男子生徒たちも赤石に要請する。

「馬鹿が! てめえらの負けを消すために勝負するんじゃないやねえ!」

赤石は声を荒らげる。

「それにあいつの気持ちを考えな」

赤石は視線を瑞希に移す。

「この2戦、強い不安と緊張に晒され相当参ってるはずだ。デュエルのきっかけを作ったのはあいつだが、これ以上追い詰めることも無えだろ」

赤石の一言で男子生徒たちは口をつぐんだ。

「ありがとう、気を遣ってくれて」

「ああ」

彼女のお礼の言葉を赤石は少々ぶつきらぼうに返した。

「俺が望む物は今のところ特に思い当たらねえんだ。だからお前の望む物にお前自身がそれに見合う値段をつけてくれ」

「わかりました」

彼女は躊躇うことなく懐に入れてた物を机の上に出した。

「なっ!?!」

「ここまで表情を全く変えなかった赤石も思わず目を見開いた。

「これ本物か!?!」

「マジかよ!?!」

「俺、札束初めて見た…」

赤石だけでなく、彼女以外この場にいる全員が驚いている。

「ちようど100万あります」

彼女が出したのは家を出る直前、懐に入れた札束だった。

「ちよ、ちよつとれーりちゃん!」

瑞希が慌てて口を挟む。

「本気なの!?!100万って冗談じゃ済まないよ!?!私のために勝負しようとしてるなら、そんな大金賭けないで…!」

「わたしは最初から本気だよ。大丈夫、わたしを信じて」

「で、でも…!」

その時、綾芽が瑞希の肩に手を置いた。

「中根さん、麗梨さんは止められません」

「な、なんで…!」

「中根さんも薄々感じてるのでしよう? 私たちと麗梨さんとは住んでる世界が違うってことに」

「そんなこと…」

「気持ちばかりです。でもここは麗梨さんの勝ちを信じて見守りましょう。それが今私たちに出来ることです…!」

綾芽は瑞希を落ち着かせる。

瑞希は言い返そうとしたが、綾芽の手から伝わってくる無力感に何も言い返せなくなった。

「…その金額でいいのか？」

「はい。あなたに対するわたしの望む分です」

彼女は遠回しな言い方をしたが

「…ならその分だけ、答えよう。本当の『度胸試し』でな」

赤石は意図を汲み取った。

### 3話 #11 「本当の度胸試し」

赤石と彼女、机を挟んで対峙する2人。

机の中央に置かれた札束は一際強い存在感を放ち続けている。

「その金といい手捌きといい、お前素人じゃねえな」

「やっぱり気付いてたんですね」

「ああ」

彼女の返答は素人ではないことに対してではなく、先程のデュエルのことに対してである。

――北林と彼女のデュエル開始直後

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（残念だがお前に勝ち目は無い。何せお前のカードが丸わかりだからな）

既に室外に出た見張りの1人が彼女の手札を覗きこんでいる。

（学校だけれど、ここは敵地。何をしてくるかわからない）

「《ランス・リンドブルム》召喚」

「カードセット、もう1枚セット。エンド」

北林手札1枚 LP8000

モンスター 1枚 《ランス・リンドブルム》表攻

魔法罫 セット2枚

彼女手札3枚 LP8000

モンスター 0枚

魔法罫 0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（今のところ特に不審な動きはないけど…）

「カードをセット」

(さあ、何を伏せたのかなあ?)

北林は見張りへと視線を移す。

『伏せたカードは魔法の筒。手札の3枚は機動砦のギア・ゴーレム、人喰い虫、ランス・リンドブルムだ』

(なるほどねえ)

北林は合図を受け取りほくそ笑む。

(あれ? わたしを見てた: いや、わたしの後ろ)

彼女は北林の視線の先を辿る。振り返るまでもなく北林の視線の先に存在する見張りを、その視線が意味するものを理解した。

(: だとしたら)

彼女は手札を持つ位置を見張りから見えないように調整し

(確かめる)

カードをセットする直前、そのカードと手札のカード1枚をすり替える。

「モンスターをセット」

北林は気を緩めてすり替え行為に気付かず、見張りもその立ち位置からでは確認できない。

故に見張りはすり替える前の情報を伝えてしまう。

『伏せたモンスターは機動砦のギア・ゴーレムだ』

彼女のそばで見えていたはずの瑞希と綾芽も同様に気付かないのだから、彼女の行為に男子生徒たちが気付けるはずも無かった。

(: ほう、こいつ)

ただ1人を除いては。

(: …見られた?)

彼女はこちらに向けられた赤石の視線に一瞬ドキツとするが、赤石が特に何かをする気は無さそうなのでそのままデュエルを進める。

(野暮なことはいねえよ。: 北林もついてねえな)

赤石はほんの少し口角を上げた。

「ターンエンド」

結局彼女は先程のデュエルで3回すり替えをし、赤石以外に気付かれることなく勝利を収めた。

見張りは最初から最後まで裏切ってなどいなかった。見えているというアドバンテージにあぐらをかき、勝負が決してしまうまで違和感に気付かず彼女を疑わなかった北林の完敗である。

――

「さっきお前がやったのは度胸試しとスピードデュエルを混ぜた派生ルールだ」

赤石は先程のデュエルで使用したカードをモンスターと罠に分け束にする。

「使うカードは一緒ですか？」

「ああ。モンスターと罠、どっちか選んでシャッフルしな」

彼女は罠の束を選び、赤石は残ったモンスターの束をシャッフルする。ここままで流れも同じだ。

「よく混ぜたか」

「はい」

「それじゃ裏側のまま両方のフィールドにセットしな」

「えっと、全部？」

「ああ」

彼女は罠をお互いの魔法罠ゾーンにセットする。

赤石も同様にモンスターをモンスターゾーンにセットしていく。

「これが開始時の状態だ」

お互いのモンスターゾーンと魔法罠ゾーンにそれぞれ5枚ずつ、計20枚のカードがセットされている。いわゆるフィールドが埋まった状態だ。

「それで、いくつか追加ルールがある」

赤石はおさらいの意も込めて先程のデュエル前と同じようにルール説明をする。

初期LPはスタンダードデュエルと同じく8000。

攻撃宣言する度に500LPを支払う。

罠カードを発動する度に500LPを支払う。

罠カードは相手の攻撃宣言時のみ発動できる。

内容は同じだ。追加されたルールは次から

「反転召喚は1ターンに1回までだ」

モンスターが5体並んでいる状態から開始されるこのデュエルでは、反転召喚は通常の召喚と同じような役割を持つ。

「先攻1ターン目から攻撃してもいい」

これもフィールドが埋まっているこのデュエルならではのルールだ。

「先に相手のLPを0にするか、相手フィールドのカードを0枚にした方が勝ちだ」

相手ターン開始時相手のデッキ0枚という勝利条件が無くなり、相手フィールドのカード0枚に変更される。つまりフィールドにあるカードが命そのものになる。

「デュエルの仕様上、たまに膠着状態に陥ることがある。そうなった場合はその時点でLPの多い方が勝ちとする」

ドロワーが無くなることにより、モンスターの組み合わせによってお互い動けない状態になることがあるためだ。

「そして最後、これが一番重要だ」

「セットされているカードは必要時以外は見ることが出来ない」

「どういうことですか?」

彼女は思わずきき返す。

「モンスターは見ずに反転召喚し、罨も見ずに発動しろってことだ」  
「…なるほど」

(それでこのカード構成なんですね)  
追加されたルールの中では、おそらく一番デュエルに影響するであろうこのルール。度胸試しと呼ばれる所以なのだろうか。

「以上だ。質問はあるか？」

「いいえ」

彼女は即答する。ルールは問題なく把握しているようだ。

「それじゃあ先攻後攻だな」

赤石はポケットからコインを出し、彼女に見せる。

「数字が刻印されている方が裏だ」

コイントスの結果、先攻は彼女。

とても高校生同士がデュエルするとは思えない緊迫した空気が流れる。

「さあ、来な」

沈黙を破る赤石の静かな一言でついに大一番のデュエルが始まった。

↳ルール一覧

お互いのモンスターゾーンと魔法罨ゾーンにそれぞれ5枚ずつ、計20枚のカードがセットされた状態でスタート。手札は無し。

初期LPはスタンダードデュエルと同じく8000。

攻撃宣言する度に500LPを支払う。

罨カードを発動する度に500LPを支払う。

罨カードは相手の攻撃宣言時のみ発動できる。

反転召喚は1ターンに1回まで。

先攻1ターン目から攻撃が可能。

モンスターは見ずに反転召喚し、罨も見ずに発動しなければならぬ。  
い。

膠着状態に陥った場合、その時点でLPの多い方が勝ち。

先に相手のLPを0にするか、相手フィールドのカードを0枚にした方が勝ち。

〈カード一覧〉

《雷仙人》

《デス・ウオンバット》

《逆ギレパンダ》

《ゴブリン突撃部隊》

《機動砦のギア・ゴーレム》

《人喰い虫》

《ステルスバード》

《チェミナイ・エルフ》

《ランス・リンドブルム》

《ランス・リンドブルム》

《聖なるバリア ―ミラーフォース―》

《仕込みマシンガン》

《停戦協定》

《邪神の大災害》

《ドレインシールド》

《魔法の筒》

《ギフトカード》

《万能地雷グレイモヤ》

《炸裂装甲》

《炸裂装甲》

### 3話 #12 「何もしないを選んで」

「ドロー」

「デッキは無えぞ」

赤石はテンポよく彼女にツツコミを入れる。

「言ってみただけです」

「まあ気持ちはわかる」

一連のやりとりで多少空気が弛緩したのか、くすくすと抑えられた笑い声が発生した。

しかしデュエルの当事者2人の間に漂う雰囲気は変わらず張り詰めたままだ。

(先攻1ターン目でも攻撃はできるけど…)

(……………)

彼女はしばらく考え

「ターンエンド」

何もせずターンを終了する。

(このルールのデュエルは初めて。なので、あなたの出方をうかがっています)

赤石 LP8000

裏 裏 裏 裏 裏

裏 裏 裏 裏 裏

裏 裏 裏 裏 裏

裏 裏 裏 裏 裏

彼女 LP8000

(慎重だな。俺がどう出るか見るってどこか)

(それなら、望み通り動いてやろう)

赤石は右から2番目のカードを選択する。

「反転召喚」

《ゴブリン突撃部隊》裏守↓表攻

(出だしとしては悪くねえな)

「《ゴブリン突撃部隊》で右端のモンスターに攻撃」

攻撃宣言 赤石LP8000→5000||7500

(攻撃力2300は、危ない)

彼女は左端のカードを選択する。

(まずは最初の運試し)

「罨発動します」

罨発動 彼女LP8000→5000||7500

罨発動《炸裂装甲》

《ゴブリン突撃部隊》破壊

(破壊されたか。まあいい)

「ターンエンドだ」

赤石 LP7500

裏 裏 裏 裏

裏 裏 裏 ◇ 裏

裏 裏 裏 裏

◇ 裏 裏 裏 裏

彼女 LP7500

「…どうした？お前のターンだ」

考える素ぶりもなく静止している彼女を見て赤石は確認する。

それを聞いた彼女は静かに口を開け、

「ターンエンド」

何もすることなくターンを終了した。

赤石 LP7500

裏 裏 裏 裏

裏 裏 裏 ◇ 裏

裏 裏 裏 裏 裏

◇ 裏 裏 裏 裏

彼女 LP7500

(また何もせずエンド…麗梨さん、何を考えてるの…?)  
(まだ様子見する気か?)

赤石は真ん中のカードを選択する。

「反転召喚」

《ランス・リンドブルム》裏守↓表攻

(何か考えがあつてのことだろうが、待つてるだけじゃ勝てねえぞ)

「《ランス・リンドブルム》で左端のモンスターに攻撃」

攻撃宣言 赤石LP7500→5000||7000

(攻撃力1800の貫通も、危ない)

彼女は右から2番目のカードを選択する。

「罨発動します」

罨発動 彼女LP7500→5000||7000

罨発動《ドレインシールド》

彼女LP7000+1800||8800

(回復されたか…向こうも運はあるようだな)

彼女も赤石に引けを取らないカード運でしのご。

「ターンエンドだ」

赤石 LP7000

裏 裏 裏 裏 裏

裏 裏 あ ◇ 裏

あ||《ランス・リンドブルム》表攻

裏 裏 裏 裏 裏

◇ 裏 裏 ◇ 裏

彼女 LP8800

「…おい、まさか」

前のターン同様彼女考える素ぶりもなく静止している。

「ターンエンド」

赤石の、まさかが的中した。

彼女の3ターン連続何もせずエンドに周囲がざわつく。皆彼女の意図がわからない。

赤石 LP7000

裏 裏 裏 裏

裏 裏 あ ◇ 裏

あⅡ《ランス・リンドブルム》表攻

裏 裏 裏 裏

◇ 裏 裏 ◇ 裏

彼女 LP8800

### 3話 #13 「運の良さはお互い様」

(…こいつ、あの戦法で来る気か?)

赤石は彼女の狙いを予測する。

(だがそれは薄い上にリカバリーが効かねえ。まあ、わかってやってんだらうが)

赤石は左端のカードを選択する。

(なら押し切るまでだ)

「反転召喚」《逆ギレパンダ》裏守↓表攻

(逆ギレパンダ!?あの人さつきからモンスター運良すぎるよ…!)

瑞希は赤石の運の良さに、少しおそれを抱く。

(最強モンスター、開けられちゃった)

流石の彼女も焦りが見える。それもそのはず、

《逆ギレパンダ》は自身の効果により攻撃力3300の貫通持ちという怪物と化しているのだ。

「《逆ギレパンダ》で左端のモンスターに攻撃」

攻撃宣言 赤石LP7000→5000∥6500

(考えるまでもなく、危険)

彼女は真ん中のカードを選択する。

「罨発動します」

罨発動 彼女LP8800→5000∥8300

罨発動 《万能地雷グレイモヤ》

《逆ギレパンダ》破壊

(おおー!れーりちゃんも負けてない!すごい!)

赤石の攻撃は三度通らず。今度は赤石に若干焦りが見え始める。

「まだだ、《ランス・リンドブルム》で左端のモンスターに攻撃」

攻撃宣言 赤石LP6500→5000∥6000

(いい加減通りやがれてんだ)

彼女は左から2番目のカードを選択する。

「罨発動します」

罨発動 彼女LP8300→5000∥7800

彼女は発動した罨を見て、眉がピクつと動く。

(はずれを引いたか)

赤石は彼女の選んだカードを察し、幾分か余裕を取り戻す。

罨発動《ギフトカード》

赤石LP6000+3000∥9000

《チェミナイ・エルフ》戦闘破壊

《ランス・リンドブルム》効果

彼女LP7800-900∥6900

「ターンエンドだ」

赤石 LP9000

裏 裏 裏 裏

◇ 裏 あ ◇ 裏

あ∥《ランス・リンドブルム》表攻

◇ 裏 裏 裏 裏

◇ 裏 裏 裏 裏

彼女 LP6900

カードの数もLPも赤石より少なくなった彼女は一気に劣勢に立たされる。

(様子見は終わりだろ。さあ、来な)

(…)

彼女は目をつぶりながら数秒考え、

(きつと、これも度胸)

目を開くと同時に彼女は真ん中のカードを選択する。

「反転召喚」

《ランス・リンドブルム》裏守↓表攻

「《ランス・リンドブルム》で右端のモンスターに攻撃します」

攻撃宣言 彼女LP6900-500∥6400

(通さねえよ)

赤石は左から2番目のカードを選択する。

「罨発動だ」

罨発動 赤石LP9000→5000≡8500

罨発動《仕込みマシンガン》

彼女LP6400→10000≡5400

(ちっ、通しちまうか)

彼女の攻撃宣言を受け、赤石は右端のモンスターカードをめくる。

しかしその攻撃は強固な壁が防いだ。

《機動砦のギア・ゴーレム》裏守↓表守

彼女LP5400→4000≡5000

(これは…麗梨さんついてない)

「ターンエンド」

赤石 LP8500

裏 ◇ 裏 裏 裏

◇ 裏 あ ◇ い

あⅡ《ランス・リンドブルム》表攻

いⅡ《機動砦のギア・ゴーレム》表守

アⅡ《ランス・リンドブルム》表攻

◇ 裏 ア 裏 裏

◇ ◇ ◇ ◇ 裏

彼女 LP5000

(罨が薄くなった今、畳み掛けたいが…)

(まず厄介なあのモンスターをぶち破れるかどうかだ。まあ、俺のフィールドにいればそれが最高だが)

赤石は残った最後の裏側守備モンスターを選択する。

「反転召喚」

《雷仙人》裏守↓表攻

《雷仙人》効果

赤石LP 8500 + 3000 = 11500

『すげえ！11500だってよ！』

『確かにすげえけど、雷仙人は破壊されたら5000失うぞ？』

『なーに、罨4枚も残ってるし守り切れるだろ』

男子生徒たちは小声で話しながら戦況を見つめている。

(やはりあいつのフィールドか)

『《ランス・リンドブルム》で右から2番目のモンスターに攻撃』

攻撃宣言 赤石LP 11500 - 500 = 11000

彼女は残った最後の罨カードを選択する。

(この1枚に、かかってる)

「罨発動します」

罨発動 彼女LP 5000 - 500 = 4500

赤石は発動された罨を見て、軽く苦い顔をする。

(厄介なもん残ってたか)

罨発動《停戦協定》

《ステルスバード》裏守↓表守

《デス・ウオンバット》裏守↓表守

《人喰い虫》裏守↓表守

赤石LP 11100 - 3500 = 7500

《デス・ウオンバット》戦闘破壊

《ランス・リンドブルム》効果

彼女LP 4500 - 1500 = 3000

(…なるほどな)

「ターンエンドだ」

赤石 LP 7500

裏 ◇ 裏 裏 裏

◇ う あ ◇ い

あ = 《ランス・リンドブルム》表攻

いⅡ 《機動砦のギア・ゴーレム》表守  
うⅡ 《雷仙人》表攻

アⅡ 《ランス・リンドブルム》表攻

イⅡ 《ステルスバード》表守

ウⅡ 《人喰い虫》表守

◇ イ ア ◇ ウ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼女 LP3000

### 3話 #14 「勝負の行方」

(おい、何で雷仙人で人喰い虫攻撃しなかったんだ?)

(する必要が無いからに決まってるだろ。人喰い虫なんぞいつでも葬れるし、貫通持ちのランス・リンドブルムもいるしな)

(ああ、なるほど。まあどっちにしろこのターン雷仙人を守り抜けば赤石の勝ちだな)

(モンスターは全部見えた。残るモンスターはお互い3体ずつ。でも機動砦のギア・ゴーレムを倒せない上に麗梨さんのフィールドに罠は無く、向こうにはまだ4枚もある…勝てる方法はあるの?)

綾芽は彼女の顔を見る。

(…気のせい?)

いつもの冷静な彼女の顔のはずだが、綾芽には彼女が笑っているように見えた。

それだけではない。綾芽は赤石の顔も見るが、彼女同様笑っているように見えた。

綾芽は戦況を見つめる瑞希に小声で話しかけた。

(中根さん)

(ん?なに?)

(あなたがもし麗梨さんの立場だったら、このターンどう動きますか?)

(うーん、そうね。まずランス・リンドブルムで雷仙人に攻撃するか。通れば戦闘ダメージと合わせて5300削れるしね。あ、罠も発動してくると考えたら5800かな)

(…そのあとは?)

(そのあとはえーと……あれ?)

瑞希はその後の追撃が出来ないことに気付く。

(もしかして、れーりちゃん勝てない…!?)

「《ステルスバード》を裏側守備表示にします」《ステルスバード》表守

↓裏守

彼女は数秒時間を置いたあと、

「わたしの《ランス・リンドブルム》であなたの《ランス・リンドブルム》に攻撃します」

攻撃宣言 彼女LP3000→5000∥2500

最後の攻撃宣言をした。

(麗梨さん……!)

(あいつバカだ!相打ちにしてくるとか)

(もう勝てないとわかって適当にやってんだろ)

(1万か2万くらいもらえないかな?)

赤石は真ん中のカードを選択する。

「罨発動」

その時、準備室の扉が勢いよく開く。

「やばい!先公来た!」

見張りの男子生徒が室内へと向かって叫ぶ。

「げっ!マジか!」

「カード隠せ隠せ!」

室内が慌ただしくなる。

「おい、早くそれ仕舞え」

赤石は彼女に札束を押し付けると、彼女もすかさず受け取り懐に仕舞う。

「なんだあお前ら!ここで何やってんだ!」

証拠隠滅が完了した直後、教師が室内へと入ってくる。

「何もしてませんよ」

赤石が全く動じず答える。

「ああ!?そんなわけないだろう!こんなところで何やってたんだ赤石!」

はあ、と呆れたように息を吐く赤石。

「その女子生徒にきいてみればいいじゃないですか」

赤石は彼女たちに視線を向ける。

「おい！その女子！お前ら」

教師が彼女たちの顔を見るとそれまでの怒号が嘘のように静かになる。

「鈴瀬！に小松まで…！何故こんなところにいる？」

「勉強とかお話とかしてました」

彼女も全く動じず答える。

「何だど？そんな見え見えの嘘で騙されると思っているのか!？」

「嘘は、ついてません」

彼女はやはり動じず答える。

嘘をついているとは到底思えない口ぶりを見て教師も強く言えなくなつた。

「…まあ、鈴瀬が言うなら今日は見逃してやろう」

(けつ、赤石とまるで態度が違うじゃねーか)

(女子に甘いからな、あの先公)

「だが勉強するなら図書室へ行け。ここはそういう場所じゃない。分かったな？分かったらさっさと出て行け」

「へーい」

教師は生徒たちに退室を促す。

「おい、鈴瀬、小松、中根。お前らはちよつと残れ」

彼女たちも退室しようとするが教師に呼び止められた。

「もう一度きくが、本当はあいつらと何してたんだ？」

男子生徒たちが退室したあと、準備室の椅子に腰かけた教師が再び問う。

「勉強とかお話とかしてました」

「…そうか」

再現するかのよう同じやりとりをする。

「分かった、何をしてたかはもうきかん。ただひとつ忠告をしておく」

「平和に学校生活を送りたければ赤石と関わりあうな」

教師は険しい顔をして忠告する。

「どうしてですか？」

「あいつは成績こそいいが、【桑鴉】の連中としよっちゅう暴行事件を起こしてる問題児なのだ」

桑鴉（クワトキ）とは隣町にある高校の名。ちなみに彼女たちの通っている学校は桐縹（キリハナダ）高校。

なお彼女の家からだ桑鴉高校の方が僅かに近かったりする。

「桑鴉はうちに比べて偏差値がかなり低い。こう言っちゃあれだが、ろくでもない生徒ばかりだ」

「そんな奴らと暴行事件を起こす赤石もろくでもない奴だというのは分かるな？」

「そんなこと無いと思いきー」

教師は綾芽が言い終わる前に睨み付ける。

「い、いえ何でもないです」

「とにかく赤石と関わるな。お前らも巻き添えを食らうことになるぞ」

彼女たちは教師の話を黙って聞いている。

「分かったら帰ってよし。赤石らが待ち伏せしてるかもしれないから校門まで送ってやる」

「い、いいですよ！そこまでしなくても」

「お前らは赤石の怖さを知らんだ。奴は女子だろうと躊躇いなく暴行を働くからな」

瑞希は断りの言葉を入れるが、結局教師は校門までついて行った。もちろん待ち伏せなどされてはいない。

「気を付けて帰るように、ではまた明日」

「さようなら」

彼女は教師に挨拶して帰路についた。

（けっ、鈴瀬を赤石なんぞに渡してたまるか）

彼女たちが見えなくなると、教師は校舎へと戻って行った。

### 3話 #15 「同じ話の帰り道」

―――帰り道

「ちよつとあの先生ひどくなかった？赤石さんのこと悪く言い過ぎっ  
ていうか…私はそんな人には見えなかったけどなあ」

「私も悪い人には見えませんでした。むしろ一生徒のことをあそこま  
で言う先生の方が」

「だよねだよね！」

瑞希と綾芽もあの教師のことを良くは思っていないようだった。

「でもあのタイミングで来たのは良かったよね。ほら100万はちや  
んとれーりちゃんを持つてるし！」

「来なくても、同じだった」

「同じ、って？れーりちゃんどういうこと？」

―――別の帰り道

「あの先公邪魔しやがって、おかげで100万取り損ねちまったぜ」

「赤石よお、何であの時100万返したんだよ？勝ち確定だったろ？」

男子生徒の1人が赤石に疑問を呈す。

「本当にそう思うか？」

―――

「最後に赤石さんが発動した罠ですか？」

綾芽は彼女にきき返す。

「あ！私見たよ、確か」

―――

「《邪神の大災害》だったよな？」

「ああ。その後すぐに他のカードと混ぜてちよつとしか見えなかったけど、確かにそれだった」

「でもさ、そうだとしても赤石勝ってただろ？」

男子生徒たちに赤石は呟くように言う。

「LP計算してみな」

――

「えーっと、れーりちゃんのターン開始時に7500と3000で、れーりちゃんの攻撃に赤石さんの罠発動で…」

「ターンエンド時点で7000と2500ですね」

瑞希より一足先に綾芽の計算が終わる。

「あーっ、私も今計算終わったのにー！」

(その結果フィールドに残ったカードは…)

悔しがる瑞希をよそに綾芽は記憶を掘り返す。

――

「《ランス・リンドブルム》同士が相打ちになって…」

赤石 LP7000

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ う ◇ ◇ い

いⅡ 《機動砦のギア・ゴーレム》表守

うⅡ 《雷仙人》表攻

イⅡ 《ステルスバード》裏守

ウⅡ 《人喰い虫》表守

◇ イ ◇ ◇ ウ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼女 LP2500

「フィールドは、こうだな」

「LP差4500もあるし余裕で赤石の勝ちなんじゃねえの？」

男子生徒たちは赤石の勝ちを疑わない。

「まだ気付かねえか？」

――

綾芽はその場で立ち止まる。

「小松さん？どうさ」

「ああーっ！」

瑞希が言い終わる前に、綾芽は手を口に当て大きな声を出す。

「ちよ、小松さん!？」

「…勝ってます」

「買ってる？って何を？」

「あのデュエル、麗梨さんが勝ってます！」

「!？」

――

「はあ？何言ってるんだ？」

「いや勘違いかと思って2回計算したんだけど、やっぱりそうなっちゃまうんだ」

「もう1回最初から計算してみろよ、俺も考えるわ」

「ああ。まず赤石のモンスターは《ステルスバード》を倒せない」

「おう」

「だからダメージを与えるには《機動砦のギア・ゴーレム》で直接攻撃するしかない」

「おう」

「次に《ステルスバード》は毎ターン1000ダメージを与えてくる」

「おう」

「だから《雷仙人》で攻撃して毎ターン表にしておく。放置するよりこっちの方が少ないダメージで済むからな」

「おう」

「その2つの攻撃を毎ターンやる」

「おう」

「計算してみろ」

### 3話 #16 「違う思いの帰り道」

――

「えっと、《機動砦のギア・ゴーレム》の直接攻撃でれりちゃんに800ダメージ。赤石さんもマイナス800。《雷仙人》で《ステルスバード》攻撃の反射ダメージが200。それに攻撃のコスト500が2体で…」

「れりちゃんがマイナス800で赤石さんがマイナス2000だ！」

瑞希は計算が出来たからかちよっぴり嬉しそうに結果を言う。

「そしてそれを毎ターンマイナスしていつて…」

――

「赤石がそれを3回繰り返した後は…」

赤石 LP1000

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ う ◇ ◇ い

い || 《機動砦のギア・ゴーレム》表攻

う || 《雷仙人》表攻

イ || 《ステルスバード》表守

ウ || 《人喰い虫》表守

◇ イ ◇ ◇ ウ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼女 LP100

「こういう感じになる」

「おう。…あ！」

「ああ、《機動砦のギア・ゴーレム》が直接攻撃するのに必要なLPに足りてねえんだ。

800だけでなく、それとは別に500も必要だからな」

「マジだ…」

「確かに赤石の負けだ…」

男子生徒たちはようやく赤石が負けていたことに気が付いた。

――

「れーりちゃん勝ってた！あのルールれーりちゃん初めてだったんでしょ？すごいよ！」

「はじめてだった」

「さすがれーりちゃん！」

綾芽は彼女を見ながら考える。

（麗梨さんがすごいのはそれだけじゃない…100万を失うかもしれないデュエルだっていうのに表情ひとつ変えず、しかもあの短い時間での的確な判断力…本当にすごい。だってもし《雷仙人》を攻撃していたら…）

――

「なあ、もしあいつが《雷仙人》を攻撃してたらどうなってたんだ」

「あ？それはだな」

「そうだったら、俺はそもそも罠を発動しねえよ」

赤石は口を挟むように呟く。

「発動しない？何でだ？」

「…あ！そうかなるほど！」

男子生徒の1人が赤石の言葉の意味に辿り着く。

「説明頼むわ」

「あいつのターン開始時のこの状況から」

赤石 LP 7500

裏 ◇ 裏 裏 裏

◇ う あ ◇ い

あⅡ 《ランス・リンドブルム》表攻

いⅡ 《機動砦のギア・ゴーレム》表守

うⅡ 《雷仙人》表攻

アⅡ 《ランス・リンドブルム》表攻

イⅡ 《ステルスバード》表守

ウⅡ 《人喰い虫》表守

◇ イ ア ◇ ウ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼女 LP 3000

「《ステルスバード》は裏になり、《ランス・リンドブルム》の攻撃で赤石が毘発動せず《雷仙人》が破壊されて」

赤石 LP 2200

裏 ◇ 裏 裏 裏

◇ ◇ あ ◇ い

あⅡ 《ランス・リンドブルム》表攻

いⅡ 《機動砦のギア・ゴーレム》表守

アⅡ 《ランス・リンドブルム》表攻

イⅡ 《ステルスバード》裏守

ウⅡ 《人喰い虫》表守

◇ イ ア ◇ ウ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼女 LP 2500

「エンド時にこうなる」

「ああ」

「赤石のターンになり、《ランス・リンドブルム》の攻撃で《ステルスバード》を破壊すると」

赤石 LP1700

裏 ◇ 裏 裏 裏

◇ ◇ あ ◇ い

あⅡ《ランス・リンドブルム》表攻

いⅡ《機動砦のギア・ゴーレム》表守

アⅡ《ランス・リンドブルム》表攻

ウⅡ《人喰い虫》表守

◇ ◇ ア ◇ ウ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

彼女 LP2400

「エンド時にこうなる」

「ああ」

「あとは《ランス・リンドブルム》同士で相打ちさせて、《機動砦のギア・ゴーレム》の攻撃で《人喰い虫》を破壊すれば」

ー

（赤石さんのLPが700残り、麗梨さんのフィールドのカードが0になって負けていた…!）

綾芽は下を向きながら歩く。

「どうしたの」

彼女は綾芽に声をかける。

「い、いえ…あんなデュエルが出来る人がいるんだなあ、って…」

綾芽は心底感心している。

「運が良かった」

彼女は冷静なまま返す。

「運が良いだけじゃあんなデュエルはできないよ！ほんとすごいよれーりちゃん！惚れ直しちゃった！」

瑞希は先程からしきりに彼女を褒めている。

「ありがとう」

「ところでれーりちゃん、気になってたんだけど…」

「うん」

「最初のほう、何にもしなかったよね？3ターンくらいかな、どうして？」

「それは…」

### 3話 #17 「友達とこれからも」

――

「は？じゃあ何か、あいつは最初からこの決着が見えてたつてののか!？」  
「そこまでは言ってるねえ。だが、それに近い結末を狙ってたのは確か  
なはずだ」

彼女は当然ながら様子見だけでターンを消化していたわけではな  
い。

自分のフィールドに《聖なるバリアー―ミラーフォース―》が、赤  
石のフィールドに《邪神の大災害》があると仮定しての行動だ。

1枚で多大なアドバンテージが取れるこの2枚がそれぞれの  
フィールドにあると決め打ちしてデュエルを進めていた。

前者は外したが後者は当たり。4枚差あった罫のアドバンテージ  
は対等になった。結果的にそうなったこと自体に意味は無かったが。

赤石も彼女の戦略は読んでいた。しかし結果はこの通りだ。

運命を司る神が最後に味方したのは彼女の方だった。突き詰めれ  
ば、ただそれだけのこと。

「おいおい、マジかよ…《邪神の大災害》が赤石のフィールドに無かつ  
たら、それだけで終わりのデュエルだったんじゃないか…」

「あいつ本当に高1か…!？」

「つーか赤石負けとか信じらんねえよ…！運良すぎだろあいつ」

男子生徒は今更ながら赤石が負けた事実にはショックを受けている  
ようだ。

そんな男子生徒たちに赤石は、ただ一言

「運なんかじゃねえ、『度胸』で負けた」

と呟いた。

――

(赤石さんもすごいけど、麗梨さんはもっと…敵わない。私なんかじゃ一生こんなデュエル出来ない…)

彼女の話聞いた綾芽は彼女に対し尊敬と畏怖の念を抱く。

「うわあ、すごいーれーりちゃんプロみたいー！」

同じくそれを聞いた瑞希はひたすらにすごい、といった感じで彼女を褒めていた。

「綾芽」

彼女は綾芽を呼ぶ。

「は、はい」

「友達で、いてほしい。住んでる世界が違うなんて、寂しい」

彼女は表情こそ変えないものの、その言葉から溢れ出た寂しさは綾芽にしつかりと伝わる。

「麗梨さん…」

綾芽の無力感故に出た言葉が彼女の心に残っていた。その事実を綾芽は重く受け止める。

「ごめんなさい…あのデュエルを見てたら、麗梨さんがとても遠く感じて、私なんか友達でいいのかなって…」

綾芽は上手く頭が回らず断片的な言葉を紡ぐ。

「わたしはここにいます。綾芽の友達として、これからも」

彼女は綾芽を優しく抱きしめる。

「麗梨さん…！ううっ…！」

綾芽は彼女の腕の中で堪えきれず涙を流した。

「綾芽」

「はい…」

「こけたのは、わざと？」

彼女は綾芽にだけ聞こえるように耳うちする。

「あ…」

綾芽は準備室に入る前のことを思い出す。

「も、もちろんわざとです。メガネが無くてもしれなりに見えますよ」

綾芽も小声で返す。

「ケガは、してない？」

「はい、大丈夫です」

「よかった」

(あそこまで派手にこける予定は無かったんだけど…恥ずかしいので秘密にしておきます)

彼女たちは帰り道を歩く。

「それじゃあ私、家こっちだから」

瑞希は2人とは別の道へ行くこうとするが、

「あつ、待って中根さん」

綾芽が瑞希を呼び止める。

「瑞希でいいよ」

「えっ?」

「というか瑞希って呼んで欲しいな。私たち、その、友達でしょ」

瑞希はどこか照れくさそうだ。

「み…瑞希さん」

「あはは、私も『さん』付けなんだね」

「あ…」

「いいいいいよ!私もあやめちゃんって呼んでいい?」

「…はい、もちろん!」

「ところであやめちゃん、私に何か用だった?」

綾芽は瑞希を呼び止めた理由を思い出す。

「あ、えつと…」

「ん?」

「今度私とデュエルしませんか?…瑞希、さん」

綾芽は少し照れくさそうだ。

「…うん、もちろん!」

瑞希は笑顔で返事をした。

彼女は2人と別れ、帰り道を歩く。

日は沈み、時刻は18時を過ぎていた。

(大切なものは、ちゃんと守れた)

(デュエルとは関係ないところでも。だから…)

彼女は心の中で

(わたしの、勝ちです)

勝利宣言をした。

なお、次の日より、生徒が校内でいじめを目撃することがほとんど無くなったという。

【第3話 終】

## 4話 #1 「回り道」

――4月某日（物語開始から1カ月前くらい）

『なー兄貴、今日学校の帰りに洗剤買ってきてくれない？いつものやつ』

『ああ。洗剤だけでいいの？』

『うん』

赤石は学校の帰り道、今朝の会話を思い出す。

（まさか2件とも品切れとはな…ついてねえ）

赤石は桐縹高校の近くの薬局とスーパーマーケットの2件に足を運んだものの、どちらにも目当ての品は無く、少し遠くの大形ショッピングモールでようやく手に入れることが出来た。今はその帰りだ。（そっぴいこの辺は桑鴉のシマか）

桑鴉の制服を着た学生がちらほらと見かけるようになっていた。

（あんまり通りたくなかったが、わざわざ遠回りするのも面倒だ）

学生たちの一部は赤石を遠巻きに見たり、こそこそと噂話したり、目を逸らして関わりたくないようにしようとしている。

（おいあいつ赤石じゃねえか！）

（なんでここにいるんだよ）

（まさかまた喧嘩してきたとか!?!）

（バカ！目を合わすな）

（あいつとやり合うのはマジ勘弁だわ…）

小さな声があちこちから発生している。

（まあ、遠くから言ってくる分には気にしねえが）

赤石は気にせず歩いた。

（あ?）

しばらく歩いたところで赤石は立ち止まる。

「なあ桜（サクラ）ちゃんの番号教えてくれよ」

「じ、自分できいてよ」

赤石は人通りの少ない路地を曲がり、話声がする方へ行く。

「俺B組だからあんまり会えないんだよねえ」

「いいじゃん教えてくれよ、なあ」

「い、嫌です…」

桑鴉の制服を着た男子学生4人が、同じく桑鴉の制服を着た1人の女子生徒に詰め寄っていた。周囲に人はいない。

「ああ!?!痛い目見たいんかコラ!?!」

「いつ…!」

女子生徒は男子生徒の威圧に怯む。

「おい、てめえら」

男子生徒が女子生徒に掴みかかる寸前、赤石はドスの利いた声を飛ばした。

「ああ?なんだお前?」

「そいつ嫌がつてんだろうが。離しな」

赤石はゆつくりと近づく。

「は?お前には関係ないだろ」

「つかお前誰?ヒーロー気取りとかならやめてくんね?」

男子生徒たちが赤石の方に近づく。

(まあ、口で言っても聞かねえわな)

男子生徒たちが女子生徒から離れたのを確認すると、赤石は手招きをした。

「おつ、4対1でやるつもりだぜこいつ!」

「ラッキー!ストレス発散しまおうぜ!」

男子生徒たちは戦闘態勢に入る。

「来な」

赤石の言葉と同時に男子生徒たちは殴りにかかった。

「…え?」

男子生徒の1人が目の前で繰り広げられた光景を理解出来ずにい

る。

赤石は数秒足らずで3人の男子生徒を片付けてしまっていた。3人は揃ってうずくまっている。

「おい」

赤石は無事な男子生徒に声をかける。

「は、はい！」

男子生徒は思わず声がうわずる。

「そいつら連れてさっさと失せろ」

「ひーっ！」

赤石がそう言うのと男子生徒たちは尻尾を巻いて逃げ出した。

「あ、あの！」

赤石は路地へと戻る直前、女子生徒に声をかけられる。

「あ？」

「助けてくれてありがとうございます。お礼がしたいので連絡先を……」

「いいよ別に」

「で、でも」

「気をつけて帰れよ」

赤石は振り返らず路地へと戻って行った。

(…)

女子生徒は遠ざかる赤石の背中をぼーっとしばらく見つめていた。

「ただいま」

「おかえり、遅かったな」

「色々あってな。洗剤、洗面所に置いとくぞ」

「うん、ありがとう。ごはんもう出来るから」

赤石は洗面所から戻り私服に着替える。食卓には既にいくつか料理が並べられていた。

「おお、今日はハンバーグか」

「肉じゃなくて豆腐なんだけどな。豆腐が安かったから久しぶりに作ってみた」

赤石は食事中、今日の帰り道のことを思い出す。

「なあ、桑鴉での生活はどうだ？」

「いきなりどうしたんだよ」

「別に意味は無えよ、なんとなくだ」

「そうだな…まあまああってとこだな。友達もできたし」

「ほお、そいつは珍しー」

赤石が言い終わる前に、対面の少女は赤石のすねを蹴った。

「いてえな」

「珍しくて悪かったな」

「悪いとは言ってねえよ」

赤石はすねを手で撫でる。

「まあ、でも何かあったら言えよ？お前を守るためなら何だってしてやるからな」

「あー…うん、頼りにしてる」

対面の少女は照れくさそうに視線を逸らす。

（つたく、何でうちの兄貴は真顔でこんなこと言うかなあ…）

しかし少女はまんざらでもない感じだ。

（…でも本当に頼りにしてるよ、兄貴）

――翌日、桑鴉高校

「それでね、その助けしてくれた人がすごくかつこよかったの！」

「ふーん」

「でも連絡先教えてもらえなかったの…また会えるのかな」

「何か手がかりとかねーのか？」

「えっと、かつこよくて背が高くて…あ、桐縹の制服着てた！桜ちゃん何か知らない？」

「知らねーよ。そんな奴そこそこいるだろうし」

「そうだよね…うーん」

少女は考え込む。

「ま、そのうち会えるだろう」

「そうだといいなあ」

「…ありがとな」

「えっ?」

突然のお礼の言葉に少女は戸惑う。

「守ってくれたんだろ? あたしの情報」

「そ、そんな大したことしてないし、そもそも私守られた側だったし…」

少女は本当に大したことはしてないといった感じで伝える。

「そうか。でもアイコが無事で良かったよ、あたしもそいつに感謝しないとな」

ーーー同日放課後、帰り道

「じゃあ桜ちゃん、また明日!」

「おう」

(アイコの奴、助けられたのが相当嬉しかったみたいだな。…帰り際ずっとその話されるとは思わなかった)

少女は帰り道の途中にあるスーパーマーケットに入店する。

(さて、今日の夕飯どうすっかなー。昨日は確か…)

少女は安売りされている品々を見る。ラインナップは昨日とあまり変わらないようだ。

(さすがに2日連続で豆腐ハンバーグは、無しだな)

## 4話 #2 「兄との違い」

――赤石とのデュエルの翌日

「赤石が負けたってマジか!？」

「ああ、そうみたいだぜ」

「誰に負けたんだ？」

「1年の鈴瀬って女子だつてよ」

「1年の女子!?!しかも鈴瀬ってあの鈴瀬か!？」

「知ってるのか？」

「知ってるも何も一時期噂になってただろ、すげえかわいい1年がいるって」

「すごいね、噂がもうこんなに広まってるとは…赤石さんって何者なんだろう?！」

瑞希は話の速さと赤石の影響力に驚く。

時折教室に彼女を覗きに来る生徒も現れ、教室前は異様な賑わいを見せていた。

「赤石さんの話をしてるのは主に上級生たちみたいですね」

綾芽が来訪者の傾向を分析する。

「授業始まるよ」

当の彼女はというと我関せずといった様子でいつも通り冷静なまま席に就いていた。

「相変わらずだね…れーりちゃん」

――昼休み

「ねえ、杉野」

「な、中根か…何だよ」

杉野は瑞希に視線を合わせないようにしている。

「ききたいことがあるの」

「もうあいつらには、許してもらおうまで謝ったぞ」

「…赤石さんに言われて？」

「あ、ああそうだ。…その、悪かった。すまん」

杉野は瑞希に頭を下げる

「もういいよ気にしてないから。…っていうかききたいことはそうじゃないの」

「あ？違うのか？」

「赤石さんってどんな人なの？」

――同日、桑鴉高校

「おい！桐縹のダチから聞いたんだが赤石がデュエルに負けたらしいぞー！」

「マジか！誰にだよ!？」

「同じ桐縹の1年らしい」

「後輩に負けたのかよ！どんな奴なんだ？」

「さあ？そこまでは知らん」

「なんだよ、聞いてねえのかよ」

「桜ちゃん！上級生が話してるのってもしかして…?」

「あー…たぶん兄貴のことだと思う」

「お兄さん何か言ってた？」

「いや、何も聞いてない」

「そうなんだ。桜ちゃんのお兄さんに会ってみたいな。どんな人なのかなー」

「…」

(兄貴、負けたのか…相手、どんな奴なんだろうな)

「よう赤石！兄貴負けたんだってな」

上級生と思われる男子生徒が桜に話しかける。

「…それが？何か用？」

「あいつも人間だったってことだな！妹のお前はどう思ってた？」

「別に。負けることだってあるだろうよ」

（つか、人間じゃなきゃ何なんだってんだ…）

桜も赤石の敗北に若干ショックを受けていたが、気にしていないような素振りで答える。

「またまたあ、そんなこと言って悲しんでんじゃねえの？自慢のお兄ちゃんが負けちゃったようってな！」

「…」

（…こいつ、うぜえな）

桜は無言で男子生徒を睨む。

「おーおー怖え。目付きだけじゃなくて睨むと怖えところも兄貴そつくりだ。兄貴直伝のガン飛ばしかあ？かわいい顔が台無しだぜえ？」

「うるせえな、用が無えなら失せろ」

「おほー！妹が言うともまた一味違うねえ」

男子生徒はそう言う調子が一変し、けわしい顔つきになる。

「けどお前は兄貴じゃねえ。力の無い奴がそんな言葉つかつても痛い目を見るだけだぜ？」

「…なら試してみるか？」

――

「赤石先輩はケンカもデュエルも半端なくつえーらしいぜ。まあ、他の先輩方から話を聞いただけで、実際にやってるとこは見たこと無いんだけどな」

「へえ、そうなの」

「見た目だけじゃなくて性格もすげえ良いらしくて、先輩方はみんな慕ってるな。詳しいことが知りたかったら先輩方からきいた方がいいぞ」

「うん、そうしてみる」

（話を聞く限り、ただの不良のリーダー格って感じじゃなさそうね）

「桜ちゃん！」

「アイコは下がってな」

「おっと、やる気になってるとこ悪いけど、俺は女相手に殴り合いのケンカするつもりは無いんだよね」

男子生徒はポケットに手を入れ

「兄貴の負けた記念だ」

デツキを取り出した。

「!……てめえ」

「妹の実力を計ってやろう」

「おい森下（モリシタ）が赤石妹とデュエルするぞ！」

「マジか！兄貴のかたき討ちか!？」

「妹の方も強いのか？」

「初めて見るからわからん」

「つーかやっぱかわいいな！兄貴がああ赤石とか信じたくねえぜ」

「目付きとか目元似てるよな」

「森下！兄貴にボコられたからって妹に仕返したあそれでも男かあ!？」

ギャラリーが続々と集まる。主に上級生だ。

「るせー！てめえこそコイツにストーカーして兄貴に見つかってシメられて泣いてたじゃねえか！」

森下は飛んできた野次のひとつに言い返す。

「なっ！てめえ話盛ってんじゃねえ！ちよっとなつていったただけだ！」

「うわあ引くわ」

「ださすぎ」

「まあ外野は無視して、始めようぜ」

森下はデツキを机に置く。

「待てよ、あたしそれあんまり知らないんだけど？」

「あん？赤石妹のくせにデュエル知らんのけ？」

「…何か文句あつか？」

「困ったなあ。どうやって白黒つけようか。うーん困ったなあ…」

桜はあからさまに不機嫌な顔で森下を睨む。

「ケンカは出来ないしなあ」

「…もう帰れよ。相手にするだけ無駄だわ」

そう言つて桜が席を立つた瞬間

「!?桜ちゃん！危ない！」

ドゴツ！

「がはっ…！う…！」

藍子（アイコ）の叫びと同時に、森下の蹴りが桜の横っ腹に命中した。

「桜ちゃん！大丈夫!？」

藍子は桜に駆け寄る。

「ああ…大丈夫だ」

桜は横っ腹を抑えて痛みに顔を歪めている。

「ちよつと！殴り合いはしないんじゃないやなかつたんですか!？」

「ああ、殴り『合う』つもりは無いよ。見たらわかるだろ。これでも手加減してやったんだぜ？」

森下は桜のもとに歩み寄り、指で顎を上げる。

「あんまり上級生なめんなよ？二度とその生意気な口きけなくしてやろうか？ああ!？」

「ぐ…！」

桜はじわじわとした痛みを耐えながら森下を睨む。

「…ちっ、赤石の妹つっても所詮はただの女の子か」

森下は指を離し桜がゆっくりと立ち上がる姿を眺める。

「…てめえ、覚悟しろよ」

「ほお？モロに食らっておきながらそんなセリフ吐くとはねえ」  
(もう一度蹴つてもいいが：蹴るよりはこっちの方が効果がありそう  
だ)

森下はニヤリと笑う。

「男っぽい言葉遣いしやがって：ついてねえくせによ！」

桜が立ち上がった瞬間、森下は足で桜のスカートを思いつきりめくった。

「!?」

「おおー！」

「白だ…！」

「森下グツジヨブ！」

「う…」

桜は下を向いてプルプルと震えている。

「お？泣くのかあ？パンツ見られたくらいでよお？」

「泣くわけ…ねーだろ!!」

桜は森下に殴りかかる。

「桜ちゃんやめて！落ち着いて！」

が、藍子に制止される。

「アイコ離してくれ！こいつだけは…！」

「おーおー感情的になっちゃって、それじゃあケンカには勝てねえぞ」  
森下は桜を煽っていく。

「冷静になっってば！」

「離せ！ー発だけでもこいつを殴らせろ！」

なおも殴りかかろうとする桜に藍子は意を決し

「お願いだからやめてよ!!桜ちゃんがこれ以上傷つくの見たくない  
!!!」

力いっぱい声を出した。

「!…」

桜の動きは止まり、藍子は「はあ…はあ…」と息をついている。

「ほお？お前のダチは賢明なようだな」

「…森下先輩」

藍子は森下を強い眼差しで見つめる。

「あ？何だ？」

「私が変わりに白黒つけます」

藍子は懐からデツキを取り出した。

「あ、アイコ…!？」

「私が勝ったら桜ちゃんに謝って下さい」

「…おもしれえ。俺が勝ったらお前ら2人、逆に土下座でもしてもらおうか」

## 4話 #3 「抑止力」

――

(あれ?あの人は…)

瑞希は階段を下りる途中、ある男子生徒に遭遇する。

「あのー!」

「ん?…あ、お前は確か」

昨日のデュエルで見張り役をしていた1人だ。

「はい、1年の中根です。少しお聞きしたいことが…」

男子生徒は瑞希の疑問に答え始めた。

「去年の秋にな、桑嶋の奴らが『狩り』と称してうちの奴らを何人もボコってな、金を巻き上げられるということがあったんだ」

「えっ!?それって犯罪じゃ…」

「ああ。だがそいつらでつかいマスクで顔隠してたし、何よりサツに言えばさらに狩りをすると言いやがった」

「ひどい…!」

「仕返ししようにも顔がわからんし、集団でいると襲って来ねえしで、厄介な連中だったんだわ」

「ある時、その話を聞いた赤石が自らおとりになるって言いだしてさ、1人で桑嶋のシマをうろつき始めたんだ」

――去年の秋

「おい、護衛無しとか正気か!?!」

「ああ。どうもあいつらは俺らが思っている以上に慎重な奴らみてえだしな。近くに誰もいないと判断されない限り襲って来ねえだろうよ」

「心配するな。何かあったら連絡するからよ」

自分を心配そうに見つめる男子生徒たちにそう言い残すと赤石は教室から出て行った。

――桑嶋学区内某所

「おい、見ろよ！桐縹の奴が1人で歩いてるぜ！」

「絶好の獲物だな。次の道曲がったら、やるか」

大きなマスクをした6人組の少年たちが、赤石の背後からじりじりと詰め寄る。

(その日のうちにお出ましか。ついてるな)

赤石は後ろを振り返った。

「なあなあ、その兄ちゃんよお、お金置いてつてくれないかなあ？痛い目に会いたくないだろお？」

「お前らか。桐縹の生徒を狩ってるとかいう雑魚共は」

少年たちの目付きが険しくなる。

「あ？今なんつった？」

「おいおいこんな状況のわからない馬鹿は初めてだなあ」

「今謝ったら全治1週間くらいで許してやるよ？」

「いいから来な、雑魚共」

赤石は手招きをする。

「てめえ！半殺しにしてやるわ！」

ほぼ同時に少年たちは赤石に向かって行った。

――

「《椿姫ティタニアル》でダイレクトアタックします」

「う……くそー！」

森下LP↓O

場が一瞬静まり返る。

「おいおいマジかよ…」

「あの女結構つえーぞ！」

「今度植物組むわ」

「勝った…のか？」

桜は勝者が藍子だということを雰囲気で察しているが、デュエルというものをあまり知らないので一応確認する。

「…」

しかし藍子は黙ったままだ。

「…アイコ？」

「…あつ、うん。勝ったよ桜ちゃん！」

数テンポ遅れて藍子は桜に笑顔を向ける。

「そっか、ありがとな」

桜もそれに応え笑顔を見せた。

(何かアイコの表情がいつもと違う感じがしたが…気のせいか)

「おい森下！ぼーつとしてねえで謝れ！」

「そうだそうだ！男なら約束守れー！」

「土下座しろ土下座！はい土下座！」

観戦していた男子生徒の掛け声と共に土下座コールが巻き起こる。

「う、うるせえ！土下座は要求されてねえだろうが！謝れと言われただけだ！」

森下は男子生徒たちに言い放つと、

「…す、すまん。俺が悪かった、俺の負けだ」

桜に頭を下げてぎこちなく謝った。

森下は謝る気が無かったが、男子生徒たちが見ている手前、約束を反故にすることは出来ない。

それを聞いた桜は藍子に一瞬視線を向けてから

「しゃーねえ、今日のごとは忘れてやる」

と穏やかな声で言った。

――

マスクをした少年たちは揃ってうずくまる。

(くそっ！なんなんだこいつは…！)

(桐標にこんな奴がいるなんて聞いてねえぞ…！)

赤石は少年たちに近付くと1人1人、マスクを剥がしていった。

「ほお、そんなツラしてたのか」

「ぐっ、てめえ何者だ…!?!」

「俺は2年の赤石だ。お前らは桑鴉のどいつだ？」

少年たちは答えない。

「まあいい、てめえらのツラは覚えたからな。次狩りなんぞふざけた真似しやがってみろ、こんなもんじゃ済ませねえぞ！」

赤石の睨みを利かせた剣幕に少年たちはただ恐れ慄いていた。

――

「それ以来狩りは無くなったんだが、それから2週間後くらいだったか。桑鴉の奴らが赤石を呼び出したんだ」

「さすがに赤石1人で行かせるわけにはいかんかったから、俺らも結構な人数で行ったわけよ。そしたら20人くらいが鉄パイプだの金属バットだの武装して待ち構えてやがったんだ」

『「やべえ殺されるかもしれねえ」って思ってた俺らが後ろで尻込みしてたら赤石の奴、何の躊躇いも無く突っ込んで行ってな」

「だ、大丈夫だったんですか…!?!」

瑞希は目を大きく見開いてきく。

「ああ、大丈夫も何も無傷だったよ。ばったばった薙ぎ倒していくのを、すげえって思ってたばーっと見てたら『早く武器を回収しろ!』って赤石に怒鳴られちゃった、ハハハ」

「それがあってから桑鴉の奴らはもうケンカ売らねえだろうな、って

思ってたんだがまた2週間後くらいに赤石を呼び出してな」

「ほえー…」

(懲りないね…)

「前と同じようについて行ったんだが、どういうわけかデュエルで白黒つけようって言いだしてな、ケンカじゃ勝てねえって思ったんだろ  
うな」

「まあデュエルでも赤石が完勝さ。奴らは赤石が体だけの男だとも  
思ったんだろが、あいつは頭も相当キレるからな。どのみち勝ち目  
は無かったってわけだ」

「すごい人なんですね…!」

「ああ、あいつはすごいよ。赤石がいる限り桐縹は安泰さ」

「裏を返せば、赤石が卒業してからが問題だな。今の1、2年に赤石レ  
ベルの抑止力を持つ者はまず居ねえだろうし」

「…また狩りが再開される可能性がある、と?」

「そうだな。抑圧されてた分、何してくるかかわかんねえ」

「…」

空気が重くなる。警戒すべき相手は同じ高校生とは思えない輩た  
ち。

「ま、そう心配するな。卒業するまでにはケリを付けるようにはする  
さ。無責任な先輩だと思われたくねえしな」

男子生徒は携帯電話を取り出し時間を確認する。

「おっと、そろそろ戻るわ。昼休み終わっちゃう」

「あ、お話してくれてありがとうございました!」

「おう」

男子生徒は3年の教室があるフロアへと戻って行った。

(れーりちゃん、すごい人に勝ったんだね…)

(そういえばみんな、デュエルに負けたって聞いてもれーりちゃんが  
すごいって言うって、赤石さんが弱いって言う人は誰もいなかったな  
あ…)

(すごい人って意外と身近にいるんだね…つと、私も戻らなきゃ)  
瑞希も自分の教室へと戻って行った。

――帰り道

「桜ちゃん、まだ気にしてる?」

藍子が桜に問う。もちろん今日の森下との一件だ。

「あたしき、桑嶋に入った時からこういうことは覚悟してたんだ。なのに…!」

桜は下を向きながら歩く。

「ケンカに負けるならまだしもアイコまで巻き込んだ…! あたしのせいで…!」

桜は悔しさをあらわにする。

「…桜ちゃん、それは違うよ。私は桜ちゃんを守りたくて勝負したの」「私、いつも桜ちゃんに守ってもらってばかりだから…ケンカはできないけどデュエルなら、ってね」

「それとも桜ちゃんは私に何かあるたびに『こいつ、また巻き込みやがって』とか思ってたりするのかな…?」

藍子は悲しそうに問う。

「んなわけねーだろ。友達を守るのに理由なんてねーよ。…あ」

桜は自分の発言が、藍子が自分に対して抱いてる『それ』と同じということに気付く。

「よかった」

そんな桜に藍子は笑顔で答えた。

「…でもさ、やっぱりケンカじゃ男には敵わねえのかな。不意打ち食らったとはいえ一撃であのザマじゃあ…」

「力だけが全てじゃないよ」

落ち込み気味の桜に対し藍子は微笑みながら答える。

「確かにケンカ勝負なら力不足かもしれないけど、わざわざ相手の得意分野で勝負することないんじゃないかな」

「それは、逃げじゃねーのか？」

「逃げなんかじゃないよ。戦い方が違うだけ。別の手段で戦うことは決して逃げなんかじゃない」

藍子は断言する。

「桜ちゃんはね、真正面から立ち向かいすぎっていうか、不器用って言った方がいいのかな？」

「そこが桜ちゃんの魅力でもあるんだけどね。でも見てて心配っていうか、出来ればケンカして欲しくないなあ…なんて、いつも守ってもらってる私が言うことじゃないよね」

「…そっか。心配かけさせて悪かったな」

桜は藍子の意を汲み取る。

「あ、謝らないで！私の方こそなんか指図してるみたいでごめん」

「いや、はつきり言ってくれてあたしは嬉しかった。ありがとうな」

桜は笑顔を見せ、藍子もそれに応え笑顔を見せた。

（不器用、か…兄貴に憧れているうちにあたし自身もいつの間にかそうなっていたのかもな）

（…デュエル、また覚えてみるかな。兄貴に憧れてじゃなく、アイコを守れるように）

#### 4話 #4 「感覚を忘れずに」

――夜

「なー兄貴」

「あ?」

食事中、桜が赤石に話しかける。

「あとでデュエル教えて欲しい」

「構わねえが、いきなりどうした?」

「色々思うことがあってな…」

赤石は桜の様子がいつもとわずかに違うことを感じ取る。

「何かあったのか?」

「実は…」

桜も赤石の前で隠し通すのは無理と判断し、今日あったことを全て話した。

――夜、同時刻

〈デュエルハウス「フリード」〉

「いらっしやいま…あ、レイリちゃんこんばんは!久しぶりだね!」

彼女の入店と同時に店員が出迎える。

「こんばんは」

「せっかく来てもらって悪いんだけど、今空気が無いからちよつと待ってくれるかな?」

「わかった」

「ごめんね、すぐに空くと思うから」

「うん」

彼女は入口近くの椅子に座る。

今日彼女は稼ぐためにここに来たのではない。大勝負が続いて、勝

負感覚が狂っていないか確かめに来たのだ。一度その感覚が狂うと取り戻すのは容易ではないと彼女自身把握している。

「ああーまた負けかよー！」

「へへー、ごち」

彼女は聞こえてきた声の方へと視線を向ける。

(あの人は…)

「ちくしょー！今日は仕舞いだー」

男が荷物をまとめ席を立つ。

「もうけもうけ…ん？」

男とデュエルをしていた女が、自分に向けられてる視線に気付く。

「おおー、レーリじゃねえか！久しぶり！」

「お久しぶりです、紫さん」

「ほらほら、空いたからこっち来なよ」

「はい」

彼女は招かれ席についた。

女の名は桃山紫（モモヤマ ユカリ）。25歳独身。

各地のデュエルハウスに存在する客たちの対戦相手となる、いわゆるフリーデュエリストの1人。

人手の足りないデュエルハウスだと店員としての仕事を手伝うこともある。

デュエルハウスに赴き生計を立てている彼女と本質的には似ているが、客側か店側かという違いがある。

彼女とはフリーードで何度かデュエルしており、それなりに顔なじみだ。

「最近どない？」

「うまくいってます」

「そっかそっか。スピード、無し、5、50でいいか？」

「はい」

彼女と紫は話しながらデュエルの準備を進める。

補足するとスピードルール、LPマイナス超過計算無し、LP100差につき500、デュエル勝利で5000という意味だ。マッチ戦では無いのでマッチのレートは無し。

だいたい平均的なレートである。

「使うカードはこれで、コイントスは数字が裏な」

「表で」

「ほい…つと、表だな」

「先攻で」

「おけ。そんじゃ始めるか」

テンポ良く準備が進み、デュエルが始まった。

――

「なるほど。別の手段として、か」

「ああ」

「まあ見方によっちゃあデュエルも喧嘩の一種だと思うがな。考え無しの力比べよりよっぽど『喧嘩』してるさ」

しかし力は有るに越したことはない。手段の1つとして考えるのなら。

「それで、どこまで知ってたんだ？」

「召喚と特しや、しゅ召喚の違いなら知ってる」

（囁んじまった…）

「…まあ、お前ならすぐ覚えられるだろうよ」

赤石は食事を終え、皿を下げる。

「後で部屋に来な。カード出しとくから」

「うん」

赤石は部屋へと戻った。

――

「黒蠍で大勝ちしたんだってね。《虚無魔人》で《ボタニカル・ライオ》に攻撃」

「知ってたんですね。《棘の壁》発動します」

「風の噂でな。このレートじゃ物足りないんじゃない？ 《トラップ・ジャマー》発動」

「そんなことないですよ。何もありません」

「ま、そうだったらここに来てないよな。エンド」

「はい。ドロー、スタンバイ、メイン《幻惑のラフレシア》反転召喚。《虚無魔人》のコントロールを奪います」

「げ…伏せてたのそいつか」

「《虚無魔人》で攻撃します」

紫LP↓0

「あちやー負けたか」

「ごちそうさまでした」

「お？こいつー、夜はまだ始まったばかりよ？」

「存じております」

彼女と紫は次のデュエルへの準備に入った。

ー

「兄貴、入っていいか？」

赤石の部屋の前から桜が声をかける。

「ああ」

返事を聞いて桜は部屋へと入った。

「…これ、全部カードか？」

「ああ。これでも結構処分した方だ」

部屋の床には整然としたカードのタワーがいくつも出来上がっていた。  
いた。

「色んなのがあるんだな」

桜はタワーからカードを抜き取り1枚1枚見ていく。

「組みたいデツキとかあるのか？」

「いや特には……あ」

桜は藍子のデュエルを思い出す。

「あ？」

「…植物。植物組んでみたい」

――

「ふー、最後まで負けかー」

「ありがとうございます」

彼女と紫は10回ほどデュエルをして、結果は彼女の約3万勝ち。

「まったく、レーリにはかなわんわ。これでもアタシ元プロよ？」

「運が良かっただけです」

彼女は謙遜してカードをまとめる。

「…感覚は変わってないみたいだね」

「…」

彼女の動きが一瞬止まる。

「気を付けなよ。金銭感覚もだけど勝負勘が鈍ったら、待ってるのは破滅だからな」

「…肝に銘じておきます」

彼女は静かに答えた。

「ま、アンタのことはあんまり心配はしてないけどね」

「そうですか」

彼女は少し微笑み、席を立つ。

「そんじゃあまたな。夜道には注意しなよ」

「はい、ではまた」

彼女は店を後にした。

――

「…むずい」

桜は赤石に教えてもらいながら覚えようとしているが、理解には程遠い。

「1日で何とかなるようなもんじゃねえからな。今日はもう仕舞いだ」

桜はカードテキストを何度も読み直している。

「カード持っていていい?」

「ああ。好きなだけ持っていけ」

赤石は明日の学校の準備をする。

「じゃあ、これだけでもらってく」

桜は60枚程手に取り、

「おやすみ、兄貴」

「おやすみ」

自分の部屋へと帰った。

## 4話 #5 「世間って案外狭い」

――それから数日後

(一通りルールは覚えたけど…)

「なーアイコ、放課後時間あるか？」

「あるよー。どうしたの？」

(戦えるかは、別問題だよな)

「デュエルに付き合って欲しい」

――そして放課後

〈デュエルハウス「ナチュル」〉

「こんなところあったのか」

藍子の提案で2人はノーレートのデュエルハウスに来ていた。

「いいところでしょ？女子デュエリストは場代半額なの」

「場代、って何だ？」

「今私たちが座ってる席の代金のこと。ここは1時間で400円、だけど半額で200円」

藍子は得意気に答える。そういった料金設定のためか店員も客もほとんどが女性だ。

「ふーん、カラオケみたいなものか」

「うん、そんな感じ。じゃあ早速…」

藍子はデッキを取り出す。

「ああ」

それを見て桜もデッキを取り出す。

「手加減はしないよ？」

「もちろんだ。本気で頼む」

先攻は桜

(先攻はドロー出来ないんだったよな)

桜は手札のカードのテキストを1枚1枚小声で読み通していく。

「あー…悪いな。待たせて」

「大丈夫だよー」

藍子はテキストを読む桜の様子を微笑ましく見守っている。

「…つと、《ローズ・ウィッチ》召喚」

(魔法カードはセットしても意味無いんだよな)

「ターンエンド」

「私のターン、ドロー」

(あ、揃っちゃった)

「スタンバイ、メインフェイズに入るね」

「《ワン・フォー・ワン》発動。手札の《紅姫チルビメ》をコストにデッキから《薔薇恋人》を特殊召喚」

「ああ…テキスト見ていいか?」

「どうぞー。続けるね」

「《超栄養太陽》発動。《薔薇恋人》をリリースして、デッキから《ローンファイア・ブロッサム》を特殊召喚」

「《ローンファイア・ブロッサム》の効果発動。自身をリリースして、デッキから《椿姫テイタニアル》を特殊召喚」

「おー、いきなり出てくるか」

桜はフィールドと藍子の使ったカードのテキストを交互に見ながら感心する。

「墓地の《薔薇恋人》の効果発動。このカードを除外して手札から《桜姫タレイア》を特殊召喚」

「お?…おお…お」

「墓地の《ローンファイア・ブロッサム》を除外して《薔薇の刻印》発動。《ローズ・ウィッチ》のコントロールを得る」

「う!?!」

「《ローズ・ウィッチ》をリリースして《姫葵マリーナ》をアドバンス召喚」

藍子のフィールドにレベル8モンスターが3体並ぶ。

「すごい…」

「全員でダイレクトアタック」

「ま、参りました」

藍子の後攻1ターンキルが決まる。

「つえーんだな、アイコは」

「今のはたまたまだよ。《ローズ・ウィッチ》ってことは桜ちゃんも植物デツキなんだね。カードはお兄さんから？」

藍子は嬉しそうだ。

「ん、まあな」

「そうなんだ、わからないことがあつたら何でもきいてね」

「ああ、ありがとう」

(今はまだわからないことだらけだけどな…)

その後、桜は藍子からアドバイスをもらいながら何度かデュエルをした。初勝利にはまだ遠いが、いずれ手にするであろう。

——同じ頃、彼女の家

「《異次元の生還者》で《ライトロード・マジシャン ライラ》に攻撃  
「はい」

(うう、《マクロコスモス》が刺さります…)

「《紅蓮魔獣 ダ・イーザ》でダイレクトアタック」

「負けました…流石ですね麗梨さん」

「運が良かった」

「ずっと運が良い気がします…」

放課後、綾芽は彼女とデュエルするため彼女の家に来ていた。なお、瑞希は部活があるので今回は2人だけ。

(何度か勝利はしたけれど…麗梨さん、驚くほど隙が無い。プレイングミスも全く無くてこちらの手を読んで行動してくる…強いってこういうことなんだろうな)

綾芽はカードを整理する彼女を見つめる。

(でも、そのレベルの強い人はプロでなくてもたくさんいる…むしろ麗梨さんの強さはもっと別の部分)

「あの、麗梨さん」

「なに」

「今までに大会に出場して優勝したことってありますか？」

「ないよ。大会に出たことも」

「そう、ですか」

「うん」

綾芽は彼女の答えを予想していたような反応だ。

(なんとなくそんな気がしてました。麗梨さん程の子が表舞台に立っていたら、きつと今頃有名人ですよね)

「時間、大丈夫？」

「時間…あ」

時刻は17時半を過ぎようとしていた。外も暗くなり始める頃だ。

「じゃあ最後にもう一戦だけお願いします」

――

「今日はありがとな。デュエルの楽しさがわかってきたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいな」

「けど覚えることが多くて大変だわ」

「デュエルするうちに覚えていくから大丈夫！私も最初全然わからなかったから」

「そうなのか」

デュエルハウスを後にして、2人は帰り道を歩いている。

(帰ったらごはん作らないとな。冷蔵庫には確か…ん?)

桜が夕食のことを考えてると、前方から桐縹の制服を着た男子生徒が歩いてくる。

「あ、兄貴だ」

それは桜のよく見知った顔だった。

「えっ？お兄さん？」

藍子もそれを聞いて男子生徒の顔を見る。

「おい兄貴ー」

「おお桜か。今帰りか？」

桜の声に気付いた赤石が返事をする。

「うん。帰ったらすぐごはん作るよ」

「ああ。隣にいるのは…」

「あ、紹介するよ。友達のアイコ」

桜が藍子の方を向くも、藍子はその場で固まっている。

「…アイコ？」

「さ、桜ちゃん…こ、この人が桜ちゃんのお兄さん？」

藍子は口元に手を当て目を大きく見開いている。

「うん？そうだけど…」

「あ、あのお兄さん！私のこと覚えてませんか？」

「あ？ああ…」

赤石は記憶を掘り返すがそれらしい人物は浮かばない。

「以前、男子生徒に絡まれてたところを助けて頂いた者です！」

藍子に言われ赤石は思い出す。

「…あ、あれか」

(そっぴやそんなこともあったな)

「え？アイコが言ってた助けてくれた人って…」

桜の驚きの表情に対し

「はい、お兄さんでした」

藍子は笑顔で答えた。

#### 4話 #6 「桜と藍子・1」

――

「今日はありがとうございました。またデュエルして下さい」  
綾芽は玄関先で彼女にお礼を述べる。

「うん、またしよ。気を付けてね」

「はい！また学校で」

「ばいばい」

彼女は綾芽を見送った。

（大丈夫。いつも通りの感覚）

（楽しかった。この楽しさを見失わないように…）

（ごはん、作る）

――

桜、藍子、赤石の3人は帰り道を歩く。

「まさか兄貴だったとはな」

「私もびっくりした！これって運命なのかな…？」

「…運命？」

桜は少し首をひねる。

「何というか、よく桜と友達になったな。無愛想ですげえ取っ付きにくかったと思うんだが」

赤石は藍子の顔を見て言う。

「無愛想で悪かったな」

「悪いとは言ってねえよ」

「うーん、確かに第一印象はそんな感じでした。でも桜ちゃんだけだったんです」

「どういう意味だ？」

藍子は赤石に当時のことを話し始めた。

――4月某日（入学式から1週間後くらい）

（どいつもこいつも、もう群れてやがる）

桜は机に肘をつきながら教室を見回す。下品な笑い声を響かせる女子生徒のグループや喧しい叫び声を上げる男子生徒のグループ等、騒がしい集団がいくつも目に入った。

（あんな嘘で塗り固めたような連中とつるむくれーなら、1人の方がよっぽどマシだ）

そんな教室内ではどのグループにも属することなく孤立する2人の生徒がいた。桜と桜の3つ隣の席に座っている女子生徒だ。

（…つまんねーことしてんな）

桜は3つ隣の席を呆れるながら眺める。

「ねえねえ藍子ちゃん金貸して欲しいんだけどさあ?」

「ウチら今金欠なんだよねー?」

「ホラホラ立てよ!」

女子生徒数人がその席に座ってる生徒に金をせびっていた。

（…）

「や、やめてください!」

「やめて欲しけりゃ出すもん出しなよ」

藍子は無理やり立たされようとする。

「嫌、手引つ張らないで…!」

「椅子引け椅子!」

（…あーもう!うぜーな!）

「おい!さつきからうるせーんだよ!耳障りだから失せろ」

桜の怒声にクラス中の視線が集中した。

「…赤石、今なんつった?」

「なんかキレられたんですけどー」

女子生徒たちが藍子から桜の方へと歩み寄る。  
(4月早々やっちゃったか…ま、仲良くする気なんてさらさら無かったけど)

桜は自分の前に立つ女子生徒たちを不機嫌そうに見上げる。

「…何だよ？」

「放課後ちよつと付き合えよ」

「断る」

「藍子ちゃんがどうなってもいいのかなあ？」

「別に」

「はあ？」

女子生徒は想定と違う答えに眉間にしわを寄せる。

「そいつがどうなるうが知ったこっちゃねーよ。てめーらが耳障りだったただけだ」

桜は表情を変えず答える。

「…こいつー」

女子生徒の1人が桜を殴ろうと手を振りかぶった。

「!？」

パシッ!

しかし桜は迫り来る拳を左手で受け止めると、すかさず右手でその女子生徒の頬に平手打ちを食らわせる。

「…パーじゃ足りなかったか?グーで殴って来たもんな?」

桜は平手打ちによって怯んだ女子生徒に詰め寄る。

「お、お前…!何したかわかってんだらうな!？」

別の女子生徒が桜を睨みながら問う。

「ああ!？」

「ひっ…!」

桜も睨み返す。どちらの睨みの質が上かは言うまでもない。

「おい席に付けー、授業始めるぞ」

女子生徒が桜の睨みに怯えた瞬間、チャイムが鳴り教師が入室す

る。

「ちつ、覚えとけよ」

女子生徒は小声で捨て台詞を吐くと、自分の席へと戻った。

――その日の昼休み

昼食を食べ終えた桜はいつものように中庭の端、人気の少ない木陰で携帯電話をいじっていた。

そんな桜の前に1人の女子生徒が現れる。

「お前は…」

(こいつはさっきの…)

「栗原(クリハラ) 藍子です。先程はありがとうございました」

金をせびられてた女子生徒、 藍子だ。

「別に礼を言われるようなことはしてねーよ」

「あの、もし良かったらお友達に――」

「悪いけど友達は募集してねー。他を当たりな」

桜は藍子の言葉を遮るように言い放ち、その場を去ろうとする。

「ほ、他の人は嫌です！ 赤石さんと友達になりたいんです」

桜はその言葉を聞いて立ち止まる。

「断る」

が、すぐに再び歩き出した。

(…けつ、何が友達だ。浮いてる者同士仲良くやろうってか？ 冗談じゃねーよ)

――次の日、昼休み

「赤石さーん」

藍子が桜の元へと駆け寄る。

「何だよ」

桜は若干不機嫌そうに答える。

「赤石さんて普段何してるんですか？」

「何でもいいだろうが」

桜は急ぎ足でその場を去る。

「待って下さいー」

「ついてくんな」

藍子も追いかけるが、途中で見失ってしまった。

(ああ、見失っちゃった…でも、諦めないからね)

#### 4話 #7 「桜と藍子・2」

「あーもうー！しつけーな」

藍子は次の日、また次の日と積極的に桜に話しかけた。

「つーか何であたしなんだよ?」

(こいつ、まさかいじめから守ってもらえなくても思ってたんじゃないだろうな)

桜は相も変わらず不機嫌そうだ。

「自分に嘘ついてないからです」

「…あ?」

予想外の回答に桜はどういう意味だと言わんばかりに藍子の顔を見る。

「みんな自分を騙して嘘ばかり。そんな人たちと友達になんかなりたくないです」

それは桜が1人のままでいる理由とほぼ同じだった。

「1人になってしまったんじゃない、1人になるのを選んだってのか?」

「はい。でも1人じゃ寂しいです。赤石さんと友達になりたいです」

(あたしだけかと思ってたが…)

「……」

桜は黙ったままだ。

「赤石さん?」

「…あたしは1人でも寂しくねーよ」

桜は小さな声で答える。

「それは嘘です」

その答えに藍子が即答する。

「嘘じゃねーよ!何でお前にそんなことがわかんだよ」

さつきとは対照的に大きな声を上げる。

「中学生の時、私には1人の友達がいました」

「その友達は変わってるっていうか、何というかミステリアスな雰囲気

気の子でした」

「1人でいても寂しさを微塵も感じさせない子で、そういう意味では赤石さんと似てたと思います」

「ある時、私はその子にききました。1人でも寂しくないの？つて」  
「その子は答えました。『ひとりだと感じてしまつたら、さびしい』と」  
「……」

「赤石さんはきつと学校以外では1人じゃないはずですし、私もその子がいるから1人じゃありません」

「でも、それでも1人だと思つてしまふんです。周りの人たちが嘘だらけの関係でも楽しそうにしていればしているほど」

藍子はどことなく悲しそうだ。

「…だからあたしと友達になろうつてか？」

「否定は、しません」

「あたしは1人でも構わねーし、寂しいかどうかは別問題だ」

桜はその場から立ち上がり去ろうとする。

「赤石さん…！」

「前にも言ったが友達は募集してねー。お前も1人じゃねーならそれでいいだろ」

「…」

藍子は何も言えず去り行く桜の姿を見つめていた。

――さらに次の日、昼休み

桜はいつも通り木陰で携帯電話をいじっていた。

(…今日は来ねーのか?)

昼休みも半ば、毎日のように訪れていた者の姿は無い。

(まあいい。しつげーのがいなくなってせいせいする)

手に持った紙パックのジュースをストロー越しに勢いよく飲み込む。

(なのに、何なんだこのモヤモヤ感は…！)

『ひとりだと感じてしまったら、さびしい』

ふと、そんな言葉を思い出す。

(くそ！あたしは寂しくなんか…)

ストローがズズズと音を立てる。ジュースを飲み干してしまったようだ。

(ちっ、もうカラか)

桜は自動販売機までもう1度ジュースを買いに行こうと立ち上がる。

(…あれ?)

いつもポケットに入れているはずの財布が今日は見当たらなかった。

(あ、体育の時か)

落としたかと思い一瞬慌てるが、冷静に記憶を辿ると心当たりが見つかり、

(しゃーねえ、戻るか)

桜は教室へと戻った。

(…無い)

教室に戻った桜はかばんの中を探す。が、財布は見つからない。(落としてはいないはずだ。確かに覚えてる)

ここで桜は異変に気付く。

(やけに静かだな。というより…)

桜は周囲を見回す。

(何かおかしい)

周囲の生徒たちは桜を遠巻きに見ては、視線が合うと目をそらすといったことを繰り返す。

たまらず生徒の1人に声をかけた。

「おい、何見てんだ?」

「…」

生徒は何も答えず目をそらす。

桜はその行為にしびれを切らしたのか、今しがた目を逸らした生徒の胸倉を掴む。

「答えろ」

「おい赤石、落ち着けよ」

別の生徒が桜に促す。

「ああ?」

「気分転換に2階のトイレにでも行って見たらどうだ?あそこ人少ないからおすすめだぜ」

「はあ?何言ってるんだ?」

桜は発言の意味がわからずその生徒に問う。

「さあ?漏れそうなんだろ、急いだ方がいいと思うぜ?」

「てめえふざけてん…あつ!」

桜はその生徒に詰め寄ろうとした瞬間、言葉の意味を理解した。

(藍子も、ちよつかい出してたあいつらもない…まさか)

「…そうだな、行ってくるわ」

桜はその場を飛び出した。

「…なあ、赤石1人で大丈夫なのか?」

桜を促した生徒の友人らしき生徒が問う。

「あいつなら大丈夫だろ。走ればまだ間に合うだろうよ」

「さすがに財布はシャレになんねー、ってか?」

「何言ってるんだ。俺はすぐに用が足せるトイレを紹介しただけだよ」

1112F女子トイレ

「きゃっ!」

「もう一回言ってくれないかなあ?藍子ちゃん?」

藍子は3人の女子生徒に壁際へと追い詰められている。

「…財布、赤石さんに返しなさい」

藍子は小声ながらも女子生徒たちをしっかりと見据えて言葉にする。

「生意気に命令すんじやねえよ!」

女子生徒の1人が片手で藍子の首を掴み壁へと押し付ける。

「うっ…!痛いっ…」

藍子は掠れ気味の声で痛みを口にする。

「お前なあ…赤石の借りを返すつもりか知らんけどさ、相手見て行動しろよな」

女子生徒は掴んだ手を下方へと勢いをつけて離すと、藍子は尻餅をついた。

「けほっ、けほっ…」

「そうだ、お前が金くれるっつーなら返してやってもいいよ?」

別の女子生徒が藍子に提案する。

「いいなそれ。赤石の奴1000円すら持ってねえもんな」

女子生徒は桜の財布をパタパタとあおぐ。

「…」

(今、私の財布の中には2000円と少し…)

藍子は財布が入っているポケットに視線を移す。

「どうすんだ?」

「…本当に返してくれるんですか?」

「ああ、返してやるよ」

「そう、ですか」

(私のお金で赤石さんの財布を取り返せる…)

口ではそう言ったものの、藍子は動かない。

「おいおいさっさと決めろよ。ウチら気が長い方じゃねえんだからさ」

「…わかりました」

藍子はゆっくりとその場に立ち上がる。

(でも、私は嘘をつきたくない)

そして似たような場面を思い出す。

「わかったんなら金をー」

藍子は女子生徒の言葉を遮るように

「私のお金はあげません、赤石さんのことなんて知ったこっちゃない

です」  
冷静に力強く拒否した。

#### 4話 #8 「桜と藍子・3」

「はあ!? 何言ってるんだお前? じゃあ何でここそ後ろからついて来たんだよ!」

「赤石のためじゃないってなら何なんだ!?!」

女子生徒たちは予想外の言葉に驚く。

「赤石さんがどうか関係無いです。財布を盗んだあなたたちが気に入らない、それだけです」

藍子は毅然とした態度で答えた。

(言っちゃった。もうどうにでもなれ)

「お前さあ…調子こいてんじゃねーぞ!」

女子生徒の怒りに任せたパンチが藍子に降りかかる。

「っ…!」

藍子は覚悟を決め目を瞑った。

パシン!と乾いた音が響く。

「…?」

確かに音がしたものの、自分への衝撃がまるで無い。

その事に対し、藍子は不思議に思いながらおそるおそる目を開けた。

「!」

「お前は…!」

「その通りだ。こんな奴らにお前の金をくれてやる必要はねーよ」

「赤石さん!」

藍子が目を開けると、殴ろうとした女子生徒の手首を桜が後ろから掴んでいる姿が目映った。

「いつの間に…!?!」

「1000円すら持ってねえ、ってところからだ。やっぱりグーじゃねーと足りなかったみてーだ、な!」

桜は掴んだ手首を引っ張り、自分の方へと向かせると、その女子生

徒の腹部にパンチを浴びせた。

「うぐっ！」

拳からの衝撃を受けた女子生徒は腹部を抑えうずくまる。

その間に桜はすかさず自分の財布を取り返す。

「お、おい!？」

「こいつ殴りやがったよ！」

女子生徒の1人が桜を信じられないといった目で見る。

「黙れ。先に殴ろうとしたのはどっちだ？てめえらも殴られてーか？」

桜はそんな目に対してお構い無しに言葉が続ける。

「急所は外した。失せろ」

「ひっ…」

桜の怒りを込めた睨みに女子生徒たちだけでなく藍子もゾクッと  
する。

「い、行こー！」

女子生徒たちは慌ててその場から退散した。

「ケガは無いか？」

桜は藍子に手を差し伸べる。

「うん…ありがとう」

藍子は桜の手を掴み立ち上がる。

「礼を言うのはこっちの方だよ、ありがとうな」

「あの、よくここがわかりましたね」

藍子がそう言うのと桜は踵を返し背中を向ける。

「気分転換に來ただけだ。人が少ないって聞いたんだけど、騒がし  
かったな」

桜はどこか優しげな口調で話す。

ふふっ、と思わず藍子は笑みが零れた。

「…その、なんて言うか」

桜は口ごもったように話す。

「…やっぱり、寂しいな。お前の言う通りだよ」

「強がってみてもさ、ずっとモヤモヤしたもんが残ってたんだ」  
「あのな、寂しいからって理由じゃなくてさ、お前だから…」

藍子は桜の言葉を待つ。

「ごめん、今更こんなこと言うのも情けないかもしれないけど…」

桜は再び踵を返し、藍子の方へと向く。

「あたしと…友達になって、ください」

桜は不器用ながら自分の正直な思いを口にした。

もちろん、藍子の答えは決まっている。

「はい！」

藍子とはびきりの笑顔で答えた。

――

「ほお、そんなことがあったんだな」

(桜もそうだが、この子も相当強い人間らしいな)

「はい！それからは桜ちゃんも友達として毎日楽しく過ごしています。  
今日もさつきまでデュエルしました！」

藍子は元気良く話す。

「そうか、これからも桜と仲良くしてやって欲しい。こいつ案外寂し  
がり屋だから」

「な…：ち、ちげーよ」

桜は照れ隠しなのかそっぽを向く。

「はい、任せてください！」

藍子も桜の仕草を理解し、その様子を微笑ましく見る。

「えっと、私個人としてはお兄さんとも仲良くしたいです」

藍子は赤石の顔を見ながら少し抑え気味の声で言う。

「あ？俺と？」

「はい。お兄さんデュエルすごく強いって聞いてます！ぜひ1度私と  
デュエルしてくれないかなー…なんて」

「まあ、構わねえが」

「本当ですか!?!じゃあ番号とアドレス教えていただけませんか？」

「ああ、携帯電話貸してくれるか？」

「はい！」

藍子は赤石に携帯電話を渡す。

「おーおー積極的なことで」

桜は控えめにニヤニヤとした表情を浮かべながら2人のやりとりを見守る。

「えへへ」

藍子は桜の言葉に照れながらも嬉しそうだ。

「ほら、登録したぞ」

赤石は携帯電話を藍子に返す。

「ありがとうございます！また連絡しますね」

「あ！そういうえはお兄さん、お名前なんて言うんですか？」

「修哉（シュウヤ）」

「じゃあ修せんぱいとお呼びしますね！桜ちゃんまた明日ね」

「ああ、また明日」

藍子は2人と別れると楽しそうに家へと帰った。

「で、どうなんだ？」

「何がだ？」

2人は引き続き帰り道を歩いている。

「何が、ってアイコのことだよ。どう思ってる？」

「知り合ったばかりで特に何とも思ってたねえよ」

赤石は表情を変えず答える。

「まあ、強いて言うなら」

「強いて言うなら？」

「お前と似てる」

「…そうか？」

「なんとなくだけどな」

（似てるの…かな？）

桜は家に着くまで藍子と似ている部分を探したものの、特にこれと  
いった発見は無かった。

## 4話 #9 「代役と相方」

――同日夜

〈デュエルハウス「黒蠍」〉

「急にお呼び立てして申し訳御座いませんな」

「いいですよ、アタシ今日は予定無かったですし」

黒蠍の従業員1人が急な体調不良に陥ったため、今日はフリーの紫が変わりに来ている。

紫が制服に着替えて間も無く、客が1人入店する。

「そんじゃあ始めますか」

「宜しくお願い致します」

「お？今日はねえちゃん相手が相手してくれるんか？」

客と紫は席につく。

「緊急の代役でね。遠慮せんと来てよ」

「はは、言われんでも手加減無しや」

紫の代役としての1日が始まった。

――そして、夜も更けて

「本日はお客様方のお相手をして頂き有難う御座いました。此方、給金で御座います」

青葉は紫に給料袋を渡す。

「ありがたく頂戴致します」

紫は給料袋を受け取るとそのまま懐に入れた。

「それにしてもさすが黒蠍、客のレベルが高いですね」

「手に負えませんでしたかな？」

「まさか！手応えのある方が多くて満足してますよ」

紫は得意気に答える。

本日の紫の収支は約＋1万6千円。平均的なレートでも1回の勝負で1万、2万動くこともよくあるため結構ギリギリでのプラスである。もちろん給料は含めていない。

「でも。私含めて誰もアイツには及びませんね」  
「…」

「それこそこの辺りだと青葉さんくらいじゃないですか？明らかに実力が上回ってる人って」

紫はカウンターテーブルを拭いている青葉に目を向ける。

「私は引退した身で御座います故、何方であろうと勝負は致しません」  
「それは残念です」

（引退される前に1度は青葉さんのデュエル見たかったなー、あーっ口になるのがもうちよつと早かったら）

（青葉さんのことだから復帰はしないよなー、あー）

紫は残念な気持ちを噛み締めながら、入口へと向かう。

「時間もいい感じなので失礼します。またいつでも呼んで下さい」  
「お疲れ様でした。またお呼び立てする時は宜しくお願い致します」

（この仕事をしていると一度は耳にする青葉さんの伝説。『30年間無敗』）

黒蠍からの帰り道、紫は考え事をしながら歩く。

（30年間無敗なんて本人は否定してるし、にわかには信じ難い。でもあの人と接していると、あながち嘘じゃないかもしれないって思えてくる）

（あの何か得体の知れない感じ。そんな雰囲気纏ってる人、アタシがこれまで出会ってきた人の中では青葉さんと…アイツだけ）

（あーやっぱ1度だけでもデュエルするとこ見た…あ）

途中、紫は見知った顔に遭遇し足を止める。

「やあ黒川さん」

「おお、桃山か。今日は黒蠍か？」

「うん、今帰るところ。黒川さんは見回り中ですか？」

「そんなところだな。ついでに青葉さんと軽く話でも、とな」

「ふーん。…アイツなら心配には及びませんよ」

「この前もフリードでデュエルしたんだってな」

「まーね。ほんと、この刑事さんはどっから情報仕入れてるんだか」

黒川の情報の早さに紫は感心しつつ呆れる。

「ハハ、知りたいか？」

「…遠慮しときます」

聞かない方が良さそうな感じがしたので、紫は聞かないままにした。

「ま、あの程度のレートでデュエルで押しつぶされるような人間じゃなかったってことだ」

「額の問題かなー？なーんか元々あまりお金に興味無さそうなんですよねー」

「表に出てないだけさ。人にはそれぞれその額を越えようと豹変する、閾値のようなものがある」

「ただ豹変すると言っても急に人格が変わるといったことは少ない。冷静さを欠き、判断を誤り続ければ結果的にそうなるがな」

「しかし中には越えても、全くおくびにも出さない奴がいるな。俺は数えるくらいしか見たことねえが」

基本的に人間である以上、欲望や本能には抗えない。平常時ならともかく、破滅の危機が差し迫ってる場面ではそれらを否定する選択肢はまず選べない。

が、それでもなお、それらを越える強い信念を貫き通せる人間も極稀に存在するのも事実。

「アタシは額が大きいと顔に出ちゃうタイプだわ」

「表舞台にいる時からそうだったよな」

「う…今はマシになりましたからね」

「そうだな。もうすっかり裏の住人だ」

黒川は腕時計を見て時間を確認する。

「そろそろ行くか。気を付けて帰れよ」

「はい。じゃあね」

紫は再び帰り道へと歩き出した。

――翌日、昼休み

赤石はポケットから携帯電話を取り出す。

(電話: ああ? 黒川さんから?)

赤石は着信画面を確認すると人気の無い場所へと移動した。

「はい」

「修哉、しばらくぶりだな。調子はどうだ?」

「まあまあですよ」

「そうか。相変わらずで何よりだ」

「: 用件は何ですか?」

赤石は用件の切り出しを促す。

「2つ下の後輩に負けたりしないな」

「知ってたんですか」

「ああ、桑嶋のガキ共を補導した時にな」

黒川は数テンポ置いて用件を話し始めた。

「突然で悪いが今週の土曜、鶯櫓（ヒワハゼ）会館に行けるか?」

「行けますよ。時間は?」

「20時までに着いてりゃいい。勝負は1回、勝ちで400万、マッチとライフレートは無しだ」

「詳しいルールは例の如く現地ですか?」

「ああ。俺は用があつて行けんが話は通しておこう」

「わかりました。勝負が着いたらまた報告します」

(400万か。結構な額だが、勝利レートだけならまあ許容範囲か)

「待て、まだ話は終わってねえ」

「あ?」

赤石は一瞬電話を切ろうとしたが、すぐにとどまる。

「: タツグデユエル?」

「そうだ。今回はシングルじゃねえ。お前経験あるか?」

「何度かは。ですが、タツグならパートナーが必要じゃー」

「ああ、そのパートナーはお前が決める。お前と共に400万の勝負を出来る奴をな。当てはあるか？」

「あー…何人かはいませんが、400万の勝負となると…」

「まあ、無理だったら土曜の昼までに連絡してくれ。それじゃあな」

黒川はそう言い残し、通話を終わらせた。

赤石はポケットに携帯電話を仕舞い、考える。

これまで赤石は1人で戦ってきた。大きな勝負では彼女以外に負けたことはない。

しかし、タッグデュエルはプライベートで数える程しか経験していない。

ある程度の変則ルールでもそれなりに対応できる柔軟さを持ち合わせてはいるが、それらは全てシングルという前提でのルールだ。

タッグデュエルも変則ルールの1つと言ってしまえばそれまでだが、パートナーが存在しなければルール以前の問題である。

赤石にとってはパートナー選びが最初の関門だった。適当に選ぶわけにはいかない。なにせ大金がかかっている。

(まあ、パートナーがいなきや降りだな)

故に赤石は積極的ではなかった。が、それでも一応探してみることにした。

(裏の奴らと渡りあえる実力があり、400万の勝負に動じることもなく、何よりお互いに信用出来る奴か？そんな奴いるわけ…)

赤石は1人の存在を思い出す。

(待てよ？まさか…！)

それは大勝負で唯一黒星をつけた相手。

同時に何故黒川がこのタイミングで、初めてタッグデュエルをさせようとしたのかを理解する。

(…なるほど、そういうことか)

赤石は黒川の意を汲み取り、

(なら、あいつしかいねえな)

1年の教室へと向かった。

## 4話 #10 「都市へと赴いて」

「おい、鈴瀬いるか？」

赤石が彼女の所属してるクラスの扉を開けた途端、好奇の視線が集  
中する。

「ここにいます」

赤石は返事をした彼女の方へと視線を向ける。

「話がある。ちよつと来てくれねえか？」

「はい」

彼女は席を立ち、赤石と共に人気の無い所へと去った。

「今のつて赤石先輩だよな？」

「鈴瀬に何の用があるんだろ。まさか告白とか!？」

「えっ!嘘っ!?麗梨に赤石先輩とられちゃうの!？」

「そーいやこの前あの2人デュエルしてたよな？」

「でも美男美女で似合ってるよなあ」

2人が去った教室では様々な憶測が飛び交う。

(れーりちゃんに何の用なんだろ?)

瑞希や綾芽も教室を去る彼女の姿を見つめていた。

――校内、とある場所

「悪いな、他の奴には聞かれたくねえんだ」

周囲に人がいないことを確認すると赤石は足を止めた。

「話とは何でしょうか？」

足を止めたのを確認して彼女は赤石に問う。

「実はな…」

赤石は黒川との通話の内容やそれらに関連することを話し始めた。

「パートナーですか」

「ああ。頼めるか？」

「いいですよ」

「そうか、やっぱ…あ？いいのか？」

彼女の表情を変えないままの即答に赤石は思わずきき返す。

「はい、わたしで良ければ」

「そうか…よろしく頼む」

それを聞いた赤石は彼女に不器用な微笑みを見せた。言葉は少な  
くても意思はお互いに伝わったであろう。

その後2人は連絡先を交換して、教室へと戻った。

――その日の夜

赤石にメールが着信する。

f r o m 麗梨

「こんばんは。あの、土曜日朝から行けますか？」

t o 赤石

「朝から？何か用でもあるのか？」

f r o m 麗梨

「鶯櫓を散策してみたいです」

目的の場所、鶯櫓会館がある鶯櫓は県内1の繁華街である。赤石は  
何度か訪れたことはあるが、彼女は今回のデュエルで初めて赴く場所  
だ。

（俺も鶯櫓は久々だし、散策ついでに何か買っていくか）

t o 赤石

「ああ、それなら10時に桐標駅前はどうだ？」

f r o m 麗梨

「ありがとうございます。ではそれをお願いします」

赤石は「了解」と返信をして携帯電話をポケットに仕舞う。

（土曜は早く起きるか）

――そして土曜日、朝

「兄貴、おはよ」

寝ぼけ眼の桜が朝食の準備をしている赤石に挨拶する。

正確に言うとうち赤石はもう食べ終わっており、洗い物をしながら桜の分を作り終えたところだ。

「おはよう。朝食置いとくからな」

「今日は早いね。…もしかしてデュエル？」

「ああ」

いつもの赤石の返事だが今日はどこか桜には素っ気なく感じられた。

「…」

桜は心配そうに赤石を見つめる。

「心配すんな。俺を信じろ」

「あの、無事に、帰ってきて」

桜はぎこちなくも自分の思いを口にする。

桜にとってはお金や勝つことよりも、兄が無事に帰って来ることの方が大切である。言うまでもなく勝って稼いでくれば、それが最良だ。

出来ることなら危ない勝負はしないで欲しい。しかし、そうもいかない事情がある。だから桜は自分の思いを伝えるだけ。

もちろん、赤石も桜のそんな気持ちを理解している。

「ああ」

赤石は寝起きで乱れた桜の頭を軽く撫でると、

「行ってくる」

戦場へと向けて出発した。

――同時刻

(準備はできた)

(あとはわたし自身だけ)

彼女はすーっと息を整えると

(そろそろ、行こう)

戦場へと向けて出発した。

——桐標駅前

(9時45分か)

赤石は時間を確認する。予定時刻の15分前に到着したようだ。

(見つけやすい所に立つとくか)

数分後、メールが着信する。

f r o m 麗梨

「つきました」

赤石がメールを見て間も無く、

「赤石先輩」

後方から自分を呼ぶ声がした。

「おお、来たか」

赤石は声のする方へと振り向く。

声の主を見て赤石は目を細めた。

「…誰だ？」

「わたしです」

「そうだろうな」

赤石は彼女だと確信していたが一応尋ねる。赤石が初めて見る彼女の姿。

長い髪を短く見せるようにくくり、帽子をかぶり度の入ってない眼鏡をかけ、顔には薄く化粧が施されている、学校に通う彼女とはまるで別人のようだ。

「戦いに赴く時は、いつもこの格好です」

「そうか。変装としちゃ弱いな、見た目は変わってもそれ以外は同じだ」

「生徒のわたしと同じじゃなければそれで構いません」

(本当、言い回しが独特だな、俺は嫌いじゃないが)

「まあ、私服として見れば俺は良いと思うぞ。似合ってる」  
「ありがとうございます」

彼女は小さく顔を綻ばせた。

(学校の奴らにバレなきやそれでいいみてえだし、俺が気にしたって  
しゃあねえか)

「行くか」

「はい」

2人は電車に乗り、鶯櫓へと向かった。

―――電車内

彼女は窓際の席に座り、流れる風景を眺めている。

「なあ、鈴……」

彼女の隣に座っている赤石が何かを言いかけて止まる。

(そっぴいや名前で呼んでいいのいか?)

「レイリって呼んでください」

彼女は赤石の考えを読んでるかのようによ望する。

「……鈴瀬じゃなくてか?」

赤石は二重の意味で問う。

「はい、レイリって呼んで欲しいです。親しみを込めて」

彼女も質問の意図を理解して返答する。

「……レイリ」

「はい、何でしょう?」

「腹減ってねえか?」

「朝ごはん食べてきたので大丈夫です」

「そうか」

「お昼ごはん楽しみです」

「何か食いたいもんあるか?」

「赤石先輩おすすめのお店で食べたいです」

「じゃあ俺の知ってる店にするか」

「はい、ぜひ」

彼女は笑みを浮かべ答えた。

やがて電車は鶯櫓へと到着する。

「人が多いからな、気をつけろよ」  
「はい」

彼女と赤石の1日が始まった。

#### 4話 #11 「散策します・1」

――鶉檻

「都会ですね」

彼女は駅を出て眼前に広がる光景を見て呟く。

「そうだな」

人々が行き交い、高層ビルを筆頭に建物が密集している。見たままの都会だ。

「まずは電気街の方でも行くか？」

「はい、行きましょう」

「豊富な品揃えですね」

2人は電化製品を見て回る。

「多すぎて迷うなこれ」

(まあ、こういうのはじっくり考えて買いてえよな。今のところ欲しい物も無いし)

赤石は一通り見終わった後、彼女の方へと目を向ける。

彼女も特に何か品物が欲しいというわけではなさそうだった。

「何か買う物あるか？」

「特にありません」

「違うフロアに行くか」

「はい、行きましょう」

「あ、この通りは」

「？」

赤石は途中、小さく呟く。

電気街から少し外れた位置にある通りの入口で足を止め、彼女に説明する。

「この先は結構マニアックというか：アニメとかゲームとか好きなら、まあ楽しめるとは思うが、どうする？」

赤石は彼女に問う、念のため。

「楽しいそうです。通りましょう」

「ああ」

「視線を感じますね」

「こういう場所でのこういう組み合わせは、珍しいんだろうよ。気にせず行くぞ」

「はい」

2人は度々、好奇の視線を向けられるも特に気にせず歩く。

そのまましばらく歩き、途中目に入ったゲームセンターに立ち寄った。

「懐かしいゲームも多いな」

広いスペースに様々なゲームの筐体が並べられている。

「わたし、ゲームは携帯電話のパズルゲームしかしたことがないんです」

彼女は興味深そうに様々なゲームの画面を見る。

「俺もゲームは一時期色々やってたけど、今はやってねえな」

店内を少し奥に進んだところで、彼女はひとつのゲームに注目する。

「あ、このゲーム面白そうです」

彼女が差したのはパズルゲーム。

「おおこれか。やってみるか?」

赤石はプレイしたことがあるようだ。

「はい。えっと…」

「ここにお金を入れて、あとはボタンで操作すればいい」

赤石はサイフから100円を取り出し、筐体に入れる。

「ありがとうございます」

彼女はお礼を言って腰を下ろした。

(エンドレスモード。ハイスコア、目指します)

(中々うめえな、操作が覚束無いながらも器用にカバーしてやがる)

赤石は彼女のプレイ画面を見つめる。

そのまま10分程過ぎ、

(おいおい、難しくなってるつつうのに)

彼女は慣れてきたのか、どんどんプレイングが安定していく。

(見てたら久々にやりたくなってきたな。あの頃は桜とよく対戦してたっけな)

「赤石先輩」

彼女はプレイしたまま赤石を呼ぶ。

「なんだ？」

「このゲームって対戦できるんですか？」

「ああ、出来るぞ。少し待ってな」

赤石はそう言い残し、彼女の対面にある筐体の前に腰を下ろす。

「俺が相手になっていいか？」

筐体の向こう側から彼女に確認する。

「はい。勝負しましょう」

「勝負か。どうせなら昼飯代でも賭けるか？」

「いいですね」

その言葉を聞いて赤石は1000円を投入した。

「OKを押せば対戦開始だ」

「押しました」

画面が対戦モードに切り替わる。

(相手はさつき始めたばかりの初心者。だが実力は既に上級者級と言っている。相手にとって不足は無しだ)

昼食代を賭けた勝負が始まった。

「おい、あれ見ろよ」

「あの女の子すげえうまくね？」

「ああ、かわいいな」

「画面見ろよ」

「あんなゲームだったっけ…」

「相手も割りとやべえぞ」

彼女と赤石の対戦は5分を経過、高レベルで拮抗しており、それに魅せられたのかギャラリーも続々と集ってくる。

(こんなに長い試合は初めてだ……そろそろ仕掛けるか)

赤石は手の動きを速めた。手を抜いていたわけではなく、精度が落ちない程度の速度で操作していた。すなわちこれは自爆覚悟。

(わたしも、速めに)

彼女も手の動きを速める。

そして激戦の末に……

――

「お待ちせしました。ミネストローネとサラダ、オレツキエツテ・メラ  
ンツアーネでございます」

「ありがとうございます」

(…何かの呪文か？都会のメシはすげえな)

赤石の知ってる店だが、赤石はあまりメニューを見ていないのでこ  
ういう反応になる。

ちなみに赤石が注文したのはスパゲッティ・ボロネーゼとパニー  
ノ。

「赤石先輩」

「あ?」

「ごちそうになります」

赤石は仕方無いといった感じで「ああ」と頷いた。

「おいしかったです」

注文された品々を食べ終えて彼女は赤石に小さく微笑みを見せる。

「それは良かった」

赤石も微笑みを見せた。

「赤石先輩」

「あ?」

「あの、デザートも、食べたいです。テイラミスとジェラート」  
彼女は控えめにお願います。

「おい、2つも食うのかよ」

「どっちも食べたいです。でも2つ分は食べられません。なのではんぶんこ、しませんか？」

「…わかったよ、半分食ってやる」

「ありがとうございます」

彼女は美味しそうにデザートを頬張っている。

(…とてもこの後大金かけた勝負をする奴とは思えねえな)

プレッシャーを微塵も感じさせない表情に赤石は彼女の強さを再認識した。

(それにしても…)

「うまそうに食うな、口元緩みっ放しだ」

「ふふっ、おいしいです」

不意に見せた彼女の笑顔に赤石は一瞬ドキツとする。

「…そうか。何だその、笑った顔も良いな」

「…ありがとうございます」

赤石の発言に今度は彼女が数テンポ遅れて返答する。

(ちよっと、どきどきしました)

心なしか妙な空気が漂う中、しばしの静寂が訪れた。

「あー、そろそろ行くか？」

静寂を破ったのは赤石。デザートもお互い既に食べ終わっている。

「はい、行きましょう」

2人は店を後にした。

#### 4話 #12 「散策します・2」

昼食後、2人が向かったのはファッション街。

「なんだか、洗練されてますね。こちらでは見ない服ばかりです」

彼女は各店頭に並べられた衣服を見て感想を述べる。

「有名ブランド物は値段も張るな」

「わたし、服はブランドより機能性重視です」

「同意見だ」

特に何かを買うということは無かったが、様々な衣服を見て回ったので、ファッション街を通り過ぎた頃には昼食後から既に1時間半ほど経過していた。

「見るだけで良かったのか？」

「はい、見るだけでも楽しかったです」

「そういうもんか？」

「そういうもんです」

その後しばらく歩き、2人は道中目に付いたスポーツアミューズメント施設に入る。

ビリヤード、ダーツ、ボウリングの他にもバッティングセンター等があり、時間内ならそれらで自由に遊ぶことができる。

赤石は一通りプレイしたことはあるが、彼女はどの競技も未経験であった。

まず2人は手近にあったバッティングセンターのコーナーに入る。

「その服装で打てるか？」

赤石は打席を選ぼうとする彼女に問う。

「動きやすいので大丈夫です」

「一応打席入る前に軽く素振りしな、ケガするぞ」

「はい」

赤石の忠告で、彼女は軽く素振りを始めた。

(体もあたたかくなりましたので、軟式時速100キロ、やってみま

す)

彼女はボタンを押し打席に入った。

1球目は、まず見逃す。

(結構速いです)

2球目は空振り、3球目も空振り。

「球を良く見て、叩くように振ってみな」

赤石が後ろからアドバイスをする。

4球目、バットに当たるがボールは後ろへ飛びファール。

(あ、こんな感じかな)

5球目、バットの芯で捉えた打球はセンター方向へヒット性の当たり。

(当たると、気持ちいいです)

彼女は小さく笑みを浮かべる。

「上手いな、その調子だ」

(さすがの飲み込みの早さだな。さて、俺も打つか)

赤石は軽く素振りをし、硬式時速140キロの球が来る打席へと入る。

彼女同様、1球目は見逃す。

(久々に見ると速いな…だが)

2球目、赤石がバットを振りぬくと強烈な打球がセンター方向へと飛んだ。

(真っ直ぐだとわかってるなら、当てるのはさほど難しくねえ)

捉えた部分が若干バットの根元寄りだったため、赤石の手に少々の痺れが走る。

(芯に当てるのはまだまだだな)

赤石はバットを握った手に視線を落とし苦笑いをした。

「赤石先輩」

赤石が打っている途中、先に打ち終えた彼女が後ろから声をかけた。

「あ?」

「ホームランの看板に当てたら晩ごはんおごります。当てなくても特にありません」

「いきなりだな…この打席中にか？」

「はい」

この時点で赤石は残りあと5球、ホームランの看板は小さく、140キロの速球をピンポイントに狙い当てるのは至難の技である。

結果はというと、惜しい当たりが1球あっただけ。

「ホームラン見たかったです」

「おごってもらえねえのは残念だ」

（俺の実力じゃあれは当たる気がしねえ…100球やっても1球当たるかどうかってレベルだったな）

会話を交えながら少し歩いた後、2人はボウリングのフロアに来ていた。

彼女は赤石が選んだボールと同じ重さの物を手に取る。

「球、重いです」

「15は重いだろうよ…9か10ポンドあたりにしときな」

「そうします」

彼女は10ポンドのボールを手に取る。

（まだちょっと重い気がします。でも、これでいきます）

2人は靴を履き替え、指定のレーンへとボールと荷物を持ち運んだ。

「力を抜いて真っ直ぐ投げる」

「はい」

彼女は赤石から適宜アドバイスを受けて投げていた。

ここまで赤石は2連続ストライク、対して彼女はまだ1本も倒していない。現在彼女の3フレーム2投目。

（ちからぬいて、まっすぐ）

彼女の放ったボールはゆっくりと真っ直ぐ転がって行き、1番ピン

を捉え計7本のピンが倒れる。

「当たりました。こんな感じですか？」

「ああ、そんな感じだ。慣れてきたらもう少し速く投げるといい」「はい」

そして7フレーム目、彼女の放ったボールはある程度の速度を維持しながら1番ピンを捉え、全てのピンが倒れる。

「おお、ストライクだ」

(わーい全消し)

彼女は小さく笑みを浮かべる。

「気持ちいいですね」

「そうだな。連続だともっと気持ちいいぞ」

「気持ち良さそうで羨ましいです」

赤石はここまで6連続ストライクを出している。続いて赤石の7フレーム目。

「…あ」

手元が狂い、赤石は思わず声に出る。ボールが想定より曲がらず、1番ピンを外しながら7本のピンを倒す。7連続ストライクとはならなかった。

(あ、トライアングルです。むずかしそう)

彼女は残ったピンの位置を見て赤石に声をかける。

「赤石先輩、リベンジです」

「あ？」

「この形、全部倒したら晩ごはんおごります。倒さなくても特にありません」

「ほう？」

残ったピンは1番、7番、10番の3本。両端後ろと一番前だ。一発勝負でこれらを全部倒すのは至難の技である。

結果はというと、惜しくもピンが1本残ってしまった。

「スペア見たかったです」

「ああ残念だ」

(もう少し右だったか…1回きりは厳しかったな)

「鶯櫓公園の方まで来たか」

「せっかくなので、ちよつと休憩しませんか？」

「そうだな」

スポーツアミューズメント施設を後にした2人は、鶯櫓と隣町の境界を跨ぐ公園へと足を踏み入れた。

都会と田舎の中間地点といった趣きで、全体的な規模は大きいもののきちんと整備されており緑溢れる公園となっている。

2人はそんな公園の無数にあるベンチのひとつに腰かけた。

「ぽかぽかして気持ちいいです」

「晴れてるし、気温も丁度良いくらいだな」

そのまま特に会話も無く、2人はうらかな天気身を任せリラックスする。聴こえるのは噴水と風に靡く草や木葉の音。

座り始めてから5分も経たないうちに、赤石は自分の左肩から腕にかけて何かに乗られてるような感触に気付く。

(おいおい…)

感触のある左の方を見ると、彼女が赤石に寄りかかっていた。

彼女はすーすーと寝息を立てている。

(朝から動き回ったとはいえ、この状況でよく眠れるな…)

赤石は近くに迫った彼女の顔へと視線を落とす。

しかし思った以上に迫っていたため、慌てて前方へと視線を戻した。

(ついこの間負かした奴に体を委ね、寝顔を見せるとはな。敵わねえ)

赤石はこの状況で眠る彼女に対し、自身が彼女に負けた理由を感じ取ると同時に、彼女を今回のパートナーに選んで良かったと今更ながら思った。

彼女は寄りかかったまま「…ん」と声を上げた。

「起きたか」

「あ…おはようございます」

「ああ、おはよう」

「すみません、ほかほかと心地良かったもので…」

「気にするな」

「どのくらい、寝てました？」

「20分くらいだ」

「そのあいだ、支えてくれてたんですね。ありがとうございます」

彼女は体勢を戻す。

「…ああ。レイリ、紅茶は好きか？」

赤石は照れ隠しなのか小声で返し、話題を変えた。

「はい、好きです」

「近くに紅茶のうまい店があるんだが、行くか？」

「はい、行きましょう」

午後3時を回った頃、2人はティータイムへと突入した。

4話 #13 「散策します・3」

——喫茶店

「どうだ？」

「…おいしいです、とても」

彼女は紅茶を一口啜って、味わうように飲み込み感想を述べる。

相当美味しかったのか、一瞬目を見開いた後カップへと視線を落としました。

「海外の高級茶葉を独自にアレンジしたものらしい。詳しくはわからないが」

「こんなにおいしい紅茶、はじめて飲みました」

「口に合ったようで何よりだ」

彼女はお茶菓子として注文したクッキーを口に運ぶ。

「クッキーもおいしいです」

彼女は美味しそうに頬張る。

「…何つうか、甘いもの好きか？」

「はい、大好きです」

「そうか」

「？」

「ああ、別に意味は無えよ。そう思ったただけだ」

赤石は紅茶を啜ると再び口を開く。

「俺には妹が1人いるんだけどな、そいつも甘いもの好きでよく自分で作ったりしてんだ」

「そんで、食ってる時は同じような顔になる」

「好きなものを食べてる時って、しあわせです」

「レイリはお菓子とか自分で作ったりするの？」

「いえ、わたしは作ることができないので買ってます」

「そうか」

「でも手作りお菓子には、あこがれてます」

「レイリならうまく作りそうだな」

「お味のほうですか？」

(味：『うまく』ってことか)

「あー、両方の意味で受け取ってくれ」

不意をつくような質問だったが、赤石は頭を働かせ答える。

「あの、お菓子作ったら、食べてくださいいね」

「ああ」

赤石は幾分か優しげな声で了承した。

喫茶店でしばらくゆつくりした後、2人は鶯櫓市役所に来ていた。

もちろん公的な手続きをしに来たわけではない。目当ては市役所の最上階に一般開放されている展望スペース。

「知ってる限りじゃここは鶯櫓で一番高い建物だ。まあ他の建物も全体的に高えんだけだな」

最上階の通路を歩きながら赤石が説明する。通路はぐるんと1周でき、あらゆる方向から町を見下ろすことが可能だ。

「36階ですってアナウンスにときめきました」

「そう何度も耳にする言葉じゃねえよな」

ここに来た理由、彼女はじつくりとそれを見つめる。

「ゆうひ、うつくしいです」

「そうだな」

喫茶店から出た後、町には夕日が差し込んでいた。

橙色に染まった町並みを高い所から見つめたい、赤石はそんな彼女の要望に応えるべく市役所へと案内したのである。

「赤石先輩」

夕日を見つめたまま赤石の名を呼ぶ。

「あ？」

「手を、つないでください」

「な……！」

驚く赤石を横目に彼女は手を差し出す。

「…だめ、ですか？」

彼女は少し悲しそうな目をする。

「…いや、驚いたただけだ」

(その目は反則だろ…)

赤石は差し出された手をおそるおそる握った。  
彼女もゆっくりと握り返す。

「あたたかいですね」

「…そうか」

赤石はどこか照れくさそうだ。

(考えが読めねえが…まあ、いいか)

2人は夕日を見つめている。手を繋ぎながら。

赤石がふと横目で彼女の顔を見た。

夕日を見つめる1人の少女。

メガネ越しにもはつきりとわかる全てを見通しそうなほど透き通ったその目は、強くもあり儂くもあり、何よりその刹那、溶けてしまいいそうなほどに脆そうな目をしていた。

(…なんて顔してやがる)

そんな目を捉えた赤石に、えも言われぬ感情が湧き上がってくる。感情の正体や彼女が何を考えているかはわからないが、その目を濁らせたいいけない、ただそう思った。

「赤石先輩」

彼女は手を繋いだまま体を赤石の方へと向ける。日は暮れかけて夜の風景へと近づいて行く。

「あ?」

繋いだ手に視線を移し、

「わたしは赤石先輩の、この手を信じます。なので赤石先輩もわたしの手を信じてください」

しっかりと手を握り直した。

「ああ」

赤石も真剣な表情で頷く。

「おおきくて、つよい手ですね」

「ゴツくて握るのには向いてねえだろ？」

数々の男たちと語り合ってきたであろうその手は、繊細で優さを帯びている彼女の手とは対照的だった。

「いえ、わたしの手をしっかりと包み込んで、つよさの中に優しさを感じます。すてきな手です」

「！……っ」

彼女がそう言った瞬間、赤石は手を離し背を向ける。

「そんな褒め方するんじゃないやねえ。…時間だ、そろそろ行くぞ」

赤石は背を向けたまま歩き出し、

「はい」

彼女もそれについて行く。

「…すげえな、本当に」

赤石はポツリと彼女に聞こえないように零した。

市役所を出て、赤石の案内で2人は小さな飲食店に来ていた。

「前に鵜櫓行った時に偶然見つけてな」

2人を挟んでテーブルの中心には鍋が1つ。

「ちゃんこ鍋は、予想外でした」

「もしかして苦手だったか？」

「いえ、好きですよ。楽しみです」

「そうか。ここちゃんこ鍋は野菜が多く鶏肉に魚と栄養バランスが優れてる上に消化にも良くてな、戦いの前には打ってつけた。もちろん味も申し分ねえぞ」

さらに言えば今回の戦場である鵜櫓会館にも近い。

「このあとのことも考えてくれてたんですね、ありがとうございます。しっかりと食べて備えます」

「ああ、そうしてくれ」

「ごつつあんです」

「ぷっ、似合わねえな」

「む…言ってみただけ」

「気持ちわかる。ほら、もう食えるぞ」

「はい、いただきます」

4話 #14 「意味を持たせる意味もある」

「結構食ったな」

赤石は食事を終え一息つく。

「ごちそうさまです」

赤石は試すように彼女の様子を窺う。

「？」

「：言わねえのか？」

「にあわねーな、って返されるので」

彼女の返答に赤石は軽く笑って返す。

「赤石先輩」

「あ？」

彼女は閉じた両手をテーブルの手前ギリギリにちょこんと置く。

「どちらかの手に、おしぼりを握ってます。当てたらおごります」

「ほう」

「はずしたら、おごってください」

彼女はどこか挑戦的な笑みを浮かべる。

「今回はリスク付きか、いいだろう」

赤石は彼女のギャンブルに乗った。

（見た感じ、どちらの手も同じだ。純粹に2分の1か？）

（なら、勘で選んー）

その瞬間、赤石は自分のおしぼりがテーブルから消えていることに気付く。

（あ？どこにいった？）

自分の周りを見ってみるが、見当たらない。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもねえ」

赤石はおしぼりが消えたのは彼女の仕業だと考える。

（だが、それに何の意味がある？おしぼりが1枚あればこのゲームは成り立つはずだ。ということは）

再び周りを見る。今度は彼女の周りも。

(…ん?)

赤石は彼女の右手、指の間から微かに白い布のようなものが下の方へと垂れているのを発見する。

(テーブルで隠れてほとんど見えねえが…あれは間違い無くこの店のおしぼりだ)

彼女の手の大きさでは片手でおしぼりを包み込めない。だから手の位置をテーブルの手前ギリギリのところにした。もしはみ出たとしても隠せるから。

赤石はまずそう考えたが、そうだとしても赤石のおしぼりは特に関係が無い。それに彼女の手でも深く握れば難なく包み込める大きさだ。

(そもそもこっちから見えてるってことは、角度を考慮してもそっちからでも見えてるはずだ。それともギリギリそっちからは見えねえのか?)

(いや、レイリのことだ、見えてることに気付いてるはず。気付いてるなら何故隠さねえんだ?)

消えた赤石のおしぼりと指の間から垂れているおしぼり、その2つが意味するものは、

(わざと見せてるな…確かにそこは隠してるように見せかけられる、絶妙な手の位置だ)

(おしぼりを『握ってる』方を当てるっていうのも引っかかる。握らなくても手の中にあるように思い込ませることは出来るからな)

(つまり見せてる右手には『握ってない』。指で挟んでテーブルに隠れるよう垂らしてるだけで、本当に握ってるのは左手、消えた俺のおしぼりの方だ!)

「左だ。その手に握られてる」

赤石は確信を持って選択した。

「…見えてる方を、選ばなかったんですね」

彼女は少々間を取った後、口を開いた。

「ああ。さあ開けてくれ」

「わかりました」

彼女はゆっくりと左手を開ける。

「…!？」

赤石は大きく目を見開く。

そこにおしぼりは無かった。

「右、か…？」

彼女はゆっくりと右手を赤石の前に差し出し、そのまま手を開けた。

「…そうか」

彼女の右手に握られていたおしぼりを見て、赤石は外したことを自覚した。

彼女はわずかに指の間からはみ出たおしぼりと、消えたおしぼりからトリックを見抜いてくると信じていた。赤石ならどちらも見逃さないだろうと。安易に見えてる方へ飛びつかず、そして辿り着くだろうと。

見抜いてくると信じた上で『握っていた』。赤石のおしぼりは意味を持たせるためのフェイク。握ってるという言い方も同様に、辿り着かせるための罠。赤石も選択前の段階でさすがにそこまでは見抜けなかったようだ。

「ちくしょう、レイリの方が1枚上手だったか」

「ごつつあんです」

「はは、しゃあねえな」

外したものの、赤石はどこかすつきりしたような表情だった。

「それで、俺のおしぼりはどこだ？」

「握ってます」

「それ俺のかよー！」

「わたしのは、ひざに乗せてました」

彼女はテーブルの下からおしぼりを取り出す。

「店出る前に手洗つとけよ」

おしぼりに関して付け加えておくと、赤石はテーブルを一回拭くのに使用しただけだ。

「はい」

その後、彼女は手を洗い店を後にした。

2人は鶉櫓会館へと向かっている。時刻は現在19時40分。

お互い顔に緩みは無い。徐々に緊張感も高まりつつあるようだ。

「夜の鶉櫓もいいですね」

「そうだな」

無数の電灯に照らされた夜の街並みは、日中とはまた違った趣きを醸し出していた。

「赤石先輩」

「あ?」

「わたしをパートナーにしたこと、後悔してませんか?足をひっぱるかもしれないよ?」

「今更何言つてやがる、むしろ俺が足を引っ張らねえか心配だ」

表情こそ変えないものの、心持ちはお互い勝負師へと変わって行く。

「レイリで良かったと思ってるさ。今の時点では」

「わたしも赤石先輩で良かったと思ってますし、思いたいです」

彼女も赤石も含みある言葉を交わす。それぞれ胸に秘めてるものがあるのだろう。

しかし両者の目的はただ一つ、勝利すること。他のことを考えるのは勝つてから。

「ここだ」

19時50分、鶉櫓会館へと到着する。

「大きな建物ですね」

「そうだな。準備はいいか?」

「はい。いつでもどうぞ」

彼女の言葉で赤石は扉を開ける。2人は本日最後にして最大のメ  
インイベントへと足を踏み入れた。

【第4話 終】

## #S—1 「キャラ設定とか色々」

※4話終了時点での設定です。

鈴瀬麗梨（スズノセ レイリ）

年齢 15歳

趣味 パズル

身長 162cm

誕生日 2月4日

桐標高校1年生。黒長直髪の口数少ないミステリアス少女。作中では1番の美少女。

あまり笑わないが笑みはそれなりに浮かべる。甘いものが好き。

中根瑞希（ナカネ ミズキ）

年齢 15歳

趣味 ?

身長 174cm

誕生日 ?

桐標高校1年生。麗梨と同じクラス。明るくノリのいい性格。バレー部所属で運動神経はかなり良い。ショートヘアのスポーツ少女。

小松綾芽（コマツ アヤメ）

年齢 15歳

趣味 ?

身長 156cm

誕生日 ?

桐標高校1年生。麗梨と同じクラス。クラス委員長を務めている。本人は否定してるが、ところどころ抜けてる。おさげのメガネ少女。

赤石修哉（アカイシ シュウヤ）

年齢 18歳

趣味 トレーニング

身長 189cm

誕生日 4月16日

桐標高校3年生。目付きは少し怖いが、顔立ちは整っている。デユ

エルも喧嘩もかなり強い。頭の回転が早く成績も良ければ、肉体も見事に鍛え上げられておりスポーツ万能と割と常人離れしている。

睨むとさらに目付きが怖くなる。目付きや言動などで知らない人からは不良生徒だと思われてるが、喧嘩以外は校則を守っており授業態度も真面目である。

赤石桜（アカイシ サクラ）

年齢 15歳

趣味 お菓子作り

身長 165cm

誕生日 ?

桑鴉高校1年生。修哉の妹。兄同様目付きは少し怖い、顔立ちは整っている。茶髪セミロングの不器用少女。修哉の後半と同じ。

兄を心の底から慕っている。校内の友達に藍子だけ。男の場合は喧嘩が強ければ自然と人も集まってくるが、女だとそうもいかない。実は人一倍寂しがりで甘えんぼ。喧嘩は同性相手には負けない。

栗原藍子（クリハラ アイコ）

年齢 15歳

趣味 ?

身長 147cm

誕生日 ?

桑鴉高校1年生。桜と同じクラス。桜とはお互い唯一の友達。

桃山紫（モモヤマ ユカリ）

年齢 25歳

趣味 ?

身長 159cm

誕生日 ?

元プロデュエリストの現フリーデュエリスト、なのでデュエルは強い。

黒川（クロカワ）

年齢 37歳

趣味 ?

身長 177cm

誕生日？

自らを警察官と称する男。麗梨の資質に惚れ、彼女と組む。

青葉将一（アオバ ショウイチ）

年齢 62歳

趣味？

身長？

誕生日？

デュエルハウス黒蠍のオーナー兼経営者。裏世界で30年間無敗という伝説を持つが詳細は不明。

用語

デュエルハウス：デュエルをする店。ハウスによってルール等が違ったりする。雀荘のようなものと考えて頂ければ。

プロ：プロデュエリストのこと、詳しくは下記にて。

レート：倍率。前から順にライフレート、勝敗レート、マッチレートである。ライフレートは100につき1で換算する。

プロデュエリストの分類

表：公式大会で稼いだ賞金で生活してる人。TV出演などの露出も多い。単にプロと言えばこの分類を差す。賞金のみで生活できるプロは少ないため、兼業してる人も多い。

裏：表以外のプロ。大きく分けて3種類存在する。

フリー：デュエルハウスで客たちの相手をする種類のデュエリスト。だいたいは従業員としてデュエルハウスに所属している。分類上裏だが表とも結構繋がりがあがる。表から流れてきた人も多い。

ゴロ：フリーが従業員ならこっちは客側。ただ、従業員であるフリーを相手にするには分が悪いため基本的に同じ客同士で奪い合う。娯楽の側面が強く、これが本業の人は少ない。そもそも場代の存在によりプラス収支の人は少ない。

裏プロ：個人または組織団体などが大金やそれに準ずる物を賭け

る勝負をする際に代打ちとして呼ばれるデュエリスト。単に裏プロ  
と言えばこの分類を差す。属する人は少数だが、一癖も二癖もある猛  
者共が揃っており、実力は表のトップレベルとも引けを取らないと  
か。

## 地域

桐標(キリハナダ)：彼女の住む特にな変わった所は無い一般的な町。  
ただ、桑鴉の煽りを受けているのか少しばかり治安が悪い。

桑鴉(クワトキ)：桐標の隣に位置する県内で最も治安が悪い地域。  
鶯籠(ヒワハゼ)：県内1の都市。

## デュエルハウス

フリード：桐標にある普遍的なタイプのデュエルハウス、彼女がよ  
く訪れるデュエルハウスの1つ。

黒蠍：オーナー兼経営者の青葉が自ら店に立っているデュエルハ  
ウス。土曜日はバーとしても機能している。比較的規模は大きめで  
デュエル中継も可能。

ナチュル：桑鴉にある女性デュエリスト限定のデュエルハウス。  
従業員も全て女性。ノーレート。客層を絞るタイプのデュエルハウ  
スは全国に少なからず点在しており、対象外の客は基本的に入店でき  
ない。交渉次第では融通が利くこともある。

5話 #1 「鶺鴒会館」

「…広いな」

赤石が扉を開けると広大なエントランスが待ち受けていた。しかし広さに反して人は疎らのようだ。その光景を目にして彼女は

「電気代、高そう…」

ぼつりと呟いた。

(そこか…)

彼女の呟きに赤石は心の中でツツコミを入れる。

「赤石様と鈴瀬様ですね？お待ちしておりました」

2人の入館に気付いた会館の従業員が近付き声をかける。

「ご案内致します」

従業員が奥の方へと歩き出すと2人は後ろをついて行った。

「いちらでいいます」

広い会館を歩き、エレベーターに乗り、また歩き…そうして案内されたのはよくある会議室のような空間。そんなに広くはない。

室内は物が少なく殺風景で、中央には勝負に使うであろう四角のテーブルが1台。椅子は2席ずつ向かい合って計4席あるだけだ。

そして同じような恰好をした黒服が数人程。対戦相手はまだ見当たらない。

「では、武運を」

2人を案内した従業員はそう言って部屋の扉を閉め去った。

これからの進行を務めるであろう黒服の1人が声をかける。

「お待ちしておりますました赤石様、鈴瀬様、相手方はまだ来られておりません。どちらかの席に座りお待ち下さい」

黒服の言葉を受け2人は左側の2席にそれぞれ着席した。

しばし張り詰めた空気の漂う静かな時間が流れた後、再び部屋の扉が開いた。

「では、(っ)武運を」

同じような流れで案内されてきたであろう2人の顔を見た瞬間、彼女は目を見開いた。

「お待ちしてまりました柳沢(ヤナギサワ)様、へズ様、どちらかの席に座り下さい」

彼女はそのうちの1人を知っている。

「よお、2週間ぶりくらいかあ?」

その1人が彼女に声をかけた。

「あなたが相手…?」

その相手とは2週間前、デュエルハウス黒蠍で彼女とデュエルして負けた若者だった。今更ながら名は柳沢というらしい。

「ああそうだ。負けを取り返しに来たぜ」

「おい柳沢、座ってから話せヨ」

既に席についていたもう1人が着席を促す。

「へいよ」

柳沢が着席しこれで4人全員が座った形だ。

「お前、現役高校生なんだってな。黒川から聞かされたぜえ?」

言ってしまうば、このタッグデュエルの舞台は黒川が仕組んだものだ。望んだのは柳沢だが。

タッグデュエルにした主な理由は、赤石と彼女がデュエルした事を知った黒川の、この2人が組んだらどうなるのかという好奇心。もちろん他にも理由はある。

彼女に連絡するまでもなく、赤石が誰をパートナーに選ぶかは当然予測しているし、柳沢が誰を連れて来るのかも予測している。

ただリベンジが成功するか否かは黒川の知るところではない。ルール等も黒服に任せてある。

「しかし相変わらずかわいい顔してんなあ。今日は彼氏連れかあ?」  
「…」

彼女は柳沢の言葉を無視する。

「レイリ、知り合いか?」

赤石が柳沢を見ながら問う。

「1度デュエルしただけ…」

彼女は静かに答える。

「なあ彼氏さんよ、麗梨ちゃんとはどこまでいったんだ？」

「あ？何のことだ？」

「そりゃ、付き合ってる男女がするー」

「ああ!？」

柳沢が言い終える前に赤石はガンを飛ばした。

「おお、怖えな。冗談だつて、そんなに睨むなよ」

赤石の睨みが効いたのか柳沢は怯む。

「おい、下らないこと言つて相手を怒らせるなヨ」

「へいへい」

隣から呆れ気味に投げられた言葉に柳沢は軽く返した。

「ああ、俺はヘズ。今日は柳沢のパートナーとして来た、よろしくナ  
彼女の視線に気付いたヘズは名を名乗った。

「鈴瀬です、よろしくお願いします」

(語尾にちよつと癖があるかも。外国の方?)

金髪碧眼とまではいかないが、髪色は金に近く、目は灰かに青みが  
かつて一般的な東洋人のそれとは異なる見た目をしていた。

しかし日本語能力には問題無さそうだ。

「赤石だ、よろしく」

「よろしく、さつきは柳沢がすまなかつたネ」

「いえ、構いませんよ。お互い良いデュエルにしましょう」

赤石は礼儀正しく返事をした。

「では、そろそろ始めさせて頂いても宜しいですか？」

会話が途切れたのを確認して黒服の1人がテーブルへと向かう。

そしてテーブルの端中央付近、いわゆる審判の位置に立ち止まり、

「念のため確認しますが、席順はそのままで宜しいですか？」

それぞれ4人に確かめると、4人ともそのまま構わないと返事を

した。

「ではこれよりルール説明を致します。と、その前に…アレを頼む」  
審判役の黒服は別の黒服に何か持って来るよう促し、すぐにそれを  
受け取った。

「今日のデュエルで使用するカードです。5分時間を取りますので、  
記憶して下さい」

黒服は資料を配布する。内容はシンプルにカード名が記されてい  
た。

【A】

《ジェネティック・ワーウルフ》攻2000／守 100

《死霊騎士デスカリバー・ナイト》攻1900／守1800

《サイバー・ドラゴン》攻2100／守1600

《ランサー・デーモン》攻1600／守1400

《ツイン・ブレイカー》攻1600／守1000

《サンダー・ボルト》

《ハーピイの羽根帚》

《大寒波》

《死者蘇生》

《デーモンの斧》

【B】

《クリボー》攻 300／守 200

《王座の侵略者》攻1350／守1700

《首領・ザルグ》攻1400／守1500

《ニユート》攻1900／守 400

《ダークシー・フロート》攻 0／守 300

《デイメンション・ウォール》

《次元幽閉》

《聖なるバリア ―ミラーフォース―》

《徴兵令》

《落とし穴》

【C】

- 《翻弄するエルフの剣士》攻1400／守1200
- 《不意打ち又佐》攻1300／守800
- 《サイバー・ドラゴン》攻2100／守1600
- 《執念深き老魔術師》攻450／守600
- 《サイクロン》
- 《強制転移》
- 《成金ゴブリン》
- 《激流葬》
- 《ロスト》
- 《落とし穴》

【D】

- 《サイバー・チュチュ》攻1000／守800
- 《ダンディライオン》攻300／守300
- 《リーフ・フェアリー》攻900／守400
- 《速攻のかかし》攻0／守0
- 《巨大化》
- 《黒いペンダント》
- 《自律行動ユニット》
- 《神の宣告》
- 《不運なりポート》
- 《ホーリー・エルフの祝福》

## 5話 #2 「複雑に変則」

4人は資料に目を通しながら記憶するだけでなく各自、様々な考えを張り巡らす。赤石と彼女はもちろんのこと、柳沢とヘズにとつてもここでのデュエルはおそらく初であろう。

(これは、そのまま4つのデッキという解釈でいいの力?)  
(だとしたらAを引きてえな。もしくはヘズがAか。だが)

ヘズの解釈通りなら、Aのカードリストは他より数段上の強さを持つている。しかし実際にそうであるかはこの段階ではわからない。資料には使用カードが示されているだけ。

(まだわからない…今は覚えるだけ)

(順番や流れは後から説明あるだろうしな)

彼女と赤石も含め4人はカードを覚えることに集中した。

ちょうど5分を経過したところで、黒服が口を開いた。

「5分経過しました。資料を回収します」

別の黒服が資料を回収していく。4人ともカードはほぼ記憶したようだ。

回収と同時にまた別の黒服が今度は2つの箱をテーブルへと持っていく。

「では次に順番と使用デッキを決めます。赤の箱、青の箱からそれぞれ1つつクジを引いて下さい。引きましたら中身はまだ見ずにテーブルに置いて下さい」

各自クジを引きテーブルに置く。クジは紙に包まれていて中は見えない。

「赤の箱のクジにはAからDのアルファベットが書かれています。引いたクジに記されているアルファベットが各自1戦目のデッキとなります」

「それでは赤の方のクジを開けて下さい」

黒服の指示で4人はクジを開封した。その結果は

柳沢Ⅱ【B】へズⅡ【C】赤石Ⅱ【A】彼女Ⅱ【D】

(よし、【A】だ。レイリは…【D】か。まあ、悪くはねえな)

【A】デッキは他のデッキと比べると明らかに強い。2人相手だろうが押し切ってしまえる程に。

逆に【D】は、罨カードが充実してる【B】やバランスの取れてる【C】と比べても1、2段見劣りしてしまう。装備魔法があるとはいえ、パワー不足は否めない。

赤石が強力な【A】を引いたというのに、悪くはないという感想になるのも自然である。だからといって彼女に悪態をつくようなことは決してしない。赤石も運、もといギャンブルというものをよく知っている。

【B】と【C】か、五分五分つてところだね。青のクジに期待する力)

「では青の方のクジを開けながらで良いので聞いて下さい」

黒服の指示通り4人はクジを開封していく。

(…【1】だナ)

「青の箱のクジには0、1、2、3の数字が書かれています。1、2、3という順番で2戦目、3戦目と進んだ時にデッキを別のプレイヤーへと回します」

(まあ、さすがに3戦連続同じデッキつつうことはないわな。【B】と

【C】じゃ勝てるか微妙だし。お?【2】か)

「そして0は…」

「回さずに3戦連続そのデッキでデュエルして頂きます」

(相手が【1】と【2】、俺は…【3】!?!ってことは…!)

(…【0】)

彼女はクジの中を見た後、俯きながらテーブルに置いた。

各々が座っている席と引いたクジの結果から使用デッキは以下のようなになる。

左上柳沢 右上ヘズ  
左下赤石 右下彼女

1 戦目

柳沢【B】 ヘズ【C】

赤石【A】 彼女【D】

2 戦目

柳沢【C】 ヘズ【A】

赤石【B】 彼女【D】

3 戦目

柳沢【A】 ヘズ【B】

赤石【C】 彼女【D】

「ははっ、【D】で【O】とはついてねえなあ？」

柳沢は笑いながら彼女を煽る。

(ふう、赤石が【O】を引かなくて良かったヨ)

それに対し、【A】デッキを3戦連続で使われるという最悪を回避したことにヘズは安堵する。

「お前も悲惨だなあ、同情するぜ」

柳沢は赤石を軽く憐れんだ。

「…同情？」

しかし赤石は不敵な笑みを見せる。

「何言ってやがる、むしろお前のパートナーに同情するな」

「…何だと？」

「不運だったかどうかは終わってからわかるもんだ」

「そうだな。勝った気になるのはまだ早イ」

ヘズも赤石の言葉に同意する。

「レイリ、顔を上げな。勝ってやろうぜそのデッキで」

(赤石先輩…)

「…はい」

彼女は顔を上げてしっかりと相手を見据えた。

(ちつ、なんか気に入らねえな。まあ、こつちが有利なのは明白だ。勝って取り返してやる)

「それではルールの説明をします。タッグデュエルという変則デュエルである以上、多少長くなりますが記憶して下さい」

(結構無茶言うナ、この審判)

その後審判からの長い説明があり、各自不完全ながらも記憶していった。まとめると以下のようなになる。

## ルール

基本はLP4000、手札3枚、先攻ドロワー有りのスピードルール。フィールドはプレイヤー毎に独立している。攻撃が出来るのは4番目のターンプレイヤーから。

パートナーの手札やセットカードは通常のデュエルと同じく非公開情報として扱う。

攻撃や効果対象の選択は、まずプレイヤーを指定するという手順を踏む。

例えばサンダーボルト等は相手フィールドを指定してからそのフィールドのモンスター全てという形になる。

ただし、激流葬等はその手順を踏まず4つのフィールドのモンスター全てという形になる。

攻撃反応型の罫は、そのカードがセットされているフィールドへの攻撃でなければ発動不可。

プレイヤーAに攻撃した後、同バトルフェイズ内でも別のモンスターでプレイヤーBへと攻撃することも可能。

プレイヤーの敗北時について

LPが0、またはデッキ0で引けなくなり敗北した場合、フィールドのカードはパートナーのフィールドへと引き継げる。

その場合、引き継ぐカードは生存しているパートナーが選択する(セットされているカードを見ても構わない)

また、引き継げる枚数はパートナーのフィールドの空きがある分だ

け。

墓地はそのまま残る。他プレイヤーの死者蘇生等の対象にすることも可能（パートナーのカード使用自体はルールに違反しない）

デッキに関しては残ってても引くことは出来ず、効果の対象にも出来ない。

ダメージを受けてLPが0を下回った場合、超過ダメージは超過分パートナーのLPから引かれる。デッキ切れでの敗北の場合は残ったLP分パートナーに加算される。

なお、敗北したプレイヤーのターンは以後パートナーのターンとして回る。

デュエルの終了時と開始時について

プレイヤーとそのパートナーの2人共が敗北した瞬間にデュエルの終了が確定する。

ターン中に相手LPを0にしてデュエルの終了を確定させたプレイヤーは、次のデュエル4番目のターンプレイヤーとなる（デッキ切れの場合はその1つ前のターンプレイヤー）

4番目のターンプレイヤーの対角に位置する者が必然的に1番目のターンプレイヤーとなり、1番目のターンプレイヤーの前に位置する者が2番目のターンプレイヤーとなる。

先に2勝した側がマッチに勝利する。また、デュエル中不明な点があれば審判に確認を取ってもよい。

「最後に先攻、即ち1番目のターンプレイヤーを決めます」

審判はテーブルに4枚の裏返しになったカードを並べる。

「1枚だけ当たりがあります」

4人がカードを手に取りめくった結果、1戦目は赤石が先行となった。

「それでは、デュエルを…失礼、1つ重要な事を忘れてました」

審判は思い出したように黒服へと視線を送る。

受け取った黒服はすぐさま理解し、迅速に物を持ってきた。

「…！」

彼女が驚く間も無く、赤石と彼女の間に薄い仕切りのようなものが設置される。

「こちらの仕切りはパートナーの顔と手札を隠すためのものです」

同じく柳沢とヘズの間にも設置される。対戦相手側から見ればわかるが、仕切りは思ったよりも小さい。言葉通りパートナーの顔と手札だけを隠すような大きさだ。

「デュエル中、パートナーの顔や手札を見ることは禁止します。お互いの手札を見ながらの相談など興ざめもいいところですからね。仕切りを越えて覗き込む、または手札をパートナーに見せるような行為が発覚した場合は即敗北にさせて頂きます」

（なるほど。まあ俺からすれば見えていようが関係ねえな。それよりもまずは…確実に初戦を取る！）

赤石の目付きがより鋭さを増した。

「では改めて、デュエルを開始します」

5話 #3 「1回戦 1」

「ドロー、スタンバイ、メイン」赤石手札《ハーピイの羽根帚》《ツイ  
ン・ブレイカー》《ランサー・デーモン》《ジエネティック・ワーウル  
フ》

(さあ、どうすっかな)

タッグデュエルと言えど最初のターンに出来ることは限られてい  
る。

「《ジエネティック・ワーウルフ》召喚」

「ターンエンドだ」

赤石は少し間を置いた後、ターンを終了した。

デュエルを始める直前から赤石にとって1つ気掛かりな点があつ  
た。手札事故である。

赤石と彼女のペアが「A」デッキを使えるのは1回戦のみ、となれ  
ばこの1回戦は是が非でも勝利を手にした。

しかし、いくら強力なデッキだとしても手札の組み合わせ次第で敗  
北も有り得る。増してタッグデュエルともなればパートナーの手札  
も重要になる。

(レイリ次第、か)

ただこの時はまだ薄かった。しかしデュエルが進むに連れ、  
赤石は「A」デッキの強さを思い知ることになる。

柳沢手札3枚      ヘズ手札3枚

LP4000            LP4000

◇   ◇   ◇   ◇   ◇   ◇  
◇   ◇   ◇   ◇   ◇   ◇

赤石↓柳沢

あ|| 《ジエネティック・ワーウルフ》攻撃表示

◇   ◇   ◇   ◇   ◇   ◇

◇   ◇   ◇   ◇   ◇   ◇

LP4000

LP4000

赤石手札3枚

彼女手札3枚

《ジエネティック・ワーウルフ》星4／地属性／獣戦士族／攻2000  
／守 1000

《ハーピィの羽根帚》通常魔法

(1)：相手フィールドの魔法・罫カードを全て破壊する。

《ランサー・デーモン》星4／闇属性／悪魔族／攻1600／守1400

相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを攻撃対象とした自分のモンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《ツイン・ブレイカー》星4／闇属性／戦士族／攻1600／守1000

このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、もう1度だけ続けて攻撃する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(まあ1戦目はあわよくば、だな)

「モンスターセット、カード3枚セット、ターンエンド」

柳沢手札0枚

ヘズ手札3枚

LP4000

LP4000

裏 裏 裏

◇ ◇ ◇

◇ 裏 ◇ ◇ ◇ ◇

柳沢↓彼女

あⅡ《ジェネティック・ワーウルフ》攻撃表示

◇ あ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

LP4000 LP4000

赤石手札3枚 彼女手札3枚

(全伏せ…)

「ドロロー、スタンバイ、メイン」彼女手札《黒いペンダント》《サイバー・チュチュ》《巨大化》《ダンディライオン》

(まずは、こっち)

「モンスターセット、ターンエンド」

柳沢手札0枚 ヘズ手札3枚

LP4000 LP4000

裏 裏 裏 ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 裏 ◇ ◇ ◇ ◇

彼女↓ヘズ

あⅡ《ジェネティック・ワーウルフ》攻撃表示

◇ あ ◇ ◇ 裏 ◇

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

LP4000 LP4000

赤石手札3枚 彼女手札3枚

《黒いペンダント》装備魔法

装備モンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

《サイバー・チュチュ》星3／地属性／戦士族／攻1000／守 80

0

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

《巨大化》装備魔法

(1)：自分のLPが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍になる。

自分のLPが相手より多い場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の半分になる。

《ダンディライオン》星3／地属性／植物族／攻 300／守 30

0

(1)：このカードが墓地へ送られた場合に発動する。自分フィールドに「綿毛トークン」(植物族・風・星1・攻／守0) 2体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

(やつと俺に回ってきたカ)

「draw stand by main」

(わー流暢、やっぱり外国の方?)

「お? やっぱり気になるか? ヘズはあっちでもプロやってたのさ」

彼女の考えを読んだかのように柳沢はどこか得意気に言う。

「2年だけナ。時々訛るが気にしないでくれ。《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚」

ヘズは冷静に進行する。

「《不意打ち又佐》召喚。battle」

「《サイバー・ドラゴン》で赤石君の《ジェネティック・ワーウルフ》に攻撃」《ジェネティック・ワーウルフ》戦闘破壊、赤石LP4000—1000||3900

「《不意打ち又佐》で赤石君に直接攻撃」赤石LP3900—1300

||2600

(やっぱり俺にくるか…！)

「効果でもう一度《不意打ち又佐》で赤石君に直接攻撃」赤石LP2600—1300||1300

ヘズは彼女には目もくれず赤石のLPを削りに行った。ヘズ側からすれば至極当然のことだ、「A」デッキを使う赤石を優先的に潰すことが勝利に直結するのだから。赤石側もちろん、そのことを理解している。

「main2、カードをセット」

「turn end」

柳沢手札0枚      ヘズ手札1枚

LP4000      LP4000

裏 裏 裏      裏 ◇ ◇

◇ 裏 ◇      オカ ◇

オ||《不意打ち又佐》攻撃表示      カ||《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

ヘズ↓赤石

◇ ◇      ◇ 裏 ◇

◇ ◇      ◇ ◇ ◇

LP1300      LP4000

赤石手札3枚      彼女手札3枚

0 《サイバー・ドラゴン》星5／光属性／機械族／攻2100／守1600

(1)：相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

《不意打ち又佐》星3／闇属性／戦士族／攻1300／守800

このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

このカードは表側表示でフィールド上に存在する限り、コントロールを変更する事はできない。

「ドロ、スタンバイ、メイン」ドロカード《サイバー・ドラゴン》  
(LPは削られたが…巻き返せる)

「《ハーピイの羽根帚》発動、対象は柳沢さんだ」

「ならチエーンするぜ、罨発動《徴兵令》、対象は赤石」《徴兵令》効果、  
赤石デツキトツプ《大寒波》↓赤石の手札へ

《ハーピイの羽根帚》効果、《徴兵令》《次元幽閉》《デイメンション・  
ウォール》破壊

(ちっ、大寒波か)

(柳沢さんの伏せカードは一掃した。あとはへズさんの伏せカードだ  
が…)

赤石は記憶を辿る。

(モンスターを2体も召喚しておいて激流葬は、無いな。となればサ  
イクロンか落とし穴か、ただどちらにしても)

「《サイバー・ドラゴン》特殊召喚」

(柳沢さんのモンスターは破壊出来る)

「《ランサー・デーモン》召喚」

「罨カード発動」罨発動《落とし穴》、《落とし穴》効果《ランサー・デー  
モン》破壊

「バトルフェイズ、《サイバー・ドラゴン》で柳沢さんのモンスターに  
攻撃」セットモンスター《王座の侵略者》、《王座の侵略者》戦闘破壊

赤石にとつては想定内であるため、淀みなく進行する。

「ターンエンドだ」

(レイリ、頼むぞ)

柳沢手札0枚      へズ手札1枚

LP4000

LP4000

◇ ◇

◇ ◇

◇ ◇

オカ ◇

オⅡ《不意打ち又佐》攻撃表示 カⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

赤石↓柳沢

あⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

◇ あ ◇ ◇ 裏 ◇

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

LP1300 LP4000

赤石手札2枚 彼女手札3枚

《大寒波》通常魔法

メインフェイズ1の開始時に発動する事ができる。

次の自分のドローフェイズ時まで、お互いに魔法・罠カードの効果の使用及び発動・セットはできない。

《徴兵令》通常罠

相手のデッキの一番上のカードを1枚めくる。

めくったカードが通常召喚可能なモンスターだった場合、自分フィールド上に特殊召喚する。

それ以外のカードだった場合、そのカードを相手の手札に加える。

《次元幽閉》通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時、攻撃モンスター1体を選択して発動できる。

選択した攻撃モンスターをゲームから除外する。

《テイメンション・ウォール》通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手を受ける。

《落とし穴》通常罠

(1)：相手が攻撃力1000以上のモンスターの召喚・反転召喚に成功した時、そのモンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃力1000以上のモンスターを破壊する。

《王座の侵略者》星4/地属性/戦士族/攻1350/守1700

リバース：相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、

そのモンスターとこのカードのコントロールを入れ替える。  
この効果はバトルフェイズに発動する事はできない。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(まあ、麗梨ちゃんのパートナーやってくれえだしバカではねえな)

赤石は先程のターン迷いなく柳沢のモンスターを破壊した。これはデッキと使用カードをきっちり記憶している証拠でもある。

柳沢が現在使用している【B】デッキは裏側守備の状態で《サイバー・ドラゴン》の攻撃を食い止められるモンスターが存在しない。

また柳沢のモンスターを減らすことで、彼女より先に回る柳沢のターンをモンスター無しで迎えさせた。

(ちっ、1戦目はやっぱり厳しいか)

「ターンエンド」

柳沢手札1枚      ヘズ手札1枚

LP4000            LP4000

◇      ◇            ◇      ◇

◇      ◇            オカ   ◇

オII 《不意打ち又佐》攻撃表示      カII 《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

柳沢↓彼女

あII 《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

◇      あ            ◇      裏      ◇

◇      ◇            ◇      ◇            ◇

LP1300            LP4000

赤石手札2枚      彼女手札3枚

5話 #4 「1回戦 2」

(赤石先輩が生き残るかは、このターンにかかっている…)

「ドロロー、スタンバイ、メイン」ドロローカード《自律行動ユニット》  
(…きた。伏せカードが無い、今が攻めどき)

「《自律行動ユニット》発動、柳沢さんの《王座の侵略者》を対象に装  
備します」彼女LP4000→1500∥2500

「《巨大化》発動、《王座の侵略者》に装備します」《王座の侵略者》攻  
撃力1350↓2700

「《サイバー・チュチュ》召喚。《黒いペンダント》発動、《サイバー・  
チュチュ》に装備します」《サイバー・チュチュ》攻撃力1000→1  
500

(まずいな、装備魔法手札に揃ってたか)

「バトルフェイズ、《王座の侵略者》でヘズさんの《サイバー・ドラゴ  
ン》に攻撃します」《サイバー・ドラゴン》戦闘破壊、ヘズLP400  
0→600∥3400

「《サイバー・チュチュ》でヘズさんの《不意打ち又佐》に攻撃します」  
《不意打ち又佐》戦闘破壊、ヘズLP3400→2000∥3200

「ターンエンド」

柳沢手札1枚      ヘズ手札1枚

LP4000            LP3200

◇      ◇              ◇      ◇  
◇      ◇              ◇      ◇

彼女↓ヘズ

あ∥《サイバー・ドラゴン》攻撃表示    う∥《サイバー・チュチュ》  
攻撃表示    え∥《王座の侵略者》攻撃表示

お∥《黒いペンダント》か∥《自律行動ユニット》    き∥《巨大化》

◇      ◇              う      裏      え

◇      ◇              お      か      き

LP1300

LP2500

赤石手札2枚 彼女手札0枚

《自律行動ユニット》装備魔法

1500ライフポイントを払う。相手の墓地からモンスターを1体選択して攻撃表示で自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、装備モンスターを破壊する。

「draw standby main」

(ここはこうするしかないナ)

「カードをセット、モンスターをセット」

「turn end」

柳沢手札1枚 ヘズ手札0枚

LP4000 LP3200

◇ ◇ 裏 ◇ ◇

◇ ◇ 裏 ◇ ◇

ヘズ↓赤石

あⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示 うⅡ《サイバー・チユチユ

攻撃表示 えⅡ《王座の侵略者》攻撃表示

おⅡ《黒いペンダント》かⅡ《自律行動ユニット》きⅡ《巨大化》

◇ あ ◇ う 裏 え

◇ ◇ ◇ お か き

LP1300 LP2500

赤石手札2枚 彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドロークード《サンダー・ボルト》

(あの裏側守備のモンスターは…翻弄するエルフの剣士か、執念深き老魔術師)

(安全を期すならサンダー・ボルトだが、今のヘズさんのターン、ドロローしてそのまま伏せたカードが激流葬だった場合厄介なことになる)

(レイリのフィールドも埋まってるし、ここはこっちだ)

「《大寒波》発動」

「赤石君、テキスト確認いいカ?」

「はい、どうぞ」

赤石はヘズにカードを差し出す。

(次の自分のドロローフェイズ時までカ。ということは次の赤石君のターンまで効果は続く…なるほど、これは強いナ)

自分のターンは4ターン毎に訪れる。つまり自分のターンで換算するカードの効果はこのデュエルに限り通常の2倍の長さとなる。

「ok。理解したヨ」

ヘズは赤石の墓地へとカードを返す。

「《ツイン・ブレイカー》召喚」

「バトルフェイズ、《サイバー・ドラゴン》で柳沢さんに攻撃」

「手札から《クリボー》効果発動」

(クリボー持ってたか、まあいい)

「《ツイン・ブレイカー》でヘズさんのモンスターに攻撃」セットモンスター《翻弄するエルフの剣士》、《翻弄するエルフの剣士》戦闘破壊、

《ツイン・ブレイカー》効果、ヘズLP3200→4000≡2800

(これは厳しいネ…)

「《ツイン・ブレイカー》効果でもう一度でヘズさんに攻撃」ヘズLP

2800→16000≡1200

「ターンエンドだ」

柳沢手札0枚      ヘズ手札0枚

LP4000      LP1200

◇ ◇ 裏 ◇ ◇  
◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

赤石↓柳沢

くⅡ《ツイン・ブレイカー》攻撃表示 あⅡ《サイバー・ドラゴン》  
攻撃表示 うⅡ《サイバー・チュチュ》攻撃表示 えⅡ《王座の侵略  
者》攻撃表示

おⅡ《黒いペンダント》かⅡ《自律行動ユニット》きⅡ《巨大化》

くあ ◇ う裏え

◇ ◇ ◇ おかき

LP1300 LP2500

赤石手札1枚 彼女手札0枚

《サンダー・ボルト》通常魔法

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

《クリボー》星1／闇属性／悪魔族／攻 300／守 200

(1)：相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこの  
カードを手札から捨てて発動できる。

その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

《翻弄するエルフの剣士》星4／地属性／戦士族／攻1400／守1  
200

(1)：このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破  
壊されない。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(これは負けじゃねえ?)

柳沢はドローしたカードを見ると、どこか適当に流すように進め  
る。

「モンスターセット、ターンエンド」

柳沢手札0枚 ヘズ手札0枚

LP4000

LP1200

◇ ◇

裏 ◇ ◇

◇ 裏 ◇

◇ ◇ ◇

柳沢↓彼女

くⅡ《ツイン・ブレイカー》攻撃表示 あⅡ《サイバー・ドラゴン》  
攻撃表示 うⅡ《サイバー・チュチュ》攻撃表示 えⅡ《王座の侵略  
者》攻撃表示

おⅡ《黒いペンダント》かⅡ《自律行動ユニット》きⅡ《巨大化》

く あ ◇ う 裏 え

◇ ◇ ◇ お か き

LP1300 LP2500

赤石手札1枚 彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《不運なりポート》

(どのみち埋まつてるから、出せない…)

(えっと、今のLPは…あつ)

「あの、質問いいですか?」

彼女はふと気が付き、審判に問う。

「はい、何ですか?」

「今《巨大化》を装備している《王座の侵略者》が柳沢さんに攻撃する  
場合、《王座の侵略者》の攻撃力は倍になりますか?」

「そのプレイヤーのLPが自分のLPを上回っていればそうなります  
ね」

「わかりました」

つまり彼女よりLPが上回ってる柳沢に攻撃する場合は倍になり、  
下回ってるヘズに攻撃する場合は半減するということになる。

「バトルフェイズ、《王座の侵略者》で柳沢さんのモンスターに攻撃し  
ます」セットモンスター《ダークシー・フロート》、《ダークシー・フ  
ロート》戦闘破壊

(ヘズさんのLPを0にできるけど…)

彼女は少し考えた後、

「《サイバー・チュチュ》で柳沢さんに攻撃します」柳沢LP4000

—1500—2500

ヘズを生かす選択をした。

「ターンエンド」

柳沢手札0枚      ヘズ手札0枚

LP2500      LP1200

◇      ◇      裏      ◇      ◇

◇      ◇      ◇      ◇      ◇

彼女↓ヘズ

く||《ツイン・ブレイカー》攻撃表示    あ||《サイバー・ドラゴン》

攻撃表示    う||《サイバー・チュチュ》攻撃表示    え||《王座の侵略

者》攻撃表示

お||《黒いペンダント》か||《自律行動ユニット》    き||《巨大化》

く    あ      ◇      う    裏    え

◇      ◇      ◇      お    か    き

LP1300      LP2500

赤石手札1枚      彼女手札1枚

《不運なりポート》通常罨

相手は次のバトルフェイズを2回行う。

《ダークシー・フロート》星1／闇属性／機械族／攻      0／守      3  
00

フィールド上に存在するこのカードがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「draw standby main」

(今来たか、激流葬…仕方ないネ)

ヘズは負けを悟った。

「turn end」

柳沢手札0枚      ヘズ手札1枚

LP2500      LP1200

◇      ◇      裏      ◇      ◇

◇      ◇      ◇      ◇      ◇

ヘズ↓赤石

く||《ツイン・ブレイカー》攻撃表示    あ||《サイバー・ドラゴン》  
攻撃表示    う||《サイバー・チュチュ》攻撃表示    え||《王座の侵略  
者》攻撃表示

お||《黒いペンダント》か||《自律行動ユニット》    き||《巨大化》

く    あ      ◇      ◇      う    裏    え

◇      ◇      ◇      ◇      お    か    き

LP1300      LP2500

赤石手札1枚      彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《死霊騎士デスカリバー・  
ナイト》

(さすがレイリだ、きっちり正しい選択をしてくる)

彼女がヘズのLPを0にしなかったのには理由がある。

ヘズのターンを迎えた時点でのヘズのデッキ枚数は残り5枚。

【C】デッキのモンスター総数が4体ということから考えると、既に墓  
地に送られた分を除き、デッキに残るモンスターは1体のみ。モン  
スターを引く確率は低い。

魔法罫カードに關しても《大寒波》の効力が残っているためセット  
すらできない。彼女もまたすっかり記憶していた。

(死霊騎士デスカリバー・ナイトか、召喚する必要もねえな)

赤石のターンを迎えたことにより《大寒波》の効力が切れる。しか  
しヘズのセットカードが《激流葬》だとしても結果は同じ。

「バトルフェイズ、《ツイン・ブレイカー》でへずさんに攻撃」へずL  
P1200―1600〓―400 柳沢LP2500―400〓2  
100

何故ならば、

「《サイバー・ドラゴン》で柳沢さんに攻撃」柳沢LP2100―21  
00〓0

ちようどピッタリ届くからだ。

5話 #5 「2回戦 1」

(よし、まずは1勝)

「1回戦勝者、赤石&鈴瀬ペア」

「では続いて2回戦に入ります」

4人の黒服がそれぞれのデッキを整理し2回戦の使用者へと回す。

「ちよつ、休憩も無しかよお!？」

一息もつかせない早さでの2回戦突入に柳沢は不満を漏らす。

「決着がつくまでは席を立つ、不要に時間を稼ぐといったことを禁止します。もちろん休憩はありません」

黒服により確認された後、シャツフルされたデッキが然るべきところにセットされる。

(まあ、打ち合わせや外部からの連絡をさせないためだよな。その反応から察するに、このデュエルは相手側も初めてか)

「では改めて、2回戦に入ります」

1回戦、赤石の攻撃で終了したので先攻はヘズ。

「draw standby main」

(流石に良い手札だな)

「《大寒波》発動」

(初っ端から大寒波かよお、えげつないねえ)

「《ジエネティク・ワーウルフ》召喚」

「turn end」

柳沢手札3枚   ヘズ手札2枚

LP4000   LP4000

◇   ◇   ◇   ◇  
◇   ◇   ◇   ◇  
◇   ◇   ◇   ◇

ア|| 《ジエネティク・ワーウルフ》攻撃表示

ヘズ↓彼女

◇ ◇  
 ◇ ◇  
 LP4000 LP4000  
 赤石手札3枚 彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」彼女手札《サイバー・チュチュ》《ホーリー・エルフの祝福》《黒いペンダント》《自律行動ユニット》  
 (大寒波だから、これしかできない…)  
 「モンスターセット、ターンエンド」

柳沢手札3枚 ヘズ手札2枚  
 LP4000 LP4000

◇ ◇  
 ◇ ◇  
 アⅡ《ジエネティック・ワーウルフ》攻撃表示

彼女↓柳沢  
 ◇ ◇  
 ◇ ◇  
 LP4000 LP4000  
 赤石手札3枚 彼女手札3枚

《ホーリー・エルフの祝福》通常罫  
 自分はフィールド上に存在するモンスターの数×300ライフポイント回復する。

「ドロー、スタンバイ、メイン」  
 (1戦目の敗北は予定調和さ。でなきやあんな雑なプレイングするかよ！へっ、【A】デッキが俺ら側にある2戦目3戦目はきっちり勝つてやらあ)

1回戦の時はどこか軽く流していた柳沢だが、2回戦に入った途端にその軽さは消失していた。

「モンスターセット、ターンエンド」

柳沢手札3枚      ヘズ手札2枚

LP4000      LP4000

◇ ◇

◇ 裏 ◇

アII 《ジエネティック・ワーウルフ》 攻撃表示

柳沢↓赤石

◇ ◇

◇ ◇

LP4000      LP4000

赤石手札3枚      彼女手札3枚

「ドロロー、スタンバイ、メイン」赤石手札《ダークシーフロート》《クリボー》《落とし穴》《聖なるバリアー ―ミラーフォース―》

〔A〕デッキが敵側に移ったわけだが…ここからが本番だな

ここからのあと1勝は容易なものではないと〔A〕デッキを使っていた赤石はよく理解している。

「モンスターセット、ターンエンドだ」

(きついな…耐えられるか?)

柳沢手札3枚      ヘズ手札2枚

LP4000      LP4000

◇ ◇

◇ 裏 ◇

アII 《ジエネティック・ワーウルフ》 攻撃表示

赤石↓へズ

◇ 裏 ◇ 裏 ◇

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

LP4000 LP4000

赤石手札3枚 彼女手札3枚

《聖なるバリアー—ミラーフォース—》通常罫

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「draw standby main」

「《サンダー・ボルト》発動、対象は赤石君」《ダークシー・フロート》破壊、《ダークシー・フロート》効果で赤石1ドロー、ドローカード《ニユート》

「《ランサー・デーモン》召喚。battle」

「《ジェネティック・ワーウルフ》で鈴瀬さんのモンスターに攻撃、この時《ランサー・デーモン》の効果を発動するヨ」《サイバー・チュチュ》戦闘破壊、《ランサー・デーモン》効果、彼女LP4000→1200  
|| 2800

「《ランサー・デーモン》で赤石君に直接攻撃」

「手札から《クリボー》の効果発動」

「turn end」

柳沢手札3枚 へズ手札1枚

LP4000 LP4000

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
◇ 裏 ◇ ウア ◇

ウ|| 《ランサー・デーモン》攻撃表示 ア|| 《ジェネティック・ワーウルフ》攻撃表示

へズ↓彼女

◇ ◇  
◇ ◇  
◇ ◇

LP4000 LP2800

赤石手札3枚 彼女手札3枚

《ニユート》星4／風属性／悪魔族／攻1900／守 400

(1)：このカードがリバースした場合に発動する。このカードの攻撃力・守備力は500アップする。

(2)：このカードがモンスターとの戦闘で破壊された場合に発動する。そのモンスターの攻撃力・守備力を500ダウンする。

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《速攻のかかし》

(サイバー・チュチュ、出さない方が良かったかな…?)

今の状況を考えてと良かったことになるが、時が進むに連れ状況というものは変化する。故に現時点でそれが間違いだったとは言いきれない。

「カードセット、もう1枚セット」

「ターンエンド」

柳沢手札3枚 ヘズ手札1枚

LP4000 LP4000

◇ ◇  
◇ ◇  
◇ 裏 ◇  
ウア ◇

ウⅡ《ランサー・デーモン》攻撃表示 アⅡ《ジエネティック・ワー  
ウルフ》攻撃表示

彼女↓柳沢

◇ ◇  
◇ ◇  
◇ ◇ 裏 裏

LP4000 LP2800

赤石手札3枚 彼女手札2枚

《速攻のかかし》 星1／地属性／機械族／攻 0／守 0

(1)：相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から捨てて発動できる。

その攻撃を無効にし、その後バトルフェイズを終了する。

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

(クク、そんじやあ赤石を葬るとするか)

「モンスターセット、《強制転移》発動、プレイヤー対象は…」

「へズだ」

「!？」

赤石は一瞬驚きの顔を見せるが、すぐに冷静さを取り戻す。

「そして俺はさつきセットしたモンスターを対象にするぜえ」

「オレは《ジエネティック・ワーウルフ》を対象にするヨ」コントロール入れ替え、柳沢セットモンスター⇄へズ《ジエネティック・ワーウルフ》

「はは、予想外かあ？でもルール違反じゃないからな」

(強制転移のテキストに書かれている【お互い】という単語、これは【自分と相手】という意味だったナ)

(そして【パートナーでも通常のデュエルと同じく非公開情報として扱う】というルール、同じくというのはパートナーであっても相手と同じという意味：確かにルール違反じゃないネ)

パートナーを相手と捉える発想は赤石にもあった、ただ1回戦は勝利を最優先していたためリスクをおかして確かめるといふことはしなかった。

「どんどん行くぜえ、俺はモンスターを反転召喚」《不意打ち又佐》裏側守備↓攻撃表示

(ぐっ……！一気に仕留める気か)

(鈴瀬さんが神の宣告をセットしてないか気掛かりだったけど、あの様子じゃ無さそうだな)

「さて、バトルフェイズだ。《ジェネティック・ワーウルフ》で赤石に攻撃」赤石LP4000―2000〓2000

赤石の場にはカードが無く、彼女のカードでは赤石を守れない。これらが意味するものは、

「《不意打ち又佐》で赤石に攻撃」赤石LP2000―1300〓700

戦場からの脱落。

「《不意打ち又佐》でもう一回赤石に攻撃だ！」赤石LP700―1300〓600 彼女LP2800―600〓2200

(残るは麗梨だけ、2戦目はもらったな)

「メイン2、《成金ゴブリン》発動」柳沢1ドロー

「もちろん回復する対象はヘズだ」ヘズLP4000+1000〓5000

「カードを2枚セットしてターンエンド」

柳沢手札0枚   ヘズ手札1枚

LP4000   LP5000

裏裏 ◆ ◆ ◆ ◆

◆ イア   ウ裏 ◆

イⅡ 《不意打ち又佐》攻撃表示   アⅡ 《ジェネティック・ワーウルフ》攻撃表示   ウⅡ 《ランサー・デーモン》攻撃表示

柳沢↓彼女

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ 裏裏

LP   0   LP2200

赤石手札3枚   彼女手札2枚

《強制転移》通常魔法

お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替える。

そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。

《成金ゴブリン》 通常魔法

(1)：自分はデッキから1枚ドローする。その後、相手は1000LP回復する。

5話 #6 「2回戦 2」

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《ダンディライオン》  
(…)

「モンスターセット、ターンエンド」

彼女は無表情のまま粛々とターンを終えた。赤石もただ静かに戦況を見つめる。

柳沢手札0枚   へズ手札1枚

LP4000   LP5000

裏裏◇   ◇◇◇

◇イア   ウ裏◇

イ||《不意打ち又佐》攻撃表示   ア||《ジエネティック・ワーウルフ》攻撃表示   ウ||《ランサー・デーモン》攻撃表示

彼女↓へズ

◇◇   ◇裏◇

◇◇   ◇裏裏

LP   0   LP2200

赤石手札3枚   彼女手札2枚

「draw standby main」

(女の子相手でも手は緩めないヨ)

「《ハーピィの羽根帚》発動、対象は鈴瀬さん」

「チェーン発動します」《ホーリー・エルフの祝福》発動、《ホーリー・

エルフの祝福》効果、彼女LP2200+1500||3700

《ハーピィの羽根帚》効果、《ホーリー・エルフの祝福》《黒いペンダント》破壊

「反転召喚」《執念深き老魔術師》裏側守備↓攻撃表示、《執念深き老魔術師》効果、彼女セットモンスター《ダンディライオン》破壊

《ダンディライオン》効果、彼女の場に《ダンディライオン》トークン2体を守備表示で特殊召喚

《執念深き老魔術師》は元々【C】デッキのカードだが《強制転移》の効果でヘズのフィールドに移ったカードである。

「《執念深き老魔術師》をリリースして《サイバー・ドラゴン》をアドバンス召喚。battle」

「《サイバー・ドラゴン》で鈴瀬さんに攻撃、この時《ランサー・デーモン》の効果を発動するヨ」「《ダンディライオン》トークン戦闘破壊、《ランサー・デーモン》効果、彼女LP3700→2100∥1600」「《ランサー・デーモン》で鈴瀬さんに攻撃」「《ダンディライオン》トークン戦闘破壊

（ヘズの奴、手加減無しだな。もう少しじっくりと料理してもいいんじゃないねえ？）

「turn end」

LP4000      LP5000

裏 裏 ◇      ◇ ◇ ◇

◇ イア      ウエ ◇

イ∥《不意打ち又佐》攻撃表示    ア∥《ジエネティック・ワーウルフ》攻撃表示    ウ∥《ランサー・デーモン》攻撃表示    エ∥《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

ヘズ↓彼女

◇ ◇      ◇ ◇ ◇  
◇ ◇      ◇ ◇ ◇

LP      0      LP1600

赤石手札3枚      彼女手札2枚

《執念深き老魔術師》星2／闇属性／魔法使い族／攻 450／守

600

リバーズ：相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

「ドロ、スタンバイ、メイン」《リーフ・フェアリー》  
「《自律行動ユニット》発動、対象は赤石先輩の《ダークシー・フロート》」彼女LP1600—1500=100  
(ダークシー・フロート!?!何故だ、LP1500払ってまで出すモンスターじゃねえ)

彼女の行動に赤石が驚くのも無理もない。この状況でLP1500払ってまで出すモンスターが攻撃力0の《ダークシー・フロート》では負けにいくようなものだ。しかも《ダークシー・フロート》は破壊されても赤石の墓地へ送られるので効果は使えない。

そもそも《ダークシー・フロート》以外に《自律行動ユニット》の効果で場に出せるモンスターは《クリボー》と《執念深き老魔術師》しか存在しない上、攻撃表示で出さなければならぬので壁にもならない。対象以前に発動する意味が無いのだ。

「じゃあ罨発動、対象は赤石の《ダークシー・フロート》で」《ロスト》発動、《ロスト》効果、《ダークシー・フロート》除外、《自律行動ユニット》破壊

そしてそれすらも妨害される。

「ターンエンド」

彼女は前のターンと同様に無表情のままターンを終えた。

柳沢手札0枚   ヘズ手札0枚  
LP4000   LP5000

◇ 裏 ◇   ◇ ◇ ◇  
◇ イア   ウエ ◇

イII 《不意打ち又佐》攻撃表示   アII 《ジエネティック・ワーウルフ》攻撃表示   ウII 《ランサー・デーモン》攻撃表示   エII 《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

彼女↓柳沢

◇ ◇  
◇ ◇  
◇ ◇

LP 0 LP 100

赤石手札3枚 彼女手札2枚

《リーフ・フェアリー》星3／地属性／植物族／攻 900／守 40  
0

このカードに装備された装備カード1枚を墓地へ送って発動する。  
相手ライフに500ポイントダメージを与える。

《ロスト》通常罠

相手の墓地のカード1枚をゲームから除外する。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（何がしたかったんだあ？麗梨は。とりあえず妨害してみたけどよお）

「《翻弄するエルフの剣士》召喚」

（ま、何でもいいけどさ。どうせこのターンで終わるんだし）

「バトルフェイズ、《ジェネティック・ワーウルフ》で麗梨ちゃんに攻撃」

「手札から《速攻のかかし》の効果を発動します」《速攻のかかし》効果、攻撃無効、バトルフェイズ終了

（ちっ、無駄に延命しやがって）

「ターンエンド」

LP 4000 LP 5000

◇ 裏 ◇ ◇ ◇ ◇

オイア ウエ ◇

オII 《翻弄するエルフの剣士》攻撃表示 イII 《不意打ち又佐》攻撃表示  
アII 《ジェネティック・ワーウルフ》攻撃表示 ウII 《ランサー・デーモン》攻撃表示 エII 《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

柳沢↓彼女

◇ ◇  
◇ ◇  
◇ ◇

LP 0 LP100

赤石手札3枚 彼女手札1枚

「ドロロー、スタンバイ、メイン」《神の宣告》

「モンスターセット、カードセット」

「おっと、《サイクロン》発動するぜ。対象は今伏せたカードだ」《サイクロン》効果、《神の宣告》破壊

「…ターンエンド」

柳沢手札0枚 ヘズ手札0枚

LP4000 LP5000

◇ ◇  
◇ ◇

オイア ウエ ◇

オⅡ《翻弄するエルフの剣士》攻撃表示 イⅡ《不意打ち又佐》攻撃表示 アⅡ《ジェネティク・ワーウルフ》攻撃表示 ウⅡ《ランサー・デーモン》攻撃表示 エⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

彼女↓ヘズ

◇ ◇  
◇ 裏 ◇

◇ ◇  
◇ ◇

LP 0 LP100

赤石手札3枚 彼女手札0枚

《神の宣告》カウンター罠

(1)：LPを半分払って以下の効果を発動できる。

●魔法・罠カードが発動した時に発動できる。その発動を無効にし破壊する。

●自分または相手がモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する際

に発動できる。それを無効にし、そのモンスターを破壊する。

《サイクロン》速攻魔法

(1):フィールドの魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。そのカードを破壊する。

(柳沢のロスト発動で鈴瀬さんは結果的に延命したが、それならなおのこと自律行動ユニット発動の意味がわからないネ。勝ちを諦めないにしても、そのプレイングは不可解だヨ)

彼女の行為に意味など無かったのかもしれない。

「draw standby main」

例えば意味があつたとしてもその真意は彼女にしかわからない。

「battle」

ただ、1つ言えることは

「《サイバー・ドラゴン》で鈴瀬さんに攻撃、この時《ランサー・デーモン》の効果を発動するヨ」セットモンスター《リーフ・フェアリー》、《リーフ・フェアリー》戦闘破壊、《ランサー・デーモン》効果、彼女LP100-1700=0

決着は3回戦に持ち越されたということだ。

「2回戦勝者、柳沢&ヘズペア」

「では続いて3回戦に入ります」

4人の黒服がそれぞれのデッキを整理し3回戦の使用へと回す。

(これで1勝1敗…わたしは変わらず【D】デッキ)

(まだわからない…ゆらゆらと、綱渡り)

彼女は目を瞑る。

(勝つために、わたしができること…)

集中力を高め、どこか疎らになった思考を纏める。

(…うん、行こう)

すぐに纏まったのか数秒も経たない内に彼女は目を開けた。  
黒服により確認された後、シャツフルされたデツキが然るべきところ  
ろにセツトされる。

1 戦目終了の時と同じく一息つく間も無いまま3 回戦に突入した。

## 5話 #7 「提案」

「待て、デュエルに入る前に提案がある」

各々がドロ―する直前、柳沢が口を開く。

「一応確認するがこの勝負、制した方のペアが400万を手にする、ってことは聞いてるよなあ？」

柳沢は彼女の顔を見て問う。

「はい、聞いてます」

「2人で400万、つまり1人実質200万だ。少ねえと思わねえか？」

「…」

彼女は次の言葉を待つ。

「麗梨、100万追加しろ、俺と麗梨は300万勝負だ」

「なっ！何言ってるー」

「うるせえ！こっちは245万負けてんだよ、200じゃ足りねえんだ！」

柳沢は赤石の言葉を遮るように声を張り上げる。

「うるせえのはどっちだ…」

柳沢に言葉に対し、赤石は呆れと怒りが混ざった声で呟く。

「受けてくれるよな？」

彼女は少し考えた後、

「…はい、受けましょう」

提案を受けた。

(どこかで、上げてくるとは思ってました)

彼女にとっては想定範囲内だったようだ。

「じゃあ俺も100万追加だ」

直後、追加宣言をしたのは赤石。

「オレも100万追加するヨ」

ヘズも躊躇いなくそれに乗っかる。

「ほお？いいねえいいねえ！これで600万勝負か、言つとくがもう取り消しはできねえぜ？」

「ああ。1度言ったことは取り消さねえよ」

（へッ、調子に乗って100万追加したこと、後悔させてやる！）

「さあ、始めようカ」

両陣営200万追加の600万勝負と化した3回戦が始まった。

2回戦、ヘズの攻撃で終了したので先攻は赤石。

「ドロー、スタンバイ、メイン」赤石手札《サイバー・ドラゴン》《執念深き老魔術師》《激流葬》《落とし穴》

（確かにそれ自体に意味は無かったように思える…）

3回戦ながらも赤石にはまだ2回戦の余韻が残っている。

（だが気持ちは伝わってきた、最後まで抗おうとする強い意志が。意味が無かったからこそ余計にだ）

「モンスターセット、カードセット」

（この3戦目もデッキの組み合わせからして明らかにこっちが不利だ。なのにレイリは100万追加の提案を受けた。それはつまり勝ちを信じてることに他ならない）

「ターンエンドだ」

（俺も何があろうと最後まで戦ってやる、勝つために！）

赤石の目に強い意志が宿った。

柳沢手札3枚      ヘズ手札3枚

LP4000      LP4000

◇      ◇      ◇      ◇  
◇      ◇      ◇      ◇

赤石↓柳沢

◇      裏      ◇      ◇      ◇      ◇

◇      裏      ◇      ◇      ◇      ◇

LP4000      LP4000

赤石手札2枚 彼女手札3枚

《激流葬》 通常罫

(1)：モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。フィールドのモンスターを全て破壊する。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(100万増えようが、いつも通りやりや勝てるはずだ！)

「《サイバー・ドラゴン》特殊召喚。モンスターセット」

「ターンエンド」

柳沢手札2枚 ヘズ手札3枚

LP4000 LP4000

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ ア裏 ◇ ◇ ◇ ◇

アII《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

柳沢↓彼女

◇ 裏 ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 裏 ◇ ◇ ◇ ◇

LP4000 LP4000

赤石手札2枚 彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」彼女手札《不運なりポート》《巨大化》

《神の宣告》《ダンディライオン》

「モンスターセット」

(…)

彼女は数十秒ほど考えた後、

「ターンエンド」

ターンを終了した。

柳沢手札2枚      ヘズ手札3枚  
LP4000      LP4000

◇      ◇  
◇      ◇  
◇      ◇

アII 《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

彼女↓ヘズ

◇      ◇      ◇      ◇  
◇      ◇      ◇      ◇

LP4000      LP4000

赤石手札2枚      彼女手札3枚

「draw standby main」

(何か違和感があるな、気のせいカ?)

ヘズは違和感に気付くと、彼女のターンの記憶から答えを出す。

(ああそうか、考えた割にはモンスターのセットだけだったからカ：  
魔法罫はあえて伏せなかったの力?)

(しかし鈴瀬さんが何か考えてたとしても、今は赤石君の方を警戒す  
べきだな。【C】デッキのモンスターはサイバー・ドラゴン以外ならこ  
のモンスターで倒セル)

「《王座の侵略者》召喚」

(王座の侵略者をセットせず召喚してくるってことはやはり俺狙い  
か、だが)

「罫発動だ」《落とし穴》発動、《落とし穴》効果、《王座の侵略者》破  
壊

(止められたカ)

「カードセット、もう1枚セット」

(まあ、柳沢が突破してくれるだ口)

「turn end」

柳沢手札2枚      ヘズ手札1枚  
LP4000      LP4000

◇ ◇      裏 裏 ◇ ◇  
◇ ア 裏      ◇ ◇ ◇ ◇

アⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示  
ヘズ↓赤石

◇ 裏 ◇      ◇ 裏 ◇  
◇ ◇      ◇ ◇ ◇ ◇

LP4000      LP4000  
赤石手札2枚      彼女手札3枚

「ドロロー、スタンバイ、メイン」ドロローカード《翻弄するエルフの剣士》  
(次が柳沢さんのターンだと考えると、迂闊にリバーズできねえな)  
「モンスターセット」

(俺を狙ってたんだ、今は防御を固める。あとは保険としてこいつを)  
「カードセット、ターンエンド」

柳沢手札2枚      ヘズ手札1枚

LP4000      LP4000

◇ ◇      裏 裏 ◇ ◇  
◇ ア 裏      ◇ ◇ ◇ ◇

アⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

赤石↓柳沢

裏 裏 ◇      ◇ 裏 ◇  
◇ ◇ 裏      ◇ ◇ ◇ ◇

LP4000      LP4000  
赤石手札1枚      彼女手札3枚

## 5話 #8 「サイン」

(ほお、守備固めかあ?)

「ドロー、スタンダー」

「待った、このタイミングで罠発動するヨ」《徴兵令》発動

ヘズが柳沢を割り込むように発動する。

「対象は、柳沢ダ」

ヘズは柳沢のデッキトップを指すと、そのまま流れるように柳沢のデッキトップをめくった。《徴兵令》効果、柳沢デッキトップ《大寒波》  
↓柳沢の手札へ

(ぐっ、パートナー相手に徴兵令…いや、それより)

「審判、勝手に相手のデッキトップをめくるのはルール上問題無いんですか?」

「めくられた相手が抗議しなければ問題ありません」

赤石は審判に問うものの、問題無いとの答えが返ってくる。

赤石は今の行為にイカサマを疑った。デッキトップを操作して《大寒波》にしたんじゃないかと。

しかしイカサマをしていたとしてもそれを証明する手段も無く、赤石はただ審判に確認するだけにとどまった。

(また大寒波…うん?)

彼女も《徴兵令》の効果でめくったカードが1戦目と同じく《大寒波》であったことに疑問を持った。が、彼女が引つ掛かっていたのはそこではない。

(まだわかんない…ちよっと、保留)

「そういうわけだ、もちろん俺は抗議するつもりは無いぜえ?」

柳沢はそのままデッキトップを手札に加える。

「今はスタンバイフェイズだったな、じゃあメインで」

「早速《大寒波》発動するぜえ」

「《ランサー・デーモン》反転召喚、《死霊騎士デスカリバー・ナイト》召喚」

(くそ、並べてきやがったか…)

「バトルフェイズ」

(赤石のモンスターは翻弄するエルフの剣士と執念深き老魔術師か？)

(だとしたら最初のターンからセットされてる方が翻弄するエルフの剣士っぽいな、執念深き老魔術師だったらさっきのターンリバーするはずだし)

(まずはランサー・デーモンできっちり墓地送りにしとくか、その後は貫通で大ダメージを与えてやる)

「ランサー・デーモンで赤石の真ん中のモンスターに攻撃」

(…よし、はずしたか) セットモンスター《執念深き老魔術師》、《執念深き老魔術師》効果、《死霊騎士デスカリバー・ナイト》効果、《執念深き老魔術師》無効↓破壊

「ちっ！くそ、そっちだったか、《サイバー・ドラゴン》で赤石に攻撃」  
セットモンスター《翻弄するエルフの剣士》裏側守備↓表側守備

(欲を出して悪い目を引いたか。命取りにならなきやいいガ…)

(まあ柳沢には伝えたし手は打った、問題ない)

「…ターンエンド」

柳沢手札2枚      ヘズ手札1枚

LP4000              LP4000

◇   ◇              ◇   裏   ◇

◇   アイ           ◇   ◇   ◇

アII 《サイバー・ドラゴン》攻撃表示    イII 《ランサー・デーモン》  
攻撃表示

柳沢↓彼女

いII 《翻弄するエルフの剣士》表側守備

い   ◇              ◇   裏   ◇

◇   ◇   裏           ◇   ◇   ◇

LP4000              LP4000

赤石手札1枚 彼女手札3枚

《死霊騎士アスカリバー・ナイト》星4／闇属性／悪魔族／攻1900  
／守1800

このカードは特殊召喚できない。

(1)：モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースして発動する。その発動を無効にし破壊する。

「ドロロー、スタンバイ、メイン」ドロローカード《サイバー・チュチュ》

(相手の狙いは赤石先輩：わたしは後回し)

「《サイバー・チュチュ》召喚」

(じゃあ後回し、されないようにします)

「バトルフェイズ、《サイバー・チュチュ》の効果で柳沢さんに直接攻撃します」柳沢LP4000→1000＝3000

(ケツ、地味に鬱陶しいことしやがるなあ)

「ターンエンド」

柳沢手札2枚 ヘズ手札1枚

LP3000 LP4000

◇ ◇ ◇ ◇ 裏 ◇

◇ アイ ◇ ◇ ◇

アII《サイバー・ドラゴン》攻撃表示 イII《ランサー・デーモン》

攻撃表示

彼女↓ヘズ

いII《翻弄するエルフの剣士》表側守備 あII《サイバー・チュチュ》

攻撃表示

い ◇ ◇ あ 裏 ◇

◇ ◇ 裏 ◇ ◇ ◇

LP4000 LP4000

赤石手札1枚 彼女手札3枚

「draw stand by main」

(さあ、見せてやるカ)

「《ジエネティック・ワーウルフ》 召喚」

「なっ…!？」

(ほお、ジエネティック・ワーウルフだったのか。ついてるなへズ)

(ジエネティック・ワーウルフは柳沢の【A】デッキに入ってるカードのはずだ…!)

赤石は驚きながらも審判へと顔を向けるが、審判は平然としていて動かない。

それはつまりルールには違反していないということを表していた。

(赤石君も理解しているナ。「パートナーのカード使用自体はルールに違反しない」、現場を押さええられなければセーフなのサ。まあ3戦目にしか使えないけどネ)

(仕込んだのは間違いなく徴兵令を発動した時だ…! 2戦目が終わった後、黒服がデッキをシャッフルしてすぐに3戦目が始まって…カードを入れ替える時間は無かったし、そういう素振りも無かった)

(ああ、だから3戦目か! 次のデュエルが無い…だがどうやってジエネティック・ワーウルフを…)

その時、赤石は足に何かの感触があることに気付いた。

(…なるほど)

「battle」

――

遡ること2時間前、赤石と彼女は夕食中に打ち合わせをしていた。サインの取り決めだ。といっても10種類にも満たない少数だが。

使うカードもルールもわからないこの時点で何を取り決めるのかと思うかもしれないが、それにより状況を好転させることもなくはない。例えば…

イカサマの種類とかだ。

――

(引いたんじゃなくて送ったと考えると…)

彼女は考えていた、ヘズの行為の意味について。

(…：そっか、あの手の動き)

そしてヘズがバトルフェイズに入る直前に彼女は思考の末、例のターンで引っ掛かっていた部分の解消に至る。

(気付いてるかもしれないけど、赤石先輩に伝えないと…)

――

「《ジエネティック・ワーウルフ》で鈴瀬さんの《サイバー・チュチュ》に攻撃」《サイバー・チュチュ》戦闘破壊、彼女LP4000―1000〓3000

彼女は足伝いにサインを送っていた。視線や手の動きで伝えるサインも取り決めてはいたが、仕切りのあるこのデュエルでは使えない。それら以外だと足1択だった。

『イカサマ、デッキトップ、オクリコミ』

(送り込み…ってことはジエネティック・ワーウルフを取ったんじや

なく、デッキに送り込んだあとそのデッキから引いたのがたまたま《ジェネティック・ワーウルフ》だったってことか？)

(送り込んだカードはモンスターか罠か…いや、わざわざ【A】デッキにモンスターを送らなくても元々【A】デッキにはモンスターが揃っているからそれは無え。それなら牽制の意味も込めて罠と考えた方が自然だ)

(…なるほど、やってくれるじゃねえか。機会がありやもう一回やってくるかもな)

彼女のサインを受け取ったことにより、赤石はイカサマの正体を捉えた。

(手札にモンスターが無かったからナ。引いたカードがジェネティック・ワーウルフだったのは運が良かったヨ)

「turn end」

柳沢手札2枚      ヘズ手札1枚

LP3000            LP4000

◇      ◇      ◇      ◇      ◇      ◇

◇      ア      イ              ◇      ウ      ◇

アⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示      イⅡ《ランサー・デーモン》  
攻撃表示      ウⅡ《ジェネティック・ワーウルフ》攻撃表示

ヘズ↓赤石

いⅡ《翻弄するエルフの剣士》表側守備

い      ◇      ◇      ◇      裏      ◇

◇      ◇      裏              ◇      ◇      ◇

LP4000            LP3000

赤石手札1枚      彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《サイクロン》

(まあイカサマのやり方が判明したからといっても、どうにも出来ねえがな…2度目の警戒だけはしておくか)

赤石は手札とフィールドを交互に見る。

(相手が悪い目を引いてくれたとはいえ、状況は芳しくねえな…だが、待っていてもただやられるだけだ)

「《翻弄するエルフの剣士》をリリースして《サイバー・ドラゴン》を召喚、バトルフェイズ」

(攻撃すべきは…こつちだ！)

「柳沢さんの《サイバー・ドラゴン》に攻撃」

(へっ、相打ち狙いか)柳沢《サイバー・ドラゴン》戦闘破壊、赤石《サイバー・ドラゴン》戦闘破壊

(こいつは、まだ伏せずに)

「ターンエンド」

柳沢手札2枚      へズ手札1枚

LP3000      LP4000

◇ ◇ ◇      ◇ 裏 ◇

◇ ◇ イ      ◇ ウ ◇

イII《ランサー・デーモン》攻撃表示      ウII《ジエネティック・ワー

ウルフ》攻撃表示

赤石↓柳沢

◇ ◇ ◇      ◇ 裏 ◇

◇ ◇ 裏      ◇ ◇ ◇

LP4000      LP3000

赤石手札1枚      彼女手札3枚

## 5話 #9 「阻止」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(送り込んだのがデッキトップなら、今引いたのは罠カード…伏せてくるか?)

柳沢が引いたカードを伏せるために選ばうとしたその時、柳沢は足に何かの感触があることに気付く。

『ウゴクナ』

ヘズが足伝いにサインを送っていた。彼らもまた同じように事前  
に打ち合わせをしていた。

(動くな、ってことは伏せるなっということか!?何でだ、そのために寄越し  
たんじゃねえのか?)

柳沢はヘズの指示に疑問を覚える。

(例えばバレバレのイカサマだったとしても何のカードを送ったのかは  
まだ闇の中、罠カードじゃないかもという疑惑を植え付けるのサ。な  
に、このターン動かなくても死にやしないヨ)

(…ちっ、まあヘズのことだ、何か理由があるんだろ)

柳沢はヘズの意図を汲み取れなかったが、指示には従うことにし  
た。

この時、柳沢の意識はヘズの指示に向いていたこともあり、警戒心  
が薄くなっていた。

(赤石にモンスターがいねえし、攻めるか)

「《死者蘇生》発動、対象は俺の《サイバー・ドラゴン》だ」

そしてヘズの指示をそのカードだけという誤解をしていた。

(何っ!?動くなと伝えたはずだ!)

「罠発動だ」《激流葬》発動、《激流葬》効果、《サイバー・ドラゴン》《ラ  
ンサー・デーモン》《ジェネティク・ワーウルフ》セットモンスター

《ダンディライオン》破壊

「うっ……！」

(激流葬だとお……!?)

「《ダンディライオン》が墓地に送られたので効果を発動します」《ダンディライオン》効果、《ダンディライオン》トークン2体守備表示特殊召喚

(無警戒だったのか？こっちとしては大助かりだ)

(くっ、伝達不足だったか……!?だとしてもそれは無警戒過ぎるゾ！)

ヘズの情報伝達ミスと柳沢の軽率なプレイングによって状況が悪化する。柳沢、ヘズ共に表情が一樣に険しくなった。

「くそっ……ターンエンド」

そして柳沢は自分がそう解釈したヘズの指示通り、セットせずにターンを終了した。

柳沢手札2枚      ヘズ手札1枚

LP3000      LP4000

◇      ◇      ◇      裏      ◇

◇      ◇      ◇      ◇      ◇

柳沢↓彼女

あ|| 《ダンディライオン》トークン表側守備      い|| 《ダンディライオン》トークン表側守備

◇      ◇      ◇      あ      い      ◇

◇      ◇      ◇      ◇      ◇      ◇

LP4000      LP3000

赤石手札1枚      彼女手札3枚

《死者蘇生》通常魔法

(1)：自分または相手の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドロークード《自律行動ユニット》  
(セツトしなかった…？でも、これはチャンス)

「《自律行動ユニット》発動、赤石先輩の《サイバー・ドラゴン》を対  
象に装備します」彼女LP3000—1500〓1500

(なっ！このタイミングで引いてくるか…!?)

柳沢に焦りが見え始める。

「バトルフェイズ、《サイバー・ドラゴン》で柳沢さんに攻撃します」柳  
沢LP3000—2100〓900

「ターンエンド」

柳沢手札2枚      ヘズ手札1枚

LP900              LP4000

◇      ◇      ◇      裏      ◇

◇      ◇      ◇      ◇      ◇

彼女↓ヘズ

あ〓《ダンディライオン》トークン表側守備    い〓《ダンディライ  
オン》トークン表側守備    う〓《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

え〓《自律行動ユニット》

◇      ◇      あ      い      う

◇      ◇      ◇      え      ◇

LP4000              LP1500

赤石手札1枚      彼女手札3枚

「draw stand by main」

(《自律行動ユニット》を引かれたのはまずいナ…下手な駆け引き打た  
ずにセツトさせとけば良かったカ。柳沢を守らないとこっちの勝ち  
目が無くなる)

『テフダ、イレカエ』

ヘズが次の行動を考えていると、不意に柳沢からサインが送られた。

(「……入れ替えだト？何を考えている？」)

『ヘンジマチ』

柳沢は続けてサインを送る。

(返事待ち、オレの手札次第ってことカ)

柳沢はヘズの手札を考慮したわけではなく、今の状況から考えて最悪自分のLPが0になる前に「A」デッキのカードを1枚でもヘズに送っておきたいという意図があった。

ヘズもここは察し良く柳沢の意図を汲み取る。

(…なるほど、俺の手札は良くない。替えられるのなら助かる。だがそんな隙があるかどうか)

(いや、無いなら作ればいいナ)

『ok』

ヘズは柳沢に了承の返事をした。

「鈴瀬さん、墓地の確認いいかな？」

「はい、どうぞ」

(ヘズが動いた……いつでも動けるように手札を…)

柳沢は入れ替えに備える。

ヘズは彼女の墓地に手を伸ばし、墓地のカードを持ちあげると…

「oh sorry」

フィールドへと零した。

(今だ！)

赤石と彼女が零れたカードに気を取られているのを確認して、柳沢は素早く手札のカードをヘズの元へと、

バァン!!!

「うっ…!」

その瞬間だった。机を叩く大きな音が響き、柳沢の動きが止まった。

止まった理由は音だけではない。

赤石の手が、柳沢の手のすぐそばに降りかかっていたのだ。

「悪い、虫でも飛んでるかと思っただが気のせいだった」

(こ、こいつ…!)

「…ちっ、飛んでるわけねえだろ」

言うまでもなく殺虫目的ではない。赤石はヘズの零したカードに気を取られたフリをしてその実、神経は柳沢の方に集中していた。

そして赤石の大きな右手と優れた反射神経がイカサマの架け橋を崩落させた。

(見え見えのイカサマ仕掛けやがって…2度もさせるか!)

赤石は柳沢とヘズに対し、どんなイカサマをしようが必ず阻止してやると言わんばかりに一睨みすると振り下ろした手を引いた。

(…止められたカ。それにしても凄まじい反射速度だナ。ちよつとでも遅かったらカードに当たって反則負けになるかもしれないっていうのニ…)

ヘズの思っている通り、紙一重のタイミングだった。ほんの少しでも遅ければ、審判から何を言い渡されていたかわからない。

「モンスターセット、カードセット」

(度胸あるナ。その若さで勝負の席に座るだけのことはあるようダ)

ヘズは赤石の評価を改めた。

「turn end」

柳沢手札2枚      へズ手札0枚

LP900      LP4000

◇ ◇      裏 裏 ◇ ◇

◇ ◇ ◇ ◇      ◇ 裏 ◇

へズ↓赤石

あⅡ《ダンディライオン》トークン表側守備    いⅡ《ダンディライ

オン》トークン表側守備    うⅡ《サイバー・ドラゴン》攻撃表示

えⅡ《自律行動ユニット》

◇ ◇      あ い う

◇ ◇ ◇ ◇      ◇ え ◇

LP4000      LP1500

赤石手札1枚      彼女手札3枚

赤石のターンが回ってくる、実はここが1つの重要な分岐点。赤石のデッキは残り4枚、そのうちモンスターは《不意打ち又佐》の1枚だけ。

柳沢のLPは残り900でフィールドはガラ空き、赤石がここで《不意打ち又佐》を引けば【A】デッキを使っている柳沢のLPを0にできるのだ。これは即ち勝利に大きく近付くことを意味している。

確率は4分の1

(俺がここで引けば…！)

(引くな引くな引くなあ！)

赤石と柳沢の想いが交錯する中、赤石はカードをドローした。

「ドロー…」

5話 #10 「ラストドロ」

赤石はドロしたカードを見る。

ドロカード《ロスト》

(くっ、違ったか…！)

「スタンバイ、メイン」

「カードセット」

(どっちだ…!?)

柳沢は赤石を注視する。

(多分柳沢は気が気じゃないだろうナ。だが引いたカードが不意打ち又佐だったとしても同じサ)

(オレがセットしてるカードの1つは落とし穴だからナ。むしろ引いてももらった方が勝ちの目を潰せていいかもネ)

「もう1枚セット」

(ふう、違ったか…！)

柳沢は胸を撫で下ろす。

(フフ、まだデッキに眠ってるカ)

「ターンエンドだ」

柳沢手札2枚      へズ手札0枚

LP900              LP4000

◇      ◇      裏      裏      ◇

◇      ◇      ◇      裏      ◇

赤石↓柳沢

あ|| 《ダンディライオン》 トークン表側守備    い|| 《ダンディライオン》 トークン表側守備    う|| 《サイバー・ドラゴン》 攻撃表示  
え|| 《自律行動ユニット》

◇      ◇      ◇      あ      い      う

◇ 裏 裏      ◇ え      ◇

LP4000      LP1500

赤石手札0枚      彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(お?悪くねえな)

「《ハーピイの羽根帚》発動、対象は赤石」

「それにチェーン発動して、さらにチェーン発動だ」《サイクロン》発動、《ロスト》発動

赤石は待つてましたというような反応で2枚のカードをチェーン発動する。

(ちっ、無駄打ちか)

「まず《ロスト》の効果、対象は柳沢さんの《サイバー・ドラゴン》だ」

《ロスト》効果、柳沢の《サイバー・ドラゴン》除外

「続いて《サイクロン》の効果、対象はヘズさんの真ん中のカードだ」

《サイクロン》効果、セットカード《聖なるバリアー—ミラーフォース

—》破壊、《ハーピイの羽根帚》効果、《サイクロン》《ロスト》破壊

(これは仕方ないカ。ハーピイの羽根帚、引いたのが遅かったナ)

「《サンダー・ボルト》発動、対象は麗梨」《サンダー・ボルト》効果、

彼女の《サイバー・ドラゴン》《ダンディライオン》トークン2体《自

律行動ユニット》破壊

(フィールド一掃されたか…)

「カードセット」

(さすがにセットせずにエンドはもうできねえからな…!?)

柳沢は心の中で一応ヘズに断りを入れた。ヘズからのサインは無い。

「ターンエンド」

柳沢手札0枚      ヘズ手札0枚

LP900

LP4000

裏◇◇

裏◇◇

◇◇◇

◇裏◇

柳沢↓彼女

◇◇◇

◇◇◇

◇◇◇

◇◇◇

LP4000

LP1500

赤石手札0枚

彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《リーフ・フェアリー》  
(これで鈴瀬さんの手札は4枚、さすがに怖いネ。オレたちが負けるとすれば、手札に温存していた装備魔法で一気にドカンと来られるパターンだからナ)

確かにヘズの考えている通り、負けるとすればそのパターンだ。だが、裏を返せばそれ以外に赤石と彼女が勝つ方法はもうほぼ残っていないということでもある。

「《リーフ・フェアリー》召喚」

(攻撃力900、落とし穴は発動できないネ。でも柳沢は送り込んだカードをセットしてるし問題ない)

「バトルフェイズ、《リーフ・フェアリー》で柳沢さんに攻撃します」

「畏発動」《次元幽閉》発動、《次元幽閉》効果、《リーフ・フェアリー》除外

(冷や冷やするぜえ本当…《リーフ・フェアリー》なんかに使うのは癪だが、しゃあねえ)

この《次元幽閉》こそが柳沢が1ターンセットするのを待ったヘズが送り込んだカードである。

そして《リーフ・フェアリー》が除外されたことにより、赤石と彼女合わせてデッキに眠るモンスターは《速攻のかかし》と《不意打ち又佐》の2枚となる。

そのうち攻撃力0の《速攻のかかし》を除けば相手にダメージを与

えられるモンスターは実質《不意打ち又佐》1枚のみとなった。  
「カードセット、ターンエンド」

柳沢手札0枚      ヘズ手札0枚

LP900              LP4000

◇      ◇      裏      ◇      ◇

◇      ◇      ◇      裏      ◇

彼女↓ヘズ

◇      ◇      ◇      ◇      ◇

◇      ◇      ◇      ◇      裏

LP4000              LP1500

赤石手札0枚      彼女手札2枚

「draw standby main」

(ここでこれは良い引きだな)

「《首領・ザルグ》召喚」

(ここで首領・ザルグだと!?)

赤石のデッキは残り3枚、《首領・ザルグ》の効果で2枚墓地に送られるとなると残るデッキは1枚。さらにその2枚の中に《不意打ち又佐》があれば、その時点で赤石と彼女の勝ちの目は消えてしまう。

「battle。《首領・ザルグ》で赤石君に攻撃」赤石LP4000  
0-1400=2600

「《首領・ザルグ》の相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る効果を発動するヨ」

(ぐっ…頼む!)

赤石はおそろおそろデッキをめくっていく。

まず1枚目。

《成金ゴブリン》デッキ↓墓地

1枚目はセーフ、

(もう1枚…!)

そして2枚目。

《強制転移》デッキ↓墓地

2枚目もセーフ。

赤石は寸前で生き延びる。

(生き残ったか…!)

赤石はふう、と一息ついた。

(赤石の奴、ついてやがんなあ)

(ついてるネ。不意打ち又佐はデッキの一番下だったカ)

「turn end」

柳沢手札0枚   へズ手札0枚

LP900   LP4000

◇   裏   ◇   ◇

◇   ◇   ウ裏   ◇

ウII 《首領・ザルグ》攻撃表示

へズ↓赤石

◇   ◇   ◇   ◇

◇   ◇   ◇   裏

LP2600   LP1500

赤石手札0枚   彼女手札2枚

《首領・ザルグ》星4／闇属性／戦士族／攻1400／守1500

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

●相手の手札をランダムに1枚捨てる。 ●相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る。

(このターンで不意打ち又佐の攻撃を食らって俺のLPは0か。だが返しのヘズのターンで不意打ち又佐を倒せる。思ったより纏れたが、もう終わりだ！)

赤石、ラストドロー。

「ドロー……」

(!?こいつは……！)

赤石は呆気にとられたようにドローしたカードを見つめる。

(…赤石君の様子が変だな?)

『……』

「!……」

突如、彼女の足が赤石にそつと触れた。それをきっかけに赤石は「はっ」と我に返る。

「スタンバイ、メイ」

そして今手にしているカードの意味を考える。

(…なるほど、そういうことか)

意味を理解した瞬間、赤石の口角がわずかに上がった。

「カードセット」

(何!?魔法罫にゾーンにセットだあ!?)

(どういうことだ?不意打ち又佐じゃないのか!?)

疑問と驚きの表情を浮かべる柳沢とヘズに対し、赤石は

「ターンエンドだ」

平然と最後のターンを終了した。なお、デッキ残り枚数が0になったので赤石のターンはもう来ない。

赤石手札0枚	LP2600	◇ ◇ 裏	◇ ◇ ◇	赤石↓柳沢	ウ  《首領・ザルーグ》攻撃表示	◇ ◇ ◇	◇ ◇ 裏	LP900	柳沢手札0枚
彼女手札2枚	LP1500	◇ ◇ 裏	◇ ◇ ◇			ウ裏	裏	LP4000	へズ手札0枚

5話 #11 「ラストターン」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(ちっ、モンスターが欲しい場面でこいつか)

(それにしても一体どうなってるんだ?!?あのカードは何だ...?まさか!)

(赤石の奴、送り込みやがったかあ!?)

柳沢は自分たちがそうしたように、赤石が隙を見て送り込んだのではないかと疑う。

「《デーモンの斧》発動、《首領・ザルグ》に装備させる」《首領・ザルグ》攻撃力1400↓2400

(柳沢、モンスターを引かなかった力)

(赤石君が送り込んだとしたら、既に不意打ち又佐は鈴瀬さんの手の中。そしてあの2枚のセットカード...どちらかが《神の宣告》である可能性が高い。オレの落とし穴を無効にされればその時点で柳沢のLPが0になるのは確定的だ。しかも巨大化がまだ見えていないとなるとこれハ...)

このタッグデュエル、3回戦にして初めてヘズから焦りが見え始める。

(...いや、待てヨ?)

しかしある事実へズは気付く。

「ターンエンド」

柳沢手札0枚      ヘズ手札0枚

LP900              LP4000

エ    ◇    ◇              裏   ◇    ◇

◇   ◇   ◇              ウ 裏   ◇

エII 《デーモンの斧》

ウⅡ《首領・ザルグ》攻撃表示

柳沢↓彼女

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
◇ ◇ 裏 ◇ ◇ 裏

LP2600 LP1500

赤石手札0枚 彼女手札2枚

《デーモンの斧》装備魔法

(1)：装備モンスターの攻撃力は1000アップする。

(2)：このカードがフィールドから墓地へ送られた時、自分フィールドのモンスター1体をリリースして発動できる。

このカードをデッキの一番上に戻す。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(まず鈴瀬さんは不意打ち又佐を召喚すル)

「《不意打ち又佐》召喚」

(当然召喚時にオレハ)

「罨発動するヨ」《落とし穴》発動

(それにチェーンシテ)

「ではそれにチェーンして罨発動します」《神の宣告》発動、彼女LP1500→750Ⅱ750、《神の宣告》効果、《落とし穴》無効↓破壊

(そして鈴瀬さんが手札カラ)

「《巨大化》発動、《不意打ち又佐》に装備します」《不意打ち又佐》攻撃力1300↓2600

(やはりナ。…これは決まったカ)

ヘズは勝利を確信した。

(…あ？いやこれ、俺らの勝ちじゃねえ!?)

柳沢もある事実が遅れて気付く。

(このあと麗梨は2回攻撃で俺のLPを0にして首領・ザルグを倒

すだろ？ヘズのセットモンスターはリバースしなかったことを考えると100%ダークシー・フロートだから、こいつに攻撃は有り得ねえ)

(2回攻撃された後のダメージから計算すると、ヘズの残りLPは2100だ。それで麗梨がエンドしてヘズにターンが回る)

(そのヘズのターンが終わった後は：デッキ0の赤石のLPが加算されて麗梨のターンへと回る、そうなれば麗梨のLPはヘズのLPを上回って巨大化の効果が変わる！)

(そこからヘズが2ターン凌げば、順番の関係から先に麗梨のデッキが0になり勝利確定だ！さらにその2ターンも問題ない、何故ならヘズのデッキにはまだクリボーとニユートが眠ってるからな！)

(ギリギリだが、勝った！)

柳沢も勝利を確信した。

「…勝利を確信したか？」

赤石が2人の緩んだ心へ疑問を呈すように口を開く。

「あ？そりやな。計算したらわかるぜえ？」

「計算か…じゃあその計算に不備があるな」

「…何が言いてえんだ、てめえよ？負け惜しみかあ？麗梨ちゃんもさっさと攻撃しろよ」

「ここまで9枚、俺の墓地に見えてるカードは全て【C】デッキのカードだってことだ」

「はあ？」

柳沢は眉間にしわを寄せる。柳沢には赤石の言葉が理解できなかったが、

(9枚、見えてるカードは全て【C】デッキのカード…)

(……………)

(……)

(…)

(…!?そうか！何故気付かなかったんだ！)

ヘズは赤石の言葉から全てを理解した。

「赤石君、そういうことか」

「…はい」

ヘズの表情はどこか穏やかだ。

「ヘズ、どういうことだよ？」

「つまり、こういうことだ」

赤石はセットカードに手を乗せ、

「罨発動！」

声と共にカードをめくった。

《不運なりポート》発動

「なっ…！嘘、だろ…？」

柳沢は唾然とする。いまいち状況を飲み込めていない様子だ。

(やっと、たどりつきました)

「バトルフェイズ」

しかし、彼女は構わず進める。

「《不意打ち又佐》で柳沢さんに攻撃します」柳沢LP900—260  
0—1700 ヘズLP4000—1700—2300

ヘズは全てをわかっている。

「柳沢のカード、《デーモンの斧》を引き継ぐヨ」

たとえば赤石の言葉より前に気付いてたとしても

「《不意打ち又佐》の効果でヘズさんの《首領・ザルグ》に攻撃します」《首領・ザルグ》戦闘破壊、《デーモンの斧》破壊、ヘズLP2300ー2000||2100

もう、どうしようもなかったということ。

「《不運なりポート》の効果、もう1回バトルフェイズ」

(あのセットモンスターは、ほぼダークシー・フロート…そうじゃなければニュート。でも、もう同じ)

《ニュート》は戦闘で破壊された時、そのモンスターの攻守を500下げ効果を持つ。しかし、そうだとしても結果は同じ。

「《不意打ち又佐》でヘズさんに攻撃します」セットモンスター《ダークシー・フロート》、《ダークシー・フロート》戦闘破壊

何故ならば、

「《不意打ち又佐》の効果でヘズさんに攻撃します」ヘズLP2100ー2600||0

ちょうどピツタリ届くからだ。

「わたしたちの、勝ちです…!」

「3回戦勝者、赤石&鈴瀬ペア。これによりマッチも決着。勝者、赤石&鈴瀬ペア」

彼女はプレッシャーから解放されたからか、ふーっと息を吐き前かがみになる。

「では約束通り600万円です、お受け取り下さい」

審判だった黒服が懐から札束を6束取り出し、赤石と彼女の前に置く。

(やっぱりいざ目の前に置かれると、ちよつと身構えちゃうかも)  
彼女はまだ札束に慣れないみたいだ。

「勝者ペアはお受け取り次第、速やかに退出して下さい。敗者ペアは勝者ペアの退出後、最低15分はここで待機して下さい」

黒服は退出を促す。これは勝者の身の安全を考慮した措置だ。

「わかりました」

赤石と彼女はそれぞれ3束ずつ然るべきところに仕舞うと、勝利の余韻を感じる間も無く速やかに部屋を退出した。

## 5話 #12 「読み」

部屋に残された柳沢は、負けたという事実をまだどこか受け止めきれしていない様子だ。

「…」

ヘズは言葉こそ発しないものの、冷静に現実を認識している。

そのまま誰も言葉を発さず、数分が経過した。

「…落ち着いたか？」

機を見てヘズが柳沢に問いかける。言葉通り柳沢はある程度落ち着きを取り戻しつつあった。

「ああ…なあ、ヘズ…教えてくれないか？一体何がどうなってたんだ…？」

ヘズはゆっくりと語り始める。

「ここまで9枚、墓地に見えてるカードは全て【C】デッキのカード。赤石君がそう言ったのを覚えてるだろ？」

「ああ、でも意味がよく…」

「パートナーのデッキに送り込む場合、自分もパートナーのデッキからその分カードを取らないといけない。手札が不足するからナ」

「だが手札は0、墓地見えてるカードは全て【C】デッキのカード…おかしいんだ、手札に加えたはずの【D】デッキのカードが無いんだからナ」

「！…ってことは」

「ああ、送り込んだのは赤石君では無く鈴瀬さんの方だったってことダ」

ここで柳沢はデュエルを振り返り1つ疑問を抱く。

「ちよ、ちよつと待て！赤石にしる麗梨にしる送り込むとか、そんな動きは全く無かったぞ…？」

「ああ、オレもずつと見てたからわかるが赤石君には無かったネ」

「…その言い方だと麗梨にはあったように思えるんだが」

「同じく無いと思ってタ…が、実は2秒か3秒、死角があつタ」

「！」

「思い出してみな、手札を入れ替えようとしたターンにあったことヲ」  
柳沢は慎重に記憶を辿っていく。

手札の入れ替えを画策した事、ヘズとサイン交換をした事、ヘズが彼女の墓地のカードを持ち上げて零した事、入れ替えようとして赤石に阻止された事…

「…ああっ！」

(あの時かつ…！)

そして柳沢は自身の記憶から死角を見つけた。

――

同じ頃、赤石と彼女はエントランスまで戻っていた。ここに来た時よりも人は少なく、一層閑散としている。

2人に会話は無い。一応まだ戦場である、気は緩めない。

「…あ」

彼女は思い出したように立ち止まる。

「どうした？」

赤石も立ち止まり、彼女に問う。

「おしっこ、したい…」

「…あ？」

赤石は彼女の突拍子もない一言に気が抜ける。

「休憩時間が無かったから…途中から我慢してたの思い出した」

「待ってるからトイレ行ってきな、右奥にあるだろ」

「ついてきて欲しいです、心細いです」

広い会館内の右奥の方にトイレの標識が見える。通路に電気は灯っているものの周囲に全く人は見当たらず、1人で行くのは勇気がいるかもしれない。

(まあ、これは確かに1人じゃ行きづれえな)

「わかった、ついて行ってやる」  
「ありがとうございます」

――

「鈴瀬さんが送り込んだのは赤石君が入れ替えを阻止した時だ」  
「あの時オレたちは赤石君に気が向いてタ。しかも赤石君のデツキは伸ばした手の下にあつてオレたちからは見えなかつタ。2重に死角になつてたのサ」

「オレたちを出し抜いてデツキの1番下に送り込んだ後、《不意打ち又佐》を抜いたんだろうナ」

「死角になつてる間にしてやられたつてわけか、畜生……！」

柳沢は悔しさからか、下唇を噛んだ。

「でもさ、何でデツキの1番下に送つたんだ？」

「……それを話す前にオレの仮説を聞いてくれないカ？」

――

赤石はトイレ前の壁にもたれたまま彼女を待つ。

(あ、桜に連絡しとかねえと)

1人になったからか、家で帰りを待つ妹のことを思い出す。

(もう夜10時か)

携帯電話を取り出し、桜に『もうすぐ帰る』とメールを送った。

「お待たせしました」

赤石がメールを送り終えたとほぼ同時に彼女がトイレから戻る。

「行くか」

「はい」

2人は鶉檻会館を後にした。

――

「何？最初からこの結末になることを読んでただあ!？」

ヘズの仮説とは、彼女が3戦目の前からこの結末を読んでいたのではないかというものだ。もとい、そうなるよう仕組んだと言うべきか。

「1つずつ考えていくとそうなるのサ。【C】デッキと【D】デッキの組み合わせで勝つためにはどうすればいいカ。フィールドの最終形、相手のデッキとの兼ね合いや順番、そして…」

「どういうイカサマをしてくるか或いはすればいいか、とかナ」  
「…」

柳沢は黙ってヘズの話を聞く。

「【C】デッキと【D】デッキで相手に勝とうと思えば道はおのずと限られてくる。実践的なものに絞って言えばそれこそ装備魔法で一気に叩く戦法だな、1番勝てる可能性があるのハ」

「となれば機、熟すまで温存すル。長期戦を見据えた戦略を立てル。とは言っても能動的に長期戦に持ち込む手段は無いし、短期戦になればそれまでダ。こればかりは運次第だナ」

「そして運良く長期戦になりそうな場合、次は具体的にどういうカードの組み合わせで仕留めるかを考える。さっきのデュエルなら攻撃力の高いモンスターに《巨大化》を装備させて、という感じだナ」

「だが【D】デッキに攻撃力1000以上のモンスターはいない。できることなら【C】デッキのモンスターに装備させたイ。しかし【C】デッキのモンスターに装備させようと思ったら相手ターンを1ターン跨がなくてはいけない。そのモンスターで攻撃しようともなれば、さらに1ターン跨がなくてはいけない。現実的にそれは厳しい」

「じゃあどうするか。パートナーに送り込むか、もしくは自分のところに持ってくる。幸い、ルール上パートナーのカード使用は問題無い。問題はいつ、どのタイミングで決行するか。いかに相手の隙を突けるカ」

「相手に隙が無い場合はどうやって隙を作らせるカ。そのまま動けず仕舞いになることだけは避けたイ」

「ここで長期戦の流れになったことが生きてくる、相手も勝つためにイカサマをしてくる確率が高くなっタ」

「イカサマの種類だが、初見の場所で行うタッグデュエルとなれば出来ることは限られル。本命は言わずもがなパートナーとのカード交換系ダ。自分だけじゃなくてパートナーをも有利にさせることが出来るからナ」

「それ1本に絞って相手の動きに備えておけば、カードがどう移動したか把握しやすいし、阻止もしやすくなル」

今の言葉で柳沢は臆気ながらも気付く。

「おい、つてことはまさか…!」

「ああ、柳沢が考えてる通りダ」

――

2人は夜の鶉籠を歩く。夜10時を過ぎてもやはり人通りは多い。

「…しかし俺の腕の下でそんなことしてたとはなあ」

赤石は彼女の話を聞いて感心する。

「まあ良く実行したもんだよ」

「練習しておいて良かったです」

「練習?」

「久しぶりのタッグデュエルだったので、距離感を掴んでおきたかったです。《自律行動ユニット》はうってつけでした」

「!…ああ、なるほどな」

彼女の今の発言で赤石は2回戦での彼女の真意を察した。彼女は意味も無く発動していたわけではない、後々送り込む時のため自然な形で距離感をはかっていた。3回戦での《自律行動ユニット》も同様に。彼女が実行に移せたのは2度の練習があったからと言っていい。

「俺は最後まで戦うっていう意思表示だと思ってた」

「わたしもそう受け止めてくれたと思ってました」

「計算ずくってわけか、流石だな」

赤石は再度感心する。

「もし俺がイカサマに気付かずスルーしたら、とか考えなかったのか？」

赤石の問いに彼女は赤石の右手を軽く握り、

「わたしは赤石先輩の、この手を信じてましたから」

笑顔を見せて答えた。

「そ…そうか」

赤石は恥ずかしさからか顔を背ける。

(…本当、敵わねえな)

5話 #13 「信じる心です」

――

「…3戦目の鈴瀬さんの1ターン目、オレは違和感を覚えタ。あの時オレは考えた割にはモンスターのセットだけだったから、と思ったが本当は違っタ」

「右手で手札を持ってたんだ」

「右手？」

「そうダ。鈴瀬さんは1戦目と2戦目、手札は左手で持っていたタ。だが3戦目は右手で持っていたタ。何故だかわかるカ？」

「何故って言われても…あ!?!?そうか!」

(空いてる左手で送り込みやすくするためかっ…!)

「じゃあまさか最初から…!?!」

「赤石君を信頼していたんだろうナ。おそらくこのデュエルは長期戦になる、そうなればオレたちがイカサマをする、1度は許すかもしれないが2度目は赤石君が阻止してくれる、その間に自分は《不運なりポート》を送り込んで《不意打ち又佐》を手札に加える、そして1ターンで仕留める…デュエルが始まる前からこういう結末を迎えることを読んでいたのかもしれないナ」

「…」

柳沢は言葉を失う。

「あくまで仮説だがナ」

「…でもそうとしか考えられねえよ、何なんだよあいつは…凄過ぎるだろ」

「確かに凄いが、オレが本当に凄いと思ったのは別の部分ダ」

「別の部分…?」

「そうダ。それが例の、送り込んだ先が何故デッキの1番下だったのかということダ」

――

「そういや何でデッキの1番下に送ったんだ？」

赤石はまだ解消しきれていない疑問をぶつける。

「あの時と同じ、4分の1だったからです」

「あの時？4分の1？」

赤石は彼女の答えともいえない答えに思考を回転させる。

――

「わたしの《ランス・リンドブルム》であなたの《ランス・リンドブルム》に攻撃します」

「罠発動」

――

赤石は記憶に新しい彼女とのデュエルを思い出す。

(……待てよ、確かあの時は)

中止になる直前の事実上のラストターン、赤石のフィールドには4枚の罠カードがセットされていた。

そして発動されたカードは《邪神の大災害》、4枚の中では唯一彼女に勝利をもたらすことの出来るカードだった。

「ああ、4分の1だったな」

「はい」

「……まさか、それだけの理由でか!？」

「はい」

彼女はいたずらっぽく笑みを浮かべ答えた。

――

「イカサマが阻止されたオレのターン、つまり鈴瀬さんが送り込んだ

ターンだな。あのターンから1周して次のオレのターンのドロワー前、オレのデッキは残り4枚で赤石君のデッキは残り3枚」

「鈴瀬さんはここでオレが《首領・ザルグ》を引くことに賭けた」「賭けた?」

「そうダ。さらに言えば《不意打ち又佐》を墓地に送るために、引いた《首領・ザルグ》を召喚し、赤石君に攻撃し、赤石君のデッキの上から2枚墓地に送る効果を選択することニ」

「!...引いたのは偶然じゃねえのか!」

「ああ偶然ダ。何も手を加えていない。オレ自身いいカードを引いたと思っただくらいだしナ」

「あいつ顔色ひとつ変えずにそんな決断してやがったのか...!」

「大金かかった勝負で、これは中々出来ないヨ」

いざ運試しとなった時の決断力、ヘズが本当に凄いと思った別の部分だ。当然だが決断するに至ったシンプルな理由を2人は知る由もない。

「柳沢、鈴瀬さんとデュエルしたことあるんだロ?」

「ああ」

「どう思っタ?」

「どう思っタって言われてもな...こう、何でそんな戦い方が出来るんだとは思っタな」

「:オレも似たような気持ちだな。決して悔ってなんかいなかったし、オレはいつも通りのデュエルをしたつもりダ。単純にオレたちより上のデュエリストだったってことなんだろうナ」

「頭がキレルだけじゃない、ためらい無く運や直感に身を委ねることが出来る正真正銘の博徒ダ」

「300万は痛かったが徐々に震えるようなデュエルだったヨ」

負けはしたもののヘズにとつては価値あるデュエルだったようで、その表情や声色はどこかすつきりとしていた。

「...ヘズはまだマシだ、俺なんか545万だぞ...」

対して柳沢は無念さを始めとした負の感情に包まれ、実にどんよりとした雰囲気醸しだしている。

「まあ：相手が悪かったナ。でもまだ蓄えはあるだロ？」

「あるっちゃあるけどさあ：さすがに545万はマジ痛えよ」

「元氣出せヨ。おごってやるからさ、これから飲みに行こうぜ」

「へズ…」

柳沢はへズの氣遣いに感動したのか、徐々にその暗さが引いていく。

「：そうだな。鵜櫓に來たんだし」

「今日は飲み明かしてやらあ畜生！」

（立ち直り早いネ、柳沢らしいナ）

「おい、言つとくが俺もあまり金持ってないからほどほどにしといてくれヨ」

「わかつてるって！もう15分経つただろ？行こうぜ」

柳沢はすっかり元氣を取り戻したようだ。

その後、柳沢とへズは黒服に計600万円を渡し、夜の街へと繰り出して行つた。

———電車内

桐縹へと帰る電車の中、赤石は改めて今日のデュエルを振り返つていた。

（デュエルには勝つたが…）

赤石はどこか納得しきれていない様子だ。

（パートナー、か…）

今日のデュエルの勝利はパートナーである彼女のおかげだと赤石は思つていた。そう考えれば彼女をパートナーに選んだのは大正解であるが、同時に自分は彼女のパートナーとして務まつただらうかと少々不安になつていた。

「赤石先輩」

「あ？」

「わたしは赤石先輩がパートナーだから勝つた、と思つてます」

赤石の考えを読んだかのように彼女が口を開く。

「わたしじゃ手札入れ替えは防げませんでしたから…」

「そうだとしても、それだけじゃあレイリの活躍に見合っただけと思  
うが…」

「そんなことないですよ、赤石先輩はわたしを信じてくれました」

「信じた？」

「はい。さいごまで、勝つことを」

彼女の言う通り赤石は最初から最後まで勝つことを信じていた。  
不利な【D】デッキの彼女にとってそれは非常に大きな力になった。

「信じてくれたからこそ、わたしも信じてあげました」

「タッグデュエルで一番大切なのは、わたしはパートナーを信じる心  
だと思えます」

彼女は今日のタッグデュエルを通して実感していた。信じる心こ  
そが最終的に勝利を掴み取ることを。

「だから、赤石先輩がパートナーで良かったです」

彼女は今日一番の微笑みを見せた。その言葉に嘘偽りは無い。

「…そうか、ありがとな。俺もレイリがパートナーで良かったよ」

赤石も不器用ながらも笑みを浮かべて返した。

やがて電車は桐縹駅へと停車した。

――

「帰ってきましたね」

「そうだな」

駅構内を出て彼女は、うーんと軽く体を伸ばす。

「もう夜遅いし送って行くかどうか？」

「はい、お願いします」

――そして、彼女の家の前

「ありがとうございます。ここで大丈夫です」

彼女は家の前で足を止め、礼を述べる。

「ああ、じゃあまた学校で」

「あの、赤石先輩」

赤石の去り際、彼女が呼び止める。

「あ？」

「今日は楽しかったです。わたしで良ければ、また誘ってください」

「…ああ」

そう言い残し、彼女は自分の家へと帰っていった。

(レイリで、じゃなくてレイリが良いんだけどな)

遠ざかる彼女の背中に向かって赤石はそう言いかけたが、照れ臭さからか寸前で飲み込んだ。

(楽しかった、か…強いな)

赤石は今日共に過ごした彼女との時間を、どこか嬉しそうに振り返りながら帰路に着いた。

【第5話 終】

## 6話 #1 「翌日」

「それでは優勝インタビューです！」

観客席からは絶えず歓声が上がりに続けている。

「まずは優勝おめでとうございます！今の率直な気持ちをお聞かせ下さい！」

アリーナ全体に興奮気味のインタビューの音が響く。

「ありがとうございます。このブロッサムカップに優勝できたことを大変嬉しく思います」

しかし向けられたマイクからは冷静な声が響き渡った。

そしてこの温度差が維持されたままインタビューは進み、

「次はどちらを目標にお考えですか？」

「次は鵜櫓記念を目標に考えてます」

「では最後にファンに向けて何か一言お願いします！」

「今日はご声援ありがとうございます。これからも応援よろしくお願ひします」

「以上、今年のブロッサムカップ優勝者——」

この瞬間、プツツと映像と音声途切れた。

（鵜櫓記念ね…）

橡琥珀（ツルバミ コハク）は開いていたブラウザのウィンドウを閉じると、PCの電源を落とし座ったまま体を伸ばす。日曜日の午前10時のことである。

（…あ、図書館に本を返さないと）

机の端に積んでいた本を見て、ふと思い出す。忘れないうちに準備をして図書館へと向かった。

——

同じく10時頃、朝食を終えた赤石はジャージに着替えて出かける

準備をしていた。

「今日もその恰好で行くの？」

リビングにいた桜が若干呆れ気味に問う。

「ああ、どこかに寄るわけでもねえしな」

「昨日はオシャレしてたのに」

昨日、それは赤石が彼女と共に鶯櫓でタッグデュエルをした日。

「昨日はあれだ、都会で浮かないようにだな」

「兄貴、別にそういうの気にしない方じゃなかったか？」

「俺もたまには気にするさ」

「本当？」

桜は疑いの目で赤石の顔を見上げる。

「本当だって」

「…まーいいけどさ」

桜は赤石から視線を離し台所へと向かった。

赤石は基本的に人目をあまり気にしない。自分が正しいと思った方へと進む。もちろん無鉄砲ではなくしつかりと考えた上でだ。

そういう性質だからかファツションに関してもあまり興味は無く、服も多様には持ち合わせていない。

しかし昨日は特別だった。鶯櫓という場所もそうだが、何より隣に並んで歩く相手である彼女に見合うように、という思いが赤石を珍しく相応にお洒落な恰好にさせた。

多少なり自分がかっこ良く見せようという思いはあったものの、動機の大半が彼女のためを思っているのが赤石らしくもあった。

「そんじゃあ行ってくるな」

「うん、行ってらっしゃい」

準備を終えた赤石は家を後にした。

(都会で浮かないように、ね…まったく嘘が下手なんだから)

桜は妹としてずっと赤石と過ごしてきた。赤石のことは誰よりもわかってるつもりだ。あまりお洒落な恰好をしないことも。だから

こそ疑いの目を向けたわけだが。

もちろん嘘をつくのが上手でないこともわかっている。故に桜は昨日の赤石の恰好の意図をおおよそ把握していた。

(どんな女の子なんだろうな…)

(「…いやいや、兄貴がどんな女の子と遊ぼうがあたしには関係無いだろうが」)

桜は自分に言い聞かせるように考えを振り払おうとする。

(そうだ、お昼ごはんの準備しないと)

桜は考えないようにして昼食の仕込みに取り掛かった。

――

図書館へと向かう道中、対面から見知った顔が歩いて来る。向こうはまだ私(わたくし)に気付いていない。

「おはよう赤石君」

見知った顔に挨拶を送ると、私に気付いたようだ。

「ああ、椽(ツルバミ)か。おはよう」

「奇遇ね。そんな恰好でどこに行くのかしら?」

「トレーニングジムだ。体を鍛えるんだよ」

日曜日の朝からジャージ姿でジムへと向かうらしいこの男の名は赤石修哉、私のクラスメイトだ。授業態度は真面目で成績も良好、それだけなら学生として模範的であるが…しかしそれとは別に赤石君には問題点がある。

その風貌や口の利き方から不良生徒にしか見えないという点だ。事実、それらしき生徒たちと一緒にいるところをよく目撃するし、学校内外での悪い噂が絶えない。赤石君も噂を否定せずにいるのだから、生徒会長である私としては頭の痛い生徒である。

「そう、頑張ってるね」

噂を信じているわけではないが、火の無い所に煙は立たないはず。あまり関わりを持たない方が良いとはわかっている、立場上特定の

生徒を蔑ろにするわけにもいかない。

「ああ、じゃあな」

ただ個人的には興味深い生徒の1人であったりもする。上手く言えないが、一般的な不良生徒とは明らかに一線を画するものを持っているように感じられるのだ。

高校生活3年目で初めて同じクラスになってからもう2か月、そろそろ赤石君のことを詳しく調べてみようかしら。

――

(ここは壁になってるからこのマスは通って…)

(ループするように繋げて…)

(…解けた)

こちらも同じく10時頃、彼女はパズルを解いていた。

所持金はさらに増えたが、それに反して先週よりも幾分か落ち着いているようだ。

(難易度6、及第点)

彼女は解き終えるとシャープペンシルを置き、パズル本を閉じた。

(お昼ごはん、どうしようかな)

## 6話 #2 「勘違い」

――

図書館へ入館すると再び見知った顔と遭遇した。

「おはよう小松さん」

「あ、おはようございませう会長」

私と同じく生徒会に所属する小松綾芽である。私の2年後輩に当たり、クラスでは委員長も務めている。おとなしめで引つ込み思案なところはあるけれど、私は真面目で優秀な生徒だと思う。

「図書館で勉強？えらいわね」

テーブルには本や勉強道具が広げられている。なるほど、優秀なのは理由があるのね。

「え、えらくはないです…会長もお勉強ですか？」

「私は借りてた本を返却しに來ただけよ。小松さんは今日1日勉強の予定？」

「いえ、12時には帰ります」

「そう。良かったらお昼一緒にどうかしら？」

12時までと聞いて昼食を誘ってみる。家に帰れば食事は用意されているが、たまには外食してみたい。小松さんとの親睦を深めることも兼ねて。

「お昼ですか？」

小松さんはそう言うのとテーブルに目を向け考える仕草を見せる。

「一日家に帰ってからも宜しいですか？荷物を置きに…」

「ええ、いいわよ。希望の店はあるかしら？」

断られるかな、と思ったけど良かった。そうね、持ち物のこと考慮してあげないといけなかったわ。

「特には…会長のお好きなどころでいいですよ」

「そう？じゃあ――」

――

(5…6…7…8…!)

赤石は頭の中で数を数える。数えてるのはベンチプレスの回数。トレーニングジムは空調が効いているとはいえ、赤石の全身からは止め処なく汗が噴き出している。

「ぐおおっ…!」

負荷がきつくなってきたのか赤石の喉から声が漏れる。ここまでに既にかかなりの負荷をかけている。

「あと2回よ! 気張りなさい!」

そう声を張り上げて赤石を支えながら気合を入れるのはジムのインストラクター。

(9…!)

「あと1回!」

「うおお…!」

(…10!)

「オツケー! 3セットよく頑張ったわね」

「はあ…はあ…」

力を出し切った赤石はしばらく脱力した後、水分補給をしてベンチから立ち上がる。

「今日はここまでね。汗を拭いて、最後にストレッチよ」

――

綾芽は荷物を置くため一旦帰宅していた。

(ふう、待ち合わせには…まだ余裕あるかな)

時間を確認し一息つく。

(でも意外だったな、会長にしては庶民的っていうのかな…?)

(あ、そういうえば私も初めてかも…ちよつと調べておこうかな)

電源が入ったままのPCを操作し、この後行くであろう店について調べる。

(なるほど…:こういう仕組みなんですね)

綾芽は一通り理解すると、PCをスリープにして出発した。

――

図書館で読書していると、約束の時間が近付いて来る。

(そろそろかしら)

時間を確認し待ち合わせ場所までどのくらい歩くかを計算したところ、ちょうど良い時間に到着するという結果になった。

読んでいた本を棚に戻して、そのまま図書館を出る。楽しみだわ、どんなお店なのかしら。

数分後、待ち合わせ場所へと向かう途中、今朝見たジャージ姿を発見する。

(あら、またですか?・トレーニングは終わったのかしら?)

後ろ姿でよく見えないが、道端にしゃがんで何かをしているようだ。狭い道だからか周囲に人の姿は無い。

近付いて覗きこんで見ると、赤石君が小さな女の子に覆い被さって

…

…!?

「あ、赤石君何してるの!?!」

あまりの光景に一瞬理解が遅れた。そんな…不良生徒だけどそういうことはしない人だと思ってたのに!

「あ?」

赤石君は平然とした顔で振り返る。何なのこの態度!許さない!

「見損なつたわこの痴漢!こんな小さい子相手…え?」

言葉を止める。どうもおかしい。

「ありがとうございます、おにーさん」

「礼なんかいって」

赤石君は優しそうな声で答えている。女の子の方も深々と頭を下

げて、到底痴漢に対するそれとは思えない。

(自転車…?)

赤石君の影になっていて見えなかったが自転車が1台横たわっていた。色合いやサイズからその女の子のものと推測できる。

「乗れるか？」

「うん」

赤石君が自転車を起こし、女の子がゆっくりと跨る。この辺りで私は薄々気付く、とんでもない勘違いをしてるんじゃないか、と…

「ばいばい、おにーさん」

「ああ。気を付けろよ」

女の子はペダルを漕ぎ去っていった。やっぱり！ああ、私ったらなんて勘違いを…！

「あの、赤石君…」

赤石君はこちらに振り返る。怒ってるかしら？…聞こえてたはずよね。

「痴漢呼ばわりとは心外だな」

ああ、聞こえてた…けれど、そんなに怒ってはいない？

「ごめんなさい、私の早とちりでした、撤回します」

素直に頭を下げる。私は申し訳なさと恥ずかしさでいっぱいだった。

「ああ、別にいい。あんま気にすんな」

赤石君はそう言つて穏やかな表情を見せる。

「本当にごめんなさい」

「だからいいって」

赤石君は優しい。もし逆の立場だったら私は怒りに身を任せ、詰つてたかもしれない。

「あ、会長？」

気まずそうにしている私に、後ろから聞き覚えのある声がかかる。

「こ、小松さん…?」

集合場所に向かう途中であつたらう小松さんと微妙なタイミングで遭遇する。

「奇遇ですね。会長も向かうところですか？」

「え、ええ。そうね…」

小松さんは赤石君へと視線を移す。

「…えっと、赤石さんですか？」

「ああ。確かお前は、レイリとのデュエルの時にいた…」

「はい、小松綾芽です。その時以来ですね」

2人の様子を見る限り初対面というわけでは無さそうだ。

(…うん？今赤石君確か『レイリ』って)

私は赤石君の言葉を聞き逃さなかった。レイリこと鈴瀬麗梨、赤石君ほどではないがよく生徒たちが話題にしてるのを耳にする。なんでも、すこぶる美少女だとか。私は実物をまだ間近で見たことないが。

「ねえ、赤石君」

「あ？」

私はその名前を聞いて、つい最近、一瞬にして学校中を駆け巡ったある噂を思い出す。

「鈴瀬さんと100万賭けてデュエルしたって本当なの？」

「ああ。本当だ」

赤石君はためらいなく答えた。

## 6話 #3 「雰囲気」

「それで小松さんその場に居合わせたのね」

「はい。ずっと麗梨さんの後ろから見えました」

私は小松さんと目的の店へと向かっている。赤石君もどうかしら、と誘ってみたが昼食は妹さんが作ってくれているらしく、足早に帰って行った。意外な一面を知ったかも。

(あの2人のこと、ますます知りたくなつたわね)

デュエルの顛末を小松さんから聞いた私は赤石君だけでなく、鈴瀬さんに対しても興味を持つようになった。世の中色んな人がいるものね。

「ここよね」

「そうですね」

小松さんとお話してるうちに到着したようだ。今日はいつものように通り過ぎない、ここで昼食をとる。そう、今日の昼食は全国チェーンの牛丼屋。

「入るわよ」

「はい」

不安と期待が入り混じる中、私たちは意を決して入店した。

――

「いらっしやいませー!」

入店と同時に店員の元気な声が響く。

(席への案内は無いのかしら?)

琥珀は店内を見渡してみる。休日だというのに男性客しかいないようだ。心なしか場違いだと言わんばかりの視線を感じている。

「会長、あの席空いてます」

琥珀が立ち竦む間に綾芽は空席を見つけ、綾芽の示す方へと向かう。

「え、ええ。座りましようか」

(落ち着こう。男性客しか入れない店じゃないはず…きつと今日はたまたま女性客が居ないだけなんだわ)

琥珀は心を落ち着かす。

「ご注文、お決まりですか?」

2人が席に着くと間髪入れずに店員が注文を要求する。

(えっ、注文!?メニューはどこなの!?)

「牛丼並のサラダセットでお願いします」

混乱してる琥珀の横で、綾芽は淀みなく注文を完了させる。

「牛丼並のサラダセットですね」

「はい。会長も同じものにしますか?」

店員が琥珀の方を向いた瞬間、

「そ、そうね。では私もそれで!」

機転を利かせた綾芽に乗り、すかさず同じメニューを注文した。

「はい。並2丁ー!」

店員は厨房の方へと戻っていく。

「ふう、助かりましたわ。ありがとうございます」

「はい」

綾芽はにっこりと笑って返した。

(調べておいて良かったです)

琥珀だけでなく綾芽もこのような店は初めてだったが、ここに来る前にこういうものか予め調べておいたのが正解だったようだ。

「はい、こちら牛丼並とサラダですねー」

(もう出来たの!?!早いわね)

琥珀は提供スピードに驚愕を露わにする。

「会長、お箸どうぞ」

綾芽は特に驚くこともなく、テーブルにある箸箱から箸を1膳取り出し琥珀に差し出した。

「え、ええ…ありがとうございます。では、いただきます」

「!…結構美味しいわね」

ひとくち食べて、琥珀は感想を述べる。値段の割には自分の口に合っていたという感じだ。

(思ったより美味しいかも)

あまり期待していなかった綾芽もそこその評価を下す。

味は悪くない。しかし食べ始めてわかったことだが、それとは別の部分で琥珀にとって気になる点があった。

(…気のせいかしら？食事を楽しんでる方が少ない気がしますわ)

琥珀は店内の雰囲気からそのように感じ取る。食事というより栄養補給と言った方が適切かもしれない。店内にいる客の大半は時間に追われているのか黙々とかきこんでいた。客の入れ替わりも早い。

そういう意味でも2人はあからさまに浮いている。とはいえ向けられる視線は排除ではなく好奇のものだ。

「あまりゆっくりはできそうにないですね」

綾芽が小声で言う。

「そうね、そういうタイプの店ではないことは確かですわ」

2人は店の雰囲気になされるように黙々と箸を進めていった。

「いらっしやいませー!」

それから5分後、3人の客が入店し琥珀の隣から順次座っていく。

「牛丼大盛」

「俺豚丼並で」

「俺は牛丼特盛ね」

琥珀は今しがた隣に座った客たちを見る。

(私たちと年代かしら？なんだかガラが悪そうね)

琥珀が顔を戻し、再び食事しようとした瞬間、

「お？お前もしかして椽か？」

隣の客が琥珀の顔を見て確認する。

「…え？」

琥珀が固まっている間に、さらにもう一つ隣の席の客が顔を覗き見る。

「うわ、椽じゃねえか！」

「マジ？何で生徒会長がこんなところにいるわけ？」  
隣の客はニヤつきながら問う。

(そういえば…この人たち、見覚えがあるわ。確か違うクラスの…)  
琥珀は隣の客たちのことを思い出す。その客たちは琥珀が言うところの一般的な不良生徒であった。

「こんなところに居てはいけないのかしら？」

琥珀は学校にいる時と同じように毅然とした態度で返す。

「イメージ崩れるよなあ？お嬢様って感じなのに」

「庶民が食ってるものが知りたい！とかじゃねえの？」

不良生徒は冗談めかして言う。ただそれは琥珀の動機としてはあながち的外れでもない。

「何だつていいでしょう？静かに食事なさい」

「はい。ねえねえ会長このあと時間ある？」

「ありませんわ。私は忙しいんですの」

「そう言わずにさあ、庶民の遊びに付き合ってよ」

「ですから私は——」

「あの、会長」

琥珀が食い下がる不良生徒に強い言葉を浴びせようとした瞬間、綾芽は琥珀を制止させるように呼ぶ。

「小松さん…!？」

琥珀は綾芽の方を向く。それを見た不良生徒たちはこの時、綾芽の存在に初めて気づいた。

「なんだ？連れがいんの…っ！お前は!？」

不良生徒の1人が綾芽の顔を見ると、大きく目を見開いた。

「こんにちは、北林さん」

綾芽はにつこりと笑顔で挨拶した。

不良生徒の1人は瑞希や彼女とデュエルした北林だった。残りの2人もその場に居合わせた生徒である。

つまり綾芽と北林含む不良生徒たちはお互い顔を知っている。顔だけでなく、その場で何が行われていたのかということも。

「…」

不良生徒たちは口を噤んだ。厄介な奴と遭遇してしまった、と言わんばかりにテンションが落ちているようだ。

「会長、気にせず食べましょう」

「え？そ、そうね」

（小松さんと何かあったのかしら？）

琥珀には不良生徒たちが何故いきなり黙ったのか理解出来なかったが、この状態は自分にとって都合が良いので食事を再開した。

（ちっ、これじゃ下手なこと出来ねえな）

不良生徒たちが黙った理由、それは赤石が彼女と交わした約束にある。

『いじめを、やめさせて』

敗北を喫した赤石はその約束を果たすためにはどうすればいいかを考えた。ただ自分が抑止力になるだけではあまり効果はない。当事者たちの意識を変えさせた方がよほど効果的だ。

そう思った赤石は行動をよく共にする不良生徒たちに協力を求めた。不良生徒たちの意識を変えることが出来れば劇的に良い変化をもたらすだろう。赤石は不良生徒たちに対してお前らが頼りだ、と真剣な眼差しで力説した。

その結果、赤石の熱意に惹かれ不良生徒たちは一様に協力に応じた。問題を起こす側から解決する側になると誓った。

が、直接的な約束を交わしてない彼らにとってその熱はほんの一时的なものに過ぎなかった。具体的に言えば2、3日ほど。問題を起こすことは無いものの大体いつも通りに戻ってしまっていた。まあ、赤石もこうなることを予想はしていなかったわけではない。流石に3日持たないとは思わなかったようだが。

とはいえ彼らも協力すると言った手前、下手なことは出来ない。なにせ彼らは赤石を慕っているのだから、少なくとも赤石の前ではそういう姿勢を見せる。不良といえどその辺りは弁えている。

要するに恐れているのだ、赤石の耳に入ること。約束の過程を知っている綾芽が赤石に告げ口しないとも限らない。大人しくしていれば赤石には黙っておいてやる、綾芽が見せた笑顔にはそういういた意図があると不良生徒たちは解釈したのである。

(このまま静かにしていて欲しいけど…)

当の綾芽だが、不良生徒たちと違い特に深くは考えていなかった。あえて笑顔を見せれば逆におとなしくしてくれるんじゃないかと思っただけで、赤石に告げ口する気もさらさら無かった。

そして静かなまま食事の時間は流れ、琥珀と綾芽は不良生徒たちより先に店を後にした。

## 6話 #4 「挑戦」

――

彼女が玄関のドアの施錠を終えて歩き出そうとした時、

「こんにちは」

齢50程の女性と遭遇し、彼女は挨拶する。

「おや麗梨ちゃん。お出かけかい？」

「はい、お買い物です」

この女性は彼女の住むアパートの管理人兼オーナー、すなわち大家である。謎多き彼女の事情を知る数少ない人物でもある。

「そうかい。気を付けて行くんだよ」

大家はいつもと変わらず柔和な表情で送り出す。

「はい、いつてきます」

彼女はアパートの階段を下りて行った。

彼女は現在、この2階建ての古びたアパートに住んでいる。諸々の事情もあり立地の割には家賃が安く、入居しているのは主に所得の低い者、あるいは何かしら事情を抱える者たちである。

穏やかで優しそうな顔をした大家もそんな人たちと同じく、何らかの複雑な事情を抱えているかもしれない。彼女にしろ、人というのは見かけによらないものなのだ。

――

綾芽と琥珀は先程の食事を振り返りながら歩く。

「値段の割には味はそこそこ良かったですわね」

「そうですね、時間が無い時にはいいかもしれませんね」

言葉とは裏腹に2人の表情は芳しくない。不良生徒たちに絡まれたというのもあるが、店の雰囲気自分たちが合わなかったというのが1番だろう。

（これも経験ですわね）

「小松さん、午後の予定は何かあるのかしら？」

「特には、ありませんね。会長のご予定は？」

「私は……」

琥珀が言いかけた瞬間、綾芽がとある人物を見つけ声を上げる。

「あ、麗梨さん……？」

彼女は綾芽の声に反応し、振り返って立ち止まった。

「綾芽」

「奇遇ですね」

(え？麗梨さん……って、もしかして鈴瀬さん!?)

琥珀は瞬きしながら彼女の顔を確かめる。

「鈴瀬麗梨です。はじめまして、生徒会長さん」

彼女はその視線に答えるように挨拶をした。

……同じ頃

「そうか、やはり勝ったか」

黒川はとある建物の一室で通話していた。周囲には誰も居ない。

「はい。黒川さんの予想した通りの結果になりました」

通話の相手は昨日のタッグデュエルで審判を務めた黒服だ。

「それにしても、あの娘は一体何者なんです？赤石の方は以前から知ってましたが……」

彼女のデュエルは黒服に強烈な印象を与えていた。それは黒服が初めて赤石のデュエルを見た時より何倍もの大きな衝撃だった。

「本人いわく、どこにでもいるただのデュエリストだそうだ」

要領を得ない答えに黒服は電話越しに「はあ……」と声を漏らす。

「ま、今は俺の仕事仲間さ」

……

「お待たせしました。カレードリアセットです。ごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

綾芽の提案で3人は駅前のファミレスに来ていた。

まだ昼食を摂っていない彼女と、昼食を済ませたばかりの自分たち。どちらにも対応できるように綾芽はこの場所を提案したのである。

(さっきのお店よりは、ゆっくり出来そうね)

ちなみにファミレスというものも琥珀にとっては初めてである。故にまだどこか落ち着いていない様子だ。

「いただきます」

彼女は昼食を摂り始めた。

「鈴瀬さん、いくつか質問しても宜しいかしら？」

「はい、なんででしょう？」

彼女は食事をしながら琥珀へと視線を向ける。

「赤石君と100万円の勝負をしたことは聞いたわ。…何故100万円も持ち歩いていたの？」

勝負の内容や過程は綾芽から聞き、いくつかの疑問は解消されたが、同時に琥珀の中では新たな疑問が湧き上がっていた。

(あ、それは私も気になってたかも)

綾芽も心中では気になっていたようだ。

「繋がって、いたかったからです」

「繋がって…？」

彼女の理解不能な答えに琥珀は訊き返す。しかし彼女は「はい」と返事しただけだった。

あの時の彼女の心理からすると、繋がっていたかったという彼女の言葉はあながち的外れではない。

不相应な大金を手にしたのであるが故に感じた遠さを紛らわすためだったというのが主な理由だが、実はそれだけではなかった。

彼女は予感していた、もつと深い部分で。その1束が重要になるかもしれない。あの時は彼女自身も気付かなかったが、今は繋がりを自覚している。

(答えたくないのかしら?)

彼女の心理を知らない琥珀がそう思うのも当然である。そもそも答えそのものが彼女ですら気付かなかったものなのだから。

(麗梨さんらしいです)

綾芽は彼女の答えにある意味で納得していた。

「まあ、いいわ。普段は何してるの?」

琥珀が別の質問をぶつける。

「遊んだり、勉強したりしてます」

「…そう」

(思ったより普通ね。嘘はついてなさそうだけど…)

琥珀は彼女の顔を注視する。

(やっぱり表情だけじゃわからないわ…それにしても本当に綺麗な顔してるわね、ここまで美少女だと嫉妬する気も起こらないわ)

質問に答える彼女の表情は変わらない。

「デュエル、強いんですってね」

琥珀は彼女の反応を見るために少し試すような口調で言う。

「わたしでは、わからないです」

やはり彼女は動じない。ペースが乱れることもなく適宜食べ物を口に運んでいる。要領を得ない回答もさることながら琥珀にはそのマイペースさがどうも気に食わなかった。

「一度お手合わせ願えないかしら? わからないのなら教えてあげるわ」

琥珀は挑戦的な口調でデュエルを申し込む。

「はい、いいですよ」

彼女はその挑戦を受けた。

(わあ、会長と麗梨さんのデュエル…!というか会長デュエルできたんですね…)

当事者2人の横で綾芽はわくわくしながら成り行きを見守っていた。

「ねえ、この後時間あるかしら?」

彼女が食事を終えたタイミングで琥珀が問う。

「はい」

「カードショップに行くわよ」

「デツキ持ってません」

「カードショップの貸し出しデツキを使うのよ。その方がお互いフェアでしょ?」

「確かに、そうですね」

補足しておく、デュエルハウスだけでなくカードショップも無数に存在している。いや、むしろカードショップの方が多い。雀荘やカジノより麻雀牌やランプを販売している店の方が多いように。

「小松さんも良かったらいらっしやい。私、小松さんともデュエルしたいわ」

「はい!お供します」

綾芽は楽しそうに返事をした。

「あ、ちょっと待って。最後に1つだけ訊かせて」

彼女が席を立とうとした瞬間、琥珀が思い出したように引き止める。

「はい、なんでしょう?」

「赤石君とは、どういう関係なの?」

「…」

琥珀の質問に今まで淀みなく答えていた彼女が初めて沈黙する。

その光景に琥珀は緊張しながら、綾芽はドキドキしながら彼女からの回答を待つ。

「信頼しあえる関係です」

彼女はわずかに微笑んで答えた。

6話 #5 「琥珀 VS 麗梨・1」

——カードショップ「デュエリア桐標店」

「1回勝負でいいかしら？」

「はい、いいですよ」

彼女と琥珀は既にデュエルスペースの席へと着いている。綾芽はというと勝負が行われるテーブルの横に立ち、審判とも観客ともいえない位置でデュエルを見届けようとしていた。

(結構注目されてる…?)

綾芽は背中に視線を感じたようで、事実2人のデュエルを見物しようとする客たちがぞろぞろと集まってきたようだ。

注目される理由はもちろんこれからデュエルをする2人の存在である。彼女は言わずもがな、琥珀も高貴で気品があり、彼女とはまた違った魅力を醸しだしていた。

「もう1度確認するわね？ルールはスタンダード、先攻ドロ―無しのLP8000。お互いに内容がわからない貸し出しデッキ同士の1回勝負、それでいいわね？」

「はい」

手ごたえの無い返事に本当にわかってるのかと問いたくなった琥珀だが、「はい」と返事されてる以上わかっているものとして進行した。

「…ではシャッフルをお願いするわ」

お互いのデッキがシャッフルされ、然るべき位置にセットされる。そしてお互いデッキの上から5枚引いて裏側のまま場に置く。なおエクストラデッキはお互いに5枚ずつ裏向きで置かれている、もちろんその内容は知らない。

(手際は…慣れてるわね。そんなに素早くはないけれど、流れるようなその動きは幾度となくデュエルをしてきた証拠…侮れないわ)

彼女の動きを見て、琥珀はそう評した。

「花が刻印されてる方が表ね」

琥珀は見慣れない硬貨を取り出す。銀色や金色に光るそれは、どこかの国の通貨というわけでも無さそうだった。

「裏で」

「では私は表ね」

コイントスの結果、表が出て琥珀は先攻を選んだ。

「さあ、始めるわよ！」

琥珀のひと声を合図にデュエルが始まった。

（私はこのデッキを知らないし、鈴瀬さんのデッキも知らない。でもそれは鈴瀬さんも同じ）

（デッキを借りる際、店主に意図をきっちり伝えておいたから両方のデッキに極端な差は無いはず…）

（普段鈴瀬さんがどんなカードを使ってるかは知らないけれど、馴れ親しんだカードばかりがデッキに入ってる可能性は低い。まさか膨大な数のカードを全て記憶してるなんてことは有り得ないはず）

しかし、それは琥珀にも言えることだ。まだ見ぬ琥珀のデッキもそうである可能性の方が高い。普段からどれだけカードを記憶してるかが勝敗を分ける。何故なら、その記憶力が自分だけでなく、ひいては相手の戦術や戦略を読むことにも繋がるのだから。

（このデュエルは記憶力がとても重要になるわ。そして記憶力なら負けない自信があるわ！）

「スタンバイ、メイン」

琥珀はおそろおそろ手札を見る。

（！…：きたわ！これは私がまさに今使ってるデッキの1つ！）

「《剣闘獣エクイテ》を召喚するわ」

「カードをセット、もう1枚セット」

「ターンエンドよ」

琥珀LP8000 手札2枚

彼女LP8000 手札5枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

【剣闘獣】…対してわたしは)

「《手札抹殺》を発動します」

「何も無いわ」

琥珀は手札を捨てて引いた後、彼女の捨てたカードを確認する。

(!?…なんて手札よ！)

(麗梨さん、凄まじいです…)

彼女が捨てたカードは《サイバー・ダーク・ホーン》《サイバー・ダーク・エツジ》《サイバー・ダーク・キール》《サイバー・ドラゴン》《仮面竜》の5枚。

これには琥珀も驚く他なかった。しかし、すぐに落ち着いてそれらのカードからデッキを分析する。

(主軸は間違いなく【サイバー・ダーク】ね。《サイバー・ドラゴン》も入っているとこのことを考えると、鈴瀬さんのエクストラデッキの内容は読めてくるわね)

確証は無かったが琥珀はエクストラデッキの5枚にある程度の目星を付けた。

「墓地に闇属性モンスターが3体…」

(その確認は…！)

琥珀は彼女の言葉の意味を当然わかっている。

「手札から《ダーク・アームド・ドラゴン》を特殊召喚します」

「《ダーク・アームド・ドラゴン》の効果発動、《サイバー・ダーク・ホーン》を除外して《剣闘獣エクイテ》を破壊します」

「させないわ！罨発動、《剣闘獣の戦車》」

「はい」

彼女は読んでいたかのように《ダーク・アームド・ドラゴン》を墓地に送ると、続けてモンスターを召喚する。

「《サイバー・ダーク・ホーン》を召喚します。効果で墓地の《仮面竜》を装備します。《サイバー・ダーク・ホーン》の攻撃力は装備したモン

スターの元々の攻撃力分アップします」

(2枚目の《サイバー・ダーク・ホーン》…2枚ずつ入ってるのかしら?)

「バトルフェイズ。《サイバー・ダーク・ホーン》で《剣闘獣エクイテ》に攻撃します」

「通さないわ。罨発動、《和睦の使者》」

「…バトルフェイズを終了します」

「この瞬間、《剣闘獣エクイテ》の効果が発動するわ。《剣闘獣エクイテ》をデッキに戻し…」

琥珀は待つてたと言わんばかりにデッキのカードを一通り見る。

(なるほど、確かに【剣闘獣】ね、それも混ざりっ気なしの)

「《剣闘獣レティアリイ》を特殊召喚ね。《剣闘獣レティアリイ》の効果発動、あなたの墓地の《ダーク・アームド・ドラゴン》を除外するわ」「はい」

(【サイバー・ダーク】なら墓地のドラゴン族を除外しておけば恐るるに足らないわ)

「メイン2…」

少し間を置いて、彼女が動く。

「《未来融合―フューチャー・フュージョン》を発動します」「!」

《未来融合―フューチャー・フュージョン》、墓地に送るまでラグがあるものの、莫大な墓地アドバンテージが得られる強力なカードの1つである。

(大丈夫、私のターンで破壊すれば問題ありませんわ)

幸い【剣闘獣】は比較的、魔法罨カードを破壊しやすいデッキだ。「ターンエンドです」

琥珀LP8000 手札2枚

彼女LP8000 手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（まずはあのカードを破壊しないといけないわね。伏せカードも無いし、一気に行かせてもらおうわ）

「《剣闘獣ベストロウリイ》を召喚。そして《剣闘獣ベストロウリイ》と《剣闘獣レティアリイ》をデッキに戻して《剣闘獣ガイザレス》を特殊召喚」

（来ました【剣闘獣】の重要カード。会長は一気に攻めるつもりでしょうか…？）

「《剣闘獣ガイザレス》の効果発動。《サイバー・ダーク・ホーン》と《未来融合―フューチャー・フュージョン》を破壊ね」

「はい」

「バトルフェイズ、《剣闘獣ガイザレス》で攻撃するわ」

「受けます」彼女LP8000→2400≡5600

「バトルフェイズ終了時、《剣闘獣ガイザレス》の効果発動。《剣闘獣ガイザレス》をデッキに戻して《剣闘獣ダリウス》と《剣闘獣アウグストル》を特殊召喚」

「《剣闘獣ダリウス》の効果発動。墓地から《剣闘獣ラクエル》を特殊召喚」

（あれ？いつの間に《剣闘獣ラクエル》が墓地に…あ、麗梨さんの《手札抹殺》）

「《剣闘獣アウグストル》の効果発動。手札から《剣闘獣エクイテ》を特殊召喚。《剣闘獣エクイテ》の効果発動。墓地から《剣闘獣の戦車》を手札に加えるわ」

琥珀のプレイングを彼女は動くことなく、じつと見続ける。

「メイン2に入るわ。《剣闘獣ラクエル》、《剣闘獣エクイテ》、《剣闘獣ダリウス》をデッキに戻して《剣闘獣ヘラクレイノス》を特殊召喚」  
「カードを1枚セット、ターンエンドよ」

（さあ、固めたわ。どこからでもかかってきなさい！）

琥珀LP8000 手札1枚

彼女LP5600 手札2枚

6話 #6 「琥珀 VS 麗梨・2」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(固められました。でも、崩してみせます)

「《サイクロン》を発動します」

(《サイクロン》…)

琥珀は考える。《剣闘獣ヘラクレイノス》の効果で無効にするか、そのまま通して破壊されるか。

(会長の伏せカードは前のターン手札に加えた《剣闘獣の戦車》…私だったら通すかな、《剣闘獣エクイテ》でまた拾えると思うし…)

綾芽はそう考えるが、琥珀は綾芽とは違う答えを出す。

「通さないわ、《剣闘獣ヘラクレイノス》の効果発動。手札を1枚捨てること無効にして破壊するわ」

(これはおそらく《サイクロン》くらいなら通すだろう、という彼女の読みね。それで《剣闘獣の戦車》を破壊して効果モンスターで倒そうっていう戦略。甘いわよ、そんなものお見通しだわ!)

琥珀は無効にすることを選んだ。しかし、その選択が裏目に出る。

「《ブラックホール》を発動します」

「なっ…!」

(《ブラックホール》ですって…!?読み違えたわ…!)

これでモンスターが居なくなり、《剣闘獣の戦車》が発動できなくなった。

(何かモンスターを召喚してくるわよね…?)

琥珀はそう予想するが、

「ターンエンドです」

彼女はそのままターンを終えた。

琥珀LP8000 手札0枚

彼女LP5600 手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」  
《《地砕き》》：モンスターが欲しいところね。今はブラフにしかならないわ）

「カードをセット、ターンエンドよ」

琥珀LP8000 手札0枚

彼女LP5600 手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女は少し考える素振りを見ると、

「ターンエンドです」

何もせずにターンを終了した。

琥珀LP8000 手札0枚

彼女LP5600 手札2枚

（何もしなかった…いや、出来なかったのかしら？）

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（来たわ！）

「《剣闘獣ダリウス》を召喚」

「バトルフェイズ、《剣闘獣ダリウス》で攻撃」

「はい」彼女LP5600—1700∥3900

「バトルフェイズ終了時、《剣闘獣ダリウス》の効果発動。《剣闘獣ダリウス》をデッキに戻して…」

《《剣闘獣レティアリー》で《サイバー・ドラゴン》を除外しておこうかしら？）

琥珀はデッキから《剣闘獣レティアリー》を抜き取ろうとしたが、思いとどまる。

（…違うわね。《サイバー・ドラゴン》がデッキに1枚だけとは思えないわ。ここは引かれた時のために…）

「《剣闘獣ラクエル》を特殊召喚。《剣闘獣ラクエル》の効果発動。攻撃

力が2100になるわ」

「ターンエンドよ」

琥珀LP8000 手札0枚

彼女LP3900 手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女は前のターン同様、少し考える素振りをする、

「ターンエンドです」

何もせずにターンを終了した。

琥珀LP8000 手札0枚

彼女LP3900 手札3枚

(…わからない。でもこれって赤石さんとデュエルした時と同じ…？ってことは、きっと何か考えがあるはず…よね？)

(またですの!?!何を考えてるのかしら?…とにかく今は攻め時だわ!)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(あら?2ターン連続で引くのね)

「《剣闘獣ダリウス》を召喚」

(また《剣闘獣ダリウス》…麗梨さん…!)

「バトルフェイズ、《剣闘獣ラクエル》で攻撃」彼女LP3900—2100=1800

「《剣闘獣ダリウス》で攻撃」彼女LP1800—1700=100  
「…」

彼女はただ黙って攻撃を受ける。残りLPが100であろうと動じない。

「バトルフェイズ終了時、《剣闘獣ダリウス》の効果発動。《剣闘獣ダリウス》をデッキに戻して《剣闘獣レティアリイ》を特殊召喚」

「《剣闘獣レティアリイ》の効果発動。あなたの墓地の《サイバー・ド

ラゴン』を除外するわ」

「《剣闘獣ラクエル》の効果発動。《剣闘獣ラクエル》をデッキに戻して《剣闘獣ダリウス》を特殊召喚」

「《剣闘獣ダリウス》の効果発動。墓地から《剣闘獣ヘラクレイノス》を特殊召喚」

「ターンエンドよ」

(あと100のLP、削り取ってみせるわ！)

琥珀LP8000 手札0枚

彼女LP100 手札3枚

(会長のLPが8000なのに対し、麗梨さんのLPはたったの100：マンガやアニメだところから大逆転って展開はよくあるけど、流石にこの状況はかなり厳しいかも…)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「手札から《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚」

(2枚目の《サイバー・ドラゴン》。やっぱり1枚だけじゃなかったわね)

「《融合呪印生物―光》を召喚。《融合呪印生物―光》の効果発動。特殊召喚するのは《サイバー・ツイン・ドラゴン》」

「させないわ。畏発動、《剣闘獣の戦車》」

「はい」

(《剣闘獣の戦車》の存在を忘れてたわけじゃないわよね…?)

まるで警戒心を感じさせないプレイングに琥珀は疑念を抱く。

しかし、すぐにその疑念は飛んだ。

「手札から《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚」

(なっ、3枚目ですって!?)

「《オーバーロード・フュージョン》を発動します。フィールドの《サイバー・ドラゴン》、墓地の《サイバー・ドラゴン》《サイバー・ダーク・ホーン》《サイバー・ダーク・エツジ》《サイバー・ダーク・キ

ル』を除外して《キメラテック・オーバー・ドラゴン》を融合召喚します」

(攻撃力4000……さっきの2枚は罠で、本命は《キメラテック・オーバー・ドラゴン》だったのね)

「バトルフェイズ、《キメラテック・オーバー・ドラゴン》で《剣闘獣ヘラクレイノス》に攻撃します」琥珀LP8000→10000∥7000

「《キメラテック・オーバー・ドラゴン》で《剣闘獣ダリウス》に攻撃します」琥珀LP7000→2300∥4700

「《キメラテック・オーバー・ドラゴン》で《剣闘獣レティアリイ》に攻撃します」琥珀LP4700→2800∥1900

「ターンエンドです」

彼女は淡々と進行し、ターンを終えた。

琥珀LP1900 手札0枚

彼女LP100 手札0枚

(すごい……麗梨さん、持ち直した)

(この子、抜かりないわね……しっかりと《剣闘獣ヘラクレイノス》から攻撃してきたわ。この様子だとセットカードもブラフだと見抜かれてるかしら)

《剣闘獣ダリウス》の効果で特殊召喚された《剣闘獣ヘラクレイノス》は《剣闘獣ダリウス》がフィールドから離れるとデッキに戻ってしまう。

そうならないために彼女は《剣闘獣ヘラクレイノス》から攻撃した。《キメラテック・オーバー・ドラゴン》の効果も考えて1番ダメージが通る順番をきつちりと選択した。

(でも《キメラテック・オーバー・ドラゴン》は伏せてる《地砕き》で破壊できるわ。ここでモンスターを引けば私の勝ちよ!)

「ドロロー、スタンバイ、メイリン」

6話 #7 「琥珀 VS 麗梨・3」

(《禁じられた聖槍》：…ついてないわ、モンスターが欲しかったのに) 「《地砕き》を発動、《キメラテック・オーバー・ドラゴン》は破壊されるわ」

「はっ」

琥珀は彼女の様子を窺う。

(LPは100、手札もフィールドも0なのに：…どうして何の感情も見せないのかしら?)

(…まさか負けてもデメリットが無いから?何も賭けてないからとか言わないわよね!?)

琥珀はこの勝負を是が非でも勝ちたいと思っていた。彼女の終始冷静な態度が気に入らなかったというのもあるが、何より自身のプライドが彼女には負けたくないと思わせていた。

「ねえ、どうして貴女は感情を見せないの?このデュエルがどうでもいいものだとも思っているの?それとも賭けるものが無いと勝とうって気にならない?」

この終盤に差し掛かった場面での琥珀の発言に周囲がざわつく。空気が変わり、険悪な雰囲気は漂い始めた。綾芽も心配そうに2人を見守る。

「…」

彼女は何も言い返すことなく琥珀の顔を見つめる。琥珀には彼女という人間がどうも掴めずにいた。

(何なのよ、その余裕は…何とか言いなさいよ!)

琥珀は苛立っていた。何も答えない彼女に。

「…カードをセット!」

そしてそんな彼女を仕留められなかった自分にも。

「ターンエンドよ!」

琥珀LP1900 手札0枚

彼女LP100 手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「勝ちたいです」

「彼女がぼそりと呟く。

「…えっ？」

その声を聞いた琥珀は不意をつかれたようにして、彼女の顔へと視線を向け耳を傾ける。

「勝ちたいと思ってるから、感情を見せたくないんです」

彼女は真剣な眼差しで前のターンの琥珀の問いに答える。

その答えを聞いた琥珀は「…そう」と納得したように呟いた。

「ターンエンドです」

琥珀LP1900 手札0枚

彼女LP100 手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「安心したわ。本気でデュエルしてるの私だけかと思ってたから」

琥珀は落ち着いた表情を見せる。苛立ちは既に消え去っていた。

（むしろ私の方こそ冷静になるべきね。本気でデュエルしてないなんて決めつけるのは浅はかだわ）

「2ターンもチャンスくれたのにね。これも運なのかしら」

琥珀が引いたカードは《剣闘獣アウグストル》。モンスターではあるがレベル8のため召喚できない。

「ターンエンドよ」

琥珀LP1900 手札1枚

彼女LP100 手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「《異次元からの埋葬》を発動します。対象は《サイバー・ダーク・ホーン》《サイバー・ダーク・エッジ》《サイバー・ダーク・キール》の3体です」

「通すわ」

(サイバー・ダーク3体を墓地に戻した、つてことは…)

「《サイバー・ダーク・インパクト!》を発動します。《サイバー・ダーク・ホーン》《サイバー・ダーク・エッジ》《サイバー・ダーク・キール》をデッキに戻し、《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》を融合召喚します」

(!…まずいわ、確か鈴瀬さんの墓地は…)

「《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》の効果で墓地の《仮面竜》を装備します。《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》の攻撃力は装備したモンスターの元々の攻撃力分アップし、さらに自分の墓地のモンスターの数×100アップします」

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》の元々の攻撃力は1000、《仮面竜》の元々の攻撃力は1400、そして彼女の墓地に存在するモンスターは《融合呪印生物―光》と《キメラテック・オーバー・ドラゴン》の2体、つまり…

(攻撃力2600…!会長のLPを上回ってます!)

「バトルフェイズ、《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》で攻撃します」

「まだよ!速攻魔法発動、《禁じられた聖槍》!《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》の攻撃力は800下がるわ」

「はい」琥珀LP1900―1800=100

彼女の攻撃は通ったものの、ぎりぎり仕留めるまでには至らない。

(私も生き残ったわ…!まだ終わらないわよ!)

「ターンエンドです」

琥珀LP100 手札1枚

彼女LP100 手札0枚

「おいおいすげえ展開になってるぞ！」

「女の子同士の熱いデュエルはいいねえ」

「100対100とか滅多に見ないよな!？」

「黒髪ロングちゃんの方応援してる、マジかわいくね」

「俺も女の子とデュエルしたいなあ」

同じ100LPになったことにより、周囲の観客も一様に興奮していた。傍で見ている綾芽も同様に興奮していることは想像に難くない。

(残りのLPはたったの100、でもこの100は生存の証。私はまだ運に見放されてはいない、ということかしら)

(これはなんだか良いカードを引く予感がするわ)

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(…来たわ!)

「カードをセット！」

琥珀は普段そうするより少々勢いよくカードをセットした。

「ターンエンドよ」

琥珀LP100 手札1枚

彼女LP100 手札0枚

「ドロー、スタンバイー！」

「待って!スタンバイフェイズに罠発動するわ、《リビングデッドの呼び声》!」

琥珀は彼女の言葉に割り込み、発動する。

「墓地から《剣闘獣ヘラクレイノス》を特殊召喚するわ!」

《剣闘獣ヘラクレイノス》が三度フィールドに現れる。《剣闘獣ダリウス》の効果で特殊召喚された時と違い、効果が使える状態だ。

それは琥珀の手札で腐っている《剣闘獣アウグストル》が、コストとして使えるようになったということでもある。

彼女のフィールドにカードは無く、手札は今引いた1枚のみ。その1枚が魔法か罠カードだった場合、無効にされて彼女の負けが確定する。

(あの1枚が魔法、罠なら無効にすればいいわ。問題はモンスターの場だけ…)

琥珀は彼女の墓地と除外されたカードを見て考える。

(よく考えて。《サイクロン》を無効にした時は深く考えなかったけれど、「サイバー・ダーク」に破壊効果を持つモンスターついていたかしら?…あ、ちよつと遠いけど《サイバー・エルタニン》がいるわね。でも鈴瀬さんの墓地に機械族で光属性のモンスターは存在しないわ。《サイバー・エルタニン》を引いたとしても特殊召喚は出来ない)

(《リビングデッドの呼び声》を破壊できるモンスターも思い付かないし…効果じゃないなら戦闘だけど、そもそも単身で特殊召喚できて攻撃力3000を超えるモンスターは「サイバー・ダーク」には入っていないはず…!)

「メインフェイズ」

(貴女のそのデッキでこの状況を突破できるモンスターが存在しないことはわかってるわ!さあ、倒せるものなら倒してみなさい!)

メインフェイズに入った彼女に対し、琥珀は自信満々で彼女がどう動くかを待つ。

(《リビングデッドの呼び声》を発動された時は、どうしようと思いましたが。でも…)

(このデッキに、このモンスターが入ってるとは思いませんでした) 彼女はゆっくりと墓地に手を置く。

(サレンダー、じゃないわよね?何かしら?)

「墓地の《融合呪印生物―光》と《キメラテック・オーバー・ドラゴン》を除外して…」

「!?」

琥珀は彼女の言葉の意味をすぐに理解した。

(そんな……まさか、そのカードが入ってるなんて……！)

「手札から《カオス・ソルジャー》——開闢の使者——を特殊召喚します」  
「こんなことって……！」

琥珀の表情が先程までと一変する。周囲の観客からは早くも歓声が上がり始めた。

(すごい……この場面でこれしかないってカードを引くなんて……！)  
彼女の強運に綾芽もまた琥珀と同じような表情を浮かべる。

「《カオス・ソルジャー》——開闢の使者——の効果発動。《剣闘獣ヘラクレイノス》を除外します」

(……なるほど、今わかりましたわ)

琥珀は数秒目を閉じ、開けると彼女の顔をしっかりと捉えた。

(鈴瀬さんは、デュエルに勝つために全力を尽くしていたこと)

「バトルフェイズ、《鎧黒竜——サイバー・ダーク・ドラゴン》で攻撃します」

(悔しいけれど、私ではあと一歩及ばなかったことも)琥珀LP100  
——2400——0

そして、敗北した事実を受け止めた。

「わたしの、勝ちです」

## 6話 #8 「交流」

―――某警察署

黒川は自分のデスクに座ったまま、自身の机に置いてる物を見つめては厳しい顔を浮かべる。

「黒川さん、何ですかそれ？」

部下の若い警察官が問う。

「デュエルディスクだ。なんだ知らねえのか？」

机に置かれている物の正体、デュエルディスク。デュエリストならばその存在は大抵知っている。実戦で使うことは少ないが。

「いえ、知ってますよ。何故ここにあるんです？」

「今さっき桑嶋のガキから取り上げて来た」

黒川が答えると部下は「そうですか」と言いデュエルディスクを手を持つ。

「しかしなんかゴチャゴチャしてますね。形も変わってるし。どうやって腕にはめるんですか？」

「腕には着けられねえ。貸してみな」

黒川は部下からデュエルディスクを取ると再び机に置く。

「ここはカメラになっててデュエルディスク全体を映す。それで、こつちを回すとモニターが出てくる。ここは他のデュエルディスクからの情報を送受信してる部分だな」

黒川は解説するようにデュエルディスクを操作する。

「はあ。カメラとかモニターとか何に使うんです？」

「…ライディングデュエルだ。こいつは腕じゃなくバイクに装着するんだよ」

「ライディングデュエル…ってあのバイクに乗りながらのあれですか!?!あんなの危なくて出来ないでしょう!?!」

ライディングデュエルとは名の通りバイクに乗って行うデュエルのことである。元々アニメ発祥でデュエル物の特撮や映画でも何度か登場し、一定の支持を得ているようだ。ただそれらは特殊な方法で

撮影されたフィクションであり、現実で実際に行うのは危険極まりなく、相手のカードも見えないため事実上不可能である。

と、最近までは思われていた。改造されたデュエルディスクが登場するまでは。

「だと思ってたんだがな。どうも半年くらい前から一部の奴らの間で流行ってるらしい」

「そうなんですか？でもニュースとかでも全然見ませんよ？」

「そりゃあんな危険なデュエルをしてたなんてニュースにできねえし、事故を起こしたとしても表向きは普通の交通事故として処理されてるだろうからな」

現在この国に於いて、デュエルというのは非常に大きな市場の1つとなっている。かつて隆盛を極めた時代の公営競技が全て束になっても敵わないほどだ。

「デュエルに対してマイナスイメージになるような報道はできません、ってことですか」

部下も警察官としてデュエルというものをそれなりに知っているため事情を察する。

「既に全国規模で結構な数、ライディング用に改造したデュエルディスクが出回っている。出所を特定するのは難しいだろうな」

「デュエルディスクの改造は別に違法じゃありませんからねえ」

「通常のデュエルじゃ満足できないジャンキー共が怪我する分には構わんが、一般人にも被害が及んだ例もある。つい先日桑嶋でも1件あったし、面倒なことになってきたな…」

――

彼女とのデュエルが終わった後、琥珀は流れで綾芽とデュエルをしていた。もちろん両者ともまた別の貸し出しデッキである。

『《宝玉獣 サファイア・ペガサス》で攻撃するわ』

「はい…受けます」

（負けました。会長お強いですね）

勝負が着いたようだ。

2人のデュエルが終了して間も無く、観戦していた彼女に後ろから声がかかる。

「あ、あの、良かったらデュエルしません？」

彼女が振り返ると、1人の若い男性が緊張した面持ちで返事を待っていた。先程のデュエルを見ていた客のようだ。

「わたしですか？」

「は、はい」

彼女は琥珀に視線を向ける。琥珀はというと今しがたデュエルで勝利したことに喜んでいる様子だ。

「デッキを持ってないので、貸し出しデッキでよろしければ」

「いいですよ！あ、デッキ借りてきますね！」

若い男性はデッキを借りに行き、小走りで戻ってくる。

「どうぞ座って下さい！」

戻ってきたばかりの若い男性に促され、彼女は琥珀と綾芽の隣席に座る。

「あら？貴女、この方とデュエルするのかしら？」

隣に座ったことで琥珀が彼女の動きに気付いた。

「そうみたいです」

「そう。負けちゃだめよ」

(私も誰かと戦ってみようかしら？)

「どうぞデッキです！中は見ていないのでわかりません！」

彼女は若い男性からデッキを手渡される。

「ありがとう」

そして互いのデッキをシャッフルし、先攻後攻を決めデュエルが始まった。

——デュエルハウス「黒蠍」

青葉はカウンターでコーヒー豆を挽いている。

日曜といえど、昼の黒蠍は平和なものだ。主に常連の爺さんたちが

仲間うちでデュエルをしていて、夜のあの殺伐さは微塵も無い。

そんな爺さんたちの他愛もない話に耳を傾けよう。

「そっぴいやもうすぐ『鵜籠記念』け?」

「なんや今年は『桜花』の覇者が参戦するんやって? えらい時代になったもんやなあ」

「『GAデュエリスト』の参戦も数年ぶりらしいの」

「こりや客もぎようさん入りよるやろなあ」

専門的な用語は置いといて、要するに近々開かれるデュエルの大会に大物デュエリストが参戦するということらしい。

(ふむ…少々粗くなってしまいましたな)

挽いたコーヒー豆を見てそう思いながらも青葉はサイフォンで淹れる準備を進めた。今日も平和な午後のひと時が過ぎていく。

――

「あー負けました、お強いですね! ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

若い男性は座ったまま頭を下げると、素早く席を立った。

「次俺と戦ってもらえませんか!?!」

「いや、是非俺と!」

「次の次でいいので僕と!」

若い男性が席を立った瞬間、彼女とデュエルしようと他の客たちが迫る。

「ちよつと! 私のことをお忘れではなくて!?! 私もお相手致しますわ」  
彼女の隣に座ってた琥珀が机をバンツ! と叩き、その場に立ち上がる。

「私も良ければお相手になります」

綾芽も同調するように受け入れを表明する。

これがきつかけとなり、3人は夕方まで客たちと代わる代わるデュエルをするのであった。

「ふう、こんなにデュエルをしたのは中学生の時以来だわ」

夕焼けで赤く染まったカードショップからの帰り道、琥珀はそう漏らす。

「休みなく連戦でしたからね…」

綾芽もどこか疲れ気味だ。

そんな2人とは違い、彼女は普段通りに振る舞っている。いや、もし疲れていたとしても彼女はそんな素振りは見せないだけなのかもしれない。

（今日のデュエルを通して思い知りましたわ。私はデュエリストとしてまだまだ足りない部分が多いこと。小松さんはやはり優秀であること。そして、鈴瀬さんの実力が底知れないということ）

琥珀は今日のデュエルを振り返る。色々思うところがあつたようだが、1番の目標として

（でも、いつか鈴瀬さんに追いつき…いえ、追い越してみせますわ！）  
打倒彼女に燃えるのであつた。

## 6話 #9 「メタ」

――

『YOU WIN』

ノートPCの画面にエフェクト付きの文字が表示される。

「…」

今まさにそのノートPCを操作している本人だが、これといった反応もなく手を動かし続ける。部屋はわずかに夕日が差し込むだけで薄暗く、床にはマンガやゲームソフト等が無造作に積み重なっていた。

(まだ…もつと)

息をつく間も無く作業は続く。やがて画面が切り替わると、次の文字が表示された。

『DUEL START』

――夜

(うーん…違うわね)

琥珀は部屋でカードの整理をしていた。時折カードの効果を読んでは、どこかしつくり来ないといったような顔をする。

あの後、琥珀は2人とそれぞれ別れて帰路についた。日が沈まないうちに帰宅するのはいつものことだ。

(記憶力には自信あったんだけど、細かな所まではあまり覚えてないものね…)

ここでいう細かな所とは、『破壊と墓地に送る』や『時と場合』等といった同じようで似て非なる効果となっているデュエル特有のテキストのことである。

デュエルを複雑で難解なものにしている要因のひとつではあるが、このような細かな違いがあるからこそデュエルは奥が深く面白いのだ、と主張する人もいるとか。

ふと時計を見ると、食事の時間が迫っていたことに気付く。カードの整理に夢中になっていたようだ。

(あ、そろそろ夕食の時間ね。食堂に向かわないと)

――

綾芽はパックのオレンジジュースを飲みながらPCを操作する。

(あと1戦だけ…)

マウスポインタを動かして『START』をクリックする。

綾芽が先程からプレイしているのは『DUEL ONLINE』という名の通りのオンライン対戦型のデュエルソフトである。現状、唯一のオンラインデュエルが可能なソフトであり、プレイ人口も多いため24時間対戦相手には困らない。

今回も3秒経たないうちに綾芽の対戦相手が見つかったようだ。

綾芽は対戦相手の名前を流し見る。

(…えっ!?)

もう1度名前を見る、今回はしつかりと。

(『graybloom』…!)

綾芽はその名を知っていた。いや、綾芽だけでは知らない。この『DUEL ONLINE』のプレイヤーならば大半が知っている。

『DUEL ONLINE』の特徴としてランクというものがあり、基本的に勝率や勝数が良いほどランクが高い。

綾芽は名前の横に表示されているランクを確認する。同じ名前の別人や成りすましてないかの確認だ。

(ランクは…『S』!やっぱり本物!)

ランク『S』。世界中で何億人はいると言われている『DUEL ONLINE』のプレイヤーだが、ランク『S』のプレイヤーは現時点でたった数人しか存在しないとされている。

『DUEL ONLINE』のランキングを見ればランク『S』プレイヤーの情報は大きく表示されるため何人いるのか、どんなプレイヤーなのかかわかるようになっていいる。知名度が高いのも、このランキン

グによるものである。

なお、1つ下のランクである『A』は数万人以上存在するといわれている。

その『A』と比較した場合の異常ともいえる人口差に、『S』のプレイヤーの正体は運営に高額課金した金持ち、或いは運営のコンピュータに干渉しているハッカー、もしくは運営側の人物そのものではないかと噂されている。ただしいずれも噂に過ぎず、真相は不明である。ちなみに綾芽のランクは『C』だ。

(どうしよう、緊張してきた…)

毎日のようにプレイしている綾芽だが、ランク『S』のプレイヤーと対戦するのは初めてである。

(落ち着こう、大丈夫…)

綾芽は唾を飲み込み息を整える。画面が切り替わり、次の文字が表示された。

『DUEL START』

――

(プレイヤー、『Ryoga』)

(ID、\*\*\*…)

(デツキ、『ライトロード』)

『grayblom』は忙しくノートPCを操作する。『DUEL ONLINE』とは別のウィンドウを開き、それに表示された文字の羅列を書き換えていく。

(…完了)

手元を一切見ることなく驚異的な速度でキーボードを叩き続け、10秒もしないうちに作業が完了したのかウィンドウを閉じた。同時に『DUEL ONLINE』からデュエル開始を知らせる音が鳴る。(あ、始まる)

『DUEL ONLINE』のウィンドウを開きデュエルに備えた。

『DUEL START』

――

先攻は『graybloom』

『スタンバイフェイズ』

『メインフェイズ1』

『カードセット』

『カードセット』

『モンスターセット』

『エンドフェイズ』

デュエルのログが画面端に更新されていく。『DUEL ONLY』で行われたデュエルは全てこのように記録され、自分が行ったデュエルならば後から見返すことが出来る。

『ターンチェンジ』

『YOUR TURN』と画面に表示され、後攻である『Ryoga』にターンが回ってきた。

『ドロフェイズ』

『スタンバイフェイズ』

(手札は結構いいかも…)

ターンプレイヤーである『Ryoga』こと綾芽はどう攻めるか考える。

『メインフェイズ1』

メインフェイズに入った瞬間、『graybloom』はセットカードを発動した

『《マクロコスモス》発動』

(《マクロコスモス》!?!?でも、破壊はできる)

『《ライトロード・マジシャン ライラ》召喚』

『《ライトロード・マジシャン ライラ》効果発動』

綾芽は考えていた攻め方を変更し《マクロコスモス》を破壊しにかかるとは…

『《閃光を吸い込むマジック・ミラー》発動』

(!?!…光属性のメタカード…!)

『gray bloom』が発動したもう1枚のセットカードにより無効にされてしまう。2枚の永續罫カードにより綾芽は途端に身動きが出来なくなってしまう。

『エンドフェイズ』

『ターンチェンジ』

『ドローフェイズ』

『スタンバイフェイズ』

『メインフェイズ1』

(あの2枚の永續罫が厄介ね、今は次のドローに託すしか…)

『《A・O・J D. D. チェッカー》召喚』

『gray bloom』が召喚したモンスターを見て綾芽は「うっ…」と声が漏れる。

(まさか…)

『《A・O・J コアデストロイ》反転召喚』

2体並んだモンスターを見て綾芽は確信した。

そう、『gray bloom』のデッキは「A・O・J」だった。綾芽の使う「ライトロード」にとつて相性が最悪といってもいい、対光属性に特化したデッキである。

それだけでも厳しい戦いを強いられるのは目に見えているが、A・O・Jモンスターだけでなく、既に発動された2枚の永續罫の存在も綾芽を大きく縛る。

『gray bloom』の使うデッキは光属性モンスターや墓地利用に対するメタカードが多く入っていた。それはまるで対戦する綾芽のデッキが「ライトロード」だと知っていたかのように的確で無慈悲なデッキであった。

結局、綾芽は身動きが取れず2ターン後敗北を喫するのであった。

## 6話 #10 「それぞれの夜」

――

「あ？デュエルオンライン？」

夕食中、赤石は桜に言われたことを訊き返す。

「うん。さつきアイコからメールで教えてもらったんだけど、兄貴やってる？」

「ああ、前はよくやってたな。最近はあるまやあってねえけど」

「あとでやり方教えて」

「ああ」

――

綾芽は『graybloom』とのデュエルの後、軽い放心状態に陥っていたが、首を振って目を覚ました。

そしてPCを使って『graybloom』について検索する。とある掲示板サイトがひっかかり、そこ立てられた『graybloom part37』というスレッドを開く。

『227：絶対なんかイカサマしてるわ!!!』

『394：バーンデツキだったんだけどマテリアルドラゴンで完封されたわクソ』

『548：特殊召喚メタられて2ターンで終了でした』

『565：Re548：俺も3ターン持たなかったわ』

『588：つか運営の奴なんじゃねーの』

『602：引きこもりのオッサンだろ』

『641：木曜の午前9時に奴と当たったんだけど平日の朝からやっているとかニートかよw』

『654：Re641：ブーメランおつ』

『673：俺は夜中の4時くらいに当たったことあるぞ。ニート説は

ガチっぽいな』

『740：間違いなくどこからか対戦相手のデツキ覗いて対策してからデュエルしてるよな？これだけメタられるとか有り得んもん』

掲示板には様々な『graybloom』に関する情報が書き込まれていた。もつとも、情報と呼べるものは少なく大半が私怨や憶測に過ぎないものだが。

(対策してからデュエル…)

綾芽もデュエル後、薄々思っていたことと同じような書き込みが複数あり、自身の考えを確信へと至らす。

(やっぱり何かしてるのかな…?)

だが何かをしていたとしてもそれが何なのかはわからない以上話は進まない。綾芽にとってはいつもと同じネット上の誰かとのデュエルに負けた。それが最高ランクの有名な人だったってだけの話だ。

(…お風呂入ってこよ)

綾芽はパックのオレンジジュースを飲み干し、風呂場へと向かった。

――

桜はほとんどPCというものをいじったことがない。リビングに1台あるPCは現在、赤石専用PCと化していた。

そのPCを使って桜は赤石のサポートを受けながら『DUEL ONLINE』への登録とアカウント作成を済ませていた。

to桜

「登録したよ」

from藍子

「名前とID教えてー」

to桜

『『sakura』\*\*\*…』

藍子に名前とIDを記したメールを送ると、すぐに顔文字付きの了

解メールが返ってくる。

しばらく『DUEL ONLINE』内のチュートリアルやQ&Aを流し見ていると、唐突にメッセージの受信を知らせる音が鳴った。その音に桜は一瞬ビクツと驚いた後メッセージを開く。

from『藍』

「届いたかな？藍子だよー」

to『sakura』

「todoitayo」

from『藍』

「よかったー！って桜ちゃん半角になってるよ」

to『sakura』

「e」

from『藍』

「キーボードの左端上のキー押してみて」

to『sakura』

「なおった」

from『藍』

「おー！デツキまだ組んでないよね？組み方わかるー？」

to『sakura』

「まだ組んでない。なんとなくわかる」

from『藍』

「わからないことあったら聞いてねーデツキ組んだらこっちでもデユエルしよー」

to『sakura』

「うんありがとう」

メッセージのやりとりは一旦ここで終了する。

(試しに何か組んでみるか。えっと、デツキ編集は…)

その後、桜は軽くデツキ編集をして部屋へと戻った。

――

夜9時、彼女の家には1人の来客がいた。

日曜だというのに制服姿で通学用のかばんを持参してきたその客は、伏し目がちに座っている。

「ごめんね、愚痴聞いてもらっちゃって」

「ううん、気分は晴れた？」

「うん！ちよつとすつきりした」

そう言つて笑顔を作る来客、瑞希。何故瑞希がこんな時間に彼女の家にいるのか、それは30分ほど前に遡る。

彼女が部屋の片付けをしていた時、メールが彼女の携帯電話に着信する。差出人は瑞希だ。

from 瑞希

「いきなりごめん。今からそつち行つていいかな？」

to 麗梨

「いよ」

メールを返信した後、程なくして瑞希が来訪する。開口一番に涙声で彼女の名を呼びながら寄り掛かる瑞希を、彼女は宥めて話を聞いた。

話によれば父と弟の家族喧嘩から逃げて来たらしい。瑞希いわく喧嘩自体はよくあることなのだが、たまに激しくなつて手に負えなくなる時があり、そんな時は今日のように嵐が過ぎ去るまで避難するよ  
うだ。

普段から溜めこんでいたのであろう、瑞希の不満や愚痴を彼女はただ頷いて受け入れるように聞いていた。

「あの、れーりちゃん」

「なに」

「今日泊まつていってもいいかな？」

控えめにきいて彼女の顔を窺う瑞希。

「いよ」

彼女はそうきかれることを知っていたかのように即答する。

「ほんとに!?!」

「うん」

というより制服姿に通学用かばん持参の時点で彼女は予測していたのだろう。

答えを聞いた瑞希の表情が見る見る晴れていく。

「ありがとうー!れーりちゃん最高!」

「どういたしまして」

ー

『YOU WIN』

『gray bloom』のノートPCの画面に、とうに見飽きたであろうエフェクト付きの文字が表示される。

(一旦休憩しよう…)

ノートPCを閉じると、腹部からぐうーっと空腹を告げる音が鳴った。

(何か食べるものあったかな…)

『gray bloom』はゆっくりと立ち上がると、暗く閉め切った部屋を出た。

## 6話 #11 「2人の夜」

――同じ頃

黒川はとある建物の一室で通話していた。

「事情はわかったけどさ、だからってアタシにそれを頼みますか普通!?」

通話の相手は紫。

「適任だと思いがな。そこでも働いてるんだろ？」

「まーそうなんだけどさ…言つときますけど、立場上不利になるかもしれませんよ?」

「少しくらいなら構わないさ。それじゃ話は付けておく」

――

「瑞希」

彼女が不意に名を呼ぶ。

「なーに? れーりちゃん」

「おなか、すいてる?」

「すいてないよ! どうして?」

「そんな気がした」

「さつき食べてきたばかりだから全然――」

言葉の途中、瑞希の腹部からぐうーつと空腹を告げる音が鳴る。

瑞希は「あ…」と言って彼女から視線を逸らす。

「おなか、すいてる?」

数秒間の沈黙の後、彼女はもう1度問う。

「はい。喧嘩で食事どころじゃありませんでした」

瑞希は正直に答えた。

「ごはん、何か作る。待ってて」

「い、いいよ! 食くらい食べなくても平気だから」

「だめ。食べないと、いらいらしちゃう。体にも良くない」

瑞希はそこまでしてもらわなくてもいい、といった様子で止めるものの、彼女は振り返らず台所に立ち調理を始めた。

すぐに香ばしいにおいが漂ってくる。

「お待たせ」

彼女はおよそ10分で完成した料理をテーブルに置いた。メニューはご飯と味噌汁と鶏肉の生姜焼き。

「おいしそう……ねえ、ほんとに食べていいの？」

「うん。そのために作った」

「れーりちゃん……！」

瑞希の目元が滲む。不安や悲しみで冷えた心に温かく優しい気持ちで満ちていく。

瑞希は涙が垂れて来ないように目元を拭くと、

「ありがたく、いただきます！」

彼女の料理を食べ始めた。

「おいしー！やっぱりれーりちゃんのごはん最高！毎日でも食べたいくらいー！」

「ありがとう」

瑞希は元来よく食べる方である。空腹も相まって箸は止まらない。

「ご飯そうさまでした」

「おなかいっぱいになった？」

「うん！すごくおいしかったよ！」

あつという間に平らげてしまった。瑞希は食器を台所に持って行く。

洗い物を終えて台所から戻って来た瑞希はしばらくのんびりした後、彼女に話しかける。

「あの、れーりちゃん」

「なに」

「前からね、気になってたんだけど…れーりちゃんって1人暮らしなの?」

「うん」

瑞希は気になっていた。彼女の家には何度か遊びに行ったが、家中はいつも彼女が1人いるだけ。他に誰かと暮らしてるような気配も感じられなかった。

夜のこの時間でもやはり彼女が1人だけ。1人暮らしなのだろうと思いつつも瑞希は問う。

「そうなんだ…」

しかし瑞希はそれだけ訊いて、それ以上は質問しなかった。生活費はどうしているか等知りたいことは他にもあったが、今彼女の深いところに触れる勇氣は無かった。

「あ、そうだ」

瑞希は思い出したようにかばんから何かを取り出す。

「今日はいい勝負になると思うよー?」

瑞希が自信ありげに取り出したのはデッキだ。

「それは楽しみね」

彼女もカードとデッキを取り出すと、すぐにデュエルの態勢に入った。

「《剣闘獣ヘラクレイノス》で《墮天使スペルビア》を攻撃」

「ひー!」

「《ガーディアン・エアトス》でダイレクトアタック」

「あとちよつとだったのにー!」

「どんまい」

「うー、もう1回同じデッキで勝負!」

2人の時間が流れていく。

その後、お互いにデッキを変えたりして何度か彼女に挑むも、以前と同じくほとんど返りうちに合うだけだった。

「あーやっぱり勝てない！れーりちゃん強すぎ！」

瑞希は座ったまま上体を後ろに倒すようにして寝転ぶ。

(でも前よりは戦えたかな？あんまり変わんないか…)

瑞希が寝転んでリラックスしていると、ふと彼女が立ち上がった。

「どーしたの？れーりちゃん」

「お風呂、入る」

「お風呂…！」

瑞希は慌てて体を起こす。

(私もちよつと汗かいちやつたし入りたいな。…うん、ここはせつかくだし)

「あの！一緒に入っていいかな？」

「いいけど、狭いよ？」

「大丈夫大丈夫！気にしないよ！」

「じゃあ、おいで」

彼女は風呂場の手前にある洗面所へと向かった。瑞希も彼女の後ろをついて行く。

洗面所で服を脱ぎ一糸纏わぬ姿となった彼女の横で、瑞希は彼女に視線を向けては不自然に逸らしたり、といったことを繰り返す。

「どうしたの」

「ちよつと緊張しちゃって…あはは、女の子同士なのに変だよね」

「気持ちわかるかも」

「れーりちゃん先入ってて！私もすぐに入るから」

「うん」

瑞希に促され彼女は風呂場に入り、瑞希も少し遅れてから風呂場に入った。

6話 #12 「一夜」(R-15)

「かゆいところは無いー?」

彼女の長く艶やかな髪を慎重に泡立たせながら問いかける瑞希。

「ないよ」

「そっか、じゃあ流すねー」

泡に塗れた彼女の髪をシャワーで流していく。

洗い流し終えたところで交代、今度は彼女が瑞希の髪を洗う。

(あ、これすごく心地良い…)

繊細な指が織り成す丁寧な彼女の指使いに瑞希は気持ち良さそうに身を委ねる。同時にこの指使いによって彼女のこの髪があるというところが感覚的に理解できた。

「流すよ」

「うん」

「次は背中ね」

「はい」

髪を洗い流し終わると、手に石鹸を泡立たせ瑞希の背中を洗い始める。

(あー、洗ってもらうのって気持ちいいなー)

瑞希は背中に直に触れる彼女の手の感触を味わっていた。

「前も洗う?」

彼女は手を止め瑞希に問う。

「あ…いい、いいよ!前は自分で洗うね」

瑞希は一瞬迷ったが、自分で洗うことを選択した。

(さすがに前は自分で洗わないとね…ちよつと恥ずかしいし)

瑞希は体を洗い終え、先程と同じように彼女と交代する。

手に石鹸を泡立たせながら瑞希が見つめるのは彼女の背中。

(髪もそうだけど、体も綺麗でいいなー。こう、このラインが何とも…って何を考えてるのかな私は!?)

瑞希は首を左右に振り思考を切り替えると、彼女の背中を洗ってい

く。

「れーりちゃん、ほんと綺麗な体してるよね」

「そうかな」

「そうだよー。ちよっぴりうらやましいかな、私は部活やってるせい  
かちよつと筋肉質だし」

「でも瑞希のその引き締まった体は部活のおかげだと思う」

「そうかな?」

「そうだよ。健康的でわたしは好き」

「えへへ、ありがとー」

彼女の言葉に瑞希は気を良くする。

数分後、彼女も体を洗い終え2人は湯船に浸かった。

「何とか入れたね!」

「ギリギリね」

「あはは、長くは浸かれないかも」

彼女と瑞希は狭い浴槽内で向かい合って座る。身動きが取れない  
程ではないがあまり自由には動けない状態だ。

「あの、れーりちゃん」

「なに」

「や、えーつと…いい湯加減だね!」

「そうね」

瑞希はどこか不自然だった。これは風呂場に入る前の時とよく似  
ている。

「瑞希」

「は、はい!」

「ずっと見てる、胸」

いつの間にか瑞希の視線が彼女の胸に集中していた。彼女はそれ  
に気づき指摘する。

「え?あ…」

凝視していたわけではなく、どちらかというとな無意識的にぼーつと

見ていたようだ。鈍い反応がそれを物語る。

「ご、ごめん！ずつと見てた？」

「見てた」

数秒遅れて慌てて謝り、恥ずかしさからか瑞希の顔が赤くなる。

（うあー！気付かなかったよー恥ずかしい…！変に思われてないかな…？）

（…でも、やっぱりそういうこと、なのかな…？）

瑞希は自分の気持ちを探る。

「あの、れーりちゃん」

「なに」

欲望か好奇心か、はたまた別の衝動か。

「触ってもいいかな？そ、その…胸」

「い、いよ」

その正体は瑞希自身でもわからなかったが、彼女は拒まなかった。

彼女からの承諾を得て、瑞希は湯船に半分ほど浸かっている彼女の胸に手を伸ばす。

やがてその手は胸を捉えた。

（わー…柔らかい）

瑞希は感触を味わうように手を動かす。この状況でもやはり彼女は自身の胸部へと視線を落とすだけで感情は見せない。

手を動かしながら瑞希は口を開いた。

「ね、れーりちゃん変なこと訊くね？こんな風に誰かに触られたことってあったり、する？」

「直接触れたのは、瑞希で2人目」

瑞希にぶつけられた大胆な質問も彼女は躊躇わず答える。

「2人目なんだ…」

（1人目は誰なんだろう…やっぱり彼氏とかかな？そうだよね、れーりちゃんほどの子ならそういう人がいて当然だよね…でもどんな人なんだろう、気になる…かつこいい人なのかな？それとも頭が切れる人…）

瑞希は1人目の人物について考える。しかし彼女の次の言葉にそれらは吹き飛んだ。

「1人目はわたし」

「!...ふふっ、そっか。れーりちゃんらしいね」

瑞希は彼女の言葉を理解すると、笑みを零しながら答えた。

「ね、明日って体育あったっけ?」

「3時間目にあるよ」

風呂から上がった2人は就寝用の衣服に着替えてベッドに腰掛け  
ていた。

「何で1年だけ男の先生なんだろうね。2年3年は先生も男女で分かれてるのにさ」

「人手不足って聞いた」

「人手不足か...だとしても納得いかないな。私あの先生苦手なんだよねー、この前も赤石さんのこと『ろくでもない奴』とか言ってたし」

「...」

「まあそれはそれとして、今日の数学難しくなかった?途中から全然ついていけなくなっちゃって...」

「むずかしかった」

「だよねー!れーりちゃんでも難しいんだから私なんかにわかるわけないっての!...あーあこの先ついていけるかな...」

「大丈夫、ついていける」

「そうだといいな...ねえ、れーりちゃん」

「なに」

「わからないところ、また今度教えてね」

「うん」

2人は他愛もない話を続ける。そのうちにお互い眠気がきたようで、就寝準備をしてベッドに潜る。

「一緒にベッドでいいの?」

彼女の家には普段彼女が使っているベッドが1台あり、今そのベッドには彼女だけでなく瑞希も潜っていた。

「うんー！一緒がいいー！」

2人は向かい合った状態で会話をする。部屋の電気も消えてあとは眠るだけだ。

「れーりちゃん」

「なに」

「今日はありがとね」

「どういたしまして」

「もう寝る？」

「うん。おやすみ」

「おやすみー」

彼女は目を閉じた。瑞希は眠りに入ろうとする彼女の顔をじっと見つめる。

窓から差し込む月の明かりに照らされた彼女の寝顔はその美しい長髪も相まって神秘的な雰囲気醸し出していた。

瑞希はそんな彼女の顔に吸い込まれるように顔を近づけていく。少しずつ確実に。

止まらない。瑞希は目を閉じその時を待つ。

やがて唇が触れた。瑞希は心臓の高鳴りを感じながらゆつくりと目を開ける。

「それ以上は、だめ」

唇が触れたのは指だった。彼女は人差し指で瑞希の唇を制していた。

人差し指を挟んだすぐ先にある彼女の唇、そして目を半分ほど開けた彼女の穏やかな顔が瑞希の視界に映った。

「衝動に委ねないで。後悔しちゃう」

瑞希は我に返る。どこか不明瞭だった脳が徐々に冴えていく。

「あ…あっ…」

しかし言葉が出てこない。何か取り繕わなければと頭で思ってい

ても、瑞希はただ固まったように彼女を見つめていた。

そんな状態の瑞希を知ってか知らずか、彼女は瑞希を抱き寄せた。

「落ち着いて」

「れーり、ちゃん…？」

瑞希は彼女の行動に困惑するものの、彼女の体温を感じているうちに不思議と気持ちが悪く落ちていくのを実感する。

「おやすみの、おまじない」

その言葉に瑞希はまるで魔法をかけられたように彼女の腕の中で眠りに落ちた。

――

翌朝、瑞希は目を覚ます。起きた瞬間見慣れた家でないことに目を大きくするが、すぐに状況を把握した。

（そっか、昨日…）

体を起こし隣で寝息を立てている彼女に目を向ける。

（ふふつ、なんか不思議だね。れーりちゃんを見ると、今日も頑張ろうって気になれるみたい）

ベッドから出て制服に着替えると、持参した荷物をかばんに詰める。時刻は現在5時40分。

「れーりちゃん、ありがとう」

かばんを持った瑞希はベッドの前にしゃがんで、まだ眠る彼女に向かって小声でお礼を述べる。

そして立ち上がると、彼女の家を後にした。

玄関のドアが閉まり、瑞希が去って数秒後、

「どういたしまして」

彼女は小さく呟いた。それが寝言だったのかは定かではない。

【第6話 終】

## 7話 #1 「少し戻って」

ほんの1年前まで私、栗原藍子は1人だった。教室でクラスメイトたちの輪の外で静かに時を過ごしていた。いじめられてたわけじゃないけど、友達はいなかった。学校に行くのが嫌で、登校拒否していた時期もあった。

だから中学3年目も同じように過ごすものだと思っていた。これまでのように、ただ静かに。

「鈴瀬麗梨です。よろしくお願いします」

そう思って迎えた中学3年生としての登校初日、転校生として彼女がやって来た。今更転校生が来ようと私には関係の無いこと、と特に関心は無かった。

しかしそんな私ですら彼女の姿を見た瞬間は、大きく目を見開かざるを得なかった。

彼女が入室した途端、クラスの雰囲気が一変したことは今でもよく覚えている。この時私は、私のような輪の外にいる人間だろうが無関係に無差別に惹きつける強烈な魅力を持つ人間が存在することを知った。

彼女はすぐさま人気者になった。他のクラスの人たちにもその存在が知れ渡り、連日彼女の元には人だかりが出来ていた。私はそんな光景を遠くから観察しているだけだった。

しかし、それだけでも彼女という人物が周囲を取り巻く人たちと明らかに違うのが見て取れた。飛び抜けた美貌だけじゃなく彼女が持つ独特の雰囲気は、良くも悪くも彼女自身を取り囲む壁となって私たちの前に立ち塞がった。

壁は無意識に人を弾いて行き、1人また1人と彼女から離れていく。その存在はいっしか近付き難いものとなっていた。

気が付けば彼女も私と同じ1人。確かに1人だけど、私のように馴

染めなくてそうなってしまったのとは違う。転校してきた時と変わらず、彼女さはそのまま。私みたいに浮いてなくて、誰にも飲み込まれない確たる自分を持っていた。

1人になったといっても私のように全く話題にされることなく空間に融けてしまったわけではない。色気付いた男子たちはよく噂にしていたし、女子たちもたまに妬ましい目で見ていた。時折無謀にも彼女に告白した生徒が何人かいたみたいだけど私はよく知らない。

そして私も彼女もお互いに言葉を交わすことなく2学期の修学旅行を迎えた。

班分けは流れるように私と彼女が同じ班になった。他の班は男女3人ずつなのに対しこちらは2人、余り者同士というわけだ。別に私は何とも思わない：慣れてるから。でも彼女がどう思ってるかはちよつと気になった。

1人同士になったからといって私も、もちろん彼女も仲良くしようとはしなかった。だから修学旅行でも大して会話はせず、心に残る思い出も無く終えるものだろうと思っていた。

いつそ休んでしまおうかと思ったこともあったけど、班の女子が彼女1人になってしまうことを考えるとそれは出来なかった。たぶん彼女は休まないだろうし。

迎えた修学旅行当日。新幹線に乗り込み、指定された席に座る。

私の隣の席に腰を下ろした彼女が話かけてきた。

「栗原さん。3日間、よろしく」

「……ちーんそ」

私と彼女の初めての会話。このそっけない返事が彼女に向けた最初の言葉だった。

新幹線の窓から流れ行く景色を見つめる。景色を見たかったからというよりは通路側に座る彼女に視線を向けたくなかった。

結局宿に到着するまでお互い会話は無く、解散して客室へと入った。

「ふう…」

「疲れた？」

荷物を置いて一息ついた私に彼女がきく。

「うん…ちよつと」

「お疲れ様」

彼女はそう言つてにこつと軽く微笑む。

「あ…うん」

どう返事していいかわからなかった。軽い気持ちでもお礼を言えば良かったのだろうとは思つても実際に言葉に出来るかは別で、彼女と上手く会話できる気がしなかった私はただ小声で頷いただけだった。

程なくして夕食の時間が訪れた。それが終わると集会、そして入浴。部屋に戻つたのは午後9時だった。

部屋のドアを開けると彼女が先に戻っていたみたいだ。彼女は部屋の奥からドアの方を注視している。私が戻ってきてても視線1つ外さずに。

なんとなくだけど身構えているようにも見える。

「何してるの？」

軽い気持ちできいてみる。しかし返ってきた答えは想定外なものだった。

「わたしの財布からお金が抜かれてる」

「えっ…!?!」

「栗原さんも確認してみて」

かばんに入った着替えの服のポケットから財布を取り出し確認する。

（無い…!）

部屋に着いて確認した時点では1000円札が1枚と小銭が15円ほど財布に入っていたが、入ってたはずの1000円札が無くなっていた。

(何で…!?!風呂に行ってる間に抜き取られた…?)

私が記憶を辿っていると彼女が口を開く。

「だいじょうぶ、取り返す」

「取り返す、って犯人わかってるの!?!」

「うん、もうすぐ来る」

「もうすぐ来る、って…」

話について行けず、彼女の言葉を繰り返すばかり。

「先生に言った方がいいんじゃない?」

「それはもうちよつと、あとで」

彼女の意図がわからない。でも何故か彼女の言葉に疑問は思い浮かばなかった。こんな時でも変わらないいつもの彼女だからだろうか。

そして彼女の言った通り、数分も経たないうちに部屋のドアが開いた。

「ウチらに何の用?忙しいんだけど」

ドアを開け入って来たのは別の班の女子3人。タイプ的には素行が良くない方の人たち。特にそのうちの1人、椎名(シイナ)という女子は先生も扱いに困ってる問題児だ。

女子たちは機嫌が悪いというよりは面倒くさそうな顔をしてる。

「お金、返して下さい」

彼女は物怖じせず言い放つ。お金を抜き取った犯人という確信があるのだろうか。

「は?お金?盗んでねーけど」

「こいつ、うちらのこと疑ってるの?」

「何か証拠でもあんのか?」

椎名を先頭に彼女に徐々に詰め寄る3人。

「ボールペン型カメラって知ってますか?」

「あ？」

彼女はカーテンの影に隠れてた台のような所から黒いボールペンのようなものを取り出す。

「その名の通りボールペンの形をしたカメラのことです。もちろんカメラですからわかりますよ。誰が出入りしたのかも」

彼女の言葉を聞いて3人はたじろぐ。私はというとただ固まったようにやりとりを見つめていた。

「おい、まずくね？」

「センコーにチクられたら」

「大丈夫、見てなっつて」

3人のうちの1人、椎名が前に出る。

「ほーん、それじゃあバツチり写つてるってわけだ」

「はい、良く撮れてると思います」

「だったらそいつを奪えば証拠が無くなるってことだよ…な！」

椎名が彼女に飛びかかる。それとほぼ同時に

「栗原さん！」

彼女は慌ててボールペンを私に投げた。しかし私に届く前に別の女子にキャッチされてしまう。

「お、ナイスキャッチー」

既にキャッチされたボールペンに手を伸ばすが、私の小さな体では届くことなく制されてしまった。

「どれどれー」

ボールペンをキャッチした女子は外観を一通り見た後キャップを開ける。

「…え？何これ」

内部を確認した女子がどこか拍子抜けした声を出す。

「どうした？」

「どう見てもこれ、普通のボールペンじゃん。ほら」

キャップを開けたままのボールペンを椎名に見せる。

「…本当だ。どこにもカメラなんてねーな」

それはレンズもマイクも無く、普段から見慣れている何の変哲も無

いボールペンだった。

## 7話 #2 「勝って帰って」

「おい、ふざけてんじやねーよ!」

椎名は彼女の顔に向かってボールペンを投げつける。彼女は咄嗟に手で顔を守りダメージは防いだ。

「そんなもんで主導権取ろうとしたのか?」

「証拠も無いのに犯人扱いとかまじ勘弁して欲しいんですけど?」

「そうそう、呼び出した責任も取ってもらわないとねー」

証拠が無いと判明し、彼女が不利な立場になる。しかし彼女も引き下がらない。

「でもさっきのやりとりであなたたちが盗んだという確信が持てました」

「う…だからどうした!こちらが盗ったっていう証拠が無いだろうが!」

「はい。ですから勝負しませんか?」

「はい?勝負?」

「わたしが勝てばお金を渡してもらいます」

「だから盗ったっていう証拠がー」

「待て」

彼女と話していた別の女子の発言を椎名が制す。

「もし負けたらどうするつもりだ?」

「そのまま持つて行っても構いません。そして今後この件に関して一切追及しません」

彼女の答えに数テンポ遅れて椎名が軽く嘖き出す。

「…ぶつ、何が一切追及しません、だ。アンタは今勝負を提案した、金を手にするためのな。ならリスクを背負えよ」

彼女側からすると、人のお金を盗んでおいて何を言ってるのかという話になるが、椎名の論理も全く筋が通っていないわけではない。

取り返そうにも盗んだという確たる証拠が無いため、相手から取り返すのは厳しい。それなら勝負を提案し、その勝負に勝ってお金を得る形にしようとした。取り返すという考えは捨てて。

ただし勝負なので当然負けた時のリスクは有る。これはお金を盗んだ件とは別の、それ以前の話。彼女も椎名がそう言ってくるであろうと予測していたようだ。

「そうですね。どんなリスクがお望みですか？」

「そうだな…」

椎名は視線を藍子へとずらし考える。

「じゃあウチが勝ったらお前ら2人キスしろ」

「…！」

藍子は突拍子も無い椎名の要望に驚く。

「もちろんディープの方な。で、それ動画で撮るから」

「流石椎名、すげえの思いつくなー」

椎名の後ろの女子生徒2人はニヤニヤとする。

「栗原さんを巻き込まないで下さい」

「嫌なら勝負を受けないだけだ」

椎名はまるで選択の余地は無いと言わんばかりの態度で返す。

「…」

彼女は黙って椎名を見つめたままだ。そんな彼女の傍らで何か言いたそうに成り行きを見ていた藍子が静かに口を開いた。

「…鈴瀬さん、私なら気にしないで」

「栗原さん…？」

先程から椎名の態度の気に入らなかったのか、藍子は椎名に鋭い視線を飛ばし続けている。

「栗原は覚悟決めてるみたいだけど？」

彼女は藍子の顔をひと目見ると、

「…わかりました」

覚悟を決めた。

――

「で、勝負って何すんだ？」

「今考えてます。何か希望はありますか？」

「あ？じゃあすぐに決まるやつが…」

途中、椎名の脳裏にある物が浮かび上がる。

（待てよ？確か栗原の荷物探った時に…）

「おい鈴瀬、お前デュエル出来るか？」

唐突に椎名はデュエルを提案する。

「はい、できますよ」

「じゃあそれで白黒つける。10分後ウチらの部屋に來い」

「わたし、カード持ってません」

「あるだろ」

椎名は首を動かし藍子の方を差す。

「…私？」

（暇つぶしに持ってきたけど…何で知ってるの？やっぱりこの人たちが…！）

藍子の中に染まらず残っていた疑念が確信へと変わっていく。

「栗原さん、持ってるの？」

「う、うん。持ってるけど…」

「そういうことだ。遅れるなよ」

椎名たちは部屋を立ち去った。

――

勝負の内容が決まって私は彼女に持ってきたカード、およそ120枚全てを見せる。10分後には椎名の部屋に入っていないければならない。

しかし、彼女は慌てることなくデッキを構成するカードを選んでいく。まるで組むデッキがあらかじめ決まっているかのように。

結局5分もかからず彼女はデッキを組み上げた。

「栗原さん、ちよつと借りるね」

彼女は私の顔をひと目見ると、立ち上がって組み上げたデッキをポケットに仕舞う。

「行ってきます」

その言葉と共に彼女は部屋の外へと歩き出す。私も立ち上がり彼女について行こうするが、

「栗原さんは部屋で待つてて」

振り返った彼女に止められる。

「でも…」

「留守にしないほうがいいと思うの」

彼女は私の目を捉える。不安でいっぱいな私の目を、一切の迷いも見当たらないその目で。

「…うん。わかった」

私は彼女の目を信じることにした。

「お留守ばん、お願いね」

彼女は改めて部屋の外へと歩き出す。

「…気を付けてね」

私は彼女に聞こえないくらいの声を出して見送った。

――

「ただいま」

彼女が部屋に帰ってくる。

「おかえり…」

部屋を後にしてからだいたい20分、思ってたよりは早かった。

そして帰ってきて早々疑問をぶつける。

「勝負はどうなったの？」

その疑問に対して彼女は口角を上げて

「わたしの勝ちです。はい」

私に1000円札を差し出した。

「あ…ありがとう」

1000円札を受け取り、小さな笑みを浮かべる。

「どういたしまして」

「その、よく返してくれたね」

「勝負に勝ちましたので」

「…」

答えとしては少々ずれてるような彼女の返事に口より脳が動いた。  
（案外約束は守る人…？でも盗むのは良くない。つていうか何で鈴瀬さんは椎名たちが抜き取ったつてわかってたんだろう…？）

気になることは色々あるが、いちいち問うこともできず、私はひとまず彼女とお金が無事に返ってきたことに安堵した。

そして訪れる消灯時間。私も彼女も既にベッドの中だ。

「…ねえ」

彼女の方に寝返りをうち、彼女を呼びかける。

「なに」

「…ごめん。私何もできなかった。全部鈴瀬さんに任せちゃって…」

彼女に言いたかったことの1つを絞り出す。ほぼ全て彼女に任せってしまった。申し訳なさど無力感が今になって湧き上がる。

「気にしないで」

いつもの彼女の口調だけど、心なしか優しさを感じた。

「鈴瀬さんって、いつも冷静だよね」

「そうかな」

「私みたいに揺れ動かないし、流されたりしないっていうか…ちゃんと自分がくつきりしてる」

私が彼女に対して抱いていた1番の印象を口にする。適切な表現なのかはわからないけど。

「羨ましいし、憧れちゃうな…私は鈴瀬さんのように強くないから、すぐに崩れちゃうし自分を守るのに精一杯で」

「いざ何か行動しようと思っても周りの目を気にして怖がって、結局何もできなくて…そんな自分が嫌になっちゃう」

「…」

私の愚痴にも似たような言葉を彼女はただ黙って聞くだけだった。

「あ、ごめんねこんな話して…もう寝よっか」

寝返りをうち、目をつぶる。彼女の方から「おやすみ」と小さく聞

こえてきた気はするけど、自信が無かったの  
（おやすみ）

心の中で呟いて、眠りへと入った。

## 7話 #3 「休んで頼まれて」

――

修学旅行2日目、この日の予定は観光地の見学と周辺の散策。どちらも男子1班と女子1班がくっついて行動を共にする。

つまり私と彼女だけでなく、そこに男子1班分が加わって計5人での行動となる。

「今日一日、よろしくお願いします」

彼女は今日行動を共にする同班の男子生徒たち3人に挨拶をする。男子生徒たちとはという緊張しているようだ。

「よ、よろしく鈴瀬さん」

「…よろしく」

少し遅れて私も挨拶をする。

「ああ、栗原さんもよろしく」

なんかついでに、みたいな態度だったけど気にせず出発した。

――

「ふう…」

「疲れた?」

朝から歩きっぱなしだからか、足に疲労を感じ一息つく。悲しいことに疲れてるのは5人の中だと私だけみたい…

「うん…ちよつと」

「少し休もつか」

林道と言つていいかわからないけど、周囲は木々に囲まれていてちょうどいい木陰もある。休めるなら休んでおこう。

「トイレ行ってくるね」

「うん」

私が座つたのを確認してから、彼女はここに来る途中にあつたトイレへと向かった。

木陰で一休みしていると、同班の男子生徒たちが近づいてきた。

「あの、栗原さん！お願いがあるんだけど」

「…お願い？」

「鈴瀬さんと部屋一緒だよ？鈴瀬さんの裸とか下着姿の写真、撮ってきてくれない？」

「…はあ!?何言ってるの!?!」

あまりの発言に座ったまま柄にもなく大声を出してしまった。

「どうしてもダメか？」

「ダメに決まってるでしょ!」

「じゃあ鈴瀬さんに直接お願いする!」

「やめなさいよ!…っていうか本気で言ってるの?」

「本気だよ」

男子生徒は迷わず答える。その態度に私は情欲から来るものではないと判断した。

「…椎名さんたちに脅されてる?」

私の言葉に男子生徒たちは顔を背ける。やっぱりそんなところか。

「…必要なんだ、なるべく過激なやつが」

「あなたたちは脅しに屈するの?」

この言葉を機に男子生徒たちの顔色が変わった。

「栗原、お前さあ…」

「何?」

「クラスで浮いてるよな?何かあった時守ってくれるような友達いないよな?」

「…今更何なの?」

男子生徒の1人が私の手首を掴む。

「離して…!」

「だからどんなことをされても誰も助けに来てくれない」

「何する気!?!先生に言うからね…!」

「構わねえさ!うちの教師共は事なかれ主義だし、それにそんなもんが怖くてお願いなんか出来ねえよ」

冷静さを欠いて襲いかかってくるかと思いきや、男子生徒たちは案外落ち着いていた。

「…」

むしろその態度が私にとって怖いものだった。なんだか逃げ道を塞がれてるみたいで…救いを求めているような男子生徒たちの視線が強く私に訴えかける。

「なあ、頼むよ。俺たちを救うと思ってさ」

この状況から抜ける返事は私にとって1つしか残されていなかった。

「…わかった」

「そうか！じゃあ今日の夜までに頼むな！あんまり時間ねえんだ。これ俺の連絡先、ここに送ってくれ」

「うん…」

私はメールアドレスが書かれた紙をポケットに仕舞った。

――

「椎名さん」

トイレを終えてすぐ、彼女は椎名と遭遇する。椎名も一人で公衆トイレに来たようだ。

「鈴瀬か」

椎名は彼女を一瞥して構わず歩く。

「きいてもいいですか？」

椎名が彼女の横を通り過ぎようとした時、彼女が声をかける。

「何だ？」

椎名の歩みが止まる。

「何故栗原さんからも抜き取ったんですか？」

「そうした方が…いや、ウチがそうしただけだ」

「よく約束守ってくれましたね」

「どうせ本物があるんだろ？ボールペンカメラ」

「はい」

「カーテンの影が一瞬だけ2本映してたからな。ウチが約束守らなかつたら晒すつもりだったってわけだ」

「影は盲点でした。でもどうして気付いてないフリをしてたんですか？」

「気まぐれだ。それに気付いてないフリをしてたのはお前もだろ？」

「何でしょう？」

「ウチらが部屋に入ってくるってわかってたなら鍵かけて風呂に行きや良かったじゃねーか。何でしなかった？」

「椎名さんの望んだ流れにするためです」

「…なるほど、読んでたってわけか。食えねー奴だな」

「椎名さんこそ」

椎名は軽く鼻で笑う。

「栗原も変な奴と同じ班になったな。金失った挙句、勝負に負けてたら晒し者だ」

「でも勝ちました」

「予定ではウチが勝つはずだったんだがな」

昨晚、彼女は椎名とデュエルをした。特に変わったルールも無い通常のデュエルだ。

しかし、このデュエルにはイカサマが仕掛けられていた。彼女の死角に設置された手鏡、椎名の同班の女子生徒がそれを元に椎名に情報を伝える仕組みがあった。椎名が自らの部屋に招いたのも、この仕組みにより勝ちを手にするためだろう。

椎名は当初このイカサマでデュエルを優位に進めていた。だが椎名は気付いてしまった。彼女がイカサマをされていると知りつつもデュエルを進めていることに。

気付いたその瞬間から情報を伝える女子生徒2人を制した。ばれているイカサマを自ら封じた。

イカサマに頼っているといずれ自分の首を絞めることになる。既にばれているなら尚更だ。椎名はそれ以後、イカサマ無しでデュエルを進めた。対等である方が勝てる望みがまだ高いからだ。ただ結果

は知つての通り、彼女の勝利で終わった。

椎名は約束通りお金を彼女に渡した。女子生徒2人は彼女にイカサマがばれていることも知らず、イカサマを封じて負けた椎名に納得していない様子だったがこの結果に渋々従った。

「…で、いつから見抜いてたんだ？」

「何にですか？」

「けっ、今更とぼけやがって。…それより」

「何でしょう？」

「栗原を1人にしない方がいい」

椎名はそう言うのと再び歩き出し、トイレへと入った。

――

「お待ちせ」

「お帰り」

彼女がトイレから帰ってくる。男子生徒たちはというと何事も無かったかのように談笑していた。

無論、私も平静を装う。心は不穏ながらも。

「もう休みはいい？」

彼女は立ち上がってる私を見て問う。

「うん、もう平気」

「じゃ、行こっか」

私たちは再度出発した。

## 7話 #4 「迷って現れて」

――

やがて2日目の夜を迎えた。

夕食を終え、これから入浴の時間。浴場の構造や環境を考えても、携帯電話を忍ばせて撮ろうと思えば撮れる。シャッター音にもまらず気付かれない。でも：

「…」

脱衣所で携帯電話を見つめる。迷った末、浴場には持ち込まないことにした。

ここは見つかった時のリスクが大きすぎる。わざわざ浴場でなくても部屋で撮ればいい。裸は撮れないけれど、過激という意味ならそれに限らないはず…

私が下した決断は従うわけでもなく、翻るわけでもなく先送り。今はそうするしかなかった。

(どうしよう…)

部屋に戻ってから何か動くということはなく、悟られないように時折彼女の方をチラチラ見るだけ。話すことも、もちろん撮ることもできなかった。

脅しに屈するの？と言っておきながら私自身も揺れているのだから情けない。

そんな私の心情をよそに彼女が立ち上がる。

「先生のところに行ってくるね」

「うん…」

彼女はそう言い残し部屋を出た。

――

彼女たちの泊まっているホテルは山道の途中にあり、夜になると周

辺一带は一気に暗くなる。徒歩5分圏内はともかくそれ以上歩く場合は懐中電灯が必須だ。

そんな場所だからか夜に外出する人は少なく、自然と教師たちの見張りも緩くなっていた。

ホテルから少し離れた山道のはずれ、何人かの生徒が話している。

「なあ、撮ってくると思うか？」

「さあな、結構圧力はかけたんだけどな」

「おいおい、うちの考えた作戦無駄にするなよ？」

「大丈夫だって、俺らも結構上手く演技したしき。ところで椎名は？」

「部屋にいるよ。わざわざ行くまでもないってさ」

話してる生徒の内訳は、今日彼女と同じ班だった男子生徒3人と椎名たちの班から椎名を除いた女子生徒2人の計5人だ。

「なんだそりゃ」

「まー椎名抜きでもいいじゃん」

「ってかそろそろ送ってくれないかな、もう夜も遅くなってきたし」

「あいつの弱みになるような物じゃないと意味ねーからな？あんたたちもそっちの方が欲しいだろ？」

「こればかりは運だな。角度や画質の問題もあるし」

「いい画像だったらしばらく使わせてもらおうかなあ」

――

彼女が部屋を出てから20分以上が経過した。

「…」

(胸騒ぎがする…先生のところに行ってくるって言ってたけど、どうなんだろう…:とつかこんな時間に先生に呼び出されるっておかしいよね?)

私の中の嫌な予感時間は時間とともに膨れていく。

(確認してみよう。確か部屋番号は…)

そして急かされるように部屋を出た。

(この部屋だよね)

ドアの前に立ち、ノックする。

「誰だ？」

「栗原です。少し訊きたいことがあって」

「開いてるから勝手に入れ」

「はい」

了承の返事を得て部屋に入る。

「椎名さん…」

「何の用だ？」

「鈴瀬さん知りませんか？もう20分以上部屋を出てったきり帰ってこないんです」

「知らねーよ」

「そうですか…」

(椎名さんのところじゃなかった…)

部屋を見回す。今この部屋にいるのは2人だけのようだ。

「あの、他の2人は？」

「さあな」

そつげなく答える椎名。その様子から同班の2人に関心が無いように見える。

「さあな、って…本当に知らないんですか？」

私は語気を強めて問う。

「鈴瀬は知らねーけど…」

椎名に強い視線をぶつける。直接関係は無かったとしても何か知ってるはず。

「あいつらならホテルの外だ」

「外…!？」

「ああ…何だよ？」

私は尚も力強く椎名に視線をぶつける。

「椎名さん、お願いがあります」

――

「おい、まだかよ」

「おかしいな…」

「ちよつとまずくね」

生徒たちに焦りや怒りが見え始める。時間的にもそろそろホテルに戻らなければ教師に気付かれてしまうだろう。

「どうする？お前栗原のアドレス知ってるか？」

「いや知らん、俺のアドレス渡したただけだし」

「もう戻ってウチらが栗原のところ行くわ」

女子生徒がホテルへと戻ろうとした時、

「そういうことだったんですね」

暗い木の陰から声と共に彼女が姿を現した。

「鈴瀬!」

「お前、いつからいたんだ!」

彼女はゆっくりと生徒たちに近付く。

「うちの話、どこまで聞いてた？」

「あなたたちの話を完全に理解できるくらいには」

そして生徒たちの顔を視界に捉えると、立ち止まった。

「なあ、俺たちやばくね…?」

「何でここがばれたんだ…!」

怯えながら彼女を見る男子生徒たちとは対照的に、女子生徒の1人が笑いながら言った。

「ハハハ、何びびってんだよ。むしろ今、この状況でやばいのは鈴瀬の方じゃないの」

この女子生徒の言葉で男子生徒たちから怯えが消える。

「暗い夜道に女が1人、あんたたちにとってはいいいサじゃない？」

「俺らは獣かい」

「獣だろ。画像欲しがってたし」

男子生徒の1人が彼女ににじり寄る。

「でもそうだな。どうせ全部聞かれてんだ、行くところまで行けばいいんじゃない？」

「鈴瀬、逃げるなら今のうちだぞ？」

徐々に彼女との距離を縮める男子生徒たち、しかし彼女は逃げも隠れもしない。

「…」

## 7話 #5 「終わって呼んで」

「早く襲っちゃいなよ。撮る準備は出来てるからさ」

女子生徒が携帯電話を彼女の方に向けながらけしかける。

「…悪いな」

男子生徒の1人がそう呟いた後、彼女を突き飛ばす。

「っ…っ…」

彼女は尻餅をつくが、地面は土なので衝撃は少ない。

「なあ、おとなしく脱いでくれねえか？そうすればこれ以上は何もしねえから」

男子生徒側からすれば、彼女の画像が欲しいだけで直接体を欲しているわけではない。いや、欲しいのは欲しいだろうがそんな度胸も欲深さも持ち合わせてはいない。それらしい口ぶりではあるが。

「逃げませんし、脱ぎません」

ただ彼女からすればどちらにしる同じこと。

「は？じゃあ何でのこのこ現れた？」

女子生徒は彼女の行動の意図を分かりかねる。

「まさか戦う気とか？」

「おおそりゃ怖えな」

余裕の表情を見せる男子生徒をよそに彼女は立ち上がり、尻についた土を手で掃う。

「…」

彼女は答えない。澄ました顔で男子生徒たちを見つめる。

「戦う気ならしようがねえなあ」

「ま、手加減はするよ」

男子生徒たちが戦闘態勢に入り、彼女に飛びかかろうとしたその時

「鈴瀬さん！」

ホテルの方向から何者かが走ってくる。

「!?…誰だ！」

全員の視線が声の元へと集中する。やがてその何者かの顔を視界

に捉えた。

「栗原!？」

「はあ…はあ…」

慌てて走ってきたのか声の主、藍子は膝に手をついている。

「鈴瀬といい栗原といい何でここがばれてんだ？」

「つてか栗原、お前1人で来たのか」

男子生徒は藍子が走ってきた方を見回すが、人の気配は無い。

「…わからん、何で1人で来るんだよ」

「はあ…私の言うことなんて、誰も信じないから。それにまだ間に合うと思ったから…はあ…」

藍子は息を切らしながら答える。

「間に合ったところでお前1人で何ができるつてんだ？」

「鈴瀬さんは、私が守ります」

藍子のかばうように彼女の前に立つ。

「あのなあ…なんかシラけてきたわ」

「どうするよ？逃がすか？」

「いやいや、こいつらにうちのらことチクられたらやべーだろ！弱みの1つや2つー」

「その必要はない」

女子生徒の言葉を遮るように暗闇から声が届く。

「！…この声は！」

その声の主が暗闇の中からゆっくりと姿を現した。

「椎名…！」

(椎名さん、来てくれたんだ)

椎名の顔を見た女子生徒たちの顔が強張っていく。

「心配しなくてもこいつらはチクんねーよ。先公に言ったところで証拠もねーし有耶無耶にされるだけだ。それより…」

パシーン！

「いっ…！」

椎名が女子生徒にビんタを浴びせる。

「お前らが何をしようと勝手だけどな、同じ班のウチまで迷惑被るよ  
うなことするんじゃないよ」

(…あれ? その口ぶりだと、もしかして椎名さん無関係…?)

「でもよ椎名! 悔しくねーの!?!」

ビんタされた女子生徒が食い下がる。

「別に。あれは終わったことだろ。んなことよりさっさと戻るぞ」

椎名の答えはあっさりしていた。これには女子生徒も返す言葉が  
無い。

「おい、お前ら」

椎名は男子生徒たちを呼ぶ。

「ウチに迷惑かけたことは許してやる。先公に気付かれる前に戻れ」

「は、はい!」

椎名を含む生徒たちは急ぎでホテルへと戻って行く。

「鈴瀬さん、私たちも戻る」

彼女と藍子も少し遅れてホテルへと戻っていった。

結局、お金を取り返すために行った椎名とのデュエルも、彼女を撮  
るように藍子を脅したこの件も外に漏れることなく終結した。

後者についてだが椎名は関与しておらず、椎名が聞き出したところ  
によると女子生徒2人が男子生徒3人と共謀したものと判明。  
彼女と藍子は修学旅行中に訪れた2度の危機を乗り切った。

――そして就学旅行2日目の夜、消灯直前。

「…ねえ」

彼女の方に寝返りをうち、彼女を呼びかける。

「なに」

「体は大丈夫?」

「うん。栗原さんが守ってくれた」

「私は何もしてないよ。椎名さんが来てくれなかったら…」

私があの時椎名さんにしたお願いは女子生徒2人の居所を教えて欲しいというものだった。椎名さんに案内して欲しいとまでは言わなかった。

「わたしのために、駆けつけてくれた。ありがとう」

「い、いえ…どういたしまして」

彼女からのお礼の言葉に不意を突かれ、声が尻すぼみになる。

「だけど鈴瀬さん、私に嘘ついてまで1人で行くなんて危なすぎるよ…」

「そうね、無謀だった」

彼女のことだから1人でも何かしら手は打ってたと思うけど…暗い夜に女の子が1人はやっぱり危ないよね。

「鈴瀬さんは何でも1人でしちゃうよね」

せつかくなので以前から訊いてみたかった質問を投げかける。

「その、さ…1人でも寂しくないの?」

「さびしくないよ」

言い切るところに彼女の強さを感じる。

「そっか…強いね」

「でも、ひとりだと感じてしまったら、さびしい」

そして同時に、弱さを見せるところにも。

「…なんとなく、わかるかも」

私自身の場合は、ずっと1人で中学生生活送っていたから気が付けば…寂しいと思う時自体減っちゃってた。

「今はさびしくない。ひとりじゃないから」

「えっ、それって…」

彼女は真っ直ぐな瞳で私を見つめて

「大切な友達が、そばにいる」

顔を綻ばせた。

――

修学旅行3日目。この日は特にこれといった行事は無く、朝食を済

ませた後は荷物をまとめて帰るだけだ。

「んー…」

目を開けて体を起こす。昨夜の疲れがまだ残ってるのか体が若干重く感じた。

「おはよう」

彼女が私の起床に合わせて挨拶をする。

「おはよう、鈴瀬さん」

「麗梨」

「…え？」

半分目を開けたまま間抜けな声を出す。

「名前で呼んで欲しいな」

「じゃあレイちゃん…あ」

寝ぼけながら発した言葉に、はつとなり目が覚める。彼女への呼び方か、または私の仕草かに彼女がクスツと笑った気がした。

「はい。これからはレイちゃんです。おはようアイちゃん」

早速2度目の挨拶。これはたぶん、レイちゃんとしての挨拶。

「アイちゃん…って私のことだよね？」

「うん」

なんだかむず痒い。まだ冴えていない頭でも恥ずかしさを感じる。

「おはよう…レイちゃん」

挨拶を返すと、彼女は嬉しそうに微笑みを見せた。

## 7話 #6 「週の始まり」

――

帰りのことはあまり覚えていない。朝食を食べてお土産を買ったところまでは覚えてはいるけど、帰りの新幹線ではずっと寝ていたし印象に残るような出来事も無かった。

「ただいま」

「おかえり、おねーちゃん」

妹が出迎えてくれる。

「旅行どうだった？」

「楽しかったよ。はいお土産」

妹に買ってきたお土産を渡す。

「わーい、ありがとう」

妹はひとしきり喜んだあと私の顔を見上げてくる。

「おねーちゃん、何かいいことでもあったの？」

「うん？どうして？」

「うれしそうな顔してる」

「そうかな？」

「どうやら自分でも気付かないうちに嬉しそうな顔をしていたらしい。」

理由があるとしたら一つ。それはもちろん…

「そうね。確かにいいこと、あったよ」

大切な友達ができたことだ。

――

この修学旅行をきっかけに私と彼女との仲は深まっていった。休日には遊びに行ったりデュエルをしたり、時には勉強を教えてもらったりもした。

また、彼女と接するうちに私自身の性格も変わっていったような気

がする。暗くネガティブな部分が少しずつ薄れていき、明るく活発で笑顔もよく見せるようになったと思う。

高校に進学しても彼女と一緒に楽しくやっていけそうだと思った。彼女は桐縹高校に進学するようで、もちろん私も桐縹高校志望だった。

しかし1つ問題があった。ただでさえ休みがちな上に不登校の間も長かったのがいけなかったのか、この先のテストでどれだけ良い点をとろうと桐縹高校への進学は非常に厳しいものとなっていた。

目標とする高校に進学できない。以前の私なら厳しい現実に落ち込んで後悔の念に苛まれていただろう。けれどもう私はあの頃の私じゃない。

たとえ彼女と別の道を歩もうとずっと友達であることに変わりはないし、1人でも乗り越える力を身に着けた。どこに進んでも私らしく生きていく。

そして私はその強い想いを胸に桑鴉高校へと進学した。

――

「ただいまー」

瑞希は朝、学校へと向かう前に自宅に寄った。

「はあ…」

帰宅早々、物で散らかったりリビングを見てため息を吐く。

それらは昨夜の爪痕。散らかした当事者たちは静かに寝息を立てている。

静まった後、片付けるのはいつも瑞希の役目だ。

瑞希は現在、気性の荒い父親と反抗期真っ盛りの弟と共に暮らしている。この父親と弟、相性は悪く無いはずなのだが頻繁に衝突しては殴り合いの喧嘩をする。

その場に瑞希がいれば仲裁に入り、だいたいの場合には収まるのだが話を聞かないレベルにまでヒートアップしていると、瑞希の手には負えなくなることもある。

ただ、どんな大喧嘩をしてもお互い翌日になれば何事も無かったかのように接するためほとんど尾を引かない、という意味ではさっぱりしている。

手早く片付けを済まし、荷物を整え朝食と弁当を作る。自分を含めた家族全員の分だ。瑞希にとつての日課である。

(今から朝練は気が滅入るなあ…)

あまり気分が浮かない中朝食を摂っていると、弟が髪を掻きながらリビングに現れた。

「姉ちゃん帰ってたのか」

「おはよ」

弟はどこかばつが悪そうにして瑞希と目を合わせない。きつちりと朝までに帰宅し、片付けをして食事を用意する姉に頭が上がらないようだ。

「今更言うのもあれだけど、あんまり散らかさないですよ?」

「ああ、わかってるよ」

目を合わせないまま手応えの無い返事をする弟。おそらくは改善しないだろう、いつものことだ。

時間もあまり無いので構わずとつと朝食を済ませ学校へと向かった。

――

「蒸し暑くなってきましたが、暑さに負けることなく学校生活を――」

体育館の檀上で生徒会長である琥珀が話を続ける。毎週月曜日の朝に行われる全校集会だ。

(うー暑い…!)

整列された集団に交じって話を聞いている瑞希は朝練を終えた直後ということもあり、周囲の生徒と比べると結構な量の汗が滲んでいた。

斜め前に位置する彼女へと視線を移す。彼女はというと気温に反

して涼しい顔をして檀上の琥珀の話を聞いていた。

――

「今週からバレーボールをやる。準備するように」

体育の授業。今から行う競技と同じ、バレーボール部所属の瑞希が率先して準備をする。

「あとは各自チーム分けをして、終了5分前になったら片付けするよ  
うに」

バレーボール部所属でありながら瑞希は特に目立った動きはせずサポートに徹していた。しかし目立たないながらも、そのしなやかで手慣れた動きは一般の生徒とは明らかに差があった。

瑞希と同じコートにいる彼女を注視していた教師も「ほう」と唸る。  
(準備室で見た時は気付かなかったが、あれは相当引き締まってるな。  
あの背丈といい顔といい、中々いいもの持つてるじゃないか)

――昼休み

「あ…赤石君」

琥珀が生徒会室へと向かう途中、廊下で赤石と遭遇する。

「ああ、椽か」

前日のことがあつてか琥珀はどこか気まずそうだ。

「その、昨日は本当にごめんなさい」

「だからいいって、気にしてねえよ」

「これ、受け取って。お詫びの気持ち」

琥珀は制服の内ポケットから嚴重にプラスチックケースに保護されたカードを1枚取り出す。

「あ？何だこれ…」

赤石は受け取るとケースを反転させカードの表面を見た。

「！…こいつは、『ホーリー・ナイト・ドラゴン』じゃねえか！しかも

「最初期の」

「あら、ご存知でしたの？」

《ホーリー・ナイト・ドラゴン》、知る人ぞ知るレアカード。特に最初期フォーマットのこのカードは流通量も少なく非常にレアである。

赤石が受け取ったのは最初期フォーマットの方だ。その上保存状態が良いのか傷一つ見当たらない。

「いいのかよ、これかなりの値がつくんじゃ…」

「コレクターカードは使わないから…幼い頃から持ってたから思い入れはあるけれど、その方がお詫びとしてはいいかなと思って」

赤石は迷う、果たして受け取っていいものか。

「気にしないで受け取って。私はこれから生徒会長としての仕事があるの、じゃあね」

琥珀は半ば押し付ける形で赤石にカードを渡すと、早歩きで生徒会室へと向かった。

「…」

(強引だな…俺もコレクターカードを集める趣味は無えんだが。まあ、ありがたく部屋にでも飾っておくか)

——同じ頃、桑嶋高校1年男子トイレ

「なあ、お前らのクラスで可愛い奴いる？」

「ああ？何だよいきなり」

「いやさあ、俺のクラスめぼしい奴がいなくてさ」

「そうだなあ…俺のところは赤石がいるな」

「赤石か。って名前どつかで聞いたことあるな」

「兄貴の方が有名らしいぜ。何でもケンカが物凄く強えとか」

「そうなんか。じゃあちよつと手は出しにくいな」

「俺もあんまり知らねえけど、あんな妹がいる兄貴が羨ましいぜ。毎日風呂上がりとか見放題なんだろうなあ…」

「ああそう…お前のところは？」

「俺のところは、誰かいたっけな…あ、椎名がいたわ」

「椎名かあ…あいつ性格きついんだってな」

「まあ、ひとことと言おうと自分勝手つてやつだな。あと口も悪い」

「椎名つていやあ、色々やばい噂があるみたいだぜ。葉やってるとか援してるとか」

「げっ、可愛くてもそれは嫌だな…」

「ま、どっちにしてもお前は相手されねえからやめとけ」

「うるせえ。ああー彼女欲しいなあー」

## 7話 #7 「遭遇と再会」

――放課後

(ん？あの子は…)

学校からの帰り道、赤石はつい昨日見知った顔と遭遇する。

「あ、おにーさん」

自転車に乗ってた女の子だ。正確に言えば自転車から転んだ所を赤石が助けた子である。

ランドセルを背負っていることから今は下校中のようだ。

「おう。体は大丈夫か？」

「うん、おかげさまで。…あ」

女の子は何かを思い出したようにポケットから、折り紙の花を取り出すと、

「これ、おれいです」

赤石に手渡した。ポケットに入っていたため若干曲がってはいるが、全体的に丁寧で整っている。

「お、綺麗だな。ありがとな」

「いえいえ、また今度会ったらあげるね」

赤石が笑顔を見せると、女の子は誇らしげに答える。

「ばいばい、おにーさん」

「ああ。じゃあな」

赤石は折り紙の花をポケットに仕舞った。

――

「赤石先輩」

「ん？レイリか」

赤石は女の子と別れた後、程なくして彼女と遭遇する。

「奇遇ですね」

「そうだな…」

赤石は一瞬視線を泳がせる。先日のタツグデュエルの時とは違う彼女の姿に少々違和感を覚えたようだ。とはいえ見慣れているのはこちらの方なのですぐに適応した。

「今からお帰りですか？」

「ああ」

「お買いもの、一緒にどうですか？」

「買い物？」

「はい」

この後、赤石に予定は無い。また、彼女の言う買い物に興味は湧いたということもあり

「ああ、一緒に行くか」

買い物に同行することにした。

「――デュエルハウス「ナチュル」

「なるほど、それがシンクロ召喚つてやつか」

学校からの帰り、桜と藍子はナチュルにてデュエル談義に花を咲かせていた。

「でも肝心のシンクロモンスターがねーんだよな」

「じゃあ私のエクストラデッキ貸してあげる。1回コーナー入れてデュエルしてみようよー！」

「お？それは助かる。組み直すからちよつと待っていてくれ」

「――」

「それだけで良かったのか？」

「はい」

買い物からの帰り道、赤石が問う。彼女が買ったのは今日発売のパズル専門誌。彼女曰く、大きな書店でのみ取り扱っている書籍のようだ。

「パズル好きなんだな」

「はい、好きです」

「そうか」

（レイリのことだから、難問でもスラスラ解きそうだな）

「赤石先輩はパズル好きですか？」

「あーパズルによるな。クロスワードとかは結構好きだ」

「クロスワード、わたしも好きです」

「あとは詰めデュエルなんかもたまにやるな」

「たまにすごく難しい問題ありますよね」

「あるな。俺もいくつか解けなかった記憶がある」

「今度、問題出しましょうか？」

「…遠慮しとく」

（レイリの作った問題とか解ける気しねえからな…）

――

「どう？シンクロ召喚はもう覚えた？」

「ああ、だいたい覚えたよ。中々楽しいな」

「じゃあ次来た時はエクシーズ召喚を教えてあげるね」

ナチュルからの帰り道、桜と藍子は今日行ったデュエルを振り返っていた。

「あ…！」

夕焼けで染まりかけた町をしばらく歩いたところで藍子が立ち止まった。

「どうしたんだ？」

藍子は前方を横切ろうとした人物を呼び止める。

「修せんぱい！」

その声に気付いた赤石は立ち止まり、呼ばれた方へと向く。

「お？藍子ちゃんか」

「はい！奇遇ですね」

藍子はニッコリと笑って返す。

「ああ。って桜も一緒だったのか」

「さつきまで桜ちゃんとデュエルしてたんです」

「ほう、藍子ちゃんの相手になってたか？」

「失礼な、あたしだってそれなりに戦えるようにはなったよ」

「桜ちゃんは覚えが早くてー」

藍子は赤石の横に並んでいた何者かに気付く。

（修せんぱい、友達と一緒に帰ってたのかな？）

先程まで手前側の赤石の影になって見えなかったが、藍子はその姿には見覚えがあった。

（…え？あの長い髪はもしかして…！）

「ところで兄貴、隣にいるのは…」

「ああ、この子はー」

赤石が答える前に藍子は彼女の名を呼んだ。

「レイちゃん…！久しぶり！」

彼女も藍子の方を向いて微笑む。

「久しぶりね、アイちゃん」

## 7話 #8 「世間ってやっぱり狭い」

――

「椎名、今からカラオケ行くんだけどお前も来いよ」

「あ？ああ」

放課後になって間も無く、クラスメイトから誘いを受ける。断る理由も無いので行くことにした。

「それでさー」

「マジ？ヤバイうけるー！」

「キャハハハ！」

カラオケに行く道中、クラスメイトたちは甲高い声をあげながら楽しそうに盛り上がる。

話の内容はどうってことないくだらないものだ。何がそんなに面白いのかウチには解りかねる。

「椎名もそう思うよな？」

不意に流れ弾が来た。

「あ？そうだな」

何の話か全然聞いてなかったが、とりあえず同意しておく。

「だよねーキャハハハ」

だから何がそんなに面白いんだ。中学の時からつるんでる奴もいるが、誰ひとり何ひとつ成長してないように見える。ウチもそのひとりかもしれないが。

「つかさあ、有り得ないよねー」

まあ、桑嶋に進学する奴らのレベルなんてこんなものだろう。わかってたことだ。

――

藍子が彼女との再会をひとしきり喜んだ後、4人はファーストフー

ド店に来ていた。

「会うのは卒業式以来だね！」

「うん。ちよつと懐かしい」

「レイリと藍子ちゃんが中学の同級生だったとはな」

「レイちゃんとは同級生で親友です！」

藍子は誇らしげにはつきりと言い切る。

「私としては修せんぱいがレイちゃんと一緒に歩いてたことに驚きました。もしかしてそういう仲でしたり…？」

「い、いやレイリとはそんなんじゃないよ」

赤石は咄嗟に否定する。彼女はというといつものように動じることなく話を聞いている。

「まだ違うんですね」

「まだ、って何だよ…」

（でも、名前で呼び捨てって親密な感じがします。まずは私もそこからかな？）

藍子はほんのちよつぱり彼女に対抗心を抱いた。

（鈴瀬麗梨…確か兄貴に負けたってというのは）

彼女の噂は既に桑鴉高校にまで広まっていた。赤石を負かした桐縹の1年生、から情報が始まり数日もしないうちにそれが彼女だと知れ渡った。

（ん？待てよ、土曜日の兄貴の服装から考えると）

桜の中で線が繋がっていく。

「なあ、鈴瀬」

静観を貫いていた桜が口を開いた。

「何でしょう？」

「…」

彼女の名を呼んだものの桜は言葉を発さず観察するようにじっと見据える。

（ただ顔が良いだけじゃない。この引き込まれそうな目、その目から何事にも揺れ動かなさそうな強い意思を感じる。たぶんだけど、兄貴

と同じ：修羅場を潜り抜けてきた人間だ）

（あ、以前アイコが言っていた中学時代の友達ってこの子か。ミステリアスな雰囲気の子：なるほど、一言で表すとそうだな）

彼女も言葉を発さない。桜が自分を観察していることをわかってる上で、ただ桜を見つめ返す。

「えっと…どうしたの？」

そんな2人の状況を困惑しながら窺っていた藍子が口を開いた。

「…いや、何でもない」

桜は視線をテーブルに戻し、先程注文したドリンクを啜る。

（まあ、そういう奴でもなきや兄貴のパートナーなんて務まらねーか…それにしてもすごい偶然だな）

桜はその目で理解した。土曜日に赤石が誰と一緒に戦ったのかを。

「品定め、されてました」

「ぶふっ！」

彼女が悩ましげに放った言葉に桜は飲みかけのドリンクを嘔く。

「そんな言い方するんじゃないよー！どんな奴か見てただけだ」

「ふふっ、確かに品定めだね。あ、口から垂れてるよ」

藍子はハンカチを取り出し桜の口元を拭う。

「それで、品定めの結果は？」

赤石が自分の近くまで飛んできた飛沫を拭いながら問う。

「強い自分を持つてる。兄貴と同類、敵にまわしたくない」

「同類か。桜からはそう見えたか」

桜の答えに赤石は穏やかな表情を見せる。

「あくまでぱつと見た印象だけだな。実際のところはどうかなんだ？」

桜は藍子に向けて尋ねる。

「んーだいたい桜ちゃん感じた通りだと思うよ。でもやっぱり私たちと同じ普通の女の子かなって思うー！」

「どうも普通の女の子です」

（普通の女の子はそんなオーラまってるねーよ…）

彼女の言葉に桜は心の中でツツコミを入れた。

――

カラオケボックス。閉ざされた空間に自由気ままな轟音が響き渡る。

「君をく愛してるう〜」

大きな音を聞いても別にイライラするということはない。こういうのに付き合わされたおかげで喧しいのは耐性がついた。

「ああ〜君だけを〜」

しかし音痴だなこいつ、別の意味で耐えられん。

「お前音外し過ぎだろー!」

そら野次も飛ぶわ。

「うるせー!」

お前がうるせーよ。マイク持ったまま叫ぶな。

「ラ〜ラララ〜」

早く終わんねーかな。

「あーすつきりした」

音痴が終了し、ウチの番になる。

「お、次は椎名か。良い歌声が聞けるな、音痴な誰かとは違って」

「俺椎名の歌聞くの初めてだわ」

なんか期待されてるけど、別に大したもんじゃねーよ。

「どうして〜私は恋をして〜」

「おお、バラードど真ん中」

「なんか意外ー!」

「椎名からこんな歌声が出るなんて…」

外野がうるさいが、構わず歌に集中する。

「ふう」

歌い終えて、一息つく。曲が終わって騒がしい部屋が静まり返っ

た。

「すげえ…」

「こいつはやべえな」

まあ、語彙力は置いといて褒められるのは悪い気しない。

「な？椎名歌上手いだろ？」

何でお前が得意気になってんだ。

「椎名ー、次私とデュエットしよー！」

「断る」

「ええー！」

音痴とは組みたくねえ。

## 7話 #9 「そのままその夜」

――

「はい、連絡先登録したよ」

彼女は藍子に携帯電話を返す。

「ありがとー…これでいつでも連絡できるね!」

ファーストフード店を出た帰り道、彼女と藍子は公園に寄り道していた。なお、赤石と桜は先に家へと帰っている。

彼女が携帯電話を持ち始めたのは高校に入ってからだったため2人の間に連絡手段は無く、今日が真正正銘、卒業式以来の再会であった。

「ねえ、レイちゃん」

隣のブランコに腰を下ろした彼女に話しかける。

「なに」

「さつきは訊けなかったんだけどね…危ない橋を渡ってるって本当?」

「今のところは、渡りきってる」

「…そうなんだ」

藍子は彼女の言葉を聞いておおよそ察する。自分の知らない所で想像も出来ないような橋を渡り続けているのだろうと。そして今までのようにこれからも。

「あの、私にできることがあったら何でも言っただけ?レイちゃんの助けになれば私も嬉しいかなって」

大切な友達を心配する心からの言葉。たとえ何も出来なくても、必要とされなくても、藍子はただ彼女の無事を願う。

「うん、ありがと」

その気持ちは彼女にもしっかり伝わっていた。

「もうすぐ日が暮れちゃうね」

藍子は携帯電話を確認する。時刻は既に17時半を回っていた。

「そうね」

お互い話すことは話した。今日のところは。

「帰ろつか？」

「うん」

2人はブランコから立ち上がった。

――夜

数時間に及んだカラオケの後、クラスメイトたちと別れ1人夜の街を歩く。

家にはあまり帰りたくない。それだけの理由で目的もなく彷徨っている。最近は何日こんな感じだ。

ただこんな時間に制服姿のまままで出歩いていると、

「お？姉ちゃんかわいいねえ。おじさんと今からどう？」

こんな風に勘違いしたおっさんがたまに声をかけてくる。

「売り物じゃねーから、あっち行けよおっさん」

だから変な噂が飛び交ってんだろう。まあ言いたい奴には言わせておく。

それより腹が減った。今日はどこで食べようか。久しぶりにあの店で――

「おい、そこの学生」

どこで食べるか考えていたら、誰かに呼ばれた気がした。面倒だと思いつつも後ろを振り向く。

「今何時だと思ってるんだ」

いかつい顔をしたおっさんが近づいてくる。ああ、このいかつい顔は先週も見た。

「…って、椎名またお前か」

そのセリフはこっちが言いたい。

「不満そうだな」

「そりゃあこれで5回目だからな。警察も暇じゃねえんだぞ」

おっさんは呆れた様子で対応する。暇じゃないなら放っておけばいいのに。

「あのさ、何度呼び止めても無駄だから。これからもこの時間は外にいると思うし」

「そういうわけにもいかねえんだよ」

でも放っておけないらしい。警察官とは面倒な職業だ。

「うろつくなどは言わねえ。着替えてからなら夜遅すぎない程度にうるついてもらって構わん。その方がお互いのためになるだろ」

「着替えるためには一旦家帰らないといけねーじゃん」

家に帰ったら帰ったで、これの比じゃないくらい面倒だからな。

「椎名、お前の家の事情はわかってるつもりだ」

「わかってて言ってるんならタチわりーな、おっさん」

「おっさんじゃねえ、黒川さんと呼べ不良少女」

この黒川という警察官、口は悪いが話は分かる方だ。どこで知ったかウチの家事情まで把握してるのはちよつと勘弁して欲しいが。

「つたく、もう少し大人に対する態度をだな」

黒川のおっさんが苦言を呈し始めた時、

「あ…」

ぐうー、つと不意に腹の虫が鳴る。

「なんだお前、まだ飯食ってなかったのか？」

おっさんにも聞こえてしまったようだ。

「今から食べようと思ってたんだよ」

「そうか、じゃあ俺と一緒に晩飯食うか？おごってやるぞ」

「はあ？何が悲しくておっさんと一緒にご飯食べねーといけねーんだ」

おごってくれるのはありがたいけどな。

「いや、制服のまま連れ回すのはまずいか」

おい、無視かおっさん。

「署までついてこい。何か出前でも頼もう」

「やだよ。それならご飯はお断りするわ」

「だめだ。今日は見かけたら署まで連行するつもりだったからな」  
ウチの前におっさんが立ちはだかる。

「ちよ、勘弁してくれよ」

「まずい、いつもと違う展開だ。」

「なに、ちよつと話するだけだ。おとなしくついてくれば家には連絡しねえよ」

「お？家の事情を考慮してくれるのか。やっぱり話が分かるなおっさん。」

「まあ、ちよつとだけなら」

でも拘束されるのは面倒だ。早く解放してくれよおっさん。

——同じ頃

夕食と入浴を済ませた彼女は、早速購入したパズル専門誌に取り掛かっていた。

（まずは、簡単な問題から）

脳を働かせ手を動かすスラスラと解いていく。

（次はもう少し、難しいの）

次の問題に取り掛かろうとした時、彼女の携帯電話にメールが着信した。パズルを中断し携帯電話を開く。

from 藍子

「レイちゃんこんばんは！なにしてるの？」

メールの相手は今日連絡先を交換したばかりの藍子だ。

t o 麗梨

「こんばんは。パズルしてた」

すぐに返信が届く。

from 藍子

「そういえばパズル好きだったもんね！ところで桐縹での生活はどう？」

t o 麗梨

「楽しいよ。アイちゃんは？」

f r o m 藍子

「最初は正直しんどかったけど友達もできたし今は楽しいよ！」

t o 麗梨

「よかった。楽しそうで何より」

f r o m 藍子

「うん！ありがとレイちゃん！またメールするね」

t o 麗梨

「うん」

メールでのやりとりが終わると、彼女はパズルを再開した。

7話 #10 「解くために解くような」

――某警察署、取調室

「どうだ？居心地は」

「良いわけねーだろ。早く解放してくれよ」

向かいに座っている黒川に対し、不機嫌に答える椎名。かれこれ席に着いて15分くらいは黒川と話している。

「そうだろうな。ま、そろそろ届くだろうし一旦休憩しようや」

黒川が一息ついてから数秒後、ガチャッと取調室のドアが開く。

「黒川さん、届きましたよ」

警察官が大きな箱のようなものを持って入室する。

「おお来たか、ご苦労」

警察官は箱の中から次々とラップで蓋された料理をテーブルに並べていく。

「おいおい、頼み過ぎじゃねーのか？」

テーブルに所狭しと並べられた料理の数々を見て椎名は目を細める。

「梅里（ウメザト）、お前も食うか」

「え、いいんですか？それじゃあいただきます！」

料理を運んできたこの梅里という警察官は黒川の部下にあたる。昨日、黒川が改造デュエルディスクの説明をしていた相手もこの梅里である。

「いやあ、お腹ペコペコだったんですね」

梅里は部屋の隅に折り畳んであったパイプ椅子をテーブルの前まで運び、開いて座る。

「ほら俺のおごりだ、お前ら好きなの食え」

「さすが黒川さん太っ腹ですねえ。それじゃあ遠慮なく」

「…」

3人はそれぞれ食べ始めた。

――

(…解けた。難易度3、いつも通り)

彼女はペンを置き、パズル専門誌を閉じる。

(今日は、ここまで)

ちょうど椅子から立ち上がったタイミングで彼女の携帯電話が鳴動する。今度は電話のようだ。

彼女は携帯電話を手に取り、通話を開始した。

――

「いやーうまいっすね!」

「よく食うな、お前」

梅里の箸が止まらない。黒川は既に食事を終えている。

「椎名、お前はもういいのか?」

「ああ」

椎名も食べ終えたようだ。

「そうか」

黒川は腕時計で時刻を確認する。

「ちよつと一服してくる」

そう言うのと黒川は席を外し退室した。

「んーうまいうまい!」

黒川が退室しても梅里は変わらず食べ続ける。

「…」

椎名はというとそんな梅里をよそに携帯電話をいじっていた。

「あ、ねえねえ椎名ちゃん」

梅里がふと彼女を呼ぶ。

「気安く呼ぶな」

「そうツンツンしないでさ、嫌われるよ」

「…で、何?」

「学校楽しいかい?」

「別に。まあまあ」

椎名は携帯電話から目を離さず答える。

「まあまあ、か。僕も高校時代はあまり楽しくなかったなあ」

「…」

「高校生ってさ、夜遊びとかに憧れるもんだけど椎名ちゃんもそうだったりする?」

「憧れてない。ただ帰りたくないだけ」

「あ、そっか。そうだったね」

椎名のそっけない返事に苦笑する梅里。いまいち椎名に対する扱  
いというものを難しく感じているようだ。

「まあどんな事情があるにせよこんな時間まで制服のままうろつかれるとね、こちらとしては声かけずにはいられないんだよ。それはわかるかな?」

「…」

「何かあつてからじゃ遅いからさ。黒川さんもあれで椎名ちゃんのと結構気にかけてるからね」

「気にかけてくれなくても、忙しいならほっときやいいのに」

「そう言わずにさ、このままだとお互いのためにならないでしょ?」

「それはわかってるけどさ…」

椎名が答えたのとはほぼ同時に取調室のドアが開く。黒川が戻ってきたようだ。

――

「もしもし」

「ようレーリ、アタシだアタシ」

「紫さん」

「今仕事終わってな、またそっち寄ってもいいか?」

「はい、いいですよ」

「いつも悪いね。じゃあまた後で」

「わかりました」

通話が終了する。

(これとこれかな。あとこれも…)

彼女は本棚から数冊のパズル雑誌を取り出すと机に置いた。

そして約20分後、彼女の家インターホンが鳴る。

彼女は机に置いたパズル雑誌を抱え、玄関に向かいドアを開けた。

「よう、こんばんはー」

紫が軽く手を上げて挨拶する。

「こんばんは、はい」

彼女は紫に手に抱えていたパズル雑誌を差し出す。合計3冊だ。

「お、今回は3冊で値段は…よし、ちよつと待ってな」

紫はバッグから財布を取り出し、彼女にお金を渡す。

「ほら、今回の分だ」

「はい、確認しました」

彼女はお金を受け取り、紫にパズル雑誌3冊を渡す。

受け取った紫はパズル雑誌をパラパラとめくり、全問解かれていることを確認する。

「ごつちも確認した、サンキュー。来月もよろしくな」

「はい」

そしてバッグに仕舞い、彼女の家を後にした。

パズル雑誌には懸賞がある。懸賞に応募するためには基本的に問題を解かなければならない。

紫も一時期パズル雑誌を買っていたので、そのことを知っている。そしてある日、彼女がパズル雑誌を定期的に購入していること、また懸賞に興味が無いことを知った紫はとある話を持ちかけた。

それは解答済みのパズル雑誌を彼女から買い取るということ。簡単な問題しか解けず、もどかしい思いをしてきた紫にとっては解いておきながら懸賞に応募しない彼女に対してもつたいないという思いを抱いたため、この発想に至った。

要するに懸賞に応募する権利を紫が彼女から買うという話である。この話は彼女にとつてみてもお金が入るおいしい話であり、もちろん乗ることにした。

ちなみに紫が買い取る条件は全問解答済み且つ応募期限切れでないパズル雑誌に限るようだ。なお取引価格は雑誌の定価により変動する。

――

黒川が戻って来てからも聴取、もとい話は続いた。しばらく話込み、やがて話題も尽きた頃

「もういいか？」

椎名は明らかに不機嫌な表情で問いかけた。

「ああ。長いこと拘束させて悪かったな。車で送ってやる」

「まあ、ご飯おごってくれたし……」

椎名も自分の身を案じてくれたり食事をおごってくれたりした黒川に多少恩義は感じており、顔は不機嫌ながらも口調は柔らかい。

取調室を出て、警察署の入口へと向かう。

「梅里、車出してくれ」

「了解です」

黒川の指示により梅里が用意した車に乗り込み、椎名は無事に家まで送り届けられた。

――そして水曜日の夜

彼女に1本の電話が届く。携帯電話には『黒川さん』と表示されている。

「もしもし」

「俺だ。悪いなこんな夜に」

「いえ、なんででしょうか？」

「待たせたな、初仕事だ」

【第7話 終】

## 8話 #1 「先週ぶり」

「土曜の午後3時、喫茶『メイドルチェ』だ。詳しいことは現地にいる桃山が話してくれるだろう」

「レートはおそらくそんなに高くねえはずだ。200か、心配なら300持っていけば十分足りる」

「わかりました」

「じゃあな、健闘を祈る」

通話が終了する。彼女が黒川と組んでの初仕事、その日取りが決まった。

――金曜日、放課後

「…」

彼女はLP計算をしながら2人のデュエルの行方を見守る。

《大天使クリスティア》で《ライトロード・ウォリアー ガロス》に攻撃！」

「はい」

「ダメージステップに手札から《オネスト》発動！」

「う、通します…負けました」

「やった！これであやめちゃんとは2勝2敗ね！」

放課後、瑞希と綾芽は彼女の家に來ていた。

瑞希は部活が、綾芽は生徒会がそれぞれ休みという珍しい日ということもあり、学校帰りにそのまま彼女の家に寄ることとなった。

「さあれーりちゃん、次こそ勝たせてもらおうよ！」

瑞希と綾芽がデュエルし、その勝者が彼女とデュエルする。現在のルールのもとで3人は回っている。

「何度でも、かえりうち」

なお、彼女は未だ負けていない。

――

「《カードガンナー》でダイレクトアタック」

「通します…負けました」

「全勝って、れーりちゃんやっぱり強すぎ！」

本日最後のデュエルも彼女の勝利で決着。8勝0敗、結局全て返り討ちにしてしまったようだ。

「今日は、ついでた」

「つきすぎだよ！」

「麗梨さんには勝てなかったけど、瑞希さんともデュエルできて楽しかったです」

「うん！私もあやめちゃんとのデュエル楽しかった！」

「…」

荷物をまとめて帰る準備をする瑞希と綾芽のそばで、彼女は手元のカードを見つめる。

「どうしたの？れーりちゃん」

「温かかった、お隣さん」

「お隣さん？どんな人…あ」

瑞希の脳裏に彼女の言葉が過る。

「隣人ね！」

「にんじん？お野菜？」

「りんじん！ね！」

かつて自分と同じことを言った綾芽に対し、瑞希は作り笑いをしながらしっかりと伝わるように声を出した。

（お隣さんがどうしたんだろう…？）

綾芽は彼女や瑞希の言葉の意味を理解できなかったが、首を傾げるだけで問うことはしなかった。

外は既に日が沈みかけていた。

「じゃあまた学校でね！」

「今日は楽しかったです。おじやましました」

「うん、ばいばい」

彼女は玄関先で2人を見送った。

2人の姿が見えなくなった頃、彼女は家に戻る。先程まで賑わっていた空間は、またいつものように静かに彼女を迎え入れた。

余韻もやがて静けさに塗り潰されていく。しかし彼女はそれに引きずられることなく、明日の勝負について考える。

(喫茶メイドルチェ…)

彼女は携帯電話を使い、所在地を検索する。

(鶯櫓駅徒歩10分…)

地図を確認しルートを覚えると、携帯電話を閉じた。

(2週連続、鶯櫓におでかけ)

――

(明日は早めに起きて、お昼ごはんも、あっちで)

携帯電話の目覚まし時計をセットし、ベッドに入る。

(…)

言うまでもなく、明日のことは重要だ。大金の掛かった勝負、プレッシャーを感じずにはいられない。

しかし彼女はこれまでに比べると金銭的、精神的に余裕がある。明日のことに頭がいっぱいになることもなくプレッシャーもあまり感じることはない。

彼女はただ今日の瑞希や綾芽とのデュエルのことを思いながら眠りについた。

――

午前9時。休日の彼女は大体このくらいの時間に起床するが、今日は既に鶯櫓へと向かう電車の中だ。

(鶯櫓駅裏…)

実は昨晚、黒川から彼女に電話があった。

「……午前中、鶯檻駅裏の『六武衆』ってデュエルハウスに寄つてみな。運が良ければ面白い奴と会えるかもしれないぞ」

(どんな人なんだろう、会えるのかな)

黒川の言葉を思い返し、記憶に仕舞う。彼女はゆつたりと電車の揺れに身を委ね、やがて電車は鶯檻駅へと到着した。

鶯檻駅で下車した彼女は先週とは反対側の出口へと出る。程なくして駅裏のデュエルハウス、六武衆を目に捉えた。

外装は和を感じさせる作りになっており、看板には六武衆と思われる侍が描かれている。

(最初の、運試し)

彼女は扉に手をかけ、少しの期待と不安を胸に入店した。

「……」

「おお、すげえ……」

「あのグラサンの姉ちゃん強えな！」

「これで何連勝だ？ずっと勝ってるよな」

デュエルハウス、六武衆の店内。あるテーブルを囲むように10人くらいの人集りが出来ていた。

「次、誰」

人集りは観客のようだ。その中から冷静な女の声が響く。その声を発端に周囲がざわつき始める。

「じゃあ次俺ね」

「いやいや俺とやろうぜ！」

「もう一回俺と……」

「負けた奴はすっこんでろ」

「何だとしてめえ」

女との勝負の席に着こうと周囲が言い争っている中、入口の扉が開いた。一斉に入口の方へと視線が向けられる。

(もめごと…?)

入店した彼女は人集りの方を見てまず思った。しかし彼女の入店と同時にピタツと言い争いが止む。

「いらつしやいませ。道に迷いましたか?」

和装に身を纏った店員が彼女に話しかける。

「はい。少し休憩させてください」

「では疲れが取れるまでお休み下さい」

形骸化したやりとりを終え、適当な席に腰掛けようとした時、

「座るならこっち」

人集りの中から女が声を発する。店内の雰囲気が変わったことを察知した女はその原因である彼女を呼びつけた。

「わたし?」

彼女も声のした方へと訊き返す。

「そう」

彼女が女の方へと歩み寄る。お互い姿はまだ見えない。

「あけて」

「あ、ああ」

女は彼女の歩みに合わせて囲いを解くように指示する。

人集りが散り、彼女が女の対面に座る。この時初めてお互いの姿が認識された。

## 8話 #2 「一撃」

「はじめまして」

彼女は女の顔を見て挨拶する。女はサングラスをかけ、ミディアムストレートの髪はヘアゴムで結われている。

「ええ」

彼女の挨拶を適当に返して数秒の間の後、女が呟く。

「同類かしら」

彼女も数秒間を置いた後、答える。

「そうかもしれません」

「じゃあ白黒つける」

「はい」

女は彼女を直感的に同類と察し、彼女もそれに同調する。そんな2人の勝負が始まろうとしていた。人集りとなっていた観客たちもその行方を見守る。

ルールは先攻ドロロー有のスタンダード。お互いにこの店の貸し出しデッキで戦う。レートは一般的なデュエルハウスと同じくらいだ。

なお、どちらのデッキも特定の期間までに登場したカードのみで構成されている。この情報はお互いに把握済みだ。

コイントスの結果、先攻は女。

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

(手札、微妙ね)

「《E・HERO》スパークマン》召喚」

(【E・HERO】…?)

「カードセット、エンド」

女LP8000

彼女LP8000

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

彼女は手札を確認しながら思考を巡らす。

(フィールドには《E・HERO スパークマン》とセットカードが1枚…様子を見てる？手札に揃ってない？…いや、それよりも)

そして考えた後、

「カードをセット」

1枚…

「セット、セット、セット、セット」

(…！)

2枚、3枚、4枚、5枚とカードをセットし、

「ターンエンドです」

ターンを終了した。

女LP8000

彼女LP8000

「ドロ、スタンバイ、メイン」

(いきなり5伏せとは面白いことするじゃないの、その上モンスターは無し、と)

女は彼女の表情を観察する。が、彼女はフィールドに視線を落としただけで特に動きは無い。

(軽そうね、5枚ともいつでも発動できそうな感じ。あの期間までのカードなら【チェインバーン】かしら)

(手札に今引いた《大嵐》があるけれど、使えないわね。いかにも一掃してみたって感じがぶんぶんして、気に入らないわ)

(チェインの起点になってしまっし、それにさっき伏せた《聖なるバリア―ミラーフォース―》を巻き込んでしまっから)

(無視して突っ込むべきね。あのカードたちに警戒することないわ)(もし妨害型や攻撃反応型の罠があったとしても大丈夫、このモンスターなら)

「《E・HERO ワイルドマン》召喚」

「はい」

「バトル」

《E・HERO ワイルドマン》で攻撃

「はい」

(ほら、通るもの)

《E・HERO スパークマン》で攻撃

「はい」

(確定ね、あの5枚は積み上げるためのものだわ)

「エンド」

(さあ、どう動くのかしら)

女LP8000

彼女LP4900

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(こつちを、引きました)

《サイクロン》を発動します。対象はあなたのセットカードです

「ええ」

(積み上げてくるわね)

女はそう予想するが、彼女は動かない。女は少し虚を衝かれたようになったが、《サイクロン》の効果通り自分のセットカードである《聖なるバリアー ―ミラーフォース―》を墓地に送った。

(チェーンしない、どういうつもり?)

「《二重召喚》を発動します」

(《二重召喚》!?:違う、【チェーンバーン】じゃないわ)

ここで女は気付いた、彼女のデッキが【チェーンバーン】でないことに。

「《デス・カンガルー》を召喚します」

「《融合呪印生物―地》を召喚します。《融合呪印生物―地》の効果発

動。特殊召喚するのは《マスター・オブ・OZ》  
そして彼女にしてやられたことにも。

「《巨大化》を発動、《マスター・オブ・OZ》に装備します」《マスター・オブ・OZ》攻撃力4200↓8400

「《野性解放》を発動、対象は《マスター・オブ・OZ》です」《マスター・オブ・OZ》攻撃力8400↓12100

(読み違えたわ。この子、やるわね)

「バトルフェイズ、《マスター・オブ・OZ》で《E・HERO ワイルドマン》に攻撃します」

「…負けたわ」

勝敗が決すると女はサングラスの下から少し悔しそうな表情を見せた。

「わたしの、勝ちです」

女の手札があまり良くなかったというのもあるが、彼女の思い切った作戦は功を奏した。8000のLPは大きな一撃により削り取られた。

「おおすげえ!」

「あの姉ちゃんの連勝が止まったぞ」

「やるなあ、あの女の子」

周囲で観戦していた観客たちが再びざわめき出す。

「ねえ、デュエル経験はどのくらい?」

そのざわめきの中、女が問う。

「デュエルハウスに行くようになったのは最近です」

「そう」

「はい」

「時間ある?」

「1時間くらいは」

「それまで付き合って」

「いいですよ」

彼女の了承により、2人のデュエルは続行となった。

「えー姉ちゃん俺とデュエルしてくれないの？」

「俺はあの女の子としたいなー」

「諦める。2人の世界に割り込む余地無しだ」

「いいじゃんこういうのも。中々見れないし」

「どっちもかわいいし絵になるよね」

観客も続行するようだ。

――

この後2人は6戦して3勝3敗。最初のデュエル以外はどれも拮抗した勝負内容となった。

「お相手していただき、ありがとうございます」

「ご丁寧ね、付き合ってたって言ったのはこっちなのに。ねえ」

女は席を立とうとする彼女を呼び止める。

「はい」

「次は負けないわ」

女がそう言うのと彼女は少し微笑み、

「また、デュエルしましょう」

と言い残し店を後にした。

「…」

女はただ店を去り行く彼女の背中を見つめていた。

## 8話 #3 「喫茶メイドルチエ」

――

(喫茶メイドルチエ、見つけた)

大通りに面したカフェで早めの昼食を摂った彼女は鶉籠の街を散策した後、指定された時刻より1時間早く目的地に辿り着いていた。

(ちよつと、早いけど…)

彼女は入口の扉を開ける。

チリンチリンと入店を知らせる鈴が鳴った。

それが響いた直後、従業員の1人が彼女に歩み寄り、

「お帰りなさいませ、お嬢様」

紳士のような振る舞いで彼女を出迎えた。

(えっと…)

彼女は従業員の恰好を見て一瞬固まるものの、すぐに状況を把握する。

(なるほど、メイドルチエ)

その従業員は他にもない《マドルチエ・シューバリエ》の恰好をしていた。

「お席へご案内致します」

そう言つて案内する《マドルチエ・シューバリエ》だけでなく、他の従業員も『マドルチエ』モンスター衣装の衣装に身を纏っていた。要はコスプレ喫茶というものである。

「お？もう来たのか、早いな」

席について早々、彼女の後ろから声がかかる。

「紫さん」

「やあレーリ」

彼女が振り向くと《マドルチエ・マーマメイド》の恰好をした紫がいた。

「…」

彼女は振り向いたまま紫の姿を見て固まる。

「ん？どうした？」

「ちよつと、新鮮だと思ひまして」

「何だそれ。キャラじゃないって正直に言ってくれていいよ」

紫は笑いながらおどけるように言う。

「ここでも働いているんですか？」

「まあ不定期にな。似合ってるねー、って思ってるだろ？」

「そんなことないですよ。似合ってます」

「お？そうか？」

「はい」

「そうかー」

その答えに紫はまんざらでもない様子だ。

「ま、それはいいとして。まだ1時間あるし、何か作ろうか？」

紫は彼女にメニューを手渡す。

「おすすめは何ですか？」

「よく注文が入るのはプリンアラモードだな」

「ではそれをお願いします」

「はいよ」

注文を承ると紫は厨房へと入って行った。

彼女は改めて店内を見回す。

お菓子の家をモチーフにしてるのだろうか、様々な種類のお菓子の模様や形を元にした物で店内中あちらこちらに散りばめられていた。

それなりに客は入っているが喫茶店ということもあり、客数に反して店内は落ち着いている。

「お待たせ、はいプリンアラモード」

注文して数分後、プリンアラモードが紫によって彼女の元へと運ばれてくる。

「ありがとうございます」

紫はそのまま彼女の対面の席に腰を下ろした。

「ふう、一休みつと」

「いいんですか?」

「いいのいいの。今は暇な方だし、2時半になったら貸し切りにするしよ」

「貸し切り?」

「うん。衆目の中、勝負なんて出来ないだろ?増してやデュエルハウスじゃないんだし」

「…確かに」

「実は今日の勝負、アタシが審判を務めることになってんだけどさ」

「そうなんですか?」

「うん。わかっていると思うけどジャッジは公平に下すからね?」

「はい、わかっております」

「ま、負けた時には借金の肩代わりくらいはしてやらんこともないな」

紫は冗談めいた口調で言う。

「それは心強いです」

「今はそれ食って勝負に備えときな」

「はい、いただきます」

――

午後2時30分。彼女以外の客が退店し終わり、店内はガラんと静かになった。

客の見送りが済んだところで、紫は再び彼女の前の席に座る。

「よし、これであとは相手の到着を待つだけだな」

「お疲れ様です」

紫が席に座って一息ついた後、紫の傍へと従業員の1人が近づいてくる。

「桃山さーん、ちょっと手伝って欲しいことが…」

《マドルチェ・バトラスク》の恰好をしたその従業員は紫の元まで歩く。そして客である彼女の顔を一目見ると驚きの表情を浮かべた。

「つてレイリちゃん!」

名前を呼ばれた彼女は従業員の顔を見る。

「あ…フリードのお兄さん？」

その従業員は彼女が通っているデュエルハウス、フリードの店員だった。

「そうだよ！来てたんだね。悪いんだけどこれから貸し切りだから今日はもう…」

「おいおい樋口（ヒグチ）、お客さんはもう皆帰っただろ？」

紫は挑戦的な笑みを浮かべる。今更だが従業員の名は樋口というようだ。

「え？もしかして今日の勝負って…！」

「はい、わたしです」

「そうだったんだ…ってええ!?!」

樋口は半ば大げさに驚く。

「も、桃山さんちよつと」

「何だよ？」

樋口は紫を立たせ彼女から離れた位置に立ち止まり、小声で話しかけた。

「レイリちゃんがあいつと勝負するなんて聞いてませんよ！」

「言っていないからな」

「知らない仲間じゃないんですし、せめて僕には教えてくれても良かったじゃないですかー！」

「知ったところでどうすんだよ、止める気か？」

「当たり前でしょ！あいつとの勝負は100万200万の勝負ですよ？遊びじゃないんですよ!?!」

「…」

「確かにレイリちゃんは強いけど、それはあくまで少額での話で…もし負けたらー」

「樋口。アンタ、フリードでしかレーリを見たことないでしょ」

「…え？」

「少なくともアタシはアンタよりレーリのことを知ってるよ。だから

断言してやる」

「100万200万程度の額で揺らぐような子じゃない。アタシらよりよっぽど強いよ」

「でも……」

「それに勝負を受けたのは他でもないレーリだからな、信じて見守つてやれ」

「っ……わかりました。桃山さんがそう言うなら」

すつきりとはいかないまでも、納得した樋口は紫と共に彼女の座る席へと戻った。

樋口は横から彼女を見下ろしながら考える。

(デュエルハウスでの勝負で得たお金で生計を立てている、いわゆるゴロと呼ばれる人種……レイリちゃんもその1人ということは知っている)

(でも、それだけなんだ。何故ゴロをやっているのか、詳しい事情については全く知らない)

(……いや、他にも知ってることはある。ゴロの中では抜けて強い。この若さでの強さなんだから、それはもう驚愕に値するレベルだ)

(だけどそれはゴロの中ではって話で、今日相手するあいつは元プロ……そもそも次元が違う)

(高レートでも揺らがないとしても、単純に実力という点でレイリちゃんでも厳しいんじゃないかって僕は思うな……ん?)

樋口が彼女を不安そうに見ていると、入店を知らせる鈴が鳴った。

「申し訳(ご)ぎいませんお客様、ただいま貸し切り中でして」

従業員の1人が今入ってきた客に対応する。

「貸し切り中?もう勝負始まつてるの力?」

客の声を聞いて紫は入口の方へと目をやった。紫にとってその声は聞き覚えがある。

「おーい、ソイツは大丈夫だ、入れてやって」

そして従業員に対し招き入れるよう指示した。

## 8話 #4 「元プロ」

「ようユカリ、見に来たヨ」

客は右手を上げて振りながら紫の元へと歩み寄る。

「まだ勝負は始まってないよ、ヘズ」

客の正体は先週、ここ鶯櫓で戦った相手の1人、ヘズだった。

「おお、メイド服！ユカリ、オレのことご主人様って言ってみてヨ！」

「言わねーよ！それより、よくここに来たな」

「黒川さんから聞いてナ。これは是非見たいって思ってたサ」

ヘズは彼女に視線を移す。彼女もそれに気付きヘズの顔を見た。

「1週間ぶりだな、鈴瀬さん」

「1週間ぶりですね、ヘズさん」

「今日の勝負、楽しみにしているヨ」

「はい」

ヘズは横の空いてる席へと腰を下ろす。

「桃山さん、彼は…？」

樋口は機を見て紫に問う。

「アイツはヘズ、アタシの知り合い。あっちの国でプロやってた」

「元プロの外国人ですか…へえ、桃山さんにそんな知り合いが…」

樋口は感心したように呟いた。

「それにしても、こんな店があつたなんてナ」

ヘズは楽しそうに店内を見回す。

「飾り付けも凝ってて、店員さんのマドルチェコスプレも良く出来て  
ル。やっぱり日本の文化は良いネ」

「元はアンタとこの文化だろ…」

「もちろんユカリのメイド姿もかわいいヨ」

「そりやどうも」

紫はぶっきらぼうに言うが、内心少し照れてるのかヘズから目を逸  
らす。

「ところで相手はどこにいるんだ？」

「まだ来てない。もうそろそろ来るんじゃないか？」

紫がそう予想したその瞬間、入店を知らせる鈴が鳴った。

「…って言ったたら来たわ」

「お待ちしておりました」

従業員の1人が出迎える。それまで緩んでいた空気も徐々に張り詰めたものへと変わっていく。

「フフ、拙者のお相手はどちら様かな？」

「お席にご案内致します」

従業員が勝負の席へと案内している頃、紫たちはひそひそと話していた。

「来ましたね、桃山さん」

「相変わらず濃いな。やっぱり苦手か？」

「はい。生理的に絶対的な嫌悪感が湧くっていうか…」

「樋口、少しはオブラートに包んだ方がいい」

「あの客が鈴瀬さんの相手力？」

ヘズが客を見ながら問う。

「うん、アタシやアンタと同じ元プロ」

「そうか、面白い勝負になりそうダ」

彼女とはいうと、ただ静かにその時を待つだけだった。

「レーリ、準備はいいか？席移動するよ」

紫は対戦相手が勝負の席に着席したのを確認すると、彼女に移動を促した。

「はい」

落ち着いた足取りで彼女は勝負の席へと向かって行く。

「少し待つてくださいる」

客が彼女の歩みを止める。

「少女よ、さてはその姿のまま戦おうとするのではあるまいな？」

「…？」

客の意図を彼女は分かりかねる。

「拙者と一戦交えたいならば、そちもマドルチェと化してからにしていたらこう」

「はあ？何言ってるんですか、この子は従業員じゃなくてあなたと同じお客さん……」

呆れを含んだ樋口の言葉を紫は制止する。

「では、着替えれば勝負をするということですね？」

「わかりました、ただ今より着替えさせますので少々お待ち下さい。レーリ、こつち来てくれるか？」

「はい」

「ちよ、桃山さん……」

紫は素直に客の要望を受け入れ、彼女を店の裏の控え室へと連れて行った。

「悪いなレーリ、アイツの言うこと聞くのは癪なんだけど、そうしないと勝負してくれないからな」

紫は彼女の髪を整えながら話す。

「大丈夫ですよ。この衣装、かわいくて好きです」

彼女は身に纏った衣装を気に入ってるようだ。

「そうか、良く似合ってるよ。もうちよっと待ってな、アタシがさらにかわいく仕上げてるから」

「はい、お願いします」

彼女は少し嬉しそうに答えた。

控え室の中で紫は彼女に例の客、対戦する相手の情報を知ってる限り伝えた。

名は柴岡（シバオカ）、年は20代後半。趣味はアイドルの追っかけ。喫茶メイドルチェには足繁く通っている上客だが、従業員に対する態度や言動に問題があり多くの従業員に嫌われている。

デュエルの実力は不明だが、元プロという肩書きからそこそこ強いものと思われる。

黒川の情報によると高レートでの勝負はたまに行っている模様。今回の勝負も柴岡が黒川に依頼し、彼女という対戦相手と喫茶メイドルチェという舞台を用意してもらったようだ。

なお貸し切り料金は柴岡が負担している。ちなみに何故貸し切りにしたかという点、喫茶メイドルチェはデュエルハウスではない。故に賭博行為をしていたことが外部に漏れてしまうと大変なことになりかねないためだ。

(黒川さんも何でデュエルハウスじゃなくここにしたんだ?…ま、アイツの要望だろうとは思うけどね)

髪も整え終わり、紫は最後の仕上げに入る。

(あとはここをこうして、っと…)

「おっけー、完成」

ついに完成したようだ。一仕事終えた紫は満足そうに微笑む。

「ありがとうございます。紫さん、お疲れ様です」

彼女も小さく微笑んだ。

「そんじゃ、お披露目に行くか」

「はい」

――

彼女と紫の居ない店の表は緊張した空気が漂い、従業員たちは各々作業をしながら2人の戻りを待っていた。

そんな中、ヘズが横を通りかかった《マドルチェ・シューバリエ》の従業員に話しかける。

「なあ、ここって喫茶店なんだよな?」

「はい、そうですが…」

「レモネードを頼めるか?」

「レモネードですか? はい、お持ちしますので少々お待ち下さい」

注文を受けた従業員は厨房へと入って行った。

「ほう、レモネードであるか」

唐突に柴岡が口を開く。

「あ？」

それを聞いたヘズは柴岡を疑問の目で見た。

「時に、そのの異人よ」

「異人？オレのことカ？」

「左様。出身はどちらであるか？」

「UK、イギリスダ」

「ではレモネードを炭酸飲料だと思っているか？」

「ああ、そうダガ…」

「なるほどなるほど、来日して日が浅いか、はたまた運が良かったか」

「どうということダ？」

「残念だがこのレモネードは北米式なのだよ」

「お待たせしました、レモネードでございます」

柴岡が答えたと同時にレモネードがヘズの目の前に置かれる。

「…！」

（確かに炭酸ではない。国や地域によって違うのカ）

来日して幾数年、ヘズはこれまで上手い具合にずっと炭酸入りの方を当て続けて来た。しかし今、目の前にあるレモネードは泡を立てていない。

（こんなタイミングで異文化を感じるとハ）

「この国でもレモネードといえはこつちが主流だ、覚えておくが良い」

「ちなみに日本のラムネというのはレモネードが訛ったものである。

こちらでも覚えておくと良いぞ」

「なるほど、ラムネってそうなのカ」

ヘズは柴岡の知識にふんふんと頷き、レモネードを口に運んだ。

（あーあー得意気にひけらかしちやって）

柴岡とヘズのやりとりを遠くで聞いていた樋口は、心中でそう思いつつ作業を続けていた。

（お、こつちのレモネードも悪くないナ）

そしてヘズがレモネードを飲み終わる頃、控え室から彼女と紫が姿を現した。

## 8話 #5 「お披露目」

「悪い、待たせたな」

「あ、桃山さん！待ってましー」

言い終える前に固まる樋口。

「うそ…!？」

「え?え…!？」

「おお…!」

固まったのは樋口だけではない。

「これハ…!」

他の従業員一同も、ヘズも。

「皆の者、どうしたというのだ? 一体何がー」

そして柴岡も。1人を除き、彼女の姿を目に写した者たちは一様に視線を釘付けにされた。

静寂の中、一斉に送られる視線を浴びながら彼女は勝負の席に着く。

(想像以上の反応だな。ま、レーリの素顔知ってるのはアタシだけだったし)

その1人とは勿論、この彼女を仕立てた紫。想像以上の反応にどこか誇らしげな様子だ。

ここにいる彼女はつい先程までのような髪型をしておらず、帽子も眼鏡も身に着けていない。薄く化粧は施してあるが、高校生活を送る素の彼女の姿だ。

そして着ている服も違う。

彼女が今身に纏っている衣装、それは純白のワンピースが特徴的な《マドルチェ・エンジェリー》

いや、衣装だけではない。髪型もかなり似せてきている。おあつらえ向きに長い彼女の結われた髪が、さらにそのものの雰囲気醸し出していた。

そんな彼女を眼前にして柴岡は息をのむ。

「な、なななんと見目麗しい…！き、君！」  
「？」

「ど、どこかでアイドルとかやっていたりしない？」

柴岡は記憶を辿る。自らのデータベースから彼女を探すが当然ヒットせず。

「いえ、アイドルではないです」

「まさかの一般ピーポー！宝石がここに眠ってたあ！」

「君アイドルやる気ない!? トップアイドルになれる、いやそれどころか一時代築けるよ!」

柴岡は興奮が収まらない様子だ。

「わたしにアイドルは務まらないと思います」

対照的に彼女は冷静に返す。

「いやいや！訓練すれば誰だってなれるからさ、ぜひデビューしてよ！」

「…」

「むしろ拙者がプロデューサー」

「おい、いつ勝負を始めるんだ？」

柴岡を止めることが出来ずもどかしそうな従業員たちの表情を察して、ヘズが勝負に入るよう催促する。

「異人よ、拙者は今とても重要な交渉をしているのだ。横槍を入れるのは——」

「お前はここに勝負をしに来たんだロ? どうしても交渉がしたいなら勝負に勝つてからにしたらどうダ? デュエリストらしくナ。鈴瀬さんもその方がいいだロ?」

ヘズの意見に彼女が頷き、その様子を見た柴岡が小さく唸る。

「ふーむ、一理あるな。では勝負の後にしよう」

(ヘズ、ナイスだ!)

紫はタイミングを見計らい、審判の立ち位置へと移動した。

「お待たせ致しました。審判役を務めさせていただきます、桃山と申しませす」

「まずルールからご説明を——」

（確かルールも黒川さんから指定されてたな。ま、それもコイツの要望だろうが…）

紫は初めにルールを、次にレートや使用カード等を丁寧に説明した。

ルールはスピード、先攻ドロー有のLP4000。以下デッキと進行について。

お互い同じ20枚+αのカードセットから10枚を選び、それをメインデッキにして1回戦を行う。

1回戦終了後、メインデッキを審判に預け、1回戦で使用しなかった10枚をデッキにして2回戦を行う。

2回戦終了後、1回戦終了時に預けたメインデッキを受け取り再び20枚のカードセットから10枚を選び、それをデッキにして3回戦を行う。

レートは200、2000、5000で超過ダメージも計算する。カードセットのリスト以外は、ほぼ黒川によって指定された通りのルールである。

「その他不明な点や質問があればその都度審判である私に訊いて頂いて構いません。またこの勝負中に問題等が発生した場合、私の裁量に従って頂くことをお約束下さい」

「最後に、こちらカードのリストです」

彼女と柴岡、両者にカードのリストが記された紙が配られる。

（審判か…高レート勝負の審判を務めるのってあの時以来なんだよな。まあ、あの時は未熟な部分も色々あって完遂できなかったけど…）

紫は苦い思い出を振り返る。そしてそれを振り切ると強い意思を心に宿した。

（今回はちゃんと最後まで務めてみせてやる、レーリのためにも）

「それでは勝負を開始します。まずは1回戦のメインデッキとなるカード10枚をお選び下さい。制限時間は10分です」

紫は彼女と柴岡の間に仕切りパネルを置くと、携帯電話のタイマーを作動させた。

〈カードリスト〉

EX 2枚

《重装機甲 パンツァードラゴン》10000/26000 ×2

メイン 20枚

《アレキサンドライドラゴン》20000/10000

《ドル・ドラ》15000/12000

《ブリザード・ドラゴン》18000/10000

《ミラーージュ・ドラゴン》16000/6000

《スピア・ドラゴン》19000/0

《機械犬マロン》10000/10000

《スフィア・ボム 球体時限爆弾》14000/14000

《カードガンナー》4000/4000

《魔装機関車 デコイチ》14000/10000

《サブマリンロイド》8000/18000

《超融合》

《リミッター解除》

《月の書》

《簡易融合》

《大嵐》

《鎖付きブーメラン》

《ディメンション・ウォール》

《破壊輪》

《ドレインシールド》

《連鎖除外》

「審判よ、ひとつ要望があるのだが」

タイマーが動き出してから数秒後、柴岡が紫に話しかける。

「何でしょうか？」

「まさか無いとは思うが…少女が店員と手を組んで、通し等のイカサマをしないとも限らない」

「故に店員にはこちらのカードが見えない程度に距離を保ってもらおう。もちろん勝負中での一切の移動や口出しも禁じて頂きたい」

「なっ！それはあまりにー！ー」

柴岡の要望に樋口が声を荒げようとするが、

「樋口ー！」

「ぐっ…！」

紫に制される。

「…わかりました。皆、悪いけどそうして欲しい」

従業員たちは不満気な表情を抑えつつ、勝負のテーブルから距離を置いた。

「異人よ、おぬしも離れてもらおう」

「仕方ないナ」

へズも別の席へと移った。

(ま、この席なら店員たちよりは見えるナ)

「ふむ、よかろう。これで心置きなく選べるというものよ」

(機械とドラゴン…)

彼女はというと成り行きを見届けつつ、リストを見ながら考えていた。どれを選ぶべきか、どう組み合わせるべきか。

1回戦のデッキとなる10枚を選んだ瞬間、2回戦のデッキも自動的に決まるのだからこの選択は重要。

3回戦に入らず、2回戦で決着する可能性もある。そうなればこれが唯一の選択時間だ。

(…)

彼女は考える。しかし、ただ考えていても時間は迫る。彼女が動き出したのは半分の5分を過ぎた辺りからだった。

やがて携帯電話のタイマーが10分経過を告げる。彼女も柴岡も無事選り終えているようだ。

紫は仕切りパネルを外し、お互いのデッキをシャッフルするように指示する。

柴岡のデッキが彼女の前に置かれた瞬間、彼女はそのデッキに違和感を感じる。

(?…大きい)

お互い同じ10枚組みのデッキだが、柴岡のデッキは彼女のデッキと比べて異様な程の高さがあった。

その上高さだけでなく1枚1枚に重さや硬さもある、つまり多重スリーブである。

(何重だろう…)

一番外側の透明なスリーブ、その中には何かアニメキャラクターの絵が描かれたスリーブ。さらにその中にも何重ものスリーブが存在するであろう圧倒的重量だ。

彼女がその異様にプロテクトされたデッキを手に取りシャッフルをしようとした瞬間、

「あ…」

バラバラとデッキが瓦解し、床へと滑り落ちた。

「ごめんなさい」

スリーブにもよるが、新品のものはツルツルしているためよく滑る。彼女も知らないわけではなかったが、多重スリーブの方に気をとられていたのだろう。

彼女はテーブルの下に潜り込み、カードを拾い集める。

「少女よ、気にするでない。そちの手では拙者の9重スリーブは、ちと繰るのが難しかろう」

柴岡は微笑ましいものを見るような表情で、シャッフルしたデッキを彼女に返す。

「どうぞ」

彼女も今度は手元に気を付け、慎重にシャッフルしたデッキを柴岡に返した。

残るは先攻後攻決め。コイントスの結果、先攻は彼女となった。

「それでは1回戦、デュエルスタート!」

8話 #6 「1回戦 1」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札《カードガンナー》《大嵐》《機械犬マロン》《サブマリンド  
イド》

(まずは、これかな)

「モンスターをセットします」

「ターンエンドです」

彼女手札3枚

LP4000

◇ ◇

◇ 裏 ◇

彼女↓柴岡

◇ ◇

◇ ◇

LP4000

柴岡手札3枚

「フッフ、では行くのでしょうか。こんな娘とデュエルとは拙者、ワクワクが止まらぬわ!」

「ドロー! スタンバイ! メイン!」

柴岡は幾分か声を張り上げている。ドローのアクションもオーバー気味だ。

「行くぞー! モンスター!」

柴岡は左手の手札から右手で1枚抜き、右腕を後ろに曲げたまま右肘を頭の横に位置する辺りまで持っていくと、

「《スピア・ドラゴン》召喚!」

勢いをつけてカードを振り下ろした。パチンと乾いた音が響く。

(騒がしいヤツだな…そのための多重スリーブなのか?)

ヘズは迷惑そうに柴岡の動作を眺めている。

「バトル！《スピア・ドラゴン》で裏守備モンスターに攻撃！」  
「はい」

裏側守備《機械犬マロン》戦闘破壊

《スピア・ドラゴン》効果↓彼女LP4000→9000＝3100

「ほう、地雷であつたか」

《機械犬マロン》効果↓彼女LP3100→1000＝2100 柴

岡LP4000→1000＝3000

《スピア・ドラゴン》攻撃表示↓表側守備

「ターンエンド！」

彼女手札3枚

LP2100

◇ ◇

◇ ◇

柴岡↓彼女

ア∥《スピア・ドラゴン》表側守備

◇ ア ◇

◇ ◇ ◇

LP3000

柴岡手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《ドレインシールド》  
(ちよつとLPが心配なので)

「カードをセット」

「《サブマリノイド》を召喚します。バトルフェイズ」

「うむ、直接攻撃するかね？」

「いいえ、《サブマリノイド》で《スピア・ドラゴン》に攻撃します」

「ほほほ、手堅いのう」

《スピア・ドラゴン》戦闘破壊

「《サブマリノイド》の効果で自身を守備表示に変更します」

《サブマリノイド》攻撃表示↓表側守備

「ターンエンドです」

彼女手札2枚

LP2100

◇ 裏 ◇

◇ あ ◇

あ||《サブマリンロイド》表側守備

彼女↓柴岡

◇ ◇

◇ ◇

LP3000

柴岡手札3枚

「ならば、その防衛を崩すでしょう」

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

「まずは……」

先程と同じような動作を経て、カードを振り下ろす。

「《大嵐》発動！」

（あ？毎回それやるのか…）

へズは柴岡の動作に食傷気味だ。

「はい」

《大嵐》効果↓セットカード《ドレインシールド》破壊

「さらにモンスター……！」

「来い！《アレキサンドライドラゴン》！」

今度は振り下ろした勢いのままに右手の先を左肩まで持っていき、

「バトル！《アレキサンドライドラゴン》で《サブマリンロイド》に攻

撃！」

《サブマリンロイド》を指差しながら攻撃宣言をした。

「はい」

《サブマリンロイド》戦闘破壊

「ターンエンド！」

彼女手札2枚

LP2100

◇ ◇

◇ ◇

柴岡↓彼女

アII 《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

◇ ア ◇

◇ ◇ ◇

LP3000

柴岡手札2枚

「時に少女よ、拙者のデュエルさばきを見て何か感想は？」

「感想…？」

「ふむ、何でも良いぞ」

柴岡は彼女の言葉を待つ。

「…カロリー消費、多そう」

「ぬう、そうきたか」

流石の柴岡もこの感想は予想外だったようで、低いトーンで呟いた。彼女は柴岡の反応を気にすることなくターンに入る。

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《鎖付きブーメラン》

(攻撃力2000には1000届かない、ので…)

「カードをセット、モンスターをセット」

「ターンエンドです」

彼女手札1枚

LP2100

◇ 裏 ◇

◇ 裏 ◇

彼女↓柴岡

アII 《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

◇ ア ◇  
◇ ◇ ◇

LP3000

柴岡手札2枚

「フッフ、攻められぬか？」

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

「出でよ……！」

（さあ、何を出ス？）

「《ミラーージュ・ドラゴン》！」

（…なるほどネ）

へズは視線を彼女に移す。

（1回戦は厳しいかもナ）

（《ミラーージュ・ドラゴン》…《鎖付きブーメラン》で止められません）  
間の悪いことに柴岡が召喚したのは《ミラーージュ・ドラゴン》、これにより彼女のセットカード《鎖付きブーメラン》の片方の効果が封じられた。

「バトル！《ミラーージュ・ドラゴン》でその裏守備モンスターに攻撃！」

「はい」

裏側守備 《カードガンナー》 戦闘破壊

《カードガンナー》効果↓彼女1ドロー ドローカード 《破壊輪》

（《破壊輪》…だめ、発動できない）

「これでガラ空きよ！《アレキサンドライドラゴン》でダイレクトアタック！」

「はい」

彼女LP2100—2000〓100

「もう風前の灯じゃな！カードをセットしてターンエンドなり！」

彼女手札2枚

LP100

◇ 裏 ◇

◇ ◇ ◇

柴岡↓彼女

ア||《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

イ||《ミラーージュ・ドラゴン》攻撃表示

◇ アイ

◇ 裏 ◇

LP3000

柴岡手札1枚

8話 #7 「1回戦 2」

「ドロロー、スタンバイ、メイン」ドロローカード《ブリザード・ドラゴン》  
(残りLP100、《破壊輪》は発動できない…でも)

「《大嵐》を発動します」  
「うむ」

《大嵐》効果↓セットカード《デイメンション・ウォール》《鎖付きブー  
メラン》破壊

(《デイメンション・ウォール》…！危なかった)

「カードをセット」

「《ブリザード・ドラゴン》を召喚します」

「《ブリザード・ドラゴン》の効果が発動、対象は《アレキサンドライ  
ドラゴン》です」

「バトルフェイズ、《ブリザード・ドラゴン》で《ミラーージュ・ドラゴ  
ン》に攻撃」

「受けよう」

《ミラーージュ・ドラゴン》戦闘破壊

柴岡LP3000→2000=2800

「ターンエンドです」

彼女手札0枚

LP100

◇ 裏 ◇  
◇ あ ◇

あ=《ブリザード・ドラゴン》攻撃表示

彼女↓柴岡

ア=《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

◇ ア ◇  
◇ ◇ ◇

LP2800

柴岡手札1枚

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

(ふむ、《アレキサンドライドラゴン》が凍ったか)

「ならば彼奴を呼び出そう！《簡易融合》発動！」

《簡易融合》効果↓柴岡LP2800—1000〓1800

「EXデッキから現れよ！《重装機甲 パンツアードラゴン》！守備表示！」

特殊召喚 《重装機甲 パンツアードラゴン》表側守備

(《簡易融合》からつてことは…)

《重装機甲 パンツアードラゴン》は破壊され墓地へ送られた場合、フィールドのカード1枚を破壊する効果を持つ。それは《簡易融合》の自壊効果でも発動される。

つまりタイムラグがあるものの、《簡易融合》が間接的に除去効果を持つカードとなる。

「モンスターセット！戦闘が駄目なら効果で破壊するまでよ！」

「ターンエンド！この瞬間《簡易融合》の効果により《重装機甲 パンツアードラゴン》が破壊され効果発動！《ブリザード・ドラゴン》を破壊してもらおう！」

「はこ」

《重装機甲 パンツアードラゴン》破壊

《重装機甲 パンツアードラゴン》効果↓《ブリザード・ドラゴン》破壊

彼女手札0枚

LP100

◇ 裏 ◇

◇ ◇

柴岡↓彼女

ア〓《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

◇ ア 裏

◇ ◇

LP1800

柴岡手札0枚

(手札は無し……このドロワーにかかっている)

「ドロワー……」

彼女はドロワーしたカードを見る。

ドロワーカード《簡易融合》

(…)

《簡易融合》は発動コストに1000LPが必要である。すなわち……

「スタンバイ、メイン」

「カードをセット」

彼女のセットカード2枚の両方ともが発動できないという絶望的な状況である。どちらもブラフにしかない。ただ存在しているだけ。

「ターンエンドです」

それでも彼女は感情を出さない。デュエルが完全に決着するまでは。

彼女手札0枚

LP100

◇ 裏 裏

◇ ◇ ◇

彼女↓柴岡

アII《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

◇ ア 裏

◇ ◇ ◇

LP1800

柴岡手札0枚

(これは決まったカ…?)

ヘズはこのターンでの決着を予期する。

「ドロー! スタンバイ! メイン!」

「さあフィニッシュと行くか! 反転召喚!」

裏側守備 《魔装機関車 デコイチ》 反転召喚

《魔装機関車 デコイチ》 効果↓ドロー

「バトル! その2枚のセットカード、恐るるに足らず!」

(とはいえ、ここは万全を期しておこうか。《アレキサンドライドラゴン》で攻撃して、もし《テイメンション・ウォール》が発動されてしまったら目も当てられないからな!)

《魔装機関車 デコイチ》でダイレクトアタック!」

柴岡の攻撃宣言後、彼女は数秒間を置いて、

「…はい」

攻撃を受け入れた。

彼女LP100—1400—1300

「まずは拙者の1勝でゲスな!」

1回戦は柴岡の勝利で決まった。これで彼女は後が無くなる。しかし彼女は依然として冷静なままだ。

1回戦終了後、紫はお互いのメインデッキのカード10枚を自分に渡すよう指示する。

それを受け柴岡はメインデッキのスリーブからカードを抜き取り10枚分紫に渡した。彼女も同じくメインデッキを紫に渡す。

紫はお互いから受け取ったカードを確認すると、5分休憩の後、2回戦を開始することを告げる。そして1回戦開始前と同様に仕切りパネル置き、タイマーを設定した。

「少々廁へ行ってくるぞ」

タイマー起動直後、柴岡は半ば急ぐようにトイレへと消えた。

デュエルを観戦していた従業員たちは浮かない顔のまま彼女を心

配そうに見つめる。中には同情し、憐れむ者もいた。

(やつぱりこうなったか…さすがのレイリちゃんでも元プロには敵わないか)

樋口も自身が懸念していた展開になり、厳しい表情を浮かべる。

誰も言葉を交わさない。ただ静かな時が流れていく。

「…アタシは今審判だから、言うことは限られてるけどさ」

そんな空気を、静寂を紫が穏やかに破る。

「勝負は最後までわかんねーよ」

「ああ、その通りだな」

紫の言葉にヘズは同意する。ヘズの表情はというと従業員たちと同じどころか、含みのある笑みを浮かべていた。

(ヘズが気になるな…何か見つけた?)

紫は1回戦の流れを通して思い返す。

(…いや、アタシの見た限り何もおかしいところは無かった。行動や言動はともかく…見落としてただけか?)

記憶を探るものの、これといった場面は見つからなかったようだ。

(ま、たといイカサマをしてたとしてもレーリが指摘しない限り審判は静観するしかないんだけど)

(あの様子じゃユカリは気付いてないようだな)

(この席からだとは良く見えてたヨ。なるほど、そのために店員を遠ざけたのか)

(次はヤツが無力な分、鈴瀬さんが勝つだろう。だが、3回戦…)

(再びヤツに力が宿ル。さあ、どうすル?)

「ふむ、時間か」

柴岡がトイレから戻り、程なくしてタイマーが5分経過を告げる。

1回戦と同じく紫は仕切りパネルを外し、お互いのデッキをシャッフルするように指示する。

彼女も今回は落とすことなく無事シャッフルできたようだ。先攻は1回戦の敗者となった彼女。

「それでは2回戦、デュエルスタート！」

8話 #8 「2回戦 1」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札《アレキサンドライドラゴン》《ミラーージュ・ドラゴン》《月の書》《連鎖除外》

「《アレキサンドライドラゴン》を召喚します」

「カードをセット」

（こっちは、残して）

「ターンエンドです」

彼女手札2枚

LP4000

◇ 裏 ◇

◇ あ ◇

あ|| 《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

彼女↓柴岡

◇ ◇

◇ ◇

LP4000

柴岡手札3枚

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

（1回戦を勝利したことにより、拙者は余裕を持って臨めるな！）

「モンスターセット！カードセット！」

（この2回戦、敗北したとしても）

「ターンエンド」

（3回戦で勝てばいいのだ！）

彼女手札2枚

LP4000

◇ 裏 ◇

◇ あ ◇

あⅡ《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

柴岡↓彼女

◇ 裏 ◇

◇ 裏 ◇

LP4000

柴岡手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドロークード《魔装機関車 デコイチ》  
(ここは、攻める)

「《ミラージュ・ドラゴン》を召喚します」

「ふう、バトルフェイズに入る前に《破壊輪》発動！対象は《ミラー  
ジュ・ドラゴン》なり！」

(させない)

「手札から速攻魔法、《月の書》チェーン発動します。対象は《ミラー  
ジュ・ドラゴン》です」

「むう、躲されたか」

《月の書》効果↓《ミラージュ・ドラゴン》裏側守備

「バトルフェイズ、《アレキサンドライドラゴン》で攻撃します」

裏側守備 《ドル・ドラ》戦闘破壊

(《ドル・ドラ》…エンドフェイズに戻ってくる、でも確か…)

「ターンエンドです」

「タダではくたばらんぞよ！エンド時に《ドル・ドラ》の効果発動！《ド  
ル・ドラ》よ、墓地から蘇れ！」

(これも、させない)

「《ドル・ドラ》の特殊召喚時、《連鎖除外》を発動します」

「なぬっ？それは発動でき…あ！」

反論しようとした途中、柴岡は発動可能な理由に気付いた。

(そうだった！自身の効果で特殊召喚される際、攻守が1000にな  
るんだった)

《連鎖除外》効果↓《ドル・ドラ》除外

「なるほど、元プロの拙者としたことが。効果はちゃんと読むべきであるな」

彼女手札1枚

LP4000

◇ ◇ ◇

◇ あい

あ〓《アレキサンドライドラゴン》攻撃表示

い〓《ミラーージュ・ドラゴン》裏側守備

彼女↓柴岡

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

LP4000

柴岡手札2枚

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

（悪くはないが、ちとキツイな）

「サブマリノイド》召喚！」

（まあ、ダメージを与えておこう）

「バトル！《サブマリノイド》の効果でダイレクトアタック！」

「はい」

彼女LP4000—800〓3200

「さらに手札1枚をコストに《超融合》発動！」

（《超融合》…）

「素材は《サブマリノイド》と《アレキサンドライドラゴン》だ！」

「はい」

「融合召喚！《重装機甲 パンツアードラゴン》！《ミラーージュ・ドラゴン》を倒せないので、もちろん守備表示！」

《超融合》発動コスト↓《リミッター解除》

《超融合》効果↓《サブマリノイド》《アレキサンドライドラゴン》墓地

特殊召喚 《重装機甲 パンツアードラゴン》 表側守備  
「拙者はこれでターンエンド！」

彼女手札1枚

LP3200

◇ ◇ ◇

◇ ◇ い

いⅡ 《ミラージュ・ドラゴン》 裏側守備

柴岡↓彼女

アⅡ 《重装機甲 パンツアードラゴン》 表側守備

◇ ア ◇

◇ ◇ ◇

LP4000

柴岡手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード 《ドル・ドラ》

(攻めたいけれど、守備力2600は大きい…)

「モンスターをセット」

(ここは、このまま)

「ターンエンドです」

彼女手札1枚

LP3200

◇ ◇ ◇

◇ 裏 い

いⅡ 《ミラージュ・ドラゴン》 裏側守備

彼女↓柴岡

アⅡ 《重装機甲 パンツアードラゴン》 表側守備

◇ ア ◇

◇ ◇ ◇

LP4000

柴岡手札0枚

8話 #9 「2回戦 2」

(ふん、この壁を越えられんようだな)

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

(まあ、こつちも似たようなものではあるが)

「モンスターセット！」

「以上！ターンエンド！」

彼女手札1枚

LP3200

◇ ◇ ◇

◇ 裏 い

いⅡ《ミラーージュ・ドラゴン》裏側守備

柴岡↓彼女

アⅡ《重装機甲 パンツアードラゴン》表側守備

◇ ア 裏

◇ ◇ ◇

LP4000

柴岡手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」ドローカード《ティメンション・ウォール》

(まだ、突破できない)

「反転召喚します」

(でも、もう1枚引ける)

裏側守備 《重装機関車 デコイチ》反転召喚

《魔装機関車 デコイチ》効果↓ドロー ドローカード 《超融合》

(きた、攻める)

ドローしたカードを見て、彼女は攻勢に出る。

「反転召喚します」

裏側守備 《ミラーージュ・ドラゴン》反転召喚

「《ドル・ドラ》を召喚します」

「ほほう、並べるのはいいが、どう崩すおつもりで？」

柴岡は余裕そうに彼女を煽るが、彼女は無反応だ。

《サブマリンドロイド》はもう墓地、なので大丈夫)

「バトルフェイズ、《ドル・ドラ》で裏側守備のモンスターに攻撃します」

「フッフ、そいつは爆弾よー！」

裏側守備 《スファイア・ボム 球体時限爆弾》

《スファイア・ボム 球体時限爆弾》効果↓装備対象 《ドル・ドラ》

「さあ！少女よ、どうする？」

《スファイア・ボム 球体時限爆弾》の効果が発動し、喜びを見せる柴岡。

しかしこの爆弾は不発弾と化す。

「手札1枚をコストに速攻魔法、《超融合》を発動します」

「むむむ、そいつを握ってたか…ってことは！」

そして柴岡は理解する。

「わたしの《ドル・ドラ》と、柴岡さんの《重装機甲 パンツアードラゴン》を素材に…」

「《重装機甲 パンツアードラゴン》を攻撃表示で融合召喚します」

《超融合》発動コスト↓《テイメンション・ウォール》

《超融合》効果↓《ドル・ドラ》《重装機甲 パンツアードラゴン》《スファイア・ボム 球体時限爆弾》墓地

特殊召喚 《重装機甲 パンツアードラゴン》攻撃表示

(3体の合計攻撃力は、ちょうど4000じゃないか！)

この2回戦の敗北を。

《超融合》の素材となった《重装機甲 パンツアードラゴン》の効果は発動せず、彼女のフィールドは3体のモンスターが並ぶ。

「《重装機甲 パンツアードラゴン》で攻撃します」

柴岡LP4000-1000=3000

「《重装機関車 デコイチ》で攻撃します」

柴岡LP3000—1400∥1600

「《ミラージュ・ドラゴン》で攻撃します」

柴岡LP1600—1600∥0

「ぬう…敗北を喫してしまったか」

2回戦は彼女の勝利、これで1勝1敗となった。

2回戦終了後、紫は1回戦終了時に預かっていたお互いのカード10枚をそれぞれ返す。

そしてこれまでと同様に仕切りパネル置き、タイマーを設定した。なお1回戦開始前と違い、制限時間は5分である。

柴岡はカードを見ながら思考する。

（ふむ、1回戦の時や今の様子を見る限り気付かれてはいないようだな）

（故に問題無しか。なら3回戦もその戦術を使わせてもらおう）

（少女には悪いが、どんな相手でも情けはかけぬのが拙者の流儀なのでな）

ヘズはカードを選ぶ彼女を見つめる。

（このまま3回戦に入ってしまうそうだな…）

（入ってしまったえば最後、鈴瀬さんの勝ちの目は無くなってしまいうだらウ）

（鈴瀬さんが勝つ道はまさに今、この選択時間にしかない）

（この時間内に気付き、辿り着ければ勝ちへ繋がる道ができる）

（だから、カード選びに時間を使ってる場合じゃないんだ…！）

彼女は組み上げたデッキを見て考える。あらかじめデッキに選ぶカードは決まっていたようだ。

（わたしの選ぶカードは、だいたい決まってる）

（柴岡さんが選ぶカードも、だいたいわかってる）

（でも、それだけ。確証は無いし、違いかもしれない）

(あとは、もうひとつの勝利への道…)

各々の考えが交錯する中、タイマーが5分経過を告げた。

仕切りパネルが外され、お互いのデッキがシャッフルされていく。

(間に合わなかった力…やはりその席からじゃ見えなかった力)

その時だった。

「あ…」

シャッフル中の彼女の手からバラバラとデッキが瓦解し、床へと滑り落ちた。

「ご、ごめんなさい」

彼女は1回戦の時と同じくテーブルの下に潜り込み、カードを拾い集める。

「ははは、案外おぬしドジっ娘属性持ちだったか!」

柴岡は微笑ましそうに彼女が拾い上げるのを待つ。

(また落とすとハ…表情には出てないが動揺してるの力?)

(何にしても3回戦に入ってしまった。この勝負、鈴瀬さんは勝てない…)

ヘズがそう思った刹那、

(…いや、まさか…!?)

脳に閃光が走り、ヘズのまぶたが大きく開かれる。

ヘズは慌てるように彼女へと視線を移す。彼女はちょうどカードを拾い上げたところであった。

「そうそう、シャッフルは慎重にしてくれたまえ」

「気をつけます」

彼女は慎重にデッキをシャッフルすると、柴岡に返す。

「どうぞ」

「うむ」

それを受けて柴岡も彼女へデッキを返し、これで準備が整った。柴岡の先攻が始まる最終デュエル。

「それでは3回戦、デュエルスタート!」

8話 #10 「続行」

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

(少しばかり偏った手札だが、問題あるまい)

「モンスターセット！カードセット！」

(拙者の戦術の前では瑣末なことよ！)

「ターンエンド！」

彼女手札3枚

LP4000

◇ ◇

◇ ◇

柴岡↓彼女

◇ 裏 ◇

◇ 裏 ◇

LP4000

柴岡手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札《カードガンナー》《鎖付きブーメラン》《月の書》《リミツ  
ター解除》

(セットカードが1枚…)

(姿を現すかは、5分の1か2…もしくは3かも)

(当たると、いいな)

「《カードガンナー》を召喚します」

「おおっと！召喚時に罨発動！《連鎖除外》」

(…当たった)

柴岡は当然のように勢いをつけて振り下ろす。

そうして表になったカード、《連鎖除外》…

「…はっ！」

ではなく、現実に表になったカードは…

罨カードですらない 《ミラーージュ・ドラゴン》

「ちよ、待て待て違う！これは…」

柴岡は驚いて固まった後、慌てて弁解しようとするが…

「違うって、何がですか？」

「ぐっ…！」

彼女の問いに詰まる。

「審判、柴岡さんは魔法罨ゾーンにセットできないモンスターカードをセットしておき、それを発動しました。これは反則ではありませんか？」

彼女は機を逸さないうちに審判にジャッジを求める。

(やはりナ。鈴瀬さんは気付いていたんだ)

(アイツのイカサマの正体ニ)

柴岡がしたイカサマ、それは…

(あのデカいスリーブには見えてる1枚だけじゃない。見えてないもう1枚のカードが入ってる)

通常、スリーブには1枚のカードだけしか入らない。2枚以上入るには入るが、そもそも入れたところで意味は無い。そのカードとして認識されるのは表の1枚だけだからだ(両面が透明なスリーブを除く)。

これはどれだけスリーブを重ねようと同じ。2枚以上カードが入っていると、見えていないカードは実戦では存在しないカードである。

しかし、前のカードが消えれば別。

(オレからは見えていた。アイツがカードを肩の後ろまで持って行った時…)

(スリーブの中からカードを1枚破棄していたのヲ)

そう、柴岡は彼女から見えない位置で前のカードをスリーブから抜き取っていた。

これにより隠されていたカードが姿を現す。すなわち柴岡は状況によって都合の良い方のカードを出していたのだ。

(破棄した場所は服の中。だから1回戦の後トイレでカードを取り出す必要があつた)

(スリーブから抜いた10枚をユカリに渡して、破棄したカードをスリーブに入れば、そのまま2回戦のデッキの出来上がりだ)

(多重スリーブはおそらく2枚入ってる不自然さを消し、抜き取りやすくするためだろう)

(あの派手な言動や行動もそれを出来るだけ自然に行いやすくするため)の芝居)

(イカサマがバレて黙りこくってる今が本来のアイツだな)

ヘズは全て見抜いていた。いや、ヘズにしか見抜けなかった。柴岡のイカサマが見える位置にいた唯一の人間だからだ。

だが実はもう1人、見えない位置に居ながらも気付いた人間がいた。

そう、彼女である。

(くそ…！何故だ？何故裏が《ミラーージュ・ドラゴン》になつてたんだ…?! 《連鎖除外》は確かに《ディメンション・ウォール》の裏に入れたはず…！)

(スリーブに入れる時に間違えたのか？いや、それは有り得ない！僕がこんなミスをするはずがない！)

(つてことは…やられたか!?こいつに…！)

柴岡は彼女を睨む。

(いつだ、いつやられた…あ！)

（あの時かつ！3回戦が始まる前、デッキを落とした時……そうか『あの時』デッキをわざと落とした』んだ！それでカードを拾う時に入れ替えた……！）

（だが知っていないと入れ替えるって発想は出ない……つまりそれ以前に気付かれてたのか……!?!）

（ぐっ……しくじった！ほぼ確実に勝てる勝負が！一転して敗北だと……くそっ！）

（イカサマ相手に真っ直ぐ戦う必要は無イ。鈴瀬さんの勝つ道はここにある）

（ユカリならアイツに対し反則負けのジャッジを下すだろう）

ヘズがそう予想した直後、紫の口が開いた。

「確かに柴岡様はルール違反をされました」  
「うう……」

柴岡から弱々しい声が漏れる。

「しかし、それが故意であることは認められません」

「よって反則では無く、警告と致します」

「……え？」

柴岡は呆気にとられ紫の顔を見上げる。

（何ッ!?警告だト!?）

ヘズの予想とは違い、反則ではなく警告。それが紫の下したジャッジだった。

「柴岡様は『ミラーージュ・ドラゴン』を墓地に送り、鈴瀬様はそのままターンを続行して下さい」

「……はい」

彼女は素直に紫の言う通りにする。彼女にとってこのジャッジは不服なはずだが、異議は唱えられない。

勝負中に問題等が発生した場合、審判である紫の裁量に従うことを

事前に約束しているからだ。

(確かに故意である証拠がありません、この勝利への道は消えました。でも…)

(これで、同じになった)

(…うおおお！警告で済んだ！まだ拙者の負けではないぞ！)

「ただし、もう1度同じルール違反をされた場合には故意とみなし反則と致しますのでご理解下さいませ」

「ぐ…し、承知した」

浮かれて喜びの表情を見せる柴岡に紫が釘を刺す。

柴岡は紫の指示した通り、《ミラーージュ・ドラゴン》を墓地に送る。

これで勝負は再開。続行ということで彼女のメインフェイズ1からとなる。

(どういうことだユカリ…！)

ヘズはこの結果に納得していない様子だ。

(フリーデュエリストのお前ならわかっているはずだロ？これは一発反則負け、レート有りのデュエルなら初期LPの4000対0での決着だト)

(鈴瀬さんに有利なジャッジならまだわかるが、何故アイツの有利になるようなジャッジをしたんだ？)

(…そういうえば勝負が始まる前から妙にアイツの言うことに素直に従ってたが、まさか買収されるとかじゃないだろうナ？)

ヘズは一瞬、紫に対し疑惑を抱く。が、それはすぐに切り捨てられた。

(いや、有り得ないナ。ユカリは買収されるくらいなら審判役を蹴るようなヤツダ。まあ、そもそも完全にアイツ寄りのジャッジってわけでもないカ)

(紫の警告でアイツはもうイカサマが出来なくなったしナ。これで対等ダ)

現在の状況

彼女手札3枚

LP4000

◇ ◇

◇ あ ◇

あⅡ《カードガンナー》攻撃表示

彼女メインフェイズ1

◇ 裏 ◇

◇ ◇ ◇

LP4000

柴岡手札2枚

## 8話 #11 「全て使って」

(あのセットモンスターは、少なくとも《サブマリノイド》じゃない)  
(あの時、見たので)

(だから、ここは)

「《カードガンナー》の効果を発動、デッキの上から2枚墓地に送りま  
す」

《カードガンナー》効果↓《魔装機関車 デコイチ》《簡易融合》墓地  
《カードガンナー》攻撃力400↓1400

「バトルフェイズ、《カードガンナー》で攻撃します」

「むむ…」

裏側守備 《アレキサンドライドラゴン》 戦闘破壊

(裏側守備の《アレキサンドライドラゴン》…たぶん攻撃を受けた時  
は、もう1枚の方が表になってたのかな)

本来、《アレキサンドライドラゴン》は裏側守備表示で場に出すこと  
は考えにくい。しかし柴岡のイカサマの正体を知っている今、その理  
由には容易く辿り着く。

彼女の推察通り、柴岡は攻撃を受けた時にはもう1枚の方のモン  
スターを。自分のターンまで裏側守備表示だった時にはそのまま《アレ  
キサンドライドラゴン》として使う予定であった。

(ぐっ…：裏のカードがわからなくなった以上、下手にこの戦術は使  
えない…表だけで戦うしかないっ…！)

紫の2度目は無いという警告も受けている。事実上、柴岡のイカサ  
マは封じられたと言っているだろう。

「メイン2、カードをセット、もう1枚セット」

そして、ようやく…

「ターンエンドです」

彼女は、この長いターンを終了した。

彼女手札1枚

LP4000

◇ 裏 裏  
◇ あ ◇

あⅡ《カードガンナー》攻撃表示  
彼女↓柴岡

◇ ◇  
◇ ◇

LP4000  
柴岡手札2枚

「ドロー！スタンバイ！メイン！」

（…まだまだ、使えなくなっちゃったからって勝負の行方はまだわからんわ！）

「召喚！《ブリザード・ドラゴン》」

イカサマが暴かれてもなお、柴岡はオーバーアクションを続けるよ  
うだ。柴岡なりの意地であろう。

「召喚時に速攻魔法、《月の書》を発動します」

「むう…」

《月の書》効果↓《ブリザード・ドラゴン》裏側守備

（《月の書》は痛いな…手札が悪い、次のターンのドローに賭ける他な  
い…！）

「ターンエンド！」

彼女手札1枚

LP4000

◇ 裏 ◇  
◇ あ ◇

あⅡ《カードガンナー》攻撃表示  
柴岡↓彼女

アⅡ《ブリザード・ドラゴン》裏側守備  
◇ ア ◇

◇ ◇  
LP4000

柴岡手札2枚

(このドロローに、かかっている)

「ドロロー…」

彼女のドロローする手に少しばかり力が入る。

(…)

そして彼女はドロローしたカードを確認すると、

(いいの、引いた)

小さく口角を上げた。

「スタンバイ、メイン」ドロローカード《スピア・ドラゴン》

「《スピア・ドラゴン》を召喚します」

(ぬう、厄介なのが来たな)

「《カードガンナー》の効果を発動、デッキの上から…」

「3枚墓地に送ります」

《カードガンナー》効果↓《ブリザード・ドラゴン》《大嵐》《アレキサ  
ンドライドドラゴン》墓地

《カードガンナー》攻撃力400↓1900

「何っ!？」

柴岡は目を大きくする。それもそのはず。

《カードガンナー》の効果により墓地に送られた後の彼女の残りデッ  
キ枚数は、0枚。

つまりこのターンを終了した時点で彼女の負けが確定する。それ  
はすなわち…

(このターンで決めるつもりかっ!?)

「バトルフェイズ、《スピア・ドラゴン》で攻撃します」

裏側守備《ブリザード・ドラゴン》戦闘破壊

《スピア・ドラゴン》効果↓柴岡LP4000→9000≡3100

《スピア・ドラゴン》攻撃表示↓表側守備

柴岡の顔が見る見る青ざめていく。

「ううう……」

柴岡のフィールドにカードは無い。ただ何も出来ず彼女のターンの行方を眺めるだけ。

「《鎖付きブーメラン》を発動します。装備する対象は《カードガンナー》です」

《鎖付きブーメラン》効果↓装備対象《カードガンナー》

《カードガンナー》攻撃力1900↓2400

これで彼女のデッキ10枚のうち、9枚が明らかになる。

「《カードガンナー》で攻撃します」

残る1枚は彼女の手札。

「つてことは最後の1枚は……！」

柴岡もそれが何か、わかっているようだ。

「はい」

「速攻魔法、《リミッター解除》を発動します」

《リミッター解除》効果↓《カードガンナー》攻撃力2400↓4800

柴岡LP3100—4800—1700

「わたしの、勝ちです」

「3回戦終了です。同時にマッチも決着しました。2勝1敗でマッチ勝者は、鈴瀬様です」

「まさか…僕が負けるなんて…」

柴岡はまだ負けを受け入れられないといった様子で呟く。

「レートが200、2000、5000ということなので…」

紫は携帯電話の計算機に入力していく。結果はすぐに算出された。

「計182万円、鈴瀬様の勝利です。柴岡様は鈴瀬様にお渡し下さい」「ぐぬぬ…」

しかし、柴岡が負けたのは疑いようの無い事実。

「…」

敗者は勝者に取り決めた分を差し出さなければならぬ。それが勝負というものである。

「…仕方あるまい」

柴岡は観念し、リュックから封筒を取り出すと、

「ほれ、182万…」

その中から現金で182万円ちようどを彼女に渡した。そして彼女が受け取ったのを確認すると、

「これにて勝負は終了です。お疲れ様でした」

紫は勝負の終了を宣言した。

## 8話 #12 「解放感」

彼女の勝利で終わったことにより、張り詰めた空気が徐々に弛緩していく。

声や態度には出さないものの、従業員たちも一様に緊張が解れていくようだった。

そんな最中、柴岡が静かに口を開く。

「…まだだ」

その声を聞き取った彼女、紫、ヘズが柴岡の顔を見る。

「もう一勝負だ、レートを倍にして…!」

(っ…!)

柴岡の諦めの悪さに紫は少しゾクツとするが、その直後、呆れを含んだ声が飛んでくる。

「やめとけヨ」

「何?」

柴岡はヘズを睨み付ける。

「わかってるだロ? トリックは暴かれてしまっタ。もう、おとなしく引くべきだト」

「ぐっ…だが、普通に戦えば…!」

「勝てるぞモ?」

ヘズは冷たい視線で言い放つ。その視線に気圧されたのか、柴岡は視線を逸らし口を噤んだ。

「そういうことダ。悪いこと言わないから引き下がリナ」

5秒程の沈黙の後、柴岡は思い出したように口を開く。

「交渉…そうだ、デュエルが終わったら交渉の約束…!」

(交渉? ああ、そんなのあったナ)

「なあ、少女よ」

「はい」

(いや待て、ちよっと約束が違うナ。勝負に勝ったらって話のはず

だったゾ)

確かにヘズの記憶通りそう言ってはいたが、その言葉は柴岡の記憶からすっぽり抜けているようだった。

「アイドルデビューしてみないか？君ならあつという間にトップをとれる」

(まあ、でも同じカ。鈴瀬さんの答えはわかりきつてル)

「ごめんなさい。デビューしないです」

彼女は頭を下げ丁寧に断った。

「…そうか」

柴岡もここは粘らずに引き下がる。

「だがもし今後、興味が湧くようであればまたメイドルチェに来るがよい。拙者はここに通い詰めてるからな」

「はい」

柴岡は席を立ち、

「では、さらばだ」

店を後にした。

柴岡が店を去ってしばしの沈黙の後、

「やった、やった…！」

「あの子柴岡に勝った！」

「ふう、見てるだけなのにすごい緊張したあ…」

従業員たちは感情を解放し、店内は安堵と喜びに包まれた。

「よくやったな、レーリ」

審判役を徹してきた紫が勝負を終えての第一声、彼女を労った。その表情は喜びに満ちている。

「はい」

彼女も微笑みを湛えて返事をした。

「ああー、この解放感ー！」

紫は「うーん」と大きく体を伸ばす。

「お疲れ様です、紫さん」

「疲れたよ、ホント」

「いやあ、面白いデュエルだったヨ。現地観戦した甲斐があつた」  
「ヘズ…」

紫はヘズを見つめる。結果的に紫が審判を務めきれたのはヘズの存在が大きかった。

柴岡に対して強く言えなかった紫では勝負に入るよう促すことも、もう一勝負を止めることも出来なかっただろう。

「助かったよ。ヘズが居なかったら正直やばかったかも」

「審判も大変だな。ユカリもよくやったヨ」

「ありがとう」

紫は顔を綻ばせた。

紫が彼女の方に視線を戻すと、いつの間にか彼女は従業員たちに囲まれていた。

「ほんとかわいいね！お人形さんみたい」

「衣装すごい似合ってるよー！まさに天使！」

「柴岡を倒してくれてありがとうがとね！」

「年はいくつ？高校生？」

「ねえねえ、うちでバイトしてみない？」

「あ…ありがとうございます」

従業員たちから次々と繰り出される言葉に彼女は少々困惑しているようだ。

「ちよつと君たち、レイリちゃんが困ってるでしょう？」

見かねた樋口が従業員たちに注意する。

「えーちよつとくらいお話させて下さいよう」

「そうですよー」

「つてか、樋口さんってこの子とどういう関係なんですか？」

「どういう関係って、デュエル関係の知り合いだよ。ほら、お話したいならー人ずつにしなさい」

「はーい。ねえ、レイリちゃんってー」

「すっかり人気者だな、レーリ」

紫はヘズの横に立ち、彼女を眺めている。

「そうだな」

ヘズも彼女を眺めながら、

「オレもお話したい…」

若干恥ずかしそうに呟いた。

「お？なんだなんだ？ヘズもレーリに興味あるのかー？」

紫はニヤニヤしながら問う。

「ま、まあナ…」

「そんじゃあ、このあと時間あるか？」

「あ？」

「飲みに行こうぜー。レーリも連れて」

――

「そうか、負けたか」

「はい…あの、黒川様」

「ん？」

「あの少女は一体何者なんです?! 異界からの刺客ですか?!」

「落ち着け柴岡。普通の人間だ、年の割りにはすこぶる強いがな」

「そんな人と戦わせないで下さいよ! 鬼ですか! 僕のお金がああ!」

「知らねえよ。こっちはお前の無茶な条件を満たす奴をタダで寄越して、その上ルールも要望通りにしてやったんだ。感謝の1つもねえのか?」

「うう…」

「忙しいから切るぞ」

(まったく柴岡の奴、でけえ声出しやがって…何が異界からの刺客だ)

(…まあ、そう言いたくなるのもわからんでもないがな)

黒川は満足そうに煙草を吹かした。

8話 #13 「審判の意図」

――

「ああー！仕事の後の1杯はうめーなー！」

「いい飲みっぷりだな、ユカリ」

勝負の後しばらくして、紫たちは居酒屋に来ていた。

「楽しそうですね」

もちろん言っていた通り、ヘズと彼女も一緒だ。

「おー楽しいに決まってるだろー！」

あと、もう1人。

「ほら樋口も飲め飲め、グイツと」

「いえ、僕はちよつとずつやりますから…」

「なんだー？アタシが飲めっていつてんだから飲めー！」

「桃山さん、もしかしてもう酔ってます!?!」

紫が樋口に絡んでいる間、ヘズは彼女に話しかける。

「鈴瀬さん、訊いてもいいかな？」

「なんででしょう？」

「柴岡のイカサマに気付いたのは、どのタイミングダ？」

「はつきりとわかったのは、スリーブから抜き取った時でした」

「ギリギリだな…というよりも気付いてなかったの力」

「はい。疑いを持っていただけでしたから…」

「疑いネ。詳しく聞かせてもらっていいかな？」

「はい、ちよつと長くなります」

彼女はそう前置きをし、一呼吸置いて話し始めた。

「まず1回戦に使うデッキを組む時に、柴岡さんは店員さんたちを遠ざけました」

「通し等のイカサマを防ぐため、という主張は正当なものでしたが、わたしは少し違和感を覚えました」

「とは言っても直感的なものだったので、何がどうとはわかりませんでした…」

「ひとまずわたしはそれを記憶の片隅に置いて、デュエルに入りました」

「デュエルが始まり柴岡さんのターン、あの動きにはちよつとびつくりしました」

「まあ、あれはナ…」

「スルーできるはずもなく…わたしは柴岡さんのあの動作には何か意味があると思います」

「でも、よく考えると注目を集めるような、あのあからさまに怪しい動きは…むしろ、おとり」

「別の何かの目くらましかと思ったりもしました」

「なので、途中からは動きにはとらわれず、それ以外のところも観察してました」

「だけど特に、イカサマをしてるような、おかしいところはありませんでした」

「もしかしたらあれは自然にやってて、イカサマなんてしていないのかなと…そんなことも考えました」

「でもイカサマをしていない、っていう結論は出さなかったんだ口？」

「はい。その結論は一応、考えられる限りの可能性を無くしてから至るものでしたので…置いたままの違和感もありましたし」

「なるほどナ。じゃあ可能性の1つとしてスリーブの裏という発想は頭にあっただってことカ」

「そうです。問題はどうか確認するかでしたが…偶然のミスがそれを可能にしてくれました」

「ははは、新品のスリーブは滑るよナ」

へズは歯を見せて悪っぽく微笑む。

「はい。あの時テーブルの下で拾うわたしを覗かなかったことも、ちゃんと覚えてましたので」

彼女もそれに答えるかのように顔を少し緩めた。

「ミスを利用し、イカサマを封じ、勝負に勝つ。鈴瀬さんは強かだナ」「ありがとうございます」

（柳沢も不運だナ。こんなデュエリストと2回も戦うなんて…オレも

戦う前に知りたかったヨ)

ヘズはフツと息を漏らした後、酒を一口流し込んだ。

「ヘズー！」

「な、何ダ？」

彼女との会話が終わったのを見計らい、今度はヘズに絡む紫。席が隣なのが災いしてか、紫に密着されヘズは身動きがとれなくなる。

「アタシっていい女だよなー？ねー？」

「近い近い、ちよつと離れろ！」

ヘズは何とか紫を引き剥がし落ち着いたところで、気になっていたことを問いかける。

「そういえばユカリ」

「なーにー」

「何である時警告で済ませたんダ？あれが反則負けになることは柴岡も知っていたはずだし、いくら柴岡でもそうジャツジすれば従ってたと思うんだガ…」

「えーだってー」

「だってー、じゃない。何か理由があるんだロ？」

「…」

「…おい、ユカリ？」

ヘズの問いに薄目でぼーっと聞き流した紫だったが、水を一口飲むと目をパチつと開け、朧な意識から目覚める。

「ヘズ…こういうレートのあるデュエルで反則のジャツジが下された時、結果はどうなる？」

「あ？それは『デュエルの途中経過に関わらず反則をしたプレイヤーはLP0になり強制的に負け、されたプレイヤーは初期のLPにして計算』だロ？」

「そうだな。今日の場合だと4000対0だ」

「それがどうしたんダ？」

「…ちよつと物足りないよな？」

紫はニヤリとする。

「!…まさか、そういうことカ!」

ヘズはその紫の顔を見て、抱いてた疑問を解消した。

「そう、アタシは賭けたんだ。LP4000以上の差をつけレーリが勝つことにね」

「あの時の柴岡の慌てっぷりを見て察したわ。レーリが何か仕掛けたんだろうなって」

「アタシもレーリと同じくイカサマ疑惑は持ってたから、把握するのに時間はかからなかったよ」

「で、思ったんだ。あのイカサマを封じ込めるジャッジを下せば、反則負けにするより多く金を出させることが出来るんじゃないかってな」

「イカサマをさせない状態で続行させることによつて柴岡のプレイングミスも出やすくなるし」

「なるほど、でもあまり分の良いギャンブルとは言えないカ?確かに柴岡は動揺しててプレイングミスをしやすい状態で、鈴瀬さんが勝ちやすかったつてのはわかるガ…」

紫はフフツと軽く笑い歯を見せる。

「それが案外そうでもないのよね。例えばヘズなら3回戦のデッキどう組む?柴岡のようにイカサマをするとして」

「どうつて、基本的には同じ種類のカードを2枚入れるヨ。場にセツトした時にも選べるからナ」

「その2枚の内、どっちを前にする?」

「良く使う方とか強い方だナ。当然だろうウ」

「つてことは読めてこないか?」

「!…そうかイカサマを封じれば、その考えで組んだデッキの前10枚…読めるつてことカ!」

「な?割りと良いギャンブルだと思わない?」

「なるほど、つまり『鈴瀬さんは柴岡がそういうデッキを組んでくるとわかった上で3回戦のデッキを組んでたはず』ダ。だからイカサマをさせない、かつ続行するようにジャッジを下した、そういうことカ」

「正解。まだ2ターン目でLPに変動が無かったってのも良かったわ」

「全く、恐ろしい審判だな…」

「レーリには悪いことしたかな」

彼女に向かって申し訳なきような笑みを浮かべる紫。

「いえ。反則のジャッジを望んだのは確かですが、結果的にはこちらの方でも良かったので大丈夫です」

「そっか。そう言ってくれると有り難いよ」

紫は安心したように軽くふーっと息を吐いた。

「でも不安でした…」

それに対し彼女は不安そうに小さな声を出す。

「う、ごめんな…」

その声を聞いた紫は重い表情で謝った。

「わたしを信じてくれたので、許してあげます」

数秒の間の後、彼女は打って変わって笑みを見せる。

「お？ちよつと偉そうだなー？」

紫もニヤリとした後、彼女の頬を指でつついた。

8話 #14 「次は忘れずに」

「ん？樋口どうした？ぽかーんとして」

樋口はというと手にグラスを持ったまま固まっている。

「いえ…なんか、話についていけなくて。僕は遠くから眺めていただけでしたから…」

「あー、そういえばアンタらは見れてなかったのか」

「ええ。何かしらのトラブルがあったってのはわかりましたが、まさかそんな駆け引きがあったとは…すごいです。さすが元プロですね、桃山さん」

「まーなー。もっと褒めてもいいぞー」

紫は気分を良くし、酒を流し込んだ。

「ところで、ヘズさんもプロだったんですね？」

樋口はヘズに問う。

「ああ、そうだよ。あつちで2年だけナ」

「引退されてからこつちへ来たんですね？」

「そうだな。引退してもデュエルは好きだったから、デュエルに関する仕事を探すために日本に来て…それからずっといるナ」

「そうだったんですね。日本語も上手ですね」

「ありがとウ。まだ難しい言葉はよくわからないけどネ」

「それは僕も同じですよ、日本語難しいですよネ」

樋口は少々困ったような笑みを浮かべながら同意する。

「つぷはー！よーしまだまだ飲むぞー！」

「紫さん、飲みすぎです」

それをよそに酒を煽る紫。

「今日ぐらい許せー！レリーも飲むか？今日は許すぞー！」

「駄目ですよ桃山さん！レイリちゃんまだ未成年ですよ!?!」

「真面目だな、樋口さんハ。ちよつとくらいなら問題ないヨ？」

「問題あります！というかそういう問題じゃないです！」

4人の夜は続いていく…

――

夜の鶉籠。ヘズは紫の手を肩に回しバランスを保ちながら歩いている。

「うー…ヘズすまんー」

だらーんと脱力した紫が舌足らずな声を発する。とてもじゃないが、自力で歩ける状態ではなさそうだ。

「まったく、歩けなくなるまで飲みやがっテ…」

「ヘズさん、大丈夫ですか？代わりましようか？」

後ろを歩く樋口が提案する。

「大丈夫だよ。ユカリの家はオレの家のすぐ近くだし、タクシーで一緒に帰るヨ」

「そうですか…あ、タクシーありましたよ」

ちょうどその時、樋口が停車してるタクシーを発見した。樋口は先に行つて確保する。

「それじゃあオレとユカリは、ここデ。今日は楽しかったヨ」

「僕も楽しかったです。帰り道、お気をつけて」

ヘズは紫と共にタクシーに乗り込んだ。

「鈴瀬さん」

「はい」

ドアが閉まる直前、ヘズは彼女を呼ぶ。

「また勝負する時は教えてくれヨ？どこからでも駆け付けるからサ」

冗談混じりに笑顔を見せるヘズ。

「お待ちしてます、ご主人様」

対し、彼女も冗談っぽく微笑み返した。

「！…」

ヘズが言葉を返す間も無くドアが閉まり、2人を乗せたタクシーは去って行く。

「僕たちも帰ろうか、レイリちゃん」

「はい」

タクシーを見送った彼女と樋口は再び歩き出した。

――

タクシーの車内にて、ヘズは今日の出来事を振り返りながら考える。

(先週は当事者として、今日は第三者として鈴瀬さんの強さを実感した)  
タ)

(鈴瀬さんの実力は、もう疑う余地なく裏プロレベルの博徒だ)

(次の勝負も是非、生で見たいネ)

ヘズは隣に首を向ける。

(まあ、この横でだらしなく眠っているユカリも結構な強さを見せたけどナ)

(オレも裏でやっていくにはまだまだ足りないナ：もつと強くならな  
いと)

(…それにしても)

ヘズはフーッと深く息を吐く。

(ご主人様は、『反則』だろ…)

窓から流れる景色を眺めながら、ヘズは軽く苦笑いをした。

――

「次はー、桐縹ー桐縹ー」

車掌のアナウンスが車内に響き渡る。2人は鶺鴒駅から電車に乗り、ここまで揺られてきた。

「レイリちゃんは桐縹駅で降りるんだよね？」

「はい。樋口さんは？」

「僕はもう1つ先だけど…送らなくても大丈夫？」

「大丈夫です」

「そっか、夜道は危ないから気をつけてね」

「はい、ありがとうございます」

やがて電車が桐縹駅に到着し、彼女は下車した。

1人になった樋口は紫の言葉を思い出す。

――

「100万200万程度の額で揺らぐような子じゃない。アタシらよりよっぽど強いよ」

「でも…!」

「それに勝負を受けたのは他でもないレーリだからな、信じて見守ってやれ」

(…桃山さんの言う通りだった。勝負を止めるなんて余計なことせず、信じて見守る…それで正解だった)

(僕なんかより、よっぽど強いデュエリストだったんだな…)

樋口は一抹の寂しさを覚える。

(なんだか急に遠くに行っちゃった感じだなあ…たぶんこれからも、僕には信じて見守ることしか出来ないんだろうな)

彼女との距離を感じながら、樋口は車内の窓から空を見上げた。

――

桐縹駅構内を出て、彼女は携帯電話を取り出す。時刻は午後10時を回っていた。

「ん…」

体を伸ばし、あくびをする。朝早くから家を出たということもあ

り、眼鏡の下のまぶたは少々重そうだ。

(今日も、勝てました)

今日の勝利を振り返る。

(紫さんも、勝ちました)

それに賭けた紫の勝利も。

(《マドルチェ・エンジェリー》にも、なれました)

勝負服の衣装も。

(にぎやかで、楽しかった。お酒が飲めなくても、ごはんおいしかった)

勝利後の酒の席も。彼女は1つ1つを思い出しながら帰途につく。

充実した1日、どこにも後悔する場面など無かった。

無いはずだった。

(あ…)

が、しかし彼女は思い出してしまった。

今日の最後、鵜櫛の締めくくり。自分がしてしまった、らしくない失敗に。

(デザート、食べてない…)

次来た時は忘れずに食べよう。彼女はそう決心するのであった。

【第8話 終】

## #S-2 「始まりの少し前」

11月5日

紫は喫茶店に黒川を呼び出した。

「で、話って何だ？」

黒川はコーヒースプーンを啜りながら呼び出した理由を訊く。

「桐縹に現れるゴロ少女」

「あ？」

「こんな噂、聞いたことないですか？」

「…いや、初耳だ」

「アタシその噂の子と何回か会ったことあるんです。昨日もフリードでデュエルしました」

「ほう、どんな奴なんだ？」

黒川はあまり興味無きような口調で問う。

「今年高校生になったばかりの子で、1人暮らし。デュエルハウスの勝ち金で生活している噂通りのゴロです」

しかし、話を聞く内に

「実力は並のゴロを大きく上回ります。アタシじゃ相手になりませんでした」

少女に対する興味が膨れ上がっていき、

「容姿もかなり整ってます。第一印象としては物静か、って感じですね。あ、あとはパズルが好きみたいで解くのも早いです」

黒川の心を魅了していく。

「そんな奴がいるのか」

「はい、いるんですよ」

「…それで、俺に話す理由は何だ？」

数秒の間の後、黒川は紫の真意を問う。

それを聞いた紫の表情は心なしに険しくなった。

「アタシの中で2つの心が、せめぎ合ってるんです」

「あの子の身を案ずる心と、あの子がどこまでやれるかを期待する心…」

「他人のアタシがどうこうするもんじゃないってわかってますし、あの子の好きなようにさせるのが良いとは思っているんです。でも、今のままだとまずいんです」

紫の顔に真剣さが増す。

「今はまだ大丈夫だと思えますが、このまま噂が広がると…あの子の身が危険です」

「下らない奴らに目を付けられたが最後、利用されるだけされて…気がつけば行方知れずになって、デュエリストとしても結局ゴロのまま終了…そんな最悪の可能性すらあります」

「そんな事態は避けたいんです。早めに手を打たないと失うかもしれないんです」

紫は強い目で黒川を見つめる。自身が何を言わんとするかを伝えるように。

「随分気にかけてるんだな」

そんな紫の目に合わせるように黒川表情も些か厳しいものとなる。

「事情はわかった。近いうちに調べておく」

言葉は無くとも紫の言いたいことのおおよそは察したようだ。

「ありがとうございます」

紫は軽く頭を下げる。

「だがいいのか？俺もその下らない奴らと同じように利用するぞ？」

「黒川さんは利用する代わりに安全を保障してくれるじゃないですか」

穏やかな表情で答える紫。

「他人をあてにするな、自分の身は自分で何とかしろ」

それに対し黒川は優しく忠告した。

その後、黒川は「後日連絡する」と言い紫と別れた。

そして3日後、今度は黒川が紫を同じ喫茶店に呼び出した。

「噂の少女についての情報が集まった」

「流石の早さですね」

黒川はコーヒーを啜り間を取る。

「…大方お前の言っていた通りだったよ。驚いたな、今のところごく狭い地域内での噂程度で収まっているが…こりや何もせずにいると広まっちゃうだろうな。かと言ってこつちからの接触は避けたいからな…」

黒川は再び間を取る。

「どうするんですか？」

「少々強引な方法だが…桐縹と周辺の目ぼしいデュエルハウスを押さえておく。で、奴が現れたら予め用意したデュエリストに勝負を挑ませる」

「もちろん高額レートの勝負だ、拒否するようなら奴の個人情報を持ちつかせ勝負を受けさせる」

「…そうする意味は？」

紫は不可解な面持ちで問う。

「意図せず窮地に立った時の力、その人間が持つ真の実力を測りたい。もし勝てばその力を評価し、利用させてもらう。負けるようならそれまで、ゴロを引退するように強いるってことだ」

「なるほど、どちらにしても最悪は防げるってことですか…でも目ぼしいデュエルハウスって、桐縹周辺って結構デュエルハウスありません？」

「押さえるのは数件だけだ。『問題無く』高額レートの勝負が出来る店は少ないからな」

「確かに店側としては色々リスクが高いですもんね、アイツが良く顔を出すフリードとかは…まず無理でしょうね」

「そうだな、限られた時間帯に数少ないそこに上手いこと飛び込んでくれるかどうか」

「これは時間かかりそうですね…」

「まあ、奴がデュエルハウスに現れる時間はおおよそ把握してるからいいとして、店の方は完全に運次第だな」

「アタシがそれとなく誘っておきましようか？」

「いや、それは駄目だ。あくまでも奴が自らの意思で店に来たという形でないとな」

「そうですか。運次第なー…」

「これは俺の勘だが、押さえた店で来るとしたら黒蠍だな」

「黒蠍ですか？ちよつとアイツの家から遠いような…」

「ただの勘だよ。なんとなくそう感じたただけだ。さて、と」

黒川は椅子から立ち上がる。

「もう行くんですか？」

「ああ、警官としての仕事が残ってるんでな」

「アイツのこと、よろしく願います」

「任せておけ。じゃあな」

黒川はそう言い残し喫茶店を去った。

1週間と数日後、黒川の勘は的中したのであった。

## 9話 #1 「同じ日に」

彼女が喫茶メイドルチェにて柴岡と勝負した土曜日。その同じ日のこと…

(うーん、これでいいかなあ…?)

藍子は鏡の前に立ち、首を傾げる。

(どうしょ、決まらないよー…!)

ベッドの上に並べられているのはクローゼットから取り出した衣服たち。かれこれ吟味し始めてから30分が経過しようとしていた。

しかし、未だに今日のコーディネートが決まらない。

「おねーちゃん朝ごはん…ってなにこれ？」

自分呼びに来た妹が部屋の光景を見て目を細めた。

「ちよつと迷ってて、えへへ」

「…気合入ってるね」

「まあね！」

気合が入るのも当然！なにせ今日は修せんぱいとのデートの日なのだから…!

…デートなのかな？デートっていうかお出かけ？桜ちゃんもいるし…やっぱりお出かけっぽい？

と、とにかく！そんな感じで気合入ってるわけで…!

「柚葉（ユズハ）はどれがいいと思う？」

せっかくなので妹、柚葉の意見も伺ってみる。

「いつも着てるのでいいんじゃない？」

興味無さ気に答える柚葉。少しは一緒に考えて欲しい。

「もう朝ごはんできるから来てね」

「はーい…」

柚葉はそう言い残し、食卓へと向かった。

…うん、そうね。ひとまず朝ごはん食べよう。食べてから考えよう。

――

(ん?)

朝食を済ませ洗い物を終えた頃、桜にメールが着信する。

f r o m 藍子

「桜ちゃん！今日の服なんだけどどっちがいいと思うー？」

送られてきたメールには画像が2種類添付されていた。

(服?)

桜は画像を開く。画像はどちらも藍子が自分自身の首から下を写したものだ。違いは着ている服。

(どっちがいいって言われてもな…兄貴の好みも知らねーし)

桜にとってはどちらも甲乙付け難かった。故に視点を変えた意見を送信する。

t o 桜

「んーどっちもいいな。動きやすい方でいいんじゃないか？」

返信はすぐに来た。

f r o m 藍子

「おー桜ちゃんがそういうならそうするね！ありがとう！」

t o 桜

「ああ。その、頑張れよ。あたしも手助けはするから」

f r o m 藍子

「うんーまたあとでね！」

桜はメールを確認すると携帯電話を閉じた。

(まあ…あたしも準備するか)

桜の中で小さく様々な感情が混ざるが、準備している間にそれらは水のように溶けていた。

――

藍子は予定時刻よりも30分早く待ち合わせ場所へ来ていた。

緊張しているのかそわそわと落ち着きが無い様子で携帯電話を操

作する。

(早く来すぎたかな…?)

藍子は改めて服を確認する。桜からの助言通り、動きやすい服を選択した。

(桜ちゃんに着いたってメール送っておこうかな)

藍子がメールを作成しようとした時、隣から自分の名が呼ばれた。

「…えっ!?!」

慌てて携帯電話から目を離し、隣を向く。

「ようアイコ、待ったか?」

声の主、桜がいつの間にか隣に立っていた。桜の後ろにはもちろん赤石も居る。

「う、ううん!今来たところ!」

初めてデートする男女のように藍子はたどたどしく返事をする。このセリフは待った側が相手に気を使わせないように言う常套句のようなものだが、藍子は実際に今来たばかりであった。

「そうか、早めに出て良かったよ」

桜はそう言う口を閉じる。いや、赤石のために間を作ったというべきか。

「藍子ちゃん、今日はよろしく」

赤石もそれを察したのか声をかける。

「こ、こちらこそよろしくお願いします!修せんぱい…!」

「ああ…」

藍子の緊張が伝わったようで、赤石は若干視線を逸らしながら答えた。

「その、服似合ってるな」

「あ…ありがとうございます!」

藍子は照れながらも笑顔を見せる。桜はそんな2人を微笑ましく見つめていた。

「じゃあ行くか」

「はいー」

――

3人がまず訪れたのは市内のショッピングモール。

「あ、このブレスレットかわいいー!」

アクセサリーショップの品々を見て目を輝かす藍子。

「ああ、そうだな」

どこか生返事の桜。とある売り物に見とれているようだった。

「?…桜ちゃん、何見てるの?」

「え?いや…」

藍子の声で桜は我に返る。桜の視線の先にあったもの、それは先端に猫を象った銀色がぶら下がっているネックレス。

「わー!猫だかわいいー!これ見てたの?」

藍子は桜に問うが、桜は気恥ずかしそうにそっぽを向く。

「…つ、次行くぞ」

それを払拭するように桜は進もうとするが、

「桜ちゃんって猫好きなんですか?」

「ああ。小さい頃から大の猫好きでな、猫が好き過ぎて猫と会話しようとにやんにやー!」

「うあー!余計なこと言うんじゃないねー!」

赤石の話し声が入ると、すかさず引き返しふともも目がけて蹴りを入れる。

「うおっ、と」

しかし直前に赤石に躲かれ、その蹴りは空を切った。

「っ…!」

桜は顔を赤くして赤石を睨み付ける。

「ふふ、桜ちゃんかわいい!その気持ちわかるよー!生き物とお話してみたいよね!」

藍子の無邪気な笑顔によって桜は恥ずかしさを抱きながらも徐々に落ち着く。

「ち、小さい頃の話だよ…!」

「今は違うの?」

「今は…」

桜は不器用で正直な子である。恥ずかしくても藍子が悲しむような答えは言わない。

「…好きだよ、今も好きだ…！」

「良かった！猫とお話したいー？」

「…まあな」

「にやんにやあ？」

「にやんにや…って何言わせんだ！」

「きやー」

藍子は楽しげに柱の陰へと隠れる。

「ったく…」

「はは、さすがに藍子ちゃんに蹴りは入れないか」

「当たり前だろ。兄貴で間に合ってるし」

言うまでもない、という態度を見せる桜。

「いや俺にも控えてくれよ…」

その態度に赤石は小声で突っ込むしか出来なかった。

## 9話 #2 「食事に映画にカード」

――

一通りショッピングモールを回った3人は、お昼時ということもあつてモール内のレストランに来ていた。

「どれにしようかなー」

藍子はメニューを見ながら「うーん」と悩む。

「兄貴、何頼む？」

「俺はミックスフライ定食だな、特盛りの」

「昼間っからよく食うな…」

桜は半ば呆れながら呟く。

「わー修せんぱい、たくさん食べるんですね！」

「まあ、鍛えてるからな。食わなきゃ痩せちまうんだ」

「ふえー…食べなきゃいけないって大変そうですね」

「お？わかつてくれるか」

「はい！修せんぱいの体見ればわかります！」

服の上からでもわかる筋骨隆々の肉体。並々ならぬ努力の結晶であろう。高い身長も相まって維持するだけでも大変だというのは想像に難くない。

「桜ちゃんは決まった？」

「あたしはハンバーグ定食にする。アイコは？」

「うーんと、じゃあ桜ちゃんと同じので！」

――

昼食を済ませた3人は次の目的地、映画館へと歩く。

「どんな映画なんだ？」

桜は道中、藍子に問う。

「恋愛映画だよー。泣けるって評判みたい！」

「ふーん…」

「あの、修せんぱいってどんな映画が好きですか？」

「ん、俺は…そうだな、アクションとかSFが好きだな」

「あ、ひよっとして恋愛系は…」

「ああ、苦手ってわけじゃねえんだ、あまり見ないってだけで。だから今日のは楽しみだよ」

「それなら良かったです！」

藍子は一瞬まずいと思ったものの、赤石の楽しみという言葉を聞いて安堵した。

映画館への道の途中、公園の前に差し掛かった時、赤石の歩みが止まる。

(この後映画か。トイレ済ませといた方がいいな)

「悪い、トイレ寄ってくる。ちよっと待っててくれ」

「あ、はい！」

赤石はそう言うのと公園の公衆トイレへと入っていった。

「ねー桜ちゃん」

藍子が桜に話しかける。

「何だ？」

「今更だけどこの服どうかな？」

「いいんじゃないか？似合ってるよ」

「うん…」

藍子は浮かない顔で頷く。

「どうしたんだよアイコ、自信持ちな」

「そう言われても…」

桜は藍子を元氣付けようとするが、藍子の態度は変わらない。

(らしくねーな、本当に似合ってると思うんだけど…ん？)

どうしたものかと思いつながら、桜は藍子の視線が自分の顔の下あたりに向けられていることに気付く。

「桜ちゃんが羨ましい…」

視線をそのままに藍子はぽつりと呟く。

「羨ましい?」

「胸、おつきくて羨ましい」

「!…なっ!」

「制服だと目立たなかったけど、桜ちゃん何でそんな大きい!? ずるい!」

「し、知るか!」

(つーか、浮かない顔してた原因それかよ!)

桜は胸元を隠すように腕を組む。

「桜ちゃん見てると自信なくしちゃうよ。私、背もちっちゃければ胸も薄いし…」

自身の胸部を見下ろす藍子。

「…気にしなくていいと思うけどな」

「そうできたら楽なんだけどね…」

桜が想像してる以上に藍子は気にしているようだった。

(あー参ったな…何か言うべきなんだろうけど下手なこと言えねし、あー…)

桜は軽く頭を搔く。

「あ、ごめんね! せっかくのお出かけなのに気分下げちゃうよね、あはは!」

そんな桜の様子を見た藍子が笑って取り繕う。

「あ、ああ…」

桜も藍子に合わせるように表情を緩めた。

「すまん、待たせたな」

「いえ! おかえりなさい」

そしてタイミング良く赤石が戻り、3人は再び映画館へと歩き始めた。

――

「うつ…ぐずつ」

映画館を出てもなお、藍子は啜り泣いていた。

「そろそろ泣き止みなよ…」

藍子の様子に桜は若干困惑する。

「藍子ちゃんの気持ち、わかるな。良い映画だった」

赤石は涙こそ見せないが、映画の内容は心に響いていたようだ。

「まあ良かったけどさ、泣くほどでもないって言うか…」

桜は口ではそう言うものの、赤石は知っている。

「…フツツ」

「な、何笑ってんだ」

「何でもねえよ」

上映中、必死に声を押さえて涙を流していたのを。

「ごめんなさい、もう大丈夫です。えへへ」

泣き止んだ藍子が照れ臭そうに笑顔を作る。

「16時か…このあとは、どうする？」

桜が時刻を確認して問いかける。

「あの、近くですしカードショップに寄ってもいいですか？」

それに答えるように藍子は提案した。

「…」

「…」

桜はストレージから取り出した1枚のカードに目を奪われている。

「ほお？《バニーラ》か」

赤石が隣で桜の手元を覗く。桜が気付かないうちに隣に居たようだ。

「なっ…！見るな！」

桜は慌てて肩を丸める。

「隠さなくてもいいだろ…」

その様子やりとりを聞いていた藍子が口を開く。

「へー、桜ちゃんウサギも好きなんだね！」

「まあ…な」

「小さい頃は猫一筋だったんだけどな。すっかり小動物全般を愛する

子に――」

桜は話を遮るように赤石の足を無言で踏む。

「だっ……いきなり踏むな」

「あーそうだ桜ちゃん、新しいデツキ何にするかまだ決めてないんだよね？」

「ん？ああ」

「動物が好きなら動物デツキとかどうかな？」

「……」

藍子の提案に桜は黙りこむ。恥ずかしさのせいかな素直に即答できないようだ。

「桜ちゃん？」

しかし答えは決まっている。数秒ほど迷ったふりをした末、

「……組めるなら組みたい」

控えめな声で意思を伝えた。

## 9話 #3 「翌日に」

――

カードショップからの帰り道。3人は交差点の前で立ち止まる。

「今日がありますがとうございました！すごく楽しかったです！」

「ああ、俺も楽しかった」

「それじゃあ私はこっちなので！」

「あの、修せんぱい！また私と…」

もじもじと言葉に詰まる藍子。

「そうだな、また遊ぼうな」

赤石はそれを察して微笑みを見せると、

「はい！」

藍子は元気良く笑顔で答えた。

「桜ちゃんもまた学校でね！ばいばい！」

「ああ、じゃあな」

3人はそれぞれ帰路についた。

――

「ただいまー」

「おかえり。どうだった？」

玄関のドアを開けてすぐ、トイレから出たばかりの柚葉が訊いてくる。

「楽しかったよー！」

もちろん、といった感じの笑顔で答える。でも、わかっちゃう。

「ふーん、よかったね」

興味無さ気に答える柚葉。やっぱりね。

「もー冷めてるなー！柚葉は」

「おねーちゃん、暑苦しいから抱きつかないで」

この冷めた反応、私のよく知るいつもの柚葉。だけど最近はさらに

冷めちやっつてお姉ちゃんはちよつと寂しい。

「ぶー、少し前まで『おねーちゃんおねーちゃん』ってあんなに懐いたのにー」

「成長したの」

「まだまだお子ちゃまのくせにー」

それを聞いた柚葉がむつと顔をしかめて、

「おねーちゃんには言われたくない。体もお子ちゃま」

私にとって強烈な毒を飛ばしてくる。

「ちよつと！人が気にしてることを…！つていうか体『も』つて何よ！」

答える間もなく、柚葉はスタスタと部屋に戻って行く。ぶー、かわいくないなーもう！

ー

(どう組むのが良いんだ…?)

夜9時、入浴と夕食を済ませて部屋に戻った桜はカードショップで購入したカードたちとにらめっこをしていた。

購入したカードは主にファーニマル。主に動物をモチーフにしたぬいぐるみのようなモンスターたちが活躍するデツキだ。だが、

(つーか何だ？融合の方は凶悪な見た目してんな。アイコに選んでもらったけど、ちゃんと見ておくべきだったかな…)

一部のモンスターはそうではない。

(…植物の方組み直すか、こっちはまたアイコに教えてもらおう)

桜が手元のカードをまとめようとした時、思い出す。

(あ、そうだ。『DUEL ONLINE』なら…アイコに連絡するか)

桜は携帯電話を取り出しメールを送信した。

f r o m 『藍』

「やつほー！桜ちゃんデツキ組めた？」

桜のもとにメッセージが受信する。

to『sakura』

「kumetenai」

to『sakura』

「組めてにあ」

to『sakura』

「組めてない」

from『藍』

「あはは（笑）組めてないんだね」

to『sakura』

「ファーニマルよくわからない」

from『藍』

「よくわかんないかー。教えてあげたいけど文章だと長くなるから」

from『藍』

「月曜日に教えてあげるね！それじゃあデュエルしよ！」

to『sakura』

「うん」

桜と藍子は『DUEL ONLINE』内でデュエルを開始した。

――

桐標駅から夜道を歩き、彼女は自分の住むアパートに到着する。

デュエルハウス六武衆でのサングラスの女とのデュエル、喫茶メイドルチェでの柴岡との高レート勝負。紫たちと居酒屋での食事：ほぼ半日滞在した鴉櫛で彼女はこれらの出来事を経験した。

アパートの階段を上り、通路に出る。ちょうどその時、彼女の隣の部屋の扉が開いた。

（お隣さん…？）

表札に『梅里』と記されてある隣の部屋から出てきた住人は鍵を閉めると彼女に気付く。

「お、ひよっとして鈴瀬ちゃん？今帰りかい？」

「はい。こんばんは、梅里さん」

彼女に話しかけた隣の住人こと梅里、黒川の部下の警察官である。しかし互いに黒川という人間を通して知っていないので、隣人同士という関係に収まっている。

「僕は今から泊まり込みの仕事でさー」

「大変ですね」

「もう慣れたけどね。ところで、制服の時と随分印象が変わるんだね？最初わからなかったよ」

「この姿も、わたしです」

「そっか、そうだよ」

梅里は「ハハッ」と軽く笑う。

「さて、そんじや行つてきますか」

「お気をつけて」

「…あ、鈴瀬ちゃん」

階段の手前で梅里は思い出したように振り返る。

「はい」

「夜遊びは程々にしなよ？度が過ぎると補導されちゃうからね」

梅里は冗談っぽく笑うと、

「気をつけます」

階段を下りて行った。

――

翌日午前9時、メールの着信音で彼女は目を覚ます。

「ん…」

体を起こして携帯電話を手に取り、メールを確認する。

f r o m 綾芽

「朝早くからすみません。今日麗梨さんのお家にお邪魔してもいいですか？」

t o 麗梨

「ふふ」

f r o m 綾芽

「ありがとうございます。あの、今からでもいいですか？」

t o 麗梨

「どうぞ」

彼女は携帯電話を置き、ベッドに座ったまま体を伸ばした。

(先にシャワー、ひと浴び)

## 9話 #4 「知りたい朝に」

――

彼女の「どうぞ」というメールを受信してから綾芽はすぐに彼女の家へと向かった。

(今日はお母さんもお父さんも休み…家に居たくない)

綾芽は自分の家から離れるように、心持ち速めに歩く。

(朝早くから「勉強しろ」とか「家事手伝え」とか、そんなのばっかり)

綾芽は「はあ…」と、ため息をつく。

(自由になりたいな…)

程なくして綾芽は彼女の家に着し、インターホンを鳴らした。

ガチャッとドアが開く。

「!…麗梨さん!?!」

ドアを開けた彼女の姿に驚く綾芽。

「入って」

そうやって綾芽を招く彼女は体にバスタオルを1枚巻いただけの、いわゆる風呂上りの姿だった。髪もまだ乾かしていないのか、彼女の足元に水滴がポツリポツリと落ちる。

「は、はい!お邪魔します…お風呂入ってたんですね、間が悪くてごめん下さい」

「気にしないで」

綾芽が靴を脱いで家に入ると、彼女は髪を乾かしに洗面所へと向かう。

(今日も麗梨さん1人…)

綾芽は家の中を見回す。彼女以外に人の気配は無い。というより、彼女以外に誰かが住んでる気配が無い。

(もしかして、ひとり暮らしなんですか?)

綾芽は疑問を抱く。それと同時に綾芽の中で複雑な感情が生まれた。

羨ましさの中にぴたりと張り付くような違和感。その心に傾くほど、そばにいるはずの彼女の姿が靄がかる。

(…違う、羨ましいなんて思っちゃだめ。麗梨さんだって何か事情があるのかもしれないのだから)

綾芽は軽く「ふー」っと息を吐き、心を落ち着かせる。

「どうしたの」

その時、髪を乾かし終えた彼女が洗面所から戻ってくる。

「ひえ…！あ、何でもない…です」

綾芽は一瞬驚いて、冷静になる。

「…」

彼女は綾芽の前に座り、綾芽をじつと見つめる。

「え、えっと…何でしょうか？」

「知りたい？」

彼女の問いに綾芽は考える。

(知りたい、って何のことだろう…?)

(!…もしかして、さっきまで私が考えてたこと?)

綾芽も彼女に問い返すような目で見返すが、直視できなかったのかすぐに視線を外した。

(何だか見透かされてる気がします…だとしたら、隠さなくてもいいかな…?)

「…麗梨さんが良ければ、ぜひ教えて下さい」

綾芽は彼女に視線を戻し、しっかりと視界に捉えて答えた。

「あ、ちよつと待って」

綾芽が答えてから開口一番、彼女は台所へと向かうと、

「綾芽」

綾芽の方に首を向ける。

「は、はい」

「レモンティーあついのと、つめたいの、どっちがいい？」

「えっと…じゃあ、冷たいので」

「メロンパン、食べる？」

「い、いえ。食べてきたばかりなので…」  
「そっか」

それを聞いて彼女は2人分のアイスレモンティーを作り始めた。  
(お話が始まるかと思いきや、このマイペースさ…麗梨さんらしいです)

「はい、どうぞ」

彼女は綾芽の前にアイスレモンティーを置く。

「ありがとうございます」

彼女も綾芽の対面に腰を下ろし、アイスレモンティーとメロンパンを置いた。

「朝食ですか?」

「うん」

彼女は頷くと、メロンパンを口に運びながら話し始めた。

——同じ頃

(ピアノの先生がいらっしやるまで少し時間があるわね)

琥珀は空いた時間を利用し「DUEL ONLINE」に繋ぐ。

(小松さんは…いないのね)

綾芽こと『Ryoga』はもちろんオフライン状態だ。琥珀はランク戦で対戦相手を探す。

相手はすぐに見つかった。琥珀は相手の名前を見る。

(!…な、なんてこと!)

琥珀は目を大きくして驚いた。

琥珀の対戦相手はランク『S』プレイヤー、『graybloom』  
開始早々、最強の1人と当たってしまったのだ。その事実には琥珀は興奮する。

(いきなりランク『S』とは、驚いたわ!その実力、見せてもらおうかしら!)

琥珀は意気揚々と勝負に臨んだ。しかし『graybloom』の

徹底したメタの前に為す術もなく敗北を喫してしまうのであった。

――

「そうだったんですね…」

綾芽は真剣な表情で呟く。

彼女は綾芽の知りたいたいと思われれることを話した。1年前から1人で暮していること、1人でも寂しくは無いということ、お金の心配も無いということ。

そして、今の境遇に対して不幸だとは思っていないということ。

(麗梨さんは強いです…私じゃこんな風に思えるかどうか…)

綾芽は彼女の強さの源を知る。しかしそれと同時に、やはり綾芽は羨ましく思っていた。彼女のその今が、綾芽が憧れていた自由な姿そのものだったからだ。

「綾芽」

彼女は少し間を置いた後、名を呼ぶ。

「はい、何でしょう?」

「知りたい」

彼女は再び綾芽をじつと見つめる。

「知りたいと言われましても…」

綾芽は先程と同じく視線を外す。

(話していいのかな…?)

綾芽は基本的に本心や本音を言わない子である。自分の気持ちを言わず周囲の機嫌を窺いながら生きてきた。

(麗梨さん、私は…)

しかし彼女と出会ってからというもの、少しずつではあるが自分の心に従うことも増えてきた。

「聞かせて」

彼女の目と言葉には魔力がある。全てを受け入れてくれると錯覚してしまう程の彼女の魔力に綾芽の心が揺れ動いたのか、綾芽は伝え

たいことを打ち明けた。

――

ズズ、ズズズー…

部屋に麺を啜る音が響く。『graybloom』はインスタントラーメンを流し込みながら、とある掲示板サイトを閲覧していた。

『136：廃裂野郎は運営になんぼ貢いだるんや』

『179：廃人裂は今日も引きこもって不正勝利稼ぎに勤しむの巻』

『228：デュエルにどれだけ勝ってもリアルで敗さんみたいなww』

(また変な呼び方が…ん?)

呆れながら掲示板の書き込みを読んでいると、メール受信を知らせる通知が表示された。「DUEL ONLINE」経由でプライベートメールアドレスに1通のメールが届けられたようだ。

(あれ?メールは受け取らない設定にしてるはずだけど…)

『graybloom』はメッセージや「DUEL ONLINE」からのメールを一切受け取らない設定にしている。イタズラやスパムの類でメールボックスがあつという間に埋まってしまうからだ。

(運営側のミス?)

そう思いつつ『graybloom』は受信したメールを開いた。

(…!?これは…!)

## 9話 #5 「そのまま答えに」

――

「私も自分の意見を言うようになったのですが、聞く耳持ってくれませんか…」

『私たちの言う通りにすれば間違いの無い人生が送れるの。綾芽のためを思っただけで言っているのよ』と私に言っただけで…」

綾芽は俯きながら話す。

綾芽は1人っ子である。両親の期待を一身に背負い育ってきた。綾芽自身もそんな両親の期待に応えるべく両親の望むように振る舞い、努力してきた。

中学時代まではそれで良かった。特に疑問を抱くこともなく、そういうものだと受け入れてきた。特に疑問を抱くこともなく、そういうものだと受け入れてきた。

しかし高校生になり、ある人物と出会うことによって綾芽の心に変化が起こる。

その人物は周囲とは比べ物にならないほど強烈に自分というものを確立し、何者にも流されることのない、綾芽とはまるで正反対のよきな存在。

そう、彼女である。

「綾芽は、どうしたい?…」

彼女と接する内に、綾芽はこれまで受け入れてきたことに対して疑問を抱くことが多くなり、そして彼女に触発されるように自分の気持ちに正直になることも多くなった。

しかしそれは綾芽の両親にとっては『子供特有の親に対する反抗』としか捉えられず、綾芽はこれまで通り理想を押し付けられるだけだった。

ここまでの綾芽の語りからの印象だと相当きつく縛られているように思えるが、実際はそれほど強くは制限されていない。放課後や休日には基本的に遊びに行くことができ、門限も夏場は18時半までとなっている。

「私は…私の人生を歩みたい。だけど決してお母さんやお父さんの指し示す人生を否定してるわけじゃないんです」

「うまく言えないけど、それしか道が無いわけじゃないと思うんです。でも両親は理解してくれなくて…」

俯いていた綾芽は顔を上げ彼女を見る。

「麗梨さん…麗梨さんなら、どうしますか？」

行き詰りそうな自分に彼女なら答えをくれる。綾芽はそう思って彼女に問うが、

「わからない。答えを出せるのは綾芽だけ」

彼女の返事はどこかそっけなかった。

「そう、ですよね…」

綾芽は下を向く。

「答えが出ないなら、そのままでもいい」

「えっ？」

が、彼女の言葉に再び顔を上げた。

「そのままでもいい、って…でもそれじゃあ」

「変わらない、って思う？」

彼女は綾芽の考えを先取りする。

「…」

綾芽は遠慮がちに頷く。

「じゃあ考え方を変えるね」

「綾芽らしく、そのまま。それも答え」

「…！」

綾芽は彼女の言葉の意味を考える。

（私らしく、それも答え…）

そして数秒考えた後、理解する。

（そっか、そういうこと…！）

「私らしく、それでいいんですよね」

綾芽の答えを聞いた彼女は優しく微笑んだ。

(麗梨さん、やっぱり麗梨さんは凄いです)

――

(ふう…完封されてしまったわ。『gray bloom』、流石ランク『S』ね)

琥珀は苦笑いを浮かべる。

(まあ相手がランク『S』だと、負けたところで私のランクには影響無いのだけれど)

そう思いつつも念のため自分のランクを確認する琥珀。

琥珀のランクは対戦前と同じく『B』のままだ。

(貴重な経験が出来たと考えましょう)

琥珀が一息ついたところで部屋のドアがコンコン、とノックされる。

「はい」

「お嬢様、ピアノのお時間でございます」

ドア越しから聞こえる声に、

「今行きますわ」

琥珀は返事をした。

――

「麗梨さん、テーブル使いますね」

「どうぞ」

綾芽は持参した勉強道具をテーブルに広げる。

「あの、もしよければ勉強教えてもらってもいいですか?」

「わたしのわかる範囲で良ければ」

「はい…!」

綾芽はどこかすつきりした表情で勉強に臨んだ。

「じゃあ早速なんですが、この問題は――」

――

プルルル、と着信音が響き、黒川は携帯電話を手取る。

「おう、どうした？」

「負けたわ」

「そうか」

「リベンジ」

「いつがいいんだ？」

「なるべく早く」

「ああ、少し待て」

黒川は手帳を取り出し予定を確認する。

「そうだな、水曜の夜でどうだ？」

「うん」

「分かった、あいつに伝えておく」

「受けてくれるかしら」

「相手、という面では問題無いだろうよ」

「そう。じゃあお願い」

「ああ。あと、これは俺の個人的な意見なんだがな――」

――

(…ふう、これで地理は大丈夫かな)

「ん――」

綾芽は筆記用具を置いて体を伸ばす。

「あ、もうお昼…」

壁に掛けられた時計を見て時間を確認する綾芽。気が付けば時刻は12時を回っていた。

「お昼ごはん、食べに行く？」

「うーん…」

彼女の提案に綾芽は少し考え、

「せっかくですが、お家に帰ります。お母さんがご飯用意して待つて

るかもしれませんが…」

「わかった」

乗らないことにした。

「麗梨さん、今日はありがとうございました。心がちよつと楽になった気がします」

玄関先で綾芽はお礼を述べる。

「どういたしまして」

「それでは、また学校で」

「うん、ばいばい」

綾芽は控えめに手を振って帰路についた。

9話 #6 「昼食のお誘い」

――

綾芽が彼女の家を去って数分後、彼女の携帯電話にメールが着信する。

from 藍子

「おはよーレイちゃん！もうお昼ごはん食べた？」

to 麗梨

「まだ」

from 藍子

「今から一緒にどうかな？レイちゃん行ってみたいお店があるの！ちよつと遠いけど…」

藍子からの昼食のお誘い。彼女は迷わず返信した。

to 麗梨

「行く、連れてって」

from 藍子

「じゃあ12時半に桐縹駅に来てね！」

to 麗梨

「うん」

――

12時半、桐縹駅前で彼女と藍子は合流し、軽く挨拶を交わすと電車に乗って目的の店へと向かった。

途中、藍子が彼女に話しかける。

「先月オーブンしたばかりだね、パンケーキが美味しいって評判なの」「楽しみね」

「うん！私も楽しみ。そういえばレイちゃんって甘いもの好きだったよね？って思い出して、いつか一緒に行ってみたいって思ってたの！」

ニコツと彼女に笑顔を向ける藍子に対し、彼女も微笑み返す。

「覚えててくれて、ありがとう」

「えへへ」

――

「このお店かな」

電車から降り駅構内から出て数分、2人は目的の店に到着する。

「いらっしやいませー」

入店した2人の方へと1人の店員が近付く。

「2名様ですか？こちらの席へ…あ？」

そのまま席に案内すると思いきや、店員は2人の顔を見ると怪訝そうな表情を作る。

その反応を受けて、藍子も店員の顔を見ると大きく目を開いた。

「椎名さん…!?!」

「何だよ」

先程までの営業スマイルが消え無愛想になった店員、椎名。

「ここでバイトしてるんですか？」

「見りやわかるだろ」

他の店員と同じく椎名は店の制服を着用している。見ての通りアルバイトをしているようだ。

「席案内するから」

「は、はい」

藍子と彼女は歩き出した椎名の後をついて行き、席へと座る。

「注文決まったらそのボタン押して」

椎名はそう言い残し、店の奥へと入って行った。

「へえ、びっくりした…椎名さんここでバイトしてるんだね」

「似合ってた」

「うん、よく似合ってた！椎名さんの笑顔も初めて見たかも」

「ちよつとだけ」

「あはは、すぐいつもの椎名さんになってたね」

藍子はメニューを開く。

「どれにしようかなー」

「どれもおいしそう」

彼女も同様にメニューを見て考える。

「レイちゃん決まった？」

「うん、スクランブルエッグのパンケーキ」

「おお、ごはん系？のパンケーキだね」

「甘い系は、あとのお楽しみ」

「そうだね、私も同じのにしようかな」

藍子はテーブルの呼び出しボタンを押した。

注文を取りに来た店員も料理を運んで来た店員も、椎名とは別の店員であった。

椎名はというと店の奥に入ったきりそのままのようだ。

「ふわふわしておいしいー！」

藍子は美味しそうにパンケーキを頬張っている。

「たまごとの相性も、抜群」

彼女も美味しそうに口へと運ぶ。

「ねえ、レイちゃん」

「なに」

「このあと時間あるかな？久しぶりに私の家来ない？」

「ある、行く」

「うんー！」

藍子は嬉しそうにニッコリと笑った。

「ふーおいしかったねー」

「おいしかった」

「えっと、デザートどれにしよつか？」

食べ終えた2人はデザートのことを考える。

(どれもおいしそうだけど…)

藍子は軽くお腹に手を置く。

(1人分はちよつと多いかな)

「アイちゃん」

「うん？なにー？」

「わたし1人分食べきれない。はんぶんこしよ」

彼女は藍子の動作から察したのか、先取りするように提案する。

「！…うん、私も同じことと思ってた！いいよ、はんぶんこしよ！」

その後注文するメニューを決めると、藍子は再びテーブルの呼び出しボタンを押した。

「うーん甘くておいしー！」

藍子は注文したフルーツアイスパンケーキを堪能する。

「おいしい」

彼女も同じ皿の反対側から取って食べているようだ。

「…あ」

パンケーキを口に運ぶ彼女の顔を見て藍子は声を漏らす。

(ふふっ、レイちゃん声は冷静だけど、ほっぺた緩んでる…！)

「？」

彼女の疑問の表情に対し、

「ううん、何でもないよ！」

(レイちゃんと一緒に来て良かった！)

藍子はニコッと笑って返した。

「ありがとうございますー」

食事を終えた2人が会計を済ませ店を出ようとした時、

「待て」

席に案内して以来、店の奥に入ったきりだった椎名が2人の前に姿を現す。

「！…あ、椎名さん」

藍子は椎名の方へと顔を向ける。その藍子に対し椎名は少し鋭い

目付きで、

「余計なことは言うなよ」

　　と言いつつ視線を逸らす。

「言わないよ。それより椎名さん」

「何だ？」

「パンケーキ、すごくおいしかったよ！ね、レイちゃん」

　　椎名の態度とは対照的に藍子は笑顔で話す。

「うん。また食べたい」

「…」

　　椎名は視線を逸らしたまま何も答えない。

「あ、もしかしてあのパンケーキ椎名さんが作ってくれたの？」

「違う。ウチは片付けしただけ」

　　視線を戻し無愛想に否定する椎名。

「そっか。ねえ、また食べに来てもいいかな？」

「…勝手にしろ」

　　椎名は少し間を置いて答え、店の奥へと戻って行こうとするが、

「椎名さん」

　　彼女に名を呼ばれ振り返る。

「次はずっと笑顔の椎名さんでお願いします」

　　彼女は椎名に見せつけるかのようにニコっと小さな微笑みを見せる。

「やっぱ来んな」

　　椎名はそう言い残すと、再び店の奥へと戻って行った。

9話 #7 「デュエルにゲームに」

――

「ただいまー」

藍子は玄関のドアを開けて、いつものように帰宅を告げる。

「おかえり」

ちょうど廊下を歩いていた柚葉が、やはりいつものように挨拶を返す。

「おじゃまします」

「！……」

その聞き覚えのある声と共に現れた人物を見て、柚葉は不意を衝かれたように立ち止まった。

「レイおねーちゃん…!? ひさしぶりー！」

「こんにちは、柚葉ちゃん」

彼女の微笑みを見て、柚葉の顔も綻んでいく。久々に会えた喜びに溢れているようだ。

(柚葉のあんな顔、久々に見たかも…レイちゃんに会いたがってたもんね)

藍子は姉として、妹の喜ぶ顔を穏やかに眺めていた。

――

彼女、藍子、柚葉の3人は藍子の部屋で他愛も無い話を楽しんでいた。

「あのね、わたしかみの毛のぼしてるの。レイおねーちゃんみたいなきれいなかみ型にしたくて」

「ありがとう。柚葉ちゃんの髪、綺麗ね」

彼女は柚葉の髪を撫でる。

「えへへ…あ」

直後、柚葉は何か思い出したように立ち上がり、

「ちよつと待っててね」

藍子の部屋を出た。

「私にもあんな笑顔見せてくれると良いんだけどねー…」

藍子は少し寂しげに呟く。

「見せてくれないの？」

「うん、最近あまりお姉ちゃんお姉ちゃんって言わなくなってきたし

…これも成長なのかなー」

「でもレイちゃんには相変わらずでちよつと安心したかも」

「わたしも成長を見届けてみたい」

「ふふ、毎日見に来ないといけないね」

数秒後、柚葉が部屋に戻る。手にはデツキが握られていた。

「レイおねーちゃん、デュエルしよ」

柚葉はデツキを前方に翳す。

「柚葉、レイちゃんは今日カード持ってー」

「いいよ」

懐からデツキを取り出す彼女。

「きてるの!?!」

藍子は準備の良い彼女に驚く。

「なんとなく、持参した」

「なんとなくなんだ…」

「おてやわらかにおねがいます」

柚葉はデツキを彼女に渡し、テーブルの前に座る。

「ごちそう」

彼女も同様にデツキを柚葉に渡した。

お互いデツキをシャッフルして返す。じゃんけんの結果、彼女の先攻でデュエルが始まった。

――

「《E・HERO エアーマン》でダイレクトアタック」

「うー、やっぱりレイおねーちゃん強いー」

デュエルの結果は想像に容易い。ただ年齢差を考慮すれば食らいついた方ではあったが。

「プレイング、うまくなったね」

「レイおねーちゃんと良い勝負ができるように練習したんだー」  
練習の成果が出ていたようだ。

「しよっちゆうデュエルに付き合わされてたからね」

藍子は多少呆れを含みながら言う。

「ねーねーもう一回しよ」

「えーっ、次はお姉ちゃんに譲つてよー」

「おねーちゃんは今までいっぱいレイおねーちゃんとデュエルしてきたでしょ」

藍子は知っている。柚葉が彼女に憧れを抱いていること、そしてその憧れの相手である彼女とどれだけデュエルしたがってたかを。

しかしそれは藍子も同じこと。柚葉ほどでは無いが、藍子もまた彼女とデュエルできる日を楽しみにしていた。

「むー…じゃあ勝った方でどう？」

そのような事情も顧みて藍子は考えた後、提案する。

「うーん、いいよ」

柚葉も少し間を置いて受諾した。

「おねーちゃん、てかげんしないでね」

「もちろん！本気でやるからね」

彼女とのデュエルを賭けた姉妹のデュエルが始まった。

――

「うー、あともうちよつとだったー…」

悔しさを漏らす柚葉。

「惜しかったね、柚葉」

寸前まで彼女を追い詰めた柚葉に感心する藍子。

「ぎりぎり勝てた」

追い詰められた末の勝利ではあったというのに、どこか嬉しそうに

顔を綻ばせる彼女。

3人がデュエルを始めてから2時間、ついに柚葉が彼女に勝利する時が来たと思いきや、目前でそれには届かずという結果に終わる。

(前から思ってたけど、柚葉ってデュエルのセンスあるかも…！レイちゃん相手に結構いい勝負してたし、私そのうち追い抜かれそう)

藍子が姉越えを危惧する中、柚葉は「うーん」と座りながら体を伸ばす。

「ちよつと休憩しよつか」

「うん」

藍子の言葉に柚葉は頷いた。

しばらく先程のデュエルについての雑談などを交えた後、3人は流れてテレビゲームを始めようとしていた。

「あ、そのゲーム」

彼女は藍子が手に取ったゲームソフトに反応する。

「ん？これ？この前お店の中古で見かけたからゲーム機と一緒に買ってきたの。レイちゃん知ってるの？」

「うん、面白かった」

「やったことあるんだ！面白いよね！小学生の頃ゲームセンターでやって以来、いつか買いたくなって思ってたの」

彼女が面白かったと評するそのゲームとは、ゲームセンターで赤石と対戦したあのパズルゲームである。藍子が買ったのは家庭用にリリースされたものだ。

「おねーちゃん、早く早く」

「はいはい、ちよつと待ってね」

コントローラーを握った柚葉に急かされるように藍子はゲームを起動した。

(これで、いいのかな)

彼女は柚葉を参考に、見よう見まねでコントローラーを握る。

以前赤石に言っていた通り、彼女がゲームのコントローラーを握っ

たのはあの1回だけだ。もちろんこのコントローラーは初めてである。

「レイおねーちゃん、このゲームどのくらいしたことあるの？」

柚葉の操作により対戦モードに入る。

「ゲームセンターで、1回だけ」

「じゃあしよしんしゃだねー」

「お手柔らかにお願いします」

「ふふふ、こちらこそ」

彼女 VS 柚葉、2勝先取、バトルスタート。

## 9話 #8 「パズルに追いついて」

「やったー、わたしの勝ち」

1試合目、後半追い上げられるも前半のアドバンテージが効き、柚葉が勝利する。

(さすがレイおねーちゃん、しょんしゃとは思えない追い上げ。でも今はわたしのほうが、じょうず)

柚葉は余裕の表情で2試合目へと入る。

この時柚葉は理解していなかった。彼女の実力を。

(コントローラー、手に合ってきた)

後半の追い上げは偶然やゲームを理解し始めたというものではなく、ただ操作に慣れてきただけだということ。

「えっ…?」

(これが初心者動き…!?)

異変に先に気付いたのは隣でプレイを見ていた藍子。

1試合目とは打って変わって彼女優勢で試合が進む。

(…!?)

柚葉も明らかに1試合目とは違う彼女のプレイングに気付いたのか、目を大きくする。

彼女のプレイングに負けじとコントローラーを操作する手を速めるものの、

「うー…」

対抗も空しく、2試合目は彼女の勝利となった。

3試合目、最早どちらが勝利するかは明白だった。

彼女のパフォーマンスに為す術もなく柚葉は敗北を喫するのであった。

「レイちゃんすごい！本当に1回だけしかやったことないの…!？」

「うん」

「天才だよレイちゃん！デュエルだけじゃなくてゲームもこんなに上

手なんて…：すごすぎるよ！最強だよ！」

藍子は目を輝かせ彼女を褒めちぎる。

「ありがとう。パズルゲームだったから、うまくできた」

彼女はテレビゲームに関しては何も言っていない通りゲームセンターで1回プレイしたのみで、家庭用ゲーム機のコントローラーの握り方すら知らなかったレベルだ。

では何故このような並外れたプレイングができたのか。それはゲームの内容が彼女が普段何気なく触れているものと似通っていたためだ。そう、パズルである。

彼女にとつてはこのゲームは普段解いているパズルの、いわば延長線上に位置するものでありコントローラーという手が脳に追いついたその瞬間から、解き慣れたそれらと同じでしかなかった。

「わー…」

柚葉は彼女を尊敬の眼差しで見つめる。

「さすがわたしのそんけいする人です…：レイおねえさまと、よばせていただきます」

「おねーちゃんが、いいな」

畏まる柚葉に彼女は優しくお願いする。

「えっと、レイおねーちゃん」

「うん」

彼女は微笑みながら頷いた。

――

午後5時、彼女は玄関先でドアの前に振り返って立つ。

あの後少しして、藍子と柚葉の母が帰宅したのを機に今日はお開きとなった。

「また来てね」

寂しそうに彼女を見上げる柚葉。

「うん。また会いに行く」

彼女が柚葉の頭を撫でると、柚葉の顔から寂しさが消えていく。

「今日はありがとう。また遊ぼうね」

藍子はニツコリと笑顔を見せる。

「こちらこそありがとう。また遊ぼう」

彼女もそれに返すように口角を上げた。

「レイおねーちゃん、ばいばい」

「ばいばい、柚葉ちゃん」

彼女は柚葉の手の振りに応え、藍子の家を後にした。

――

同日夜。彼女は携帯電話を手に取り、通話を開始する。

「もしもし」

「俺だ。突然だが今週の水曜の夜空いてるか？」

通話の相手は黒川。

「はい、空いています」

「そうか。仕事ってわけじゃないんだが、お前と勝負したいって奴が居てな」

「どなたですか？」

「会えばわかるさ。水曜の夜7時、場所は黒蠍。レートは不明だが、まあ高くても昨日と同じくらいだろう」

「わかりました」

「平日で悪いな。それじゃ」

通話が終了する。

通話中、黒川は相手が誰なのか伝えなかったものの、  
(あの人、かな)

彼女はその相手に心当たりがあるようだった。

――

翌日。桑鴉高校、朝のホームルーム前。

「おはよー！桜ちゃん」

教室に入ってきた桜に藍子が挨拶する。

「おはよう」

「今日からプールだね」

「そうだな…」

桜は「はあ…」とため息をつく。

「どうしたの？」

「いや…面倒だなんて」

（さすがに水着じゃ目立つよな…体操着みたいのに、ごまかし利かねーし）

桜は胸部に視線を移す。

「あ、わかるかも。着替えとかちよつと時間かかるよね」

「ああ、それもあるな…」

（まあ、通常の体育と違って完全に男女別だからまだマシだけど）

「ホームルーム始めるぞー」

「あ、先生きた」

藍子は自分の席へと戻った。

――

「ということでも今週も程々に頑張れ。じゃ数学始めるぞ」

時ほぼ同じくして、こちらは桐標高校。ホームルームが終了し、1時間目の授業に移行する。

「前回の続き、教科書の52ページからだな」

教壇に立つ教師がチョークを持つ手を動かし、お世辞でも丁寧とは言えない字を黒板に書き連ねていく。

「それじゃ軽く復習だ。これの答えがわかる奴」

教師が振り返ると何人かの生徒が手を上げた。教師はその内の1人を指名する。

「そうだな、小松」

「27分の8です」

指名された生徒、綾芽は立ち上がり答える。

「正解。これは3乗することですー」  
授業はつつがなく進行していく。

## 9話 #9 「プール開き」

ー

そして訪れる今年初のプールの授業。  
賑やかな女子更衣室の隅に桜は居た。

(さっさと着替えよう…)

桜はなるべく目立たないよう動きを抑えて、かつ迅速に着替える。

「桜ちゃん」

桜の体がビクッと跳ねる。振り返ると水着に着替えた藍子が立っていた。

「な、なんだ…？」

「これ、落ちてた」

藍子は小声で拾った物を差し出す。

「！…」

それはつい数十秒前まで桜の胸を支えていたもの。

「サイズ的に、桜ちゃんのかなって…」

「あ、ああ…あたしのだ」

(ロッカーに入れたと思ってたが…落としてたのか。気付かなかった)

目立たないようにすることに気を取られてたからか、桜は落としたことに気付いていなかった。

幸いなことに藍子が1番に見つけて拾い、桜の元へと察して届けられる。

「良かった、はい」

「ありがとー」

しかし幸いなのはここまで。桜が受け取ろうとした瞬間、

「おい栗原、お前やけにでかいブラ持ってんな」

1人のクラスメイトに見つかってしまう。

その声に反応するように、藍子の手元に周囲からの視線が集まる。

「本当だ、でけえな。栗原お前の…」

発言した女子生徒は藍子の胸元を見ると、

「じゃないよな」

フツと半笑いで否定する。

(むー…)

「つてことは…」

次は桜の胸元に視線が集まる。

「っ…!」

「うわ赤石胸でけえ!」

「サイズどんくらいあんの?」

クラスメイトたちが興味深そうに桜の元へとぞろぞろ集まる。

「近寄って来んな…!」

桜は体に巻いたバスタオルの上から両胸を隠すように左肘を曲げる。

(まだ着替え終わってねーのに!)

桜はあと肩の部分を通せば水着の着用が完了するという状態であった。それは即ちバスタオルのみが唯一桜の上半身を守っているという状態でもある。

「隠すなよ、女同士だろ?」

一部、その唯一を剥ぎ取らんと桜との距離を詰める。

「見られたくねーんだよ…!」

(まずい…!だが、今ならまだ)

桜は空いてる右手を伸ばし藍子をグイッと自身の前に引き寄せると、

「桜ちゃん…?」

「アイコ、悪いがちよつと壁になってくれ」

困惑する藍子に耳打ちした。

「う、うん!」

状況を理解した藍子は桜のすぐ前に立ち、両手を横に伸ばして桜を庇うような態勢をとる。

「何なの? 栗原、邪魔する気?」

「もう取っちゃおう?」

藍子の態勢を見て察した一部が着替えの完遂を阻止するべく、一斉にバスタオルを掴みにかかる。

「ちよっ、あっ！だめ……！」

藍子の抵抗空しく、桜の身を包んでいたバスタオルは勢いよく宙を舞った。

「……ちっ！」

しかし目的は果たしたというのに、剥ぎ取った本人は残念そうに舌打ちする。

「誰が見せるか変態共が」

そこには水着に身を纏った桜が目付きを鋭くして立っていた。

水着に着替え終わったのはバスタオルが身を離れる寸前。桜は間一髪で間に合っていた。

「アイコ、大丈夫か？」

「うん、私は大丈夫」

藍子の無事を確認すると桜はバスタオルを拾い、荷物をロッカーに仕舞う。

「そうか。アイコ、行くぞ」

「うん！」

目付きを柔らかくした桜は藍子と共にプールへと向かった。

水着姿だと少し肌寒く感じるような曇り空の下、プールで泳ぐ桑嶋高校1年の女子生徒たち。

授業ということであり自由ではないが、各々それなりに楽しんでるようだ。

「ぶはっ！はあ、はあ……」

25メートルを泳ぎ切った藍子が水中から顔を出し、底に足を着けて立つ。

(泳ぐのは楽しいけど、やっぱり結構疲れるね……)

藍子がふと横を見ると、日陰となつてゐるプールサイドのベンチに座つた女子生徒数人が目に入った。

（椎名さん、見当たらないと思つたら見学してたんだ）

見学をしている生徒の中の一人である椎名はというと、プールに興味を示すことなくマイペースに携帯電話をいじつてゐる。

その様子を目撃した教師がプールから上がり、怒りの表情を見せながら椎名の元へと歩み寄る。

「何授業中にそんなものいじつてんの？あ!?!」

教師は女性ながらも凄みを利かせた声を出し、プール中から注目を集める。

「教わることに無いのにずっと律儀に見てろつて言うのか?」

椎名は手に携帯電話を握つたまま問い返す。

「ここは学校よ。教わることに無いなら自習でもすればいいじゃない。それとも泳ぐ?」

「泳げないから見学してるし、今のウチに自習は必要ない」

椎名は再び携帯電話に目を通す。

「椎名、お前……!」

椎名の教師を侮るような態度に怒りが我慢の限界に達したのか、

「あまり教師を……」

教師は椎名の手から携帯電話を取り上げると、

「なめんな!」

プールに向かつて放り投げた。

「!……おい、てめえ何すんだ?」

椎名は立ち上がり教師を睨み付ける。声色は冷静なままだ。

「お?自分勝手な生徒への教育だけど?」

教師も睨み返す。この時慌てるようにプールから上がり、一触即発の2人に駆け寄る女子生徒が居た。

「ま、待ってください!」

2人は声のした方を向く。

「栗原さん?どうしたの?」

2人の元に駆け寄った女子生徒、藍子が膝に手をつき大きな呼吸を繰り返す。

「はあ、はあ…先生」

「何?」

「それは駄目です…!携帯電話には、大事なデータが、入ってます、そんなこと、しては駄目です…!」

藍子は荒く呼吸をしながら途切れ途切れに言いたいことを伝える。

「…」

教師は藍子の話を黙って聞く。

「先生の気持ち、わかります。確かに椎名さんの、態度には怒りたくなりますし、私も注意するべきだと思います」

「でもあれは駄目です…!そんなことをすれば、データが消えて最悪取り返しのつかないことになり…」

「栗原、それに関しては問題無い」

椎名が藍子の話を遮るように口を開ける。

「椎名さん?それって…」

椎名は合図するように視線をずらす。藍子もその視線を追うように後ろを向くと、

「桜ちゃん…!」

桜がプールサイドを伝って3人の元へと着いていた。手には携帯電話が握られている。

「ちようどこつちに飛んできたからな。なんとか水の中は回避したよ。まあ、キャッチしたところが濡れちまったけど」

桜は携帯電話を椎名に渡す。

「良かった…」

藍子は安心したのかホッと一息ついた。

「…」

教師はその光景を見て冷静さを取り戻し、

「…まあその、悪かったわ。今回のことは不問にする。私も大人げな

「かった」

「ただし、次見つけたら問答無用で没収するからね」  
椎名に謝罪と忠告をした。

## 9話 #10 「椎名の意図」

「さあ、栗原さん赤石さんもプールに戻りなさい」

教師は藍子と桜にプールへ戻るよう促す。

「わかりました。桜ちゃん、戻ろ」

「ああ」

2人がプールへと戻ろうとした時、

「待て」

すぐ後ろから声が飛んだ。

「椎名さん……?」

その椎名の声に藍子と桜は足を止め、声のした方へと振り向く。

「赤石」

直後、椎名は歩み寄り桜のすぐ隣に立つ。

「あ?」

桜は椎名に疑問の視線をぶつける。

「こっち向け。体ごとな」

「何でだよ?」

「いいから向け」

椎名の有無を言わせないような反応に桜は眉間にしわを寄せた後、しびしび椎名の立つ方へと体を向けた。

「これでいいか?」

状況を説明すると桜の視界には椎名と、その先1メートル程の距離を経てプールを囲う外壁が映っているだけだ。

なお、藍子は桜の右後ろに立っており、教師は少し離れたベンチ傍でプールで泳ぐ生徒たちの様子を見守っている。

(何がしたいんだ?…こいつ)

桜は椎名の意図がわからず鋭い目付きで椎名を注視する。

「ああ、それでいい」

椎名は桜の両肩に手を置く。

「あ……?」

そして桜の水着の両肩を掴むと、

「!?!」

一気にへそ辺りまでずり落とした。その衝撃で桜の胸部が弾けて露わになる。

「な…!な、なな…!」

(し、椎名さん!?)

椎名のあまりに唐突な行動に桜だけでなく藍子も固まった。

しかし、すぐに我に返った桜は左手で胸部を隠すと、

「てめえ!何しやがんだ!」

椎名の脇腹目がけて蹴りを繰り出した。この桜の声で再びプール中から視線が集う。

「!?!…ぐっ」

パシッ!という音と共に桜は小さく唸る。

桜の繰り出した蹴りは命中する寸前に椎名の手によって足を掴まれる形で無力化された。

(こいつ…!入ったと思ったのに…!)

椎名は放り投げるように手を離す。

桜は少しよろけるが1歩下がってバランスを取り直した。

(くそっ!何なんだよ…!)

桜は羞恥と怒りが混ざったような表情で椎名を睨み付ける。

「おい、あれ見てみなよ!」

「うわ!赤石の水着すげえ下がってるんだけど!胸丸出しじゃね!」

「椎名がやったみたいだよ」

「何?あいつも赤石の胸見たかったのか?」

「どんなのだったか、あとで教えてもらうか」

プールの方からのざわめきが徐々に大きくなると、それまで固まったように様子を見ていた藍子は「はっ!」として、

「桜ちゃん!と、とりあえず水着!」

「あ、ああ!」

急いで後ろから桜の水着を着せ直した。

「その3人！授業中よ！椎名はベンチ、赤石と栗原はプールに戻りなさい！早く！」

「はい！すみません！」

教師からの叱声が飛び、3人はそれぞれ指示された場所へと戻ろうとする。

「赤石」

「あ？」

椎名は桜の横を通り過ぎる瞬間、

「これで借りは無しだ」

と桜にだけ聞こえるよう囁き、ゆつくりとベンチへ戻って行く。

(…どういうことだ?)

桜は椎名の言葉に疑問を浮かべたが、

「桜ちゃん？」

「あ…ああ、戻るか」

ひとまず藍子と共にプールへと戻って行った。

「はい、今日はここまで。全員上がりなさい」

終了のチャイムが響き、女子生徒たちは次々とプールから上がる。

何人かの生徒は椎名の元を集い、顔をニヤつかせながら談笑している。もともと、椎名はほぼ無表情であるが。

プールから帰って更衣室。桜は隣に居る藍子の影に隠れるようにして着替えている。

「はあ…」

「大丈夫？」

ため息を漏らす桜を藍子は心配そうに窺う。

「ああ、大丈夫だ。椎名以外には見られてねーしな」

「そっか」

見られたことに対しては気に留めない態度を見せる桜。ため息の理由は別にある。

「ただ、あんなこととした意味がわかんねーって言うか…見たかっただけとは思えねーんだよな」

（それにプールに戻る時のあれも…何が言いたかったんだ？あいつは）

桜は椎名という人物像がぼやけて掴めずにいた。その苛立ちが顔に出かかる直前、藍子が口を開く。

「あのね、さつきベンチの前通った時に椎名さんたちの話聞こえてたんだけどね」

「ん？椎名の奴何か言ってたか？」

「えっと、『ウチが見てやった』とか『想像の範囲内』とか…あとはその、サイズとか形も」

「あいつ…！」

椎名に対して再び羞恥と怒りが湧き出す桜。

（けっ、椎名から聞いたからもう見なくてもいいってか？変態共が）

桜は心の中で悪態をつく。

プールへ行く着替えの時には獣のように桜を剥ぎ取ろうとした一部だが、今は誰一人桜に寄ろうともしていない。

（ま、こっちとしては興味が失せてくれた方が助かるー！）

着替えを終えた桜がロッカーから荷物を取り出そうとした瞬間だった。

（…まさか！）

唐突に桜の中で全てが繋がった。椎名の行動の意味、そして椎名が言いたかったことも。

（考え過ぎか？いや、でもそうとしか…！）

「…」

桜は開いたままのロッカーを見つめながら考える。

「…桜ちゃん？」

それを不思議に思った藍子が声をかけた。

「あ？ああ、ちよつと考え事」

「椎名さんのこと？」

「まあ、そうだな」

桜は荷物を持ちロッカーを閉める。ちょうど同じタイミングで藍子も着替え終わり、2人はそのまま更衣室を出て教室へと向かった。

9話 #11 「答えは言わずとも」

――

「うーん、確かによくわからないよね。椎名さんってたまに不思議っていうか、ちょっと読めないところがあるから…」

教室へと向かう途中、2人は歩きながら話す。

「椎名のこと知ってるんのか？」

「うん、中学の時の同級生だった」

「そうだったのか」

(不思議で読めないところがある、か…その通りだな)

「でも悪い人ってわけじゃないの。かといって良い人ってわけでもない、かな…」

(どっちだ…)

「ううん、違う。良い悪いって言い方は良くないよね…」

藍子は直前の発言を撤回する。

「まあ、そう単純じゃねーからな。でも言いたいことはなんとなくわかるよ。気まぐれってことか？」

「うん、そんな感じかも。何ていうか良くも悪くも自由気ままで、でも軸はブレてないっていうか…あ」

藍子は何かを思い出したように立ち止まる。

「どうした？」

「あのね、前から思ってたことがあるんだけどね…」

「ああ」

「桜ちゃんと椎名さんがかぶる時があるの」

「かぶる？あたしが椎名と？」

「どうしてだろうって思ってたんだけど…今日改めてわかったの。桜ちゃんも椎名さんも自分に嘘ついてない。約束は守ってくれるし恩や借りもきちんとしてくれる」

「…」

「あと、不良っぽいところ？」

「あたしは不良じゃねーよ」

藍子の話を聞いて少し照れ臭くなったのか、桜は視線を逸らす。

「ふふ、そうだね」

「…ちよつと待て、借りはきちんとして返すってことはやっぱりあれは…」

「うん、たぶんそうなんじゃないかな?」

「はあ…」

(だとしたら返し方が斜め過ぎんだろ、椎名…)

――

昼休み。桜は隣のクラスから昼食を食べ終えたばかりの椎名を人の出入りが少ない1階のトイレへと呼び出した。

「何の用だ?」

椎名は面倒くさそうな表情を隠さずに問う。

「何であんなことしたんだ?」

「あんなこと?」

「プールの時見ただろ。その、あたしの胸を…!水着を下ろして」

桜の静まっていた羞恥心が甦る。

「見たかったから。それ以外に理由あるか?」

そんな桜に椎名は淡々と答える。

「あるだろ。何が見たかったから、だ。むしろ見たのはそれ以外の理由の方だろうか」

桜は強気に言い放つ。

「お前があんなことした理由は1つ。借りを返すためだった、あたしがキヤツチした携帯電話のな」

「…」

椎名は反応せず桜にそのまま話し続けさせる。

「お前がそうすることによってどうなるか。あたしの胸を見たがって連中にしてみれば、椎名からどんなものか聞き出すことで詳細を知れるようになった。結果あたしの、胸を見る必要が無くなった」

「胸そのものじゃなくあたしの、恥ずかしがる姿や必死に隠そうとす

る姿を見るのが目的だったとしても、既に椎名に見られてるという事実があるから連中からしてみれば、あたしに開き直られるかもしれない、そう考えればそれも期待できなくなった」

「つまり更衣室でもうあたしに迫る理由は無くなった。その証拠に帰りは群がって来なかったしな」

桜は時々詰まりそうになりながらも、なるべく感情を出さず冷静に理由を述べる。

(ふう、さつきアイコに話しといて良かった)

この結論は桜1人で至ったものではない。この出来事に対して客観的な視点を持つ藍子と共に2人で至ったものである。

「あと、お前無感情に見えて意外と優しいんだな」

「いきなり何言ってるんだ」

桜の突拍子もない言葉に椎名が口を挟む。

「だってさ、他の奴に見られないようにあたしを壁の方に向かせてから行動に起こしたんだろ？」

「他にもアイコがお前の話聞いてたみたいでさ、『ウチが見てやった』って言ったんだっけ、それってこういうことだろ？」

『ウチが見てやった、だからもうお前らが見る必要は無い』

「まあその、サイズとか色々言ってたみたいだけど、この際それは勘弁してやる」

桜は冗談めいた口調で話す。

「お前がそう思うんならそれでいいんじゃないかねーの」

関心無さ気に返す椎名。

「ああ、そう思っとくよ。でもお前よく知ってたな。靴下だけ脱いですぐ更衣室から出て行っただろ？」

「お前の無駄にでかい垂れ下がってるやつを見たらわかる」

「なっ……！ そんな言い方するんじゃないよー！」

桜は反射的に両腕を組んで胸元を隠す。

(っーか垂れ下がってねーし……！)

「用は済んだか？」

椎名は携帯電話を取り出し開く。

「ああ、呼び出して悪かったな。それ無事だったか？」

「大事なデータなんてねーけどな」

そう言って携帯電話を閉じて再びポケットに仕舞う椎名。そのままトイレの出入り口の方へと向かう。

「おい、アイコはお前をかばってくれたんだ。後で礼くらい言っとけ」

椎名は出入り口の手前で足を止める。

「お前には言わなくていいのか？」

桜に背を向けたまま問う椎名。

「いいよ。借りは無し、だろ？」

桜の返事に椎名は少し間を置く。

「赤石」

「何だ？」

「悪く無い蹴りだった」

「…そりやどうも。椎名こそ悪く無い反応だった」

「あと、お前意外と純粹なんだな」

「は？いきなり何言ってるんだ」

桜、椎名ともに先程と同じようなやりとりをする。もともと、発言者は逆になっているが。

「見たものをそのまま伝えたとは限らないし、見たとも限らない」

「あ？どういう…」

（！…）

桜は問おうとした瞬間、椎名の言葉の意味を察する。

「おい、そうなのか…？」

桜はまさかと思いついてみるものの、椎名は何も答えずトイレを後にした。

――

（まだかな？昼休み終わっちゃう…）

同じ頃、藍子は桜の要望により椎名との話を誰にも聞かれないよう

トイレの外で見張りをしていた。

昼休み終了時刻が迫り、藍子がそわそわとし始めた頃、

「あっ」

椎名がトイレから姿を現した。

「用は済んだ」

椎名は歩きながら藍子にそう告げると、そのまま教室のあるフロアへと続く階段を上って行く。

椎名の姿が見えなくなつて数秒後、桜もトイレから姿を現した。

「おかえり桜ちゃん、どうだった？」

藍子の問いに桜は「ああ…」と呟き、何か思うところがあるのか目を細めて遠くを見据える。

「何かあったの？」

藍子が不安そうに訊くと、桜は振り切るように目を閉じる。そして目を開けると、いつも通りの表情に戻った。

「いや…見張りありがとな」

「どういたしまして！」

「昼休み終わるな、戻るか」

「そうだね」

桜と藍子は急ぎ足で教室へと戻って行く。

(まったく、終始意味がわかんねー奴だったな)

戻る途中、桜はそのように評する。しかし、ぼやけて掴めずにいた人物像は幾許かくつきりとしていた。

9話 #12 「昼から放課後」

――

同じ頃。桐縹高校、職員室。

「ぐがーぐがー…」

机に突っ伏し、いびきをかく1人の教師が居た。

「葛城(カツラギ)先生、起きて下さい。もうすぐ昼休み終わりますよ」  
別の教師が机に突っ伏してる教師、葛城に近付き体を揺する。

「ん…もう昼終わりか、ふああー…」

葛城は腕を伸ばし大きくあくびをする。

「次の授業に遅れますよ」

「悪いね、起こしてもらって」

「悪いと思ってるなら寝ないで下さい」

葛城を起こした教師は呆れながら答える。

「んじや行きますか」

「いつも起こしてる方の身にも…」

そんな教師の小言をよそに葛城は寝ぼけ眼のまま席を立つ。

「つてもう居ない!?!」

教師が気付いた時には既に葛城は職員室から姿を消していた。

(昼休みはすぐ終わるなあ。あーねむ…)

葛城は目を細めながら廊下を歩く。

桐縹高校1学年の数学担当こと葛城。

身に纏ったよれよれの白衣とボリュームのあるボサボサヘアーが  
特徴の32歳、独身。

薄く無精ひげも生えていて若干不潔な印象を受けるが、顔立ちはそ  
れなりに整っている。

飄々としているが不真面目というわけではない。また彼女らのク  
ラス担任でもある。

(つと、あと1分しかねえ)

葛城は慌てるように次の授業を行う教室へと向かった。

――

放課後、デュエルハウス『ナチュル』。

藍子が前回の帰り道に言っていた通り、桜は藍子からエクシーズ召喚やその他諸々を教わっていた。

「はあ、レベルじゃなくてランクか」

「うん！だからレベルに関する効果を受けないし、その対象に選択する事もできないの」

「そうなのか…ん？ってことはシンクロ召喚の素材には…」

「レベルじゃないからできないね」

「なるほど」

「試しに1回デュエルしてみよっか。エクストラデッキ貸してあげる」

「ああ、頼む」

――

「《神竜騎士フエルグラント》で《鳥銃士カステル》に攻撃！」

「ああ、受ける…って、あたしの負けか」

「うん、これでちょうど桜ちゃんのLPが0だね」

「あー勝てると思ったんだけどな。さすがアイコだな」

桜は少し悔しさを滲ませたような微笑みを見せる。

「最後にドロ―したカードに助けられたかな、桜ちゃんのプレイングも良かったよー」

「お、そうか？」

「うん！シンクロだけでなくエクシーズも使いこなしてたし！」

「それはアイコの説明がわかりやすかったからな」

「えへへ、どういたしまして」

藍子にはっこりと返事をした。

「ところで、喉乾いたね」

「そうだな、何か飲むか」

桜も藍子も喋り続けていたからか、喉が渴いているようだった。

「うん…？」

桜が飲み物を注文しようとして店員を呼ぼうとした時だった。

「サービスです。料金は頂きません」

店員がテーブルに2人分の飲み物を置く。それはまるで2人の会話を聞いて準備していたかのよう。

「えつと…いいんですか？」

藍子は困惑しながら店員の顔を窺う。

「どうぞお飲み下さい」

それを聞いて藍子は遠慮がちにテーブルに置かれた飲み物、リンゴジュースを手取る。

「じゃあ、いただきます」

「そちらの方もどうぞ」

店員は桜にも飲むように勧める。

「あ…ありがとうございます」

桜もリンゴジュースを手を取って喉を潤した。

「おいしー！でも本当にお金いいんですか？」

藍子は再度確認する。

「構いません。この人が払ったので」

店員は体を横に引き、後ろに立つ人物を2人に見せる。

その人物は桜と藍子が気付かぬ内に店員の後ろに忍び寄っていたようだ。

（わ、いつの間に…）

藍子はその人物を見てもそこに居たことに軽く驚くだけだったが、

「！…ぶふっ！」

桜はその人物を見るや否やリンゴジュースを噴いた。

「も、桃山さん…!？」

「よう桜、偶然だな」

桜は噴出の原因となった人物、紫に目を見張る。

「桜ちゃんの知り合いの方？あ、口から垂れてるよ」

藍子はハンカチを取り出し桜の口元を拭う。

「あ、ああ…悪い」

「ま、桜とはちよつとした知り合いだねー。アタシは桃山、フリーデューリストやってる。よろしく」

紫はテーブルを拭きながら藍子に向かって話す。

「えつと、栗原藍子です。桜ちゃんのクラスメイトです」

「へえ、藍子ちゃんかー」

何か納得したような表情を見せる紫。

「あの…？」

「ああいや、何でもない。桜と仲良くしてやってね」

「は、はいー」

藍子は詰まりながらも元気良く答えた。

紫と桜の関係は桜の兄、赤石修哉が黒川と組んだのをきっかけに始まったものである。

赤石は彼女と同じように、彼女よりも前から黒川と組んでいた。生活費等を稼ぐため、そして妹を守るために。

仕事をこなしていく過程で赤石は紫とすぐに知り合った。ただ桜の方は紫はおろか黒川の存在すら知らなかった。赤石が心配かけまといと話さずにいたからである。

とはいえいつまでも隠し通せるほど赤石は器用な人間ではない。桜に見抜かれ全てを話すことになるまで時間はかからなかった。

程なくして紫と桜は知り合いになり、今では紫にとって桜は年の離れた後輩のようで、兄共々同様にかわいがっている。

ちなみに紫の方は黒川から話を聞いていたこともあり、赤石と黒川が組む以前から赤石兄妹の存在は知っていたようである。

「それで、何でもここにいますか？」

桜は疑わしげな視線をぶつける。

「仕事に決まってるんだろー。いやーナチュラルは平和で良いね、桑鴉のデュエルハウスとは思えないわ」

（色んなところに出現するな、この人は…）

紫は特にどこかのデュエルハウスに所属しているというわけではなく、またデュエルハウス以外の場所でも働いているので実際至る所に出現している。

「修哉に聞いてた通りデュエル始めてたんだな。まだまだ初心者みただけど」

「見てたんですか?」

「まあね。ちよつとデッキ貸してみ」

桜がデッキを渡すと紫はデッキの中身を一枚一枚確認しては、時折頷いたり「へえ」と声を漏らす。

（なんかデッキ見られるのって恥ずかしいな…）

「…どうですか?」

「なるほどね」

桜が自信無さげに問うと、紫はデッキを束ねて藍子に視線を向けた。

「藍子ちゃん、一回アタシとデュエルしてみよっか」

「私ですか?」

「そう、桜のデッキを使ってね。どう?」

紫はデッキを藍子の前に置く。

「はい、いいですよ!お願いします」

紫の提案に藍子は快諾し、自分のデッキを差し出した。

## 9話 #13 「楽しむ心」

「というわけで桜、デッキ借りるよ」

「まあ…いいですけど」

（これは…見て学べってことか？）

桜は席を立ち、紫に席を譲る。

「アタシのデュエル、後ろでしっかり見てなよ」

（たぶん、そうっぽいな）

紫の後ろで桜が見守る中、紫と藍子のデュエルが始まった。

――

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（フィールドには《TG ハイパー・ライブリアン》と攻撃力3100の《鬼岩城》と素材を使いきった《神竜騎士フェルグラント》、ね）

（墓地は温存してるといつても手札はこの2枚だけ…いける？）

紫は手札と墓地、エクストラデッキを確認しながら考える。

（…あつーそうかこのルートなら、いけるな。おー《イービル・ソーン》の300が効いてるなー！）

状況を好転させる道筋が見えたのか紫はニヤリとして、

（よし、ブン回すかー）

動き始めた。

「墓地の《薔薇恋人》除外して効果、手札から《ダンディライオン》特殊召喚」

「《レスキューラビット》召喚。《レスキューラビット》効果で除外してデッキから《ジェリービーンズマン》2体特殊召喚」

「《ジェリービーンズマン》と《ダンディライオン》で《メリアスの木霊》エクシーズ召喚」

「《メリアスの木霊》効果でエクシーズ素材の《ダンディライオン》を取り除き、墓地から《ローンファイア・ブロッサム》特殊召喚」

「墓地に送られた《ダンディライオン》の効果で綿毛トークン2体特殊

召喚」

「《ローンファイア・ブロッサム》効果で《メリアスの木霊》リリースしてデッキから《エンジェル・トランペッター》特殊召喚」

「《ジェリービーンズマン》と《ローンファイア・ブロッサム》で《虚空海竜リヴァイエール》エクシーズ召喚」

「墓地の《ローンファイア・ブロッサム》除外して《薔薇の刻印》発動。効果で《TG ハイパー・ライブリアン》に装備しコントロールを得る」

「綿毛トークン2体と《エンジェル・トランペッター》で《氷結界の龍 ブリューナク》シンクロ召喚」

「《TG ハイパー・ライブリアン》の効果で1枚ドロウ。手札1枚捨てて《氷結界の龍 ブリューナク》効果、《鬼岩城》をエクストラデッキに戻す」

「はい」

（大丈夫だよ、まだLP7700残ってるし…うん、このターン中は耐えきれぬはず）

藍子は自分にまだ大丈夫と言い聞かせる。しかし、紫は止まらない。

「まだまだ行くよ。《虚空海竜リヴァイエール》効果でエクシーズ素材の《ジェリービーンズマン》を取り除き、除外されている《ローンファイア・ブロッサム》特殊召喚」

「墓地の《グローアップ・バルブ》効果、デッキの一番上のカードを墓地へ送り特殊召喚」

「《TG ハイパー・ライブリアン》と《ローンファイア・ブロッサム》と《グローアップ・バルブ》で《氷結界の龍 トリシューラ》シンクロ召喚」

「効果で私から見て右の手札、フィールドの《神竜騎士フェルグラント》、墓地の《ローンファイア・ブロッサム》を除外」

（氷結界の龍が2体も…!）

これで藍子のフィールドにカードが無くなり、がら空きとなる。

（でもまだ900残ってる…）

「墓地の《エンジェル・トランペッター》除外して墓地の《スポーア》効果、レベルを4上げて特殊召喚」

(えっ…!? ってことは、もしかして…!)

藍子はおおよそ察する。

「《氷結界の龍 ブリユーナク》とレベル5となった《スポーア》で《星態龍》シンクロ召喚」

(桜ちゃん、氷結界の龍だけじゃなくて《星態龍》も入れてたんだね)そして敗北を認めると、心なしか嬉しそうに微笑んだ。

「バトル、《虚空海竜リヴァイエール》で攻撃、《氷結界の龍 トリシューラ》で攻撃、《星態龍》で攻撃」

藍子LP7700-7700=0

「負けました。お強いですね」

結果は紫の勝利。

「いやー強いかな?」

藍子に褒められた紫はまんざらでもなさそうだ。

(紫さん、あたしのデッキで勝った…!)

桜はこの結果に少し驚く。流石に元プロの紫でも初心者の方が組んだデッキで勝てるとはあまり思っていなかったようだ。

「桜、見ての通りアンタのデッキで勝たせてもらったわ」

「…よく勝てましたね」

(ってことは、つまり…)

「これで答えわかったら?」

紫は席を立ち、桜の顔を見る。

「デッキと同じようにプレイングも重要、ってことですか?」

「そういうこと。多少デッキ構築が甘くてもプレイング次第で何とかなったりするもんよ」

「んー…やっぱりあたしのデッキは構築が甘いですか」

桜はデッキを見返す。

「いや、デッキはそれで良いと思うよ。結構役者も揃ってるし」「えっ?でも…」

手の動きを止め、紫の方へと首を曲げる桜。

「デツキの組み方なんて人それぞれだし、構築が甘いか甘くないかなんて主観でしかないからな。そのデツキもアンタがカードを1枚1枚選んで組んだデツキなんだろう？」

桜は紫の言葉に頷く。

「自分が納得できるデツキが組めたらそれでいいんだよ。デュエルは楽しんでなんぼだからな。ま、アタシが言うのもあれだけど」

（楽しんで、か…）

笑顔でそう主張する紫。かつてはプロの表舞台で、今はフリーとして生きる紫というデュエリストが放つその言葉に桜は確かな重みを感じたようだ。

「勝った負けたも大事だけど、それに囚われすぎず楽しむ心を忘れるなよ」

「…はいー」

桜は強く返事をした。

「ま、勝ちを最優先に考えるとかプロを目指すってんならまた話は違ってくるけど。あ、その時はアタシに声かけるよ？鍛えてやるからや」

「はは…厳しそうですね」

冗談っぽく笑う紫に、桜も遠慮がちに笑った。

――

同じ頃、桐縹高校。

「これで片付けは終了ですね」

「ええ。遅くまで手伝ってもらって悪いわね」

「いえいえ。これも仕事ですから」

琥珀と綾芽は生徒会の仕事を終えたばかりであった。他の生徒会のメンバーは既に帰宅しており、生徒会室には琥珀と綾芽だけが残っていた。

「小松さんだけだわ、ここままでしてくれるの。他の方ときたら、すぐに

帰ってしまつて…」

琥珀は不満そうに溜め息を漏らし、それに合わせるように綾芽は軽く苦笑いを浮かべる。

「毎日お疲れ様です」

「ありがとう、小松さんこそご苦労様。では帰りましょうか」「はい」

2人は生徒会室の鍵を返しに職員室へと向かった。

職員室からの帰り途中、教師に遭遇する。

「栃浦（トチウラ）先生、さようなら」

「おお椽、に小松。こんな時間まで生徒会か？」

「ええ…」

琥珀は栃浦という教師に対してどこか警戒した様子で返事をする。

「それはそれは疲れたろう、肩を揉んでやろうか？」

「いえ、結構です」

「何、遠慮することは無い」

「琥珀は琥珀の肩に手を置こうとするが、

「遠慮してません！」

「琥珀の手によって跳ね除けられる。

「セクハラですよ？先生」

琥珀は呆れと怒りが混ざったような表情で栃浦を見つめる。

「肩揉むくらい良いじゃないか、なあ？小松」

「栃浦は同意を求めるときに綾芽に視線を向けるが、

「嫌がつてるなら、駄目なんじゃないかと思えます…」

「苦笑いを浮かべて否定される。

「小松はどうだ？肩凝ってないか？」

「しかし、栃浦は同じように綾芽の肩にも手を伸ばす。

「いえ…私も結構…」

「帰りましょ、小松さん」

断ろうとした綾芽を琥珀は言い終える前に強引に手を引っ張り、その場を去ろうとする。

「え？あつ、会長…？」

「はは、気を付けて帰るように」

去り際、綾芽は引つ張られながらも柝浦に愛想良く一礼して、琥珀と共に校舎を後にした。

柝浦は2人の姿が見えなくなった後、

（お堅い生徒会長と気弱そうなクラス委員長か。中々の美形コンビで良いじゃないか。2人とも出るところは出てるしな）

口元を緩めながら再び歩き出した。

9話 #14 「あの時の言葉」

――

「柝浦先生には気を付けなさい。彼、女子生徒に対して明らかに過剰なスキンシップを取ることがあるから」

帰り道、琥珀が綾芽に忠告する。

「そうなんですか…?」

「ええ。気付いてたかしら? さっきも私たちの胸を何度もチラチラと見てたのよ、いやらしい目をしてね」

琥珀は嫌悪感を露わにする。

「いえ…気付かなかったです」

「何度か私の方にも女子生徒から苦情が来てね…生徒会としては無視出来ないのだけど、証拠が無いしデリケートな問題だから生徒会主導で立てられる対策って限られてるのよね」

「各自注意しましょう、って感じで呼びかけるくらいしか出来ませんよね…」

「ええ…」

琥珀は「ふう…」とため息をつく。評判は悪くとも柝浦は現役の教師である。証拠も無く名指しで吊し上げるようなことをすれば大問題に発展しかねない。

「小松さんもね、体を触られそうになった時は愛想笑いなんてしちゃ駄目よ。毅然とした態度でしつかりと拒否の意思を示すこと、いいかしら!」

強い視線のまま綾芽に顔を近づける琥珀。

「は、はい…!」

琥珀に圧倒されそうになりながらも綾芽は首を振って頷いた。琥珀が語気を強めたのは大人しめで断るということが苦手そうな綾芽を案じてのことであろう。

「あの、会長ひとつ訊いてもいいですか?」

少し間を置いて綾芽が口を開く。

「何かしら？」

「柝浦先生って赤石さんのこと嫌ってるんですか？」

「さあ…？ 相対的に男子生徒には冷たいとは思うけど、それはわからないわ。どうして？」

「麗梨さんと赤石さんがデュエルした時に私も居合わせた、って話覚えてますか？」

「ええもちろんよ。途中、先生が来て勝負が中止になったのよね？」

「はい。結果的には麗梨さんの勝ちでしたが…とすみません、話が逸れました…えっと、その先生というのが柝浦先生だったんです」

「…そうだったの」

綾芽は先生が来て勝負が中止になったということとは話したものの、どの先生までかは話していなかった。そしてその先のやりとりも。

「あの後、赤石さんたちが準備室から出て行ったのですが私たちは柝浦先生の指示で一緒に準備室に残ったんです」

「もしかして…何かされたの？」

琥珀は心配そうに訊く。

「いえ、ちよつと話をしただけで…その時に先生が色々言ってたんです」

綾芽は準備室で柝浦が言ったことを覚えているだけ話した。

「…ひどいわね」

綾芽の話を聞いて琥珀は一言そう漏らす。

「先生と赤石さんの間に何かあったんでしょうか…？」

「さあ、それはわからないけれど…元々先生たちにとって赤石君は頭の痛い存在であるようだから、柝浦先生だけが特別嫌ってるとは言えないかもしれないわ。ただ、いくら嫌ってるとしてもそれは明らかに言い過ぎよー」

琥珀は怒気を含んだ声で言い放つ。

「そうですね…私もそう思います」

綾芽も強く同意した。

(柝浦先生に気を付けるよう一応赤石君にも言っておいた方がいいわね)

――

桐標高校1学年の保健体育担当こと柝浦。

年の頃は40半ばながら体格はがっしりとしていて、季節を問わずほぼ常にジャージを着用。髪型も角刈りで、まさに体育教師といった風貌である。

以前瑞希が言っていた通り現在桐標高校は2学年、3学年の保健体育の担当教師はそれぞれ男女で分かれているが1学年だけは男子、女子どちらとも男性教師が担っている。

柝浦はその女子担当であり、唯一のイレギュラーな存在だ。何故男性教師が担っているのか、表向きの理由は人手不足であるためとされているが…

(橡の水着姿が拝めない分、小松のはしつかりと目に焼き付けておこうか。水曜からのプールが楽しみだ)

柝浦が先程と相も変わらず口元を緩めながら歩いていると、柝浦の前方右側の教室の扉がガラツと音を立て開いた。

「ん…？柝浦先生ですか」

「ほう、葛城先生。また調べ物という名の休息ですか？」

扉を開けて出てきた人物、葛城は柝浦に気付いても尚気怠そうな表情を浮かべる。

「そうですね。ふああ…」

葛城は頭を掻きながら欠伸をする。

「睡眠はきちんとして取った方が良いでしょう」

穏やかに忠告する葛城。

「ちゃんと寝てるんですけどねえ。それはそうと柝浦先生」

「何です？」

葛城は白衣のポケットから小銭を数枚取り出すと、

「借りてた栄養ドリンク代、お返しします。では」  
栃浦の手にそれを握らせ、前屈みの姿勢になりながらも歩き去って行った。

栃浦は手を広げて小銭を確認する。

「…ちっつ、適当な野郎だ」

（まったく、あんな軽薄な奴がよりによって鈴瀬らのクラス担任とはな）

栃浦は貸した額より10円少なくなつて返ってきた小銭を握り締めながら、去り行く葛城の背中に向けて悪態をついた。

――

（勝ち負けに囚われず、楽しむ心…）

ナチュルからの帰り道、桜は紫に言われたことを思い出す。

「あの人強かったね。何だかデュエルの先生つて感じだった！」

「先生か。はは、言われてみればそうかもな」

藍子の先生という形容が妙にしっくり来たようで、桜は笑い顔を見せる。

（あの人、修せんぱいとも知り合いだよね？呼び捨てにしてたし…桜ちゃんや修せんぱいとどういう関係なんだろう？）

藍子はそう疑問に思うものの桜に訊くことはせず、

「また勝負してみたいな、色々勉強になりそう」

再勝負希望の旨を伝えるだけにした。

「んーそれは難しいかもな。ナチュルにはたまにしか来ないみたいだから」

「あ、そうなんだ…」

（桃山さんのあの自由さからして、次会えるのはいつになるやら…）

「まあ、あたしから連絡して来てもらうこともできるけど」

「えっと、そこまではいいかな…また偶然会った時について感じで」

「そうか」

「その時までにもっとデツキを強化しとかないとね。桜ちゃんのデツキに負けないように」

藍子は桜に向かって挑戦的な笑みを浮かべる。

「おいおい、あたしに勝たす気ねーよなアイコ」

「そんなことないよー」

藍子は笑みを浮かべたまま余裕あり気に答えた。

(あたしもデツキ見直すかな)

ー

(あんまり料理してる時間はねーな…)

藍子と別れた後、桜はいつものようにスーパーマーケットに寄り食材を調達する。

(簡単にすぐ作れるごはんは…)

並べられた品々を見回しながら店内を歩く。

(お？今日はキャベツが安いのか。じゃあ野菜炒めにするか…あ)

夕食の献立が決まりキャベツを買い物かごに入れたその時、桜はふと思いつく。

(そういやバター切らしてたんだ。ついでに買っておくか)

(他にも何か忘れてるような…)

バターを買い物かごに入れ会計を済ませに行こうとした時、桜はふと立ち止まる。

(何だっけ…)

思い出そうとするものの中々浮かび上がらず、もやもやする桜。

(…あ)

しかし運良く数秒後、それを思い出せたようだ。

(ファーニマルの組み方教えてもらうの忘れてた…まあ、次でいいか)  
桜は会計を済ませにレジへと向かった。

9話 #15 「教師と卒業生」

――

桐標高校は校内に自動販売機が2か所に設置されており、それぞれ生徒も教師も関係無く購入することが可能だ。

生徒のほとんどが帰宅した夕暮れ時、葛城は職員室から近い方の自動販売機の前に訪れていた。

(今日はこの甘ったるいコーヒーにするか)

ボタンを押して取り出した缶コーヒーを開封すると一口流し込む。

「ああー…」

(たまに飲むと良いんだよな)

期待通りの甘ったるさに低い声を漏らす葛城。自動販売機の傍にある校舎の壁にもたれ、空いてる右手を流れるように白衣のポケットへと突っ込んだ。

(お?)

右手の先端に感触があったようで、葛城はポケットからそれを取り出す。

「あ」

取り出したのは1枚の10円玉。葛城は手元に視線を落とした後、(そういうこともありますよね、 栃浦先生)

仕方ない、といった様子で10円玉を白衣に戻した。

(後でデスクに置いときますよ。さて、もう一仕事しますか)

――

夜、デュエルハウス『フリード』。

「いらっしやいませ…って」

「よう、樋口」

「葛城先生、また来たんですか…」

樋口は来店した客、葛城を見て溜め息を漏らす。

一仕事終えた葛城はその帰りにフリードへと足を運んでいた。

「何だよ、来ちゃ悪いか？」

「悪いとは言いませんけど、今月になってから頻繁に来てますよね？  
お金の方は大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫、たまには勝ってる」

「それ普段は負けてるってことじゃないですか…」

「そういうことになるな、ハハ」

能天気な葛城に対して呆れる樋口。

「はあ…元教え子の気持ちにもなって下さいよ」

「なに、心配すんな。程々にしてっから」

葛城は軽い調子で答えた。

葛城と樋口。この2人は桐縹高校の教師と元生徒という関係であり、樋口が卒業して数年経った今もこのように従業員と客としても交流が続いている。

「ところで、今日もあの子は居ないのか？」

葛城は店内をきよろきよろと見回す。

「居ませんよ。前にも言ったじゃないですか、たまにしか来ないって」

「そっかあ。1回その実力を拝見したいんだがなあ。本当に強いのか？」

「強いです。先生じゃ一晩中戦い続けても勝つのは厳しいでしょうね」

「んなアホな。運が良けりや勝つだろ、100回に1回くらいは」

「厳しいのは認めてるんですね…というよりそれは運の良し悪し以前にデッキ組み直した方が良いレベルですよ」

「カードゲームなんて運だよ運。いくら実力があっても負ける時は負けるもんだ」

「はあ、その考え方は否定しませんけど」

(そんな考え方してるからたまにしか勝てないんじゃ…)

樋口は途中そう思ったが、口には出さず心に留めておいた。

「んじゃ、ちよつくら一稼ぎしますかね」

「稼げると良いですね、頑張ってください」

樋口が抑揚のない声で健闘を祈ると、

「任せとけ」

葛城は空いてる席へと向かって行く。

(先生には悪いけど、フリードにはもう来ないかもね…レイリちゃんの実力と素顔を見ちやつたから、さ…)

一抹の寂しさを覚えながら樋口は葛城の背中を見送るのであった。

――

迎えた水曜日。桐縹高校のプール開き。

まだ梅雨明けはしていないが空は青色の中に疎らに雲があるだけで、この時期にしては珍しくプール日和となった。

「ぷはっ…：はあ、はあ」

「よしっ、タイムは…おおトップだ！2位のタイムを大きく離しての最速だぞ！」

栃浦が驚きを交えながら結果を読み上げると、プールサイドに座る女子生徒たちから「おお！」という歓声が沸く。

「流石スポーツ万能だな、中根」

「水泳は昔やってたことがあるので」

最速のタイムを出した女子生徒、瑞希が謙遜しながらも喜びの表情を浮かべた。

(しなやかで無駄の無いその動き、やはり運動神経というかセンスが他の奴とは段違いだな。バレーのような団体競技は厳しいかもしれないが、個人種目のある水泳ならかなりいいところまで行けるんじゃないか)

「中根、水泳に興味ないか？お前なら鍛えれば全国に行けるぞ」

曲がりなりにも栃浦は体育教師である。運動能力の高い生徒を見るとどの競技に向いているか、どのレベルまで通用するか等想像を巡らせ、時には生徒に道を指し示す。

「興味がないわけじゃないですけど、私バレー部に入ってますし…そ

れに運動部同士は掛け持ちできませんよね?」

「それはわかってる。わかった上で薦めてるんだ。タイムを見る限りお前には非凡な水泳のセンスがある。上を目指すなら間違いなく水泳にした方がいい」

栃浦の薦めに瑞希は「うーん…」と考える素振りを見せた後、

「せっかくですけど私はバレー部を辞める気はありません。バレーボールが好きなので」

と、断った。

「そうか。それは残念だ」

(はつきりとバレーボールが好きと言われちゃしようがないな。まあ中根の泳ぐ姿を見れるって考えたら、それはそれで悪くない)

口には出せない想像を巡らすことが日常的に多いのが栃浦という体育教師であった。

プールから上がった瑞希は女子生徒たちに囲まれながら談笑していた。

「速かったですね、瑞希さん」

その光景を遠くから見ながら綾芽が隣に座る彼女に話す。

「うん、すすい泳いでた」

「泳げる人ってかっこいいですよ、憧れます。私は10メートルも泳げませんから」

綾芽は苦笑いを浮かべる。

「わたしも泳ぐのは、得意じゃない」

「でも、ぶかぶか浮かぶのは得意」

同意するように言った後、彼女はそう続ける。

「あ、それは気持ち良さそうですね。でも浮かぶのも苦手な場合はどうしましょう…?」

綾芽は困ったような表情で控えめに彼女に問う。

「ばしやばしやする」

「えっと…」

彼女の答えに言葉に詰まる綾芽。

「水遊び、それ自体を楽しむ。ちやぷちやぷ」

(今日の麗梨さん、擬音が多いですね)

綾芽はそんな彼女に新鮮味を感じるのであった。

9話 #16 「まだ外は明るくて」

――

桐標高校のプールの授業後半は基本的に自由な時間となっている。泳ぐのはもちろん、端で友人と立ち話をしたりプールから上がって一休みしても構わない。

その間は教師は監視役に徹し、生徒たちは授業であることを忘れるかのように楽しむ時間となる。

(うむ、やはりプールは良いな。役得だ)

その監視役の教師、柝浦はプールサイドのベンチからプールを見渡す。

(今年の女子もやはり何人か目ぼしいのが居るな。中根に小松にその他数人：割合としては例年通りか)

次に柝浦はプールの左前方へと視線を固定させる。

(だが、今年は例年と明らかに違う点がある)

柝浦の視線の先、そこには足を水に浸けてプールの縁に座る彼女が居た。

(鈴瀬麗梨、今年度の最高傑作。2位以下を大きく離し君臨する、まさに特異点のような存在)

(いや違うな。今年度どころか、これまでの教師生活の中で文句無く歴代1位の娘だ)

ゴクリと喉を鳴らす柝浦。

(今、俺だけが見れる鈴瀬の水着姿。そしてこのプールでしか見られない濡れた白い肌。眼福と言う他ないな)

柝浦は優越感を抱きながら彼女の姿を目に焼き付ける。

(女子高生といえば肉体的に全盛期を迎えた、多くの男が憧れを抱く魅力的な存在ではあるが、その実中身は騒がしくて愚かで反抗的な上に自分本位とロクな物じゃない)

(残念なことそんな奴らが大半だが、どうも鈴瀬は違うらしい。例外的なのは外見だけではないということか)

栃浦は先月交わした会話を思い返す。

――

「んあ？鈴瀬ですか？」

職員室、自分の机に突っ伏したまま首を横に向ける葛城。顔はまだ半分寝ているままだ。

「ええ、担任の葛城先生から見てどういう生徒なんですか？」

栃浦はそんな葛城の状態を気に留めず質問を浴びせる。

「そうですね……」

座りながら体を起こす葛城。栃浦は次の言葉を待つが、

「よくわかりません」

返ってきたのはその一言。

「わかりません、って葛城先生まだ寝ぼけてます？」

栃浦は冗談っぽく笑う。

「起きてますよ、ふああ……」

大きくあくびをする葛城。

「何かあるでしょう？授業態度や成績は良いのか、趣味や特技は何か交友関係はどうか」

「授業態度も成績も概ね良好ですよ。交友関係も問題無いと思います。趣味や特技は知りません」

葛城の半ば適当と思われる答えに少し苦い顔をする栃浦。

「それは大多数の一般的な生徒の1人であるということですか？それとも鈴瀬という生徒についてあまりご存知ではないということですか？」

「後者ですね。まだクラス受け持ってから日が浅いですし、鈴瀬に限らずよくわかっていない生徒は何人もいますよ」

（こいつ、担任のくせに自分の受け持つ生徒のこと全然知らんのか……！）

！というか男として鈴瀬に関心無いのか!?)

「もう少し担任としての自覚を持った方が良いですよ」

栃浦は苛立たしく思いながらも抑えた口調で注意する。

「ああでも、鈴瀬はその生徒たちとは別ですね」

葛城は思い出したように言う。

「別？どういふことですか？」

栃浦が問うと葛城は目を閉じ、

「わかっているという事ですよ、よくわからないということが」

どこか含みのある笑みを浮かべ答えた。

――

（葛城の野郎からは全く情報は得られなかったが、幸い鈴瀬は生徒らの間でよく話題に上げられていて俺の耳にも結構入ってきた。まあ大半は噂や陰口に過ぎないものだったが）

（しかし、少数ではあるが有益な情報も手に入れた。そしてそれらから判断するに鈴瀬はそんな奴らとはまるで違うらしい）

（静かで聡明で気が利き周囲に流されない強い意思を持っている。はは、女子高生とは思えんな。人間的にも非常に良く出来ていて素晴らしい）

（そのような中身だけでも貴重だというのに、さらにあの外見が合わさるといふ奇跡。なるほど、いわゆるカリスマ的存在だな）

栃浦はわずかに歯を見せる。

（もしそんな奴を籠絡することが出来たなら男冥利に尽きるだろうな。まあその難易度も別格か）

（男子生徒たちの鈴瀬に対する反応から察するにまだ男を知らぬようだし、誰かに手を付けられる前に行動しないとな）

しかし、一転してその表情は厳しいものとなった。

（男か：気になるのはあの問題児、赤石との関係だ。準備室での1件以来、妙な噂が飛び交うようになった。100万円勝負したただの体を賭けて勝負したただの大半はアホらしいものだったが）

（中には逢瀬を重ねて行くところまで行つてるとかもあったな。：ちっ、ふざけるな！何が逢瀬だ、あの年頃の奴らはすぐ何かと恋愛に結び付けやがる）

(…赤石なんぞには絶対渡さん。鈴瀬は俺のものだ)

――

(麗梨さん、気付いてたかな…?)

更衣室、着替えながら綾芽は彼女を気に掛ける。

琥珀から話を聞いていたということもあって綾芽はプールの授業中、栃浦の動向を注視していた。つまり栃浦が時折彼女をじろじろと見ていることに綾芽は気が付いていた。

「栃浦キモくなかった?なんかニヤニヤしててさ」

「うん、あれはちよつと引いた。変な目で見てくるの勘弁して欲しい」

「あー私も視線感じたわ。先生変えてくれないかなー」

綾芽以外にも複数の生徒が気付いていたようで、栃浦に対する不満が各地から噴出する。

「そもそも何で男の先生なんだろうね?おかしいよね!れーりちゃんもそう思わない?」

瑞希もその1人であり、隣で着替える彼女に向けて不満を漏らす。

「…ってあれ?」

が、隣を見るも着替えていたはずの彼女はそこに居なかった。瑞希は更衣室内を見回す。

「鈴瀬ならもう着替えて出て行ったよ」

クラスメイトの1人が既に出て行ったことを伝えると、

「あ、そうなんだ…」

(れーりちゃん、いつの間に…)

瑞希は少し呆けたような顔をして着替えを続けた。

――

午後4時、彼女は自宅の玄関のドアを開ける。

「…」

靴を脱ぎ、部屋に戻るなり制服を脱ぎ始める彼女。

(汗、かいた)

この日の気温は7月上旬並みを記録しており、特に暑くなる午後3時から4時の時間帯に帰宅した彼女の体はじんわりと汗ばんでいた。

(先に、お風呂)

かばんの中から水着を取り出し洗面所へ向かうと、彼女はシャワーで汗を流した。

――

午後6時、身づくろいを終えた彼女は玄関で靴を履く。

(黒蠍、2週間ぶりくらい)

彼女にとっては3度目。過去2回の時とは違い金銭的、精神的余裕が比較的存在の状態での初の黒蠍。

(お相手は、たぶんあの人)

誰が相手か大方想像がついているということもあり、彼女の心境は普段のそれに近い。

(勝てると、いいな)

靴を履き終えた彼女はドアを開き、戦場へと出発した。

【第9話 終】

## 10話 #1 「リベンジ」

「いらっしやいま…あ」

デュエルハウス黒蠍、入店した彼女に目をやった清掃中の店員は一瞬驚いた後、目を細める。応対したのはやはり過去2回の時と同じ店員であった。

「道に迷いました。休ませてください」

「…お好きにどうぞ」

店員は半ば諦めたような口調で言い放ち、清掃を再開する。

(まだ、来てないかな)

彼女は店内を見回してみるが、それらしき人物は見当たらない。

「お？あのお嬢ちゃんまた来てるわ」

「今日も大勝負するんか？相手は誰や？」

「あの噂マジだったんか」

彼女に気付いた客たちがざわつき始める。彼女はというと特に居心地の悪さを感じることもなく空いてる席へと座った。

「こんばんは、お嬢さん」

直後、黒蠍の店主である青葉が彼女に歩み寄り挨拶をする。

「青葉さん、こんばんは」

「黒川より話は聞いております。お相手の方が到着されるまで、こちらでもお召し上がり下さいませ」

そう言っつて青葉がテーブルに置いたのは洋菓子の一種、マフィン。

「えつと…いいんですか？」

「サービスでございます。熱い紅茶で宜しいですか？」

困惑気味の彼女に確認する青葉。

「は、はい…よろしいです」

彼女の遠慮がちな回答を聞き、青葉はカウンターへと向かう。

「青葉さん！俺にもお菓子くれー！」

途中、客の1人が声を飛ばす。

「面白いデュエルをごちそうして頂ければサービスして差し上げましょう」

「うえーっ！そいつは難しいなあ……！」

青葉はその客に微笑むとカウンターへと入って行った。

(おいしい……)

マフィンを口に運んでは紅茶を啜る彼女。どちらも彼女の口にはよく合っていたようで自然に笑みがこぼれる。

特に紅茶は彼女にとって、赤石と共に鶉壺の店で飲んだ紅茶に匹敵する程の美味しさを感じていた。

(ごちそうさまでした)

彼女はあつという間に平らげた。

「ありがとうございます。おいしかったです」

数分後、皿を下げに来た青葉に彼女はお礼を述べる。

「そう言って頂ければ何よりでございます」

青葉が皿を手を持ったその時、入口のドアが開く音が響いた。それに気付いた青葉は一瞬入口の方へ視線を向けると彼女に

「たった今、お相手の方が来られました」

そう告げ、再びカウンターへと入って行った。

――

(この辺りのはずだけど、見当たらないわね)

約束の時刻が迫る中、目的地を探して歩く。

(見つけにくいところにあるとは聞いてたけど、もしかして路地裏の方かしら)

足を止めて路地裏を覗くと控えめな看板が目に入った。

(デュエルハウス黒蠍、ここね。確かに見つけにくいわ)

路地裏へと歩を進める。

(時間ぎりぎりになっちゃったわ。さて、どんなところかしら)  
一呼吸分間を置き、ドアを開けた。

「いらつしやいま…」

店員は訝しげに入店した人物の顔を見る。

(結構若そうだな。初めて見る顔だし一応確認…)

店員が口を開こうと瞬間、店員の中でパツと閃いた。

(!…ああ、そうか。あの娘の相手か)

「あちらの席に座られてます」

店員は彼女の座る席を指し示す。

「ありがとうございます」

その人物は指し示された通り彼女の席へと向かった。

彼女の対面の席に座り、静かに時が流れる。お互い会話も無くただ見つめ合っていた。

周囲の客も何故2人が黙っているのかわからない様子である。

「…」

試しているわけでもなければ警戒しているわけでもない。むしろ逆でお互い通じ合っているかのような雰囲気、口を開かなくても理解し合える関係。

実際には違うのだろうが、お互いの間にはそれらに近い空気が漂っていた。

先に沈黙を破ったのは、

「反応しないのね」

「そんな気がしてましたので」

その人物ことサングラスをかけた女、デュエルハウス六武衆で彼女とデュエルした女である。

「リベンジに来たわ」

「はい」

「高いわよ、レート」

「はい」

「だから勝たせてちょうだい」

「いいえ」

「そこは『はい』って答えないのね」

「はい」

「…まあいいわ、始めましょ」

「はい」

彼女は青葉に審判を頼もうとカウンターへと首を向ける。

(いない…?)

が、そこに青葉の姿はなく、

「何かお探しですか?」

不意に彼女の背後から現れた。彼女の肩がビクッと小さく跳ねる。

「あの、審判をお願いしたいです」

「承りましょう」

青葉は5枚のカードを取り出し、裏側のままテーブルに並べる。

カードはそれぞれ違う色のスリーブに入っており、左から黄・赤・

緑・白・紫色の順だ。

「これは何かしら?」

「こちらをご覧下さいませ」

女の問いに青葉はそう言うのと2人にそれぞれルールブックを渡した。

ルールブックといっても数ページの薄い冊子のようなもので、これは彼女が以前見たものと同じ

(…あれ? ちょっと変わってる?)

と思いきや内容に変化があることに彼女は気付く。

「青葉さん、ハウスルール変わりました?」

「変わってなどおりません。以前のルールとはまた別、ということでご覧いただけます」

(あ、そういうこと)

つまりハウスルールは1つだけではない、ということである。

「あら、じゃあアナタにとってもこのルールは初めてってことね」

「はい、初めてです」

(でも、だいたいはわかりました)

「お二方、ルールはご理解されましたかな？」

「はい」

「理解したわ」

青葉の問いに2人とも理解の意思を示す。

「それではカードリストを決めさせて頂きましょう。選ばれるのはどちらの方ですか？」

青葉の言葉から数秒、彼女に動く気配無しと判断した女が申し出る。

「引いてもいいかしら？」

「どうぞ」

女が選んだのは白スリーブのカード。そのままカードをめくる。

「ふむ、《黒いペンダント》ですな。ではカードをお配りする前にレートを決めさせて頂きましょう。お二方、本日のお手持ちは如何ほどでございましょうか？」

「300万です」

「同じくらいだわ」

「承知致しました。ではレートを発表致します」

青葉が提示したレートは150、2000、6000。

彼女が柴岡と勝負した時のレートが200、2000、5000だったので、ライフ差レートが50減りマッチレートが1000増えた形になる。

続いて青葉は2人にデッキに使用するスリーブの色の希望を問うと、カウンターからカードの束を2人が勝負するテーブルへと持つてくる。

彼女には赤スリーブの束、女には白スリーブの束が配られ、最後に配られたカードに間違いが無いが各々確認しようカードリスト表が手渡された。

以下、ルールとカードリストである。

ルールはスピード初手3枚先攻ドロウ有のLP4000マッチ戦。  
お互い同じ25枚のカードリストの中から自分のデッキに必要と  
判断した20枚のカードを選び、選ばなかった5枚のカードを破棄す  
る。制限時間は5分。

破棄したカードはデッキには組み込めず、2回戦のデュエル開始直  
前に公開される。

そうして選んだ20枚のカードからデッキとなる10枚を選び  
デュエルへと進む。デッキカード選択時間は5分。

ただし、制約として選んだ20枚のカードを3回戦中に必ず1度は  
デッキに組み込まなければならぬ(2回戦で勝負が決着した場合は  
次のルールも含め適用されない)

3回戦突入時、審判はお互いの1、2回戦いずれもデッキに組み込  
まなかったカードの枚数をそれぞれ公開情報として宣言する。

#### カードリスト全25枚

- 《魂を削る死霊》 300/200
- 《ビッグ・シールド・ガードナー》 100/2600
- 《デス・ウォンバット》 1600/300
- 《キャノン・ソルジャー》 1400/1300
- 《プロミネンス・ドラゴン》 1500/1000
- 《機械犬マロン》 1000/1000
- 《ゴブリン暗殺部隊》 1300/0
- 《猛進する剣角獣》 1400/1200
- 《ダークジェロイド》 1200/1500
- 《マハー・ヴァイロ》 1550/1400
- 《リーフ・フェアリー》 900/400
- 《ブリザード・ファルコン》 1500/1500
- 《団結の力》
- 《黒いペンダント》
- 《メテオ・ストライク》
- 《呪魂の仮面》

《突進》

《ハリケーン》

《シールドクラッシュ》

《非常食》

《破壊輪》

《鎖付きブーメラン》

《鳳翼の爆風》

《イタクアの暴風》

《波紋のバリア ―ウエーブ・フォース―》

## 10話 #2 「勝負開始」

「問題ないわ」

「こちら大丈夫です」

お互いカードの確認を終える。

「では勝負を開始致します。まずはデッキに使用する20枚のカードをお選び下さいませ。制限時間は5分でございます」

「そして開始と同時に天井カメラからの映像をカウンターのモニターに出力致します。こちらのデュエルの様子をご覧になりたいお客様方はモニターの方に注目下さいませ」

モニターに中継画面が映し出されると、店内の客たちは一様にモニターへと視線を向ける。青葉はモニターに出力されていることを確認するとタイマーをセットした。

(このお店、中継できるのね)

女は感心しながら首を上げてカメラに目を向ける。

「白スリーブの方、既に勝負は始まっております」

青葉は女の様子を見て念押しする。

「あら、白スリーブ呼ばわりとはかわいくないわね」

女はというと特に慌てる素振りも無くそう返した。

「では何とお呼び致しますしょう?」

「スリーブ抜き、白(シロ)で」

「承知致しました」

女はカードを選ぶ彼女に目を向ける。

「アナタもそう呼んで」

「白さん」

「合格」

女、もとい白は快さげに口角を上げてカードを選び始めた。

(まあ、順当にこの5枚かしら)

「5分経過致しました。お選びにならなかった5枚のカードを回収致します」

「次に1回戦のデッキとなる10枚をお選び下さいませ。制限時間は5分でございます」

青葉は2人のカードを回収すると、同じようにタイマーをセットした。

（まずは攻撃力が高いモンスターを選んで、それらと相性の良いカードかしら）

白は1枚1枚選びながら彼女を窺う。

（問題はこの子のデッキね。似た感じで来る？それとも…どっちにしても先攻は取りたいわね）

「5分経過致しました。お選びにならなかった10枚のカードをお預かり致します」

青葉が2人のカードを預かり終わると、2人はお互いのデッキを交換してシャッフルする。

シャッフルしたデッキを返して、続いてコイントス。

「表で」

「裏で」

「コイントスの結果は…表ですな。白様、先攻か後攻の選択を」

「先攻で」

「お二方、デッキの上から裏側のまま3枚場に。最初の手札となります」

「準備が整いました。白様の先攻で1回戦、デュエルスタート！」

デュエルが始まった。彼女にとっては初の女性相手での高レート勝負である。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(まずはこれね)

「《プロミネンス・ドラゴン》 召喚」

「《黒いペンダント》 発動、装備対象は《プロミネンス・ドラゴン》」

《プロミネンス・ドラゴン》 攻撃力1500↓2000

「エンド」

0 《プロミネンス・ドラゴン》 効果、彼女LP4000—5000≡3500

白手札2枚

LP4000

◇ い ◇

◇ あ ◇

い ≡ 《黒いペンダント》

あ ≡ 《プロミネンス・ドラゴン》 攻撃表示

白↓彼女

◇ ◇

◇ ◇

LP3500

彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札 《ブリザード・ファルコン》 《リーフ・フェアリー》 《団結

の力》 《メテオ・ストライク》

(いい手札かも)

「《ブリザード・ファルコン》を召喚します」

「《団結の力》を発動、装備対象は《ブリザード・ファルコン》です」

《ブリザード・ファルコン》 攻撃力1500↓2300 守備力1500

↓2300

「《ブリザード・ファルコン》の効果を発動します」

白LP4000—1500 ≡ 2500

「バトルフェイズ、《ブリザード・ファルコン》で《プロミネンス・ド

ラゴン》に攻撃します」

白LP2500→300∥2200、《プロミネンス・ドラゴン》戦  
闘破壊、《黒いペンダント》墓地、彼女LP3500→500∥300  
0

「メイン2、カードをセット」

「ターンエンドです」

白手札2枚

LP2200

◇ ◇

◇ ◇

彼女↓白

ア∥《ブリザード・ファルコン》攻撃表示

イ∥《団結の力》

◇ ア ◇

◇ イ 裏

LP3000

彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(結構食らっちゃったわ、手札もきついわね)

「《ハリケーン》発動」

《団結の力》手札、セットカード手札、《ブリザード・ファルコン》攻  
撃力2300→1500守備力2300→1500

「《デス・ウオンバット》召喚」

「バトル、《デス・ウオンバット》で《ブリザード・ファルコン》に攻  
撃」

彼女LP3000→1000∥2900、《ブリザード・ファルコン》

戦闘破壊

「エンド」

(生き延びれるかしら)

白手札1枚

LP2200

◇ ◇

◇ あ ◇

あ||《デス・ウオンバット》攻撃表示

白↓彼女

◇ ◇

◇ ◇

LP2900

彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

ドローカード《突進》

(モンスターが欲しかったかな)

「《リーフ・フェアリー》を召喚します」

「《団結の力》を発動、装備対象は《リーフ・フェアリー》です」

《リーフ・フェアリー》攻撃力900↓1700守備力400↓1200

「バトルフェイズ、《リーフ・フェアリー》で《デス・ウオンバット》に攻撃します」

白LP2200—1000||2100、《デス・ウオンバット》戦闘破

壊

「メイン2、カードをセット」

(《メテオ・ストライク》は、ダメージに変える)

「《メテオ・ストライク》を発動、装備対象は《リーフ・フェアリー》です」

「《メテオ・ストライク》を墓地に送って《リーフ・フェアリー》の効果を発動します」

《メテオ・ストライク》墓地、白LP2100—5000||1600

「ターンエンドです」

白手札1枚

LP1600

◇ ◇

◇ ◇

彼女↓白

アⅡ《リーフ・フェアリー》攻撃表示

イⅡ《団結の力》

◇ ア ◇

◇ イ 裏

LP2900

彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(厳しい状況ね、困ったわ)

「《ダークジェロイド》召喚、召喚時に効果発動、効果対象は《リーフ・フェアリー》」

《リーフ・フェアリー》攻撃力1700↓900

(あの伏せカードはさっきのと別。さっきのは《メテオ・ストライク》、ブラフだった。でもこれはブラフじゃなさそうね)

(《破壊輪》：ならもう発動してるわね。《鳳翼の爆風》や《イタクアの暴風》は考えにくいし、《突進》か《鎖付きブーメラン》か、そんなところかしら)

(何にしてもわざわざ返り討ちにあってあげる必要は無いわ。この子がモンスター引かないことに賭けましょ)

「エンド」

白手札1枚

LP1600

◇ ◇

◇ あ ◇

あⅡ《ダークジェロイド》攻撃表示

白↓彼女

アⅡ《リーフ・フェアリー》攻撃表示

イⅡ《団結の力》

◇ア◇

◇イ裏

LP2900

彼女手札0枚

### 10話 #3 「接戦」

(モンスターを引けば、勝ち)

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

ドロローカード《鎖付きブーメラン》

(…じゃなかった。むしろ、かたくなかった)

《リーフ・フェアリー》で《ダークジェロイド》に攻撃します」

「ダメーjistテップ、《突進》を発動します。効果対象は《リーフ・フェアリー》です」

《リーフ・フェアリー》 攻撃力900↓1600

白LP1600→400≡1200、《ダークジェロイド》戦闘破壊  
「メイン2、カードをセット」

(デッキに残っているカードと状況を考えると…《リーフ・フェアリー》の効果は使っておいた方がいいかな)

(白さんの攻撃は《鎖付きブーメラン》で防げるし、もし《破壊輪》が白さんのデッキにあったとしても、LPを700にして使えなくしておけば…次のターンも《リーフ・フェアリー》は生き残る)

(その場合は《黒いペンダント》を引けば勝ち。引かなくてもモンスターだから白さんの引きによっては、その次のターンに《黒いペンダント》でも勝ち。なので)

「《団結の力》を墓地に送って《リーフ・フェアリー》の効果が発動します」

《団結の力》墓地、白LP1200→500≡700

《リーフ・フェアリー》攻撃力1600↓800 守備力1200↓400

「ターンエンドです」

《リーフ・フェアリー》攻撃力800↓100

白手札1枚

LP700

◇◇◇

◇ ◇ ◇

彼女↓白

アⅡ《リーフ・フェアリー》攻撃表示

◇ ア ◇

◇ ◇ 裏

LP2900

彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

（まだ決まらないみたいね。色々考えてたみたいだけど、そう上手くいくかしら）

「《ブリザード・ファルコン》召喚」

「《団結の力》発動、装備対象は《ブリザード・ファルコン》」

《ブリザード・ファルコン》攻撃力1500↓2300守備力1500  
↓2300

「《ブリザード・ファルコン》の効果発動」

彼女LP2900→1500Ⅱ1400

「バトル、《ブリザード・ファルコン》で《リーフ・フェアリー》に攻撃」

「《鎖付きブーメラン》を発動します、効果は両方を選択します」

《ブリザード・ファルコン》攻撃表示↓表側守備

《リーフ・フェアリー》攻撃力100↓600

「エンド」

白手札0枚

LP700

◇ い ◇

◇ あ ◇

いⅡ《団結の力》

あⅡ《ブリザード・ファルコン》表側守備

白↓彼女

アⅡ《リーフ・フェアリー》攻撃表示  
イⅡ《鎖付きブーメラン》

◇ ア ◇  
◇ ◇ イ

LP1400

彼女手札0枚

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

ドロローカード《マハー・ヴァイロ》

(モンスターを引いた、ということとは)

「《鎖付きブーメラン》を墓地に送って《リーフ・フェアリー》の効果  
を発動します」

《鎖付きブーメラン》墓地、白LP700→500Ⅱ200

《リーフ・フェアリー》攻撃力600→100

「モンスターをセット、《リーフ・フェアリー》を守備表示に変更しま  
す」

《リーフ・フェアリー》攻撃表示↓表側守備

「ターンエンドです」

(白さんの、引きしだい)

白手札0枚

LP200

◇ い ◇  
◇ あ ◇

いⅡ《団結の力》

あⅡ《ブリザード・ファルコン》表側守備

彼女↓白

アⅡ《リーフ・フェアリー》表側守備

◇ ア 裏  
◇ ◇ ◇

LP1400

彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(いいの引いたわ。ちまちまと与えてくれたダメージのお返し、してあげる)

「《マハー・ヴァイロ》召喚」

《ブリザード・ファルコン》攻撃力2300↓3100守備力2300

↓3100

(う…モンスター、引かれた)

「《ブリザード・ファルコン》を攻撃表示に変更」

《ブリザード・ファルコン》表側守備↓攻撃表示

「バトル、《マハー・ヴァイロ》で《リーフ・フェアリー》に攻撃」

《リーフ・フェアリー》戦闘破壊

(そのセットモンスター、《魂を削る死霊》とか《機械犬マロン》だったら負けちゃうけどそのデッキでそれは無いわね)

「《ブリザード・ファルコン》でセットモンスターに攻撃」

セットモンスター《マハー・ヴァイロ》、《マハー・ヴァイロ》戦闘

破壊

「エンド」

(まずは初戦いただくわ)

白手札0枚

LP200

◇ い ◇

う あ ◇

い || 《団結の力》

う || 《マハー・ヴァイロ》攻撃表示

あ || 《ブリザード・ファルコン》攻撃表示

白↓彼女

◇ ◇

◇ ◇

LP1400

彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

ドローカード《デス・ウオンバット》

(負けちゃった。でも一番ダメージが少ないカード引けた)

「《デス・ウオンバット》を召喚します」

「バトルフェイズ、《デス・ウオンバット》で《ブリザード・ファルコン》を攻撃します」

「自爆するのね」

「はい」

彼女LP1400—1500—100

「デュエル終了でございます。LP200対—100で1回戦は白様の勝利でございます」

「いいデュエルだったなあ」

「いやあ高レートとの勝負はいつ見てもハラハラするねえ」

「あの娘ちよつとツキが無かったな」

客たちが静まった頃合いを計り、青葉は口を開く。

「ではお預かりしていたカードをお返し致しますので改めて2回戦のデッキとなる10枚をお選び下さいませ。制限時間は5分でございます」

青葉は預かっていた10枚のカードを2人にそれぞれ返し、タイマーをセットした。

(さて、次はどう組むのがいいのかしらね)

白は次戦のデッキ構築を考える。

(さっきのデュエルはこの子の引きの悪さにも助けられたわ。LPもギリギリだったし)

(次も攻めのデッキで決めにかかる?…いえ、もし同じようなデッキだったら次は負けそうな気がするわ)

(そうね、1回戦の時使わなかったカードを多く使って防御を固めましょ。3回戦に備えることにもなるし)

「5分経過致しました。お選びにならなかった10枚のカードをお預かり致します」

青葉が2人のカードを預かり終わると、1回戦の時と同じくシャツフル。

しかし1回戦の時とは違い、2人共デッキからカードを引く動作を見せず青葉からの指示を待つ。

(2回戦のデュエル開始直前、このタイミングよね)

(始まりの前に、見せあいっこ)

2人とももちろん、覚えている。

「さて2回戦のデュエルを開始する前に、ルールの通りお二方が破棄された5枚のカードを公開致します」

そう言つて青葉は2人が破棄した5枚のカードを公開した。内訳は下記の通りである。

白

《リーフ・フェアリー》

《呪魂の仮面》

《シールドクラッシュ》

《鳳翼の爆風》

《波紋のバリア ―ウエーブ・フォース―》

彼女

《魂を削る死霊》

《ハリケーン》

《シールドクラッシュ》

《鳳翼の爆風》

《イタクアの暴風》

(だいたい想定通りね)

(似たような感じで、色合いも同じ)

2人ともお互い破棄したカードについては予想通りといった様子である。公開されたカードは青葉が再び回収した。

「お二方、デッキの上から裏側のまま3枚場に。最初の手札となります」

「準備が整いました。赤スリーブの方の先攻で2回戦、デュエルスタート！」

## 10話 #4 「適用」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札《ゴブリン暗殺部隊》《?》《?》《?》

(まずは、こっち)

「《ゴブリン暗殺部隊》を召喚します」

「カードをセット、ターンエンドです」

白手札3枚

LP4000

◇ ◇

◇ ◇

彼女↓白

アII 《ゴブリン暗殺部隊》 攻撃表示

◇ ア ◇

◇ 裏 ◇

LP4000

彼女手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「《ゴブリン暗殺部隊》だけじゃ判断つかないわね、同じのあるし」

「《ゴブリン暗殺部隊》 召喚」

「《黒いペンダント》 発動、装備対象は自分の《ゴブリン暗殺部隊》」

白 《ゴブリン暗殺部隊》 攻撃力1300↓1800

《波紋のバリア ―ウエーブ・フォース―》の可能性もあるけど、デツキに戻されても今の手札じゃ問題無いわ)

「バトル、《ゴブリン暗殺部隊》で相手に直接攻撃」

「《鎖付きブーメラン》を発動します、効果は両方を選択します」

白 《ゴブリン暗殺部隊》 攻撃表示↓表側守備

彼女 《ゴブリン暗殺部隊》 攻撃力1300↓1800

《鎖付きブーメラン》だったのね、まあいいわ)

「エンズ」

白手札2枚

LP4000

◇ い ◇

◇ あ ◇

いⅡ《黒いペンダント》

あⅡ《ゴブリン暗殺部隊》表側守備

白↓彼女

アⅡ《ゴブリン暗殺部隊》攻撃表示

イⅡ《鎖付きブーメラン》

◇ ア ◇

◇ イ ◇

LP4000

彼女手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

ドローカード《?》

(ぎりぎりまで、削れる)

「《マハー・ヴァイロ》を召喚します」

(!…《マハー・ヴァイロ》ってことは)

「《メテオ・ストライク》を発動、装備対象は《マハー・ヴァイロ》です」

《マハー・ヴァイロ》攻撃力1550↓2050

(なるほど、さつきと同じ攻めのデッキってわけね)

「《ゴブリン暗殺部隊》で相手プレイヤーに直接攻撃します」

白LP4000—1800Ⅱ2200

「《マハー・ヴァイロ》で《ゴブリン暗殺部隊》に攻撃します」

白LP2200—2050Ⅱ150

P4000—500Ⅱ3500  
白《ゴブリン暗殺部隊》戦闘破壊、《黒いペンダント》墓地、彼女L

彼女《ゴブリン暗殺部隊》攻撃表示↓表側守備  
「ターンエンドです」

白手札2枚

LP150

◇ ◇

◇ ◇

彼女↓白

アⅡ《ゴブリン暗殺部隊》表側守備

ウⅡ《マハー・ヴァイロ》攻撃表示

イⅡ《鎖付きブーメラン》

エⅡ《メテオ・ストライク》

◇ アウ

◇ イエ

LP3500

彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(まずいわ、ピンチ)

「モンスターセット、カードセット」

(この子がモンスター出さなかったら1ターン凌げるけど…厳しいわね)

「エンド」

白手札1枚

LP150

◇ 裏 ◇

◇ 裏 ◇

白↓彼女

アⅡ《ゴブリン暗殺部隊》表側守備

ウⅡ《マハー・ヴァイロ》攻撃表示

イⅡ 《鎖付きブーメラン》

エⅡ 《メテオ・ストライク》

◇ ア ウ

◇ イ エ

LP3500

彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

ドローカード《?》

「《ブリザード・ファルコン》を召喚します」

(あ、負けたわ)

「…」

(でもこの子何を躊躇ってるのかしら?)

(あ…まさか、手札のそのカード…!)

(あのセットカード… 《破壊輪》だと発動されても勝ち、《イタクアの暴風》でも《ゴブリン暗殺部隊》が攻撃表示になるから直接攻撃で勝ち)

(《鳳翼の爆風》は破棄してるから違うとして…攻撃を止められるカードは、《鎖付きブーメラン》だけ)

(はずれは1枚だけ、賭ける)

「《団結の力》を発動、装備対象は《マハー・ヴァイロ》です」

《マハー・ヴァイロ》攻撃力2050↓4950 守備力1400↓3800

(やっぱり《団結の力》…! 《ブリザード・ファルコン》に装備すれば攻撃しなくても勝ちなのに…この子、それ以上のダメージ狙ってきたわ)

「バトルフェイズ、《マハー・ヴァイロ》でセットモンスターに攻撃します」

(つていうか攻撃力4950ってオーバーキルもいいところよ! 《ビッグ・シールド・ガードナー》の2600が少なく思えてくるじゃ

ないの…!)

(一撃、通った)

セットモンスター《ビッグ・シールド・ガードナー》、白LP150  
—2350—2200

「デュエル終了でございます。LP3500対—2200で2回戦は赤スリーブの方の勝利でございます」

「うわすげえ!」

「今回はツキがきてたか」

「でっけえ一撃が炸裂したな」

客たちは1回戦の時より騒がしい反応を見せる。しかし青葉の口が動かない様子を察するとざわめきはすぐに減衰した。

1回戦の時と同じく静まった頃合いを計り、青葉は口を開く。

「さて、3回戦突入ということですので幾つかルールが適用されます」

「1回戦、2回戦とお二方からお預かりしたカードはしっかりと確認させて頂きました」

(さつきはやってくれたわね、でも2戦連続で同じようなデッキを使った代償は大きいわよ)

「ではお二方がそれぞれ1回戦、2回戦共にお選びしなかったカードの枚数を公開致します」

「まずは白様…」

「2枚」

青葉は溜めるように発表する。

「続いて赤スリーブの方…」

「7枚」

その瞬間、客たちから「おお」という声が上がった。

「ではお預かりしていたカードをお返し致しますので改めて3回戦の

デッキとなる10枚をお選び下さいませ。制限時間は5分でございます」

青葉は預かっていた10枚のカードを2人にそれぞれ返し、タイマーをセットした。

「なあ、2枚とか7枚って何のことだ？」

「ルール聞いてなかったのかよ。1、2回戦未使用だったカードの枚数のことで、それらは3回戦のデッキに入れなきゃいけないんだ」

「へえー、そうなんか。じゃあ7枚ってことはあのお嬢ちゃんのデッキ、かなり限られてくるな。こりゃ厳しいぞ」

客たちの話す通り3回戦は彼女にとつて厳しい戦いになることは明白だった。2回戦で大勝を収めたはいいがその代償、選んだ20枚のカードは必ず1回以上使わなければならないという制約が彼女を縛る。

（未使用カードが7枚：破棄した5枚のカードも明らかになつてるとし、この子の3回戦のデッキほぼ裸同然じゃないの）

白は呆れ気味に目を細める。

（こうなるってわかって選んだのだから容赦なんてしないわよ。さっきの仕返しさせてもらうわ、アナタがそうしてきたように攻撃型のデッキでね）

「5分経過致しました。お選びにならなかった10枚のカードをお預かり致します」

この後の流れは同じ。

「お二方、デッキの上から裏側のまま3枚場に。最初の手札となりませ」

ライフ差分リードはされてるものの白が有利な状況を活かし勝利を手にするか。それとも彼女が圧倒的不利を覆し勝利を掴み取るか。

「準備が整いました。白様の先攻で3回戦、デュエルスタート！」

勝負が決着する3回戦が始まった。

10話 #5 「続いて」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(悪くないけど、先攻向きの手札じゃないわ)

(どっちを召喚しようかしら。《団結の力》あるし《マハー・ヴァイロ》  
…)

白はカードに手を掛ける寸前、思い止まる。

(…違うわね。攻撃力よりは貫通持ちの《猛進する剣角獣》の方が重要  
と考えるわ。ここは温存すべきね)

(だから召喚するのはこっち)

「《マハー・ヴァイロ》召喚」

(簡単には越えられないはず。《突進》もあるし)

(それと《団結の力》もブラフとして。効果は薄いけど)

「カードセット、もう1枚セット」

「エンド」

白手札1枚

LP4000

裏 裏 ◇

◇ あ ◇

あ|| 《マハー・ヴァイロ》攻撃表示

白↓彼女

◇ ◇

◇ ◇

LP4000

彼女手札3枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

彼女手札《ダークジェロイド》《鎖付きブーメラン》《黒いペンダ  
ント》《非常食》

「《ダークジェロイド》を召喚します。召喚時に効果発動、効果対象は

《マハー・ヴァイロ》です」

《マハー・ヴァイロ》 攻撃力1550↓750

(攻撃力下げられた、でも返り討ち可能な範囲だわ。攻撃してくるかしら?)

「《黒いペンダント》を発動、装備対象は《ダークジェロイド》です」

《ダークジェロイド》 攻撃力1200↓1700

(!...それは《突進》じゃ届かないわ)

(今回も、《鎖付きブーメラン》以外なら。でもモンスターが《マハー・ヴァイロ》...その可能性は高そう)

基本的に《マハー・ヴァイロ》はそれ1枚でフィールドに立たせるカードではなく、フィールドにいる場合は何らかの装備カードを装備していることが多い。

故に何も装備されていない《マハー・ヴァイロ》の存在は装備カード、この状況だと即ち《鎖付きブーメラン》がセットされている可能性が高いと考えるのが自然だ。

その上セットカードが2枚ともなれば、攻撃が通る可能性はより低くなるだろう。

(ううん、そうだととしても攻撃しないのはだめ。返り討ちにされたらその時は、その時)

しかし、そう考えながらも彼女は攻撃を選択する。どちらにしても《鎖付きブーメラン》がセットされているなら大ダメージは避けられない。

「バトルフェイズ、《ダークジェロイド》で《マハー・ヴァイロ》に攻撃します」

白LP4000-950||3050、《マハー・ヴァイロ》戦闘破壊

(よかった、通った)

表情には出さないが彼女は安堵する。

「メイン2、カードをセット」

「ターンエンドです」

白手札1枚

LP3050

裏裏◇

◇◇◇

彼女↓白

アⅡ《ダークジェロイド》攻撃表示

イⅡ《黒いペンダント》

◇ア◇

◇イ裏

LP4000

彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

《ダークジェロイド》に《黒いペンダント》ね。その組み合わせは予想してなかったわ：プレイングミスね）

（おかげでいきなり追い込まれたわ。あの伏せカード：）

一方《マハー・ヴァイロ》を破壊され一転、敗北の危機に直面する白。

実はこの状況、ある1枚のカードを発動されると白の負けが確定してしまうのだ。

そう、《破壊輪》である。

現在白の手札にモンスターは2体、《猛進する剣角獣》と《ブリザード・ファルコン》。

攻撃力は《ブリザード・ファルコン》が1500、《猛進する剣角獣》が1400。

攻撃力が低い方の《猛進する剣角獣》でも《破壊輪》で破壊されれば1400のダメージを受け、モンスター無しの状態で彼女へとターンが回る。

その彼女のターンで攻撃力1700《ダークジェロイド》の直接攻撃により計3100のダメージ、LP3050の白は敗北するということである。

もちろん攻撃を止めるカードは無い。その事実は前のターン攻撃した彼女も知っている。

(じゃあ《破壊輪》を恐れて召喚しない？無いわね)

白は消極的な選択肢を即座に否定する。

(そんな戦法で勝てるわけないじゃないの。そもそも《破壊輪》なんて伏せてないわ、幻よ)

色々考えたところで導き出される答えは至極単純なもの。《破壊輪》がセットされていれば負ける、それだけのこと。

「《ブリザード・ファルコン》召喚」

(さあ、あるなら発動してみなさい)

白は彼女の手元を窺うが、彼女に動く気配は無し。

(ほら、やっぱりね)

白は視線をフィールドに落とし再び考える。

(さて、《破壊輪》じゃないとしたら…《鎖付きブーメラン》あたりかしら)

もし彼女が《鎖付きブーメラン》を発動すれば《ダークジェロイド》の攻撃力はさらに500上がり2200となる。とはいっても越えられない数値ではない。白のフィールドには《突進》と《団結の力》がセットされている。

その可能性を考慮すれば同じ2200で相打ちになる《突進》よりは《団結の力》、あるいは両方発動するという選択が安全ではあるが…(《鎖付きブーメラン》じゃ攻撃を防がれてしまうわ。《団結の力》は確実に攻撃を通せるその時に使いたいわね、《ダークジェロイド》さえ倒せばあとは押し切れるし)

白はそう考えるが、現状《団結の力》を発動しておいて損はしない。彼女は《ハリケーン》も《鳳翼の爆風》も破棄している。装備したモンスターが破壊されない限り装備カードがフィールドから離れることは無い。

故に《団結の力》は発動しておくべきである。相打ちの可能性も考えればなおさらだ。

「《突進》発動、効果対象は《ブリザード・ファルコン》」

《ブリザード・ファルコン》 攻撃力1500↓2200

「《ブリザード・ファルコン》の効果発動」

彼女LP4000→1500∥2500

「バトル」

だが、白は《団結の力》を発動せずバトルフェイズへの突入を宣言した。

何故発動しなかったか。これには理由があった。

(間違はなく7枚のうち1枚ね)

《破壊輪》がセットされていないことが判明したのはいいが、それとは別に白は彼女のデッキに入っているであろう1枚のカードを危惧していた。《呪魂の仮面》である。

《団結の力》で強化した《ブリザード・ファルコン》に《呪魂の仮面》を使われれば、《ハリケーン》をデッキに入れていない白にとっては切り札を封じられるのに等しい。その上毎ターン500のダメージを受けてしまう。

さらにこのターンの攻撃時に《鎖付きブーメラン》を発動された場合《ダークジェロイド》を倒せず彼女のターンに回してしまう。そしてその彼女のターンに《呪魂の仮面》を発動されて持久戦突入という事態、それだけは避けたかった。

(相打ち上等よ、むしろ希望するわ。まあこの子は避けてくるでしょうけど)

白は兎にも角にも《ダークジェロイド》を倒したい、そして《鎖付きブーメラン》を早めに使わせたかった。

彼女のデッキは制約により《黒いペンダント》と《鎖付きブーメラン》以外に装備カードが入っていると考えるに、その2枚を使ったとわかれば攻撃力勝負では優位に立てる。

彼女と違って攻めのデッキが組めた白はそのまま押し切れると読んだということである。

「《ブリザード・ファルコン》で《ダークジェロイド》に攻撃」

「《鎖付きブーメラン》を発動します、効果は両方を選択します」

《ブリザード・ファルコン》攻撃表示↓表側守備

《ダークジェロイド》攻撃力1700↓2200

(こっちは幻じゃなかった、正解だわ)

白の読み通り彼女は《鎖付きブーメラン》をセットしていた。ターンを乗り切った白は彼女に小さく挑戦的な笑みを見せる。

彼女もそれに応えるかのように口角を上げた。

「エンド」

《ブリザード・ファルコン》攻撃力2200↓1500

(簡単には終わらないわ。デュエルはまだ始まったばかりよ)

白手札1枚

LP3050

裏 ◇ ◇

◇ あ ◇

あⅡ 《ブリザード・ファルコン》表側守備

白↓彼女

アⅡ 《ダークジェロイド》攻撃表示

イⅡ 《黒いペンダント》

ウⅡ 《鎖付きブーメラン》

◇ ア ◇

◇ イウ

LP2500

彼女手札1枚

## 10話 #6 「考えて」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

ドロークカード《呪魂の仮面》

彼女がドローしたカードは《呪魂の仮面》、つまり前のターン白が《団結の力》を《ブリザード・ファルコン》に装備していればこのデュエル、彼女の勝利でほぼ決まりであった。

(白さん、抜かりないです)

「バトルフェイズ、《ダークジェロイド》で《ブリザード・ファルコン》に攻撃します」

《ブリザード・ファルコン》戦闘破壊

「メイン2、カードをセット」

「ターンエンドです」

白手札1枚

LP3050

裏 ◆ ◆

◆ ◆ ◆

彼女↓白

アⅡ 《ダークジェロイド》 攻撃表示

イⅡ 《黒いペンダント》

ウⅡ 《鎖付きブーメラン》

◆ ア ◆

裏 イ ウ

LP2500

彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(伏せカードあるけど、《破壊輪》じゃなければそれでいいわ)

「《ダークジェロイド》召喚、召喚時に効果発動、効果対象は相手ファイアの《ダークジェロイド》」

彼女《ダークジェロイド》攻撃力2200↓1400

「《団結の力》発動、装備対象は自分フィールドの《ダークジェロイド》  
白《ダークジェロイド》攻撃力1200↓2000守備力1500  
↓2300

「バトル、《ダークジェロイド》で《ダークジェロイド》に攻撃」

「《鎖付きブーメラン》と《黒いペンダント》を墓地に送って《非常食》  
発動します」

彼女LP2500+2000∥4500、彼女《ダークジェロイド》  
攻撃力1400↓400

《黒いペンダント》墓地、白LP3050—500∥2550

彼女LP4500—1600∥2900、彼女《ダークジェロイド》

戦闘破壊

(非常食だったのね)

「エンド」

(さあ、あとは押し切るわよ)

白手札1枚

LP2550

い◇◇

◇あ◇

い∥《団結の力》

あ∥《ダークジェロイド》攻撃表示

白↓彼女

◇◇◇

◇◇◇

LP2900

彼女手札1枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

ドローカード《機械犬マロン》

「《呪魂の仮面》を発動、装備対象は《ダークジェロイド》です」

(やっぱりあったのね、あの時発動しないでほんとに良かったわ)

「モンスターをセット」

「ターンエンドです」

白手札1枚

LP2550

い◇◇

◇あ◇

いⅡ《団結の力》

あⅡ《ダークジェロイド》攻撃表示

彼女↓白

アⅡ《呪魂の仮面》

◇裏◇

◇ア◇

LP2900

彼女手札0枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(あのセットモンスター：確かこの子、《魂を削る死霊》を破棄してるから：《ビッグ・シールド・ガードナー》かしら?)

(なら貫通より今引いたこっちな)

「《ゴブリン暗殺部隊》召喚」

《ダークジェロイド》攻撃力2000↓2800守備力2300↓3100

「《ダークジェロイド》を守備表示に変更」

《ダークジェロイド》攻撃表示↓表側守備

(大丈夫だとは思うけど、一応ね)

「バトル、《ゴブリン暗殺部隊》で直接攻撃」

彼女LP2900—1300Ⅱ1600

彼女《ゴブリン暗殺部隊》攻撃表示↓表側守備

「エンド」

白手札1枚

LP2550

い◇◇

うあ◇

いⅡ《団結の力》

うⅡ《ゴブリン暗殺部隊》表側守備

あⅡ《ダークジェロイド》表側守備

白↓彼女

アⅡ《呪魂の仮面》

◇裏◇

◇ア◇

LP1600

彼女手札0枚

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

ドロローカード《波紋のバリアーウエーブ・フォース》

《呪魂の仮面》効果、白LP2550ー500Ⅱ2050

彼女はこの先の展開を考える。

(1ターン先延ばしは…だめ。次の白さんのドロローが《鎖付きブーメラン》か《黒いペンダント》なら、負けちゃう)

(2ターン先延ばしなら…上手く行けば勝てそう、だけど…)

あらゆるパターンを想定しながら、じっくりと。

(《鎖付きブーメラン》と《黒いペンダント》は《破壊輪》が使えなくなつて…)

(《メテオ・ストライク》だと…《ビッグ・シールド・ガードナー》以外なら勝ちかな)

(…あ、次《鎖付きブーメラン》を引かれても勝つ道はある。でも限定的)

勝つために、勝ちの可能性を高めるためにどう動けばいいのか。

(…だめ。たぶんわたしの方が、分が悪い)

(それに先延ばしは、次《ビッグ・シールド・ガードナー》を引いたら負けちゃう。やっぱりこのターンで《ゴブリン暗殺部隊》は破壊して…)

(…《黒いペンダント》を引かれなければ、いけるかも)

(それに先延ばしと違って、次《ビッグ・シールド・ガードナー》を引いたらむしろ勝ち。だから)

そして長考の末、答えを出した。

「反転召喚します」

《機械犬マロン》裏側守備↓攻撃表示

(今日一番の長考ね。その結果が《機械犬マロン》反転召喚。まあ、読みは外れたけど返しのターンで破壊すればいいだけね)

「バトルフェイズ、《機械犬マロン》で《ゴブリン暗殺部隊》に攻撃します」

《ゴブリン暗殺部隊》戦闘破壊、《ダークジェロイド》攻撃力2800

↓2000守備力3100↓2300

「メイン2、カードをセット」

「ターンエンドです」

(《黒いペンダント》を引かないことに、賭ける)

白手札1枚

LP2050

い◇◇

◇◇あ◇◇

いⅡ《団結の力》

あⅡ《ダークジェロイド》表側守備

彼女↓白

イⅡ《機械犬マロン》攻撃表示

アⅡ《呪魂の仮面》

◇◇イ◇◇

◇◇ア裏

LP1600

彼女手札0枚

(!……)

白はドロローする直前、その手がピタツと止まる。

(また伏せカード、だから《破壊輪》だったら負けちゃうのよ。もう1回幻でお願いしたいわ)

(でもあの長考からして《破壊輪》とは違うわね。そうじゃなかったら何かしら?…あ、まだ《波紋のバリア》——ウエーブ・フォース——が残ってるわね。それ以外だと…《突進》?)

(いえ、流石に《突進》は考えにくいわ。《突進》をデッキに入れる余裕は無いだろうし、攻撃力アップするカードを入れるにしてもそれなら《団結の力》を入れた方がいいもの)

(とにかくあれは《波紋のバリア》——ウエーブ・フォース——で、そして今から引くカードは《黒いペンダント》ね。それで勝ちなんだから)

白は止まっていた手を動かした。

「ドロロー」

## 10話 #7 「届かなくて」

(：残念、このターン中の勝ちは無いため)

「スタンバイ、メイ」

「《猛進する剣角獣》 召喚」

《ダークジェロイド》 攻撃力2000 ↓ 2800 守備力2300 ↓ 3100

白は彼女の手元を窺うが、彼女に動く気配は無し。

(負けも無いみたいね)

「バトル、《猛進する剣角獣》で《機械犬マロン》に攻撃」

彼女LP1600 - 400 = 1200、《機械犬マロン》戦闘破壊、

白LP2050 - 1000 = 1050、彼女LP1200 - 1000 = 200

(これで《破壊輪》は封じたわ。LPも残り200)

「メイ2、カードセット」

(あともうちよつとよ)

「エンド」

白手札0枚

LP1050

い裏 ◆

うあ ◆

いⅡ 《団結の力》

うⅡ 《猛進する剣角獣》 攻撃表示

あⅡ 《ダークジェロイド》 表側守備

白 ↓ 彼女

アⅡ 《呪魂の仮面》

◆ ◆

◆ ア裏

LP200

彼女手札0枚

《黒いペンダント》、引かなかつた。ここで《ビッグ・シールド・ガードナー》引けば、勝ち)

彼女はそう思いながらドロローするが、

「ドロロー、スタンバイ、メイソ」

《呪魂の仮面》効果、白LP1050—500〓550

ドロローカード《破壊輪》

(…ちよつと、遅かつた)

引いたカードは《破壊輪》。1ターン前までは彼女に勝利をもたらしていたはずのそのカードだが、今はもう発動不可の腐つたカードと化していた。

「カードをセット」

「ターンエンドです」

白手札0枚

LP550

い裏◇

うあ◇

い〓《団結の力》

う〓《猛進する剣角獣》攻撃表示

あ〓《ダークジェロイド》表側守備

彼女↓白

ア〓《呪魂の仮面》

◇◇

裏ア裏

LP200

彼女手札0枚

(伏せたのは《破壊輪》かしら？遅かつたわね。おかげで生き延びれたわ)

(この子のLPは200、そして《波紋のバリア ―ウエーブ・フォース―》がセットされてる)

(つまり1ターン前と同じ、しかもデッキがあと2枚だから2分の1。今度こそ引くカードは《黒いペンダント》ね。それで勝ち)

「ドロー」

(引かないじゃないのよ。一番下で眠ってるなんて聞いてないわ)

白は控えめに唇をへの字にする。

「スタンバイ、メイン」

(《メテオ・ストライク》、先にデッキ切れるのはあっちになるしあまり役立ちそうに無いわ。まあそれより、そろそろ仮面を外させてもらおうかしら)

「《ダークジェロイド》を攻撃表示に変更」

《ダークジェロイド》表側守備↓攻撃表示

「バトル、《猛進する剣角獣》で攻撃」

「《波紋のバリア ―ウエーブ・フォース―》を発動します」

《ダークジェロイド》デッキ、《猛進する剣角獣》デッキ、《呪魂の仮面》

墓地、《団結の力》墓地

《波紋のバリア ―ウエーブ・フォース―》の効果により白のデッキが3枚となる。

なお、残りデッキが3枚ということでシャッフルは彼女ではなく審判の青葉が受け持った。

(モンスターはデッキに戻っちゃったけど、《鎖付きブーメラン》があるから1ターンは凌げるわ)

「メイン2、カードセット」

「エンド」

白手札0枚

LP550

裏裏◇

◇◇◇

白↓彼女

◇◇◇

裏◇◇◇

LP200

彼女手札0枚

彼女のデッキはあと2枚。状況が変わったため前のターンと違い、ここで《ビッグ・シールド・ガードナー》を引いてしまうと彼女の負けとなる。確率は2分の1。

「ドロー、スタンバイ、メイソ」

ドローカード《プロミネンス・ドラゴン》

(まだ、わからない)

「《プロミネンス・ドラゴン》を召喚します」

このデュエル中、お互いにあの時あのカードを引いていれば勝っていた、或いは引いてしまつていたら負けていた、そんな場面が何度もあった。どの場面も決して低くはない確率で。

(《プロミネンス・ドラゴン》：！前のターンに引かれてたら負けてたわ)

しかし、またしても勝負を決するカードは引かれず次のターンへと続く。勝利の女神は未だにどちらにも微笑むことはなく、2人の勝負を限界まで楽しむかのように纏れ込ませる。

「バトルフェイズ、《プロミネンス・ドラゴン》で攻撃します」

「《鎖付きブーメラン》発動」

《プロミネンス・ドラゴン》攻撃表示↓表側守備

「ターンエンドです」

《プロミネンス・ドラゴン》効果、白LP550—500〓50

白手札0枚

LP50

裏◇◇

◇ ◇ ◇

彼女↓白

アII《プロミネンス・ドラゴン》表側守備

◇ ア ◇

裏 ◇ ◇

LP200

彼女手札0枚

だが、纏れ込んだ勝負もここまで。このターンで勝敗が決定する。白の残りデッキは3枚。《波紋のバリア ―ウエーブ・フォーサー―》の効果で戻った《ダークジェロイド》と《猛進する剣角獣》、そして引かなかった《黒いペンダント》

このうちモンスターである《ダークジェロイド》と《猛進する剣角獣》はどちらも《プロミネンス・ドラゴン》の守備力1000を上回る攻撃力がある。

そして《猛進する剣角獣》はもちろん《ダークジェロイド》の方も前のターンセットした《メテオ・ストライク》と合わせることににより、攻撃すれば貫通ダメージが入りそのまま白の勝利となる。

しかし、そうではなく《黒いペンダント》を引いてしまった場合、《プロミネンス・ドラゴン》を破壊出来ずに彼女にターンを回してしまうため白の敗北となる。

つまりこのドローで全てが決する。白が引くのは《ダークジェロイド》か《猛進する剣角獣》か、或いは《黒いペンダント》か。

「ドロー」

白はゆっくりと手のひらを返し、ドローしたカードを見る。

(∴長かったわ、ここまで)

「スタンバイ、メイ」

そしてそのカードを…

フィールドに出した。

「《ダークジェロイド》召喚、召喚時に効果発動、効果対象は《プロミネンス・ドラゴン》」

《プロミネンス・ドラゴン》攻撃力1500↓700

「《メテオ・ストライク》発動、装備対象は《ダークジェロイド》」  
「…」

白の手によってデュエルの幕が閉じられて行く様を、彼女はただ見届ける。

「楽しかったわ」

ふと白が口を開く。白は緊張状態から解放されたような、そんな柔らかな表情になっていた。

「わたしもです」

彼女も白に合わせるかのように表情を緩める。

「まさかここまでギリギリの勝負になるなんてね」

「あと50届きませんでした」

「50なんて紙一重の差よ。何か1枚でもずれてたらアナタが勝ってたかもしれないわ」

「ずれてて欲しかったです」

彼女は冗談っぽく微笑む。

「言うじゃないの。50だけでも残って良かったわ」

白もニヤリとしながら返す。そして少し間を置いてから動いた。

「さて、じゃあ決めるわね」

「はい」

「バトル、《ダークジェロイド》で《プロミネンス・ドラゴン》に攻撃」  
その攻撃をもって、勝負は終幕を迎えた。

彼女LP2000—2000〓〇

## 10話 #8 「勝者」

「デュエル終了でございます。LP50対0で3回戦は白様の勝利でございます」

「同時にマッチ戦も決着でございます。2勝1敗でマッチ勝者は…白様でございます！」

青葉が勝者の名を叫んだ瞬間、固唾をのんで見守っていた客たちから堰を切ったように「おおお」という声と拍手が沸き起こる。

「すげーデュエルだったな！」

「見てるだけでこんなハラハラしたん初めてや！めっちゃ面白かったで！」

「ああ負けちゃったかあ…絶対勝つって賭けてたんだけどなあ」

「おい！グラサン姉ちゃん勝ったぞ！約束通り寄越しな」

「しゃーねえな、ほれ5000」

そのような盛り上がり上がった雰囲気の中、青葉は審判としての最後の仕事をこなす。

「それでは清算致します。レートは150、2000、6000ですな」

青葉は慣れた手付きで電卓に入力していく。

（手慣れてるわね。怖いほど落ち着いた佇まいといいこの人、ただ者じゃない気がするわ）

白は青葉の顔と手元を交互に窺っては彼女へと視線を移す。

「…」

彼女はというと先程までデュエルが行われていたテーブルへと視線を落としていた。

（落ち込んでる、ってわけでも無さそうね。表情からは読み取れないけど）

勝負に負けて落ち込んでるのではなく、ただ結果が告げられるのを待っている、と白はそう感じた。

「計算が終わりました」

青葉の手が止まり、白は次の言葉を待つ。

(さて、おいくらになるのかしら)

「しめて2500円、赤スリーブの方の勝ちですな。赤スリーブの方、おめでとうございます。これにて勝負は終了でございます。不肖、私青葉がー」

「…えっ?」

声を出すのが思わず遅れてしまった。青葉の口から放たれた、そのあまりの内容に頭がまだ追いつかない。

「ちよ、ちよっと!赤スリーブの方の勝ちってどういうこと!?!それに2500円って…!」

確かに聞こえた信じられない言葉の数々。白は慌てるように青葉に問う。

「言葉の通りでございます。お二方の勝負は2500円、赤スリーブの方の勝ちという結果ー」

「待って!」

白は割り込むように口を開くと、

「それ借りるわね」

青葉が入力していた電卓を掴み、手元へと持ってくる。

(まさか、そんなはず…!)

白は有り得ない、と思いつながら数字を入力していく。

(!…うっ)

しかし弾き出された答えは、青葉が既に発したそれと同じだった。白は口を半開きにしたまま固まる。

白の手が止まると青葉は自らが行った計算結果を諳んじていく。

「1回戦、白様+24万5000」

「2回戦、赤スリーブの方+105万5000」

「3回戦、白様+20万7500」

「そしてマッチ勝者である白様に+60万」

「しめて2500円、赤スリーブの方の勝ちでございます。お間違い

有りませんか？」

青葉の確認に半ば固まったままの白であったが

「…ええ、間違いないわ」

と、数秒遅れながらも答えた。

「では改めまして、これにて勝負は終了でございます。不肖、私青葉が審判兼進行役を務めさせていただきます」

青葉は一礼するとカウンターに戻って行った。

青葉がカウンターに戻った直後、白は天井を見上げて「ふうー」と大きく息を吐いた。

それを皮切りに店内がまたざわつき始める。

「なんだあ？あれか、要するにマッチに負けながらもレートでは上回ってたつーことか？」

「ああ、まさかの逆転現象だな。珍しいもん見れたぜ」

「おい、最終的に勝ったのはあの子の方じゃねえか。5000返せ」

「いやいやマッチに勝ったのはグラサン姉ちゃんだろ？まあ引き分けで手を打ってやる」

「それはこっちのセリフだ。青葉さん赤スリーブの方の勝ちって言うてただろうが」

「2500円だったわね」

落ち着きを取り戻した白は財布を取り出す。

「はい」

事態を静観していた彼女が勝負後、初めて声を発する。

「5000円あるかしら」

「ありますよ」

白は財布から1000円札を3枚抜いて渡すと、彼女から500円を受け取った。

「さつきはちよつと見苦しかったわね、反省するわ。ねえ」  
「はい」

「言っておくけど失念していたわけじゃないわ。ただ、マッチに勝ってお金を取られるなんて普通は有り得ないもの……」

白はまだ実感が無いといった様子で彼女から視線を外す。

「わたしも初めてです」

通常2勝先取のマッチ戦の場合、ライフ差レートや勝利数レートに加えマッチ勝利レートもあるため、マッチに勝利すればおおよそマッチレート以上のお金を手にすることができる。

多少なり額の差がつくことはあれど、勝利数レートやマッチ勝利レートに比べればライフ差レートなど微々たるものだからだ。

レート無しのデュエルと同様に先に相手のLPを0にできるか、あるいはデツキを0にできるかを第一に考えるのは当然であり、またその考えでなければ収支をプラスにしていくことは難しいだろう。

基本的に自分のLPなど二の次でいいのである。LPの優位が必ずしもデュエルの勝利に結びつくとは限らないのだから。

白の失念していたわけじゃないという言葉はレートがいくらなのかは覚えてはいるが、それを意識してデュエルしていたわけではないという意味であり、それはデュエルをする者なら誰しもが持つ当然の感覚と言える。

それ故に白の信じられないといった反応である。マッチに勝利してお金を失うなんてことはまず有り得ないのだ。余程のことが無ければ。

「負けた気しないわ。負け惜しみじゃないわよ」

「はっ」

つまり上回ってしまった。勝利数1回分のレートとマッチ勝利レートの合計した数値を、ライフ差レートが。

それもこれ以上は無いというギリギリの数値で。

彼女の勝利は2回戦の1戦のみだがLP差を5700つけての圧勝であったのに対し、白は2戦勝利したものの1回戦は300、3回戦に至ってはたった50の差とどちらも非常に僅差の勝利であった。

LP差の合計は5350。ただその数値自体は4000LP制に

おいて大差ではあるもののそれほど珍しいものではない。マッチ勝者がそのくらい差をつけて勝ったということであれば。

「それで、やっぱりお金を得た方が勝者ってことになるのかしら」  
「そうみたいですわね」

しかし、今回の勝負において実際に5350という大差をつけて上回ったのはマッチ敗者の方という異常事態。1度の圧勝と2度の僅差での敗北という条件が重なりこのような逆転現象が起きた。

はからずもこの5350というのは、まさに紙一重で彼女が上回れる数値であり、もしどこかでLPが50でも差が詰まり合計差が5300であったなら、白はわずかではあるが上回っていた。

それこそ白が最後のターンに引いたのが《ダークジェロイド》ではなく《猛進する剣角獣》であったなら…

あの場面、白はモンスターを引けば勝ちだったため勝率は3分の2であった。

だが勝者の定義をレートで上回った方とするならば、白の勝率は3分の2ではなく3分の1。白の方が不利であった。

「まあ、レート有りの勝負なんだからそうよね。それにしても負け分が2500円なんてね、なんか余計に悔しいわ」

「わたしも、最後は《黒いペンダント》を引いて欲しかったです」

「そうね、それなら文句なくアナタの勝ちだったものね。うん、引かなくて良かったわ」

白は残念ね、と言わんばかりの笑みを彼女に見せつける。

「ねえ、ひとつ訊きたいんだけど」

「はい、何でしょう？」

「最初から頭に入れてたの？こういうオチ」

「さあ、どうでしょう」

今度は彼女が挑戦的な笑みを浮かべる。

「むかつくわね。つねるわよ」

「痛いのは、いやです」

「冗談よ。で、どうなの？」

「頭の片隅には入れてました。はつきりと意識したのは2回戦の前で

す」

「そう、そんなところから見えてたってわけね」

「はい」

（つてことは、やっぱり2回戦のデッキ読まれてたのね。で、思惑通りに3回戦に進んだと）

（それでその3回戦も読まれてた、と）

白は「ふん」と自嘲気味に鼻から息を出す。

（なんか惜敗っぽい感じになってるけど完敗じゃないの。そもそもマッチに勝っておきながら負けてる時点であれだわ）

（この子は50届かなかったって言ってたけど、50届かなかったのはむしろワタシの方っていうね）

「ねえ」

「はい」

「最後のターン、ワタシが《ダークジェロイド》を召喚した時にはもう勝利を確信してたの？」

「はい、計算してましたので」

「じゃあその上で届きませんでした、とか言ってたわけ？」

「はい、マッチには負けちゃいましたので」

（…ほんと、言うじゃないの。何が1枚でもずれてたらアナタが勝ってた、よ。馬鹿なのかしら）

白は今更ながら自分の発言を恥ずかしく思った。

「…」

白は目を細めて彼女をじーつと観察する。サングラスをかけているため彼女からはよく見えないが。

「？」

「やっぱつねる」

「いやです」

「嘘。むかつく、悔しい、負けた、リベンジ失敗だわ」

単語を並べるように放った後、白は彼女から視線を外す。

「わたしの、勝ちです」

「知ってるわよ。ねえ」

「はい」

「晩ご飯一緒にどうかしら？時間あつたらでいいんだけど」

「つねりますか？」

「しないわよそんなこと」

白は軽く笑いながら否定する。

「それなら、ご一緒します」

「そう、良かったわ。じゃあ早速行きましょ」

「はい」

話が決まると2人は足早に黒蠍を後にする。その際、出入り口へと向かう2人に客たちから「お疲れ！」や「最高だったぞ！」といった労いや称賛の言葉が送られた。

もちろん店を出る前に彼女は忘れることなく青葉に審判とお茶菓子のお礼を述べた。横で聞いていた白はというと「次はワタシにもちようだい」と青葉にねだっていた。

10話 #9 「あるトッププロ」

「ねえ」

「はい」

店を出た直後、白が彼女に声をかける。

「ワタシこの辺初めてなんだけど、お店案内してくれるかしら」

「食べたいもの、ありますか？」

「和食」

「和食…あ、すぐ近くにありますが、回るおすし」

「いいわね、それにしましょ」

2人は近場の回転寿司の店へと向かった。

――

2人が去った後のデュエルハウス黒蠍。

勝負の余韻も引き、客たちは各々デュエルを楽しんでいる。

「はあ!？」

そんな最中、客の1人が驚きの声を上げる。

「あ?…どないしたんや?」

「いやこいつがさ…さっきのグラスサン姉ちゃん、もしかして鈴白なんじゃないかって言うんだよ」

対面の客を指しながら別の客に説明する。

「鈴白、って今年の桜花の覇者か!?! いやいやそれは無いやろ!」

「いやでも声とかそっくりだったし…! 顔はよく見えなかったけど」

「それ、俺もそう思ったけどあれはたまたま似ただけの別人だと思  
うわ。普通に考えて鈴白レベルのプロがこんなところに来るはずな  
いし」

「鈴白っていやあ鵜櫛記念に出るんだよな?」

「ああ。俺見に行こうかなあ」

店内がにわかに盛り上がり始める。

「けどき、もし本当に鈴白だったら面白いよな。そしたらあの娘、高レート勝負でG Aデュエリストに勝ったってことになるしさ」

「まあな。そういやあの嬢ちゃん、グラサンの姉ちゃんと何しに行っただんだ？」

「晩飯でも行ったんとちゃうか？」

「晩飯かあ。こつそりついて行けばよかったかなあ」

「お前みたいなストーカーから逃げたんじゃないの」

「何だとお!?!おめえもずっとガン見してたじゃねえか!」

「あつ、ばれてた」

客の1人がそう言うのと店内は笑い包まれた。

プロデュエリスト、即ち表プロとは大まかに言えばデュエルの大会に出場してお金を稼ぐ人たちのことである。

プロの大会は大きく分けて4種類、「グレードA」「グレードB」「グレードC」「ノーグレード」（競馬や競輪等の公営競技を想像していただければ話は早いかもしれません）

名前の通り大会のレベルは挙げた順番に高いものとなっており、またレベルが高いほど大会の数は少なく賞金は高い。

どの大会でも出場可能かというところではなく、各大会によってそれぞれ定められた出場条件があり、またルールや賞金も違ってくる。

出場条件は年齢や性別、総獲得賞金など大会によって様々である。

例えば毎年4月に行われるグレードA「プロッサムカップ」の場合、出場するためには「女性」「プロデビューから3年以内」の他に「過去プロッサムカップに出場していないこと」や「特定の大会で好成績を残していること」などの条件をクリアしていなければならない。

グレードAの大会ともなれば出場するだけでも厳しく、プロの中でも選りすぐりのデュエリストたちが一堂に集う。メディアの注目度もグレードB以下に比べて段違いだ。

そのような大会でもし優勝を手にすることが出来たならば、相当の賞金と名声を手にすることは言うまでもないだろう。

ここまで話を踏まえて、以前置いておくと言ってそれきりだった専門的な用語を説明すると

「鶉籠記念」とは7月上旬に鶉籠で行われるグレードBの大会。鶉籠周辺で行われる大会としては最も格が高く歴史も古い。

「桜花」とはブロッサムカップの通称。ブロッサムカップに限らずグレードC以上の大会は別の呼び名があることも珍しくない。

「GAデュエリスト」とはグレードAの大会優勝経験者。GAデュエリストの割合は全プロデュエリストの1%未満であり、その称号は紛れもなくトッププロの証。

つまり客の1人は白のことを今年のグレードA「ブロッサムカップ」を優勝し、グレードB「鶉籠記念」に出場予定である鈴白というプロデュエリストではないか、と言っていたということである。

別の客にそれは無いと否定されたが。

なお、元プロデュエリストの紫はグレードCを1度優勝しておりグレードAの出場経験もある。ノーグレード以外だとグレードCを1度優勝しただけだったが、それでも大半のプロデュエリストよりは好成績といって良かった。

何故なら同じく元プロの柴岡のように、グレードC以上の大会で1度も優勝出来ずに現役を終えてしまうプロデュエリストが全体の多くを占めているからである。

脚光を浴びるのは、限られたほんの一部。それがプロの世界である。

――

「何から食べようかしら」

白はベルトコンベアから流れてくる品々を眺める。

「サングラス、外さないんですね」

「あら、アナタだって同じじゃない」

彼女の言葉に白は小さくニヤリとして答える。

「いつもの姿じゃないんでしょ？それ」

「この姿も、わたしです」

「ほら、やっぱりワタシと同じじゃない」

クスクスと笑いながら寿司を1皿取る白。彼女の前ではつきりと笑い顔を見せたのはこれが初めてである。

「別の姿、見てみたいです」

「アナタが見せてくれたらね」

「考えておきます」

「そう。期待しないで待ってるわ」

白は食事を開始する。彼女も同じく食事を開始した。

「いただきます」

――

時は少し遡り、同日午後7時半。某所

(今頃黒蠍ではあの2人の勝負か)

黒川はどこか明るい表情でタバコを吹かす。

「黒川さん、なんかあったんですか？楽しそうですね」

黒川の隣に立つ梅里がおにぎりを頬張りながら話しかける。

「口に入れたまま喋るな。別に何もねえよ」

「そうですね。ところで初めて買ったんですけど梅しそ、結構いけますね！黒川さんもおにぎり食べます？」

「いや、いらん」

「いらんんですか？じゃあ僕が全部いただきますね！」

梅里は未開封のおにぎりを袋に仕舞うと空いた方の手で携帯電話を操作する。

「…おー」

「どうした？」

「今デュエルの情報サイト見たんですけど、鵜櫓記念の予想投票始まってたんですね！」

「ああ、そーいや来週か」

「いやあ楽しみですね。鈴白ちゃんは…おお！オッズ1.5倍ですつて！流石の人気ですね」

梅里は嬉しそうに話す。

「金のかかってない事前の予想投票など何の参考にもならんぞ。何だ？お前鈴白のファンか？」

「はい！ブロッサムカップ見てから鈴白ちゃん推しです！」

元気良く答える梅里。

「そーか」

「かわいいですよー鈴白ちゃん。顔だけじゃなくて性格も落ち着いてるっていうか媚びてないっていうか、そこがまた良いんですよー」

自身の推しデュエリストの魅力語る梅里に黒川は「ああ」と聞き流す。

「あ、そういえば僕の隣に高校生くらいの子が住んでるんですけど、鈴白ちゃんとよく似てるんですよ！雰囲気とか」

「へえ。似てるのか」

通常ならこういった話は「知らんがな」と思いつつ聞き流す黒川であるが、今回は小さく笑いながらそう答えた。

「お？興味ある感じですか？あの落ち着いた雰囲気とか結構似てますよー。まあ鈴白ちゃんと比べると高校生な分まだ幼い感じですけどね」

「そーか」

（確かに似てるな、色々）

黒川はそう思いながらタバコの煙を吹いた。

10話 #10 「もうひとつの姿」

――

「お寿司に茶わん蒸しは外せないわ」

白は茶わん蒸しを流し込むように口に運ぶ。

「やけどしますよ」

「アツアツじゃないから大丈夫よ」

白はそう言うものの多少は熱かったのだろう、しばらく口の中に含んでから飲み込んだ。

「ねえ、アナタの考えが聞きたいんだけど」

飲み込んだ直後、白はそう切り出す。

「何の考えでしようか？」

「《機械犬マロン》を反転召喚したターン、アナタは何を考えてその答えを出したの？」

白が聞きたいこと。それは3回戦の中盤、彼女が長考の末出した《機械犬マロン》反転召喚という答えの理由。

「3つの展開とその先を考えてました」

「3つ？」

「はい。このターンに反転召喚するか、1ターン後にするか、2ターン後にするか」

「このうち1ターン後にするという展開は、《鎖付きブーメラン》か《黒いペンダント》を引かれたら負けてしまうので消しました」

「ずっと考えてたのは2ターン後にした場合の展開です。パターンが多くて苦労しました…」

あの時点でお互い残りデッキは3枚ずつ。お互い合わせて計6ターン行うと考えた場合、ドロウするカードの順番の組み合わせは36通りもある。

ただ、実際は6ターンも経たずにデュエルが決着する組み合わせも多いため、総当たりでも答えを導き出すことにそれほど時間はかから

ない。

事実、あの時彼女は脳内でそれに近いことをしていた。

「白さんが《鎖付きブーメラン》か《黒いペンダント》を引いて、わたしが《破壊輪》を引いたら負け」

「白さんが《メテオ・ストライク》か《黒いペンダント》を引いて、わたしが《プロミネンス・ドラゴン》を引いたら勝ち」

「白さんが何を引いても、わたしが《ビッグ・シールド・ガードナー》を引いたら負け」

「他にもそのターンで決まらない組み合わせとかもあつて…時間かかりました」

それを聞いて白は感心しながらも呆れたような表情を浮かべる。

「…ご苦労なことね、ワタシならこんがらがって決め打ちしちゃうわ」「わたしもだいたい計算だったので、詳しい確率とか期待値とかは…だめでした。でも、なんとなく不利なつてことはわかりました」「それでそのターンに反転召喚した、と」

「はい。《黒いペンダント》を引かれたら負けというリスクはありませんが、《ビッグ・シールド・ガードナー》を引いたら勝ちというメリットもありましたので」

「なるほど。…つてちよつと、話聞いている限りだとワタシの手札とデッキに何が残ってるかわかってたみたいに見えるんだけど」

「はい、わかってました。その時の白さんの手札が《猛進する剣角獣》で、デッキに残ってるカードが《鎖付きブーメラン》《メテオ・ストライク》《黒いペンダント》ということも」

「それはどうしてかしら？」

「白さんのその手札のカードは最初のターンからずっとあつたカードで、ここまでの展開と白さんのデッキから考えれば、まだ見えてないモンスターは《猛進する剣角獣》とわかります」

「デッキの方も同じくまだ見えてない装備カード3枚。《ハリケーン》の可能性も考えましたが、白さんなら《メテオ・ストライク》を選ぶかな、つて」

「ふーん。でもそれつてワタシのデッキに入ってるモンスターは5

枚っていう前提ありきよね？6枚入ってるかもしれないとか思わなかったの？」

「はい。未使用カードが7枚という縛りのあるわたしの3回戦のデッキを考えた時に『あのデッキ相手にモンスター6枚は多いわね』って、白さんならそう思ってた5枚にするって信じてましたので」

「…その通りよ。何から何まで読んでたってわけね、気に入らないわ」

白は彼女には敵わない、と言わんばかりの表情で声を漏らす。

「でも、読めたとしても運に見放されちゃったら、勝てないです」

「まあね。《ビッグ・シールド・ガードナー》を引けば勝ちって状況でアナタが引いたのは《破壊輪》だったものね」

「はい。あのタイミングで引くなんて、って負けを覚悟しました」

「ただワタシも引けなかったのよね、2ターン連続で《黒いペンダント》。ほんとデッキの一番下にさえ無ければあそこまで纏れなかったのに…」

白は不満気に唇を尖らせる。

「わたしはそのおかげで勝ちました」

対照的に彼女は顔を小さく綻ばせた。

「ふん、その幸運に感謝しなさい」

「はい、ありがとうございます」

「よろしい」

白は満足げに唇を横に伸ばした。

――

会計を済ませ、回転寿司店から出た2人は店の手前横で立ち止まる。時刻は現在午後9時半。

「美味しかったわね」

「はい」

「アナタはこの後どうするの？」

「おうちに帰ります」

「そう。それじゃあちよっとお邪魔しようかしら」

「いいですよ」

彼女の即答に白は不意を衝かれたのか、次の言葉が遅れた。

「…あら、断られるかと思ったわ」

「ひとり暮らしなので、わたししだいです」

「そう…ここから近いの?」

白は少し間を置いて問う。

「歩くと遠いかもありません。電車だと近いです」

「じゃあ電車ね、行きましょ」

「はい」

2人は駅へと向かった。

――

「どうぞ」

「お邪魔するわ」

白は靴を脱ぎ、彼女の家に上がる。

「何か飲みますか?」

「麦茶あるかしら?」

「ありますよ。適当にゆっくりしてて下さい」

「わかったわ」

白はテーブル近くに腰を下ろした。

「どうぞ」

彼女は白の前に麦茶を置く。

「ありがとう」

白は麦茶を一口飲んだ後、彼女の顔をじーっと観察する。

「?」

彼女も疑問を感じながら見つめ返す。

「2人つきりよね?」

「はい」

「じゃあお願いするわ」

「はい」

「見せて、アナタのもうひとつの姿」

白の要望に彼女は少し時間を置いて「はい」と返事した。

彼女は帽子とメガネを取り、髪を解く。手慣れたもので10秒もしないうちに日中、高校生活を送っていた彼女が現れた。

「そんな姿してたのね」

「はい。はじめまして」

「はじめまして。名前は何というのかしら？」

「鈴瀬麗梨です」

「良い名前ね。それじゃあワタシも自己紹介」

白はそう言うへとヘアゴムで結われた髪を解き、サングラスを外した。

彼女がそうしたと同様に、もうひとつの白の姿が現れる。

「はじめまして。ワタシは鈴白藜霞（スズシロ レイカ）。よろしく、麗梨」

【第10話 終】

### #S-3 「追加エピソード1・2」

時は前日に戻り、6月24日。午後5時半。

桜はいつもの様に夕食の準備をする。

(あとは炒めるだけだな)

あらかた仕込みが終わると軽く片付けをしてから部屋に戻った。

(へえ、こういう組み合わせもあるのか)

レシピ投稿サイトに投稿された料理を閲覧しながら感心する桜。時折このようなサイトを覗いてはレパートリーを増やしている。

(今度作ってみるか)

「ただいま」

午後6時、兄の赤石が帰宅する。

「おかえり。遅かったな」

「ああ、ちよつと買い物にな」

「先ごはん食べる?」

「そうだな。桜」

「あ?」

「誕生日おめでとう」

「!...」

(あ、そっか今日...)

兄に言われて桜は今日が何の日であるかを思い出す。

「これプレゼントだ。開けてみな」

「あ、ありがとう...」

プレゼントを受け取った桜がラッピングを解く。現れたのは黒色の小さい箱。

(何だろう...?)

桜はそう思いながら箱を開けた。

「!……、これって!」

箱の中身を見て桜は驚きの表情を浮かべ、そのまま兄の顔を見る。「あの時ずつと見てただろ。欲しいんじゃないかと思ってるな」

桜が驚いたその中身、それは先端に猫を象った銀色がぶら下がっているネックレス。

「っ……!」

(兄貴にも見られてたのか……!)

それは土曜日、藍子と赤石の3人で出かけた時にショッピングモールで見つけたネックレスだった。

「た、高かったんじゃないのか……?」

桜は兄に問うが、

「さあな。ネックレス買ったことねえからよくわからん」

返ってきたのはファッションに疎い赤石らしい言葉。

「……」

「値段のことなら気にすんな。それより晩飯だ。食後のケーキも買ってきたからな」

赤石はケーキの入った箱を見せながら桜に微笑みかける。

「う、うん……兄貴」

赤石は桜の言葉を待つ。

「ありがとう。大切にする」

桜は照れ混じりに不器用な微笑みを返した。

――

彼女が柴岡と勝負した日の夜、居酒屋からの帰り道でそれぞれ別れた後……

紫はヘズの肩を借りながらなんとか家にまで辿り着いていた。

「おいユカリ、鍵はどこダ?」

「うひろのポケットー」

酔っている紫が舌足らずな声で鍵の在り処を示す。

ヘズが後ろのポケットに手を入れた瞬間、

「ヘズのえっちー、おひり触らないのー」

と妙に上機嫌な声が飛んでくる。

(面倒な酔っぱらいだな…)

このまま置いて帰ろうかと思ったヘズだったが、流石にそんなことはせず、紫の声は無視して鍵を取りドアを開けた。

「ベッドまでお願いーい」

家に入った途端、紫からの要望。

「はいヨ」

ヘズは肩を貸したまま渋々紫をベッドまで運ぶ。

「ほら、着いタ」

「うんー」

ヘズが肩から手をほどくと、紫は飛び込むようにベッドへと寝転んだ。

ああー、と心地良さそうな声を漏らしながら紫は寝返りを打ち、仰向けになる。

「！…」

その拍子に服が少々はだけたようで、肩からピンク色の紐が現れる。

(だらしのないナ…酒は人を変えさせるネ)

「おいユカリ、見えてル」

ヘズは呆れながらも注意をしておく。

「何がー？」

「自分の肩を見ロ」

それを聞いて紫は自分の肩へと視線を落とす。

しばらくぼーっと見つめていた紫だったが、突如何かに気が付いたかのように挑発的な笑みを浮かべた。

「あーなるほどねー…興奮したー？」

紫の問いにヘズは布団を掴むと、

「ブフォ！」

これが返答と言わんばかりにバサツと頭から覆い被せた。

「酔っぱらった女を抱く趣味は無イ」

きっぱりと言い放ち、ヘズはベッドから背を向ける。

「じゃあオレは帰るからナ。鍵閉めておけヨ」

布団の中でもごもご、と何か喋る紫をよそにヘズは去って行こうとするが、

「ちよつとこらー！ヘズー！」

ガバツと布団をめぐり上げた紫に呼び止められる。

「何ダ？」

面倒くさそうに振り向いたヘズに、

「サンキューな、助かった」

紫は笑顔を見せた。

「どういたしました。おやすミ」

「おやすみー」

ヘズは答えるように軽く手を振って去って行った。

結局、紫は鍵を閉めることなくそのままベッドの上で頭痛と共に朝を迎えるのであった。

11話 #1 「似ている人」

「はじめまして、藜霞さん」

彼女は挨拶を返す。

「…あら、それだけ？」

暫しの静寂の後、藜霞は物足りなさそうに彼女に問うが、  
「？」

彼女はその問いが理解できない、というような目で返す。

「ワタシこれでも結構有名なプロデュエリストだと思ってるんだけど。2か月前は一躍時の人だったし」

「ごめんなさい、はじめましてです」

「残念ね、驚く顔が見たかったのに」

「わーあなたがあの有名なー」

彼女はわざとらしさを隠すことなく、抑揚の無い声で驚きを装う。

「お気遣いありがとう。サインの代わりにペンでツンツンしてあげるわ」

「わー」

「にしても知らないのは意外だったわ。表のデュエルには興味無いの？」

「わたしには、遠い世界なので」

彼女のその言葉には様々な意味が含まれている、と感じた藜霞は少し遅れてから口を開いた。

「そんなことないわ。表も裏も似たようなものよ」

「でも姿は違います」

「そうね。今はアナタと同じ表かしら」

「わたしと似てますね」

「ええ。名前といいそろそろ笑えないレベルよ」

髪の色や長さこそ違うものの藜霞の顔つきや体格、そして何より自身が持つその雰囲気は彼女のそれとかなり近いものを感じさせていた。姉妹と言われれば大した違和感も無く信じてしまう程度には。

「ついに会ってしまったんですね、わたしたち…」

「何意味深なこと言ってるの。普通にはじめましてって言ったじゃないの」

珍しく感情のこもった演技を見せる彼女にツツコミを入れる藜霞。やはり相性も良さそうだ。

「まあ何か運命めいたものを感じないこともないけど」

藜霞は間を取るように麦茶を一口飲む。

「ねえ、六武衆にはよく行くの?」

「いえ、あの日が初めてでした」

「ふーん」

(じゃあやっぱり黒川が引き合わせたってわけね。ほんとすごい送り込んでくれたわ)

わずかに苦笑いを浮かべる藜霞。

「藜霞さんはよく行くんですか?」

「ワタシも数えるくらいしか行ってないわ。鶯櫨に來たのもちようど先週の水曜だし」

プロデュエリストと呼ばれる人間の生活というものは自分の出場可能な大会を見つけては出場登録をして、そしてその大会への出場が決まるとその地に赴きデュエルする。基本はその繰り返しである。

もちろん藜霞も例外ではなく、プロツサムカップの時は関西の方へ飛び、そして今回は鶯櫨記念に出場ということで鶯櫨まで参上した。

「じゃあ師範の存在も知らないわよね」

「師範ですか?」

「ええ。六武衆には時々師範が現れるのよ。カードの方じゃないわよ」

「はい」

「店の主なんだけど、デュエルがもの凄く強いよ。ワタシも1回戦ったことあるんだけど完敗だったわ」

「それは強そうですね」

「強いわよ、プロも顔負けの実力者って話ね。でもアナタならもしかするかもしれないわ」

「もし勝ったらどうなるのでしょう?」

「さあ、わからないわ。勝てばわかるんじゃないかしら」

藜霞は彼女を煽るように笑みを浮かべる。

「白髭をたくわえた厳つい顔の爺さんがいたら、それが師範よ。今度六武衆に行く機会があったら挑んでみなさい。タイミングが合うかは運次第だけれど」

「覚えておきます」

彼女も小さく微笑んだ。

「さて、そろそろおいとましようかしら」

そう言つて藜霞は立ち上がる。

「帰るんですか？」

「ええ。ホテルの門限が近付いてるのよね。アナタも明日早いでしょ？」

「7時起きです」

これまでの高レート勝負とは違い、今日は水曜日。つまり彼女は明日も学校がある。

「睡眠時間ちよつと貰っちゃったかしら、悪いわね」

「いえ、大丈夫ですよ」

「そう。それなら良かったわ」

藜霞は玄関へと向かった。

「ねえ」

靴を履き終えた藜霞が彼女の方に向き直る。

「はい」

「今日は楽しかったわ」

「わたしも、楽しかったです」

「次こそはアナタに勝つてあげる」

「いつでも待ってます」

「それじゃあまたね、おやすみ」

「おやすみなさい」

藜霞は彼女の家を後にした。

――

翌日午前7時、彼女は目を覚ます。

あの後、シャワーを浴びてすぐ眠ってしまったようだ。

(学校：今日は木曜日)

彼女は体を起こし、朝の支度を始めた。

朝食を済ませた彼女にメールが着信する。送信元は昨日知ったばかりのアドレス。

f r o m 藜霞

「白よ。おはよう

遠慮なくいつでも連絡してきなさい

次は勝つからそのつもりで」

t o 麗梨

「おはようございます

はい。白さんもいつでも連絡してきてください

次も勝ちます」

彼女はメールを返信すると、朝の支度を再開した。

――

午前の授業が終わり、昼休み。

彼女たちはいつものように昼食の準備に入る。

「お昼だお昼」

瑞希が上機嫌で取り出したのは包装されたサンドイッチ。

「瑞希さん、今日はサンドイッチなんですね」

綾芽は珍しそうに話す。というのも瑞希の昼食は毎日弁当だからだ、昨日までは。

「うん。朝ちよつと寝過ぎしちゃって今日はコンビニのサンドイッチ。あはは…」

「あー…」

「まあでも、たまにはこういうのもいいよね！ね、れーりちゃん！」  
新鮮な気分を感じながら瑞希はサンドイッチを開封する。

「うん、いいと思う」

彼女も弁当を開けようとしたその時、

「鈴瀬、ちよつといいか？」

担任である葛城が教室に現れ彼女を呼び出す。

「はい」

彼女は周囲の視線を浴びる中、葛城の後をついて行くように教室を去った。

――

彼女たちが昼休みを迎えた頃、藜霞も喫茶店でランチタイムを過ごしていた。2人が出会うきっかけとなった黒川と共に。

「ほう、2500円負けか。そいつはご愁傷様」

黒川は冗談めかしてコーヒーを飲む。

「黒川にとっては端金かもしれないけど、このランチ2食分よ。安くはないわ」

むつ、と小さく顔をしかめて約1200円のランチセットを食べ進める藜霞。

たかが2500円されど2500円。藜霞にとってその負けは金額以上に大きな意味を持っている。

「そうだな。相手を考えたら高過ぎる端金だ」

「あら、悪くない表現ね」

「しつかり味わって食えよ」

「ええ。悔し美味しく頂いてるわ」

「なんだそりゃ」

黒川はフツ、と一息笑ってコーヒーを飲む。

「ねえ、ききたいんだけど」

「ん？」

「ワタシが青葉さんに勝てる確率」

「そいつは0だな」

唐突な質問に即答する黒川。

「やっぱり」

同じく知ってたかのように即答する藜霞。

「わかってるなら訊くな」

黒川は軽く笑って返した。

「ところで、もう寄ってきたのか？桐縹の方には」

「行ってきたわ。行っていいのかちよつと悩んだけどね」

## 11話 #2 「訪れた人」

――

デュエルハウス六武衆で彼女と出会う数日前のこと。

(変わってないわね。以前と全く同じだわ)

藜霞はとある家の門の前に立っていた。

表札には「椽」の文字が刻印されている。

(さて、モードチェンジ)

ヘアゴムを解き、サングラスを外す。

(さすがにちよつと、緊張)

ふう、と藜霞は息を整えると、インターホンを押した。

「どちら様でー」

応対した相手の声が途切れる。

藜霞が答えるまでもなく直後、

「藜霞様…!?藜霞様でございませぬ!?すぐお迎えにー」

慌てふためくような声が届けられるが、

「必要ないわ」

藜霞は冷静に返す。補足しておく訪問者の顔が見えるタイプのインターホンであるため、返事が無くても相手は藜霞だと認識できた。

「ですが…!」

「ワタシのことは気にしないで。琥珀ちゃんはいるかしら?」

「お嬢様でしたらまだ学校かと」

「あら、ちよつと早かったわね。出直すわ」

「お、お待ち下さい!こちらでお嬢様のお帰りをお待ち頂いてはいかがでしょうか?」

藜霞は少し間を置いて答える。

「…そうね、鍵だけ開けてもらえるかしら」

「か、かしこまりました」

そして門を開けて敷地へと足を踏み入れた。

――

「あちらさんも驚いただろうな、まさか何の前触れもなく訪れてくるとは思わんだろ」

「それはもうびっくりしまくりだったわ。ワタシ思わず笑いそうになっちゃって」

藜霞は楽しそうに話す。

「全く、困ったお嬢様だ」

「反省してるわ。ちよつとだけ」

「まあ、あちらさんとしても対応しやすかったんじゃないかねえか？昔から変わらないお前つてことで」

「その通りよ。あえて昔ながらのワタシを演じたのね」

「嘘つけ、素だろ」

黒川は軽く笑いながらツツコミを入れた。

――

生徒会の仕事を終え、私は帰途についていた。

すっかり見慣れたいつもの通学路を歩き、自宅へと向かう。

「お嬢様、お帰りなさい」

私が玄関のドアを開けるとメイドが出迎える、いつもの光景。

「ただいま」

「お帰り、琥珀ちゃん」

もう1人のメイドも出迎える。

「ただいま」

私はいつものように自分の部屋へと――

「…うん？」

部屋へと向かう足を止める。

琥珀ちゃん：？メイドはそんな呼び方しないはず…  
振り返ってさっきの声の主を確認する。

「どうもー」

「!？」

手に持っていたかばんが床に落ち、「ドサツ」という音が響いた。

「れ、藜霞お姉様!?!どうしてここに…!?!」

「どうしてって、琥珀ちゃんに会いたかったからに決まってるじゃない」

口を開けて呆然としてる私に、ニツコリと微笑む藜霞お姉様。

「久しぶりね。プロになってからは初めてかしら」

「ええ…お久しぶりです…!」

まだこの状況が信じられないけれど、目の前で微笑むその人は確かにあの藜霞お姉様に間違いなくて…

「ちようど今から30分程前に訪ねられました…」

メイドも困惑を隠せない様子で伝えてくる。

「琥珀ちゃんがまだ帰ってないって聞いたから待たせてもらったのよ」

対して藜霞お姉様は楽しそうなお様子。

「そ、そうだったのですね…」

「お嬢様、お部屋でお話されますか?」

メイドの問いに少し遅れて答える。

「…そうですね。制服も着替えないといけませんし」

これは藜霞お姉様と私の仲を考慮したメイドなりの気遣い。

普段なら来客との応対は応接間や食堂で行うのが決まりとなっているけれど、藜霞お姉様は特別。

私にとって大切な人ですもの。

「藜霞お姉様、私のあとをついて来て下さい」

澄ました顔をしながら部屋へと向かう私。

でもその顔は…人に見せられないくらい緩んでいたと思います。だって、藜霞お姉様と久々にお話が出来るので…！

「藜霞お姉様…」

部屋に戻るなり私は藜霞お姉様に抱き着きました。

「ずっと、会いたかったです…！」

私が素直になれる瞬間。気丈に振る舞う私はここに居りません。

「琥珀ちゃんったら大げさね。うん、ワタシも会いたかった」

苦笑いしながら抱き返す藜霞お姉様。

でもその声は嬉しそうでした。

「びっくりした？」

「はい、本当に夢じゃないかって思いました…でも、どうして突然訪ねて来られたのですか？もしかして何かあったりとか…？」

「あったのが、なくなったから、来れたのよ」

「？…どういう意味でしょうか？」

「言葉通りの意味よ」

藜霞お姉様の言動と行動は昔から読めないところがあります。意味や理由を尋ねてもまた別の疑問が浮かんでしまう場合も多いけれど、それでも探せば答えは見つけ出せます。

ただ私自身答えそのものよりも、求める過程でのこの振り回される感じが好きなのです…変わっているのでしょうか。

ここでも当の本人は十分に説明しきったような顔をしておりませんが、私には何ひとつわかりません。

…いえ、違いますね。実のところ、その意味を結構把握していると  
思います。

他でもない藜霞お姉様のことですもの。何ひとつわからないなん

てこと有り得ません。

ですがそれよりも先に大切な、2か月前から藜霞お姉様に会ったら言いたかったことをしっかりと伝えます。わからないフリをしなごら。

「ごめんなさい、よくわかりません…それはそうと藜霞お姉様」

「んー？」

「ブロッサムカップ優勝おめでとうございます…！」

藜霞お姉様が成し遂げた偉業。杯を手にするまでの道のりが藜霞お姉様にとってどれほど苦難であったのか、私はよく知っております。

「あら、やっぱり知ってたのね。ありがとう」

「もちろんです！これまで藜霞お姉様が出場された大会は全て見ておりました…！本当に、尊敬致します…！」

なんだか感情が溢れて上手く言葉が出てきません。そういえば藜霞お姉様が優勝を決められた時も私、感極まって涙した覚えがありますが、今溢れてくるそれはその時と同じものなのでしょうか。

「ほら、泣かないの。相変わらず泣き虫なんだから」

優しく私を抱き寄せる藜霞お姉様。

「泣くのは、藜霞お姉様の前だけです…ぐすつ」

泣き虫と言われて意地を張っているわけではありません。泣き顔を見せられる相手は家族以外では藜霞お姉様だけなのです。

「そう」

藜霞お姉様は私が泣き止むまで抱き寄せて下さいました。

11話 #3 「庇った人」

「高校生活はどう？」

「忙しいですが、充実してますわ」

「何かやってるの？」

「生徒会長を務めております」

「さすがね。琥珀ちゃんならみんなを上手くまとめられるわ」

「ありがとうございます」

私が泣き止んだあとは、いつもしていたようなとりとめのない話。積もっていた話題は尽きずに次から次へ。離れていた時間を埋めるかのように続いていく。

気が付けば夜を迎えようとしていた。

「お嬢様、夕食の準備が整いました」

扉越しにメイドが呼びかける。

「今行きます」

「藜霞様もご一緒はいかがでしょう？」

そして藜霞お姉様へのお誘い。久しぶりに藜霞お姉様と食事を共にできるかな、と淡い期待を抱いた束の間、

「ワタシはいいや」

お断りの返事。そんな気はしてましたが、やっぱり言葉にされると寂しいです。

「かしこまりました」

メイドも残念そうな声を残し、部屋から遠ざかって行く。

食べて行けば宜しいのに、とは言えません。藜霞お姉様の立場を考えますと、その選択は出来ないと思いますから。

「また今度どこか食べに行きましょう。2人で」

寂しそうな顔を浮かべる私に気を使うかのような藜霞お姉様の言葉。

「はい……」

そのお気持ちだけでも私は嬉しきでいっぱいです。

その後私は食堂へ、藜霞お姉様は鶉櫛の宿泊しているホテルの方へと戻られました。近いうちにまた会う約束をして。  
この日の夕食はいつもより美味しく感じました。

――

「別に飯くらい食っても良かったんじゃないか？そんなに貸しを作るのが嫌かねえ」

「アナタを見てるとそう思うわ」

「そうか」

黒川は小さくフツ、と笑う。

「本当は家にお邪魔するのも躊躇したんだけど、それは避けて通れないから」

「もう家には行かねえのか？」

「今は、そのつもり。もう驚いてくれないだろうし」

「本当は反省してねえだろ…」

「してるわよ。ちよつとだけ」

（全く、困ったお嬢様だ）

黒川は呆れを含んだ笑みを浮かべた。

「じゃあ俺はもう出るが、お前はどうする？」

直後、黒川は席から立ち上がる。

「もうしばらく残るわ」

「そうか。金は俺が払つといてやる」

「いいの？わーい、負け半分消えたー」

「言つとくが、貸しだからな」

「えー」

「来週、てっぺん取ったらチャラにしてやるよ」

黒川は冗談交じりにそう言い残すと店を去った。

（もう、チャラの難易度高すぎるわ）

黒川が去って間も無く、藜霞はランチを食べ終える。

(けど同じことね)

(鵜櫓記念、必ずてっぺん取って見せるわ)

――

「あ、おかえり、れーりちゃん」

「ただいま」

昼休み半ば、彼女が教室に戻ってくる。

「何の用だったの？」

「一緒に、パズル解いてた」

「そうなんだー…なんか、すごそう」

(パズルを解くために数学の先生に呼び出される生徒って…)

綾芽は彼女に尊敬の眼差しを向ける。

「麗梨さん、どんなパズルだったんですか？」

「…むずかしかった、まだ解けてない」

彼女は少し硬くなった表情でそれだけ言うと言とうと昼食を再開した。

(葛城先生と麗梨さんでも解けないパズル…相当な難問みたいです  
ね)

――

その日の放課後。

帰り道の途中、赤石は普段通り公園を横切ろうとしたが、

「…あ？」

公園で繰り広げられている光景を目にして立ち止まる。

「ほらほーら、取り返してみろよー」

「こつちだこつち、ほいパス」

「ナイスパスー！ヒュー」

小学生くらいの男の子数人がバスケットボールのように何かをパスで回している。

それらに翻弄されているのは同じく小学生くらいの1人の女の子。遠目からでも大体の状況は把握できる。男子数人と女子1人の表情や動きも加えれば、自ずと出てくる答えは…

(…)

しかし、赤石は介入しようと思わず、ただ遠目で見るのみ。

(まあ、小学生にありがちな遊びといえばそれまでだが…)

いじめ、とは断定はできない。案外友人同士で遊んでいるだけかもしれない、と思いつながら赤石はあることに気付く。

(ん？あの子、確か…)

顔を確認しようと女の子の方へと視線を移した瞬間、パス回しされていた何かが勢いよく赤石の前を通過し、隣接する道路まで転がっていく。

(拾いに行くか？いや今はー)

それに続くように女の子も道路の方へと飛び出した。

(…まじい！)

赤石からは見えていたが、転がった何かを夢中で追いかけていた女の子は気付いていなかった。

向かってくるトラックの存在に。

赤石は鞆を放り出し、全速力で女の子目がけて接近する。

(ぐっ！間に合え！)

女の子も拾い終えたタイミングでようやくトラックの存在に気付いたが、突然の迫りくる脅威に対応できるはずもなく…

赤石が飛び込んだ瞬間と、時ほぼ同じくしてトラックのブレーキ音が響き渡った。

停車したトラックから運転手が降りて、倒れ込んだ2人の元へ駆け付ける。

「だ、大丈夫か!？」

その声に反応して顔を上げたのは、女の子の方だった。

「は、はいーでも…!」

女の子は自分を庇ってくれたその人物に目を向ける。  
「おい兄ちゃん！大丈夫か!？」  
その人物、赤石はうつぶせで倒れたまま動かない。

11話 #4 「痛む人」

意識が無い、と運転手が思ったのも束の間、

「…ああ、大丈夫です」

赤石から大丈夫との返事。

数秒の間こそあったもののどうやら言葉通り無事らしく、赤石はゆっくりと立ち上がった。

「良かったあ」

運転手はホッ、と胸を撫で下ろす。

「おい、怪我してねえか!」

真っ先に女の子の安否を問う赤石。

(つて、やっぱりこの子か)

赤石は女の子の顔を見て、以前折り紙の花をプレゼントしてくれた子と同じ子であることを認識した。

「わ、わたしはだいじょうぶ…!」

そう答える女の子に傷は見当たらない。

「そうか。…っ!」

女の子が無事であることに安心した直後、赤石は痛みを覚えたのか一瞬顔を歪ませた。

「!?…おにーさん!血が…!」

女の子は赤石の右膝を見て目を見開く。赤石の右膝周辺は広範囲に血でじんわりと滲んでいた。

「ああ…ちよつと擦りむいただけだ。すぐ治る」

だが幸いなことに傷口自体はそれほど大きくないようで、赤石の言葉通り1〜2週間もあれば治る擦り傷といってよかった。

「一応病院行った方が…治療費なら出すから」

運転手は心配そうに勧めるが赤石は首を横に振り、

「いえ、俺もこの子も無事なんでもいいですよ。それよりすみません、急に飛び出してしまつて」

と、謝り頭を下げる。

「いやそんな…!と、とにかく2人とも無事なんだね?」

運転手の確認に赤石と女の子は1度見つめ合って、お互いに「はい」と返事をした。

運転手がトラックに乗り直し走り去った後、

「おにーさん…ありがとう、わたし…」

女の子は今にも泣きそうな声で話す。

「大丈夫だ気にすんな。俺もお前も無事だった、それでいいじゃねえか」

赤石は優しく微笑む。

「うん…い」

女の子が頷いた後、赤石は表情を締め直し公園の方へと首を向ける。

その様子を公園の中から遠目に見ているのは、気まずそうにしている数人の男の子。

「おい、お前ら。ちよつと来い」

赤石は若干の怒気を含んだ声を発し、男の子たちに向けて手招きをする。

男の子たちはビクビクと怖がりながら赤石の元へ歩く。男の子たちは誰1人赤石と視線を合わせない。

「別に怒ったりしねえからこつち見ろ」

先程とは打って変わって、赤石の声は柔らかい。

男の子たちも恐る恐るではあるが首を上げて赤石と視線を合わせる。

「遊ぶ時は周りに気を付けて皆が楽しめる遊びをしな。お前らも見えてわかっただろ？嫌な思い、悲しい思いをするのは本人だけじゃねえんだ」

「…」

男の子たちは赤石の言葉が胸に突き刺さったのか、真剣な眼差しで赤石の目を捉える。

「それさえわかってれば大丈夫だ。怖がらせて悪かったな」

赤石も男の子たちの目付きから自分の言葉をしっかりと受け止めて

くれたことを感じ取ると、女の子へと首を向ける。

「問題ねえとは思うが、今は痛まなくても後から痛みが出るってこともある。そんな時は我慢せず病院行つとけよ」

「うんーおにーさん、本当にありがとう」

「ああ。そんじゃあな」

赤石はそう答えると家へと歩き出した。

――

「いっ…！もうちよつと優しく頼む」

「優しくやってるって」

赤石は帰宅後、痛みに耐えながら桜による治療を受けていた。

「久しぶりに大喧嘩でもしたのかって思ったよ。しかし傷多いな、痛そう」

桜は赤石の背中を見ながら率直な感想を述べる。

「勢いよく飛び込んだからな、いてっ…！」

出血が目立ったのは確かに右膝周辺であったが、実はその部分だけでなく背中や腕など全身数か所を擦り剥いていた。

赤石は立ち上がった時点でかなりの痛みを全身に感じていたが、運転手や女の子に気を使わせまいと必死に顔に出さないよう我慢していたのである。それでも一瞬痛みに顔を歪ませてしまったが。

「けどこの程度の怪我で済んでよかった。もし兄貴がトラツクに轢かれてたなんて思うと…」

桜は言葉に詰まる。最悪の事態にならなくて良かったという安堵と、もしそうなっていたらという恐怖が桜の心を揺らす。

「…すまん、心配かけたな。次からは気を付ける」

背中から伝わる桜の想いに、赤石は優しく且つ強い意思のこもった声で誓う。

「…うん」

「だから泣くな」

「な、泣いてねーよ！」

「だっ！…痛えんだから優しく張れって！」

「はいはい、動くよ余計痛いよ」

「ったく…」

桜は赤石の背中から伝わる温かさから、改めて兄がここにいる幸せを感じていた。

――

時は翌日に進み、体育の授業前。

「お？赤石今日は見学か？」

プールサイドのベンチに座る赤石に話しかけるクラスメイトたち。

その中には彼女とのデュエルで負けた経験のある北林もいた。

「ああ、ちよつと怪我しちまってな」

「なんだ？また喧嘩でもしたのか？」

「いや、ただ転んだだけだ」

自嘲気味に笑う赤石。

「はは、だっせーな」

「さすがの赤石も地面には敵わんか」

「つか、転んだだけで見学とか笑えるわ」

「うるせえ。さっさと泳いでこい」

赤石はクラスメイトたちを追い返そうとする。

そんな中、北林は何かを閃いたかのように口を開いた。

「つてことはさ、今なら赤石に喧嘩勝てるんじゃない？」

「おおっ！言われてみれば！」

「これはひよつとするかもな!？」

「不敗神話の終わりってか!？」

北林の発案にクラスメイトたちが盛り上がる。

(こいつらプライドねえのか…)

その様子を情けなささと呆れ半分で静観する赤石。

「で、誰が挑戦するんだ？」

北林の疑問にクラスメイトたちは一旦静まり、

「え？お前じゃねーの？」

「北林に決まってんだろ」

「何？自分はする気無いのに喧嘩とか言ったわけ？」

と、北林に視線を向ける。

「ちよ、ちよつと待ー」

「つーことで赤石、北林がお前に挑戦するつてよ」

北林に被せるようにクラスメイトが赤石に話しかける。

「そうか。じゃあ北林、また放課後にでも」

「ま、待てよ赤石！冗談に決まってんだろ…はは」

北林はとうとう若干怖気づきながら冗談だと主張する。

「北林だっせー！」

「いいからお前ら早く泳いでこい」

赤石は今度こそクラスメイトたちを追い返すと、ベンチで授業を見学した。

11話 #5 「耐える人」

――

昼休み。赤石はトイレから出て廊下を曲がった直後、

「きゃっ！」

「うおっ、と…：椽か」

琥珀と鉢合わせする。寸前で赤石が回避したため、衝突には至らない。

「椽か、じゃないわよ。もう少しでぶつかるところだったじゃない…！」

「それは俺もなんだが…」

小声で返す赤石。

「赤石君は体が大きいから吹っ飛ぶのは私の方…って、赤石君怪我してるのだったわね。大丈夫なの？」

琥珀は関係ないと言わんばかりに文句を続ける、かと思いきや一転して赤石を心配するような態度を見せた。

「ああ、痛みもねえし平気だ」

「そう。それならいいのだけれど…：お大事にね」

「おう。心配してくれてありがとな」

赤石は穏やかな笑みを浮かべる。

「生徒会長として生徒を気に掛けるのは当然のことよ。それじゃ私はこれで」

琥珀は礼には及ばない、といった態度で答えるとその場を去った。

――

放課後、赤石は今日も普段通りに公園を横切る道を歩く。

途中、公園に目を向けてみるが今日は人が誰も居ないようだった。

（今日は居ねえか。まあ、昨日偶々居合わせたってことだろうな）

「おにーさん!」

「!」

背後からの聞き覚えがある声に赤石は振り返る。

「おう、体は大丈夫か?」

声の主は昨日赤石が助けた女の子であった。

「うん!どこもいたくないよ!」

女の子は元気良く答えると、赤石の元へと駆け寄る。

「それは良かった」

「おにーさんこそひぎ、いたくない?」

「全然痛くねえぞ。血も止まったしな」

赤石も余裕の表情を見せる。

「よかった。…えつとあの、おにーさん」

「ん?」

「おはなし、しませんか?」

――

「なるほど、昨日みたいなやつを最近よくやられてるってわけか」

公園内のブランコに座った赤石は女の子の話を一通り聞き、口を開く。

「うん…」

女の子もブランコに揺られながら頷いた。

女の子はクラスで浮いていた。理由は言動や態度が年相応のそれとは少しばかり異なるから。

周囲からの評判は当初『冷めている奴』止まりであったが、時が経つにつれ『人を見下すいけ好かない奴』『小さいくせに大人ぶってる生意気な奴』等と悪化していった。

もちろん本人にそんな気は一切無い。しかし無意識ながらそういった言動や態度を見せてしまうことがないとも言いきれなかった。要は周囲より成長するのが早かったということなのだろう。

何人かいた友人たちも次第に離れて行き、女の子は孤立した。

ただ、孤立自体は女の子も『自分と合わない人と仲良くしたってしょうがない』、と思っていたこともあり未練は無かった。

孤立してからというものの女子たちには無視され、男子たちにはからかわれ、女の子は1人耐えていた。

そんな日々が続くうちに、女の子の心の中に不安や絶望の暗雲が立ち込め始める。

女の子は焦った。早く大人になりたがった。大人になれば強自分に変われる、今自分を縛っているものから解放されると信じて。

大人になれば、という希望が雲間から差す唯一の光だった。

「なにがたのしいんだろう。つまらないよね、あんなことしても」

「…まあな」

「おにーさんってこうこうせい？」

「そうだ」

「あんなことする人って、いる？」

「今は、いねえな」

赤石は彼女と交わした約束を思い出す。彼女も言っていた通り完璧に守り切れていると断言はできないが、少なくとも赤石自身は可能な限り約束は守り続ける心持ちでいるようだ。

「やっぱり。おとなはしないよね」

「…高校生も子供だと思っけどな」

「わたしにとつては、おとなだよ」

「大人、か」

赤石は遠い目をして呟く。

（そーいや深く考えたことなかったな。年齢的には俺も大人に片足突っ込んでるんだろうが…）

「なあ、1つ訊いてもいいか？」

「なーに？」

「お前にとつて大人って、どういう人なんだ？」

「えつとね、ひとりでなんでもできて、じゆうで、だれかをなかまはず

れなんてしなくて、それから…」

女の子は次の言葉が出ずに「うーん…」と考える。

「おにーさんはどんな人がおとなっておもう?」

考えた末思い浮かばなかったのか女の子は赤石に質問し返した。

「そうだな…よくわからん」

「よくわかんない?」

「ああ。大人ってどんな人かなんて具体的に考えたことなかったし、気が付いたら大人になってるもんだと思ってたからさ」

「そうなんだ…」

「だからよくわかんねえ。わかんねえけど、ただはつきりと言いつ切れるのは…」

「のは?」

「大人になりたいと思ってるうちはまだまだ子供なんじゃねえかってことだ」

「!…」

目から鱗が落ちる、と表現するには大袈裟かもしれないが、赤石の観念に女の子は感銘を受けたようで、揺れていたブランコと揺らしていた体が共にピタツと動きを止めた。

(おとなになりたいのは、こどもだから…)

静かな時間が流れ行く。大人とは何か、子供との違いは何か。各々いずれはその答えを見つけるのだろうか。

もつとも、その答えを見つける頃にはもう子供ではないかもしれないが。

「わかんねえことも多いし、俺もまだまだ子供なんだろうな…」

赤石は再び遠い目をして呟く。

「…いえ、おにーさんはやっぱりおとなです」

女の子はどこか吹っ切れたような笑みを浮かべ呟き返した。

## 11話 #6 「応える人」

「あ、そういや昨日のあれはちゃんと拾えたか？」

「うん！ぶじだったよ。ほら」

女の子はブランドコから立つと得意気にランドセルを見せる。

「そいつは良かった。この横のストラップか？」

正確にはランドセルの側面からぶら下がってるストラップを。

「おねーちゃんがたんじょうびにプレゼントしてくれたの」

「へえ」

「さてクイズですおにーさん。このストラップの先についてるものはなんででしょう？」

「いきなりだな。つと…」

赤石はまじまじとストラップを見つめると、

「わかった、柚だ」

迷うことなく回答した。

「せいかいー。よくわかったね、おにーさん」

「蜜柑にしちやあ色が黄色過ぎるからな」

「ゆずって、わたしのなまえにもあるんだよ」

女の子は柚を象ったストラップの先端を指で摘む。

「名前？」

「うん。柚葉（ゆずは）ってなまえなの。ゆずのはっぱで、ゆずは」

「良い名前だな」

「えへへ、ありがとう。おにーさんのおなまえは？」

「修哉。赤石修哉だ」

「しゅうや…いいなまえだね！」

「ありがとう」

「えつと、修（しゅう）おにーさんでいい？」

「ああ、好きに呼んでいいぞ。柚葉」

「！…」

名前を呼ばれた瞬間、女の子こと柚葉は反射的に赤石から顔を背ける。

「あ？どうした、その呼び方は嫌か？」

「あ、ちがうの…おとなのおとこの人に、なまえよばれたのひさしぶりだったから…ちよつとびっくりしただけ」

「…そうか」

柚葉の話を聞いて、赤石は察してしまった。柚葉自身はおそらく単純に顔を背けた理由を言ったただけだろう。しかし受け取る側は例え意図が含まれていなくとも、そう解釈してしまう。

「びっくりしたけどどうれしい。わたし、修おにーさんにゆずはってよばれるのすきかも」

柚葉は照れながら話す。その様子だと柚葉は察していないだろう。赤石が察していることを。赤石が一瞬躊躇ってから返事した意味を。(…何勝手に知った気になってんだ俺は。ちっ、思い込みもたいがいにしやがれってんだ)

純粹さ溢れる柚葉を見て、赤石は自分に嫌気が差した。まるで当然のように環境や境遇を作り上げ、さらには感情まで決めつけてしまっていたことに。

察することができるといふことは見て、聞いて、知ってきたからに他ならない。が、そうであるが故に構築してしまう。既知の欠片で人形を。

(何より俺自身そうだっただろうが…！)

「？…修おにーさん？やっぱりまだいたむの？」

歯を食いしばっているかのような表情を浮かべる赤石に柚葉は心配そうに声をかける。

「いや、大丈夫だ。本当に痛みはもう消えたからさ」

正直に言えば昨日ほどではないが、まだ痛みは残っている。しかし心配させてはいけなないと赤石は笑顔を作る。

(やっぱり俺は、まだまだ大人には程遠いな)

「さて、そろそろ帰るかな」

それまでの流れを切るようにブランコから立ち上がる赤石。

「もうかえつちやうの？」

柚葉は少し寂しそうな顔をして赤石を見上げる。

「ああ。この後寄る所もあるしな」

「そっか…あの、修おにーさん」

「ん？」

柚葉はランドセルを肩から外し、膝の上に置く。

「えつと…」

続けてランドセルを開け、中から何かを取り出すと赤石に差し出した。

「きのうの、おれい」

「これは…」

差し出したのは折り紙の花。今度は折れておらず、綺麗な状態を保っている。

いや、ただの一輪の花ではない。花は複数連なっており、全体の形はまるで花束のよう。

色鮮やかな花びらの上には同じく折り紙の鶴が飾られている等、実に芸が細かい仕上がりとなっている。

「わたしにはこんなことしかできないから…あの、いつかちゃんとおれいするね」

柚葉は昨晚、赤石にどうお礼をしたらいいのか考えていた。とはいえ、いくら考えたところで子供である自分に来ることなど限られており、答えまでの時間は短かった。

いつも以上に強烈な無力感に苛まれた。自分を助けてくれた人に対して見合ったお礼ができない、と子供である自分が嫌になった。

しかし、それでも何もしないという選択はしなかった。赤石の顔を思い浮かべると、たとえ無力な自分でも何か出来ることをしよう、という意思を持つことが出来たからである。

その強い意思によって柚葉はそれらを跳ね除け、今持てる力を出し切ることができた。この折り紙はそんな柚葉が作り上げた、いわば想いの結晶である。

そんな想いに、赤石はしっかりと応えた。

「すげえな、柚葉は」

赤石がその言葉と共に受け取ると、柚葉は「えっ…？」という表情で赤石を見つめる。

「作るの大変だっただろ？ありがとな。柚葉の気持ちがちっかり伝わってくる最高のお礼だ」

受け取った赤石は労いと感謝の言葉を笑顔で柚葉に送った。

「ううう…修おにーさあぁあん…！」

赤石の返答によって柚葉の中で感情が決壊する。

「おっ、と」

柚葉に抱き着かれる赤石。

「うえっ…ぐすっ」

赤石は柚葉が泣き止むまでその場を動くことは無かった。

――

同日夜、午後8時。

繁華街のCDショップから1人の少女が退店する。

「お？椎名ちゃん？」

直後、何者かがその少女、椎名へと声をかけた。

「？…ああ、おっさんの連れか」

「梅里って呼んでよー。名前知ってるでしょ？」

声をかけたのは警察官、梅里。

「で、何？」

「普通に無視しないで欲しいんだけど…って今日は制服じゃないんだね？」

「これまでと違い椎名は制服ではなく、私服を着用していた。

「またあんなところに連れてかれるのは嫌だからな」

「そうだよねー。これからもそうしてくれると僕らも助かるよ」

（黒川さんが署まで連れて行ったのが効いたのかな）

そう推察する梅里。

「…」

機嫌の良い梅里とは対照的に、椎名はというと面倒くさそうに梅里

を細目で捉える。

「あ、制服じゃないなら良いんだ。呼び止めて悪かったね」

梅里の話が終わると、椎名は梅里に背を向けスタスタと歩き出した。

11話 #7 「従う人」

その数分後、

「よう、椎名」

再び何者かが椎名へと声をかける。

「?…誰だ」

(桑鴉の制服…2、3年の奴らか)

椎名が振り向くと、そこには2年先輩にあたる桑鴉高校3年の男子生徒4人がニヤニヤと笑いながら立っていた。

椎名にとっては初対面だが、男子生徒たちは椎名のことを知っている様子。というのも椎名はそのルックスや振る舞いからよく噂され、桑鴉高校の中で名の知れた生徒の1人となっていたのである。

「さっきの見てたぞお?ひよつとしてお前の彼氏かあ?」

その中には藍子とのデュエルに負け、桜に謝罪した森下の姿もあった。

「それともあれか、夜の商売相手って奴?」

「ははは、現場目撃しちゃったよ」

「いくら稼いだのー?」

「…」

椎名は無視して行くこうとするが、

「待てよ」

森下に腕を掴まれる。

「離せ」

「お?そんな態度とっちゃう?言っとくがさっきの動画に撮ってるからな?」

森下は空いている方の手で制服のポケットから携帯電話を半分程ちらりと見せる。

「…脅しか?」

「人間ぎが悪いなあ。せつかく会ったんだしちよつと付き合えよお」

「カラオケ行こうぜカラオケ」

「いいねえ!一緒に盛り上がろうぜ!」

「椎名歌上手いんだってな？ぜひ聴いてみたいなあ」

男子生徒たちは相も変わらずニヤニヤしながら椎名の返答を待つ。

「…わかった。変なことはするなよ」

椎名は反抗するのは賢明でないと判断したのか、要求に従った。

「しねえって！な？」

「おう！大丈夫大丈夫！」

「早く行こうぜ！」

椎名を含めた男子生徒たちはカラオケ店へと出発した。

「お、この部屋だな」

「結構広いじゃん」

「何歌おっかな」

カラオケ店に到着し、男子生徒たちは個室に入る。

男子生徒たちがそれぞれ腰を下ろして間も無く、

「トイレ行ってくる」

椎名は立ち上がり部屋を出ようとする。

「おい、逃げるんじゃないだろうな？」

個室に入って早々のトイレに怪しむ森下に、

「そう思うならついてくれば」

椎名は平然とした態度で返し、トイレへと向かう。

「おい、一応つけとけ」

「おう」

個室のドアが閉まった直後、森下の指示により男子生徒の1人が椎名の後をつけるため同じくトイレへと向かった。

「まさかあんな場面に出くわすとはなあ」

「こっそり撮つといて正解だったな」

「ってかやばいなあいつ。あんな状況でも全然物怖じしねえとか」

「おっさん共の相手してるうちに怖いもの知らずになったんじゃないか」

の」

「今日は俺らの相手してもらおうけどな」

「ハハハ、と男子生徒たちは盛り上がる。

「近くで見えて思ってたんだけどさ、やっぱあいつ可愛い顔してるわ。胸も割とあるし」

「なんだ？お前惚れたか？」

「そうかもしんねえ、ってかやべえ興奮してきた」

「でもおっさんに使われまくってるぞ？」

「構わねえよ。顔と体が良ければそれでよし！それにその方が後腐れなくていいだろ？所詮売ってる女だし」

「それもそうか」

男子生徒の1人が部屋を見回す。

「なあ森下、ここって防音大丈夫だよな？監視カメラとかも…」

「大丈夫に決まってるんだろお？ここには何回か行ってるけど、防音もしっかりしてるしカメラも設置されてねえよ。だから安心して出来るぜ」

「おお！」

「あとは適当に頃合いを見計らって押し倒すだけさ。想像してみろ、あの生意気な顔が歪むところを」

「たまんねえ…」

「最初俺な！」

「お前やっぱ惚れてるだろ」

男子生徒たちは椎名が居ない間、下卑た笑みを浮かべながら会話を続けた。

椎名と後をつけた男子生徒が戻ると、森下は始まりと言わんばかりにマイクを握る。

「よし、開幕は俺から行くか！」

「おおー行け行け！」

曲が流れ出すと森下は上機嫌に歌い始めた。

「ねえねえ、次歌ってよ」

「椎名の歌声聴きたいなあ」

「そのためにカラオケ来たんだからさ」

森下が歌う途中、男子生徒たちが椎名に迫る。

「…」

(気持ち悪いな、どうせ目的はそれじゃねーくせに)

椎名は内心不快に思いながらも曲を予約した。

森下の曲が終わり、椎名はマイクを握る。

待ってました、と盛り上がる男子生徒たち。

しかし椎名が歌い始めると一変、

「え、マジ…?」

「ガチで上手くね?」

「何このギャップ」

当初は騒がしかった男子生徒たちだったが徐々に静まり返り、

「…」

歌が終わる頃には聴き入っていたのか余韻に浸るようになり呆けた顔をしていた。

静寂の中、椎名がマイクを置くと、その音で男子生徒たちは我に返った。

「すげえな！予想以上だったわ！」

「お前歌手目指せよ」

「いつそアイドルとか!?!人気出そう」

男子生徒たちは称賛するが、当然椎名の表情は緩まない。

「次歌おうかと思ってたけど歌いづれえな…」

「じゃあ俺とデュエットしようぜ」

「お、いいね」

男子生徒の1人が次の曲を予約した時、

「お?誰の携帯だ?」

携帯電話のバイブ音と着信メロディが響く。

「ウチの」

椎名がそう言って携帯電話を手に取ると音は鳴り止んだ。

「なんだ椎名のか」

椎名は携帯電話を耳元に当てる。どうやら電話がかかってきたようだった。

「うん、何？今カラオケ…そう」

電話に出たタイミングで予約した曲が流れ始めたので、椎名は立ち上がり通話しながら退室する。

そしてそれを最後に椎名がこの個室に戻ることはなかった。

11話 #8 「楽しむ2人」

――

翌日、昼過ぎ。

琥珀は駅の手前でそわそわとしながら待ち人の到着を待つ。

(もうそろそろ到着される頃でしょうか…)

そう思いながら携帯電話で時刻を確認して数秒後、メールを1通受信する。

送信相手は琥珀の待ち人である、藜霞。

(藜霞お姉様から…?)

琥珀はメールを開く。

from 藜霞

「6時の方向」

(えっと、真後ろよね?)

琥珀はその方向に藜霞がいる、と予想して振り向くも、

(…あれ?)

それらしき人物は見当たらず。

しいて言えば、きつかりと6時の方向に立ってこちらを見ているサングラスをかけた1人の若い女。

(まあ、別人でしょう)

琥珀は藜霞ではないと判断してその女から視線を外す。

(…え?)

しかし、その女がこちらへと距離を詰めてくるのが見えた琥珀は、反射的に再び視線を合わせる。

その女は琥珀の前に立つとサングラス越しにニツコリと笑った。

「あの、何か…?」

困惑しながら伺う琥珀。もちろん琥珀は気付かない。

「ふふ、琥珀ちゃんでも気付かないものね」

その女が待ち人であることを。

「え？…えっ、もしかして…!？」

髪が解かれ、サングラスが外されると、

「どうもー」

琥珀のよく知る藜霞が現れた。

「昨日から藜霞お姉様には驚かされっ放しですわ…」

道中、琥珀は苦笑いする。

「今日も琥珀ちゃんの反応面白かったわ、ふふ」

「もう：けれど考えてみれば当然ですわね。藜霞お姉様は有名人ですもの」

「プライベートはだいたいこの格好よ」

藜霞は既に変装した姿へと戻っている。

「できれば事前に言って頂けると良かったのですが」

「えーそれじゃ琥珀ちゃん驚かない」

「どうしてそう驚かせたがるのですか…」

「面白いからに決まってるじゃないの」

楽しそうに答える藜霞。はつきりと言い切るのもそうだが、その無邪気さ溢れる言動に微笑ましく思ったのか琥珀は何も言い返さなかった。

しばらく話しながら歩いているうちに時間もお昼時、ということまで2人は飲食店へと入った。

メニューは琥珀が一度も食べたことがないという、お好み焼き。

(器用にひっくり返すのですね)

琥珀は興味深そうに、目の前で繰り広げられる店員の手捌きを見つめる。

(鉄板で焼く音も、なんだか心地良く感じます)

舌の前に目と耳で味わう琥珀。堪能しているうちに注文したお好み焼きが出来上がった。

「適当にカットして、あとはソースとかお好みでかけて食べて」

「わかりました」

琥珀は適当なサイズにカットすると、

「いただきます」

少し冷ましてから口に運んだ。

「どうかしら」

「美味しいです…!」

「でしょ。ワタシも初めて食べた時はハマったわ。ちょうど関西の方に遠征行つてたから毎日のように色んな店で食べ歩いてたのよね」

藜霞も思い出を語りながら口に運ぶ。

「毎日は飽きませんか…?」

「1週間くらいなら意外と飽きないものよ」

「そういうものなのですわね…」

琥珀はとりあえず納得して食べ進めた。

「藜霞お姉様は普段どんなものを食べておられるのですか?」

「食事中、ふと思つた琥珀が質問する。」

「んー、パンとかご飯とか麺とか」

「あの、おかずは…」

「もちろん食べてるわよ、色々。こういう生活だから外食が多いわね」

「外食ですか…」

(藜霞お姉様、きちんとバランスよく栄養を摂っているのでしょうか…?)

先程の毎日のように同じものを食べるという藜霞の話の思い出し、琥珀は藜霞の栄養事情を気に掛ける。

「大丈夫よ」

「えっ?」

「この生活が安定してからはちゃんと栄養バランスも考えながら食べ

てるから」

藜霞は琥珀の心配を読んでいるかのように答える。

「そうですか。それなら安心ですわ」

琥珀は笑顔で返した。

ランチを終えた2人は近所の書店へと足を踏み入れる。

「琥珀ちゃんは本読むの好きなのよね？」

「はい、図書館で勉強がてら様々な本を読んでいます。書店にもよく行きますわ」

「真面目ねー。ワタシは最近漫画くらいしか読んでないわ。琥珀ちゃんも読む？」

「漫画ですか？私はあまり読まないですね…」

「やっぱり真面目ねー。あ、これ最新刊出てる」

藜霞は1冊の本を手取る。

「それは漫画ですか？」

「ええ。あるデュエリストが主人公の漫画なんだけど面白くて今ハマってるのよね」

「へえ、面白そうですね」

「面白いわよ。おすすめ」

（藜霞お姉様のおすすめということでしたら読んでみた方が良さそうですね）

「近いうちに読んでみますわ」

書店の中を見回る2人。

「あっ」

その途中、琥珀が立ち止まる。

「どうしたの」

「いえ、大したことではないのですが…」

琥珀は本棚から1冊の本を取り出す。

「今練習している曲と同じ本があったので」

琥珀が藜霞に見せたのはクラシック音楽の楽譜。今2人が居るこの一角は楽譜コーナーらしく、様々な楽譜やそれらに関する本が陳列されている。

「あ、ピアノ習ってるって昔言ってたわね」

「はい。小学生の頃から先生に教えて頂いています」

「琥珀ちゃんの演奏聴いてみたいわ」

「わ、私の演奏など藜霞お姉様に聴いて頂くには至らぬ点多すぎて…！恥ずかしいですわ…」

声が尻すぼみとなりながら琥珀は本を棚に戻す。

「えー」

「そ、そういえば藜霞お姉様はバイオリンを弾けるのでしたわよね？」  
多少強引ながら話題を変える琥珀。

「んーそんな時期もあったねー。でもここ数年弾いてないからもう弾けないと思うわ」

「そうですか…それは残念です。一度は拝聴したかったですわ」

「というわけで至らぬ点を解消したら聴かせてね」

そして不意打ちのように話題を戻す藜霞。

「う…前向きに検討致しますわ」

対し琥珀は一旦怯んだ後、お茶を濁すような返答をした。

（ですが、藜霞お姉様が聴きたいとおっしゃるならいつか必ず…そのためにも練習あるのみですわね）

しかし心中は藜霞の期待に応えようと改めて気を引き締める琥珀であった。

11話 #9 「闘う2人」

「さて、次どこ行こっか」

書店を出て一呼吸置いた後、藜霞は琥珀に尋ねる。

「そうですね…」

考える素振りを見せる琥珀だが、実のところ琥珀の中で次に行きたい場所やしたいことは決まっていた。

「藜霞お姉様は行きたい場所などは…」

しかし、どうやら自分からは言い出せないらしく琥珀は行き先を藜霞に委ねる。

「そうですね…」

(さすがに言えませんが…藜霞お姉様とデュエルがしたいなんて)

琥珀が自分の思いを胸に仕舞おうとしたその時、

「琥珀ちゃんとデュエルがしたいわ」

と、藜霞からの希望。

「…え、えっ?今なんと…?」

琥珀は一瞬固まり、目を見開いて聞き返す。

「だめかしら?」

「そんな…願ってもないお話ですわ…!」

琥珀の表情が喜びへと変わっていく。

「よかった」

(やっぱり。だと思った)

藜霞は見抜いていた。琥珀がしたいこと、そしてそれを言い出せないことも。

「ですが宜しいのですか?藜霞お姉様のようなプロの方が素人の私とデュエルしても…」

「良いに決まってるじゃないの。さ、カードショップでもデュエルハウスでも案内してちょうだい」

補足しておくプロが素人相手にデュエルをしてはいけないという規定は存在しない。ただ琥珀が遠慮していただけである。

「ふふ、デュエルハウスは私にはまだ早いですわ」

なお、これは遠慮ではなくハウスによつては未成年の琥珀は入店できないためである。

――

デュエリア桐縹店。

特筆すべき点も無いであろうこのカードショップでは今日も数多くのデュエリストが訪れ、この瞬間もデュエルスペースではデュエリストたちによる熱い戦いが繰り広げられている。

そのような状況でにわかにな注目を集めているのは、ある2人のデュエリスト。その2人同士のデュエルが今まさに行われていた。

注目を集める理由は単純明快、その2人がどちらも比率的に珍しい若い女性デュエリストであるということに他ならない。

もの珍しきで観戦している周囲の人間には思いも寄らないことだろう。

まさかそのうちの1人が変装した今年のブロッサムカップ優勝者などということとは。

藜霞LP3500 手札2枚

琥珀LP3500 手札2枚

「ドロー、スタンバイ、メイン」

「《エヴォルテクター シュバリエ》召喚。《スーパルヴィス》発動、《エヴォルテクター シュバリエ》に装備」

「《エヴォルテクター シュバリエ》の効果、《スーパルヴィス》を墓地へ送り《降雷皇ハモン》を破壊」

「はい」

「《スーパルヴィス》の効果、墓地から《E・HERO アナザー・ネ

オス』を特殊召喚」

「バトル、《エヴォルテクター シュバリエ》で《宝玉獣 トパーズ・タイガー》を攻撃」

「受けませ。《宝玉獣 トパーズ・タイガー》は破壊されますが、効果を発動して自身を魔法&罨ゾーンに置きます」琥珀LP3500—30003200

「《E・HERO アナザー・ネオス》で攻撃」

「受けませが、《虹の古代都市—レインボー・ルイン》の効果で戦闘ダメージを半分にします」琥珀LP3200—95002250  
「エンド」

藜霞LP3500 手札1枚

琥珀LP2250 手札2枚

(厳しい状況ですが、あと1種類揃えば…)

「ドロ—」

(!…来ましたわ!)

「スタンバイ、メイソ」

(引いたみたいね)

琥珀が望みのカードを引いたことを察する藜霞。

「《宝玉獣 サファイア・ペガサス》を召喚します。召喚に成功した《宝玉獣 サファイア・ペガサス》の効果が発動、デッキから《宝玉獣 アメジスト・キャット》を魔法&罨ゾーンに置きます」

「これでフィールド、墓地に7種類の宝玉獣が揃いました」

「《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》を特殊召喚します」

その瞬間、観客たちから「おお」といった歓声上がる。

(ここは破壊効果のある《エヴォルテクター シュバリエ》の方を攻撃すべきよね)

「バトル、《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》で《エヴォルテクター シュバリエ》に攻撃します」

「受けるわ」藜霞LP3500—2100＝1400  
「ターンエンドです」

藜霞LP1400 手札1枚  
琥珀LP2250 手札1枚

(藜霞お姉様のLPは残り1400。手札は次のドロローで2枚…私が有利であることには間違いありません)

「この状況で《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》はきついな。デュアルデッキじゃ4000以上の攻撃力はほぼ出せないし」

「だよなあ。しかもデュアルはただ召喚しただけじゃ通常モンスターだから魔法のサポートが不可欠なんだけど、宝玉獣が魔法&罨ゾーンに3体いるから…」

「1回だけとはいえ《虹の古代都市—レインボー・ルイン》の効果で無効にされる、ってことか。」

「まあそこは《E・HERO アナザー・ネオス》の攻撃で《宝玉獣 サファイア・ペガサス》を破壊すれば問題はないけどね」

「どちらにしろこのターンで《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》を破壊できなきゃ負けだな」

観客たちの言う通り、この状況は琥珀が有利であることは一目瞭然だ。琥珀自身もそれを理解している。

(ですが相手はあの藜霞お姉様…いくら貸し出しデッキとはいえ油断できませんわ！)

しかし、相手が相手なだけに気を緩めることは無い。むしろ引き締めている。

(ふふ、勝ちがすぐそばにあるはずなのに、琥珀ちゃんの顔を見るととても遠そうだな)

固い表情の琥珀とは対照的に藜霞はリラックスしていた。といっても決して気を抜いているわけではなく、デュエルそのものを楽しんでいるかのよう。

(そうね、この状況をひっくり返しての逆転は難しいし、それに琥珀ちゃんとの久々のデュエルってことでここは…)

(ワタシが勝つわ)

「!?」

ほんの一瞬ではあるが、琥珀は形容し難い寒気のようなものを感じた。観客たちは何も感じていないのか平然としている。

(今は…気のせいかしら?)

(そのためのカードは、デッキに1枚だけ。でも関係ないわ)

藜霞はそんな琥珀をよそにターンへと入る。

「ドロー、スタンバイ、メイン」

(ね、引いちやうもの)

そして引いたカードを確認すると小さく笑った。

## 11話 #10 「闘った2人」

「《E・HERO アナザー・ネオス》再度召喚」

えっ、と琥珀は思わず声が出る。

デュアルデッキにおいて《E・HERO アナザー・ネオス》は重要なモンスターではあるが、それはサポート対象やコストまたは素材としてであり、自身の効果を活用する機会はずり無い。

「何で再度召喚したんだ？このターンの召喚権無くなっちゃったぞ」

「逆転のカードが来なくて諦めたとか？」

「ま、これでもう決まったかな」

故に観客たちもその行為にざわつき、後ろ向きな解釈をする者も現れた。

「バトル、《E・HERO アナザー・ネオス》で《宝玉獣 サファイア・ペガサス》に攻撃」

藜霞はというと周囲の様子などお構いなしに淡々とデュエルを進める。

《宝玉獣 サファイア・ペガサス》に攻撃、ということは手札に《究極宝玉獣 レインボー・ドラゴン》を破壊できる魔法カードがあるということでしょうか？

琥珀には《究極宝玉獣 レインボー・ドラゴン》の効果で《宝玉獣 サファイア・ペガサス》を墓地に送るという選択もあったが、当然その選択は取らず。

そうしたところで得られるメリットはたった100のLPであり、魔法&罨ゾーンに置かれるはずの《宝玉獣 サファイア・ペガサス》が墓地に送られるデメリットの方が遥かに大きい。

《虹の古代都市―レインボー・ルイン》の効果は…取っておきましょう。何かあるかもしれませんし…)

「受けます。《宝玉獣 サファイア・ペガサス》は破壊されますが、効果を発動して自身を魔法&罨ゾーンに置きます」琥珀LP2250―100〓2150

それに琥珀の手札にはあのカードがあった。

(これで私の魔法&罨ゾーンには宝玉獣が4体…)

(《宝玉の氾濫》の発動条件が整いましたわ…！)

つまり《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》を破壊されたとしても、返しのターンで《宝玉の氾濫》というもうひとつの切り札で勝負を決めることが可能となったのである。

藜霞にとってはこのターン中に《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》と魔法&罨ゾーンの宝玉獣を1枚以上除去するか、あるいはLPを削り切るしか勝つ道は無い。

だが藜霞のフィールドには攻撃できるモンスターはもう存在せず、少なくともデュアルデッキでは後者は不可能のように思えた。

しかし藜霞の次の一手は、この状況をひっくり返しそれを可能にした。

「《超融合》発動」

「!？」

「《E・HERO アナザー・ネオス》と《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》で《レインボー・ネオス》を融合召喚」

(そんな…！ 《レインボー・ネオス》ですって…!?)

その何かが起こった。《超融合》によって現れたのは《レインボー・ネオス》。無意味に思えた再度召喚は、このためであった。

開いた口が塞がらない様子の琥珀。観客たちも一樣に度肝を抜かれたのか「すげえ…」「マジかよ…」といった声が漏れるばかり。

(EXデッキに入っててよかったわ)

藜霞に貸し出されたデッキのEXデッキは全てE・HERO、または《E・HERO ネオス》が素材の融合モンスターで固められていた。

その中には最も召喚される機会が少ないであろう《レインボー・ネオス》も投入されており、もしEXデッキの15枚から漏れていたと

したらこの逆転は起こらなかった。

「バトル、《レインボー・ネオス》で攻撃」

琥珀の残りLPは2150。《虹の古代都市―レインボー・ルイン》の戦闘ダメージを半減する効果はこのターン未使用であったため、発動することはもちろん可能である。

しかし、それを発動したところで同じこと。結局は自身のLPを上回ってしまう。

藜霞の引いたカードはそれほどまでに大きかった。

「…受けます」 琥珀LP2150―2250＝0

数年ぶりとなる藜霞と琥珀のデュエルは、藜霞の勝利で決着となった。

――

「今日は楽しかったですわ」

「ワタシもよ」

2人は少し日が落ちてきた桐縹の町を歩く。あの後もちろん1戦だけでは終わらず、久々のデュエルを何度も楽しんだ。

「やはり藜霞お姉様には遠く及びませんでしたわ」

「でも琥珀ちゃんも強くなってたわ」

「ありがとうございます。あの頃と比べれば私も成長したと思います。けれど藜霞お姉様との差は縮まるどころか、むしろ広がったように感じました」

「プロになってからずっとカードとデュエルばかりだったからね、まだまだ育ち盛りよ」

藜霞に限らずプロは一般人に比べてカードに触れる機会、デュエルに費やす時間が圧倒的に多い。その分、実力差が開いていくのは当然である。

しかし琥珀は、その差に悔しさどころか喜ぶような表情を見せた。

「私、それが嬉しくて…私が敵わない強い藜霞お姉様とたくさんデュエルできて幸せでした」

「大げさね、デュエルならいつでもできるわよ。電話一本で駆けつけてあげるわ」

「さ、さすがにそのようなことは…!」

琥珀は恐れ多いといった様子で慌てる。

「まあ、いついかなる時っていうのは難しいけど、あらかじめ言っておけば何とかするわ」

「は、はい…!お呼び立てする際はご連絡差し上げますわ」  
「うん」

「ですので、藜霞お姉様もこちらにお越し下さる場合は事前の連絡をお願いしますね?」

「えー」

「えー、じゃありません!お願いしますね?」

琥珀の念押しに、

「…わかったわ」

藜霞はちよつぷり不服そうに答えた。

やがて2人は琥珀の家の前へと到着する。

「名残惜しいですが、メイドが待っていますので…」

琥珀は寂しく思いながらも藜霞に向かって微笑む。

「夕飯が冷めちゃうものね」

「はい…あの、藜霞お姉様」

「なに」

「鵜籠記念、応援していますわ。藜霞お姉様なら必ず優勝できると信じております」

「あら、そう言われるとプレッシャー感じちゃうわ」

「あつ、ご、ごめんなさい…」

「冗談よ」

「もう…」

琥珀と藜霞はお互い見つめ合ったまま数秒の静寂が訪れる。

「優勝の知らせ、届けてあげるわ」

「はい、待っています」

藜霞が優しい笑みを浮かべると、琥珀も笑顔で返す。

その返事に満足した藜霞は反対側に振り返ると、帰りの道を歩いて行く。

（藜霞お姉様…今日のことは忘れません）

琥珀は一步一步遠ざかって行く藜霞の背中を視界から切れるまで見送った。

――

夕刻、彼女の携帯電話が鳴動する。

「はい」

「ねえ、今桐縹にいるんだけど、ご飯一緒にどう？」

通話の相手は先程まで琥珀と一緒にだった藜霞。

「はい、一緒に一緒にします。食べたいもの、ありますか？」

「そうね、定食系の気分だけわ」

「わかりました。30分後に桐縹駅でいいですか？」

「いいわ。じゃあまた30分後に」

「はい」

通話が終了すると、彼女は準備をして待ち合わせ場所へと向かった。

11話 #11 「鏡越しの2人」

「白さん」

彼女は先に駅前で待っていた藜霞に声をかける。

「あら、3日ぶりね」

「ですね」

「表裏一体だわ」

突拍子もない藜霞の発言だが、

「鏡越しの、わたしみたいです」

意図を理解したのか彼女はそう返す。

「ふふ、そこにワタシが映ってるのかしら」

「少なくとも、今わたしの瞳には」

「それだとワタシ自身が鏡だわ」

「わたしもそうなりますね」

「では鏡よ鏡、今日のお食事処はどこかしら？」

「はい、鏡さま。ご案内致しますよう」

「ん、結構おいしいわね」

彼女の案内によって訪れた飲食店で食事をする2人。

「桐標も中々侮れないわ。ねえ」

「はい」

「そっちの野菜炒めもおいしそうね、ひとくちちようだい」

「どうぞ」

「ありがと。ん、おいしいわ」

「それは良かったです」

2人は口数は少ないながらも和やかな雰囲気のまま食べ進めていった。

「ねえ、気付いちやっただけど」

「？」

デザートのアイスクリームを頬張りながら彼女は藜霞に視線を向ける。

「ホテル代の節約方法」

「どんな方法ですか？」

「アナタのお家に滞在する」

ニッコリと笑う藜霞。

「それは良い方法ですね」

彼女も合わせるように微笑み返す。

「でしょ？というわけで本番までお世話になるわ」

「わかりました」

彼女が返事すると、2人の間に沈黙が訪れた。

「ちよつと、ワタシが言うのもなんだけどテンポが早すぎるわ」

表情を戻し、時間差でつつこむ藜霞。

「さくさくでしたね」

「まるで他人事ね、っていうか本当にいいの？ワタシすっかりその気になっちゃったんだけど」

「いいですよ」

彼女の答えは変わらない。

「そう、じゃあ明日からお世話になるわ。今日はホテルに戻るから」

「わかりました」

「ねえ、気付いちやっただけど」

一旦会話が途切れた後、声をかける藜霞。

「？」

デザートのアイスクリームを頬張りながら彼女は再び藜霞に視線を向ける。

「アナタ甘党ね」

「気付かれちゃいました」

「見てればわかるわよ」

藜霞は小さく笑った。

――

藜霞と別れ、帰宅して間もない彼女に1本の電話が届く。

「はい」

「俺だ。今大丈夫か？」

電話の相手は黒川。

「大丈夫です」

「次の仕事だ。来週の土曜午後7時、場所は鵜櫓のデュエルハウス六武衆。レートは今のところ不明だが、鈴白の時よりは高くなるだろう」

（土曜午後7時、六武衆…）

「…はい」

彼女は少し考えて返事をする。

「受けるかどうかは来週の、そうだな…水曜までには決めてくれ」  
「わかりました」

彼女がそう答えると通話が終了した。

――

翌日の朝。彼女の住むアパートの前。

（ふう、ちよつと暑いかも）

彼女は箒とゴミ袋を持ってアパート周辺を掃除していた。

このアパートの掃除は住人たちが交代で担当する当番制となっており、今回は彼女の当番であった。

「この暑さ、もう夏だねえ」

「ですね」

隣で同じように掃除をする大家の言葉に相槌を打つ彼女。大家は彼女と違ってその立场上、当番という概念は無い。強いて言うならば毎日が当番である。

そして当番は他にもう1人。

「ふああー…」

大きなあくびから眠そうな顔をする、梅里だ。

「こら梅里君！シャキツとしなさい！」

梅里の態度に大家から喝が飛ぶ。

「勘弁して下さいよー…夜勤明けで眠いんすよー」

夜勤明けという梅里の声からは、あまり元気が感じられない。

「集中してやれば10分で終わるわよ。まだ若いんだから頑張りなさいな」

「はーい…」

梅里が渋々といった様子で掃除に取り掛かろうとした時、

「梅里さん」

彼女が声をかけた。

「ん…何？鈴瀬ちゃん」

「お疲れでしたら、お休みしますか？」

心配そうに梅里を窺う彼女。

「あー…いや、大丈夫だよ」

（そんな目で見られたら、男としては休むわけにいかないよなあ…）

梅里は少し苦い笑みを浮かべると箒を持つ手を動かした。

「いつしよに、がんばりましょう」

その様子を見て彼女も微笑む。

「うん！さっさと終わらせて寝るぞー」

（まあ鈴瀬ちゃんと一緒に掃除つてのも、考えようによつては役得かな）

梅里は元気を取り戻したかのようにテキパキと掃除を遂行した。

11話 #12 「縛る人」

――

一方、同じ頃。

(まだ10時か、昼飯までどうすっかな)

ジムから出た赤石は時間を潰す方法を考える。

ジムに来たのはいいが、赤石の怪我はまだ治っていない。そのため今日は通常のトレーニングではなくインストラクターからの軽いマッサージとストレッチだけであった。

その結果、午後の昼食までの2時間以上が丸々空いたことになる。(たまには近くでもぶらついてみるか)

――

「はい、2人共お疲れさん」

掃除を終えて一息つく彼女と梅里に、大家は紙パックのお茶を差し入れる。

「ありがとうございます」

「どうも。じゃあ僕は寝るからね、ふああー…」

梅里はあくびをしながら一足先にアパートの階段を上っていく。

「お疲れ様です」

「うん、鈴瀬ちゃんもお疲れ様ー」

階段を上りながら振り向かず返事をする、梅里は自宅へと戻った。

「あ、そうだ麗梨ちゃん」

大家は何かを思い出したかのように彼女を呼ぶ。

「はい」

「昨日ホームセンターに行ったんだけどバケツ買い忘れちゃってねえ…悪いんだけど、おつかい頼んでもいいかしら?」

「いいですよ。急ぎますか？」

「急ぎじゃないけれど、なるべく早めがいいわねえ。あ、お金渡しとくね」

大家はポケットから取り出した1000円札を彼女に渡す。

「わかりました。早めに買いに行きます」

「じゃあお願いね。私この後用事があるからまたねえ」

「はい、また」

大家は彼女に手を振り、アパートから離れて行った。

――

その後、シャワーで汗を流した彼女は私服に着替え、早速ホームセンターへと向かった。

(バケツって青くて丸いのでいいのかな？一般的な大ききさって、どのくらいなんだろう)

そんなことを考えながらしばらく歩いていると

「あ」

途中、彼女は見知った顔を見つける。

「赤石先輩」

「！……レイリか」

突然の彼女の声に赤石は少し驚いてから彼女の方に振り向いた。

「トレーニングですか？」

いかにもな赤石のジャージ姿に彼女はそう予想する。

「ああ。今日は怪我がまだ治ってねえから軽いストレッチだけな」

「お怪我、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。激しい運動ができねえだけで何も問題はねえよ」

赤石は彼女に笑いかける。

「それなら良かったです」

彼女も微笑み返した。

「レイリは今からどっか行くのか？」

「はい、ホームセンターまでお買い物ものです。バケツを買いに」  
「そうか…なあ、俺もついて行っていいか？」

一瞬の間、赤石は彼女に同行の許可を求める。

「いいですよ、いっしょに行きましょう」

彼女の承諾。赤石はどこか安心したように頬を緩ませた。

あてどなくぶらつくはずだった昼食までの時間が、これより彼女と共に過ごす時間へと変わる。

(怪我の功名ってやつかな)

赤石はほんの少しだけ怪我也悪いことばかりではないな、と思うのであった。

――

買い物物を済ませた後、2人はホームセンターに隣接する喫茶店で休憩を取っていた。

「…」

クリームソーダを美味しそうに頬張る彼女を、紅茶を啜りながら眺める赤石。

(そういや学校以外でこっちの姿を見るのは初めてだな…)

以前、共に鶉檻に行った時の彼女は変装していたので、赤石にとつてはこの組み合わせは初めてである。

(外見で判断するわけじゃねえが、やっぱりあの時のパートナーと同一人物とは思えねえよな)

思わず苦笑いをする赤石。

「？」

それに気付いた彼女は首を少し傾げる。

「ああいや、何でもねえ。その、服似合ってるって思ってたな」

赤石は慌てるように口走る。

(何言っただ俺は…！)

心にもないことを言ったわけではない。実際、似合っていると思っ  
ていたからこそ出た言葉である。

だがそう口に出すつもりではなかったらしく、赤石は何故そう言ったのかと疑問に思った。

「ありがとうございます」

そのことが頭に引つ掛かっているのか、赤石は彼女のお礼にも「ああ…」と返すことしか出来なかった。

「赤石先輩」

少し間を置いて彼女が口を開く。

「ん？」

「わたし、赤石先輩を縛ってますか？」

「あ？何のことだ？」

唐突な彼女の質問。赤石には全く心当たりが無い。

「いじめをやめさせて、なんて曖昧なのに…さらに対価をつけてしまいました」

彼女はどこか申し訳なさそうに話す。

「ああ、そのことか」

話を聞いて赤石はその内容と彼女の態度を理解する。

「縛ってるかどうかって言われると、そうだな…縛ってるな」

ハハッ、と冗談っぽく笑う赤石。

「ごめんなさい」

「何で謝るんだよ。負けた以上約束を果たそうとするのは当然だし、それに対価を要求したのは俺だぞ？」

「でも、その約束はこれからずっと赤石先輩を縛り続けると思います…」

いじめ、というものが持つ性質やその定義から果たすことはほぼ不可能と言っている、そんな彼女との約束。

「俺はそれでもいいけどな」

しかし赤石は別に構わないといった様子で答える。

「確かに無くすのは無理でも、減らすという意味じゃあそんなに難しくねえよ。これからも約束を果たし続けるだけさ」

「まあレイリがそれを0にするという意味で言ったんじやその約束は

無理なものになっちまうけど」

「…そう捉えらえてるかもしれないとは、思っていました」

そう思っていながらも、彼女は赤石に何も言わなかった。

「そのつもりで言ってたとして、もし問い詰められたとしてもだ。明言しなかったことを持ち出し反故にしてたぞ俺は」

赤石はいたずらっぽく歯を見せる。

「…」

「対価にしても同じだ。それでも縛ってる、って思うか？」

「…はい。赤石先輩が良くて、わたしがだめって思ってしまう  
…わたしって、勝手です」

俯く彼女。言わなかった理由、それは…

第三の選択肢を選んで欲しかったから、かもしれない。

「じゃあその約束は破棄だ」

彼女の様子を見て赤石は宣言した。

11話 #13 「近付く人」

「!……」

思わず俯いた顔を上げる彼女。その言葉はある意味赤石よりも待ち望んでいたであろう彼女だが、

「それでどうだ?」

「…赤石先輩が自由になれるのなら、わたしも喜んで」

どこか歯切れが悪い。

「あ?どうかしたか?」

「あの、約束が無くなって…今まで通りの赤石先輩で、いてくれますか?」

彼女は怯えていた。約束というひとつの繋がりが切れることで、何がかわってしまふことに。

「当たり前だろ。これからも今まで通りだよ。例え約束が無くなってもしじめを止めることはあるだろうが、それは縛られてるからじゃなくて俺がそうしたいからそうする、つてだけだ」

「なんつうか、俺も人のこと言えねえけどよ、約束を深く考えすぎなんだよレイリは」

「そう、ですね…」

赤石は言葉を交わすうちに気付いていた。自分以上に、その約束に他でもない彼女自身が縛られていたことに。

「とにかくこの瞬間をもって、約束は無効。それでいいか?」

赤石の二度目の確認に、

「はい……!」

彼女ははつきりと返事をした。

「あの、赤石先輩」

彼女はひとつ呼吸をして、先程の話から続けるように口を開く。

「ん?」

「わたし、赤石先輩に謝らないといけません」

「何だ?きつっきのとは別件か?」

「はい、鶯櫛と一緒にいった時のことです」

それを聞いて赤石はその日のことを大まかに思い出す。

(なんかあったか？謝られるようなこと)

「別に謝ることなんか何もねえと思うが…」

「いえ…わたし、大胆になってました。寄り掛かったり、手を繋いだり…」

「！…ああ」

顔をほんのり赤くする赤石。視線も反射的に一瞬彼女から外した。

「パートナーとの信頼関係が大事とはいえ、赤石先輩に近付きすぎました。ごめんなさい」

(…なるほど。妙に積極的だなとは思ってたが、要はタツグデュエルのためだったってことか)

彼女が今話した行為の理由。その判明に赤石は納得すると同時に内心残念な気持ちを抱いた。

心のどこかで期待でもしていたのだろうか、と自問する赤石。どちらにせよ、謝られたという事実には赤石はあまり良い気はしなかった。

「謝らなくていいって。嫌じゃなかった、ってかむしろ嬉しかったし…」

赤石は若干照れながら自分の気持ちを伝える。心の中で彼女の謝罪を打ち消すように。

「えっ…？」

嬉しかった、という言葉聞いて少し驚いた表情を浮かべる彼女。

「俺のことを知ろうとしてくれたわけだろ？その上俺を信じて頼ってくれたりとか…」

赤石は一瞬言葉に詰まるが、

「パートナーとしてこんなに嬉しいことはねえよ。だからこそ俺もレイリで良かったって思えたんだ」

照れ気味にそう言い放つと、首を横に向けた。

「赤石先輩…」

赤石は照れた顔を見られたくないのか、横を向いた状態を維持する。

「…」

そんな赤石に同調するように、彼女の顔も仄かではあるが赤みを帯びていく。

（自分で言っておきながら何恥ずかしかってんだよ俺は…！レイリもどう反応していいか困ってるじゃねえか…！落ち着け、とりあえず前向け）

赤石は自分に言い聞かせ首を前に戻した。

その様子を確認した彼女が口を開く。

「…でしたら、赤石先輩」

「…ん？」

「もつと近付いても、いいんですか…？」

「なっ…！」

再び赤石の顔が赤く染まっていく。いや、赤石だけではない。

「…」

言葉を放った本人も赤石を直視できないようだった。

とはいえ彼女のことなので、それが照れなのかどうか表情からは判別が付かないが。

「それって…！」

「…」

彼女は視線を逸らしたまま答えない。

赤石は自分のドキドキという鼓動の音が早くなるのを感じていた。

ある種の緊張状態の中、どちらも微動だにせず1秒、2秒と時が経っていく。

「…お」

さすがに耐え切れなくなったのか、赤石が何か言おうとしたその瞬間、

「！」

携帯電話の鳴動音が、この空気をつんざいた。

「うおっ…！」

発信源であるジャージのポケットから赤石は携帯電話を取り出す。

「悪い、ちょっと出てくる」

「はい」

赤石は席を立った。

数分後、通話を終えた赤石が席に戻る。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま。桜からの電話でな、外食してくるみたいで昼飯俺の分だけ作り置きしてるから、勝手に温めて食べろってさ」

「いい妹さんですね」

「ああ。本当によく出来た妹だよ。俺にはもったいねえくらいだ」

赤石は誇らしげに答えた。

――

日曜のお昼時。

いつもなら兄貴と家で昼飯を食べる時間。だけど、今あたしは電車に乗っている。

「一緒にお昼ご飯食べよー」とアイコからの誘いを受け、一緒にその店へと向かい始めて30分。

ちよつと遠いとは聞いていたが、まさか電車に乗るとは思わなかった。

アイコの話によると、おいしいパンケーキが食べられるらしい。

どうやら先週鈴瀬と行ってきたようで味の方は期待していい、とのこと。

あたしとしては味はもちろんのこと、パンケーキもたまに作るので何か参考になるかも、とそつちの意味でも期待している。

そういうわけで、待ち遠しい気分だったりする。表に出すのは恥ずかしいからそんな素振りは見せないけど。

11話 #14 「無愛想な人」

電車から降りてしばらく歩くと、

「このお店だよー」

到着を知らせるアイコの声。

「ここか」

「うんー桜ちゃん」

「ん？」

「ちよつとびつくりするかも？たぶんだけど」

「何のことだ？」

あたしがきき返すとアイコは「何でもないよー」とちよつと笑いながらごまかす。

よくわからん。料理にか？内装にか？それとも値段とか？

そんなことを思っているとアイコが入口のドアを開けた。

「いらつしやいませー」

入店したあたしらの方へと1人の店員が近付いてくる。

「2名様ですか？こちらの席へ…あ？」

そのまま席に案内してくれるのかと思いきや、店員はあたしらの顔を見るとなんか怪しむような顔をした。

何だ？おかしな店員だな、と思う前に

「あ？」

その怪しむ顔を見て反射的にあたしも同じような声が出た。

…まさかこんなところで会うなんて思わねーだろ。

「椎名…!?!」

「何だよ」

「お前、ここでバイトしてんのか？」

「見りゃわかるだろ」

「わあ、先週と同じ流れー」

あたしの驚きをよそに楽しそうなアイコ。ちよつとびつくりするかも、ってこのことか。ちよつとどころか結構びつくりしたわ。

つてか愛想のカケラもねーな。といつても笑顔で明るく接客されてもそれはそれで困るから別にいいんだけど。

「椎名がバイトしてんなら言つといてくれよ…無駄にびつくりしちまったじゃねーか」

「えへへ、ごめんね。やっぱり日曜は毎週ここで働いてるんですか？椎名さん」

まあ椎名が働いてる時間と被るとは限らねーか。

「さあな。それより突っ立ってたら邪魔だ。席案内するから」

案内すると言いなから椎名は先にスタスタと歩く。せめてゆつくり歩け。

――

「ふう…」

昼食を食べ終えて、改めて考える。

頭に浮かんで消えない、あの言葉について。

『もつと近付いても、いいんですか…？』

どう解釈したらいいんだろうか。

何か考えがあつてのことなんだろうが…鵜櫓の時と同様の理由か？

いや、あの時と違って俺はパートナーでも何でもねえ。

つてことは単純に俺と近付きたくて言ったのか？いやいやいや流石にそれは…違うはず。

「あ…」

頭を搔く。わからん。考えたつて仕方ねえのかもな…

何せ他でもないレイリのことだ。経験則なんか全くあてになんねえしな。

つーか何でこんなモヤモヤしてんだ俺は。やっぱりレイリのことか…

「…」

…！  
どうだろうな…わかんねえ。ああもうわかんねえことばつかだな

…頭冷やしてくるか。

――

「わあ…！ここが桜ちゃんのお部屋…！」

「なんか飲み物取ってくる」

午後2時、桜は藍子を連れて家へと戻っていた。

パンケーキを食べた後、デュエルがしたいという藍子に桜はカードシヨップではなく自分の家を提案した。

自分の家なら落ち着いてデュエルをしたりデュエルについて教われる、という理由を伝えると藍子も「ぜひお邪魔したい」と乗り気で承諾。

カードを取りに藍子が一旦家に戻って合流した後、今に至る。

「麦茶だけどいいか？」

「いいよー！ありがと」

藍子は手渡された麦茶で喉を潤す。

「桜ちゃんのお部屋、片付いてて綺麗だね！」

「そうか？」

「うん！私の部屋なんか散らかりまくりでそれはもう…」

自嘲気味に語る藍子。

桜の部屋は元々物がそれほど多くないというのもあるが、本や小物等がきちんと並べられており全体的に綺麗に整頓されていた。

「まあ散らかるほど物ねーからな」

「桜ちゃんのことだから枕元にぬいぐるみとかいっぱい転がってると思ったのになー」

「なっ！んなわけねーだろー！」

桜は少し大きな声で否定する。

「あやしいなー、ひよつとして隠してるとか?」

「隠してねーよー…昔は持ってたけどさ」

「恥ずかしさからか、後半声が尻すぼみになる桜。」

「そっかそっかー」

「つてかそれよりデュエルだろデュエル!ほら、アイコもカード出して」

「話題を変えるかのように桜はデッキを取り出す。」

「ふふっ、そうだね」

「藍子も同じくデッキを取り出した。」

「ー」

「あ、そういえば桜ちゃん」

「ん?」

「デュエル中、藍子は思い出したように話しかける。」

「修せんぱいはお出かけ?」

「さあな。友達と遊びにでも行ってるんじゃないか?」

「そっかー…」

「少し残念そうな顔をする藍子。」

「何だ?あたしじゃ物足りねーってか?」

「それを見て桜が冗談めかして問う。」

「あ、違うの!桜ちゃんとのデュエルは楽しいよ?でも修せんぱいともデュエルしてみたいなーって…」

「藍子の弁解に桜はクスツと笑った。」

「わかってるよ。さあ、まだアイコのターンだろ?」

「むー…」

「余裕そうな笑みを浮かべる桜に藍子は少し悔しそうな顔を返してデュエルを再開した。」

11話 #15 「頼れる人」

――

同時刻、赤石は図書館で本を読んでいた。

家を出た当初はランニングでもしようかと思っていたが、自身の体の状態を考慮してそれは控えることにした。

行き先を図書館に選んだ理由は特に無い。しばらくぶらついていたら偶々そこが目に入った、あるとすればそれくらいである。

結果的に静かに涼めて本を読める、という頭を冷やすには最適な場所だったため、赤石の頭のモヤモヤはすっかり晴れていた。

(たまには図書館も良いな。思ったより落ち着ける)

赤石は読んでいた本を閉じる。

(この本も読み終えたし、そろそろ帰るか)

本を戻そうと本棚へと向かう途中、

「赤石さん…?」

控えめな声が後方から届けられた。

赤石は声のした方へと振り返る。

「ああ、確かお前は…小松、だったか」

「はい。会うのはこれで3回目ですね」

声の主は綾芽だった。図書館ということその声は小さめに抑えられている。

「そうだな」

「えっと…何か調べ物ですか?」

「いや、近くに来たから寄っただけでもう帰るところだ」

「そうですか…」

(やっぱり赤石さん、ちょっと怖いかも…)

綾芽にとっては赤石と初めての面と向かったの会話ということもあり、その鋭い目付きに内心萎縮する。

(いえ、見た目で判断してはいけませんよね…あ、そういえば)

しかしすぐに偏見を取っ払うと同時に、綾芽はふと思い出す。

(せっかくの機会ですし赤石さんにあのこととか、他にも色々きいてみようかな…?)

「あの、私も丁度帰ろうと思ってたのですが、良かったら途中まで一緒に帰りませんか?」

――

「へえ、図書館で勉強してたのか。真面目なんだな」

「いえ、そんなことは…こちらの方が落ち着いて勉強できるっただけで…」

「そうか。確かに勉強するには良い環境かもな」

「そうですね」

図書館からの帰り道。

「あの、赤石さん」

綾芽はタイミングを見計らって以前より気になっていたことを質問する。

「ん?」

「ひとつお伺いしたいのですが…」

「何だ?改まって」

「柝浦先生と以前、何かありました…?」

その質問が飛んだ瞬間、赤石の口元が微かにピクッと動いた。

「いきなりだな…」

「いえ、その…赤石さんに対して敵意を持っているように思いましたので、もしかしたら、と…」

きいちゃいけないことだったかな…と、綾芽は少々焦るものの、「そうだな、まあちよつと喧嘩したくらいだ」

赤石は平然とした声で答えた。

「喧嘩、ですか…?」

「ああ。ってか何でそんなこと知ってえんだ?」

「実は…」

軽く息を整えて、綾芽はその質問に至った経緯を話していく。

赤石らが去った後の準備室でのやりとりや、琥珀からの忠告はもちろんのこと、赤石とは直接関係は無いが柝浦に対しての生徒会への苦情、そして自身も柝浦に触れられそうになったことを。

「なるほど、そんなことがあったのか」

「はい…」

話の顛末を聞き終えた赤石の表情が厳しくなる。

（椽が心配するのもわかるな。こういう大人しそうな子は狙われやすい…まあ、あいつの本命はレイリだと思うが）

赤石は少し考えてから口を開いた。

「…ここまで話してもらって悪いが、俺と柝浦は喧嘩したことがあるってだけで別に大して話したこともねえんだ。まあ、柝浦が俺を嫌っているのはわかってたが」

「い、いえ…何かあったのになって質問したのは私ですから」

「そうだな、俺から言えることがあるとすれば…」

綾芽は赤石の顔を見上げながら次の言葉を待つ。

「椽も言ってたと思うが毅然とした態度で拒否しろ。それが出来なきゃなるべく近付かないことだ」

「はい、気を付けます」

綾芽はしっかりと返事をする。が、赤石はどうも手応えの無さを感じていた。

（…やっぱりなんか心配だな。何かあつてからじゃ遅えし、ここは）  
「ただ、それでも自分じゃ対処出来ねえとかしつこく接触してくるって時がこれから先あるかもしれねえ。そんな時は」

「時は…？」

綾芽の疑問に、

「遠慮せず俺に言え。何か起こる前にお前を守る」

赤石は真剣な眼差しで答えた。

「！…そ、そんな、赤石さんに迷惑じゃ…」

お前を守る、その言葉に綾芽は一瞬ドキつとすると同時に、『わたし

が守る』という彼女の言葉を思い出す。

「迷惑じゃねえよ。実際に危ない目にあいかけたって奴をそのまま放つとけねえだけだ」

「赤石さん…」

（麗梨さんと一緒…私なんかを守るって言ってくれて…）

綾芽は赤石の顔を見上げる。

「俺の助けなんか必要ねえってんなら別にそれでもいいが」

（やっぱり見た目なんて関係ありませんよね）

図書館では怖く感じたその鋭い目付き、しかし今その目から綾芽は頼りがいと優しさを感じ取った。

「…いえ。何かありましたら、その時は頼らせていただきます」

綾芽は少々恥ずかしそうに赤石に向かって微笑んだ。

――

「ただいま」

図書館から帰宅して赤石が靴を脱ごうとした時、

（あ?）

玄関に見慣れない靴が一足増えていることに気付く。

（誰か来てんのか?）

そう思っているうちに桜が階段を下りて現れた。

「おかえり。今アイコいるんだけどさ、あたしの部屋に来てくれない

?カード持つて」

「あ?ああ。ちよつと待ってろ、着替えてから行く」

桜は「うん」と頷くと階段を上がって行った。

――

「あ、修せんぱい!お邪魔してます!」

赤石が桜の部屋に姿を現すと、藍子から元気な声が飛んだ。

「おう。デュエル中だったか」

テーブルを挟んで対峙している桜と藍子。テーブルに置かれたカードの並びから今まさにデュエル中のようであった。

「はい！あの、修せんぱい」

「ん？」

「次、私とデュエルしていただけますか？」

「ああ、いいぞ」

「ありがとうございます！……じゃあ桜ちゃん、このターンで決めるよ」

藍子は途中だったデュエルに意識を向ける。

「《死者蘇生》を発動して墓地から《ブラック・ローズ・ドラゴン》を特殊召喚」

「お？」

「墓地の《グローアップ・バルブ》を除外して《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動、桜ちゃんのセットモンスターを攻撃表示にして攻撃力を0にするよ」

「うっ……！」

「バトルフェイズ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》で攻撃力0の《ファーマル・シープ》に攻撃」

「ああ、また負けたか……」

桜はデュエルに使用したカードをまとめて手に持ちテーブルから外れる。

「じゃあ兄貴、交代」

「ああ」

桜が外れたことよって開いたその場に赤石が座る。

「修せんぱい、よろしくお願ひしますー！」

「こちらこそよろしくな」

赤石と藍子によるデュエルが始まった。

11話 #16 「動く人」

「ドロー、スタンバイ、メイン」

先攻は赤石。

「《RR―ネスト》を発動。《RR―バニシング・レイニアス》を召喚、効果を発動し手札から《RR―ラスト・ストリクス》を特殊召喚」

「〔RR〕！いきなり《RR―ラスト・ストリクス》が召喚されたってことは、まずいかも…！」

赤石の初動に藍子は身構える。藍子が警戒しているのはもちろんあのモンスター。

（機械…いや鳥か？）

桜にとつてはどうかやら初めて見るカードのようだ。

「《RR―ネスト》の効果発動、デッキから《RR―ファジー・レイニアス》を手札に加える」

「《RR―ラスト・ストリクス》をリリースして効果発動、EXデッキから《RR―サテライト・キャノン・ファルコン》を特殊召喚」

「《RUM―スキップ・フォース》を発動。EXデッキから《RR―アルティメット・ファルコン》を特殊召喚」

（わー…やっぱり来ちゃった…）

藍子が危惧していたモンスターが現れる。しかし、赤石は切り札を出しただけでは止まらない。

「手札の《RR―ファジー・レイニアス》の効果を発動して特殊召喚」

「《RR―ファジー・レイニアス》をリリースして《スワローズ・ネスト》を発動、デッキから《RR―トリビュート・レイニアス》を特殊召喚」

「墓地へ送られた《RR―ファジー・レイニアス》の効果を発動してデッキから「RR―ファジー・レイニアス」を手札に加える」

「《RR―トリビュート・レイニアス》の効果発動、デッキから《RR―ミミクリー・レイニアス》を墓地へ送る」

「墓地の《RR―ミミクリー・レイニアス》を除外して効果発動、デッキから《RR―レイニエス》を手札に加える」

「《RR―バニシング・レイニアス》と《RR―トリビュート・レイニアス》で《RR―フォース・ストリクス》をX召喚」

「《RR―フォース・ストリクス》のX素材を1つ取り除いて効果発動、デッキから《RR―インペイル・レイニアス》を手札に加える」

「カードをセット、ターンエンド」

(すごいな……ターン目からこんな動くのか)

桜は赤石のフィールドを眺めながらこれまでの動きに感心する。

「ドロロー、スタンバイ、メイン」

(どうしよう、《RR―アルティメット・ファルコン》を倒せる手段が無いよー！)

対戦相手の藍子だが、現状対抗できる手段が見つからないようで、「モンスターをセット」

(次のドロローに賭ける……！)

「ターンエンドです……」

次のドロローに託してモンスターのセットのみでターンを終えた。

しかしもう一度ターンに回ることではなく、藍子は次のターン赤石からの猛攻を受けLPを削り切られるのであった。

「効果を受けないって強すぎるよー……」

うー、と小さく唸る藍子。あつという間の決着だったためか悔しさはあまり感じていない様子である。

「効果を受けないモンスターってどうやって倒すんだ？」

桜は手に持った《RR―アルティメット・ファルコン》のテキストを読みながら赤石に問う。

「こいつの場合は戦闘だな。攻撃力で上回ればいい」

「いやでも攻撃力3500あるぞこいつ」

「そうだな、超えるのは結構厳しい」

「ほぼ無敵みたいなもんじゃねーか……！」

桜は驚嘆の息を吐き、テーブルに《RR―アルティメット・ファルコン》を戻す。

「まあ、コストでのリリースには無力だから《溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム》とかで処理するって方法もある」

「なるほど…」

「何にしても突破する方法が相当限られる以上、出されたらどう対策するかというより出させないようにした方がいいだろうな」

「未然に防ぐってことか」

「…桜ちゃん」

テーブルに置かれた《RR―アルティメット・ファルコン》を見つめながら藍子が口を開く。

「ん？」

「効果を受けないなんて強力な耐性持つてるモンスターって普通出しにくいって思うよね？」

「まあ、そうだな」

「でもこの《RR―アルティメット・ファルコン》はたった2枚のカードで出てくるの！そのうちの1枚はサーチしやすいし…！効果もそうだけどこの出しやすさが強すぎるのー！」

うー、と再び唸る藍子。

「1ターン目から出てきたもんな…やっぱ無敵じゃねーか？」

「さっきのは手札に揃ってただけだ。それに使ってみればわかるが思ったよりは出なかったりする」

赤石は自分の使ったカードをまとめる。

「ふーん…」

「うー、次こそ…！修せんぱい、もう1戦お願いしていいですか？」

藍子は気を取り直して赤石に再戦を申し込む。

「ああ、いいぞ」

「次は負けませんからね！」

3人は夕方までデュエルを楽しむのであった。

「修せんぱい、今日はありがとうございました！」

藍子は玄関先でお礼を述べる。

「おう。こつちこそ俺や桜とデュエルしてくれてありがとな」

「いえ！そんな…ぜひ私とまたデュエルして下さいね！」

ニッコリと笑顔を見せる藍子。赤石もそれに応えるように「ああ」と頷いた。

「それではきつと近いうちに…！桜ちゃん、また明日学校でね！」

「ああ、また明日」

藍子は手を振って家へと帰って行った。

「強かったな、藍子ちゃん」

藍子の姿が見えなくなった後、赤石が口を開く。

「ん？強かったってデュエルがか？」

「ああ。何つうか、デュエルハウスでデュエルしてるような気分だった」

「何だそりゃ」

よくわからない、といった表情の桜。

「ちよつとでも気を抜いたらやられるあの緊迫した感じがそれっぽかったつうか…」

「…？」

赤石自身も上手く言葉にできないようで、桜は増々理解から遠のく。

「まあ強かったってことだ。桜もプレイングが良くなってきてたな、ついこの間まで初心者だったとは思えなかったぞ」

「そ、そうか？」

桜は内心嬉しく思いながらきき返す。

「まだまだ甘いところはああるけどな。俺を越えなければもつと修行に励むように」

「けっ、そう言ってられんのも今のうちだ」

「そうか、期待せず待つといてやろう。さ、戻るか」

「そうだな」

2人は家へと戻った。

――

午後6時。家のインターホンが鳴り、彼女はドアを開ける。

「どうもー。お世話になりましたわ」

訪れたのは藜霞。昨日言っていた通り、これから鶺鴒記念まで彼女の家に滞在することとなる。

「ようこそ」

「先にお風呂借りていいかしら？汗ばんじやって。これ食材」

藜霞は食材が入ったスーパーマーケットの袋を彼女に手渡す。今日の夕食は2人で作ると決めていたため、藜霞は道中スーパーマーケットに寄り食材を仕入れてきていた。

「いいですよ。冷蔵庫に入れておきます」

「お願いね」

藜霞は家に上がり風呂場へと向かった。

「ふー、さっぱり」

汗を流し終えた藜霞がリビングに現れる。

「藜霞さん」

藜霞に彼女が声をかける。

「なに」

何故声をかけたのか、その姿を見れば一目瞭然。

「服、着ないんですか？」

藜霞は文字通り風呂上がりの姿そのままであったからだ。

「ワタシ裸族だから夏場はだいたいこの格好よ」

「お料理の時、やけどしますよ？」

「あ、それもそうね。エプロンくらいは着けようかしら」  
「服の上から着ることをおすすめします」  
彼女は冷静に勧めた。

11話 #17 「続く2人」

――

結局藜霞は上シャツのみ下パンツのみの2種着用で調理を行った。なおエプロンに関しては元々持ってきていなかった。

「ちよつと時間かかっちゃったわね」

「おかげで豪華な出来栄となりました」

小さめのテーブルの上には所狭しと食器が並べられており、盛りつけられた多種多様の料理は彼女が普段作る食事と比べて豪華なものであった。

「お腹ぺこぺこだわ。早く食べましょ」

「はい、いただきます」

「なんだか落ち着くわ。ホテルじゃ味わえないこの感じ」

食事中、藜霞がふと呟く。

「いい感じ、ですか？」

「もちろんよ。ちよつと懐かしさすら感じるわ」

「わたしとこうして一緒に食べたこと、あるのかもしれないね」

「あながち無いとも言い切れないかもね。ねえ、食べたらデュエルしましょ」

「はい、しましょう」

――

食事を終えてしばらくした後、

「ねえ」

「はい」

「パズル好きなの？」

机の上のパズル雑誌を開きながら藜霞が問う。

「はい、好きです」

「そう。数字系？」

「ワード系も好きですが、理詰めで解ける数字系も好きです」  
藜霞はパズル雑誌を閉じて彼女の方に向き直る。

「じゃあひとつ問題」  
「？」

「1、1、9、9、この4つの数字を四則演算と括弧だけで答えが10になるようー」

「 $(1 \div 9 + 1) \times 9$ 」

「ちよつと、問題の途中なんだけど」

藜霞が問題を唱えている最中に解答する彼女。

「合っていますか？」

「ええ、正解よ。ワタシが1分かかった問題を数秒で解いちやうのね。  
気に入らないわ」

藜霞は唇を尖らせる。

「小学生の時、流行ってました」

「あー何かそういうの流行る時期あったわね。その頃から好きだったの？」

「はい。楽しかったです」

「そう。幼少期から積み重ねた数字がデュエルにも生かされてるってわけね」

「かもしれませんが。数えたことはありませんが」

「その数がいくらなのか知らないけれど」

藜霞は荷物の中からデッキを取り出すと、

「今から1増やしてあげるわ」

挑発的な笑みを浮かべながら彼女の前に置いた。

「わたしの勝ち数をですか？」

彼女もそれに応えデッキを藜霞の前に置く。

「あら、面白い冗談言うじゃない」

クスッと笑いがこぼれる藜霞。

「増やせるものなら増やしてご覧なさい」

「はい、1アップします」

「その言い方だと残機数ね」

藜霞はそうつつこむもののテレビゲームに明るくない彼女には伝わらず、首を傾げられる。

「知らないならいいわ。さ、始めましょ」

「はい」

――

「《氷帝メビウス》で攻撃します」

「もう、またワタシの負けじゃないの、きー悔しいー」

「1アップです」

「次よ次、ほらシャッフルしてちょうだい」

「はい」

「あ、待って。デツキ交換してデュエルしない？」

「いいですよ」

「アナタを内側から触れてみるわ」

「おてやわらかにお願いします」

2人の夜は続いていく。

――

午後11時。デュエルを十分に楽しんだ2人は就寝に備えるため、彼女は自分のベッド、藜霞はその隣の床部分に敷いた布団に入っていた。

消灯された部屋には微かに月の光が差し込んでいる。

「ねえ」

「はい」

お互いに仰向けで天井を見つめながら声を交わす。

「何か昔話して」

「むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんが――」

「そつちじゃない。そつちはまた今度聞かせて」

藜霞によって話が中断され、静寂が訪れる。

彼女が次に口を開けたのは十秒ほど経ってからだった。

「わたしがここに引越してきたのは、中学3年生になった時でした」  
「続けて」

「ひとり暮らしでしたが、周りの人たちが支えてくれたおかげで今日のわたしがあります」

「うん」

「めでたしめでたし」

「こら、あらすじで終わらないの」

藜霞は小声でツツコミを入れる。

「藜霞さんのお話が聞きたいです」

「ワタシの話なんて単純なものよ。家を出てプロになりました、おわり」

「感動しました」

「でしょ？アナタもワタシを感動させるべき」

「感動させる自信がないのでわたしの物語は、いずれまた」

「そう。その時まで待つことにするわ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

その挨拶を最後に2人は眠りについた。

本格的な夏を迎えつつあるこの瞬間も、彼女たちの物語は綴られていく。

【第11話 終】